

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第7集

富士石遺跡Ⅲ

第二東名No.142地点

縄文時代以降編

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

長泉町-11

(第1分冊)

2012

中日本高速道路株式会社東京支社
静岡県埋蔵文化財センター

序

この度『富士石遺跡Ⅲ 縄文時代以降編』を刊行いたします。これは、第二東名高速道路建設に伴い発掘調査が実施されました富士石遺跡（沼津工区No.142地点）の報告書のうち最終刊にあたります。

この富士石遺跡は愛鷹山東南麓に位置します。遺跡からは、県内最古級の旧石器時代の石器から中世の陶器に至るまで幅広い時代の遺物が出土しました。縄文時代では早期・前期の集落跡、後期の住居跡、焼土や集石、土坑などの遺構や、縄文時代早期を中心に大量の縄文土器が出土しました。弥生時代では中期後半の土器や、後期の中部高地の土器も散見されました。

これらの成果は、富士石遺跡の周囲に展開する遺跡の調査成果とも相俟って、そこに暮らした人々の生活像と文化の流れを詳らかにし、歴史の理解と文化財保護、そしてふじのくに静岡の文化力向上、文化意識の醸成へとつながりましょう。本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、中日本高速道路株式会社東京支社ほか各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2012年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長

勝 田 順 也

例 言

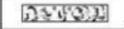
- 1 本書は、静岡県駿東郡長泉町東野字八分平285-18他に所在する富士石遺跡（第二東名No.142地点）の発掘調査報告書の3冊目である。なお、本書は第1分冊と第2分冊によって構成されており、本書は第1分冊である。
- 2 発掘調査は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、中日本高速道路株式会社東京支社（旧日本道路公団静岡建設局）の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課（旧文化課）の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施し、平成23年度以降は静岡県埋蔵文化財センターが同研究所の業務を引き継いで実施した。
- 3 調査期間は以下のとおりである。
 - 確認調査 平成12年11月～平成14年8月
 - 本発掘調査 平成13年10月～平成21年3月
 - 資料整理 平成21年4月～平成24年3月
- 4 現地調査体制は「富士石遺跡Ⅰ」に掲載した。「富士石遺跡Ⅲ」の資料整理体制は下記の通りである。
 - 平成21年度（資料整理：財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所）
 - 所長兼常務理事：天野 忍 次長兼総務課長：松村 享 次長兼事業係長：稲葉保幸
 - 次長兼調査課長：及川 司 東部統括係長（次長兼）：中鉢賢治 調査課副主任：中鉢京子
 - 東部調査係長：笹原千賀子 調査研究員：壬生亮輔
 - 平成22年度（資料整理：財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所）
 - 所長兼常務理事：石田 彰 次長兼総務課長：松村 享 調査課長：中鉢賢治
 - 専門監兼事業係長：稲葉保幸 調査第一係長：勝又直人
 - 平成23年度（資料整理：静岡県埋蔵文化財センター）
 - 所長：勝田順也 次長兼総務課長：八木利眞 調査課長：中鉢賢治
 - 調査第一係長：富樫孝志 主査：勝又直人
- 5 本書の執筆分担は以下の通りである。
 - 第1章：壬生亮輔 第2章：壬生亮輔・勝又直人 第3章：壬生亮輔・勝又直人
 - 第4章第1節：勝又直人 第2節1：杉山和徳 2：勝又直人 3：杉山和徳 第5章：勝又直人
- 6 石器石材の同定は森嶋富士夫が行った。
- 7 本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。
- 8 平成21年度、作業の迅速化を図るため、一部の剥片石器実測を株式会社ラングに、土器付着炭化物等の放射性炭素年代測定を株式会社加速器分析研究所に委託した。また平成22年度、黒曜石原産地分析を望月明彦氏（独立行政法人沼津工業高等専門学校名誉教授）に、縄文土器復元を株式会社シン技術コンサルに委託した。平成23年度は資料整理を佃バソナに委託した。
- 9 発掘・整理作業において、以下の方々に御指導・御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。
 - 池谷信之 石神孝子 金子直行 小崎晋 篠原武 澁谷昌彦 鈴木敏中 谷藤保彦 戸田哲也
 - 原田雄紀 廣瀬高文 毒島正明 水野瑩 森下泉太（五十音順）
- 10 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた遺物・遺構等の位置を表す国土座標は、すべて世界測地系による。
- 2 調査区の方眼設定は、国土座標平面直角座標Ⅷ系を基準に、(-93210.00, 34630.00 * 富士石1参照) = (A, O) と設定した。1グリッドは10m×10mで、各グリッドの呼称は、該当グリッドの南西角の座標名称を用いている。
- 3 出土遺物は、それぞれに5桁の通し番号を付し、上記国土座標と標高値を付して取り上げた。
- 4 遺構図・遺物図の縮尺は各図に示す通りである。
- 5 本文中、遺物表に用いる色彩に関する用語・記号は、新版「標準土色帳」（農林水産省技術会議事務局監修1992）を使用した。
- 6 層位名の略号は、土層の説明と共に、第2章第2節の基本層序に明示する。
- 7 報告にあたり、遺構番号を付け直した。
- 8 石器の実測は、原則として三角投影図法に拠った。
- 9 第1図「富士石遺跡周辺の主要遺跡」は、国土地理院発行1:25,000地形図「沼津」を複写し加工・加筆した。
- 10 実測図中の指示記号及び表現、黒曜石産地、他の石材の略号は以下の通りである。

遺物

	敲打痕の範囲		磨面の範囲		発掘時の欠損
	敲打痕		磨面		

黒曜石産地一覧（挿図掲載分）

略号	産地	略号	産地	略号	産地
SWHD	諏訪星ヶ台群	HNHJ	箱根畑宿群	KZOB	神津島恩馳島群
WDTY	和田鷹山群	AGKT	天城柏峠群		

石材一覧（挿図掲載分）

和名	英名	標準資料略号	和名	英名	標準資料略号
玄武岩	basalt	Ba	緑色片岩	greenschist	GS
多孔質玄武岩	vesicularbasalt	VBa	ホルンフェルス	hornfels	Hor
ガラス質黒色安山岩	glassy black andesite	GAa	細粒凝灰岩	fine-grained tuff	FT
輝石安山岩	pyroxene andesite	An(Py)	硬質細粒凝灰岩	hard fine-grained tuff	HFT
多孔質安山岩	vesicular andesite	VAa	軟質細粒凝灰岩	soft fine-grained tuff	SFT
デイサイト	dacite	Da	緑色凝灰岩	green tuff	GT
下呂石	gerostone	GRS	珪質シルト岩	siliceous siltstone	SSI
流紋岩	rhyolite	Rhy	頁岩	shale	Sh
黒曜石	obsidian	Ob	赤色頁岩	ret shale	Sh(Re)
軽石	pumice	Pm	珪質頁岩	siliceous shale	SSH
アプライト	aplite	Ap	珪質粘板岩	siliceous slate	SSI
ひん岩	porphyrite	Po	細粒砂岩	fine-grained sandstone	FSS
蛇紋岩	sarpenitina	Sp	中粒砂岩	medium-grained sandstone	MSS
カンラン岩	paridotite	Pe	粗粒砂岩	coarse-grained sandstone	CSS
斑レイ岩	gabbro	Ga	硬質砂岩	hard sandstone	HSS
細粒斑レイ岩	fine-grained gabbro	FG	凝礫岩	granule conglomerate	GC
磨石	talc	Ta	チャート	chert	Ch
結晶片岩	crystalline schist	CSc			

目次

第1章 資料整理の概要	1
第2章 遺跡周辺の環境	
第1節 地理・歴史的環境	2
第2節 土層堆積状況と遺跡の地形	6
第3章 縄文時代の遺構と遺物	
第1節 遺構と遺構出土遺物	10
第2節 包含層出土遺物	
1 土器	111
2 石器	201
第4章 弥生時代以降の遺構と遺物	
第1節 遺構と遺構出土遺物	266
第2節 包含層出土遺物	
1 土器	282
2 石器・石製品	288
3 金属器	292
第5章 まとめ	293

抄録

挿図目次

第1図 富士石遺跡周辺の主要遺跡	4	第11図 3号住居跡	18
第2図 富士石遺跡の基本層序	6	第12図 3号住居跡出土遺物	19
第3図 第二東名関連遺跡の調査範囲	7	第13図 4号住居跡と出土遺物1	20
第4図 トレンチ・テストピット位置図	8	第14図 4号住居跡遺物出土状況と 出土遺物2	21
第5図 調査区名称と地形名称	9	第15図 5号住居跡と出土遺物	22
第6図 縄文時代早～前期遺構位置図	12	第16図 6号住居跡	23
第7図 縄文時代中～後期遺構位置図	13	第17図 6号住居跡出土遺物1	24
第8図 1号住居跡	14	第18図 6号住居跡出土遺物2	25
第9図 1号住居跡遺物出土状況と 出土遺物	15	第19図 7号住居跡	26
第10図 2号住居跡と出土遺物	16	第20図 7号住居跡遺物出土状況と	

	出土遺物 1	27	第57図	縄文時代の集石 3	71
第21図	7号住居跡出土遺物 2	28	第58図	縄文時代の集石 4	72
第22図	8号住居跡と出土遺物	30	第59図	縄文時代の集石 5	73
第23図	9号住居跡	31	第60図	縄文時代の集石 6	74
第24図	9号住居跡出土遺物	32	第61図	集石出土遺物 1	76
第25図	10号住居跡	33	第62図	集石出土遺物 2	77
第26図	10号住居跡遺物出土状況と 出土遺物 1	34	第63図	集石出土遺物 3	78
第27図	10号住居跡出土遺物 2	35	第64図	集石出土遺物 4	79
第28図	11号住居跡と出土遺物	36	第65図	縄文時代の土坑 1	80
第29図	12号住居跡	38	第66図	縄文時代の土坑 2	82
第30図	12号住居跡出土遺物	39	第67図	縄文時代の土坑 3	83
第31図	13号住居跡と出土遺物 1	40	第68図	縄文時代の土坑 4	84
第32図	13号住居跡遺物出土状況と 出土遺物 2	41	第69図	縄文時代の土坑 5	86
第33図	14号住居跡	42	第70図	縄文時代の土坑 6	87
第34図	15号住居跡と出土遺物	43	第71図	縄文時代の土坑 7	88
第35図	16号住居跡	44	第72図	縄文時代の土坑 8	89
第36図	17号住居跡と出土遺物	45	第73図	縄文時代の土坑 9	90
第37図	18号住居跡	46	第74図	縄文時代の土坑10	91
第38図	19号住居跡	47	第75図	縄文時代の土坑遺物出土状況と 出土遺物 1	92
第39図	20号住居跡	50	第76図	縄文時代の土坑遺物出土状況と 出土遺物 2	93
第40図	20号住居跡出土遺物	51	第77図	縄文時代の炉跡 1	94
第41図	21号住居跡	52	第78図	縄文時代の炉跡 2	96
第42図	21号住居跡遺物出土状況と 出土遺物	53	第79図	竪穴状遺構と出土遺物	98
第43図	22号住居跡と出土遺物	54	第80図	配石遺構	99
第44図	23号住居跡	55	第81図	配石遺構出土遺物 1	100
第45図	23号住居跡出土遺物 1	56	第82図	配石遺構出土遺物 2 石斧埋納遺構	101
第46図	23号住居跡出土遺物 2	57	第83図	埋甕	102
第47図	24号住居跡と出土遺物	58	第84図	縄文土器第1群 1	112
第48図	25号住居跡	60	第85図	縄文土器第1群 2	114
第49図	25号住居跡遺物出土状況と 出土遺物 1	61	第86図	縄文土器第1群 3	116
第50図	25号住居跡出土遺物 2	62	第87図	縄文土器第1群 4	118
第51図	25号住居跡出土遺物 3	63	第88図	土器分布図 1	120
第52図	26号住居跡	64	第89図	土器分布図 2	121
第53図	26号住居跡遺物出土状況	65	第90図	縄文土器第1群 5	122
第54図	26号住居跡出土遺物	66	第91図	縄文土器第2群 1	124
第55図	縄文時代の集石 1	68	第92図	縄文土器第2群 2	125
第56図	縄文時代の集石 2	70	第93図	縄文土器第2群 3	128
			第94図	縄文土器第2群 4	129

第95図	縄文土器第Ⅱ群5	130	第136図	石核(タイプ別)分布	211
第96図	縄文土器第Ⅱ群6	131	第137図	石核(石材別)分布	212
第97図	縄文土器第Ⅱ群7	134	第138図	石斧(タイプ別)分布	213
第98図	縄文土器第Ⅱ群8	136	第139図	石斧(石材別)分布	214
第99図	縄文土器第Ⅱ群9	138	第140図	石錘・礫器分布	215
第100図	縄文土器第Ⅱ群10	140	第141図	磨石・敲石類分布	216
第101図	縄文土器第Ⅱ群11	142	第142図	石皿・台石分布	218
第102図	縄文土器第Ⅱ群12	143	第143図	剥片・砕片・二次加工剥片・ 使用痕剥片分布	219
第103図	縄文土器第Ⅱ群13	146	第144図	石鏃1	220
第104図	縄文土器第Ⅱ群14	148	第145図	石鏃2	221
第105図	縄文土器第Ⅱ群15	149	第146図	石鏃3	222
第106図	縄文土器第Ⅱ群16	150	第147図	石鏃4	223
第107図	縄文土器第Ⅱ群17	152	第148図	石鏃5	224
第108図	土器分布図3	154	第149図	スクレイパー1	225
第109図	土器分布図4	155	第150図	スクレイパー2	226
第110図	縄文土器第Ⅱ群18・第Ⅲ群1	156	第151図	スクレイパー3	227
第111図	縄文土器第Ⅲ群2・第Ⅳ群1	158	第152図	スクレイパー4	228
第112図	縄文土器第Ⅳ群2	159	第153図	石匙1	229
第113図	縄文土器第Ⅳ群3・第Ⅴ群1	162	第154図	石匙2	230
第114図	縄文土器第Ⅴ群2	163	第155図	石錘・楔形石器	231
第115図	縄文土器第Ⅴ群3	166	第156図	石核1	232
第116図	縄文土器第Ⅴ群4・第Ⅵ群1	168	第157図	石核2	233
第117図	縄文土器第Ⅵ群2	169	第158図	石核3	234
第118図	土器分布図5	170	第159図	石核4	235
第119図	土器分布図6	171	第160図	石核5	236
第120図	縄文土器第Ⅵ群3	172	第161図	石核6	237
第121図	縄文土器第Ⅵ群4	173	第162図	石核7	238
第122図	縄文土器第Ⅶ群1	174	第163図	石核8	239
第123図	縄文土器第Ⅶ群2	176	第164図	打製石斧1	240
第124図	縄文土器第Ⅶ群3	178	第165図	打製石斧2	241
第125図	縄文土器第Ⅶ群4	179	第166図	打製石斧3	242
第126図	縄文土器第Ⅶ群5・第Ⅷ群	180	第167図	打製石斧4	243
第127図	土器分布図7	182	第168図	打製石斧5	244
第128図	土器分布図8	183	第169図	打製石斧6	245
第129図	縄文土器第Ⅸ群1	184	第170図	打製石斧7・磨製石斧1	246
第130図	縄文土器第Ⅸ群2・第Ⅹ群	186	第171図	磨製石斧2	247
第131図	石鏃(石材別)分布	207	第172図	石錘・礫器	248
第132図	スクレイパー(石材別)分布	208	第173図	磨石・敲石類1	249
第133図	石匙(石材別)分布	209	第174図	磨石・敲石類2	250
第134図	石錘(石材別)分布	209	第175図	磨石・敲石類3	251
第135図	楔形石器(石材別)分布	210			

第176図	磨石・敲石類 4	252	第191図	中世以降の溝状遺構 2	275
第177図	磨石・敲石類 5	253	第192図	中近世の土坑	276
第178図	磨石・敲石類 6	254	第193図	土坑列配置概念図	277
第179図	磨石・敲石類 7	255	第194図	中近世の炉跡 1	278
第180図	磨石・敲石類 8	256	第195図	中近世の炉跡 2	279
第181図	磨石・敲石類 9・石皿 1	257	第196図	中世墓	280
第182図	石皿 2	258	第197図	弥生時代以降出土遺物分布図	284
第183図	石皿 3・台石 1	259	第198図	弥生以降の土器 1	285
第184図	台石 2	260	第199図	弥生以降の土器 2	286
第185図	弥生時代の遺構	268	第200図	弥生以降の土器 3	287
第186図	古代～近世の遺構位置図	269	第201図	弥生以降の石器類 1	289
第187図	古代のカマド跡 1	270	第202図	弥生以降の石器類 2	290
第188図	古代のカマド跡 2	271	第203図	鉄製紡錘車	292
第189図	古代 1号遺物集中	272	第204図	時期別住居跡変遷図	294
第190図	中世以降の溝状遺構 1	274			

挿表目次

第1表	周辺の主要遺跡一覧表	5	第15表	縄文時代	
第2表	縄文時代住居跡計測表	104		包含層出土石器計測表	261～265
第3表	縄文時代集石計測表	104	第16表	弥生時代土坑計測表	279
第4表	縄文時代土坑計測表	104～105	第17表	古代カマド跡計測表	279
第5表	縄文時代炉跡計測表	105	第18表	古代遺物集中計測表	279
第6表	縄文時代堅穴状遺構計測表	105	第19表	中世以降溝状遺構計測表	280
第7表	縄文時代配石遺構計測表	105	第20表	中近世炉跡計測表	280
第8表	縄文時代石斧埋納遺構計測表	105	第21表	中近世土坑計測表	280～281
第9表	縄文時代埋甕計測表	105	第22表	中世墓計測表	281
第10表	縄文時代		第23表	弥生時代以降	
	遺構出土土器観察表	106～108		遺構出土土器観察表	281
第11表	縄文時代		第24表	弥生時代以降	
	遺構出土石器計測表	109～110		包含層出土土器観察表	291
第12表	縄文時代		第25表	弥生時代以降	
	包含層出土土器観察表	188～200		包含層出土石器・石製品計測表	291
第13表	縄文時代石器組成表	202	第26表	鉄製紡錘車計測表	292
第14表	縄文時代磨石・敲石類組成表	217			

第1章 資料整理の概要

富士石遺跡における縄文時代以降の成果に係る資料整理・報告書作成の作業期間は平成21年6月～平成24年3月である。

まず整理を開始するにあたり、大量の攪乱土内採取の遺物の取り扱いが問題となった。第5図にあるように当該遺跡4-1区高台部および4-3区においては特に激しく攪乱されており、縄文時代の包含層を含む富士黒土層以上の層がほとんど残存していなかった。攪乱土は残置されており、そこから包含層出土遺物とほぼ同量の遺物が取り上げられた。

これら攪乱土から採取した土器・石器・石製品については以下のように取り扱った。土器については、長辺2センチ以下の破片または無文の胴部破片を除き、全て分類の対象とした。石器については、剥片石器は器種分類を行い、実測したもののみを遺跡管理システムに登録した。石製品は全点を実測、遺跡管理システムに登録した。報告書内での表記はすべて攪乱とした。

上記作業と並行し、旧石器時代の遺物包含層と考えられる休場層の上面と、弥生時代の包含層と考えられる新期スコリア層の下面を境に形式的に分離した。次に遺物の形態や風化の程度を観察し、浮き上がりや沈み込み等の理由で混入の可能性がある遺物を抽出し、それぞれを再分類した。剥片・破片類については、当初の分離を活かし層位によって形式的に分類した。その結果、縄文時代草創期の剥片・破片が縄文時代早期以降の石器に混入している可能性もある。弥生時代以降の遺物に関しては遺構に伴う遺物も少なく、出土量も少ないため、個々の遺物を観察し時期判断をした。

整理の結果、縄文時代の遺構・遺物に関しては早期・前期の遺構・遺物を主とし、中期・後期の遺物を確認した。弥生時代以降の遺物は中期後半から後期の土器と石器を確認した。古墳時代以降の遺物に関しては土器と石製品を確認した。

攪乱・表採以外の出土遺物の内訳は、縄文土器16,633点、石器7,774点、礫33,330点、弥生時代以降の土器691点、石器・石器製品98点、礫247点、金属製品1点である。合計点数は58,774点である。

土器は施文・器形・調整・胎土を手がかりに型式分類を行った後、文様構成が明確なものを中心に拓本・断面実測を行った。また、残存状態が良好な5個体に関しては復原を試みた。

石器は調整・加工の施されているものを中心に実測図を作成した。石器実測については、礫石器類（磨石・蔽石・石皿・台石等）と一部の剥片石器類を除き、石器実測図業務を株式会社ラングに委託した。

黒曜石製石器については、889点を抽出の上、独立行政法人沼津工業高等専門学校名誉教授の望月明彦氏に依頼し、産地推定分析を行った。抽出基準は、調整・加工のあるものを全てを分析の対象とした。また出土した炭化物の年代測定、遺構内から出土した炭化材の年代測定・樹種同定を行った。測定業務は株式会社加速器分析研究所に委託し、¹⁴C年代測定（AMS法）を用いた。また土器付着炭化物の年代測定について、名古屋大学大学院の水野蛭氏にも委託した。これらの成果は第2分冊に集成、掲載した。

報告書作成に伴い、全体図や遺構図等の図版作成、出土状況の記録と台帳に基づく一覧表の作成、拓本、実測図の図版作成、遺物写真撮影と写真図版の作成を行い、整理成果を踏まえて本文を執筆した。

調査現場で用いた光波測定機の記録データはCADで図化されるが、図化されたデータをベクトルグラフィックソフトに取り込み、主にパソコンソフト上で図版の編集を行った。

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 地理・歴史的環境

愛鷹山麓は、静岡県東部、富士山の南～南東麓に接する場所に立地する。昨今の第二東名関連の発掘調査において、愛鷹山南麓～東麓にかけて多くの縄文・旧石器の遺跡が確認されている。富士石遺跡もそれらの遺跡の一つである。

愛鷹火山は約40万年前に活動を開始し、約10万年前に活動を停止した円錐形をした成層火山である。山麓には約8万年前に活動していたとされる古富士火山及び約1万年前に活動していたとされる新富士火山を供給源とするローム層が堆積し、特に山麓南東側では20mもの厚さになる。これは愛鷹ローム層と呼ばれ、上・中・下の3層に分層されている。今までのところ、上部ローム層以上においてのみ人類の遺跡が確認されており、旧石器時代の遺構・遺物は上部ローム層から、縄文時代以降の遺構・遺物は現生腐植質火山灰層から出土している。

現在の愛鷹山麓は複数の峰に分岐しており、そこから生ずる水系は、浸食作用によって多数の入り組んだ開析谷を形成している。本遺跡の存在する愛鷹山南東麓も枝尾根が深く入り込み、周囲には、主に尾根上の比較的平坦な場所を選んで多くの遺跡が存在する。

富士石遺跡は標高約182m～195mに位置する遺跡である。その周辺には、二筋の大きな開析谷が発達し、東名高速道路が横断する標高150m付近では、尾根上と谷底部との比高差約20～30mを測る深い開析谷によって三分されている。これらの尾根筋は、標高が下がるにつれ更に分岐してゆく。この尾根筋には、それぞれの丘陵末端部（標高約80～90m）まで、断続的に遺跡の分布が確認されている。

愛鷹山麓の縄文時代草創期遺跡の多くは愛鷹山南麓に位置する沼津市に存在する。丸尾北遺跡、清水柳北遺跡、尾上イラウネ遺跡、住居跡が検出された葛原沢第IV遺跡などがその一例である。しかし土器の出土例は少なく、石器や遺構の検出状況から草創期の生活面が想定されている遺跡も存在する。長泉町においては尾尻遺跡、茶木畑遺跡が知られているが、詳細はわかっていない。早期前半の資料は草創期に比べ飛躍的に増加する。長泉町では平畦遺跡、陣場上遺跡、陣場上B遺跡、野台遺跡、中尾遺跡、イラウネ遺跡等で燃系文系土器、押型文系土器が出土している。集落跡としては清水柳北遺跡、尾上イラウネ遺跡や清水柳遺跡等が知られている。この尾上イラウネ遺跡では押型文、条痕文を伴う時期の住居跡が検出されている。また、当該富士石遺跡では、昭和55年に丘陵を東西方向に走る町道591号線の拡幅工事に伴う発掘調査（長泉町教育委員会が実施）が行われており、縄文時代早期の住居跡4軒ほか、土坑、集石等の検出が報告されている。続く前期の遺跡には、清水柳遺跡、清水柳北遺跡、尾上第2遺跡などがあり、木鳥式土器、諸磯式土器が出土している。また、木鳥式土器・関山式土器を伴う住居跡が検出された梅ノ木平遺跡、有尾式、関山式、清水ノ上II式～上の坊式併行の土器が中見代遺跡、東野II橋下遺跡、追平B遺跡から出土している。東野II橋下遺跡からはこの時期の住居跡11基が検出されている。中期前半の遺跡には柏窟遺跡や上山地遺跡などがあり、五領ヶ台式、勝坂式、東海系の北屋敷式等の土器が出土している。上山地遺跡からは勝坂式期の住居跡27基が検出されている。中期後半の遺跡には中峰遺跡、同板畑上遺跡などがあり、これらの遺跡では曾利式土器が主体となっている。後期、晩期になると愛鷹山麓の遺跡数は再び減少してゆく。長泉町内では池田遺跡、上野遺跡が知られるが、詳細は不明である。これには、今からおよそ2,800年前のカワゴ平・仙石火山砂礫噴出の影響があると考えられる。後期の遺跡は裾野市域でもわずかな遺物が散発的に出土しているのみで、内野山I遺跡、田

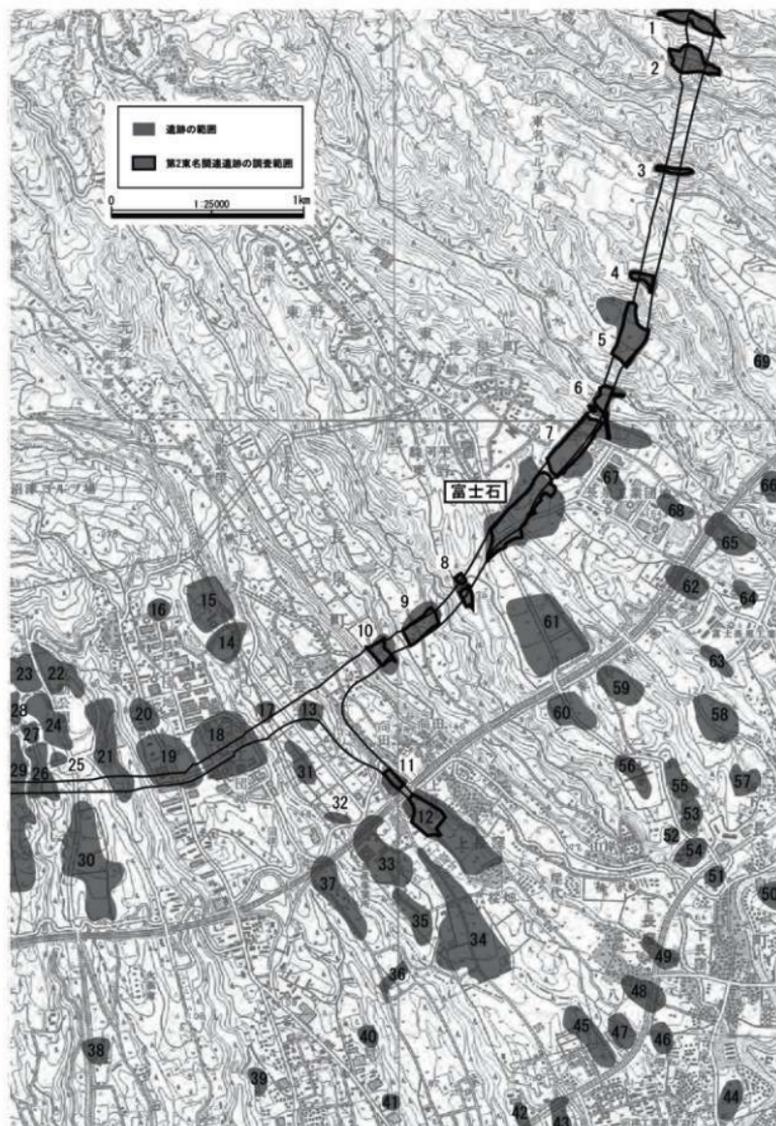
場沢裏山遺跡の他、中里遺跡、下条遺跡、一色原遺跡が挙げられるが、資料は極めて少ない。

静岡県東部では丘陵部末端付近に弥生時代の遺跡が存在し、黄瀬川扇状地の平坦部分に古墳時代後期～終末期の古墳群が確認されている。長泉町内では大平遺跡において弥生時代前期末の竪穴住居跡が確認され、該期の遺構としては県内唯一のものとして評価されている。また第二東名路線上では梅ノ木沢遺跡で弥生時代の打製石鏃や磨製石鏃が出土している。この遺跡では弥生土器の出土が確認できておらず、遺跡周辺に集落域が形成されていた可能性を想起させる。またS字型や古墳時代中期後半～後期の土師器や刀子形石製模造品の出土が報告されている。そもそも当該遺跡の調査区は尾根筋に囲まれており耕作地に相応しい平野部を望む事ができない。従ってこれらの痕跡を残した人々の生業は平野部ではなく丘陵部を指向したものである。富士石遺跡も含め弥生・古墳時代の遺構・遺物が点在する愛鷹山麓生業形態については、今後一考を要する。また原分古墳から馬具や石棺等が出土し、古墳が移築保存されたことは記憶に新しい。

古代の遺跡として長泉町内での場遺跡や天神原遺跡が知られるが、愛鷹山丘陵上では顕著ではない。当該地域は駿河国駿河郡の領域に位置し、古代東海道が郡内を貫通していた。延暦21年(802年)の富士山噴火により古代東海道(足柄路)が通行不能となり、宮荷(箱根)路が開かれたとされる。この古代交通路の位置は判然としないうもの、長泉町内を貫通していたものと想像に難くない。また駅制に伴う組織として駅家「うまや」が古代東海道沿いに設置され、付近には長倉駅家と横走駅家が設けられたと推定されているが、長泉町域を含む県東部に駅家の所在が判然としていない。しかし奈良・平安時代における集落もその多くが平坦な黄瀬川沿いの土地に展開していたのであろう。

中世の遺跡としては長久保城跡や中世墓が検出された大平遺跡、平畝遺跡があげられる。長久保城跡は愛鷹山から延びた舌状台地先端に位置し、眼下の黄瀬川は大きく屈曲する地点でもある。当該城が文献で確認できる最古の記述は天文6年(1537年)のものである。駿河国今川義元がそれまでの相模国北条氏との同盟関係を破棄し、甲斐国武田氏と同盟を結ぶことに端を発した「河東一乱」に起因し、北条氏綱がそれまでであった古い城を修築した記事がある。これが長久保城を指すものと考えられ、天文14年(1545年)には武田軍の加勢も受けた今川義元の軍が北条軍の守備するこの城を攻囲している。当該地域が伊豆国・相模国・甲斐国に隣接する駿河国東辺部にあり、そこにある長久保城は北条方にせよ今川方にせよ要の城として機能している。また周辺には天神川古城、南一色城が位置し、長久保城の出城等の諸説が散見される。一方、中世の墓域が形成されていた大平遺跡は黄瀬川が形成した河岸段丘上に位置し、集石墓等の中世墓が検出されている。出土品では古瀬戸(前期～後期)、瀬戸大窯、常滑、渥美等の国産陶器や龍泉窯系・同安窯系青磁の輸入陶磁器、かわらけや羽釜等の土師器、銅銭等の金属製品が認められる。墓域形成の元となる集落遺跡は判然としなが、駿河国と相模国の国境でもある足柄峠へ向かう交通路が当該地域に存在する事も勘案すれば、決して看過できない地域であることは謂うまでもない。

なお、今回の調査区の南西端付近は周知の埋蔵文化財包蔵地である迫平A遺跡と重複している。



第1図 富士石遺跡周辺の主要遺跡

第1表 周辺の主要遺跡一覧表

No.	遺跡名	草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	弥生	古墳	古代	中世
★	富士石	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
1	下ノ大窪		○	○	○	○		○			
2	老平		○	○	○						
3	入ノ割B		○	○							
4	内野山V		○	○							
5	塚松		○	○	○						
6	梅ノ木沢		○	○	○	○					
7	東野		○	○	○	○		○			
8	八分平E		○	○	○						
9	細尾		○	○	○				○		
10	向田A		○	○	○	○					
11	西山		○	○	○						
12	桜畑上		○	○	○	○					
13	イラウネ		○	○	○						
14	尾上イラウネ		○	○	○						
15	尾上イラウネ北		○	○							
16	拓南東		○	○	○						
17	中尾		○	○	○						
18	清水柳北		○	○	○	○					
19	尾上第Ⅰ		○	○							
20	尾上第Ⅱ		○					○			
21	二ツ割		○	○	○	○					
22	土手上		○	○	○						
23	葛原沢第Ⅳ		○	○	○	○					
24	広合		○	○	○						
25	広合南		○	○							
26	中見代Ⅰ		○	○	○						
27	中見代Ⅱ		○	○	○						
28	中見代Ⅲ		○								
29	西洞		○	○	○	○					
30	楨出		○	○	○	○	○	○	○		
31	野台		○	○	○						
32	野台南		○	○	○					○	
33	中峯		○	○	○						
34	柏窪A		○	○							
35	柏窪B					○					
36	丸尾北					○					
37	清水柳		○		○						
38	木戸上		○								
39	上松沢平		○								
40	寺林		○		○						
41	寺林南		○		○						
42	大谷津		○	○	○	○					
43	子ノ神		○		○	○					
44	尾尻		○	○							
45	柏葉尾		○		○						
46	陣場上A		○	○							
47	陣場上B		○		○						
48	平群		○	○	○						
49	西願寺		○	○	○	○					
50	大久根		○		○						
51	長久保城跡		○		○	○	○				
52	池田		○								
53	上野A		○	○		○					
54	上野B		○	○	○	○	○				
55	上野E		○	○	○	○					
56	茶木畑		○	○	○						
57	鉄平		○		○						
58	池田B		○	○	○	○					
59	東野Ⅱ橋下		○	○	○						
60	中見代		○	○							
61	追平B		○								
62	大峰A					○	○				
63	大峰B		○	○	○	○					
64	上山地A					○					
65	梅ノ木平		○	○							
66	平林Ⅰ		○		○						
67	八分平B		○	○							
68	八分平D		○		○						
69	内野山Ⅰ		○	○	○						

第2節 土層堆積状況と遺跡の地形

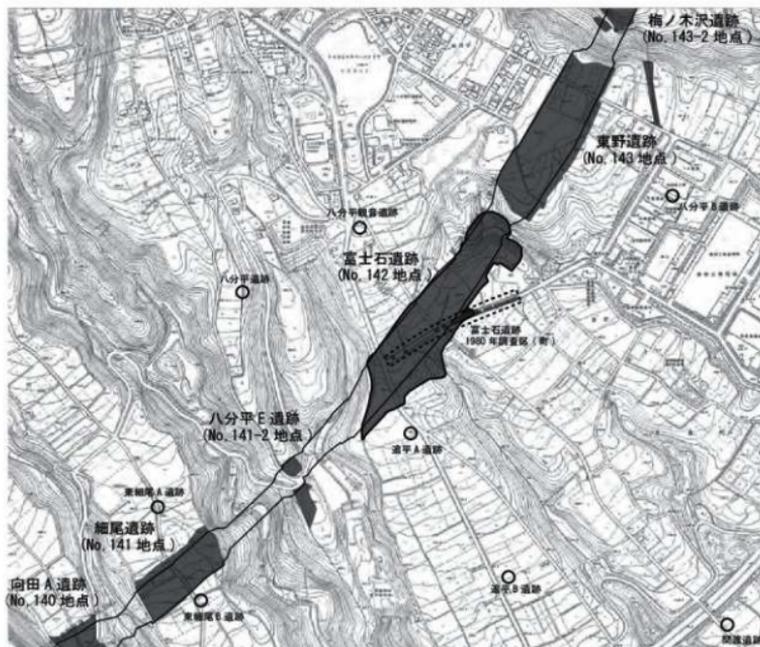
1 富士石遺跡の基本層序

箱根西麓、愛鷹南～東麓の尾根上に堆積する土層は、箱根・富士山噴出物で構成された火山灰層（愛鷹ローム）とその上部に発達した現世火山灰腐植土層である。愛鷹ロームは上部ローム層・中部ローム層・下部ローム層に区分され、各々、関東ローム層の立川ローム・武蔵野ローム・下末吉ロームに比定されている。現在のところ、上部ローム層以上で人間の活動痕跡が確認されており、この下面までが発掘調査対象である。富士石遺跡で確認された土層はこの箱根・愛鷹基本層序を準用している。第2図は富士石遺跡の基本層序を示したものである。当該報告書で対象とするのは1～9層で、2～9層は現世火山灰腐植土層に該当する。

1層は表土で、地目が畑の場合はその耕作土であり、谷部の道路下部では盛土である。2層は黒色土層である。シルト質で粘性がまったく無く、締りも弱い。径2～3mm程度の褐色スコリアを含む。弥生時代以降の遺物を含む。場所により色調差で上下2層に分ける（比較的上層が淡い印象）ことが可能であるが、遺構・遺物による年代差・年代特定の見解は得られなかった。3層は新期スコリア層である。緻密な粒径のスコリアが堆積し、谷の一部で縄文時代の土器を含む。縄文時代末から弥生時代初頭に降灰か。4層は暗赤褐色のスコリア層で、径2～5mm程度の粒径のスコリアが集中する。3層の下面で部分的に検出される。縄文時代後期以降に降灰した砂沢スコリアか。5層は微細な白色軽石粒を含む黒色土層である。上層からのスコリア粒の沈下がある。また軽石粒も浮き沈みが激しく、1枚の確固たる層を形成していない。この層の軽石は縄文時代に降灰したカワゴ平バミスか。6層は黒色土層である。一部、5層と同じ軽石粒の沈み込みを受けているが、密度の差で分層される。縄文時代中期の遺物を含む。7層は暗褐色土層である。下層の8層の漸化的土層の性格を持つ。8層は箱根・愛鷹基本層序の栗色土層。遺跡付近では黄褐～褐色を呈する。緻密な火山灰ローム層。尾根上では堆積が薄く、部分的な検出に止まる場所もある。谷地形では色調も明るく堆



第2図 富士石遺跡の基本層序

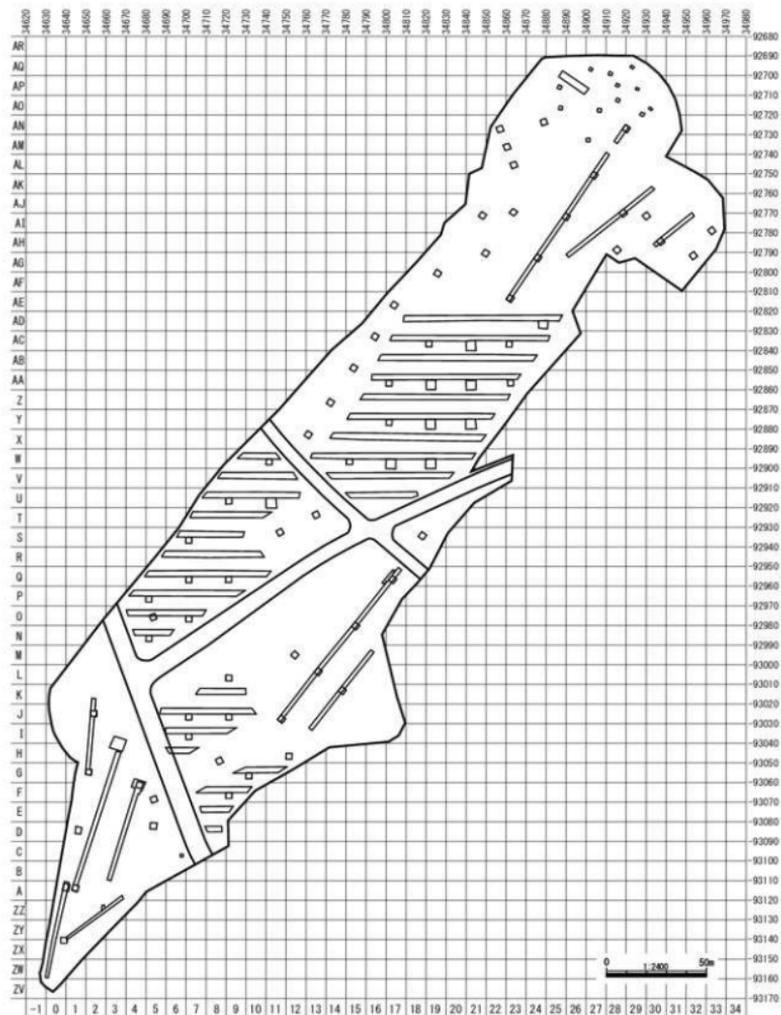


第3図 第二東名関連遺跡の調査範囲

積も厚い。9層は箱根・愛鷹基本層序の富士黒土層に比定される。やや暗褐色を呈する。径1~2mm程度の赤褐色スコリアを散漫に含む。8層下位~9層上位にかけて、縄文時代早期後半の遺物が含まれる。10層は休場層でa~cに細分される。縄文時代の遺構は休場層上層で多く検出される。

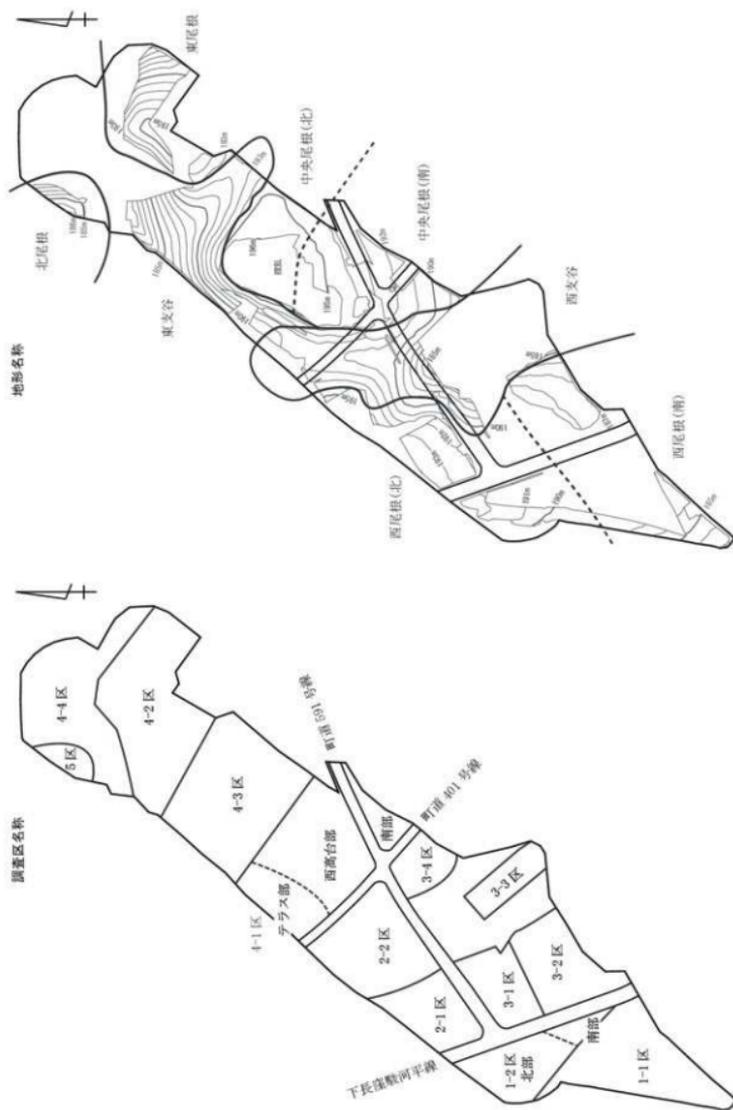
2 調査区名称と確認地形

第1章でも触れたように当該遺跡は攪乱により破壊され、攪乱土内より大量の遺物が確認されるに至っている。第5図は調査区名称と検出地形の名称を示し、第4図は地形に合わせて設定されたトレンチとテストピットの配置図である。調査区は1-1区~5区、町道591・401号線及び下長宿駿河平線区に至る。1-1~2区・2-1区・3-1~2区は地形としては「西尾根」に該当し、「西支谷」とした谷地形で区分される。標高183~195mを測り、南南東に向かって緩やかに傾斜する尾根地形を呈するが、下長宿駿河平線を挟んで攪乱を大きく受けている。一方西支谷は標高約170~150mに位置する追平B遺跡東縁に延びる大きな谷地形へ継続、発達する。2-2区及び3-4区・4-1区のテラス部付近が西支谷に該当しよう。この西支谷と「東支谷」により圍繞されているのは「中央尾根」である。標高約195~196m程度の平坦な尾根頂部を有し、南東方向へ傾斜する。この中央尾根も攪乱により大きく破壊されている。特に中央尾根の攪乱は休場層直下黒色帯まで及ぶ。堅穴住居跡群が多く検出されたのは当該尾根で、攪乱は住居跡群を大きく破壊したため、攪乱土中に土器・石器が大量に含まれるに至った。4-1区西高台部・南部、4-3区が中央尾根に該当する。東支谷は西支谷にも接続するが、富士石道



第4図 トレンチ・テストピット配置図

跡東側、長泉工業団地付近で確認された八分平B遺跡の方向から延びる谷地形の谷頭付近として考えた。東支谷は4-2~3区が該当しよう。この東支谷が樹枝状に発達した結果、形成されたのが「北尾根」「東尾根」、それぞれ5区、4-2区に該当する地形である。



第5図 調査区名称と地形名称

第3章 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構と遺構出土の遺物は富士黒土層～新期スコリア層において検出されている。概ね富士黒土層からは早期の遺物、栗色土層からは前期の遺物、黒色土層からは前期～中期の遺物、カワゴ平バミス層～新期スコリア層からは後期の遺物が出土しているが、堆積状況が良好だったと思われる高台部の状況が不明であり、他の地区は傾斜する地形のため、単純に層位をもって遺構・遺物の時期を決定することはできなかった。本書では、遺構とそれに伴う遺物について第1節で報告する。第2節では包含層出土の土器について時期別に分類し、出土分布図と共に報告する。第3節では、包含層出土の石器について時期の特定が困難であったため全てを一括し、器種別に分類した上で出土分布図と共に報告する。

第1節 遺構と遺構出土遺物

覆土や出土遺物により縄文時代の遺構と考えられるものは第2～9表の通りである。検出された遺構の主体は集落の存在を示す竪穴住居跡で合計26基を検出した。竪穴住居跡を含む多くの遺構は、4-1区および4-3区高台部、すなわち中央尾根にて多く検出されているが、そのエリアは最も攪乱を受けた箇所でもあり、縄文時代の包含層を含む富士黒土層以上の層がほとんど残存していなかった。そのため遺構配置等の全容は判明していない。この攪乱土の直下が遺構の検出面となった遺構や、遺構の検出が遅れ、遺構検出面より高い位置で遺物を検出する形となった遺構もあり、遺構把握に難が生じている。

第6・7図は遺跡の主体時期である縄文時代早～前期、縄文時代中～後期の遺構位置を示したものである。本来ならば時期毎細分された遺構分布図を作成し、集落の変遷を提示した上で報告するのが望ましいが、上記の攪乱状況に併せ、集石、焼土、土坑の時期特定が困難であったことに起因する。本節において、遺構の時期に関わると考えられる遺物は出土状況と共に報告するが、掲載できなかった土器・剥片類・炭化物・礫は遺構図上に検出位置のみを記す。なお検出遺構間で接合した遺物についても、それぞれ出土位置と番号を付与しており、遺構時期推定の参考とされたい。なお第2節で縄文土器の分類を行っており、第1節で報告する遺物にも適用し、表に示している。

1 竪穴住居跡（SB）

富士石遺跡において、竪穴住居跡は総数26基確認した。住居跡から出土した土器で各住居の所属時期を推定すると縄文時代早期前半～縄文時代後期初頭と考えられる。時期毎の住居跡では早期前半の押型文を伴う住居跡2基、早期前半、判ノ木山西式土器・子母口式土器を伴う住居跡1基、早期後半で清水柳E類土器や条痕文土器等を伴う住居跡10基、その他早期代と考えられる住居跡6基、前期土器を伴う住居6基、後期初頭の堀之内式土器を伴う住居跡が1基で、竪穴住居跡の主体は縄文時代早期といえる。住居跡は1-2区北部、すなわち西尾根（北）に17～19号住居跡が見られるが、大半は4-1区西高台部から4-3区にかけての中央尾根丘陵頂部から東側南斜面にかけて、標高約193～196mまでの間に集中している。丘陵頂部は攪乱により破壊されているが、攪乱土からの大量の土器や石器が出土しているという事実から、本来、竪穴住居跡が中央尾根頂部に多く分布していたに違いない。その攪乱土内には中期の土器も散見され、中期の住居跡が存在した蓋然性が認められる。なお後期の住居跡のみが4-2区、すなわち東尾根の丘陵西斜面に単独で確認され、中央尾根の集落としての利用は見られないのである。なお住居跡の事実記載部には調査時の旧遺構番号を併記している。

早期前半の竪穴住居跡

1号住居跡(旧SB05 第8～9図 写真図版15・44)

当該住居跡はV-17・18グリッドにて検出した。中央尾根(南)に位置し、他の住居跡群からやや距離を置く。住居跡の平面形は円形を呈する。遺構の計測値は長さ3.37m、幅3.07mを測り、中央南西寄りには石囲炉と思しき土坑が検出されている。残存する壁の高さは最高0.14mを測る。壁際には断続的に壁溝と柱穴P1～5が確認された。また炉から土器・石器等が出土している。石囲炉等の検出状況から覆土第2層は住居の貼床である可能性が高い。

当該住居跡から出土した遺物の点数は土器23点、石器4点、礫12点出土し、そのうち4点を図化した。多くが石囲炉からの出土で、貼床土内からの出土も認められる。1～3は縄文土器である。1・2は両者とも口唇部を平坦に仕上げられ、1は内外面ともに縄文が施されている。3には縦位に山形の押型文が認められる。4は石器である。磨・敲石である。扁平で長方形の礫を利用し、磨痕は平坦面・側面に、敲打痕は長軸下端部に観察される。石材は玄武岩である。

2号住居跡(旧SB20 第10図 写真図版16・44)

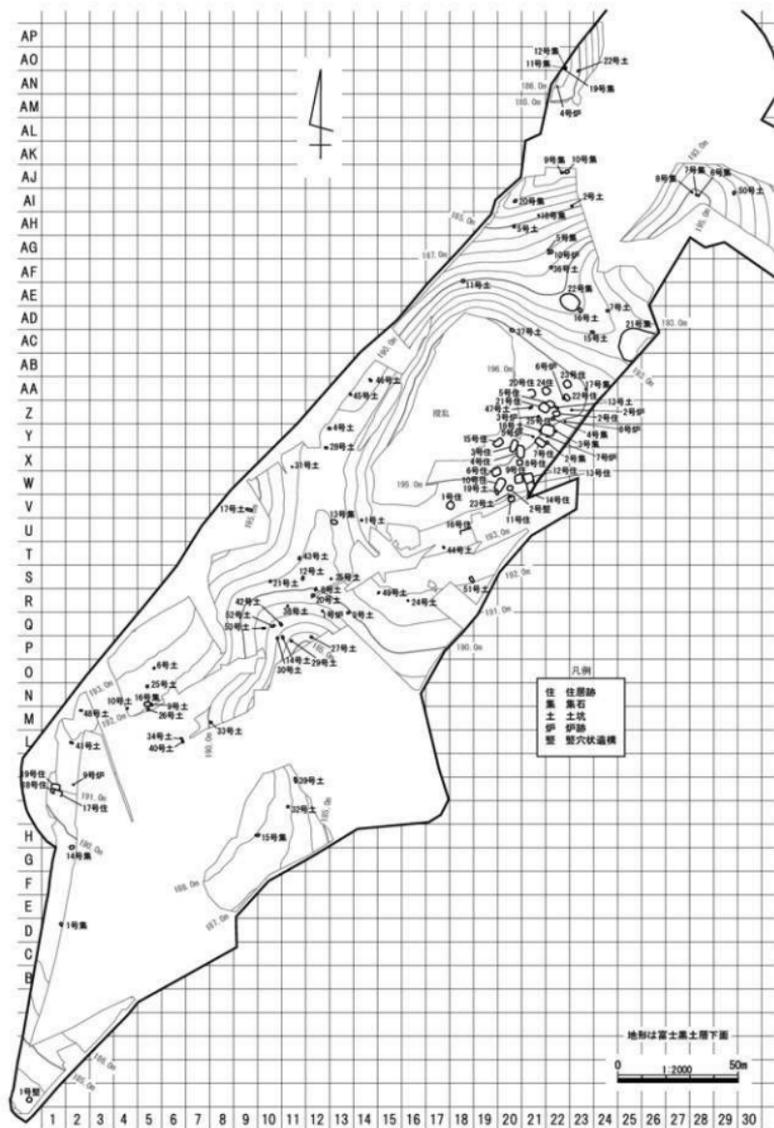
当該住居跡はZ-22グリッド付近にて検出した。中央尾根(北)に位置する。住居跡の平面形は隅丸長方形を呈する。遺構の計測値は長さ2.87m、幅2.16m、残存する壁の高さは最高0.20mを測る。住居跡中心部は攪乱により破壊されていた。住居跡内には壁際に柱穴P1・2が、また壁からやや離れた位置にP3が確認される。住居跡中央からやや東側寄りに炉跡が認められる。炉跡の平面形は楕円形を呈し、炉跡の掘り方は長径0.92m、短径0.58m、深さ0.22mを測る。住居跡内には焼土の堆積が見られた。主にP1上住居跡西半部に堆積しているが、その状況から火災住居では無い。貼床の存在は判然としなかった。

当該住居跡から出土した遺物の点数は土器2点、石器3点、礫1点のみである。そのうち2点を図化した。多くが炉跡付近からの出土である。5は縄文土器である。外面に楕円押型文を施している。6は石器である。敲石で、扁平な礫の両端部に敲打痕が観察される。石材はひん岩である。

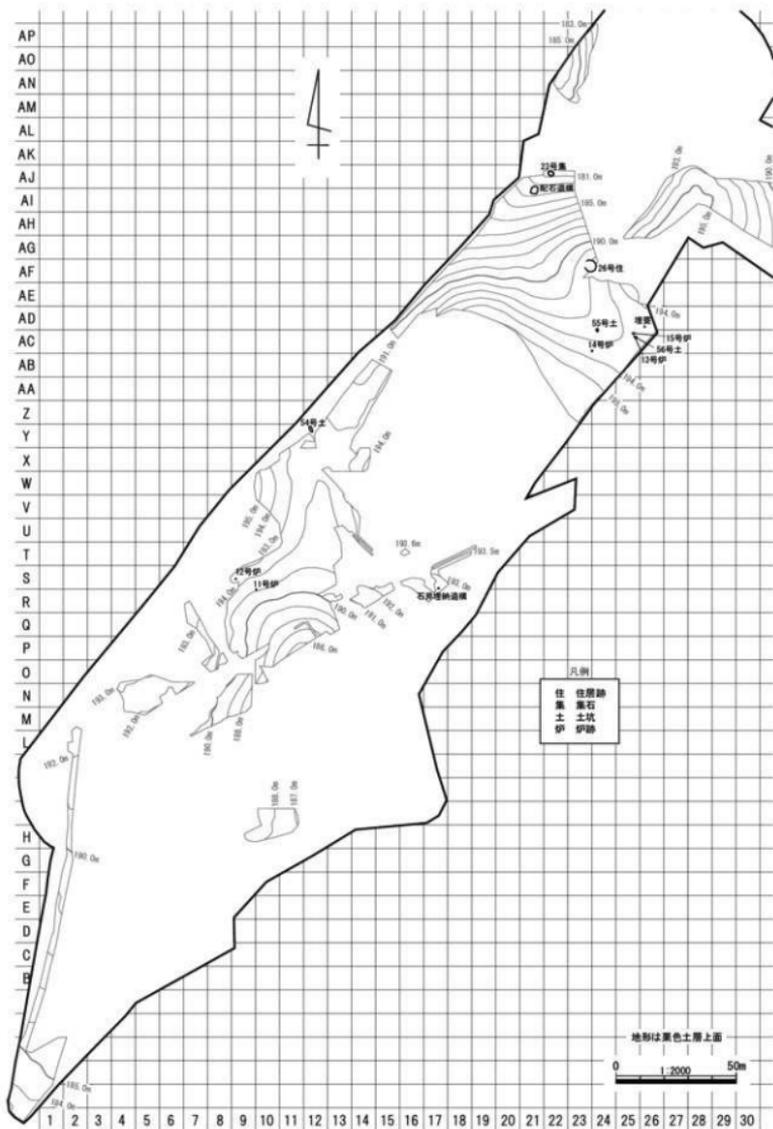
3号住居跡(旧SB07 第11・12図 写真図版16・44・45)

当該住居跡はX・Y-20グリッドにて検出した。中央尾根に位置し、東側で4号住居跡に近接する。住居跡の平面形は長楕円形を呈する。遺構の計測値は長さ5.22m、幅2.52m、残存する壁の高さは最高0.18mを測る。住居内には柱穴が12基確認され、住居跡中心部にあるP12を除き、すべて壁際に位置している。炉跡は未確認である。なお現地調査時点で当該住居跡の平面形が狭長な印象を与えたため、2軒の住居の重複もしくは拡張した可能性も想起し精査されたが、そのような痕跡は確認できなかった。また覆土等の状況から貼床の存在は認められない。覆土の主体は富士黒土層相当土である。

当該住居跡から出土した遺物の点数は土器98点、石器78点、礫74点である。図でも明らかのように住居跡北半部で多くの遺物が出土している。そのうち土器9点、石器7点を図化した。7～15は縄文土器である。7～9は第1群6類に分類した判ノ木山西式土器か。7は口縁部に縦位の沈線文が認められる資料である。10・11は第11群1類に分類した子母口式土器か。両者とも口縁部の破片資料である。前者には横位に施された隆帯上に、後者は口唇部に絡条体圧痕が施されている。12は口縁部のみの破片資料である。平坦に仕上げられた口唇部に刻目文を施し、外面には条痕上に沈線文、刺突文が認められる。他に無文土器である13～15が出土している。13・14は口縁部の破片資料である。16～22は石器である。16は楔形石器である。石材は神津島恩馳島群の黒曜石である。17～21は磨石・敲石類である。18～21には磨面・敲打痕が、17は敲打痕のみ観察される。他に石皿である22が出土している。17・21の石材は玄

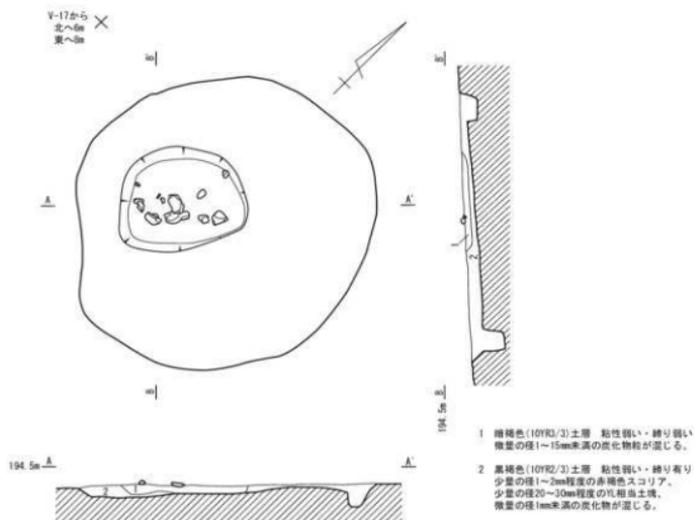


第6図 縄文時代 早～前期遺構位置図

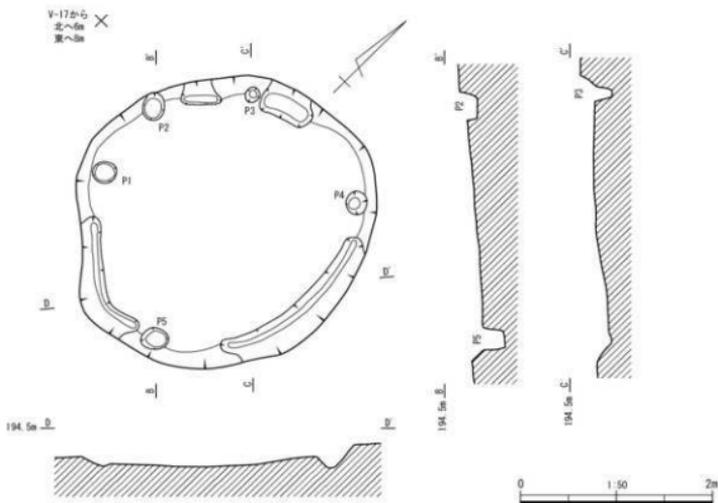


第7図 縄文時代 中～後期遺構位置図

住居跡検出時（炉跡）



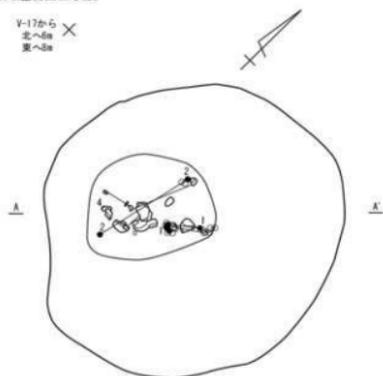
住居跡完掘時



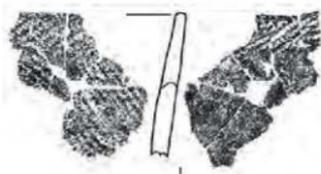
第8図 1号住居跡

伊跡内遺物出土状況

V-17から
北へ5m
東へ5m

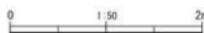
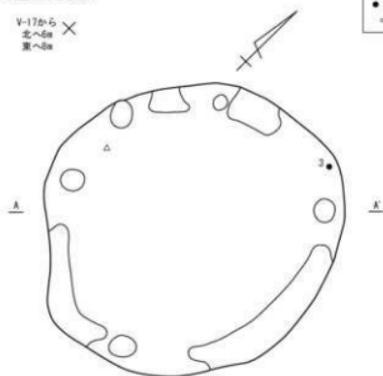


出土遺物



2層内遺物出土状況

V-17から
北へ5m
東へ5m



凡例

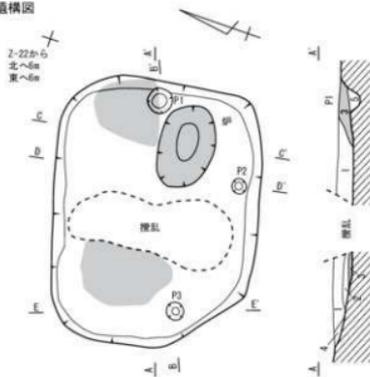


4層・段石 5m

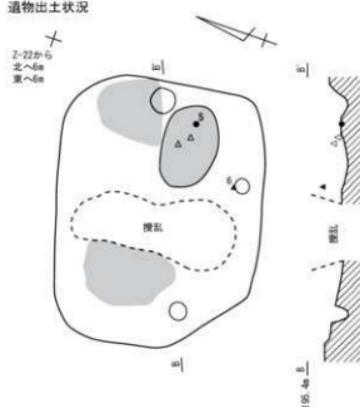


第9図 1号住居跡 遺物出土状況と出土遺物

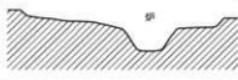
遺構図



遺物出土状況



195.4m C



195.4m D



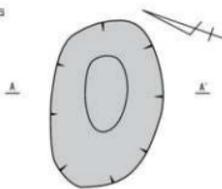
195.4m E



- 1 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性弱い・練り弱い
少量の径1mm程度の焼土粒。
径3~10mm程度のYL相当土塊。
微量の径1mm程度の炭化物粒が混じる。
- 2 暗褐色(10YR3/2)土層 粘性弱い・練り有り
微量の径1~2mm程度の焼土粒。
微量の径1mm程度の炭化物粒が混じる。
- 3 赤褐色焼土(5YR4/6)土層 粘性有り・練り有り
少量の径2~5mm程度の炭化物粒。
少量の径5mm程度のYL相当土塊が混じる。
- 4 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・練り有り
YL相当土とF相当土の混合土。
径10~20mm程度のYL相当土塊が混じる。
- 5 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性弱い・練り有り
微量の径1~2mm程度の焼土粒、炭化物。
少量の径3~5mm程度のYL相当土塊が混じる。



炉



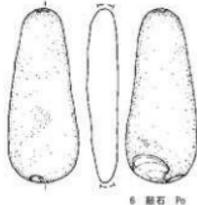
195.0m A



- 1 赤褐色(5YR4/6)土層 粘性有り・練り有り
炉の構成層。
少量の径2~5mm程度の炭化物粒。
少量の径5mm程度のYL相当土塊が混じる。



出土遺物



6 磨石 P6



第10図 2号住居跡と出土遺物

武岩、18・19・20・22は輝石安山岩である。

早期後半の竪穴住居跡

4号住居跡(旧SB08 第13・14図 写真図版17・45)

当該住居跡はX・Y-20・21グリッドにて検出した。中央尾根に位置し、前述した3号住居跡と隣接する。住居跡の平面形は隅丸長方形を呈する。遺構の計測値は長さ5.25m、幅3.11m、残存する壁の高さは最高0.19mを測る。住居内には柱穴が12基確認された。これらの柱穴は西壁際に近い位置に認められている。炉跡は未確認である。また住居跡南半部に床面の硬化域が認められた。なお現地調査時点で当該住居跡の平面形が狭長な印象を与えたため、2軒の住居の重複もしくは拡張した可能性も想起し精査されたが、その事実は確認できなかった。覆土は富士黒土層を主体としており、貼床の存在は認められなかった。

当該住居跡から出土した遺物の点数は土器53点、石器133点、礫82点である。そのうち土器7点、石器5点図化した。23~29は縄文土器である。23~25は判ノ木山西式土器か。異方向の沈線文が認められる。23の内面には条痕が認められる。26・27は清水柳E類土器か。両者とも絡条体圧痕文が施される。26は波状口縁か。28・29は無文土器である。前者は胴下半部、後者は深鉢底部か。丸底であったのだろう。30~33は石器である。30は石鏃である。基部は凹基に分類されるが、挟りが浅いため、平基に近い。箱根畑宿群の黒曜石である。31は石錐である。両面から調整を加え、錐部を仕上げている。錐部の断面は三角形を呈する。諏訪星ヶ台群の黒曜石である。32は石核である。石材はホルンフェルスである。33は磨・敲石である。上半分は欠損し、下半分端部を中心に敲打痕が観察される。石材は輝石安山岩である。

なお住居跡覆土中より炭化材が出土している。放射性炭素年代測定を実施(IAAA-92013)したところ、8,020±40yrBPという¹⁴C年代が測定されている。

5号住居跡(旧SB19 第15図 写真図版17・45)

当該住居跡はZ-22グリッドにて検出した。中央尾根(北)に位置している。住居跡の平面形は隅丸長方形を呈するが、21号住居跡と一部重複し、西隅部は失われている。遺構の計測値は長さ3.35m、幅2.46m、残存する壁の高さは最高0.16mを測る。住居内には柱穴が5基確認されている。P2が埋没後に覆土第2層が堆積している。炉跡は確認されていない。貼床の存在は判然としない。当該住居跡と21号住居跡との新旧関係は、その検出状況から21号住居跡が時期的に新しいと考えられる。

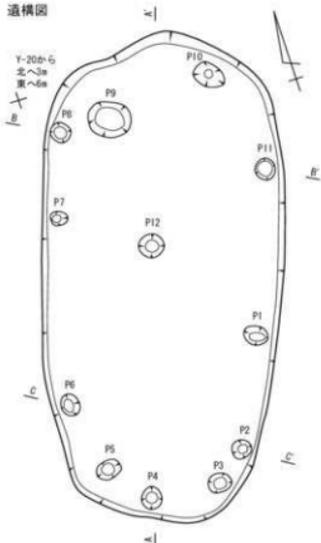
当該住居跡から出土した遺物の点数は、土器18点、石器49点、礫18点を数える。そのうち土器3点、石器4点を図化した。34~36は縄文土器である。34は子母口式土器か。口縁部のみの破片資料である。口唇部と口縁部に絡条体圧痕文が施されている。35・36は清水柳E類土器か。35は波状口縁か。波頂部から隆起線が垂下する。36は胴部の破片資料である。横位・斜位の沈線文が施されている。

37~40は石器である。37・38は石鏃である。両者とも基部は凹基で、37の石材は神津島恩馳島群の黒曜石、38はガラス質黒色安山岩である。39・40は磨・敲石である。両者とも扁平な礫を利用したものである。石材は輝石安山岩・デイスaitoである。

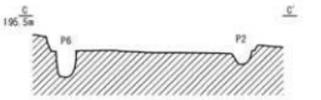
6号住居跡(旧SB11 第16~18図 写真図版18・46・47)

当該住居跡はW・X-19・20グリッドにて検出した。中央尾根(南)に位置している。住居跡の平面形は隅丸方形を呈する。遺構の計測値は長さ3.70m、幅2.99m、残存する壁の高さは最高0.33mを測る。住居内には柱穴が5基確認されている。いずれの柱穴も壁際付近に位置している。炉跡は確認されてい

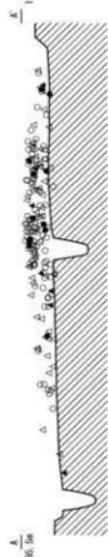
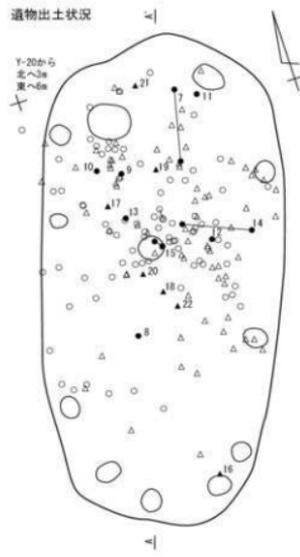
遺構図



I 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り強い
 F2相当土主体、
 少量の程(1~2mm程度)の赤褐色スコリア。
 土層下部の一部に少量の径5~10mm程度の
 YL相当土粒が混じる。



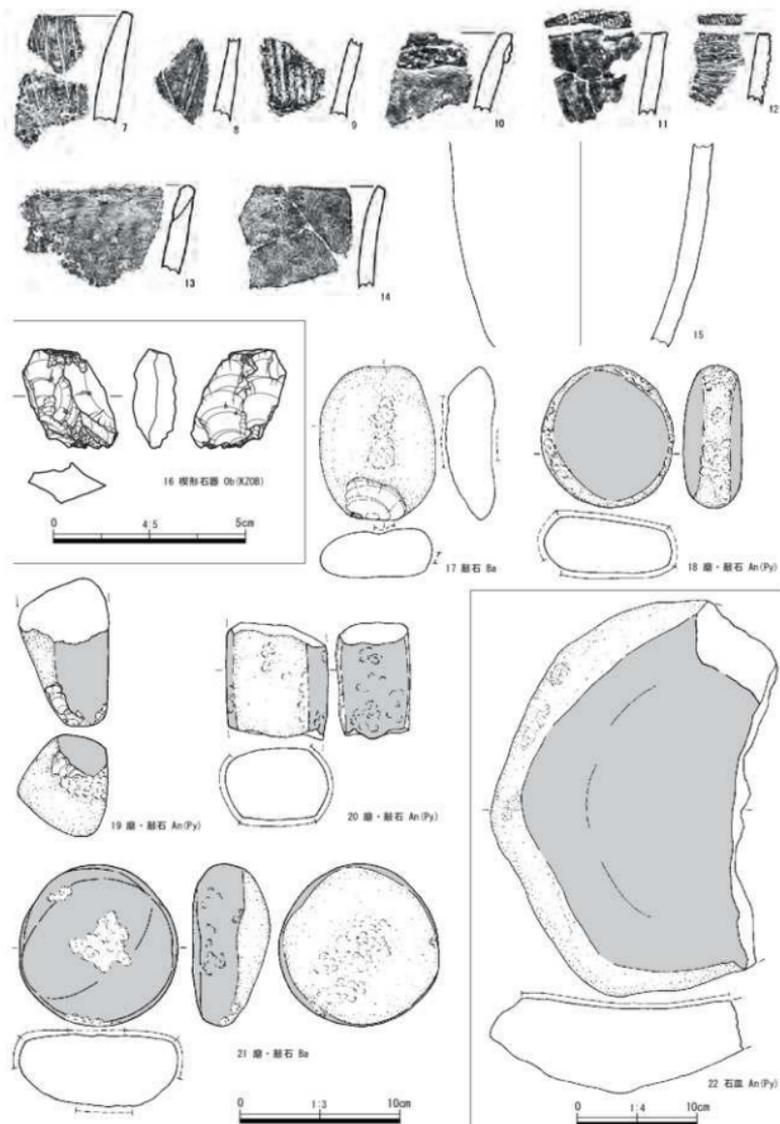
遺物出土状況



凡例
 ▲ △ 石類
 ● ○ 土類

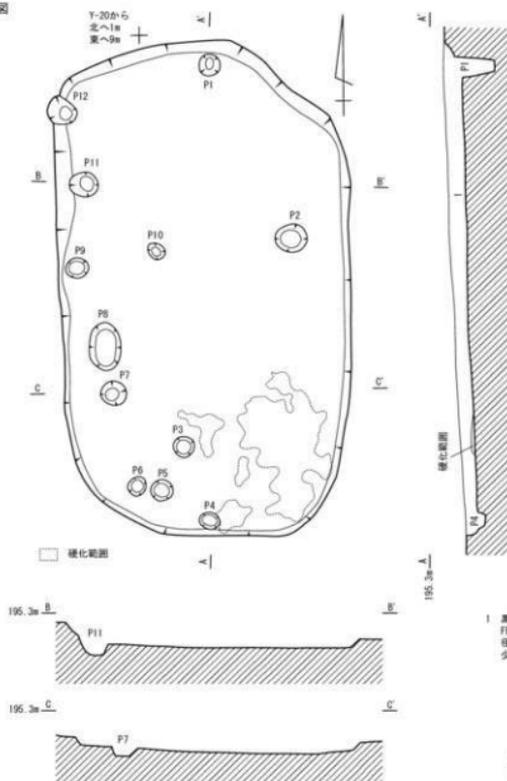


第11図 3号住居跡



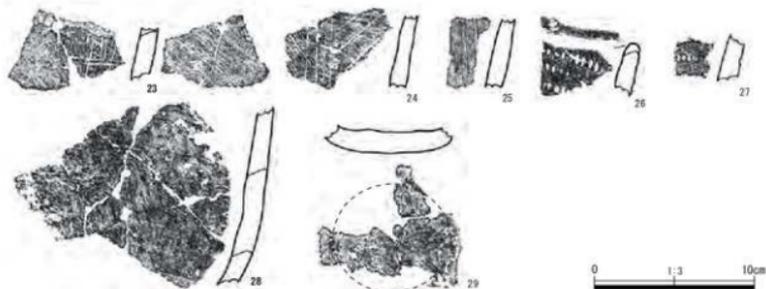
第12図 3号住居跡出土遺物

遺構図



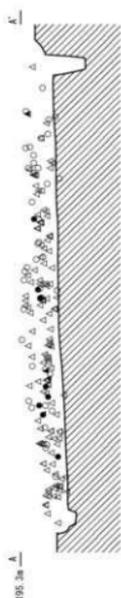
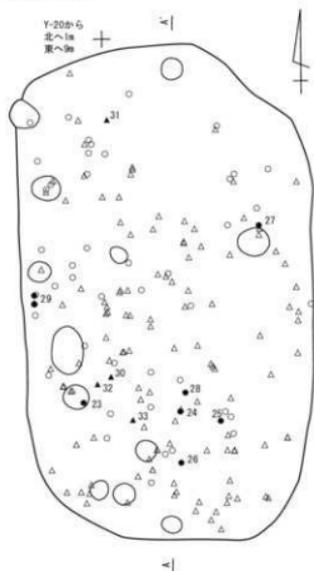
1 黒褐色(10YR2/3)土層 粘性有り・締り強い
F8相当土主体。
径2~3mm程度の赤褐色スコリア、
少量の径1~2mm程度のL相当土粒が混じる。

出土遺物

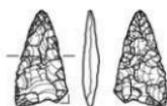


第13図 4号住居跡と出土遺物 1

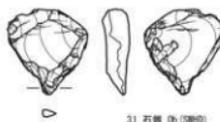
遺物出土状況



出土遺物



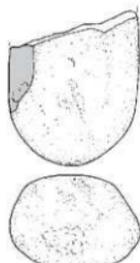
30 石器 (Ch. 994)



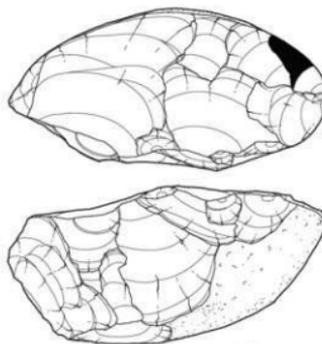
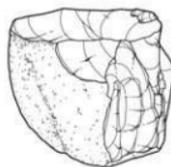
31 石器 (Ch. 598)

凡例

- ▲ △ 石器
- ○ 土器



33 燧石 Ac (Py)



32 石核 No.

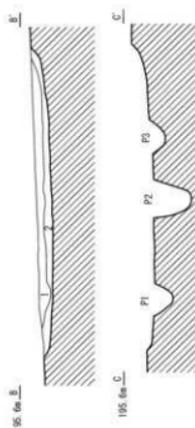
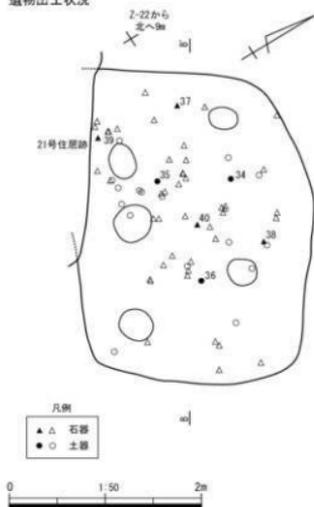


第14図 4号住居跡 遺物出土状況と出土遺物2

遺構図

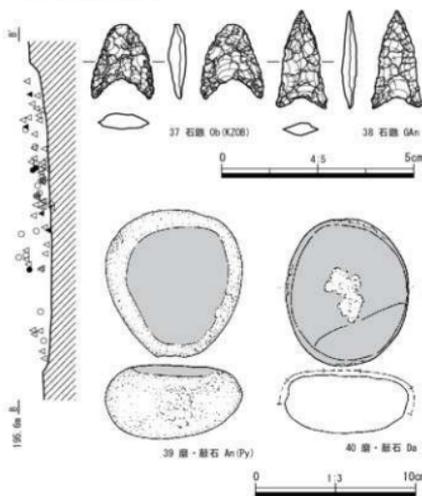
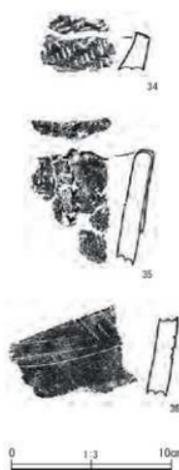


遺物出土状況



- 1 黒褐色(10YR2/3)土層 粘性弱い・粘り有り
数量の程1mm程度の焼土粒。
数量の程1mm程度の炭化物粒が混じる。
- 2 褐色(10YR4/6)土層 粘性有り・粘り有り
数量の程1mm程度の焼土粒。
少量の程5~30mm程度の丸相土塊が混じる。
- 3 暗褐色(10YR2/3)土層 粘性無し・粘り弱い
数量の程1~2mm程度の焼土粒。
少量の程1~20mm程度の丸相土塊。
程1mm程度の炭化物粒が混じる。

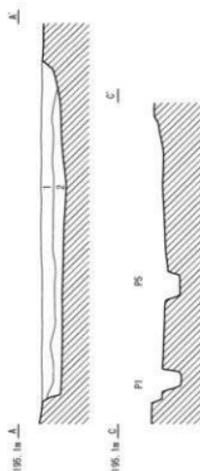
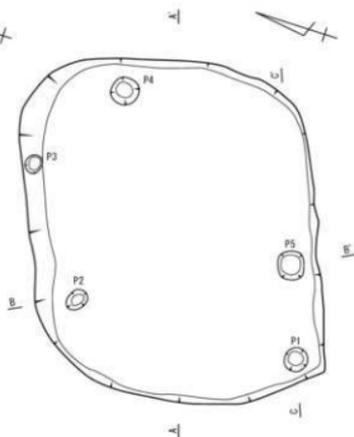
出土遺物



第15図 5号住居跡と出土遺物

遺構図

X-20から
北へ2m
東へ1m



195.1m

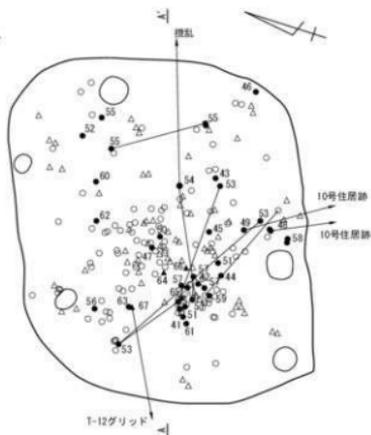


1 褐色(10YR3/4)土層 粘性弱い・練り弱い
F3相当土主体。
微量の径1mm程度の褐色スコリアを含む。

2 褐色(10YR3/2)土層 粘性弱い・練り弱い
微量の径1mm程度の褐色スコリアを含む。

遺物出土状況

X-20から
北へ2m
東へ1m

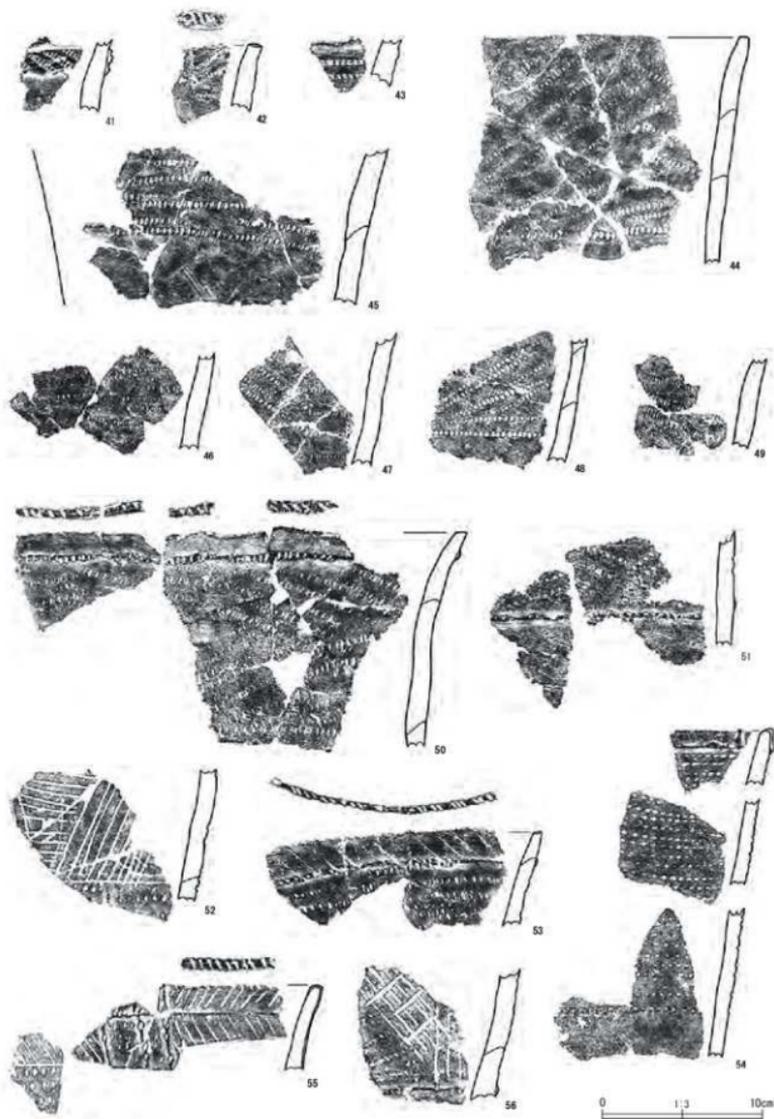


凡例
▲ 石群
● 土群

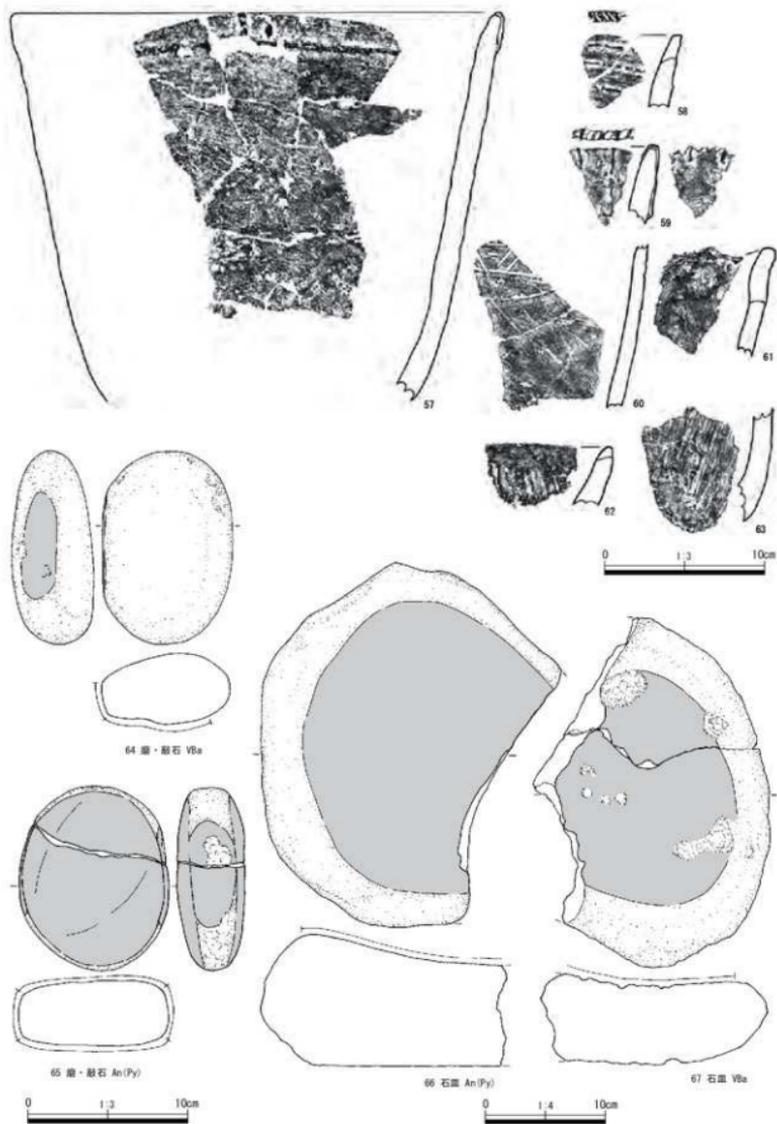


0 1:50 2m

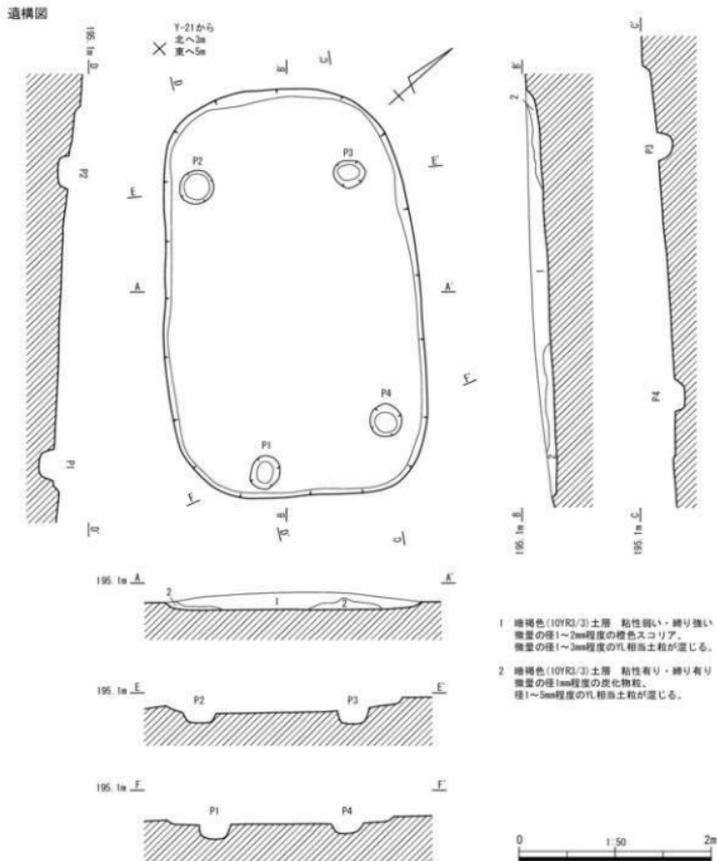
第16図 6号住居跡



第17図 6号住居跡出土遺物 1



第18図 6号住居跡出土遺物 2



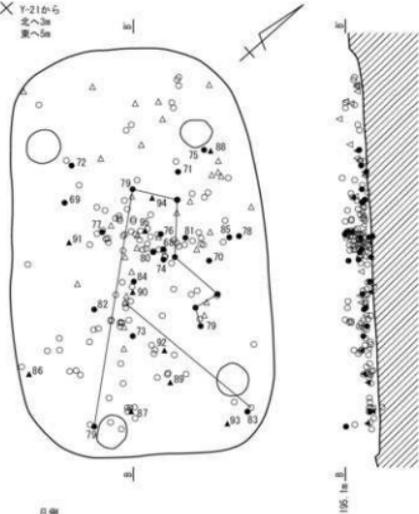
第19図 7号住居跡

ない。覆土の第1層は富士黒土層を主体で遺物も多く含む。第2層との層界にも遺物は多く分布しているが、第2層を貼床として考えるのは困難である。

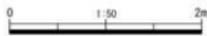
当該住居跡から出土した遺物の点数は、土器148点、石器69点、礫17点を数える。そのうち土器23点、石器4点を図化した。41~63は縄文土器である。41・42は子母口式土器か。前者は胴部資料で、横位に太めの隆帯が認められる。後者は口縁部だけの破片資料である。口唇部と口縁部に絡条体圧痕文が観察される。43~60は第II群2類に分類した清水柳E類土器か。43~49は絡条体圧痕文のみで文様が構成さ

遺物出土状況

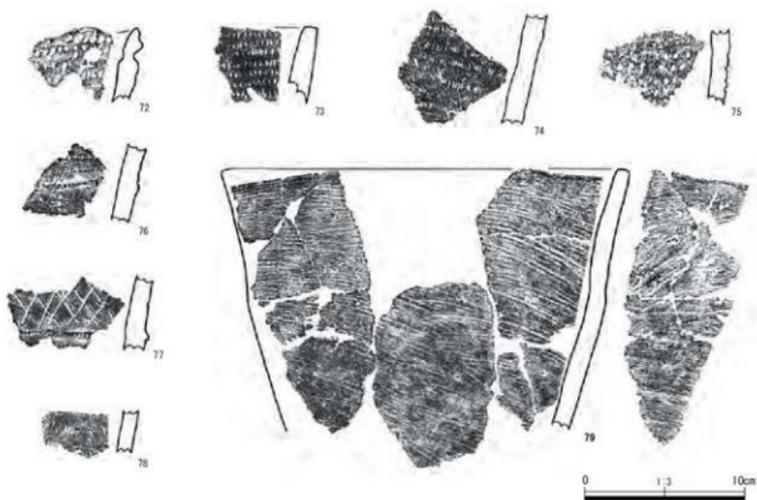
× Y-21から
北へ2m
東へ3m



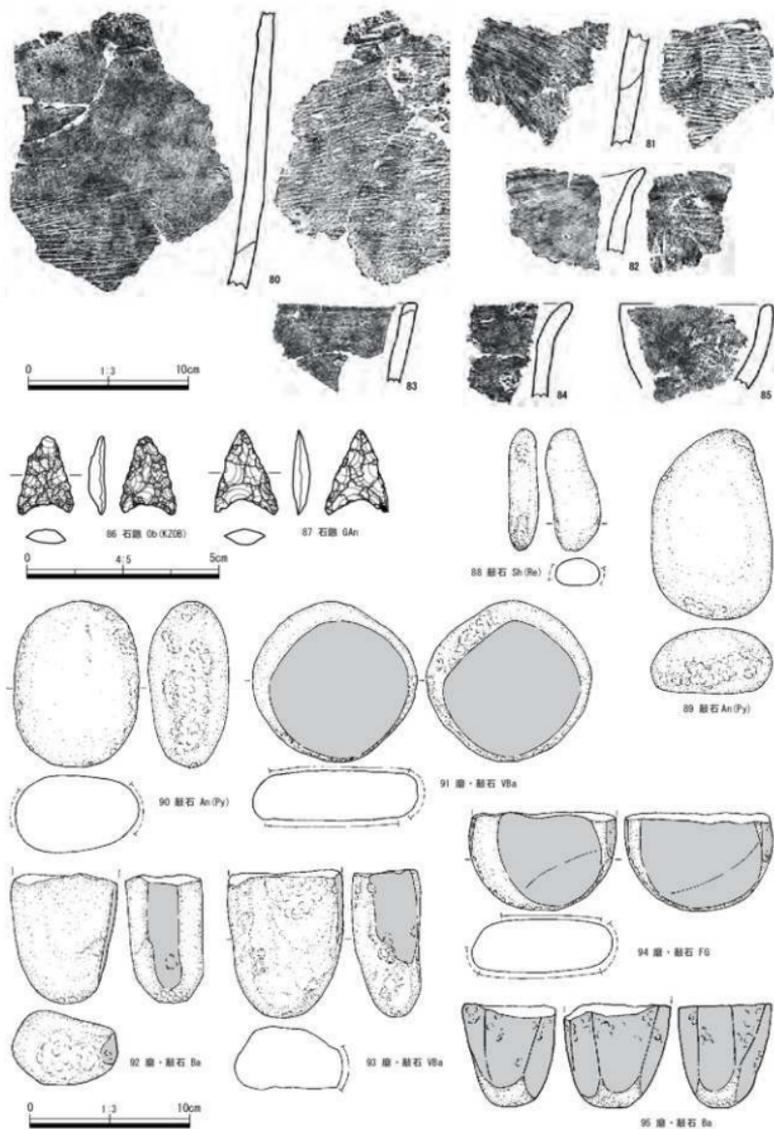
凡例
▲ 石器
○ 土器



出土遺物



第20図 7号住居跡遺物出土状況と出土遺物 1



第21図 7号住居跡出土遺物2

れている。44は口縁部から胴部上半にかけての資料である。口唇部が平坦に仕上げられている。50～51は絡条体圧痕文と細隆起線文で文様が構成されている。50は口縁部から胴部上半にかけての資料である。口唇部に刻目文、口縁部に細隆起線文が横位に1条貼り付けられている。口唇部及び細隆起線文より下に絡条体圧痕文が施されている。51は胴部中心付近の資料か。細隆起線文より上位に絡条体圧痕文が施されている。52は絡条体圧痕文と沈線文で文様が構成されている。横位と斜位に施された沈線文の下位に絡条体圧痕文が施されている。53～56は絡条体圧痕文と細隆起線文、沈線文の3種の文様で構成されている。53は口縁部の資料である。口縁部に細隆起線文、その上位に斜位に施された沈線文、口唇部及び細隆起線文より下に絡条体圧痕文が施されている。54は同一個体と考えられる。55は口唇部に刻目文、口縁部には沈線文を矢羽状に配置し、細隆起線文を3条垂下させている。細隆起線文間及び横位沈線文の直下に絡条体圧痕文が観察される。56は横位の細隆起線文の上位に絡条体圧痕文と沈線文が施されている。57～59は細隆起線文のみで構成される。57は口縁部から胴部下半にかけての資料である。口縁部に横位の細隆起線文を1条、口唇部からも細隆起線文を垂下させている。この57には炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施（IAAA-92019）したところ、 $7,980 \pm 40\text{yrBP}$ 、すなわち縄文時代早期代の ^{14}C 年代が測定されている。58・59は両者とも口縁部のみの破片資料である。口唇部に刻目文か。60は沈線文のみ観察される資料である。61～63は無文土器である。61・62は口縁部のみの資料で、61は波状口縁か。63は尖底であろう。

64～67は石器である。64・65は磨・敲石で、両者とも扁平な円磔を利用している。64は片側側縁にのみ磨面が見られる。66・67は石皿である。よく使い込まれた使用面を持つ。両者とも欠損部がある。石材については64・67が多孔質玄武岩、65・66が輝石安山岩である。

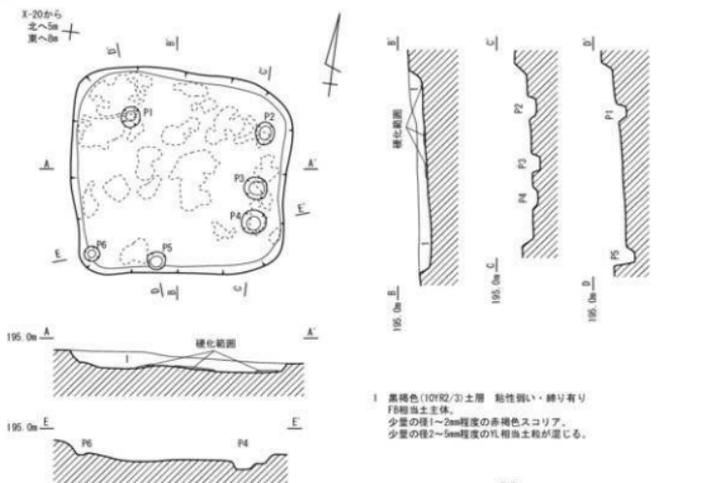
7号住居跡（旧S B23 第19～21図 写真図版18・48・49）

当該住居跡はY-21・22グリッドにて検出した。中央尾根（北）に位置する。住居跡の平面形は隅丸長方形を呈する。遺構の計測値は長さ4.32m、幅2.70m、残存する壁の高さは最高0.18mを測る。住居内には柱穴が4基確認されている。いずれの柱穴も壁際、隅部寄りに位置している。炬穴は確認されていない。覆土の状況から貼床は確認されていない。遺物は覆土第1層に多く含む。

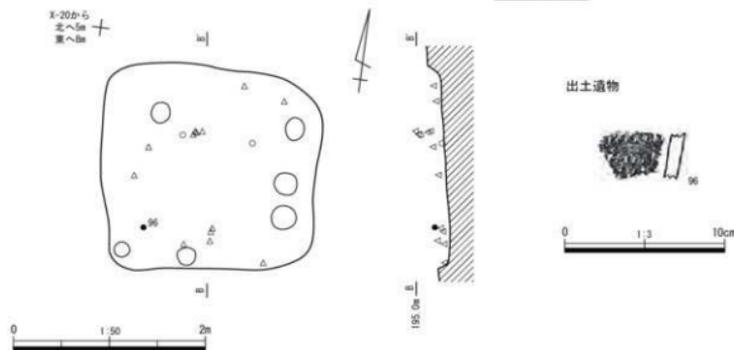
当該住居跡から出土した遺物の点数は、土器145点、石器42点、磔68点を数える。そのうち土器18点、石器10点を図化した。68～85は縄文土器である。68～77は第II群2類の清水柳E類土器か。68～71は絡条体圧痕文のみで文様が構成されている。いずれも絡条体圧痕文は横位に施されている。69・70は口縁部の資料で、波状口縁である。71は穿孔資料である。72は穿孔を試みた痕跡が残るが、未貫通である。71・72両者とも両面からの穿孔である。76は絡条体圧痕文と細隆起線文で文様が構成されている。77は絡条体圧痕文と細隆起線文、沈線文の三者で文様が構成されている。78は型式不明のため第III群とした資料である。先端が割れた棒状の工具で刺突している。79～82は条痕文が観察される資料である。82は内面のみで、それ以外は両面に条痕文が施されている。79は口縁部から胴部下半までの資料である。口唇部は平坦に仕上げられ、胴部中心に屈曲する。82の器厚は薄手に仕上げられている。83～85は無文土器である。85は小型品であろうか。

86～95は石器である。86・87は石鎌である。基部は凹基で、86の石材は神津島恩馳島群の黒曜石、87はガラス質黒色安山岩である。88～90は敲石である。88は片側側縁にのみ、89は両端部を中心に、90は周縁部に敲打痕が観察される。91～95は磨・敲石である。91・94は円盤状の円磔を使用している。92・93・95はいずれも欠損した資料であるが、本来は扁平で棒状の円磔を使用したものであろう。石材については88は赤色頁岩、89・90が輝石安山岩、91・93が多孔質玄武岩、92・95は玄武岩、94は細粒斑レイ岩を使用している。

遺構図



遺物出土状況

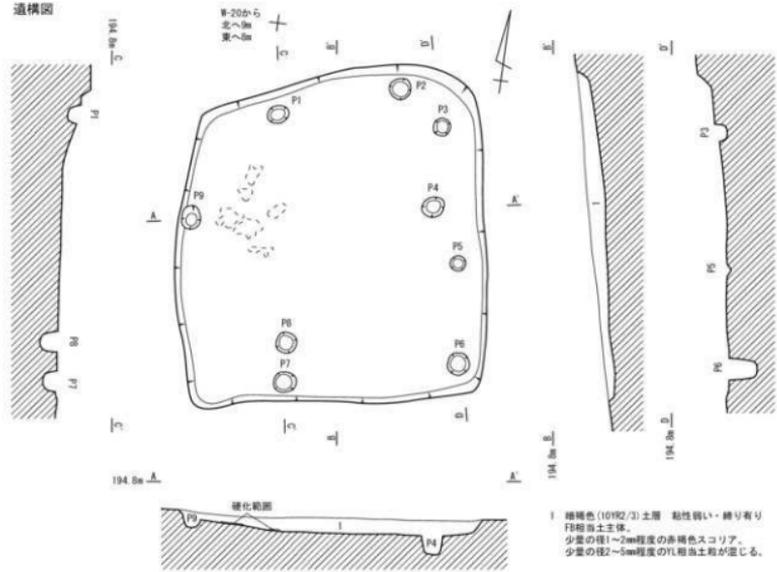


第22図 8号住居跡と出土遺物

8号住居跡(旧S B 09 第22図 写真図版19・49)

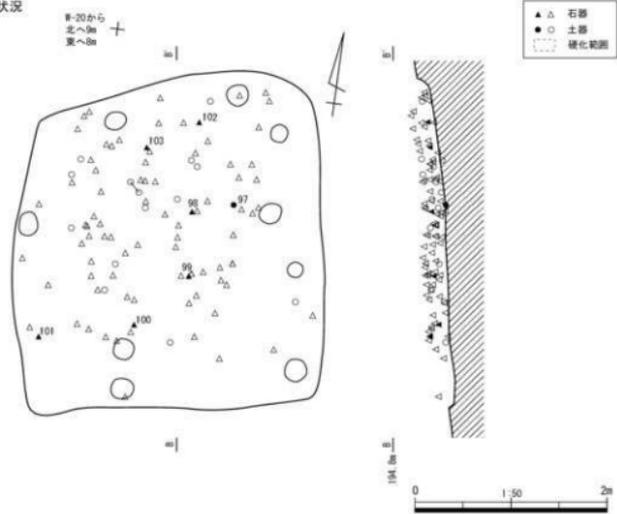
当該住居跡はX-20・21グリッド付近にて検出した。中央尾根に位置する。住居跡の平面形は方形を呈する。遺構の計測値は長さ2.31m、幅2.20m、残存する壁の高さは最高0.13mを測る。住居内には柱穴が6基確認されている。そのうちP5・6は壁中に穿たれ、P1~4は壁から0.1~0.3m程度の間隔を開けている。住居跡の床面には硬化部が散見された。炉跡は確認されていない。覆土の状況から貼床は確認されていない。

遺構図

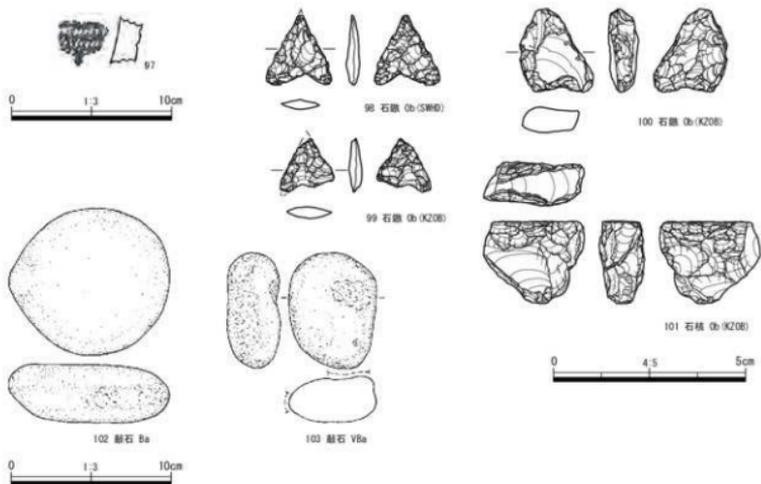


1 雑褐色(10YR2/3)土層 粘性弱い・練り有り
F層当土主体。
少量の粒1~2mm程度の赤褐色スクリア。
少量の径2~5mm程度の丸粒当土粒が定じる。

遺物出土状況



第23図 9号住居跡



第24図 9号住居跡出土遺物

当該住居跡から出土した遺物の点数は、土器3点、石器13点、礫9点を数える。そのうち図化できたのは土器1点である。96は縄文土器である。清水柳E類土器か。横位に絡条体圧痕文を施している。

9号住居跡（旧SB10 第23・24図 写真図版19・49）

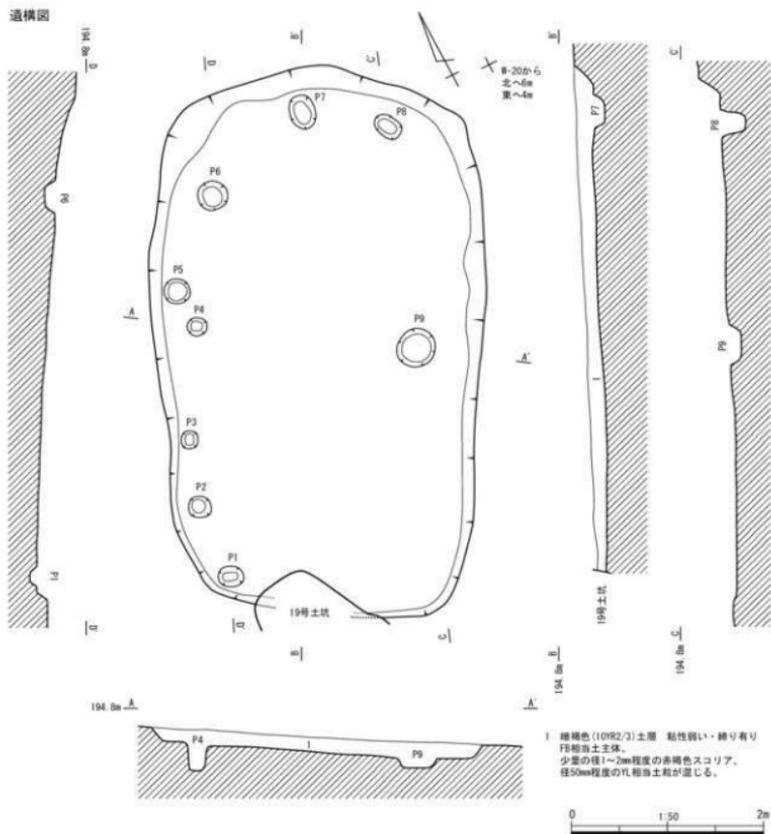
当該住居跡はW-20・21グリッド付近にて検出した。中央尾根（南）に位置し、12号住居跡に近接する。住居跡の平面形は方形を呈する。遺構の計測値は長さ3.65m、幅3.25m、残存する壁の高さは最高0.18mを測る。住居内には柱穴が9基確認されている。P8を除く8基が壁際近くに配されている。住居跡西半部の一部に硬化面が確認されたが、炉跡は未確認である。貼床は確認されていない。

当該住居跡から出土した遺物の点数は土器15点、石器87点、礫22点を数える。そのうち図化できたのは土器1点、石器6点である。97は縄文土器である。清水柳E類土器か。横位に絡条体圧痕文を施している。

98～103は石器である。98・99は石鏃である。凹基である。98は諏訪星ヶ台群、99は神津島恩馳島群の黒曜石である。100は石鏃の未製品か。神津島恩馳島群の黒曜石である。101は石核である。神津島恩馳島群の黒曜石である。102・103は敲石である。103は周縁部に敲打痕が観察される。石材は102が玄武岩、103は多孔質玄武岩を使用している。

10号住居跡（旧SB12 第25～27図 写真図版20・49・50）

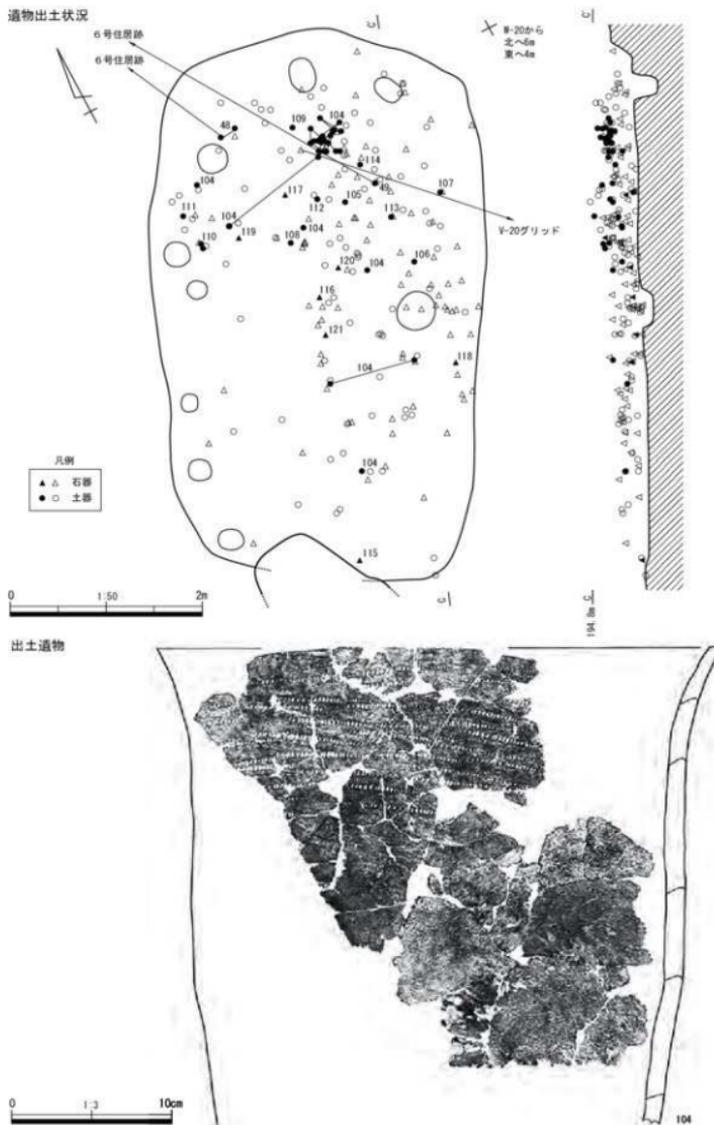
当該住居跡はW-19・20グリッドにて検出した。中央尾根（南）に位置し、19号土坑と重複する。住居跡の平面形は隅丸長方形を呈する。長さ5.83m、幅3.51m、残存する壁の高さは最高0.17mを測る。住居南辺中央部は19号土坑と重複する。住居内には柱穴が9基確認されている。P9を除き8基の柱穴は住居北辺から西辺にかけての壁際に配されている。住居のプランや柱穴の配置は4号住居跡に酷似す



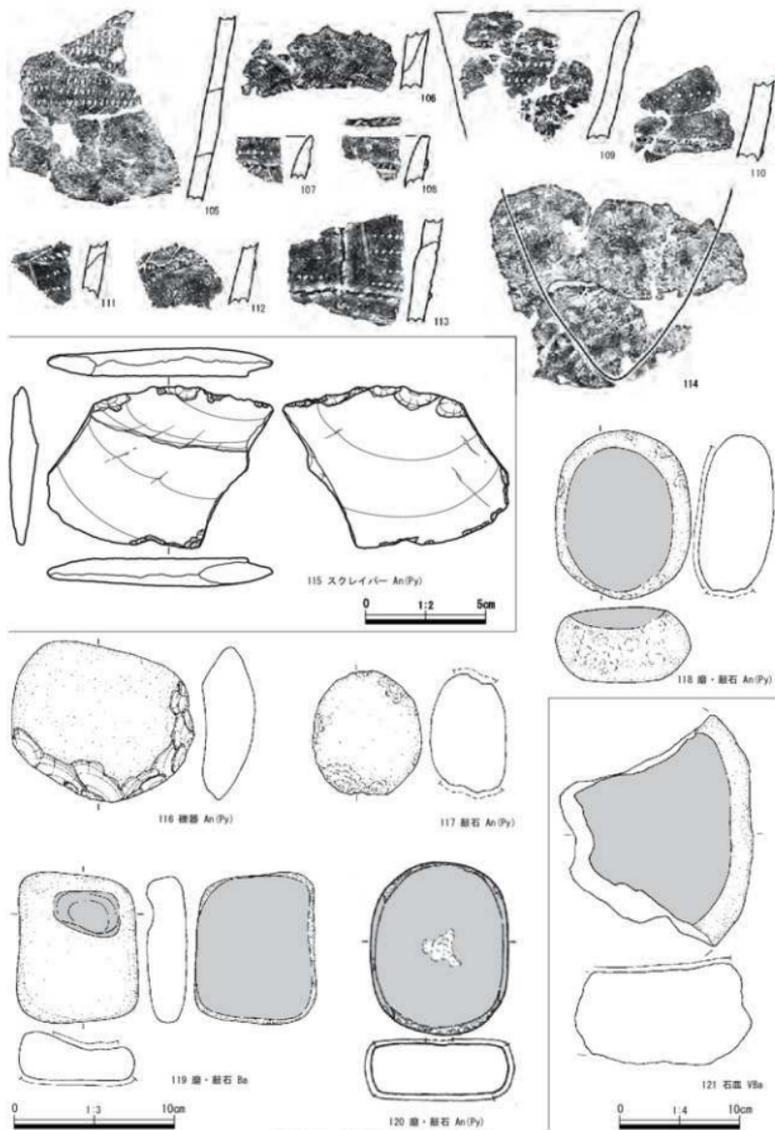
第25図 10号住居跡

る。現地調査時点で当該住居のプランが狭長という点から、居住域の拡張の可能性も想起されたが裏付ける状況は看取できなかった。覆土は富士黒土層を主体としており、炉跡や貼土の存在は確認できなかった。なおこの住居跡は19号土坑と重複しているが、検出状況から土坑よりも時期的に先行する。

当該住居跡から出土した遺物の点数は土器123点、石器96点、礫63点を数える。そのうち図化できたのは土器11点、石器7点である。104~114は縄文土器である。無文土器の114を除き、全て第II群2類の清水柳E類土器か。104~106は絡条体圧痕文のみで文様が構成されている。104は口縁部~胴部下半部にかけての資料である。胴部中部で屈曲、やや直線的に胴部が立ち上がり、口縁部は緩やかに外反させる。口縁部から胴部上位にかけて絡条体圧痕文が観察される。出土位置から判断して遺構内への流れ込みか。107~110は絡条体圧痕文と細隆起線文で文様が構成されている。111は絡条体圧痕文と沈線文で、

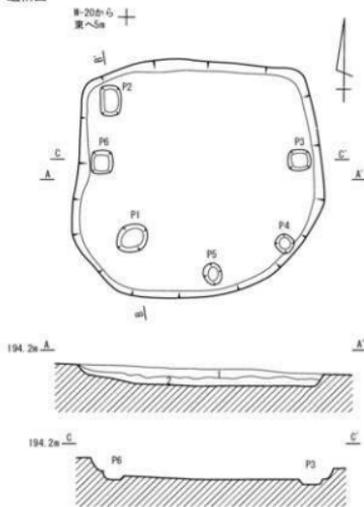


第26図 10号住居跡遺物出土状況と出土遺物 1



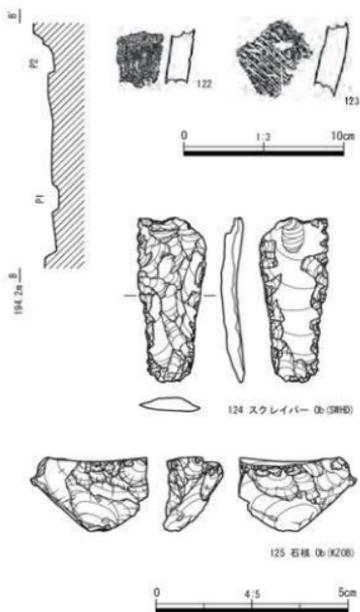
第27図 10号住居跡出土遺物 2

遺構図

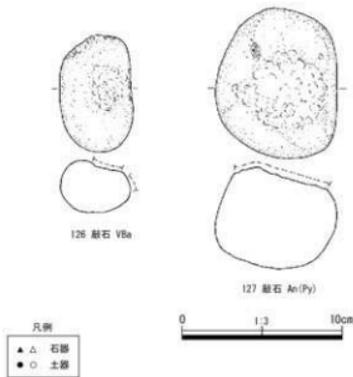
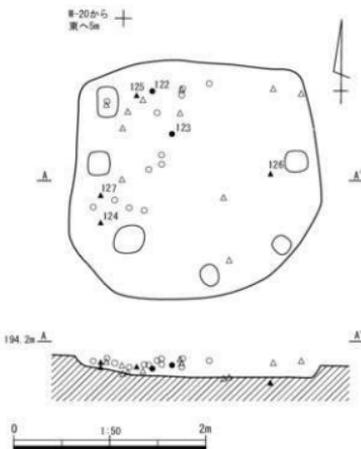


- 1 雑褐色(10YR3/4)土層 黏性有り・練り弱い
砂質粘土主体。少量の径1~2mm程度の赤褐色スコリア、
微量の径1mm程度の炭化物粒が混じる。
- 2 雑褐色(10YR3/4)土層 黏性有り・練り弱い
径1~2mm程度の丸相粘土粒が混じる。

出土遺物



遺物出土状況



- 凡例
- ▲ △ 石器
 - ○ 土層

第28図 11号住居跡と出土遺物

112・113は絡条体圧痕文、細隆起線文、沈線文の三者で文様が構成されている。114は深鉢の底部で、尖底である。なお、104には炭化物が付着していたため放射性炭素年代測定を実施（IAAA-92021）したところ、 $7,660 \pm 40$ yrBP、すなわち縄文時代早期代の ^{14}C 年代が測定された。また今回包含層出土土器719（第Ⅱ群3類）も現地調査時に10号住居跡出土遺物として扱われ、放射性炭素年代測定を実施した出土レベル検討から、包含層出土遺物として判断し、報告している。

115～121は石器である。115はスクレイパーである。縁辺に剥離が見られる。石材は輝石安山岩である。116は礫器である。礫面を打面とし、片刃である。輝石安山岩を石材とする。117は敲石である。楕円形の礫を利用し、長軸端部に敲打痕が顕著に観察される。石材は輝石安山岩である。118～120は磨・敲石類である。いずれも扁平な礫を利用しているが、118・120は楕円形、119は方形の礫を利用している。120は側縁・平坦部も磨跡が明瞭である。石材については118・120が輝石安山岩、119は玄武岩、121は多孔質玄武岩を使用している。

11号住居跡（旧S B14 第28図 写真図版21・50）

当該住居跡はV-20グリッドにて検出した。中央尾根に位置する住居群の中で南側に位置する。また1980年に長泉町教育委員会が実施した調査区に近接する住居跡でもある。調査が実施された住居跡の平面形は北半部が隅丸方形、南半部は隅部が明瞭でないため、円形に近い。一応、隅丸方形としておく。遺構の計測値は長さ2.52m、幅2.62m、残存する壁の高さは最高0.18mを測る。住居内には柱穴が6基確認されている。柱穴は住居北西隅部から間隔をおいて壁際に配置されている。住居北辺及び北東隅部には柱穴跡が認められない。炉跡や貼床の存在は確認できなかった。当該住居跡はまた23号土坑と重複している。時期的には土坑が先行する。

当該住居跡から出土した遺物の点数は土器14点、石器15点、礫14点を数える。そのうち図化できたのは土器2点、石器4点である。122・123は縄文土器である。122は清水柳E類土器か。絡条体圧痕文が横位に施されている。123は型式不明である。先端が削れた棒状の工具で施文か。

124～127は石器である。124はスクレイパーである。剥片の打痕は除かれている。端部は連続して剥離調整を施し、刃部を仕上げている。諏訪屋ヶ台群の黒曜石である。125は石核か。神津島恩馳島群の黒曜石である。126・127は敲石である。両者とも平坦面中央に敲打痕が観察される。石材は多孔質玄武岩・輝石安山岩である。

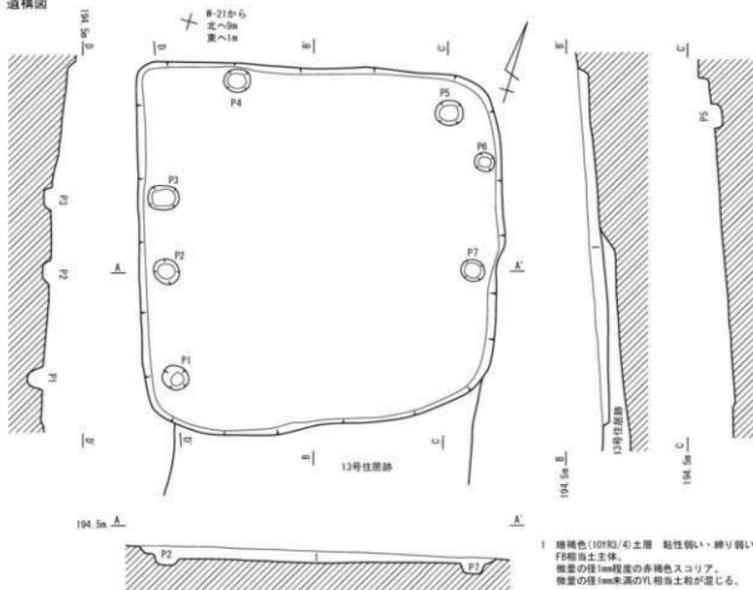
12号住居跡（旧S B13 第29・30図 写真図版20・51）

当該住居跡はW-21グリッド付近にて検出した。中央尾根に位置し、9号住居跡と近接、13号住居跡と重複する。この住居跡の平面形は方形を呈するが南西隅部が丸みを帯びるため、歪な印象を与えている。遺構の計測値は長さ3.93m、幅3.83m、残存する壁の高さは最高0.13mを測る。住居内には柱穴が7基確認されている。これらは住居北東隅部、東辺、西辺、北辺西半の壁際に配置されているが、南辺から南東隅部にかけては柱穴が認められない。炉跡や貼床の存在は確認できなかった。12号住居跡は南半部で13号住居跡と重複する。時期的には13号住居跡が先行する。

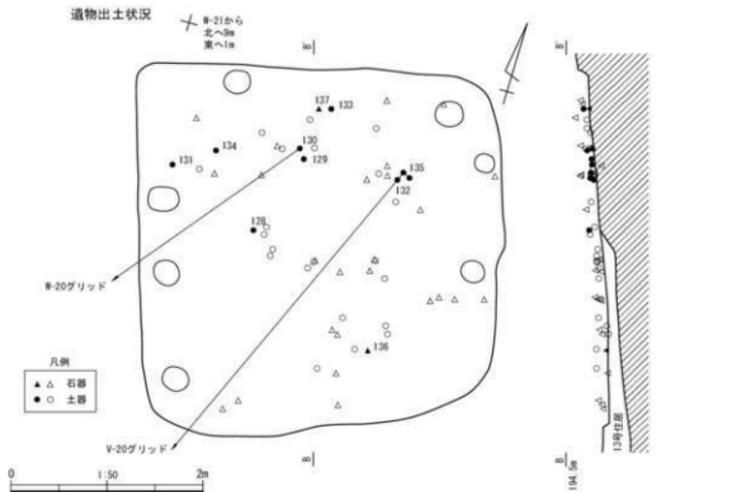
当該住居跡から出土した遺物の点数は土器35点、石器27点、礫29点を数える。そのうち図化できたのは土器8点、石器2点である。128～135は縄文土器である。128～133は清水柳E類土器か。128・129は絡条体圧痕文のみで文様が構成される。130～132は絡条体圧痕文と細隆起線文が施される。3者とも口縁部資料で130は波状口縁、132は穿孔資料である。133は沈線文が観察される。134は条痕文土器か。135は無文土器である。口唇部が平坦に仕上げられている。

136は敲石である。扁平で楕円形の礫を利用し、敲打痕が散見される。137は磨・敲石である。円盤状

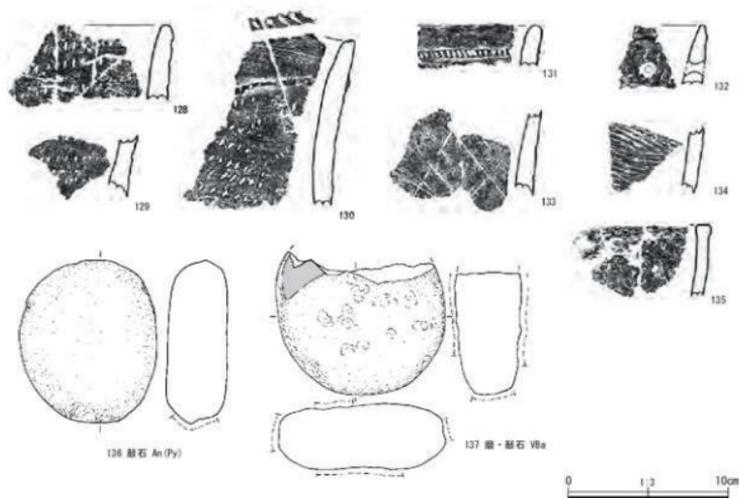
遺構図



遺物出土状況



第29図 12号住居跡



第30図 12号住居跡出土遺物

の扁平な礫を利用し、平坦面に磨痕、敲打痕が明瞭に観察される。石材は前者が輝石安山岩、後者が多孔質玄武岩である。

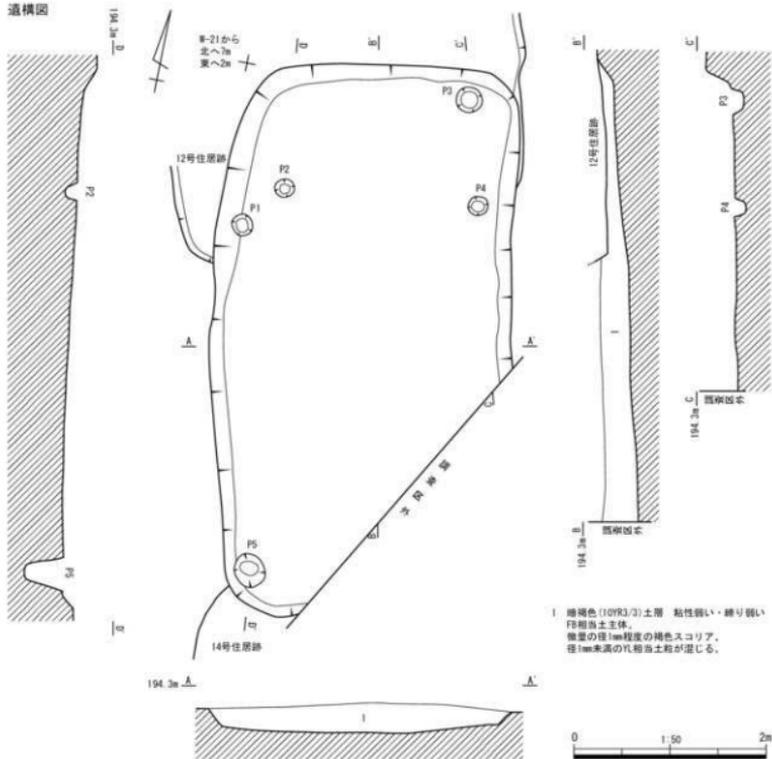
13号住居跡（旧SB15 第31・32図 写真図版22・51）

当該住居跡はW-21グリッド付近にて検出した。中央屋根（南）に位置し、12号住居跡・14号住居跡と重複する。住居跡の平面形は隅丸長方形を呈する。遺構の計測値は長さ5.85m、幅3.23m、残存する壁の高さは最高0.37mを測る。住居南西隅部は調査区外へ広がる。住居内には柱穴が5基確認されている。住居北東隅部に1基、南西隅部に1基、住居西辺中位から北寄りの位置に2基、東辺中位から北寄りの位置に1基確認されている。炉跡や貼床は確認できなかった。この13号住居跡は12号住居跡と重複しているが、13号住居跡が時期的に先行するものと考えられる。また南西隅部は14号住居跡と重複しており、調査の結果、14号住居跡を破壊しているのが確かめられた。従って14号住居跡→13号住居跡→12号住居跡という時期的な変遷が考えられる。

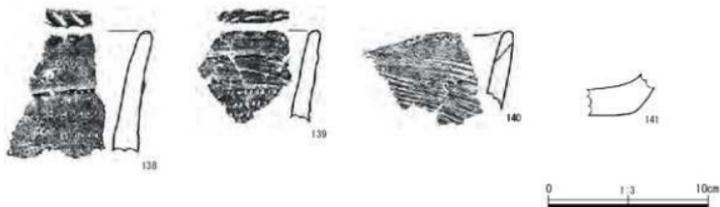
当該住居跡から出土した遺物の点数は土器30点、石器34点、礫22点を数える。そのうち図化できたのは土器4点、石器4点である。138～141は縄文土器である。138・139は清水柳E類土器か。絡条体圧痕文と細隆起線文で文様が構成されており、両者とも口縁部の資料である。口唇部は丸く仕上げられ、刻目文・絡条体圧痕文が観察される。140は条痕文土器である。口縁部の資料である。141は無文土器である。底部のみの資料である。

142～145は石器である。142・143は楔形石器である。両者とも神津島恩馳鳥群の黒曜石である。144・145は磨・礮石である。144は円柱状の礫を利用し、長軸端部に敲打痕が観察され、磨痕と敲打痕との重複は認められない。145は扁平で楕円形を呈する礫を利用し、敲打痕はほぼ中央、磨痕は両側縁にある。石材は輝石安山岩・多孔質玄武岩である。

遺構図

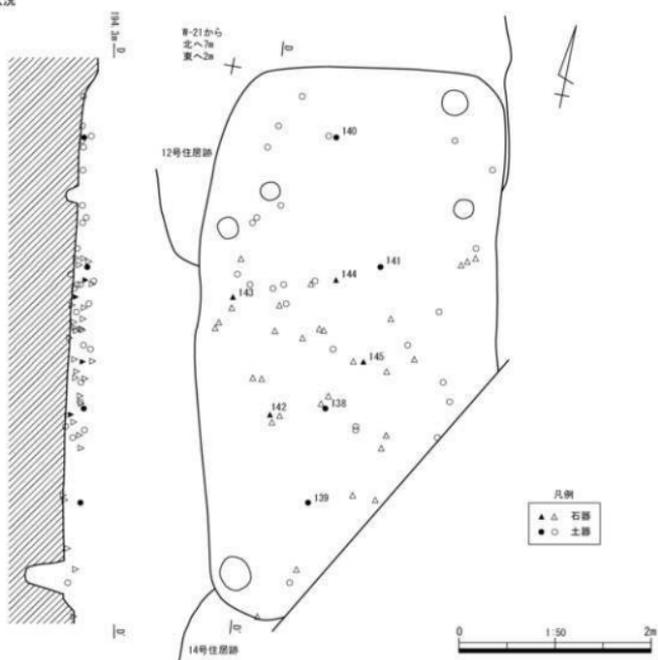


出土土器

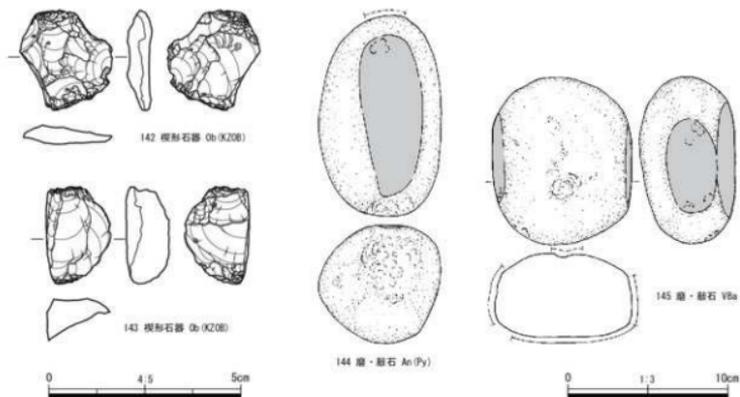


第31図 13号住居跡と出土遺物I

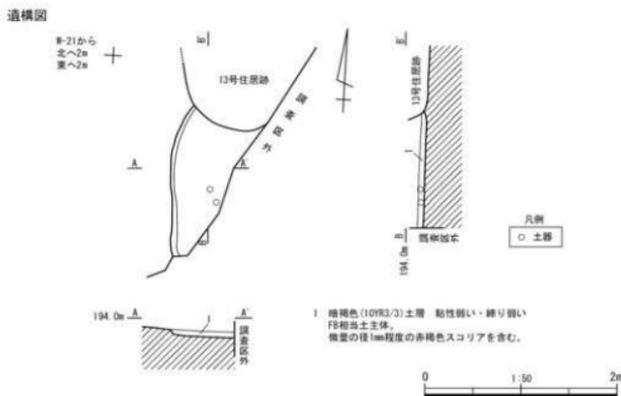
遺物出土状況



出土石器



第32図 13号住居跡遺物出土状況と出土遺物2



第33図 14号住居跡

14号住居跡（旧S B16 第23図）

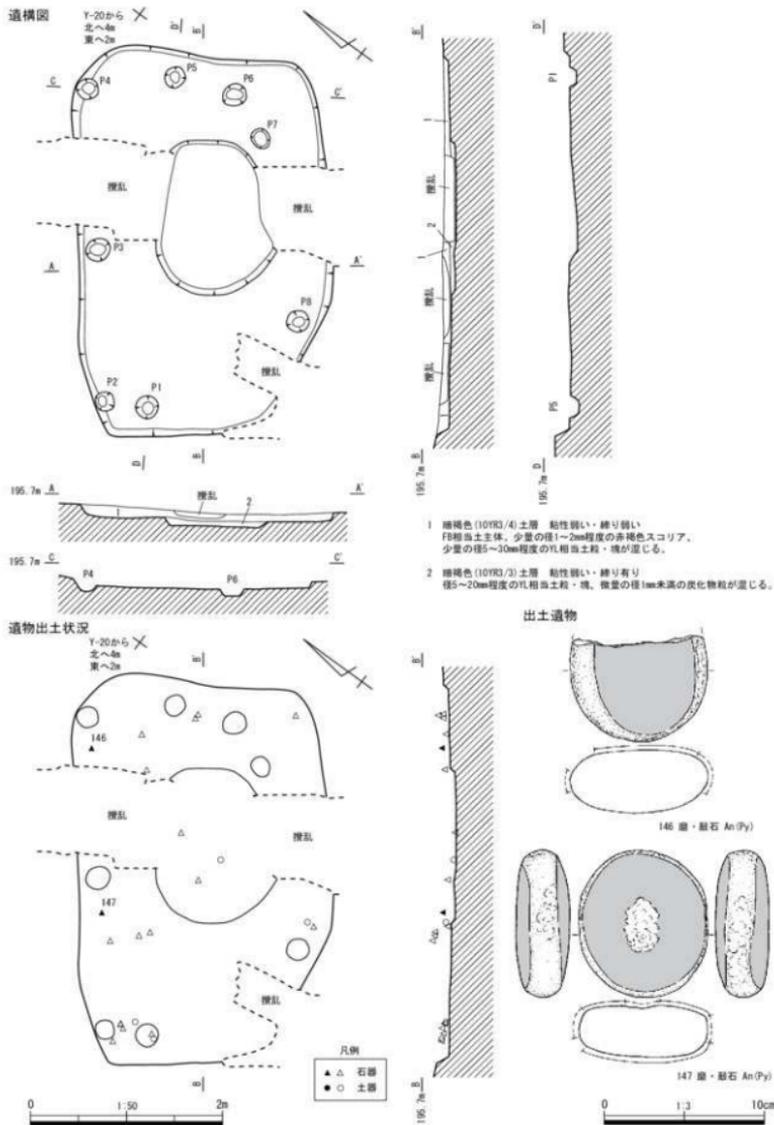
当該住居跡はW-21グリッド付近にて検出した。中央尾根（南）に位置し、調査区外に遺構が広がる。遺構自体が大部分、調査区外に広がり、なおかつ北側は13号住居跡に破壊されているため、住居本来の平面形は全く不明である。残存する遺構の計測値は長さ1.30m、幅0.69m、残存する壁の高さは最高0.06mを測る。住居内には柱穴・貼床・炉跡は確認されていない。なお13号住居跡により破壊されていることから、13号住居跡よりも時期的に先行するものと考えられる。

当該住居跡から出土した遺物の点数は土器2点のみで、図化に耐えうる遺物は無かった。

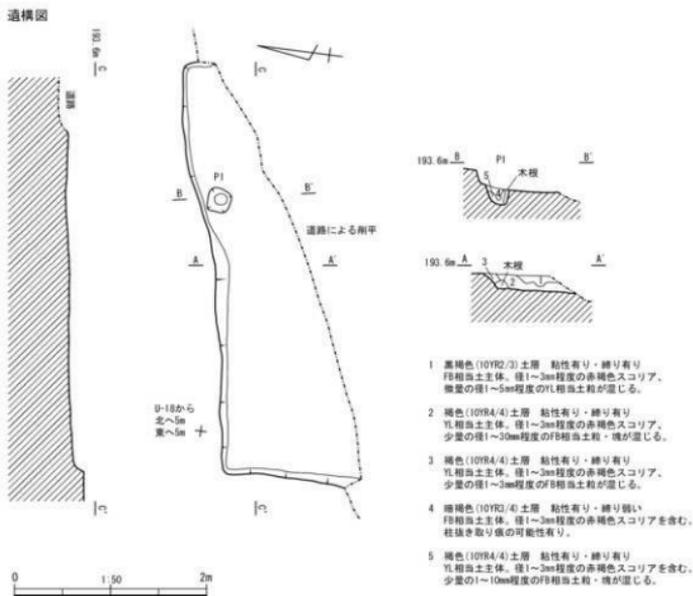
15号住居跡（旧S B06 第34図 写真図版22・51）

当該住居跡はY-19・20グリッド付近にて検出した。中央尾根に位置している。住居跡の平面形は歪な隅丸長方形を呈する。遺構の計測値は長さ4.14m、幅2.72m、残存する壁の高さは最高0.16mを測る。住居跡は中央部を横一文字に重機による攪乱を受けている。住居内には柱穴が8基確認されている。P2・3・4は住居南西隅部・西辺中央部・北西隅部とそれぞれ壁際等で間隔に配置されているが、他の柱穴も壁際と近い位置にあるものの規則性は見出し難い。住居跡中央部には攪乱を受けているものの住居内土坑が確認されている。長さ1.63m、残存幅1.28m、深さは0.08mを測る。平面形は本来、楕円形であったと考えられる。平坦な底面を持つ。被熱による赤色化等は確認できないものの、覆土中に微量の炭化物粒が混じるため、炉跡の可能性もある。

当該住居跡から出土した遺物の点数は土器4点、石器18点、礫8点を数える。そのうち石器2点を図化した。146・147は磨・敲石である。両者とも扁平な円盤状の礫を利用している。146の敲打痕は磨痕と重複しない。147は側縁以外に平坦部の磨痕と敲打痕が重複する。2点とも石材は輝石安山岩である。



第34図 15号住居跡と出土遺物



第35図 16号住居跡

縄文時代早期代の堅穴住居跡

16号住居跡(旧S B 26 第35図)

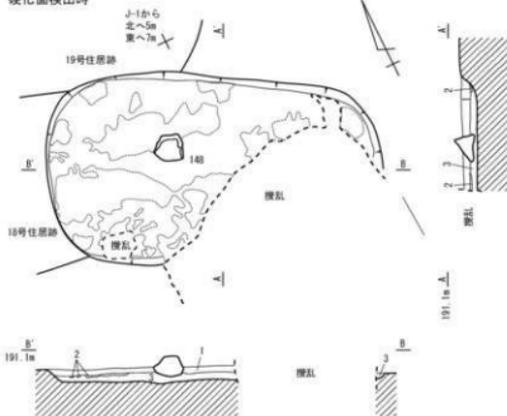
当該住居跡はU-18グリッド付近にて検出した。中央尾根(南)に位置し、中央尾根で確認された堅穴住居跡では南西端に位置する。1980年の長泉町教育委員会による発掘調査の調査区に接し、遺構の大部分は判然としない。残存状況から住居跡の平面形は方形、もしくは長方形と考えられる。遺構の計測値は長さ4.52m、残存幅1.86m、残存する壁の高さは最高0.15mを測る。住居内に柱穴が1基確認されている。炉跡・貼床は確認されていない。

当該住居跡から出土した遺物の点数は土器1点、礫1点のみで、図化に耐え得る資料は無かった。

17号住居跡(旧S B 02 第36図 写真図版23・51)

当該住居跡はJ-1グリッド付近にて検出した。西尾根(北)に位置し、18号住居跡・19号住居跡と重複する。住居跡の平面形は偶丸長方形を呈するが、住居南半部は大きく攪乱を受けている。遺構の計測値は残存長3.50m、残存幅2.05m、残存する壁の高さは最高0.16mを測る。住居内に柱穴が4基確認されている。4基とも壁際に配置され、P1・2は住居西辺際に対する関係である。覆土第1層を除去したところ、硬化面(第2層)が広がるのが判明した。この層と第3層を除去し、住居の掘り方底面を検出している。従って硬化面を住居機能時の生活面とするならば、第3層は住居貼床であった可能性が想起される。住居跡中央部より西寄りの位置には炉跡が確認されているが、これは第3層除去後に確認

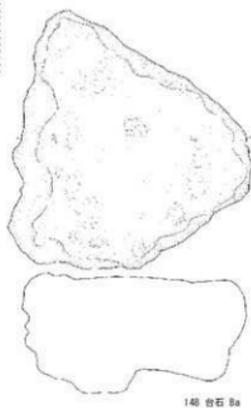
硬化面検出時



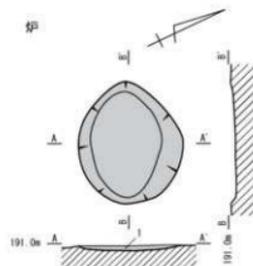
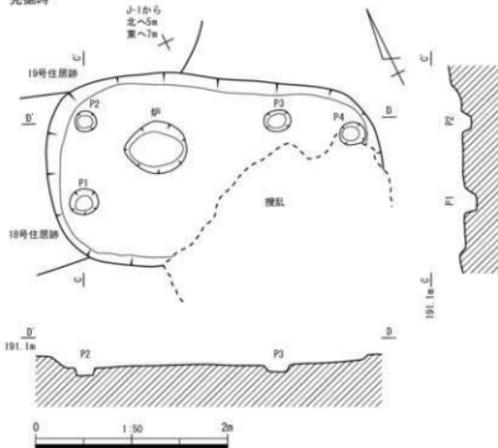
- 1 褐色(10YR4/4)土層 粘性弱い・練り有り
少量の径2~3mm程度の赤褐色スコリア。
少量の径100μm程度の炭化物・硝土粒が混じる。
- 2 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・練り強い
練り練まった径100μm程度の赤褐色スコリア。
微量の径2~3mm程度の炭化物粒。
微量の径300μm程度の硝土粒が混じる。
- 3 褐色(10YR4/4)土層 粘性有り・練り有り
微量の径2mm程度の赤褐色スコリア。
微量の径2~3mm程度の炭化物粒が混じる。



出土遺物



完掘時

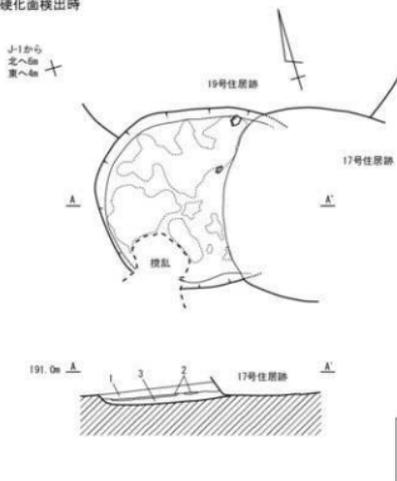


- 1 褐色(7.5YR4/4)土層 粘性弱い・練り有り
少量の径1~3mm程度の硝土。
少量の径1~3mm程度の炭化物粒が混じる。



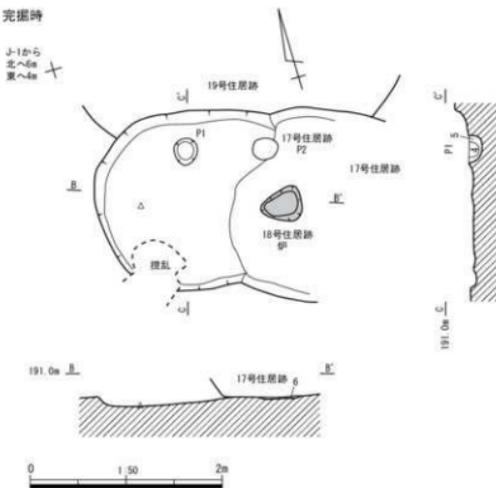
第36図 17号住居跡と出土遺物

硬化面検出時

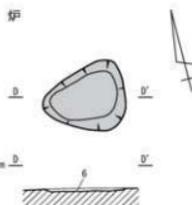


- 1 褐色(10YR4/4)土層 粘性弱い・練り有り
少量の径2~3mm程度の赤褐色スコリア。
少量のYL相当土粒・微量の炭化物粒が混じる。
- 2 暗褐色(10YR2/4)土層 粘性弱い・練り有り
強く練まったYL相当土粒・境が平面的に
検出される。
- 3 褐色(10YR4/4)土層 粘性有り・練り有り
少量のYL相当土粒・炭化物が混じる。

完掘時



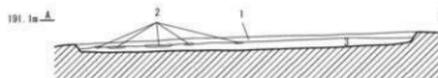
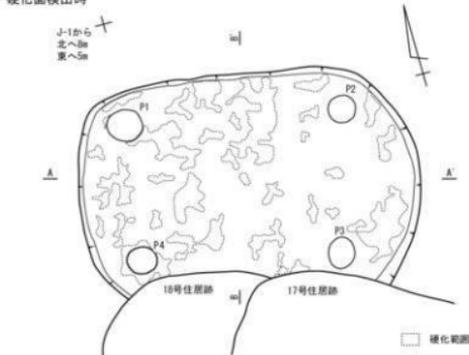
- 18号住居跡 P1
- 4 暗褐色(7.5YR5/6)土層 粘性有り・練り有り
極少量の径1mm程度の赤褐色スコリアを含む。
- 5 褐色(10YR4/4)土層 粘性弱い・練り有り
極少量の径1mm程度の赤褐色スコリアを含む。



- 6 褐色(7.5YR4/4)土層 粘性弱い・練り有り
砂の焼成層。微量の径2~3mm程度の焼土粒。
径2mm程度の炭化物粒が混じる。

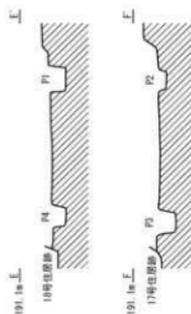
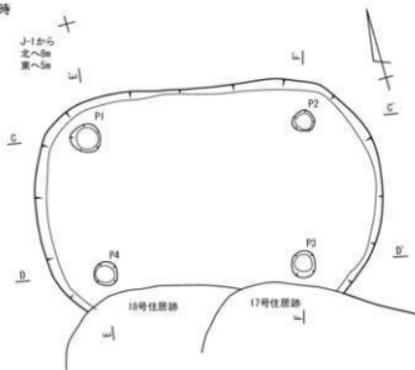
第37図 18号住居跡

硬化面検出時



- 1 暗褐色(10YR2/4)土層 黏性弱い・練り有り
少量の径2~3mm程度の赤褐色スコリア、
微量の黄灰色スコリア、少量の焼土粒・
灰化物が混じる。
- 2 暗褐色(10YR3/4)土層 黏性有り・練り有り
横く結った孔相当土粒・塊が平面的に検出
される。
- 3 褐色(10YR4/4)土層 黏性有り・練り有り
少量の径2~3mm程度の赤褐色スコリアを含む。

完掘時



第38図 19号住居跡

されたものである。第3層上の硬化域と重なり、また土層堆積状況でも第3層上面までつながる炉の遺構線が観察できなかったため、当該住居の最終段階において、この炉は機能していなかった可能性もあることを指摘しておく。覆土第1層上位には礫が集中しており、住居埋没過程の中で礫の投棄がなされていたものと考えられる。なおこの住居跡は18号住居跡及び19号住居跡と重複関係にあるが、その検出状況から19号住居跡→18号住居跡→17号住居跡の順に構築されたものと考えられる。

当該住居跡から出土した遺物の点数は石器1点、礫3点のみで、石器のみ図化した。148は台石である。長さ34.4cm、幅30.1cm、重量は19.7kgを測る。上面は敲打痕が観察される。石材は玄武岩である。住居跡のほぼ中央部、貼床層と考えられた第3層に埋め込まれたように出土している。

なお17号住居跡の炉跡から炭化物が出土している。放射性炭素年代測定を実施（IAAA-92012）したところ、 $8,060 \pm 30$ yrBP、すなわち縄文時代早期代の ^{14}C 年代が測定されている。

18号住居跡（旧S B 03 第37図 写真図版24）

当該住居跡はJ-1グリッドにて検出した。西尾根（北）に位置している。住居跡の平面形は上記の17号住居跡により破壊されているため判然としないが、その検出状況から楕円形であった可能性がある。当該住居跡が重複する17号住居跡と同じ主軸方向であったと仮定すれば、遺構の計測値は残存長1.83m、幅1.89m、残存する壁の高さは最高0.17mを測る。柱穴は1基のみ確認された。この住居跡に属するとも考えられる炉跡は重複した17号住居跡調査時に確認されている。この18号住居跡は調査時に第1層を除去したところ、17号住居跡と同様、硬化面（第2層）が広がることが判明した。この層と第3層を除去したところ、住居跡の掘り方底面が検出された。従って硬化面を住居機能時の生活面とするならば、第3層は住居貼床であった可能性が想起される。なおこの住居跡は17号住居跡及び19号住居跡と重複関係にある。その検出状況から19号住居跡→18号住居跡→17号住居跡の順に構築されたものと考えられる。

当該住居跡から出土した遺物の点数は石器1点、礫2点のみで、図化に耐え得る資料は無かった。

19号住居跡（旧S B 04 第38図 写真図版24）

当該住居跡はJ-1グリッド付近にて検出した。西尾根（北）に位置し、17号住居跡・18号住居跡と重複している。住居跡の平面形は隅丸長方形を呈する。遺構の計測値は長さ3.55m、残存する壁の高さは最高0.13mを測る。この住居跡は南辺を17号住居跡及び18号住居跡により破壊されている。残存幅は2.41mである。住居跡からは柱穴が4基確認された。4基とも住居跡の隅部付近に配置されている。炉跡は確認されていない。覆土第1層を除去したところ、17号住居跡・18号住居跡と同様、硬化面（第2層）が広がることが判明した。この層と第3層を除去し、住居跡の掘り方底面が検出されている。従って硬化面を住居機能時の生活面とするならば、第3層は住居貼床であった可能性が想起される。なおこの住居跡は17号住居跡及び18号住居跡と重複関係にある。前述したように、その検出状況から19号住居跡→18号住居跡→17号住居跡の順に構築されたものと考えられる。

当該住居跡から出土した遺物の点数は礫3点のみである。図化に耐え得る資料は無かった。

縄文時代前期の竪穴住居跡

20号住居跡（旧S B 01 第39・40図 写真図版25・52）

当該住居跡はA A-21グリッドにて検出した。中央尾根（北）に位置し、住居跡の標高値は約195.7mを測り、検出された住居跡群では最も高い位置にある。住居跡の平面形はT P 09で破壊されており判然としないが、その残存状況は歪な隅丸方形か定まらぬ多角形のものである。遺構の計測値は長さ3.15m、残存幅2.09m、残存する壁の高さは最高0.21mを測る。住居内から柱穴が3基確認された。3基と

も住居壁際、もしくは壁中に配置されている。炉跡や貼床は確認されていない。

当該住居跡から出土した遺物は土器65点、石器32点、礫31点を数える。そのうち土器6点、石器6点を図化した。149～153は縄文土器である。無文土器と考えられる153を除き、全て第IV群1類に分類した木鳥式土器か。149aは口縁部である。口唇部は平坦に仕上げられ、刺突文が観察される。他の資料にも刺突文が観察されるが、150には横位に施された刺突文の下位に細線文がわずかに観察される。無文土器である153は胴部を直線的に立ち上げ、口唇部は丸く仕上げている。

154～159は石器である。154・155は石鏃である。両者とも凹基で諏訪屋ヶ台群の黒曜石である。156は石錐である。両面から調整を加えて錐部を仕上げている。157は石核である。156・157両者とも神津島恩馳島群の黒曜石である。158は磨・敲石である。扁平で長楕円形の礫を利用したものである。長軸端部等に敲打痕、平坦面や側縁に磨痕が観察される。石材は多孔質安山岩である。159は石皿である。磨痕が上面に観察される。輝石安山岩である。

21号住居跡(旧S B 18 第41・42図 写真図版26・52・53)

当該住居跡はZ-21・22グリッド付近にて検出した。中央尾根(北)に位置し、5号住居跡と重複する。住居跡の平面形は隅丸長方形を呈する。遺構の計測値は長さ4.18m、幅3.38m、残存する壁の高さは最高0.22mを測る。柱穴は4基確認された。対で確認されたP1とP4の柱間距離は0.88m、P3及びP4の柱間距離は1.83mを測り、4基を結ぶ線は台形を描く。ただしP1は住居北壁付近に設けられた段状施設、床面の硬化面(第6層)と重複するため、柱穴としての機能について一考を要する。硬化面は住居中央部に位置する炉跡を中心に広がり、さらにその上に炭化物を含むロームと富士土層の混合土(第4層)が堆積している。硬化面の下に貼床である第7層が認められる。炉跡の平面形は楕円形を呈し、遺構の計測値は長径0.74m、短径0.44m、深さ0.06mを測り、貼床である第6・7層上面で検出されている。住居跡南東部は5号住居跡と重複する。検出状況から5号住居跡の方が時期的に先行するものであろう。

当該住居跡から出土した遺物の点数は土器32点、石器61点、礫23点である。そのうち土器6点、石器3点を図化した。160～165は縄文土器である。160は木鳥式土器か。刺突文が施されている。161は清水ノ上Ⅱ式土器・上の坊式土器か。波状口縁で口唇部には刺突文を施し、平坦に仕上げている。口縁部に刺突文を3条、横位に施している。162a・bは第IV群4類に分類した岡山式土器か。同一個体と考えられ、注口が設えられている。縄文はLRLか。163も縄文が施されたものだが型式は判然としなない。黒浜Ⅰ式並行土器の可能性もある。165は清水柳E類土器か。波状口縁で絡条体圧痕文が施されている。

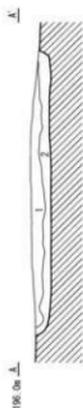
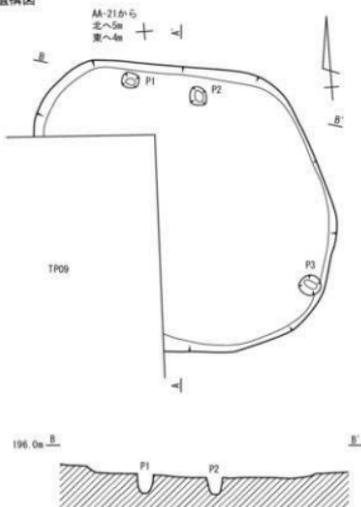
166～168は石器である。166は敲石である。円球状の礫を利用している。167・168は磨・敲石である。167は円柱状の礫を利用し、顕著な磨痕が三面観察される。断面は三角形状である。168は両側縁に磨痕・敲打痕が観察される。これらの石材は3点とも輝石安山岩である。

22号住居跡(旧S B 25 第43図 写真図版27・53)

当該住居跡はA A-22・23グリッド付近にて検出した。中央尾根(北)に位置し、6号炉跡と近接する。住居跡の平面形は歪な隅丸長方形である。遺構の計測値は長さ2.92m、幅1.97m、残存する壁の高さは最高0.18mを測る。住居内からは柱穴、炉跡は確認できなかった。覆土は第1層のみ確認したが、土器・礫等の出土状況から貼床であった可能性が想起される。

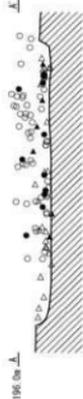
当該住居跡から出土した遺物の点数は土器18点、石器33点、礫39点を数える。そのうち土器2点、石器4点を図化した。169・170は縄文土器である。169は第IV群2類の清水ノ上Ⅱ式土器・上の坊式土器に該当か。口縁部から胴部上半の資料である。刺突文列が横位に3条施されている。胴部は直線的に立

遺構図



- 1 暗褐色 (10YR3/2) 土層 粘性有り・締り有り
 円相土主体。
 少量の径2~3mm程度の赤褐色スコリア。
 少量の径1~2mm程度の炭化物粒が混じる。
- 2 黄褐色 (10YR5/6) 土層 粘性有り・締り強い
 少量の径2mm程度の炭土粒、径30mm程度の
 YL相土塊が混じる。

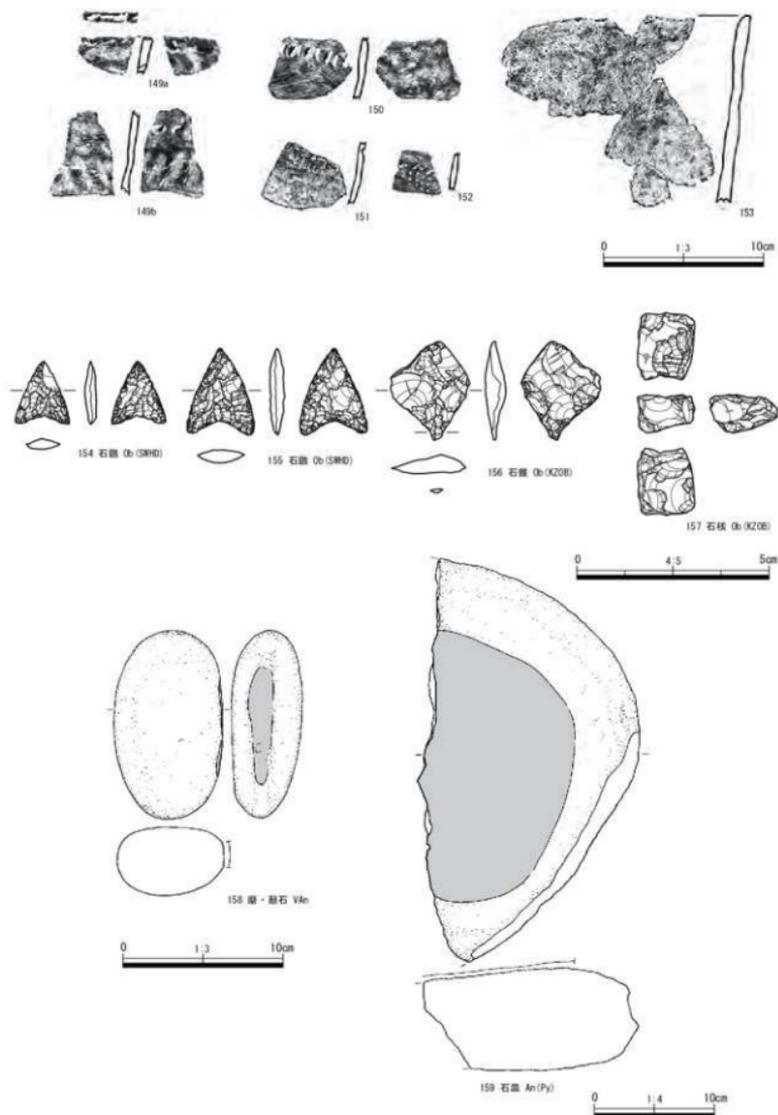
遺物出土状況



- 凡例
- ▲ △ 石器
 - ○ 土器

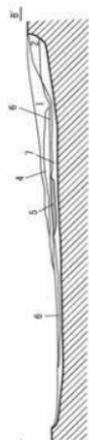
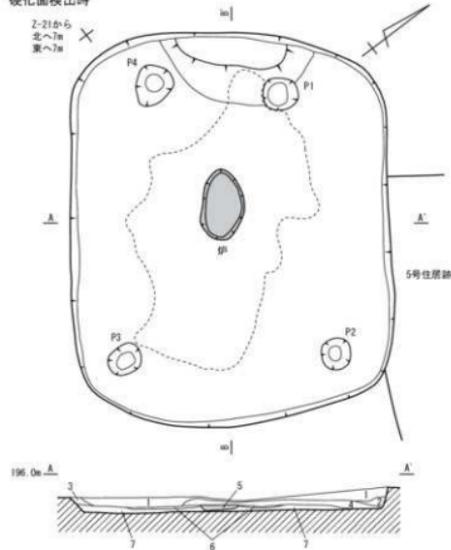


第39図 20号住居跡



第40図 20号住居跡出土遺物

硬化面検出時

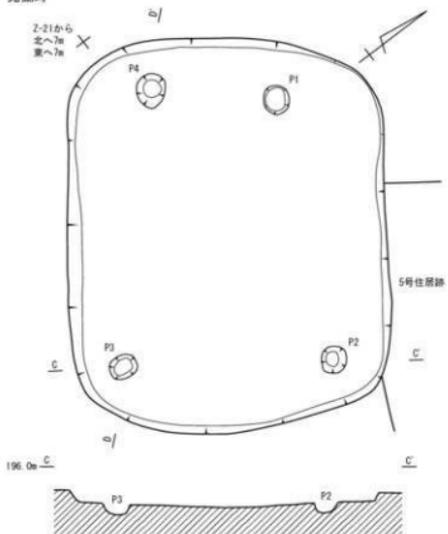


- 1 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・締り有り
少量の径2mm程度の褐色スコリア、
少量の径1mm程度の炭化物、
少量の径1mm程度の炭化植物が混じる。
- 2 褐色(10YR4.6)土層 粘性有り・締り有り
径3mm程度の丸相当地塊が混じる。
- 3 暗褐色(10YR2/4)土層
粘性有り・締り有り
- 4 暗褐色(10YR2/4)土層 粘性無し・締り有り
丸相当地とFB相当地の混合土。
微量の径1mm程度の炭化植物。
径10~50mm程度の丸相当地塊が混じる。
- 5 赤暗褐色(10YR3.6)土層 粘性無し・締り有り
炉の焼成層。
径1~5mm程度の焼土粒。
微量の径1mm程度の炭化植物が混じる。
- 6 暗褐色(10YR2/4)土層 粘性無し・締り強い
微量の径5mm程度の炭化植物。
径10mm程度の丸相当地塊が混じる。
丸相当地とFB相当地の混合土。
- 7 暗褐色(10YR2/4)土層 粘性無し・締り有り
微量の径5mm程度の炭化植物。
径10mm程度の丸相当地塊が混じる。
丸相当地とFB相当地の混合土。

凡例



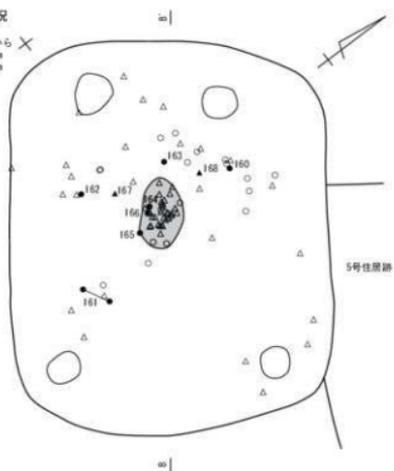
完掘時



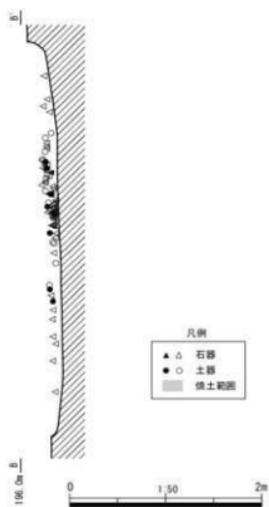
第41図 21号住居跡

遺物出土状況

Z-21a-6
北へ加
東へ加

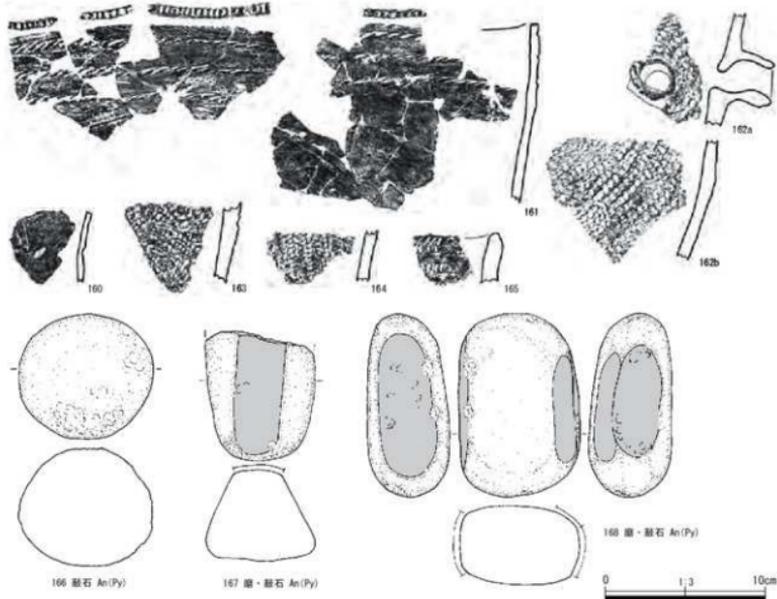


5号住居跡



- 凡例
- ▲ 石層
 - 土層
 - 焼土範囲

出土遺物

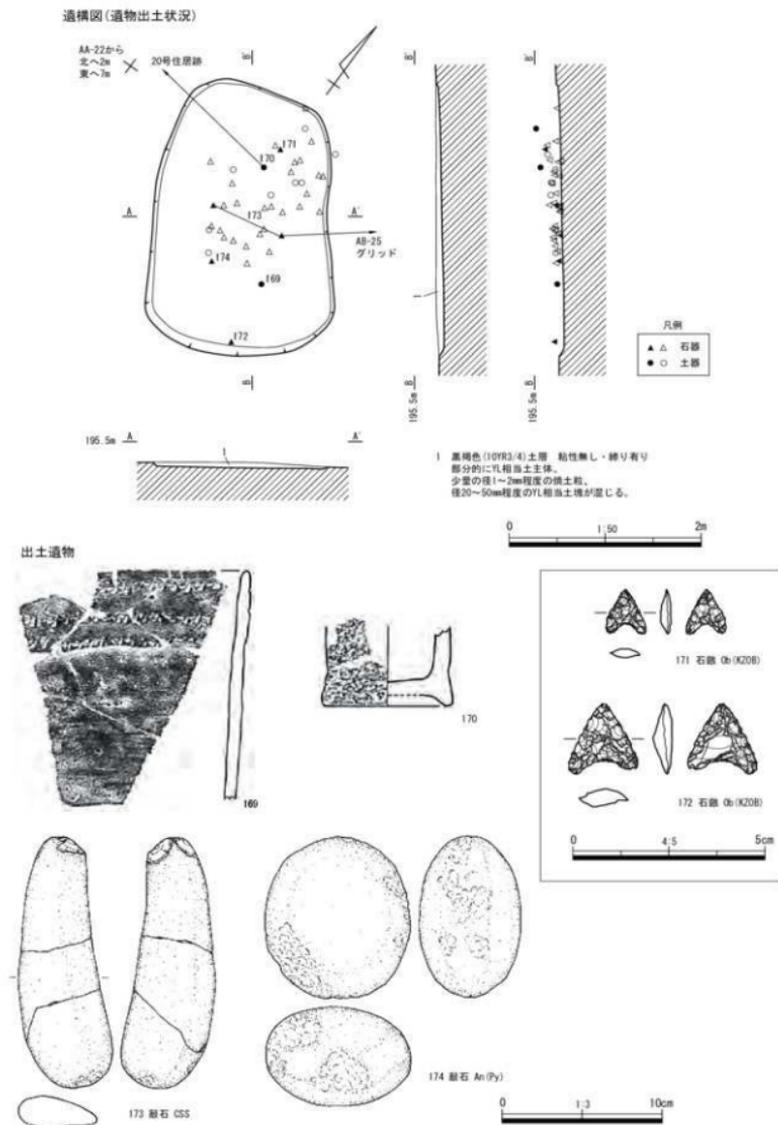


166 磁石 An(Py)

167 磨・磁石 An(Py)

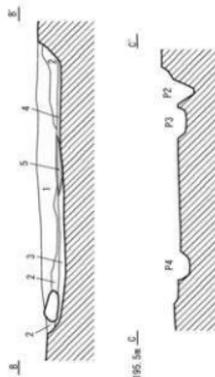
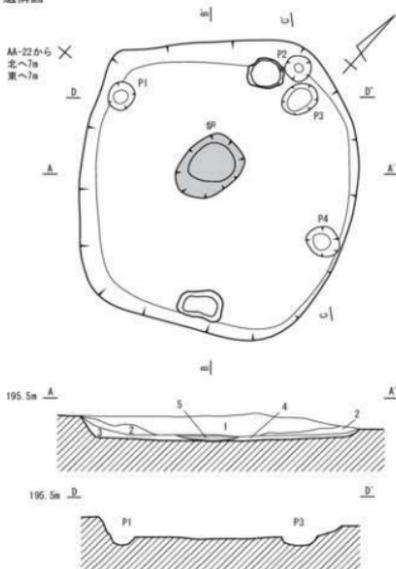
168 磨・磁石 An(Py)

第42図 21号住居跡遺物出土状況と出土遺物



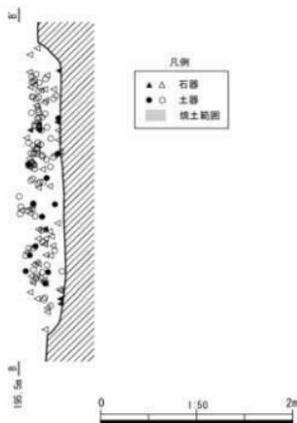
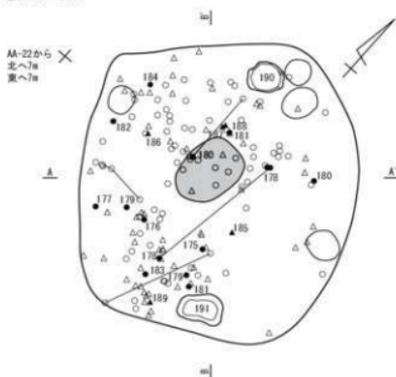
第43図 22号住居跡と出土遺物

遺構図

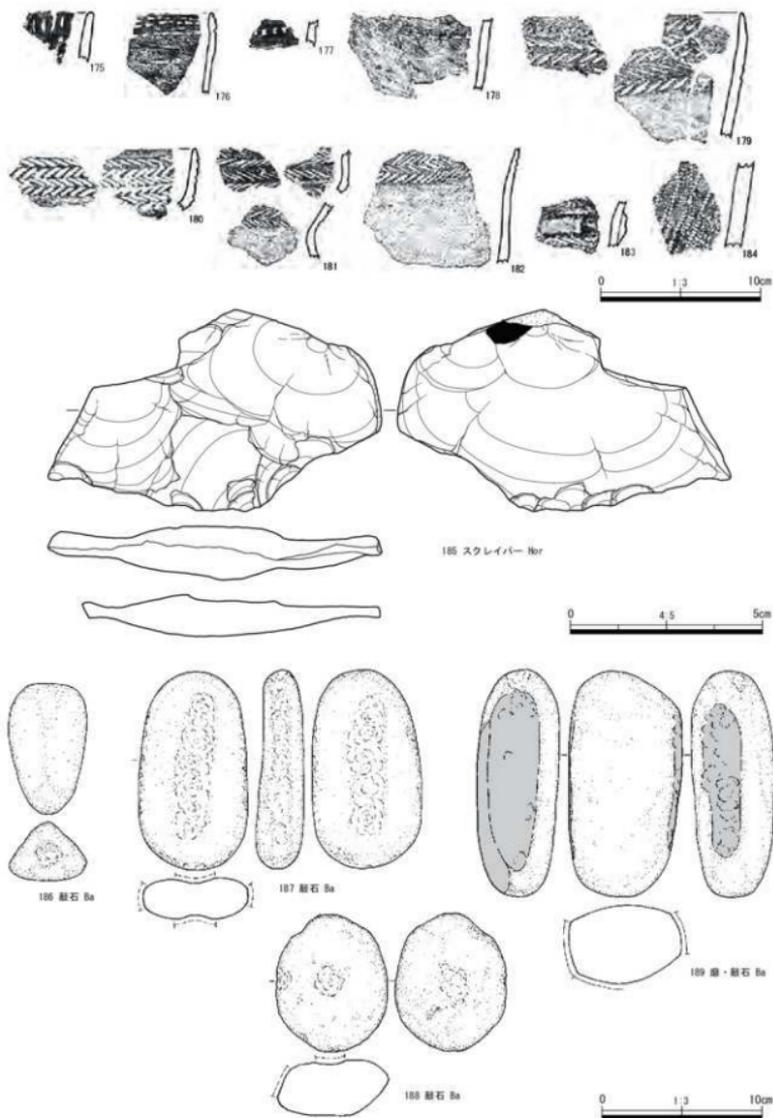


- 1 黒褐色(10YR2/2)土層 粘性弱い・締り有り
少量の径1mm程度の炭土粒。径1mm程度の炭化植物粒。
微量の径10~30mm程度のYL相当土塊が混じる。
- 2 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・締り有り
少量の径1~2mm程度の炭土粒。
少量の径5~30mm程度のYL相当土塊が混じる。
- 3 暗褐色(5YR2/1)土層 粘性無し・締り弱い
少量の径3~10mm程度の炭土粒・塊。
微量の径1mm程度の炭化植物粒が混じる。
- 4 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・締り強い
YL相当土とY相当土の混合土。
径5~30mm程度のYL相当土塊が混じる。
- 5 暗褐色(5YR2/1)土層 粘性無し・締り弱い
少量の径3~10mm程度の炭土粒・塊。
微量の径0.5mm~1mm程度の炭化植物粒が混じる。
炉床はよく焼けている。

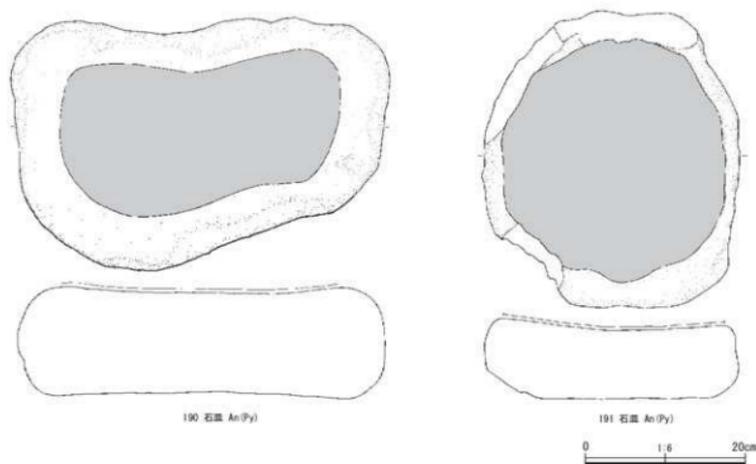
遺物出土状況



第44図 23号住居跡



第45図 23号住居跡出土遺物 1



第46図 23号住居跡出土遺物 2

ち上がる。170は底部のみの資料で上げ底状である。関山式並行土器か。

171~174は石器である。171・172は石鏃である。両者とも凹基で神津島恩馳島群の黒曜石である。173・174は敲石である。扁平で細長い礫を利用し、長軸両端部に敲打痕が観察される。174はやや扁平・楕円形の礫を利用したもので、側縁を中心に敲打痕が観察される。石材は粗粒砂岩・輝石安山岩を使用している。

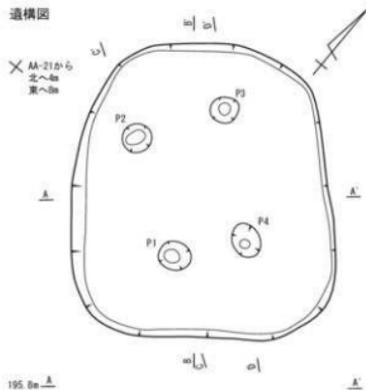
23号住居跡（旧S B 21 第44~46図 写真図版28・53・54）

当該住居跡はAA-22・23グリッド付近にて検出した。中央尾根に位置する住居跡群の中で北端に位置する。住居跡の平面形は方形に近いが、東辺が大きく膨らむため多角形状にも見える。遺構の計測値は長さ3.17m、幅2.91m、残存する壁の高さは0.27mを測る。住居内から柱穴は4基確認した。いずれも壁際、壁中に設けられている。住居跡の中央部に炉跡が1基検出された。炉跡の平面形は楕円形を呈する。遺構の計測値は長径0.75m、短径0.55m、深さは0.08mを測る。この炉跡が覆土第3層上面で検出されたことにより、第3・4層は貼床と理解される。

当該住居跡から出土した遺物の点数は土器96点、石器65点、礫71点を数える。そのうち土器10点、石器7点を図化した。175~184は縄文土器である。型式名が判然としない184を除き、清水ノ上Ⅱ式土器・上の坊式土器か。このうち文様が横位の刺突文で構成されるのが175~178である。これらのうち176には炭化物が付着しており、放射性炭素年代測定を実施（IAAA-92024）した。その結果、 $5,850 \pm 30$ yrBP、すなわち縄文時代前期前葉の ^{14}C 年代が測定されている。179~182は刺突文を矢羽状に傾けて施す文様構成が観察される。183には横位に細隆起線文、浮線文か。

185~191は石器である。185はスクレイパーか。ホルンフェルスの剥片を利用したもので、上端部には礫面を残す。186~189は敲石、磨・敲石である。敲石である186は三角柱状の礫を利用している。長軸下端部に敲打痕が観察される。187・188は扁平で楕円形の礫を利用している。187は両平坦面・側面に、

遺構図

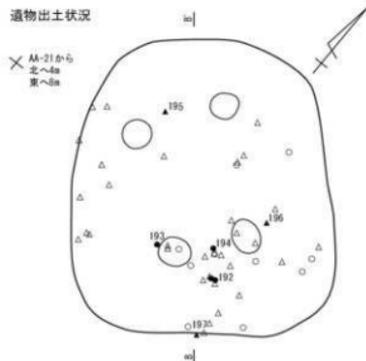


195 8m



1 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性弱い・練り強い
少量の径1mm程度の炭土粒、径10~30mm程度のVL相当土塊、
微量の径3mm程度の炭化物粒が混じる。

遺物出土状況



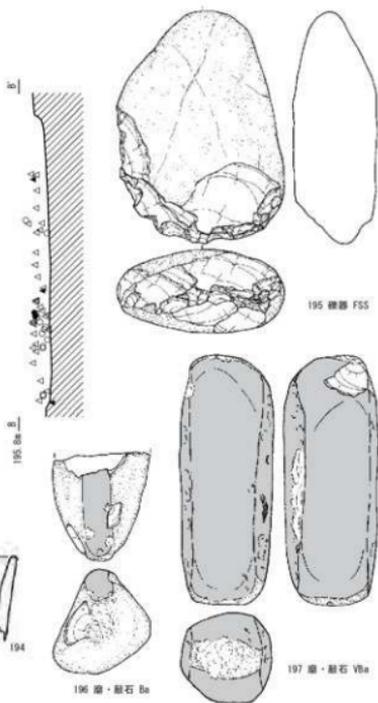
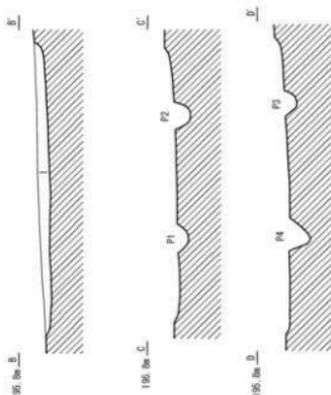
0 1:50 2m

凡例
▲ △ 石器
● ○ 土器

出土遺物



0 1:3 10cm



第47図 24号住居跡と出土遺物

188は平坦部に敲打痕が観察される。磨・敲石である189はやや扁平な円柱状の礫を利用している。以上4点の石材は玄武岩である。190・191は石皿である。2点とも輝石安山岩で、よく使い込まれた面が観察される。

24号住居跡（旧S B 24 第47図 写真図版26・54）

当該住居跡はA A-21・22グリッド付近にて検出した。中央尾根（北）に位置し、前期代の住居跡である20号住居跡・23号住居跡、25号住居跡が付近に展開する。住居跡の平面形は隅丸方形であるが、北辺と南辺の長さがやや異なるため、台形様な外観を呈する。遺構の計測値は長さ3.15m、幅2.75m、残存する壁の高さは最高0.13mを測る。住居内から柱穴が4基確認されている。いずれも壁際ではなく、住居跡中心部寄りに配置されている。住居内には炉跡は確認されていない。調査時の見解から覆土第1層は貼床であった可能性がある。

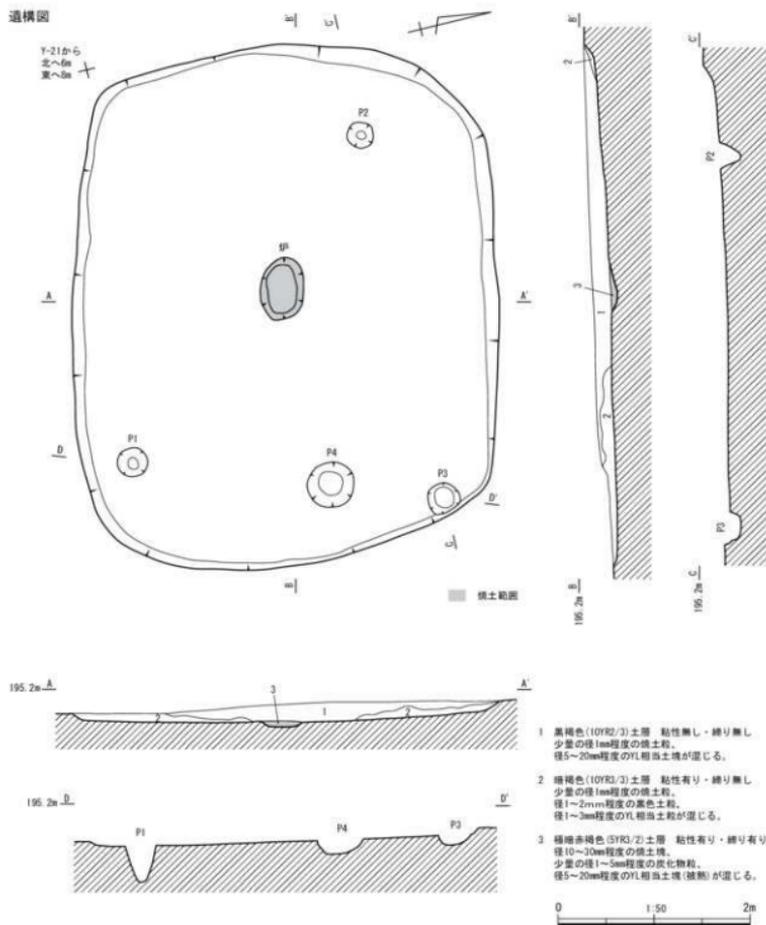
当該住居跡から出土した遺物の点数は土器18点、石器35点、礫16点を数える。そのうち土器3点、石器3点を図化した。192～194は縄文土器である。192・193は清水ノ上Ⅱ式土器・上の坊式土器か。口縁部に刺突文が施されている。194は第VI群に分類した。195～197は石器である。195は礫器である。扁平な細粒砂岩礫を利用している。刃部は両面から剝離調整を行い、両刃に仕上げている。石材は細粒砂岩である。196・197は磨・敲石である。196は欠損品であるが、本来は三角柱状の礫か。磨痕は明瞭で三面観察できる。長軸下端部に敲打痕が認められる。197は長めの円柱状の礫を利用している。磨痕は明瞭に各面に観察できる。敲打痕は長軸端部にも観察される。石材は玄武岩・多孔質玄武岩である。

25号住居跡（旧S B 22 第48～51図 写真図版29・55・56）

当該住居跡はY-21・22グリッド付近にて検出した。中央尾根（北）に位置している。住居跡の平面形は隅丸長方形を呈する。遺構の計測値は長さ5.55m、幅4.45m、残存する壁の高さは最高0.20mを測る。今回で確認された竪穴住居跡の中では最も大きい。この住居内から柱穴が4基確認されている。炉跡は住居跡中央部に1基確認している。貼床は確認できなかった。

当該住居跡から出土した遺物の点数は土器140点、石器82点、礫11点を数える。そのうち土器21点、石器11点を図化した。198～217は縄文土器である。198～211は第IV群2類清水ノ上Ⅱ式土器・上の坊式土器である。198は口縁部から胴部中位の資料である。刺突文列が横位に3条施されている。波状口縁か。199は口縁部から胴部上半にかけての資料である。波状口縁で波頂部に棒状工具で抉りを入れ、なおかつ突起を作り出している。口唇部には刻目文が観察される。口縁部には198よりも傾斜し、間隔も密に刺突文が3条施されている。その下位には細い粘土紐を貼り付けた後に、指頭でつまむことで刻目状に仕上げている。この199は胴部を直線的に立ち上げ、この粘土紐付近で屈折・直立させている。202は198～201と比較して刺突文の長さが短く、直立した半月状を呈している。また203の刺突文は横臥した半月状を呈している。204は口縁部に細かな刺突文列が2条観察される。206～210は刺突文を矢羽状に施している。206は口縁部から胴部上半の資料である。胴部と口縁部との境は段状をなし、口縁部には刺突文列を矢羽状に6条施している。口唇部は刻目文が施されている。口縁部と胴部との境が器形で観察されるのは208も同様である。この208には炭化物が付着しており放射性炭素年代測定を実施（IAA-92026）したところ、5,620±40yrBP、すなわち縄文時代前期前葉の¹⁴C年代が測定されている。211a及びbは同一個体と考えられる。204と同様の細かな刺突文と細長い刺突文の2種で文様が構成されている。212～214は諸磯b式土器か。212は胴部、213・214は底部の資料である。三者とも地文を縄文とし、浮線文を施している。215～217は198～214とは異なり、胎土に繊維を多く含むため黒浜式の可能性もあるが、型式が判然としないため第VI群に分類した。

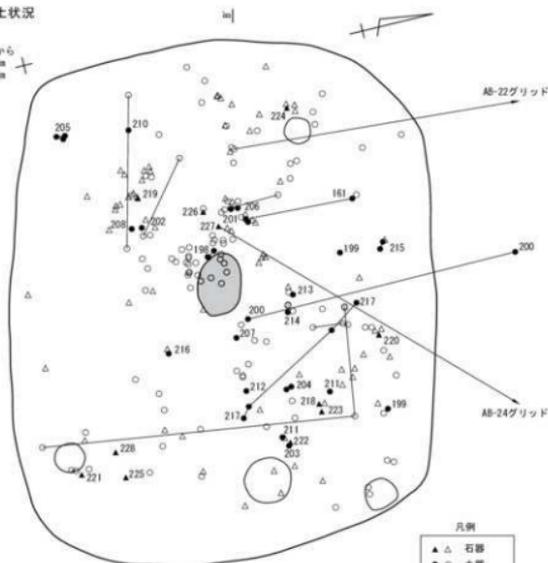
遺構図



第48図 25号住居跡

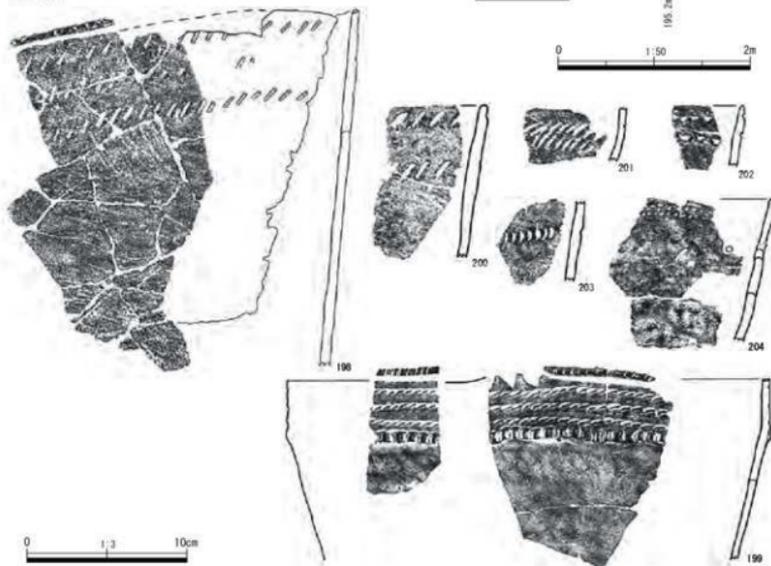
遺物出土状況

Y-21から
北へ6m
東へ8m

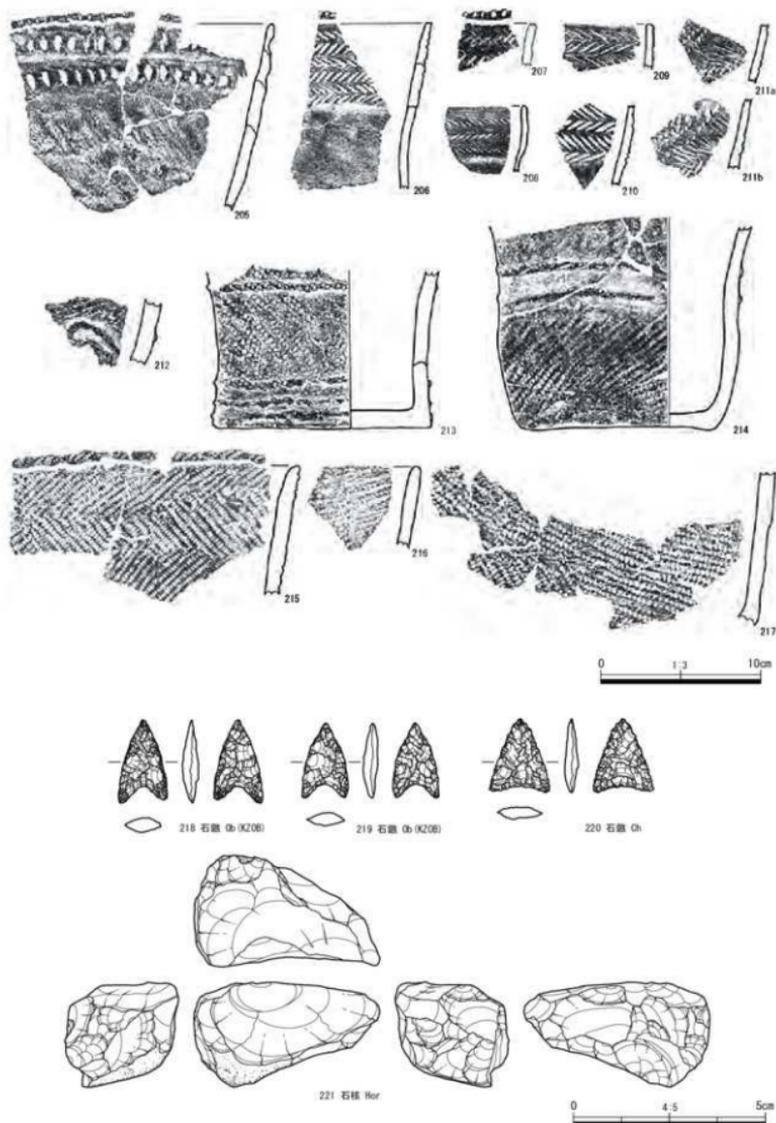


- 凡例
- ▲ △ 石器
 - ○ 土器
 - 出土範囲

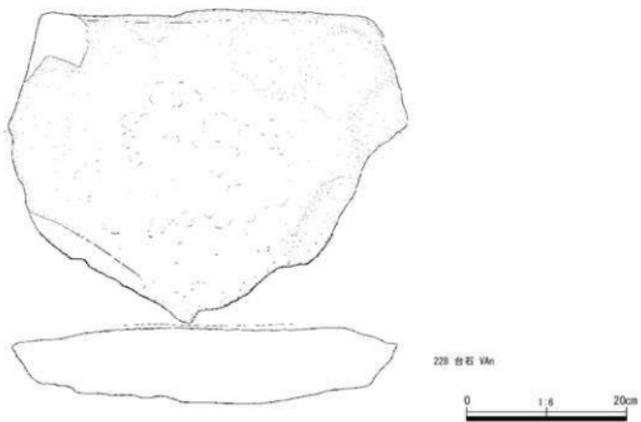
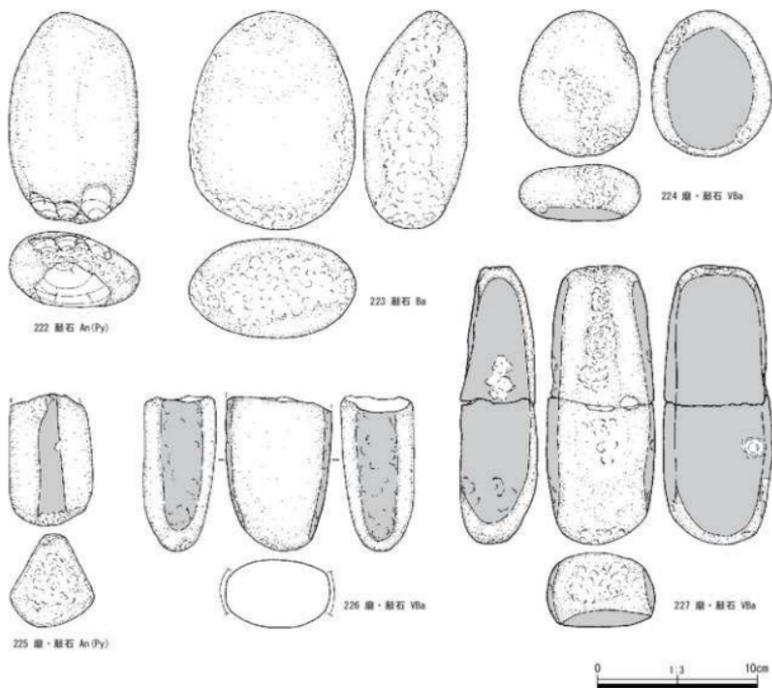
出土遺物



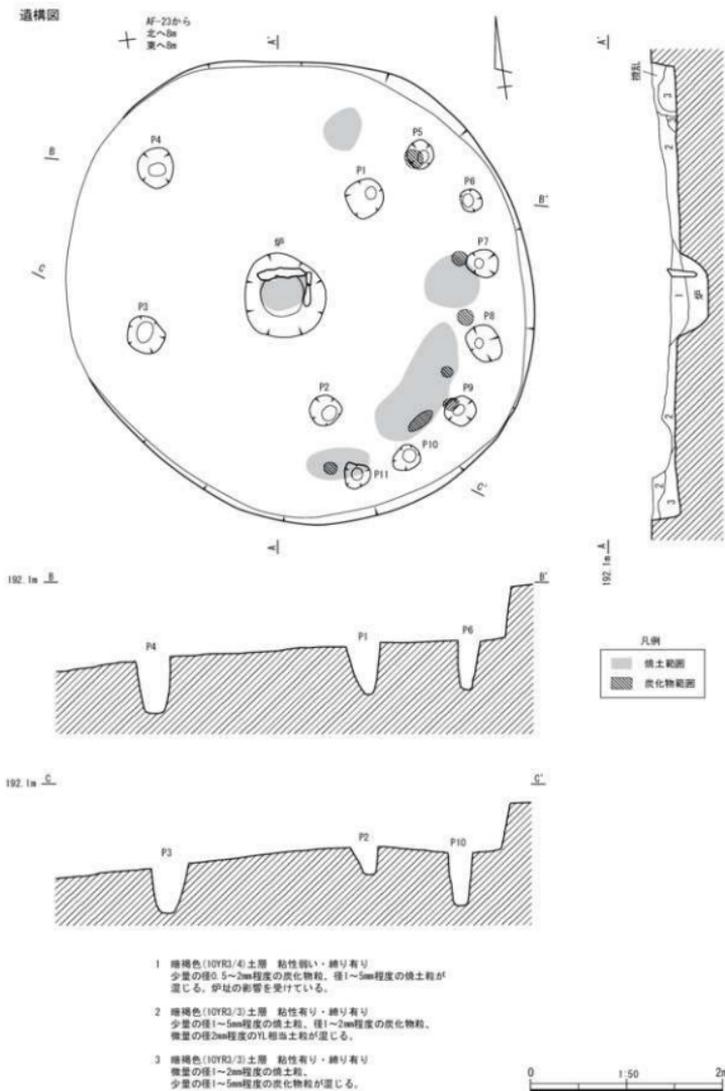
第49図 25号住居跡遺物出土状況と出土遺物 1



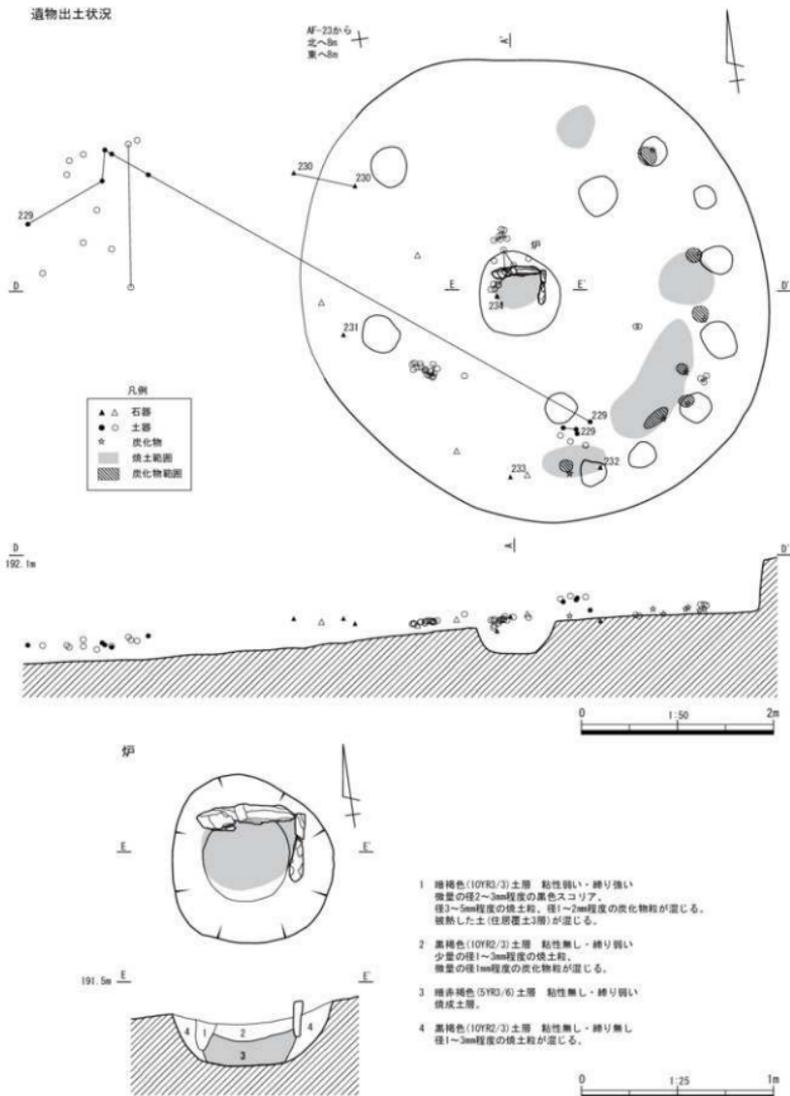
第50図 25号住居跡出土遺物 2



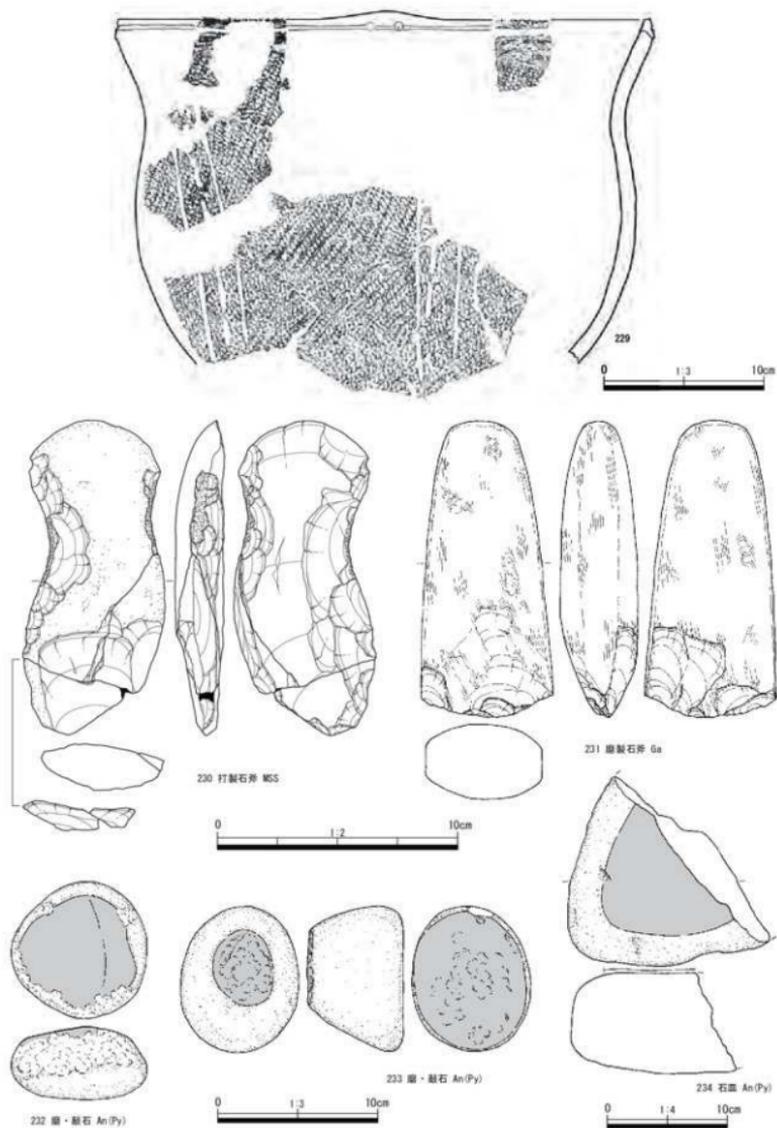
第51図 25号住居跡出土遺物3



第52図 26号住居跡



第53図 26号住居跡遺物出土状況



第54図 26号住居跡出土遺物

218～228は石器である。218～220は石鏃である。三者とも凹基であるが、前二者の石材については神戸島恩馳島群の黒曜石で、220はチャートである。220は前二者と比較して側辺が直線的である。221は石核である。石材はホルンフェルスである。222・223は敲石である。扁平で楕円形の礫を利用し、222は長軸下端部に、223は周縁と平坦部の一部に敲打痕が観察される。石材は輝石安山岩・玄武岩である。224～227は磨・敲石である。224は扁平な楕円形の礫を利用している。磨痕が片側の平坦面に観察される他、敲打痕が随所に認められる。225～227については欠損資料も含めて柱状の礫を利用したものであろう。225は2つの磨面が発達する。石材については輝石安山岩である225を除き、多孔質玄武岩である。228は台石である。敲打痕が上面の中央付近に観察される。石材は多孔質安山岩である。

縄文時代後期の竪穴住居跡

26号住居跡(旧S B 17 第52～54図 写真図版30・57)

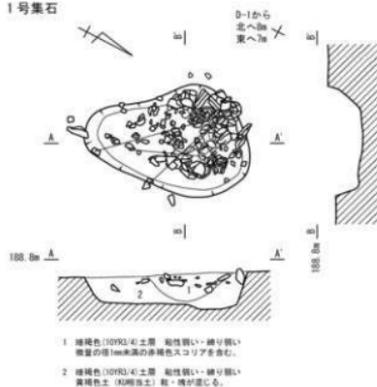
当該住居跡はA F-23・24グリッド付近にて検出した。東支谷に位置する唯一の住居跡である。住居跡の平面形は円形で、遺構の計測値は最大径5.16m、残存する壁の高さは最高0.28mを測る。住居内には柱穴が11基確認されている。そのうち住居上屋の構成部材を支える所謂「主柱穴」と呼べるのはP 1～4であろう。P 5～P 11は住居跡壁の北東から南にかけて一定の間隔を設けて配置されている。P 10とP 11との間隔は0.24mで狭めであるものの、P 5～P 11の各柱の間隔は約0.4m程度で一定している。その柱穴に沿うように焼土・炭化物の堆積が認められている。炉跡は住居跡中央部に1基確認されている。土層堆積状況からも理解できるように、覆土第2層堆積後に炉の輪郭と整合するように第1層の堆積が認められた。しかし焼土や炭化物の出土状況からも第2層を床土としては判断できないため、第1層は自然堆積として考えたい。件の炉跡の平面形はほぼ円形を呈し、長径0.89m、短径0.84mを測る。炉跡には板状の炉石が確認されている。炉石はL字状に据えられた状態で検出されている。しかし炉跡内堆積土の第1層の状況から、炉石は炉内に長方形に配置され、西辺・南辺にあたる炉石が抜き取られたものと考えられる。

当該住居跡から出土した遺物の点数は土器61点、石器10点、礫38点を数える。そのうち土器1点と石器5点を図化した。229は縄文土器である。堀之内1式土器か。口縁部から胴部下半にかけての資料である。丸みを帯びた胴部を持ち、「く」の字状に屈折して口縁部に至る。残存する口縁破片から波状口縁と考えられる。口唇部は角状に面取りされ、沈線文が1条、口唇部直下に巡らされる。口縁部から胴部にかけての地文はLR縄文である。縄文施文後に実線2条と破線1条以上3条の沈線文で構成された懸垂文を施す。

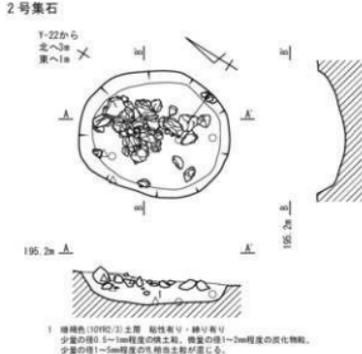
230～234は石器である。230は打製石斧である。柄に装着するために基部両縁に抉りが入れている。石材は中粒砂岩である。231は磨製石斧である。刃部は欠損している。基部に装着痕は観察できない。側面・基端部も丁寧に研磨されている。所謂「定角式磨製石斧」か。石材は斑レイ岩である。232・233は磨・敲石である。2点とも輝石安山岩である。234は輝石安山岩製の石皿である。

なお当該住居跡は覆土中より多くの木炭・炭化物が採取されている。覆土の第1層出土木炭を7点、そして土器229に付着した炭化物1点について放射性炭素年代測定を実施した。その結果、土器229(IAAA-92022)は3,630±30yrBP、縄文時代後期前葉頃の¹⁴C年代が測定されている。また覆土第1層出土の木炭7点は併せて樹種同定を実施(IAAA-92005～92011)した。その結果、広葉樹種とイネ科の植物であることが判明した。

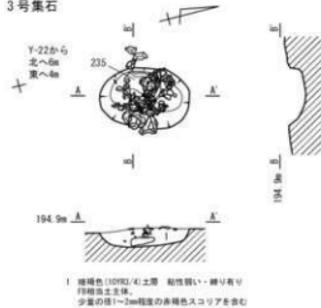
1号集石



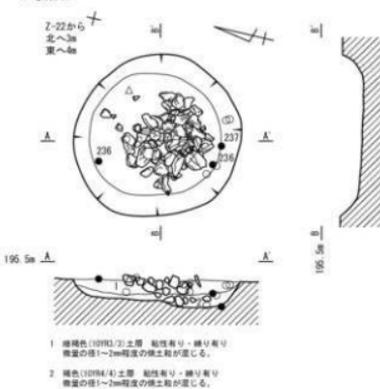
2号集石



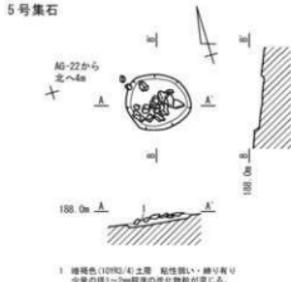
3号集石



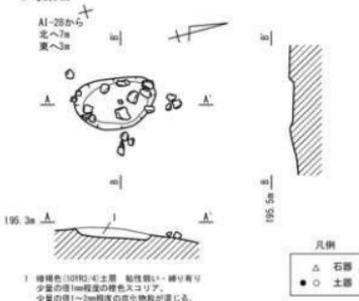
4号集石



5号集石



6号集石



0 1:40 1m

凡例
△ 石層
● 土層

第55図 縄文時代の集石1

2 集石(SY)

富士土遺跡において、縄文時代の遺構・遺物の存在を確認した砂沢スコリア層から休場層上面までの中で、人為的に持ち込まれたと考えられる礫は膨大な量にのぼる。特に栗色土層下位から富士黒土層上位までは縄文時代早期後半の遺物包含層であり、礫の主体はこの全調査区域に広がっていた当該土層に含まれていた。当該報告では調査時の所見により礫が集中的、人為的に集積したと推定されるものを所謂「集石」とした。層位や出土遺物から縄文時代の集石に該当すると考えられるのは23基である。

当該報告書で集成した集石には①土坑を伴う集石、②礫のみの集石に分類される。①については厳密には土坑の範疇に入るものと考えられるが、調査時の所見に従い土坑を伴う集石とした。

土坑を伴う集石(第55・56・61・64図・写真図版31~33・58)

土坑を伴う集石として分類されたのは13基を数える。土坑の平面形は4号集石のように円形を呈するものもあるが、大部分は楕円形若しくは不定形である。長さ×幅の比率は1.5:1~1.2:1の間に分布する。下記には特筆すべき集石について抽出・報告する。

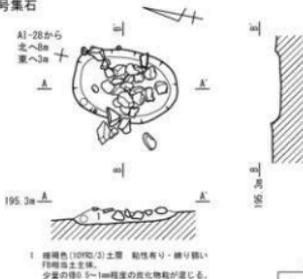
1号集石はD-1グリッド、西尾根に位置する。当該集石は長さ1.38m、幅0.95m、深さは0.26mを測る土坑を伴う。土坑の平面形は細長く歪な楕円形を呈し、その主軸方向は土坑内で検出された礫の一部に規則性を認められる。礫は調査時に172個確認された。そのうち比較的大きな礫が「コ」の字状に組まれており、その内側に小さな礫の存在を確認した。コの子状の礫の配列で開口部を正面と仮定した場合、その配列方向はN-15°-Wに主軸が設定される。土坑の形態は礫配列の方向と同じ主軸を指向するため、この遺構は当初からその方向へ指向する意図のもと構築されたものと理解され、当該集石の性格が他の集石遺構と比べて異なると考えられる。出土遺物は皆無であるため所属時期については判然としない。栗色土層中位で確認されたため、縄文時代の遺構と判断される。

23号集石はA J-22グリッド、東支谷に位置する。当該集積は円形の土坑に大量の礫が充填された状態で確認されており、長さ1.82m、幅1.60m、深さ0.44mを測る土坑を伴う。礫は調査時に495個確認された。土坑の平面形は円形で、集石に伴う土坑では当該遺跡において最大の規模である。覆土は2層に分層され、暗褐色土堆積後に、黒褐色土と握り拳大~人間の頭部程度の礫が土坑底面近くから投入されたものか。ただし礫のうち、土坑周縁部に沿って配置されたものも見受けられ、当該土坑が決して礫を投棄するためだけに掘削されたものではないことを物語っている。この23号集石は出土土器から縄文時代中期のものと判断される。

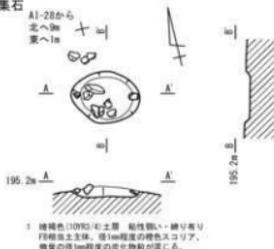
北尾根に位置する11号集石は底面から礫を投入し、他方12号集石や2号集石は底面と礫との間隔が認められるため、両者の礫に関する取り扱いの差が想起される。この11号集石と近接する12号集石は土坑の主軸方向がやや異なることも勘案すれば、時期差が存在するかもしれない。

土坑を伴う集石において出土遺物の数量は決して多くはない。3号集石から出土した235は石皿である。磨面が明瞭である。土坑底部にて出土している。石材は多孔質安山岩である。4号集石で出土したのは押型文土器236 a・bと237である。236 a・bは同一個体か。236 aは口縁部のみ破片資料で、口唇部が丸く仕上げられている。内面にも押型文が施されている。格子目文か。237は楕円文が施されている。11号集石から出土したのは238の敲石である。石材は輝石安山岩である。覆土第2層中から出土している。23号集石では土器・石器が出土している。264 a・bも同一個体の可能性がある。平坦で肥厚した口縁部を持ち、大きく内湾する破片資料である。太い沈線文より下位に縄文が施されているが、施文順位は縄文が先行する。第VII群2類に分類した勝坂式土器か。265は敲石である。266は台石である。全体の半分以上が欠損している。いずれの遺物も礫と共に土坑内に投入されたものか。12号集石では敲石が1点出土している。

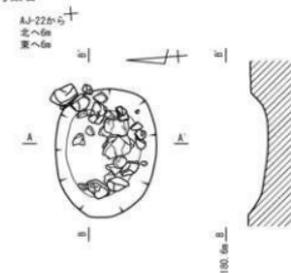
7号集石



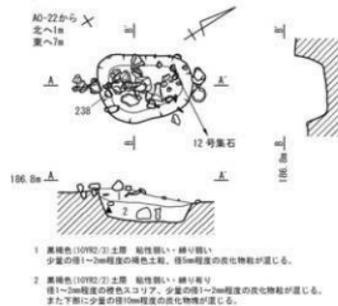
8号集石



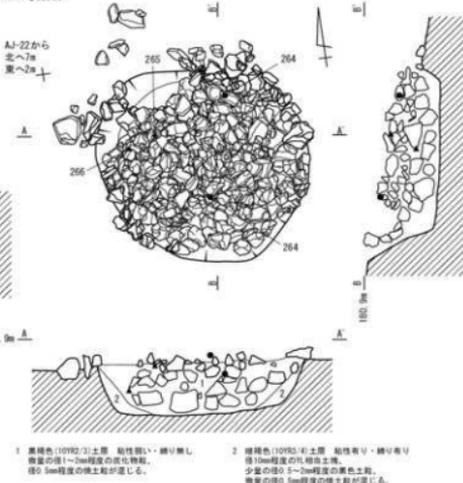
9号集石



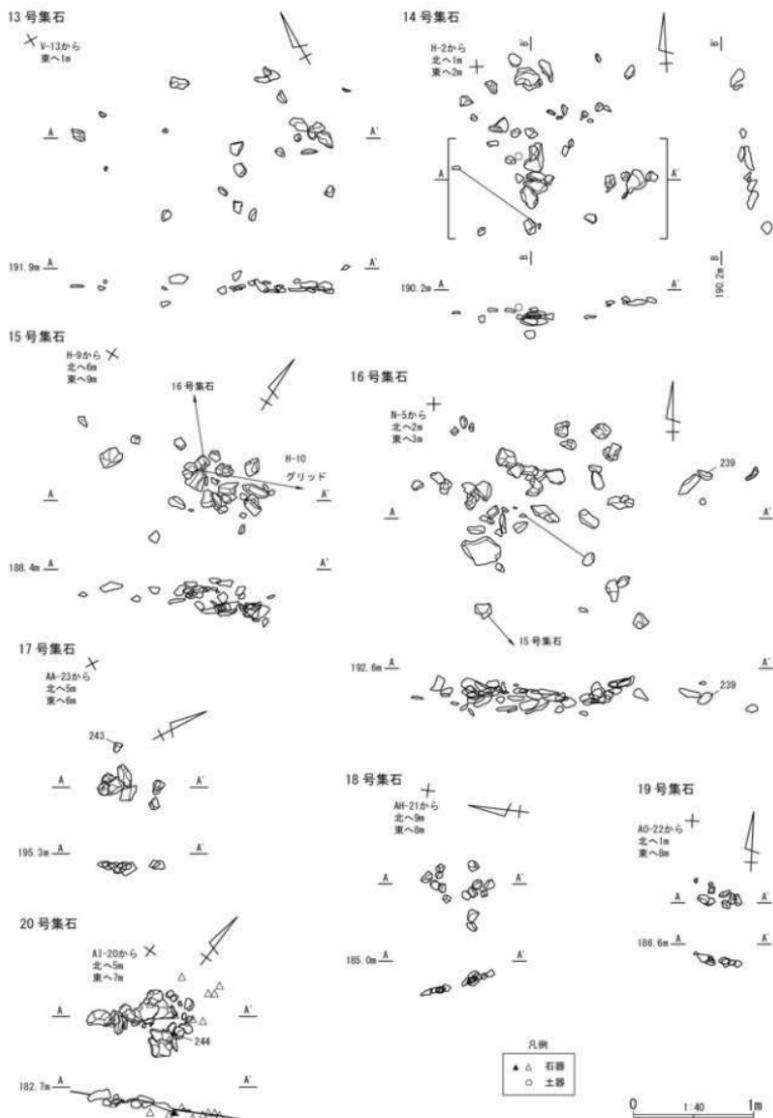
11号集石



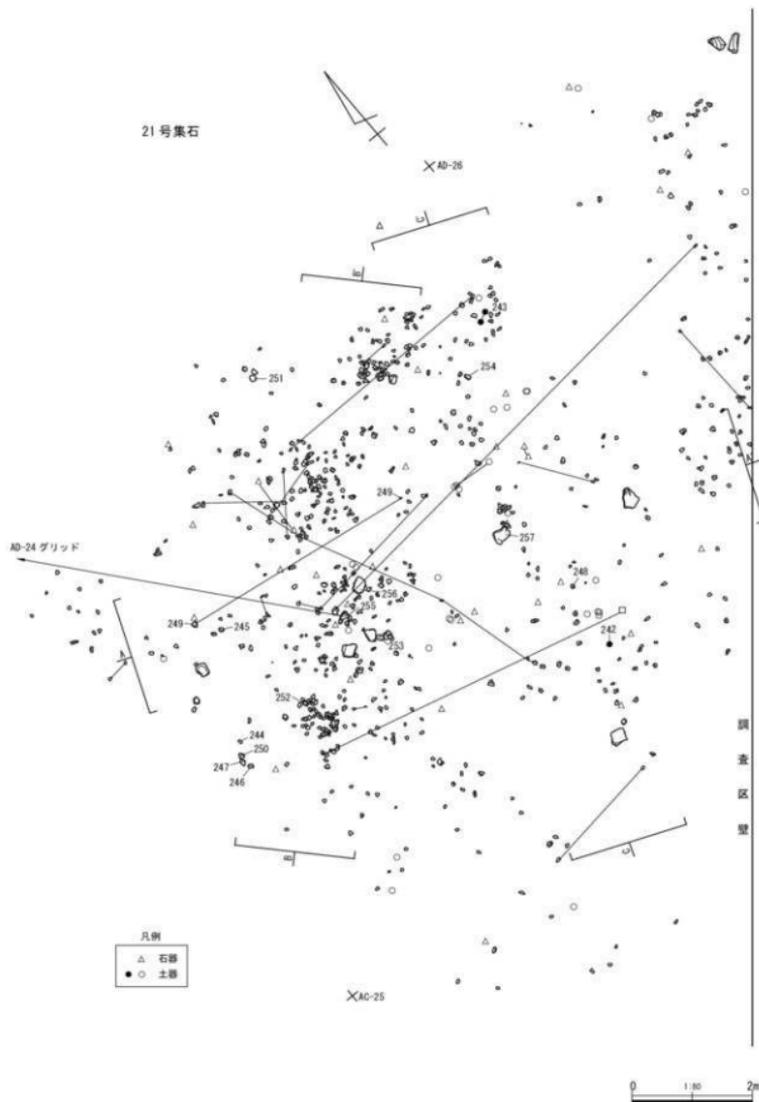
23号集石



第56図 縄文時代の集石2

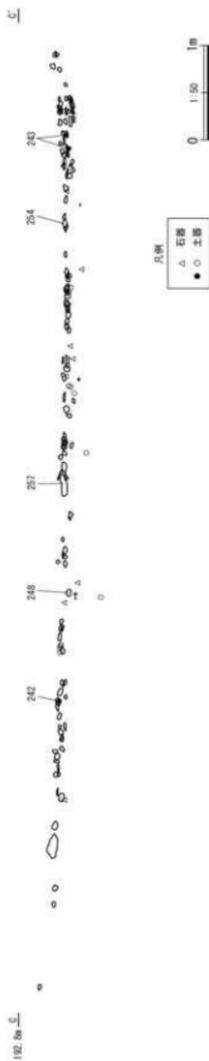
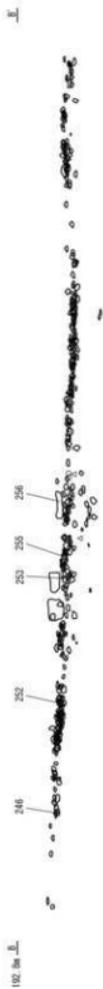


第57図 縄文時代の集石3



第58図 縄文時代の集石4

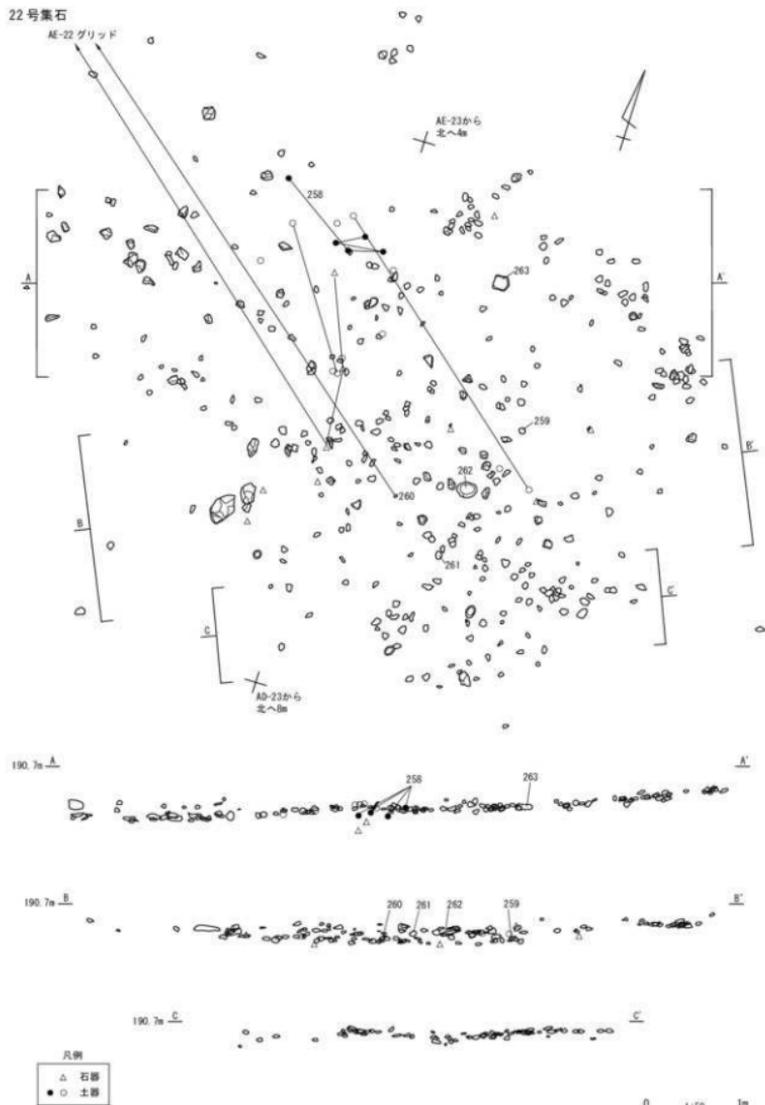
21号集石断面図



凡例
 △ 石層
 ● ○ 土層

0 1.50 1m

第59図 縄文時代の集石5



第60図 縄文時代の集石6

礫のみの集石（第57・61～64図 写真図版33・34・58～60）

礫のみで構成される集石として分類されたのは10基を数える。遺構としては礫が集石された状態のみの確認であるが、本来は土坑状の窪みに礫が集められた可能性のある遺構も散見される。

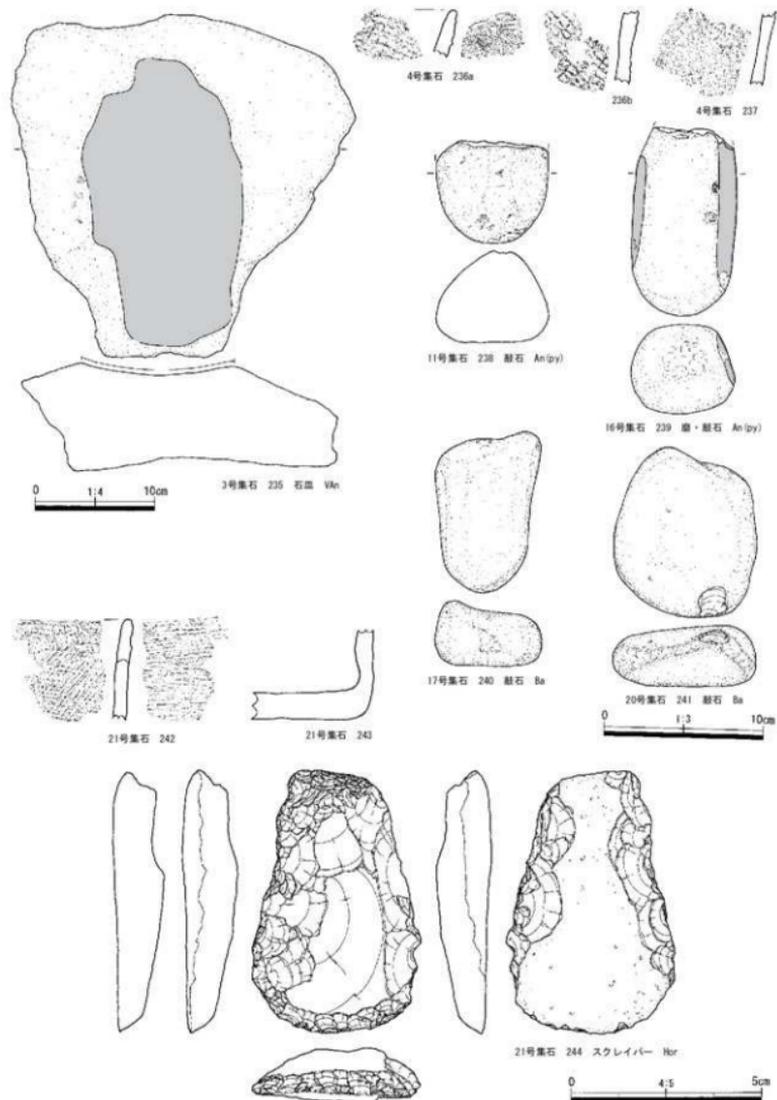
15号集石はH-9グリッド、西尾根（南）に位置する。栗色土層下面から富士黒土層にかけて確認されたもので、礫が重なりあって出土している点から本来は土坑を伴っていた可能性がある。

16号集石もその一例で、当該集石はN-5グリッド、西尾根（北）に位置する。富士黒土層内南西から北東にかけて緩やかに傾斜する地形のなかで、礫毎の高低差が認められる。これも土坑状の掘り込みは未検出である。

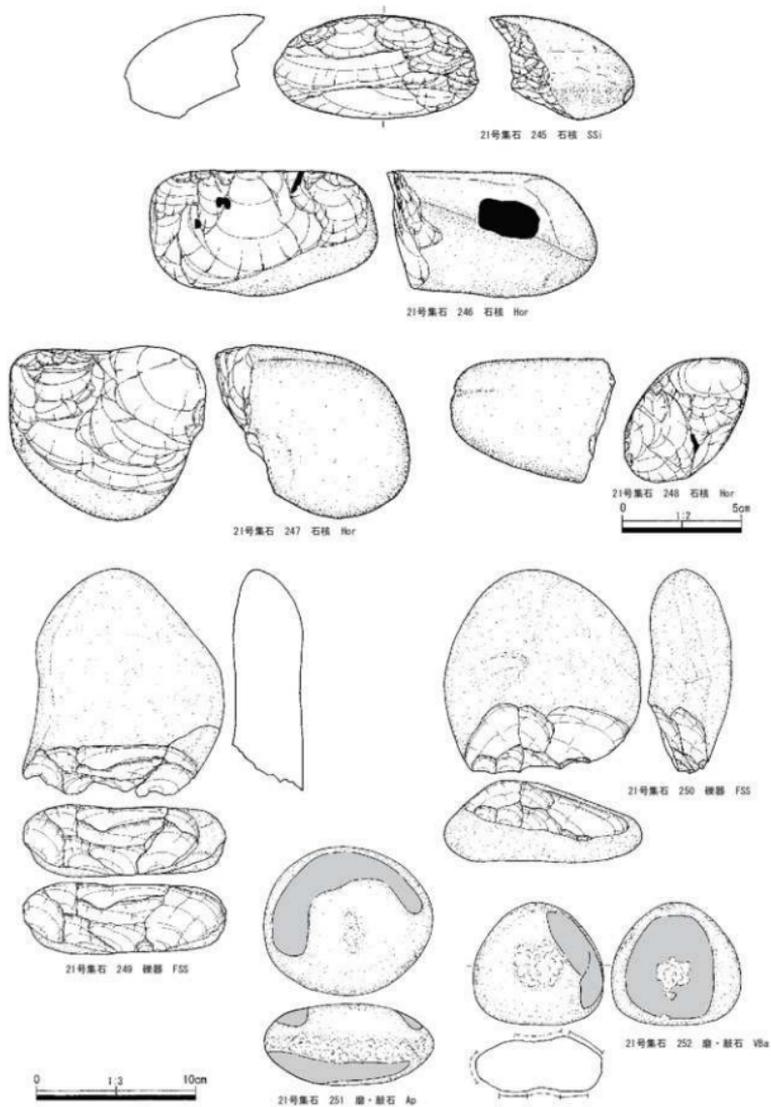
当初より土坑が伴わない集石としてその可能性が高いのは13・14・17～20号集石である。その規模は2m四方の範囲内に収まるものである。特に19号集石は0.5m四方程度の範囲内に収まる狭小な集石遺構と言える。その一方、21・22号集石のように広く、礫が集められた例もある。

21号集石はA-C-25グリッドにて検出された。中央尾根と東尾根に挟まれた東支谷に位置している。当該集石は調査時において広大な集石遺構として取り扱っているが、図からも看取できるように実際は幾つかの小規模な集石遺構単位が近接したことにより、礫が広範囲にわたって分布する状況ができたものと考えられる。礫は706個を数える。富士黒色土層中位から確認され始めたが、第59図A-A'で理解されるように調査区外の方向、即ち東支谷の谷頭部に向かって礫の散布が広がり、富士黒土層下位から下面付近で礫の確認がなされている。B-B'またC-C'ラインにおいては休場層中で礫が検出するに至っている。B-B'ライン上、256石皿が出土した付近では礫が高低差をもって出土しているため、土坑を伴う集石遺構単位が存在した可能性がある。無論それらには時期差が伴う可能性もあり、出土遺物の点から早期代のもものと考えられるが、それ以上の推定は困難である。22号集石はA-E-22グリッドにて検出された。上記の21号集石と同様、東支谷に位置する。23号集石と同様に幾つかの集石遺構の集合体と考えられるが、分割は困難である。富士黒土層下面で検出できたもので、土坑を伴っていた可能性は低い。これら21・22号集石は東尾根と中央尾根に挟まれた谷地形内部にあり、大量の縄文土器がこの谷地形内から包含層出土として取り上げられている。無論これらの縄文土器については生活域からの流れ込みの可能性も想起されるが、集石遺構付近において台石や石皿等の大型石器が伴っており、この谷地形は生業域として機能した可能性をも示している。

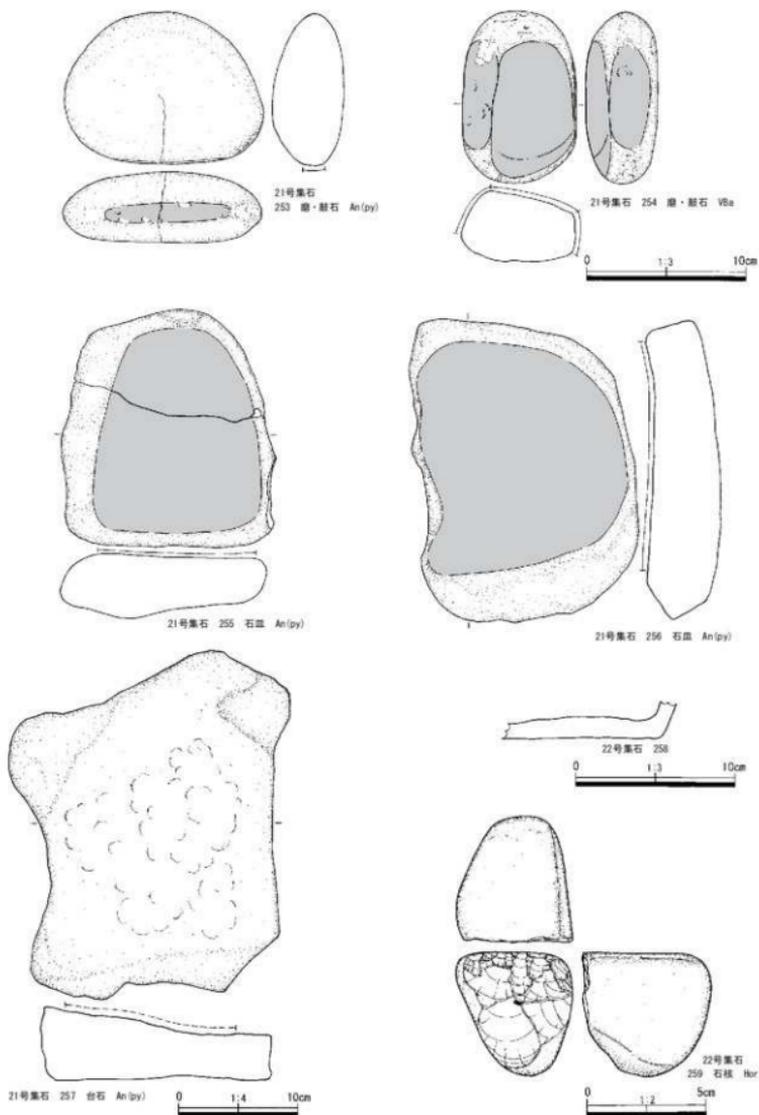
このタイプの集石遺構で土器・石器が出土しているのが14・17・21・22号集石である。239は16号集石から出土した磨・敲石である。240は17号集石から出土した敲石である。239・240ともに石材は輝石安山岩である。241は20号集石から出土した敲石で、石材は玄武岩である。242～257は21号集石から出土した土器・石器である。242・243は縄文土器である。242は口縁部のみの破片資料である。先割状の工具による沈線文が施されたものか。口唇部直下には刺突文。判ノ木山西式土器か。243は底部のみの破片資料である。無文土器か。244～257は石器である。244はスクレイパーである。連続剥離により片刃を作り出したもので、柄に付けて使用したものか。石材はホルンフェルスである。245～248は石核である。いずれも拳大の円礫を敲打している。245は珪質シルト岩、246～248はホルンフェルスである。249・250は礫器である。端部に片刃を作り出している。両者とも細粒砂岩である。251～254は磨・敲石である。252は両面中央部に敲打痕が見られる。255・256は石皿、257は台石である。3点とも石材は輝石安山岩である。258～263は22号集石から出土した土器・石器である。258は無文土器の底部である。259～263は石器である。259・260は石核である。260は剥片資料と接合し、両者ともホルンフェルスである。261は敲石で縁辺部に敲打痕が観察される。石材は輝石安山岩である。262・263は石皿である。両者とも輝石安山岩である。



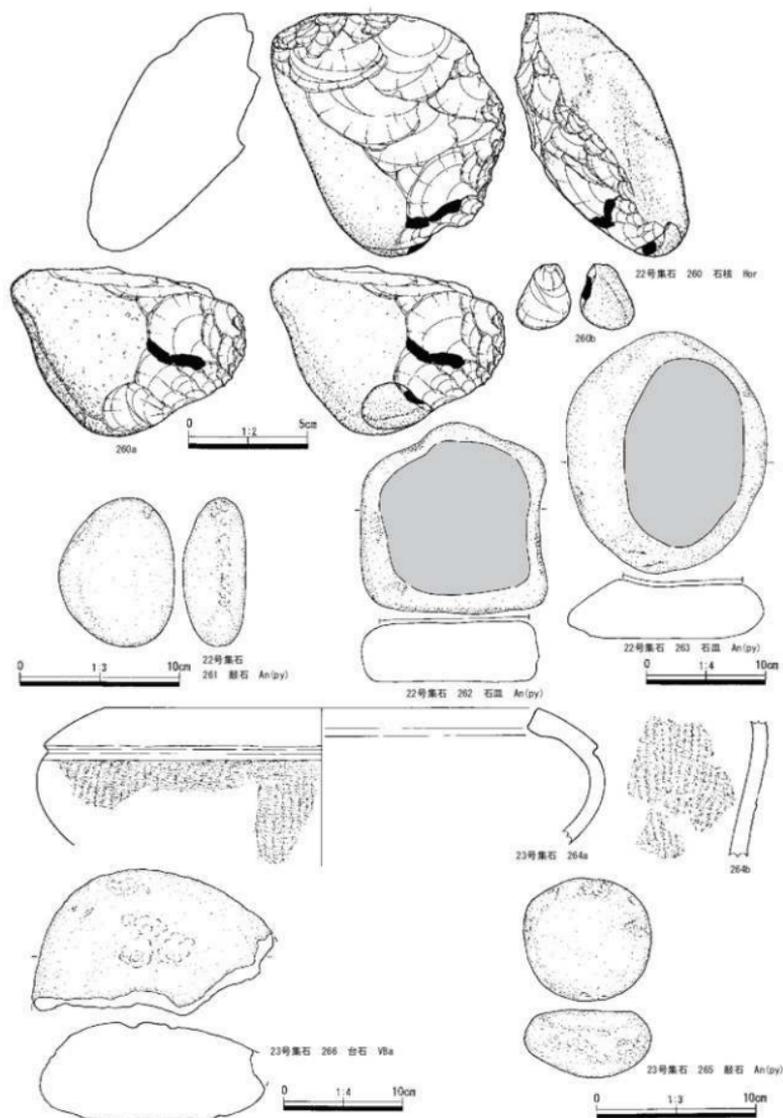
第61図 集石出土遺物 1



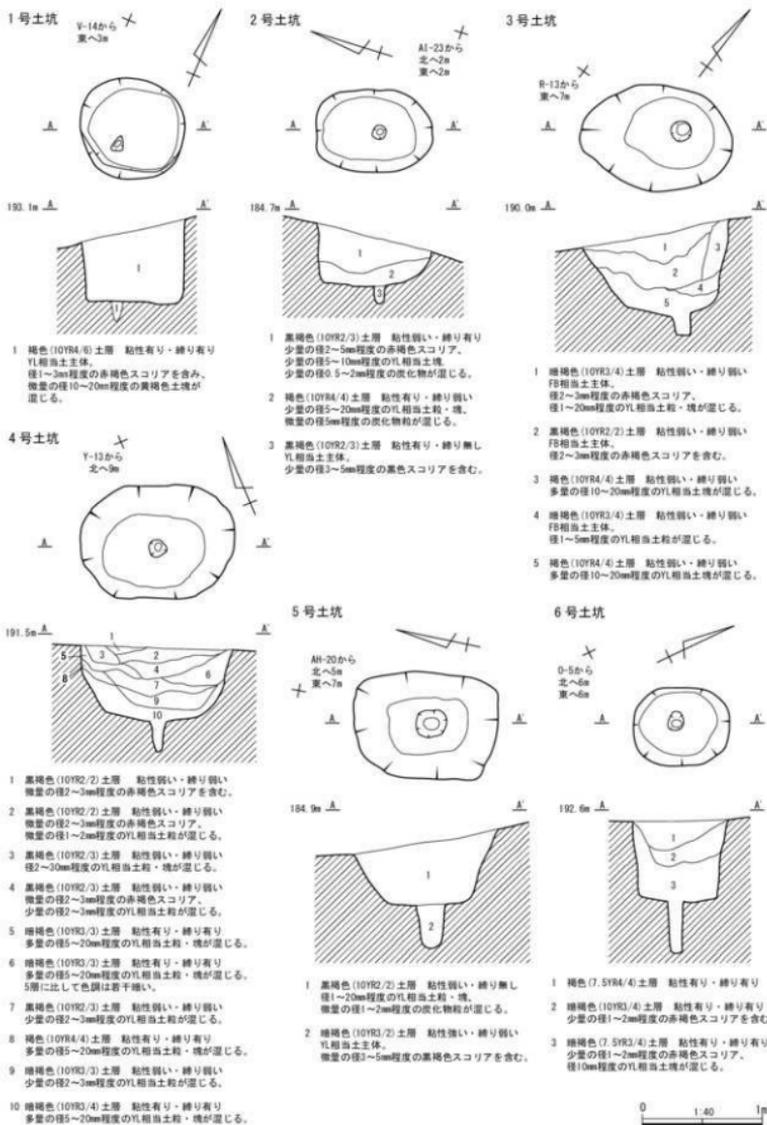
第62図 集石出土遺物2



第63図 集石出土遺物3



第64図 集石出土遺物4



第 65 図 縄文時代の土坑 1

3 土坑 (SF)

富士石遺跡において縄文時代の土坑と推定されたのは56基を数える。そのうち縄文時代前期までの時期と思われるのが1～53号土坑である。土坑の大半は休場層上面やその下位で検出されたものが多く、草創期の可能性を伴う土坑が含まれよう。土坑の形態として土坑底面に逆茂木痕と思しき小穴の有無で分類され、底部平面の形態で細分類が可能である。土坑は西支谷の谷地形底部付近に多く散見される。

縄文時代前期以前の土坑

A類 (第65～68・75・76回 写真図版35・60・61)

底面に小穴が認められる土坑をA類とし、小穴が1基あるもので平面形が円形～楕円形を呈するタイプをA-1類、小穴が複数基、平面形が長楕円形～方形を呈するタイプがA-2類と細分した。

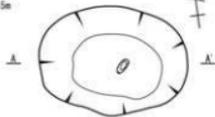
1～7号土坑はA-1類に該当する。長径：短径の比率も1：1～1：0.5の範囲に入る。この土坑は谷部（西支谷・東支谷）に見られるが、6号土坑のみ西尾根（北）に位置している。このタイプは長径・短径の実測値も0.8～1.3m、0.6～1m程度であり、土坑の中では小型の部類か。休場層にて確認されるが、覆土は黒褐色～暗褐色の土坑が多く、1号土坑のみ休場層由来の覆土をもつ。当該土坑は休場層直下黒色帯上面での検出で、時期的には覆土から勘案して縄文時代草創期まで遡る可能性はある。なおA-1類土坑で遺物の出土は確認していない。

8～19号土坑はA-2類に該当する。長径：短径の比率は1：1～1：0.3の範囲に入り、平面形は円形から狭長な隅丸長方形を呈するタイプ等が認められる。東支谷・西支谷の谷部以外にも中央尾根や西尾根上にも分布する。9～11号土坑は形態的には互いに異なるものの、休場層相当土を基調とする点で共通する。9・10号土坑は西尾根に位置し、形態も酷似しているため、同時期のものとも推定される。A-2類でも8～11・13・17号土坑は休場層直下黒色帯、第1スコリア層にかけて確認されたもので、覆土が休場層由来であった故に休場層中で確認が不能であったものか。これらは縄文時代草創期まで時期的に遡る可能性がある。9～12号土坑の底面に確認された小穴は乱雑に配置されているが、逆茂木等の再設定の可能性が指摘される。16号土坑は東支谷に位置する。平面形は楕円形で、土坑底面に小穴4基が等間隔に配置され、規模も17～19号土坑に次ぐ。長径2.07m、短径1.42m、検出面から底面までの深さは1.45mを測る。休場層上層上面にて検出された。壁面が直立しており、陥穴として機能したのである。このA-2類で大型なのは17～19号土坑である。いずれも長軸が2m台であり、深さも1m以上を測る。小穴2基が土坑底面に認められ、形態も近似する。また分布の点では17号土坑が西尾根（北）に、18・19号土坑が中央尾根に位置し、立地も共通している。18号土坑は25号住居跡と重複し、時期的に住居跡よりも先行する。19号土坑は10号住居跡と重複し、住居跡が時期的に先行する。

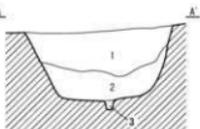
A-2類土坑のうち、遺物が出土したのは13・18・19号土坑で、18・19号土坑出土遺物を図化している。18号土坑から出土した遺物は267～282である。267～279は縄文土器である。267は押型土器か。格子目文で軽しゅうな胎土である。268は隆帯上に絡条体圧痕文が施されている。子母口式土器か。269～276は清水柳E類土器の範囲に入る資料か。このうち269～275は口縁部のみの破片資料である。269は口唇部直下に細い軸を有する絡条体圧痕文が横位に施されている。この269には炭化物が付着しており、放射性炭素年代測定を実施（IAAA-92028）した。その結果、7,960±40yrBP、すなわち縄文時代早期の¹⁴C年代が測定されている。271は波状口縁である。274は横位の細隆起線文より上位に穿孔している。また口唇部から約6cmの位置にも穿孔がなされている。緩く外反する資料である。275は口唇部に刺突文、口唇部直下には斜位の沈線文を施している。276は胴部のみ破片資料である。沈線文が格子状に施されている。277は縦位沈線土器か。278は打越式土器か。胴部のみ破片資料である。279は無文土器である。口縁部のみ破片資料である。口唇部直下に穿孔を試みた痕跡が認められる。未貫通である。

7号土坑

AD-24から
北へ9m
東へ5m



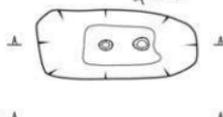
191.9m



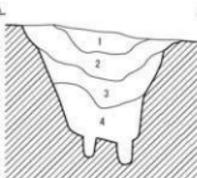
- 1 黒褐色(10YR2/3)土層 粘性有り・粘り強い
径2~3mm程度の赤褐色スコリア。少量の
径1~10mm程度のYL相当土粒・塊が混じる。
- 2 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・粘り有り
少量の径2~5mm程度の赤褐色スコリア。
径2~50mm程度のYL相当土粒・塊が混じる。
- 3 暗褐色(10YR3/2)土層 粘性強い・粘り無し
FB相当土と黄褐色土の混合土。

8号土坑

5-12から
東へ4m



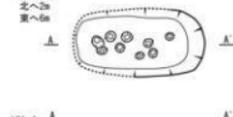
189.7m



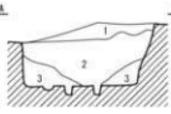
- 1 黒褐色(10YR2/3)土層 粘性弱い・粘り弱い
少量の径2mm程度の暗褐色スコリア。
少量の径10~20mm程度の黄褐色土粒。
微量の径1~2mm程度の黒色土粒が混じる。
- 2 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・粘り弱い
少量の径1~2mm程度の赤褐色スコリア。
微量の径2mm程度のYL相当土粒
径20mm~傘大の黒色土塊が混じる。
- 3 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り強い
YL相当土主体。径20~30mm程度の黒色土塊が
混じる。
- 4 暗褐色(7.5YR3/2)土層 粘性強い・粘り強い
微量の径3~5mm程度の赤褐色スコリア。
少量の径1~2mm程度の黒色土粒。
微量の径2~5mm程度の黄褐色土粒が混じる。

9号土坑

8-5から
北へ2m
東へ6m



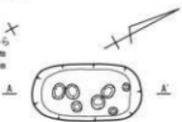
191.4m



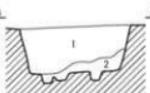
- 1 黄褐色(10YR5/8)土層 粘性有り・粘り強い
YL相当土主体。
径2mm程度の赤褐色スコリア。径3~5mm程度の
黒褐色スコリアを含む。
- 2 黄褐色(10YR5/8)土層 粘性有り・粘り強い
YL相当土主体。
径2~3mm程度の赤褐色スコリア。径2~10mm
程度の黒褐色スコリアを含む。
- 3 黄褐色(10YR5/8)土層 粘性有り・粘り強い
YL相当土主体。
径2~10mm程度の赤褐色スコリア。径5~10mm
程度の黒褐色スコリアを含む。
1・2層に比してスコリアの量が若干多い。

10号土坑

8-4から
北へ9m
東へ5m



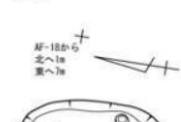
191.5m



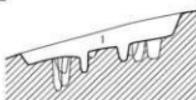
- 1 黄褐色(10YR5/8)土層
粘性有り・粘り有り
YL相当土主体。
少量の径5mm程度の
赤褐色スコリアを含む。
- 2 黄褐色(10YR5/8)土層
粘性有り・粘り強い
YL相当土主体。
微量の径3~5mm程度の
赤褐色スコリア。
微量の径2~3mm程度の
黒褐色スコリアを含む。

11号土坑

AF-12から
北へ1m
東へ7m



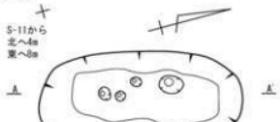
189.6m



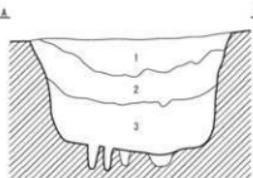
- 1 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り強い
YL相当土主体。少量の径1~3mm程度の
黒褐色土粒が混じる。

12号土坑

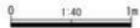
5-11から
北へ4m
東へ8m



190.6m



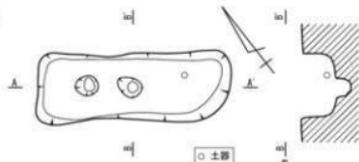
- 1 暗褐色(10YR3/2)土層 粘性有り・粘り有り
径2~3mm程度の赤褐色スコリア。
径2~10mm程度のYL相当土粒・塊が混じる。
- 2 暗褐色(10YR3/2)土層 粘性有り・粘り有り
径2~10mm程度のYL相当土粒・塊が混じる。
- 3 暗褐色(10YR3/2)土層 粘性有り・粘り有り
径2~10mm程度のYL相当土塊が多量に混じる。



第 66 図 縄文時代の土坑 2

13号土坑

7-22から
北へ4m
東へ4m



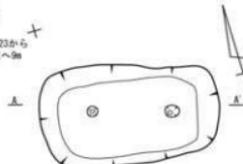
194. 6a



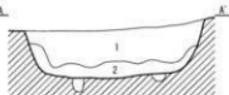
- 1 暗褐色(10YR3/1)土層 粘性有り・粘り有り
YL相当土主体。
少量の径1~2mm程度の
赤褐色スコリアを含む。

15号土坑

AD-23から
東へ9m



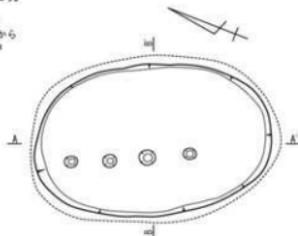
192. 0a



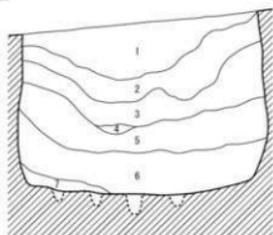
- 1 黒褐色(10YR2/2)土層
粘性有り・粘り強い
径30mm程度の褐色土塊が
混じる。
- 2 暗褐色(10YR3/2)土層
粘性有り・粘り有り
多量の径2mm程度の
赤褐色スコリアを含む。

16号土坑

AE-23から
東へ5m



191. 0a



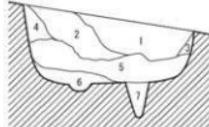
- 1 黒暗褐色(10YR2/2)土層 粘性有り・粘り有り
少量の径3mm程度の赤褐色スコリアを含む。
- 2 黒褐色(10YR2/2)土層 粘性有り・粘り有り
少量の径3mm程度の赤褐色スコリアを含む。
少量の径2mm程度のYL相当土粒が混じる。
- 3 にぶい黄褐色(10YR4/3)土層 粘性有り・粘り有り
多量の径2mm程度の黄褐色土粒が混じる。
- 4 褐色(10YR4/6)土層 粘性有り・粘り有り
- 5 暗褐色(10YR2/2)土層 粘性有り・粘り弱い
径2~5mm程度の黄褐色土粒が混じる。
- 6 黒褐色(10YR2/2)土層 粘性有り・粘り強い
少量の径2mm程度の赤褐色スコリアを含む。
- 7 暗褐色(10YR2/2)土層 粘性有り・粘り強い
多量の径50mm程度の黄褐色土塊。黒褐色土粒が
混じる。

14号土坑

9-11から
東へ1a



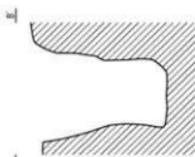
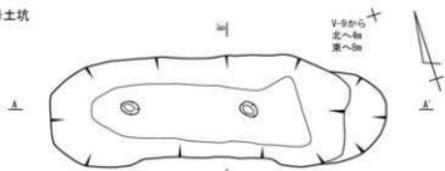
186. 0a



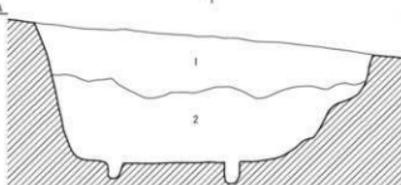
- 1 にぶい黄褐色(10YR5/2)土層 粘性有り・粘り有り
径1~3mm程度の赤褐色スコリア。少量の径10~50mm
程度のYL相当土塊が混じる。
- 2 にぶい黄褐色(10YR4/2)土層 粘性有り・粘り有り
径1~3mm程度の赤褐色スコリア。微量の径1~20mm
程度のYL相当土粒・塊が混じる。
- 3 暗褐色(10YR3/2)土層 粘性有り・粘り弱い
径1~3mm程度の赤褐色スコリア。径1~2mm程度の
YL相当土粒が混じる。
- 4 暗褐色(10YR3/2)土層 粘性有り・粘り弱い
径1~3mm程度の赤褐色スコリア。径1~20mm程度の
明黄褐色土塊・塊が混じる。
- 5 にぶい黄褐色(10YR5/2)土層 粘性有り・粘り有り
径1~3mm程度の赤褐色スコリア。多量の径10~50mm
程度のYL相当土塊が混じる。
- 6 黄褐色(10YR5/3)土層 粘性有り・粘り弱い
YL相当土主体。少量の径1~3mm程度の赤褐・
黒色スコリア。径1~3mm程度の黒褐色土粒が混じる。
- 7 黄褐色(10YR5/3)土層 粘性有り・粘り弱い
径1~10mm程度の黒褐色土粒・塊が混じる。

第 67 図 縄文時代の土坑 3

17号土坑



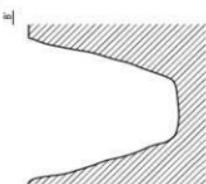
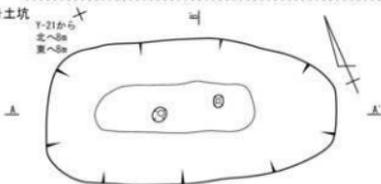
194.8m



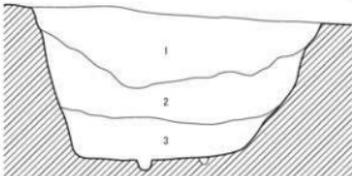
194.8m

- 1 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性弱い・粘り有り
少量の径2~3mm程度の赤褐色スコリア。
少量の径3~5mm程度の炭化物粒が混じる。
- 2 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り強い
少量の径2~3mm程度の赤褐色スコリア。
微量の径1~5mm程度の炭化物粒が混じる。

18号土坑



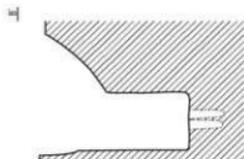
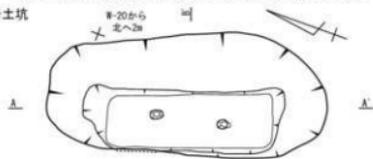
195.2m



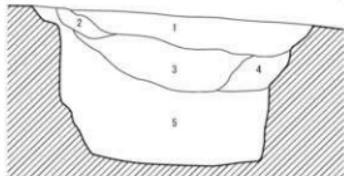
195.2m

- 1 黒褐色(10YR2/2)土層 粘性弱い・粘り有り
少量の径1~5mm程度の塊土粒。
微量の径0.5~1mm程度の炭化物粒。
微量の径1~2mmのYL相当土粒が混じる。
- 2 黒褐色(10YR2/2)土層 粘性有り・粘り強い
径3~20mm程度のYL相当土層・塊が混じる。
- 3 暗褐色(10YR2/2)土層 粘性強い・粘り無し。
YL相当土とF相当土の混合土。

19号土坑



194.5m



194.5m

- 1 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り強い
径2~3mm程度の赤褐色スコリアを含む。
- 2 褐色(10YR4/4)土層 粘性有り・粘り弱い
少量の径1~2mm程度の赤褐色スコリア。
径1~2mm程度のYL相当土粒が混じる。
- 3 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り弱い
少量の径2~3mm程度の赤褐色スコリアを含む。
- 4 褐色(10YR4/4)土層 粘性有り・粘り弱い
少量の径1~2mm程度の赤褐色スコリア、径1~2mm程度の
YL相当土粒が混じる。
- 5 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り強い
径2~3mm程度の赤褐色スコリア、少量の径1~2mm程度の
YL相当土粒が混じる。

0 1:40 1m

第 68 図 縄文時代の土坑 4

280～282は石器である。280・281は敲石、282は磨・敲石である。石材は281が輝石安山岩で、それ以外は多孔質玄武岩である。19号土坑から出土した遺物は283～294である。283～290は縄文土器である。283～289は第Ⅱ群2類に分類した清水柳E類土器で283～285は軸の太い絡条体圧痕文が施された破片資料である。286・287は軸の無い絡条体圧痕文が施されたもので、286は口縁部のみの破片資料である。288も口縁部のみの破片資料で、口唇部が平坦に仕上げられ、口唇部直下に細隆起線文が施されている。その細隆起線文上及び下位に細い軸を有する絡条体圧痕文が施されている。289は軸の細い絡条体圧痕文と格子目状の沈線文が施されている。この289には炭化物が付着しており、放射性炭素年代測定を実施（IAAA-92018）した。その結果、 $7,980 \pm 40$ yrBP、すなわち縄文時代早期の ^{14}C 年代が測定されている。290は口唇部を丸く仕上げ、縦位に沈線文を施した後に横位に磨消線文を施している。291～294は石器である。291は石鏃である。諏訪屋ヶ台群の黒曜石を利用している。292は敲石、293は磨・敲石、294は石皿である。石材は292が輝石安山岩、それ以外は玄武岩である。これらの遺物が出土した18・19号土坑は中央尾根上に位置し、堅穴住居跡も周囲に多く展開する。出土した縄文土器の主体は清水柳E類土器という点が共通し、その多くが覆土上層の出土であるため、ほぼ同時期に土坑として機能し、流れ込んだ遺物として評価されよう。

B類（第69～73・75・76図 写真図版35・36・62）

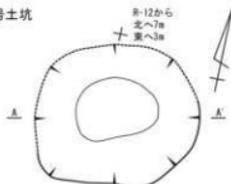
土坑底面に逆茂木痕と思しき小穴が認められないものをB類とし、平面形が円形～楕円形を呈するB-1類、平面形が長楕円形～長方形を呈するB-2類、平面形が不定形を呈するものをB-3類とした。

20～37号土坑はB-1類に該当する。長径：短径の比率は1：1～1：0.6の範囲に入るため、外観として円形に近い印象を与える遺構が多い。長径・短径の実測値は0.6～1.7m、0.4～1.4m程度であるが、休場層直下黒色帯、第Ⅰスコリア層にて検出された20～24・32～35号については土坑下半部のみである可能性もある。このB-1類は調査区全域で見られるが、特に西尾根～西支谷、3-1区周辺に集中する傾向がある。休場層上層上面で検出された37号土坑はB-1類で最大の平面計測値を測る。またB-1類に分類された土坑はY L相当土を覆土とするものが6基あり、時期的には草創期に通る可能性がある。B-1類土坑のうち、遺物が出土したのは37号土坑のみである。295～297は縄文土器である。295は口縁部の破片資料である。口唇部直下に隆帯を横位に貼付け、条痕文を施している。子母口式土器か。296は清水柳E類土器か。口縁部の破片資料で、口唇部は平坦に仕上げられている。絡条体圧痕文が横位に施されている。297は条痕文が観察される。37号土坑出土遺物については覆土第1層からの出土であり、土坑がA D-20グリッド付近、中央尾根（北）の縁辺部に位置している点から、集落域から流れ込んだ遺物の可能性がある。

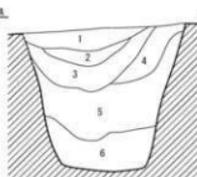
38～47号土坑はB-2類に該当する。長径：短径の比率は1：0.7～1：0.3の範囲に入る。平面形としては楕円形の他に長方形が見られる。長径・短径の実測値は0.7～2.1m、0.4～0.8m程度である。分布域は西尾根・西支谷・中央尾根付近に限られている。これらのうち38～40号土坑は第Ⅰスコリア層～第Ⅲ黒色帯面での検出であるため、土坑下位のみ検出した可能性がある。その39号土坑は長径2.06m、短径0.76m、深さ0.22mを測る狭長な外観を呈する。ニセローム層上面にて確認されたが、覆土は富士黒土層主体であるため、縄文時代の土坑である。42号土坑は他の土坑が多く見られる西支谷、Q-10・11グリッド付近にて確認した。長径1.68m、短径0.70m、深さ1.30mを測る。休場層上層上面にて確認したもので、覆土も富士黒土層主体である。陥穴とし考えてよい遺構であろう。これらB-2類土坑のうち、47号土坑は遺物が出土しているが、細片資料のため掲載できなかった。

48～53号土坑はB-3類に該当する。48号土坑の平面形は長楕円形を呈し、底面の一部が深く掘り込まれ、段状を呈している。50号土坑は東尾根に位置する。陥穴であろう。51号土坑は長径2.58m、短径

20号土坑



189. 9m



1 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り弱い少量の径2~5mm程度の赤褐色スコリア。径5~10mm程度の丸相当土粒・塊が混じる。

2 赤褐色(5YR3/4)土層 粘性有り・粘り有り丸相当土主体。径1~2mm程度の赤褐色スコリア。少量の径3mm程度の黒褐色スコリアを含む。

3 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り有り丸相当土主体。少量の径1~2mm程度の赤褐色スコリア。微量の径3mm程度の黒褐色スコリアを含む。

4 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り有り丸相当土主体。少量の径1~2mm程度の赤褐色スコリア。微量の径3mm程度の黒褐色スコリアを含む。3層と比較してやや細かい。

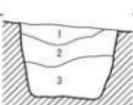
5 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り弱い少量の径1~3mm程度の赤褐色スコリア。径3~5mm程度の黒褐色スコリア。微量の径2~3mm程度の黄褐色スコリアを含む。3層よりスコリアが多い。

6 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性強い・粘り有り丸相当土主体。径3~5mm程度の黒褐色スコリア。微量の径2~3mm程度の黄褐色スコリアを含む。

23号土坑



193. 4m

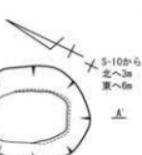


1 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・粘り弱い径2~3mm程度の赤褐色スコリア。径2~5mm程度の黄灰色スコリアを含む。

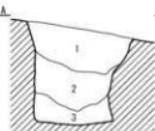
2 褐色(10YR4/4)土層 粘性有り・粘り有り径2~5mm程度の赤褐色・黄灰色スコリアを含む。

3 褐色(10YR4/4)土層 粘性有り・粘り有り径2~3mm程度の赤褐色・黄灰色スコリアを含む。

21号土坑



190. 7m

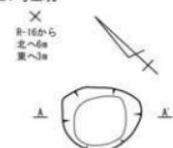


1 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り強い丸相当土主体。少量の径1~2mm程度の黒褐色土粒が混じる。

2 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り強い丸相当土主体。少量の径5mm程度の赤褐色スコリアを含み。少量の径1~2mm程度の黒褐色土粒が混じる。

3 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性弱い・粘り有り径1~2mm程度の黒褐色土粒が混じる。

24号土坑



190. 9m



1 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・粘り弱い丸相当土主体。径1~3mm程度の赤褐色スコリア。少量の径1~10mm程度の丸相当土粒・塊。微量の径10~30mm程度の砂1相当土粒。微量の径1~5mm程度の灰色粘粒が混じる。

2 褐色(10YR4/4)土層 粘性有り・粘り弱い丸相当土主体。径1~3mm程度の赤褐・黒褐色スコリア。径1~3mm程度の砂相当土粒が混じる。

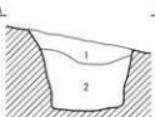
3 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・粘り有り砂1相当土主体。径1~5mm程度の赤褐・黒褐色スコリアを含む。

4 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・粘り弱い丸相当土主体。径1~3mm程度の赤褐色スコリア。少量の径1~5mm程度の丸相当土粒が混じる。

22号土坑



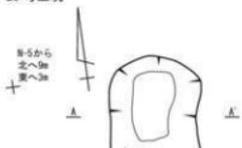
185. 1m



1 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・粘り有り径3~5mm程度の赤褐色スコリアを含み。少量の径3mm程度の黒褐色土粒が混じる。

2 褐色(10YR4/4)土層 粘性強い・粘り弱い多量の径3~5mm程度の褐色スコリア。径3~5mm程度の黒褐色スコリアを含む。

25号土坑



192. 4m



1 褐色(10YR4/4)土層 粘性有り・粘り弱い少量の丸相当土粒が混じる。

2 褐色(10YR4/4)土層 粘性有り・粘り有り径2~3mm程度の赤褐色スコリア。丸相当土粒が混じる。

3 褐色(7.5YR4/4)土層 粘性有り・粘り有り径2~3mm程度の赤褐色スコリア。少量の丸相当土粒が混じる。

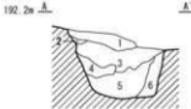
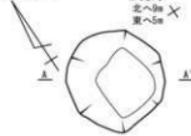
4 褐色(10YR4/4)土層 粘性有り・粘り弱い多量の丸相当土粒が混じる。

5 褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り有り径2~3mm程度の赤褐色スコリアを含む。



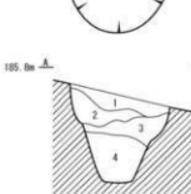
第 69 図 縄文時代の土坑 5

26号土坑



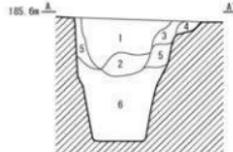
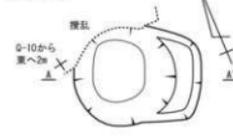
- 1 暗褐色(10YR4/4)土層 粘性有り・粘り有り
径2~3mm程度の炭化粒粒。Y相当土層が混じる。
- 2 暗色(10YR4/4)土層 粘性有り・粘り有り
径2~3mm程度の赤褐色スコリア。多量のY相当土層が混じる。
- 3 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・粘り有り
径2~3mm程度の炭化粒粒。Y相当土層が混じる。
- 4 黒褐色(10YR2/2)土層 粘性有り・粘り有り
径2~3mm程度の赤褐色スコリア。Y相当土層が混じる。
- 5 黒褐色(10YR2/2)土層 粘性有り・粘り有り
径2~3mm程度の赤褐色スコリア。少量のY相当土層が混じる。
- 6 黒褐色(10YR2/2)土層 粘性有り・粘り有り
径2~3mm程度の赤褐色スコリア。多量のY相当土層が混じる。

29号土坑



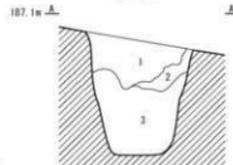
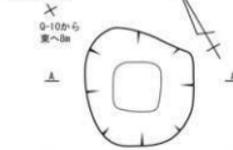
- 1 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・粘り弱い
FB相当土主体。径1~2mm程度の赤褐色スコリア。少量の径1~10mm程度のY相当土層・塊。燻色の径1~2mm程度の炭化粒粒が混じる。
- 2 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・粘り弱い
FB相当土主体。燻色は1層に於いて稀く。径5~10mm程度のY相当土層・塊が混じる。
- 3 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・粘り弱い
FB相当土主体。粘りは1層に於いて若干強い。
- 4 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・粘り弱い
炭化物の混入は認められない。

27号土坑



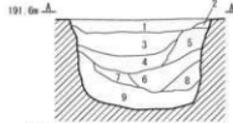
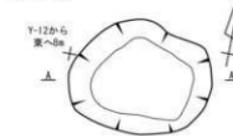
- 1 黒褐色(10YR2/3)土層 粘性有り・粘り有り
FB相当土主体。径1~5mm程度の赤褐色スコリア。燻色の径5~30mm程度のY相当土層・塊が混じる。
- 2 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・粘り有り
FB相当土主体。径3~5mm程度の赤褐色スコリア。多量の径10~50mm程度のY相当土層が混じる。
- 3 黒褐色(10YR2/3)土層 粘性有り・粘り有り
FB相当土主体。径3~5mm程度の赤褐色スコリア。径1~3mm程度のY相当土層が混じる。
- 4 黒褐色(10YR2/3)土層 粘性有り・粘り有り
径1~5mm程度の赤褐色スコリア。径1~3mm程度の黒褐色スコリアを含み。径1~50mm程度のY相当土層・塊、径10~30mm程度のFB相当土層が混じる。
- 5 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り有り
FB相当土主体。径3~5mm程度の赤褐色スコリア。多量の径1~3mm程度のY相当土層が混じる。
- 6 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・粘り弱い
FB相当土主体。径1~3mm程度の赤褐色スコリア。多量の径1~50mm程度のY相当土層・塊が混じる。

30号土坑



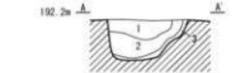
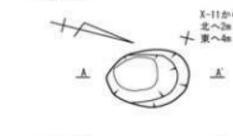
- 1 に近い黄褐色(10YR4/3)土層 粘性有り・粘り有り
径1~3mm程度の赤褐色スコリア。少量の径10~50mm程度のY相当土層が混じる。
- 2 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・粘り弱い
径1~3mm程度の赤褐色スコリア。径10~30mm程度の明黄褐色土層が混じる。
- 3 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・粘り弱い
径1~3mm程度の赤褐色スコリア。少量の径1~50mm程度のY相当土層・塊が混じる。

28号土坑



- 1 褐色(10YR4/4)土層 粘性有り・粘り弱い
少量の径1~2mm程度の赤褐色スコリア。径1~2mm程度のY相当土層が混じる。
- 2 黄褐色(10YR5/4)土層 粘性有り・粘り弱い
径20~30mm程度のY相当土層が混じる。
- 3 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り弱い
少量の径1~2mm程度の赤褐色スコリア。多量の径2~3mm程度のY相当土層が混じる。
- 4 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り弱い
少量の径1~2mm程度の赤褐色スコリア。多量の径2~50mm程度のY相当土層が混じる。
- 5 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り弱い
少量の径1~2mm程度の赤褐色スコリア。燻色に径20~30mm程度のY相当土層が混じる。
- 6 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り弱い
燻色の径1~2mm程度の赤褐色スコリアを含み。少量の径1~2mm程度のY相当土層が混じる。
- 7 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・粘り弱い
少量の径1~2mm程度のY相当土層が混じる。
- 8 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り弱い
少量の径1~2mm程度のY相当土層が混じる。
- 9 褐色(10YR4/4)土層 粘性有り・粘り弱い
多量の径1~2mm程度のY相当土層が混じる。

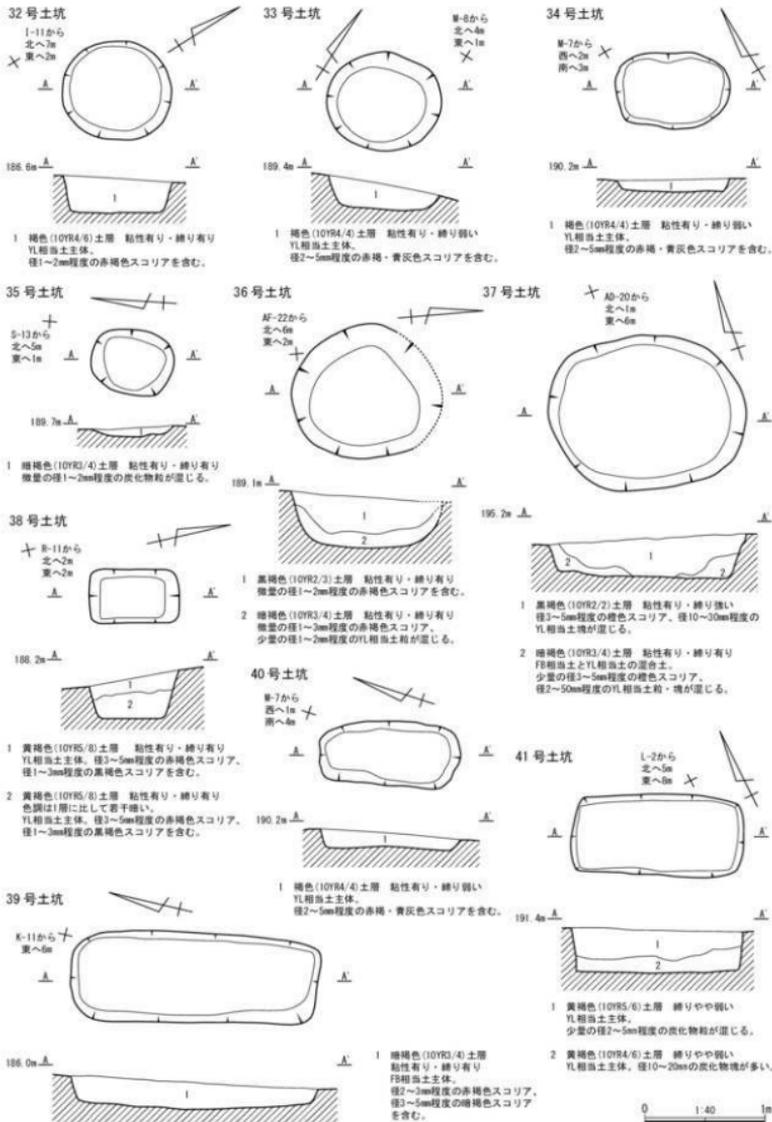
31号土坑



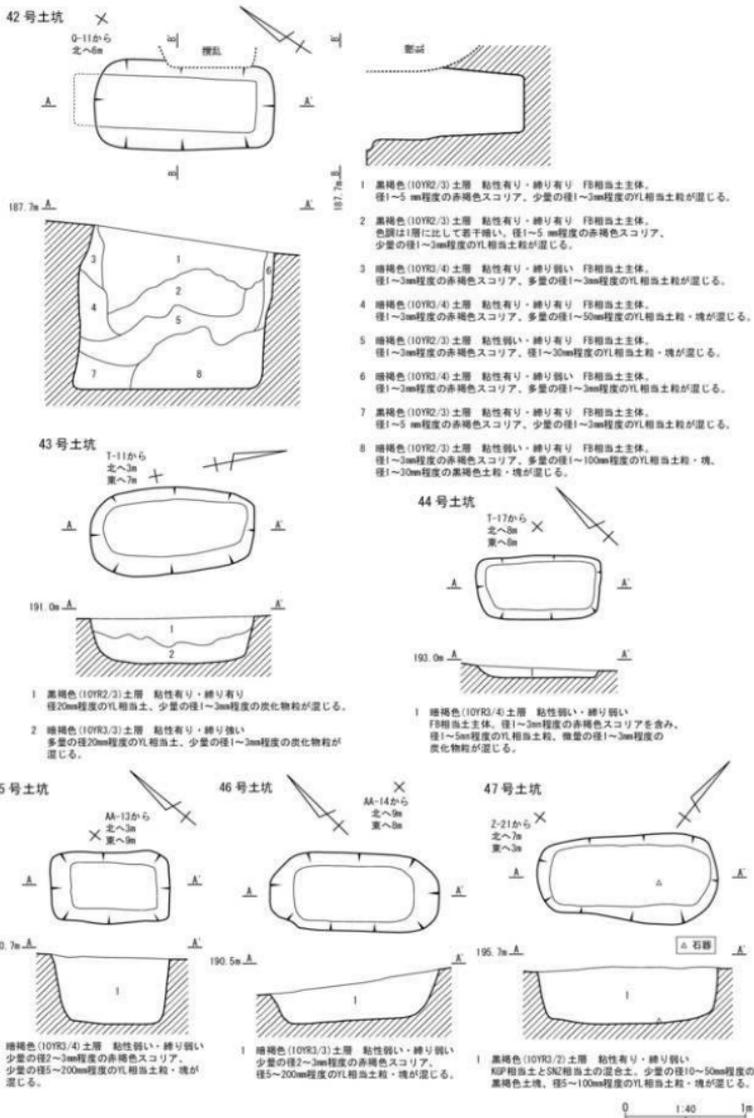
- 1 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り弱い
FB相当土主体。径1~3mm程度の赤褐色スコリア。径1~50mm程度のY相当土層・塊が混じる。
- 2 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り弱い
FB相当土主体。径1~3mm程度の赤褐色スコリア。少量の径1~5mm程度のY相当土層が混じる。
- 3 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・粘り弱い
FB相当土主体。径1~3mm程度の赤褐色スコリア。径1~50mm程度のY相当土層・塊が混じる。

0 1 40 1m

第70図 縄文時代の土坑6

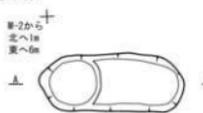


第71図 縄文時代の土坑7



第 72 図 縄文時代の土坑 8

48号土坑



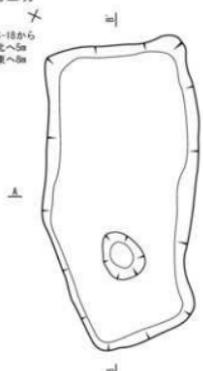
1 褐色(10YR4/6)土層 粘性強い・練り有り
落ち込んだYLM相当土。
径2~3mm程度の赤褐色スコリア。
径3~5mm程度の黄灰色スコリアを含む。

49号土坑



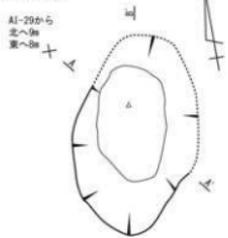
1 褐色(10YR4/6)土層 粘性有り・練り弱い
YLM相当土主体。多量の径2~5mm程度の
赤褐・黄灰色スコリアを含む。

51号土坑

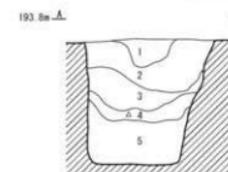


1 暗褐色(10YR2/3)土層 粘性弱い・練り有り FR相当土主体。
少量の径1~2mm程度の赤褐色スコリアを含み、少量の径2~5mm程度の
黄褐色土粒が混じる。

50号土坑



AI-29から
北へ8m
東へ8m



1 麻相当土
2 粘相当土
3 暗褐色(10YR2/4)土層 粘性無し・練り強い
少量の径2~3mm程度の褐色スコリア。
多量の径2~3mm程度の炭化植物が混じる。
4 暗褐色(10YR2/4)土層 粘性無し・練り強い
少量の径2~3mm程度の褐色スコリア。
多量の径2~3mm程度の炭化植物が混じる。
5 褐色(7.5YR4/6)土層 粘性強い・練り弱い
少量の径5mm程度の褐色スコリア。
少量の径5mm程度の炭化植物が混じる。

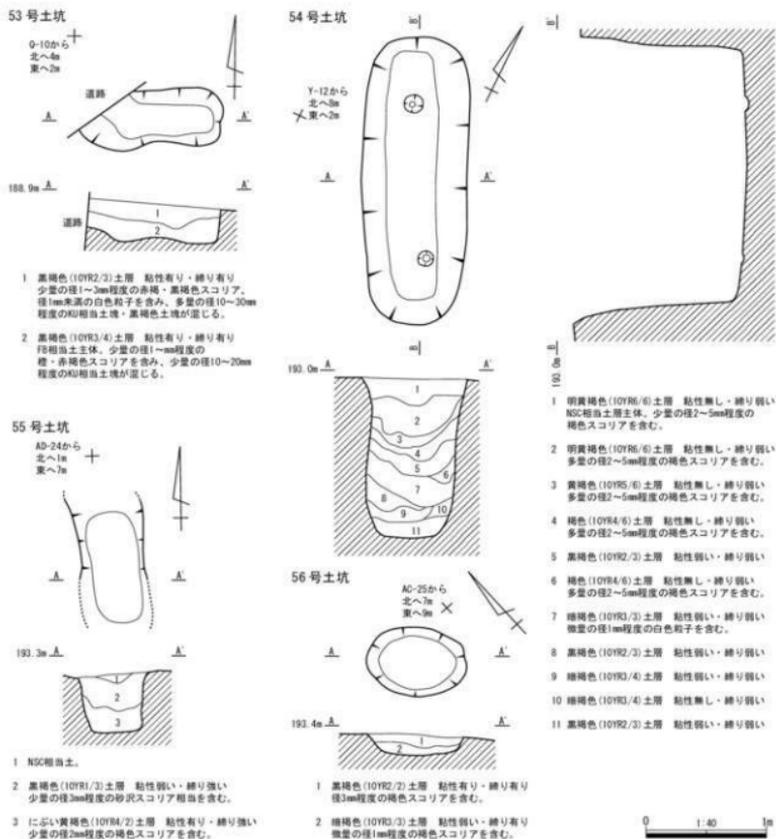
52号土坑



1 黒褐色(10YR2/3)土層 粘性有り・練り有り
FR相当土主体。径1~3mm程度の赤褐色スコリア。
多量の径10~50mm程度のYLM相当土塊。
微量の径1~2mm程度の炭化植物が混じる。
2 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・練り有り
FR相当土主体。径1~3mm程度の赤褐色スコリア。
少量の径1~3mm程度のYLM相当土粒が混じる。
3 暗褐色(10YR3/4)土層 粘性有り・練り有り
FR相当土主体。径1~3mm程度の赤褐色スコリア。
多量の径1~3mm程度のYLM相当土粒が混じる。
4 に近い黄褐色(10YR4/2)土層 粘性有り・練り有り
径1~5mm程度の赤褐色スコリア。径1~3mm程度の
黒褐色スコリアを含み、径1~20mm程度の
FR相当土粒・塊が混じる。



第 73 図 縄文時代の土坑 9



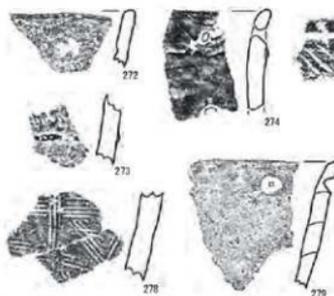
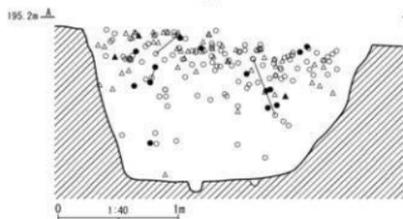
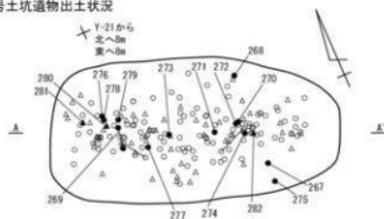
第74図 縄文時代の土坑10

1.25m、深さ0.20mを測る。底面に小土坑を設けている。これらB-3類土坑のうち土器が出土したのは53号土坑である。298・299は縄文土器である。両者とも型式が不明であるが、縄文時代前期の所産と考えられる。298は縄文が施されているが、判断としない。

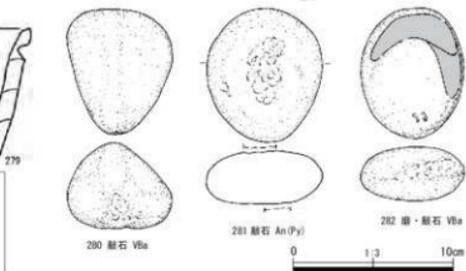
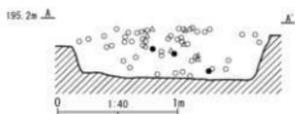
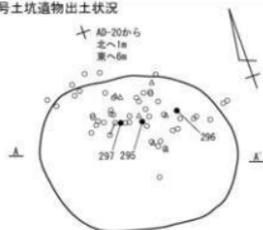
縄文時代後期以降の土坑 (第74・76図 写真図版36)

54~56号土坑はカワゴ平バミス層上面で確認された土坑である。なかでもA-2類に分類した54号土坑は陥穴と考えられ、東支谷でも東尾根と中央尾根に挟まれた区域に位置している。長径2.42m、短径0.89m、深さ1.34mを測る。底面に浅い小穴が2基間隔を開けて設けられている。覆土は11層に分層され、第1層は新期スコリア層を主体であるため、スコリア降灰時には既に陥穴としての機能は完全に失われていたと理解する。55号土坑も同様で覆土第1層に新期スコリア層が認められる。

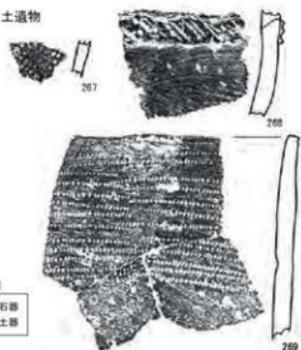
18号土坑遺物出土状況



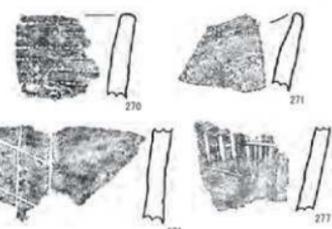
37号土坑遺物出土状況



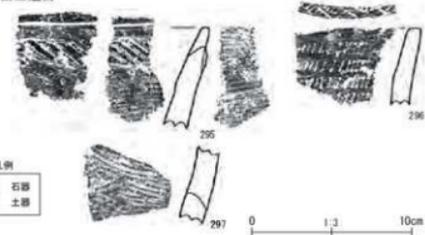
出土遺物



凡例
 ▲ △ 石器
 ● ○ 土器

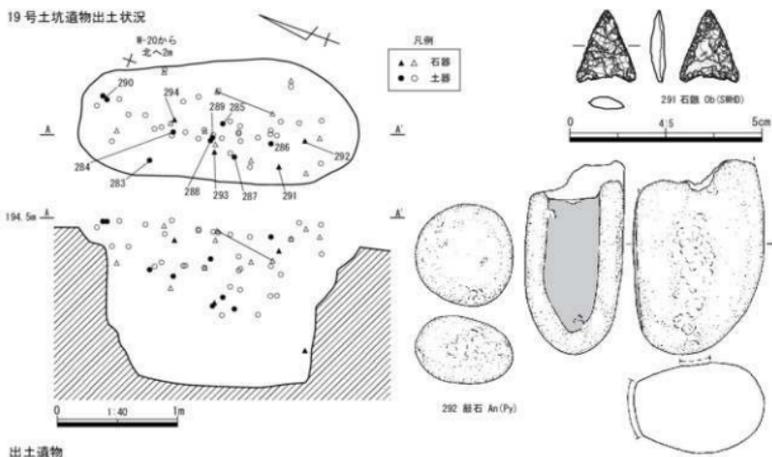


出土遺物

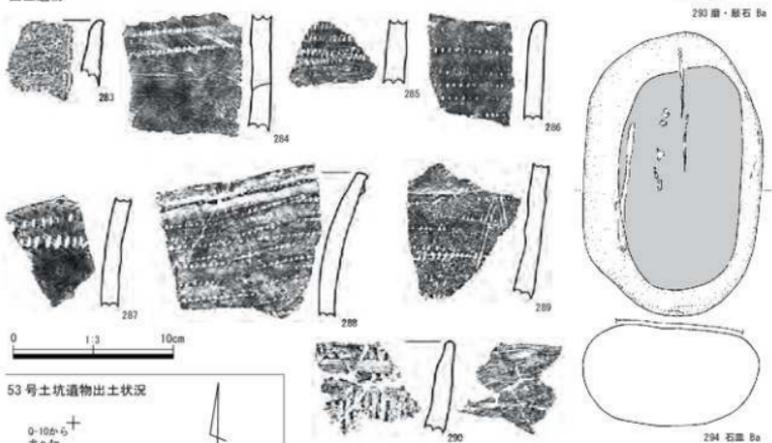


第75図 縄文時代の土坑遺物出土状況と出土遺物 1

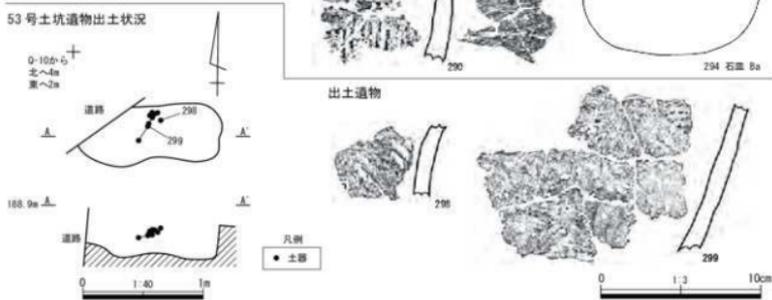
19号土坑遺物出土状況



出土遺物



53号土坑遺物出土状況



第76図 縄文時代の土坑遺物出土状況と出土遺物2

1号炉跡



188.5m A



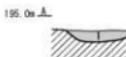
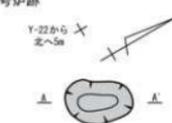
- 1 褐色(10YR4/4)土層 粘性弱い・締り強い
珪相当主主体。
少量の径1~2mm程度の焼土粒が混じる。
- 2 褐色(10YR4/4)土層 粘性有り・締り強い
珪相当主主体。
径1~2mm程度の焼土粒が混じる。

4号炉跡



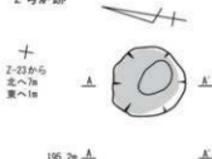
- 1 暗赤褐色(5YR3/3)土層 粘性無し・締り有り
径5~10mm程度の焼土粒・塊。
少量の径1~2mm程度の炭化物が混じる。
- 2 暗褐色(10YR2/3)土層 粘性有り・締り強い
少量の径1mm程度の焼土粒。
微量の径0.5~1mm程度の炭化物が混じる。

7号炉跡

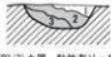


- 1 暗赤褐色(5YR3/6)土層 粘性弱い・締り有り
焼成層。
微量の径0.5~1mm程度の炭化物が混じる。

2号炉跡

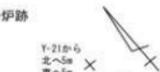


195.2m A



- 1 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・締り強い
少量の径1~10mm程度の焼土粒・塊。
微量の径0.5~1mm程度の炭化物が混じる。
- 2 暗赤褐色(5YR3/4)土層 粘性弱い・締り有り
多量の径1~10mm程度の焼土粒・塊が混じる。
焼土と珪相当土の混生土。
- 3 暗赤褐色(5YR3/4)土層 粘性無し・締り強い
多量の径1~5mm程度の焼土粒・塊。
微量の径0.5~2mm程度の炭化物が混じる。

5号炉跡



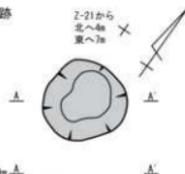
- 1 暗赤褐色(5YR3/6)土層 粘性有り・締り有り
少量の径1~2mm程度の暗褐色スコリア。
径1~2mm程度の焼土粒が混じる。
- 2 高褐色(10YR2/3)土層 粘性弱い・締り強い
径1~2mm程度の焼土粒が混じる。
- 3 暗赤褐色(5YR3/3)土層 粘性有り・締り有り
少量の径1~2mm程度の暗褐色スコリア。
径1~2mm程度の焼土粒が混じる。

8号炉跡



- 1 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性有り・締り有り
径1~10mm程度の焼土粒・塊。
微量の径5mm程度の炭化物が混じる。

3号炉跡



195.9m A



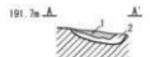
- 1 暗赤褐色(5YR3/4)土層 粘性有り・締り強い
径3~10mm程度の焼土粒・塊。
少量の径0.5~1mm程度の炭化物が混じる。
- 2 暗赤褐色(5YR3/4)土層 粘性無し・締り有り
多量の径5~10mm程度の焼土粒。
微量の径0.5~1mm程度の炭化物が混じる。

6号炉跡



- 1 暗赤褐色(5YR3/6)土層 粘性有り・締り強い
径1~10mm程度の焼土粒・塊。
径1~5mm程度の炭化物が混じる。

9号炉跡



- 1 焼土集中(5YR5/8)土層
発達した焼土塊が深く集中する。
- 2 褐色(10YR4/4)土層 粘性無し・締り強い
少量の径1~2mm程度の焼土粒。
少量の径1~2mm程度の炭化物が混じる。



第77図 縄文時代の炉跡 1

4 炉跡 (F P)

縄文時代の炉跡と考えられる遺構は20基を数え、そのうち15基について図化している。炉跡は主に中央尾根にて多く確認されているが、谷地形内部でも確認されている。炉跡の平面形態では主に楕円形・円形・不定形の3タイプに分類が可能である。削平・攪乱等により破壊されずに検出された炉跡の計測値では、大部分の炉跡は長径0.4~1.0m、短径0.3~0.7m程度の大きさである。また炉石等の存在は判然としなかった。そもそも狩猟用の陥穴とは異なり、炉自体が深度を必要としないため、炉跡を確認した層面がさほど該期の生活面との高低差が少ないものと想像される。なお炉跡は現地調査時には「焼土」と呼称していたが、報告書刊行にあたり「炉跡」として名称を変更している。

縄文時代前期までの炉跡 (第77・78図 写真図版37)

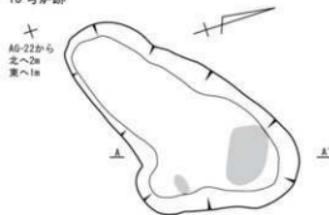
1~7号炉跡は休場層上部上面で検出した炉跡である。1号炉跡はR-12グリッド、西支谷内に、2・3・5~7号炉跡は中央尾根、4号炉跡はAN-22、北尾根に位置している。1号炉跡周囲には3・8・20号土坑等陥穴と思しき遺構が散在している。また中央尾根では竪穴住居跡が散在しているが、6号炉跡は22号住居跡、7号炉跡は25号住居跡と近接しており時期差の存在が想起される。4号炉跡が位置する北尾根では集石遺構が散見されるが、この11・12号集石は栗色土層~富士黒土層付近で検出されており、炉跡との時期差について慎重に判断しなければならない。

8~10号炉跡は富士黒土層~栗色土層~黒色土層で検出した炉跡である。Z-22グリッド、中央尾根(北)に位置する8号炉跡は富士黒土層上面で検出している。周囲に竪穴住居跡が散見され、同時に営まれた可能性が検討される。J-2グリッド、西尾根(北)に位置する9号炉跡は栗色土層上面で検出している。付近に17~19号住居跡が位置しているが、これらは早期代の住居跡と推定されるため、同時期である可能性は低い。10号炉跡はAG-22グリッド、東支谷に位置している。平面形は一部が膨張した長楕円形を呈し、長径2.22m、短径0.99m、深さ0.20mを測り、ひときわ規模の大きい炉跡と言えるが、この土坑状の掘り込みの大部分は黒褐色土が堆積し、炉として機能したのはごく一部である。この10号炉跡は5号集石に近接しているものの、10号炉跡は栗色土層、5号集石は休場層上部上面での検出であるため、時期差が存在する可能性がある。なおこの炉跡は東支谷内の斜面地に位置するため、降雨時における地表面流水の影響を食い止める施設の存在が想起される。

縄文時代中期以降の炉跡 (第78図 写真図版37)

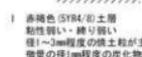
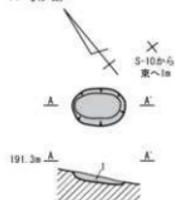
11~15号炉跡は黒色土層~カワゴ平バミス層上面で検出した炉跡である。11・12号土坑は西尾根(北)から西支谷付近にて検出された。共に黒色土層上面にて検出した。付近には中期以降の遺構の分布が見られない。13~15号炉跡は西支谷、東尾根と北尾根の狭い区域に位置する。これらはカワゴ平バミス層上面で検出されたもので、周囲には縄文時代中期以降の所産と考えられる55・56号土坑や埋蔵が位置しており、当該時期におけるこの区域の土地利用が理解される。またこの遺構群の下位、富士黒土層から休場層上部上面にかけて21号集石が確認されており、当該区域の利用について一考を要する。

10号炉跡



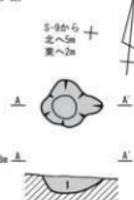
- 1 赤褐色(SYR4/6)土層 粘性有り・練り弱い
- 2 黒褐色(10YR2/2)土層 粘性有り・練り有り 径1~10mm程度の焼土粒・塊、少量の径1~2mm程度の炭化植物が混じる。

11号炉跡



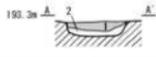
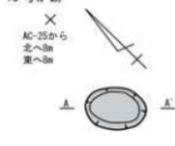
- 1 赤褐色(SYR4/6)土層 粘性弱い・練り弱い 径1~3mm程度の焼土粒が主体、微量の径1mm程度の炭化植物が混じる。

12号炉跡



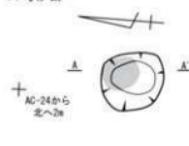
- 1 明赤褐色(SYR5/6)土層 粘性弱い・練り弱い 径3~20mm程度の焼土粒・塊が主体、径2~3mm程度の炭化植物が混じる。

13号炉跡



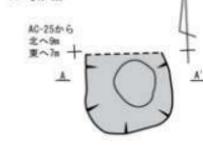
- 1 暗褐色(10YR2/3)土層 粘性有り・練り有り 少量の径1~2mm程度の褐色スコリア、径1~2mm程度の焼土粒が混じる。
- 2 黒褐色(10YR2/3)土層 粘性弱い・練り強い 少量の径1~2mm程度の焼土粒が混じる。

14号炉跡



- 1 にぶい黄褐色(10YR4/3)土層 粘性無し・練り有り 少量の径1mm程度の焼土粒が混じる。
- 2 にぶい黄褐色(10YR4/3)土層 粘性有り・練り有り 多量の径2~20mm程度の焼土粒・塊、少量の径5mm程度の炭化植物が混じる。
- 3 暗褐色(10YR2/3)土層 粘性弱い・練り有り 微量の径0.5~1mm程度の焼土粒が混じる。

15号炉跡



- 1 黒褐色(10YR2/3)土層 粘性無し・練り有り 少量の径3mm程度の褐色スコリアを含む。
- 2 明赤褐色(2.5YR5/6)土層 粘性無し・練り有り 焼土層中層、多量の径2mm程度の炭化植物が混じる。
- 3 暗褐色(10YR2/3)土層 粘性有り・練り強い 少量の径2mm程度の焼土粒、径50mm程度の黒色土塊が混じる。

0 1:40 1m



第 78 図 縄文時代の炉跡 2

5 竪穴状遺構

竪穴状遺構は現地調査の段階にて、竪穴住居跡と断定できなかつたものである。性格としては住居跡として機能した可能性があるが、当該報告では調査時の所見を尊重し、竪穴状遺構として報告する。

1号竪穴状遺構（第79図 写真図版38）

当該遺構はZW-0グリッドにて検出した。西尾根（南）に位置し、当該発掘調査で最も南で検出された遺構である。遺構の平面形は隅丸方形を呈する。遺構の計測値は長さ1.94m、幅1.84m、残存する壁の高さは最高0.11mを測る。遺構内には柱穴・壁溝・炉跡等は確認されていない。覆土第1層を除去したところ、硬化面（第2層）が広がることが判明した。この層と第3層を除去し、遺構の掘り方底面が検出された。従って硬化面を遺構が機能した際の面とするならば、第3層は貼床であった可能性が想起される。遺物は出土していないが、この遺構は休場層上部上面にて検出され、覆土第1層が富士黒土層に由来し、また第Ⅱ群9類に分類した縄文時代早期後半の粕畑式土器の分布域に該当するため、該期に位置付ける事も可能である。西尾根には17～19号住居跡が位置しているが、当該遺構と約130m隔てており、別個の遺構群と考えたい。

2号竪穴状遺構（第79図 写真図版38・62）

当該遺構はW-20グリッドにて検出した。中央尾根（南）に位置し、付近には早期後半代にあたる9～14号住居跡が確認されたことから、この竪穴状遺構が、集落の一部を構成していたことがわかる。遺構の平面形は楕円形を呈する。遺構の計測値は長さ2.60m、幅2.16m、残存する壁の高さは最高0.18mを測る。遺構内には柱穴・壁溝・炉跡及び貼床は確認されていない。この遺構は富士黒土層下面から休場層上部上面にかけて検出されている。

当該遺構から出土した遺物の点数は土器19点、石器23点、礫4点で、そのうち土器2点、石器3点を図化した。300・301は縄文土器である。300は波状口縁か。緩く外反している。口唇部は平坦に仕上げている。外面には軸の無い絡条体圧痕文が横位に施されている。301は胴部のみ破片資料である。細隆起線文上とその上位に軸の無い絡条体圧痕文が施されている。300・301ともに第Ⅱ群2類の清水柳E類土器か。302～304は石器である。302・303は石核である。石材は2点とも神津島恩馳島群の黒曜石である。304は敲石である。石材は多孔質安山岩か。

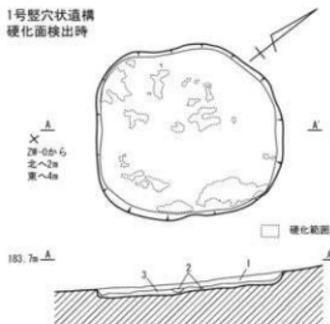
出土した土器から当該遺構は早期後半と考えられ、周囲の住居跡からも清水柳E類土器が多く出土している点から、同時期に機能したものであろう。

6 配石遺構（第80～82図 写真図版38・62・63）

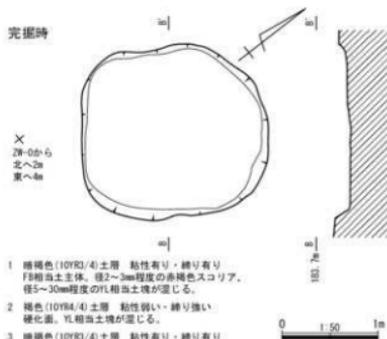
配石遺構は意図的に石（礫）が配列されたものを云い、集石とは区別される。しかし1号集石等のように意図的な石の配列が認められる遺構も存在するが、現地調査時の所見を尊重し、当該項においては触れない。

富士石遺跡において配石遺構とした遺構はA I・A J-21グリッドにて検出した。位置的には東支谷に位置し、この付近の地形は北尾根に向かって北北東方向へ地形が立ち上がっている。配石遺構の東北には23号集石が位置する。この配石遺構は概ね4m四方の範囲内に礫及び遺物が検出されたもので、比較的大きな礫がN-24°-Eの方向に列状をなして検出された。配石は新期スコリア層～栗色土層付近にて検出され、ほぼ重複するように炉跡が1基確認されている。この配石遺構内炉跡の平面形は歪な楕円形を呈する。遺構の計測値は長さ0.49m、幅0.35m、深さは0.05mを測る。炉跡内部から遺物は出土していない。

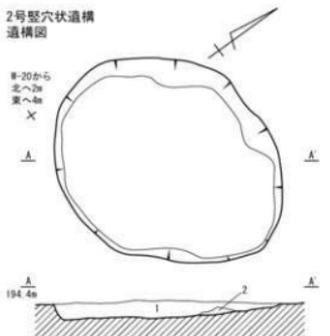
1号竪穴状遺構
硬化面検出時



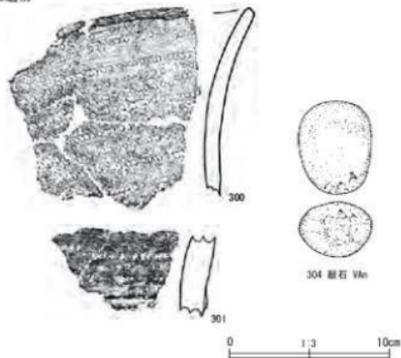
完掘時



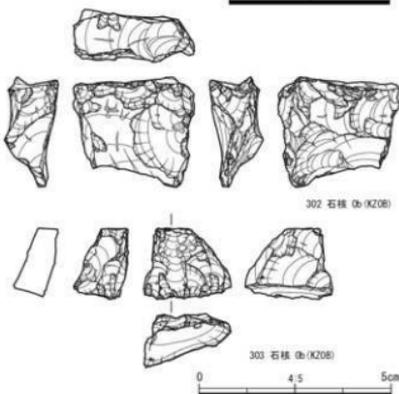
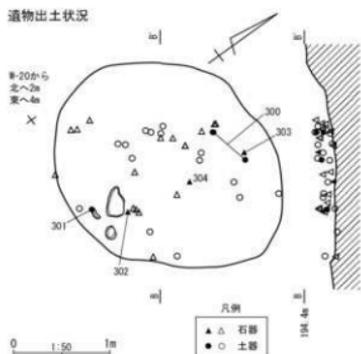
2号竪穴状遺構
遺構図



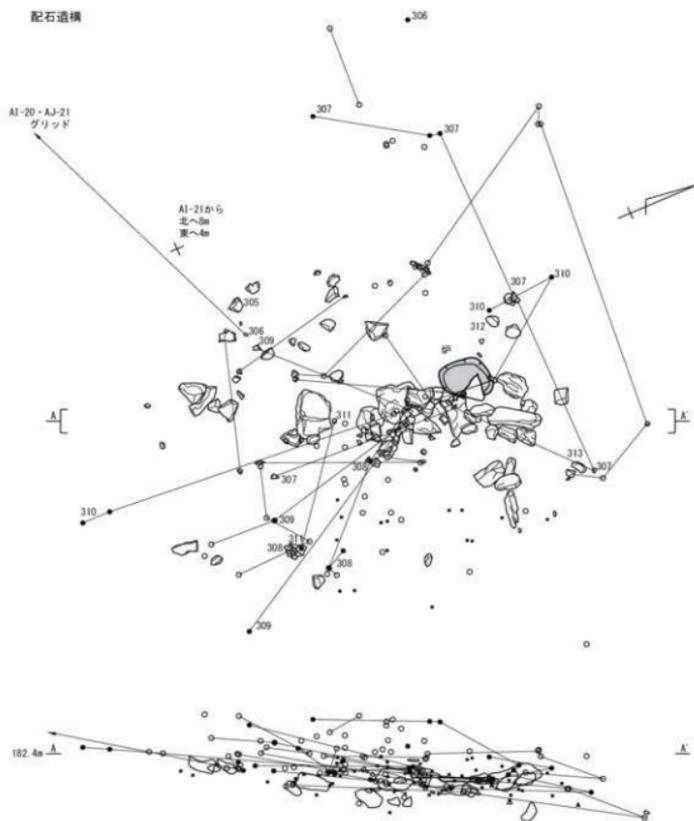
出土遺物



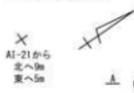
遺物出土状況



第79図 竪穴状遺構と出土遺物



配石遺構内炉跡



X AI-21から
北へ5m
東へ5m

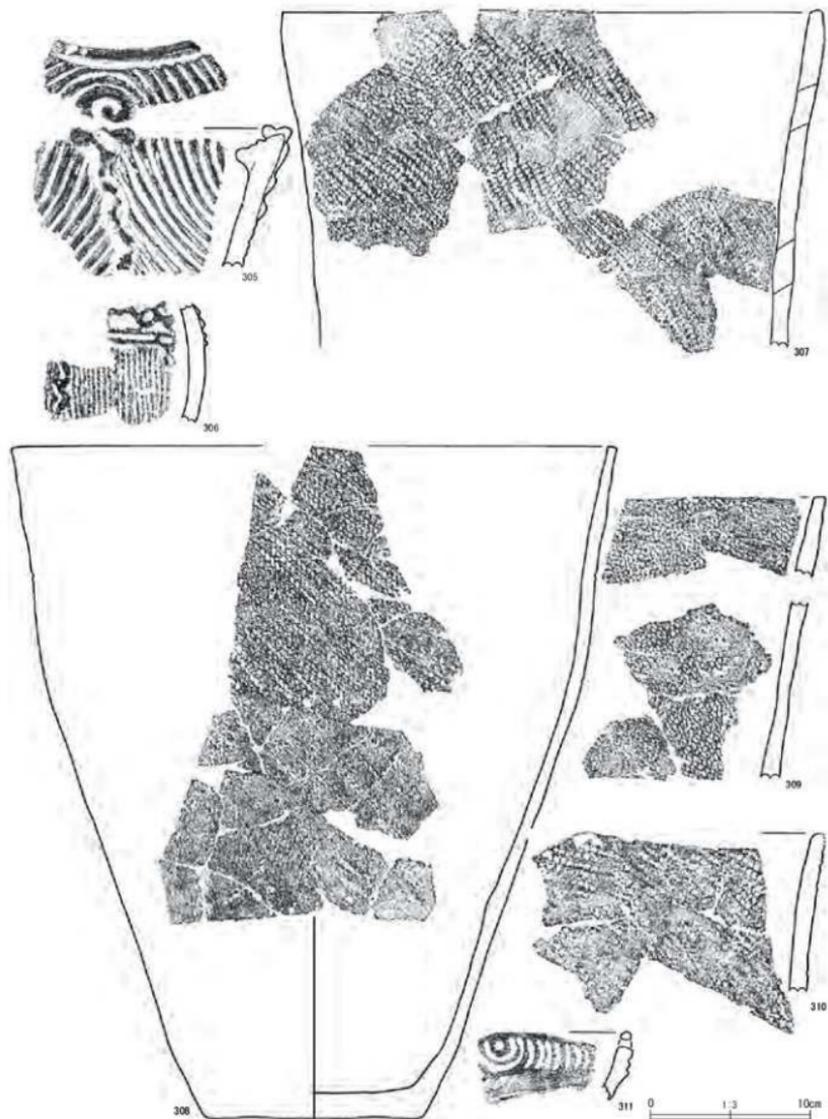
凡例

▲ △	石跡
● ○	土跡
■	礎
■	焼土範囲



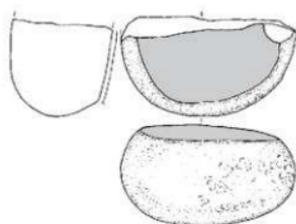
1 暗褐色(10YR2/4)土層 粘性弱い・練り有り
厚1~2m程度の焼土粒が混じる。

第80図 配石遺構

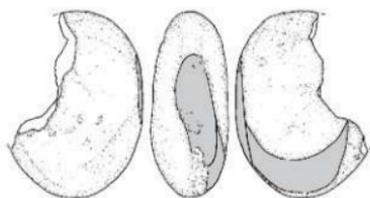


第81図 配石遺構出土遺物 1

配石遺構 出土遺物



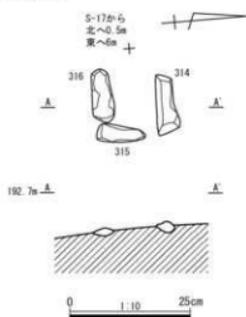
312 磨・敲石 An(Py)



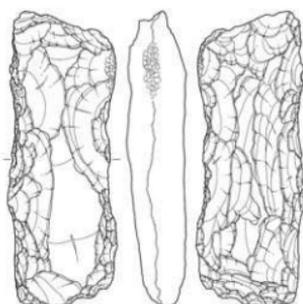
313 磨・敲石 V8a



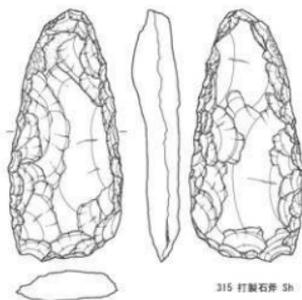
石斧埋納遺構



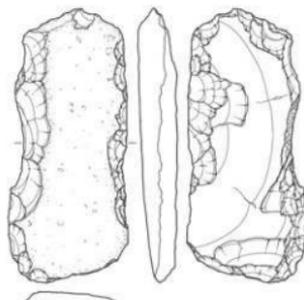
出土遺物



314 打製石斧 HSS



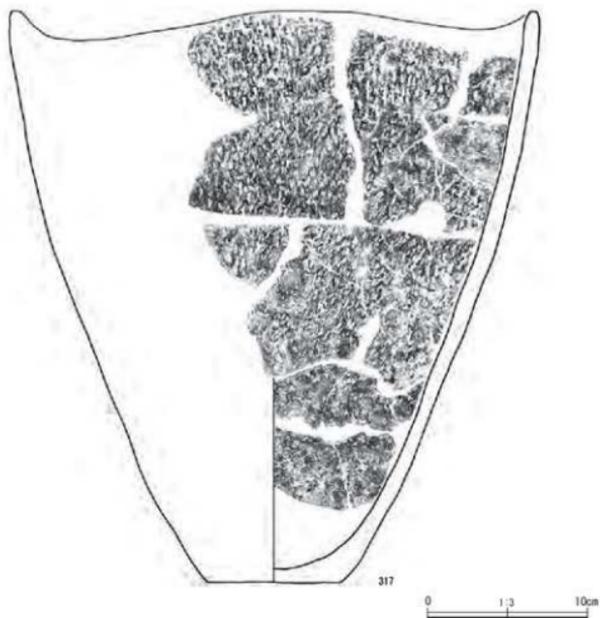
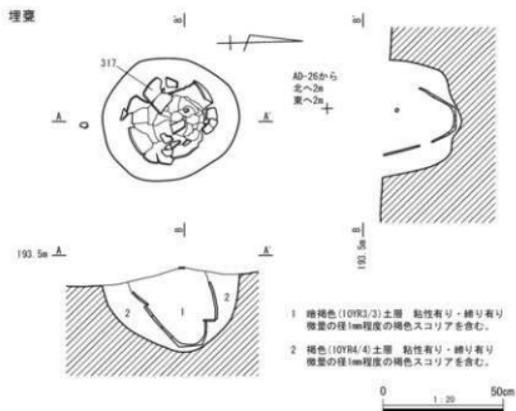
315 打製石斧 Sh



316 打製石斧 MGS



第82図 配石遺構出土遺物 2・石斧埋納遺構



第83図 埋室

配石遺構から出土した遺物の点数は土器139点、石器3点、礫75点で、そのうち土器7点、石器2点を図化した。305～311は縄文土器である。305は口縁部のみ破片資料である。口縁部は内折させ、半截竹管状の工具で重弧文を施す。口唇部には渦巻き状のモチーフが貼り付けられ、波状に隆帯を垂下させる。第Ⅶ群3類の曾利Ⅱ式土器か。306は胴部のみ破片資料である。細い粘土紐を波状に貼り付けられている。また細い半截竹管状の工具で、縦位に沈線を引いている。これも曾利Ⅱ式土器か。307～310は縄文のみ施した土器である。307は胴部中位から口縁部、308は底部から口縁部、309は胴部と口縁部、310は口縁部のみ破片資料である。307の胴部は直線的に立ち上げ、口唇部はやや丸く仕上げている。外面に縄文が施されている。308は平坦な底部から胴部を直線的に立ち上げ、胴部中位でやや傾きを変え、口唇部を平坦に仕上げている。外面口唇部直下から胴部下位に至るまで縄文が施されている。309は胴部から直線的に立ち上がり、口唇部が平坦に仕上げられている。外面にはRL縄文か。310は波状口縁で、波頂部が残存する。口唇部は僅かに丸みを帯び、外面にはRL縄文が施される。311は波状口縁で波頂部が残存する。段部を有し、波頂部直下に穿孔されている。穿孔部を中心に同心円及び連続して弧状に沈線が施されている。内面は丁寧に磨かれている。堀之内2式土器か。312・313は石器で、2点とも磨・敲石である。石材は輝石安山岩、多孔質玄武岩である。

遺物分布からは配石西側出土の破片資料レベルと配石付近出土の破片資料レベルに約0.4m程度の差が生じ、斜面地に起因するのか、本来的に窪み状の地形もしくは掘り込まれた地形が存在したのか判然としないものの、配石遺構中心に土器が散乱していた状況が看取される。また後期堀之内式土器の可能性のある311が出土している点も考慮する必要がある。

7 石斧埋納遺構（第82図 写真図版38・63）

当該遺構はS-17グリッドにて検出された。位置的には町道591号線東区と町道401号下南区が交差する場所である。調査時において、打製石斧が3点意図的に置かれた状態のまま検出されたと判断され、未検出なれど土坑状の掘り込みに埋納された可能性が想起された。位置的には中央尾根（南）の末端で、西支谷へ地形が傾いている。石斧が検出されたのはカワゴ平バミス層の下位で、石斧出土レベルは192.6～192.7m付近である。3本の打製石斧がコの字状に配置し、石斧々は主面を上に向けた状態で出土している。

出土した打製石斧は314～316である。314は短冊型を呈しており、基端部付近の側縁は敲打が加えられている。石材は硬質砂岩である。315は基端部を尖らせた所謂尖頭型か。主面の一部に礫面が残置する。石材は頁岩である。316は片側側縁中位に敲打痕が認められる。また礫面が大きく残置する主面がある。短冊型に分類可能である。石材は中粒砂岩である。

8 埋藏（第83図 写真図版39・63）

当該遺構はAD-26グリッドにて検出された。東支谷に位置するが、東尾根と中央尾根に挟まれた狭隘な区域である。黒色土層から暗褐色土層付近で検出された。土器は正位置に土坑内へ納められたもので、蓋若しくは蓋になり得る遺物は周辺から出土していない。土坑の平面形は円形である。最大径は0.59mで、深さは0.36mを測る。

埋納されていた土器317は底部から口縁部まで完存する。平坦な底部からほぼ直線的に立ち上がり、口唇部は丸く仕上げている。口縁部は緩やかな波状口縁である。外面口唇部直下から胴部中位まで縄文が施されている。型式名不明であるが中期代の土器と考え、第Ⅶ群に分類した。なお317には炭化物が付着しており、放射性炭素年代測定を実施（IAAA-92023）した。その結果、3,740±30yrBP、すなわち縄文時代後期前葉の¹⁴C年代が測定されている。

第2表 縄文時代住居跡計測表

遺構名	時期	グリッド	検出層位	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	平面形	土器	石器	礎	炭化物	計
1号住居跡	早期前半	V-17・18	YLU上面	3.37	3.07	0.14	円形	23	4	12		39
2号住居跡	早期前半	Z-22	YLU上面	2.87	2.16	0.20	隅丸長方形	2	3	1		6
3号住居跡	早期前半	X・Y-20	YLU上面	5.22	2.52	0.18	長楕円形	98	78	74		250
4号住居跡	早期後半	X・W-20・21	YLU上面	5.25	3.11	0.19	隅丸長方形	53	133	82	1	269
5号住居跡	早期後半	Z-22	YLU上面	3.35	2.46	0.16	長方形	18	49	18		85
6号住居跡	早期後半	W・X-19・20	YLU上面	3.70	2.99	0.33	隅丸長方形	148	69	17		234
7号住居跡	早期後半	Y-21	YLU上面	4.32	2.70	0.18	隅丸長方形	145	42	68		255
8号住居跡	早期後半	X-20・21	YLU上面	2.31	2.20	0.13	方形	3	13	9		25
9号住居跡	早期後半	W-20・21	YLU上面	3.65	3.25	0.18	方形	15	87	22		124
10号住居跡	早期後半	W-19・20	YLU上面	(5.83)	3.51	0.17	方形	123	96	63		282
11号住居跡	早期後半	V-20	YLU上面	2.62	2.62	0.18	隅丸長方形	14	15	14		43
12号住居跡	早期後半	W-21	YLU上面	3.93	3.83	0.13	方形	35	27	29		91
13号住居跡	早期後半	W-21	YLU上面	5.85	3.23	0.37	隅丸長方形	30	34	22		86
14号住居跡	早期	W-21	YLU上面 (1.30)	(0.69)	0.06	長方形	2					2
15号住居跡	早期	Y-19・20	YLU上面	4.14	2.72	0.16	隅丸長方形	4	18	8		30
16号住居跡	早期	U-18	YLU上面 (4.52)	(1.86)	0.15	長方形	1		1			2
17号住居跡	早期	J-1	YLU (3.50)	(2.05)	0.16	隅丸長方形			1	3	1	5
18号住居跡	早期	J-1	YLU (1.83)	1.89	0.17	楕円形			1	2		3
19号住居跡	早期	J-1	YLU 3.55	(2.41)	0.13	隅丸長方形				3		3
20号住居跡	前期前半	AA-21	YLU上面	3.15	(2.99)	0.21	方形	65	32	31		128
21号住居跡	前期	Z-21・22	YLU上面	4.18	3.38	0.22	隅丸長方形	32	61	23		116
22号住居跡	前期後半	AA-22・23	YLU上面	2.92	1.97	0.08	隅丸長方形	18	33	39		90
23号住居跡	前期	AA-21・23	YLU上面	3.17	2.91	0.27	方形	98	65	71		232
24号住居跡	前期前半	AA-21・22	YLU上面	3.15	2.75	0.13	方形	18	35	16		69
25号住居跡	前期	Y-21・22	YLU上面	5.55	4.45	0.20	隅丸長方形	140	82	11		233
26号住居跡	後期	AF-23・24	YLU上面	5.16	4.74	0.28	円形	61	10	38	7	116

第3表 縄文時代集石計測表

遺構名	分類	時期	グリッド	検出層位	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	平面形	土器	石器	礎	炭化物	計
1号集石	土域あり	～前期	D-1	KU	1.38	0.95	0.26	楕円形				172	172
2号集石		早期前半	Y-22	FB	1.25	1.07	0.21	楕円形	3	4	61		68
3号集石		早期前半	Y-22	FB下面	0.74	0.51	0.15	楕円形			4	194	198
4号集石		早期前半	Z-22	FB	1.40	1.37	0.17	円形	12	1	73		86
5号集石		～前期	AO-22	FB下面	0.54	0.46	0.08	楕円形				16	16
6号集石		～前期	AO-22	FB下面	0.62	0.44	0.08	楕円形	1		3		3
7号集石		～前期	AO-28	FB下面	0.87	0.60	0.10	楕円形	1		33	1	35
8号集石		～前期	AO-28	FB下面	0.56	0.44	0.08	楕円形				11	11
9号集石		～前期	AO-22	FB下面	1.08	0.83	0.17	楕円形				29	29
10号集石		～前期	AO-22	FB	1.60	1.33	0.45	楕円形				231	231
11号集石	～前期	AO-22	FB	0.79	0.58	0.27	楕円形	1	1	56		42	
12号集石	～前期	AO-22	FB	0.85	0.64	0.18	楕円形				42	42	
13号集石	前期以降	U-13	KU	2.32	1.31						23	23	
14号集石	～前期	H-2	FB	1.70	1.54	—		1			44	44	
15号集石	～前期	H-9	KU	1.70	1.06	—			2		73	75	
16号集石	～前期	N-5	KU	2.88	1.80	—		1	2		48	51	
17号集石	早期	AA-23	FB	0.64	0.45	—			1		7	8	
18号集石	～前期	AO-21	FB	0.64	0.43	—					14	14	
19号集石	～前期	AO-22	FB	0.63	0.24	—					1	1	
20号集石	早期前半	AO-20	FB下面	1.05	0.71	—			1	13		49	63
21号集石	早期前半	AO-25	FB	16.22	12.02	—		32	56	706		794	
22号集石	早期前半	AO-22	FB下面	7.71	7.00	—		16	26	355		397	
23号集石	土域あり	中期	AO-22	KU	1.82	1.60	0.44	円形	2	3	460		600

第4表 縄文時代土坑計測表

遺構名	分類	時期	グリッド	検出層位	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	逆茂木	土器	石器	礎	炭化物	計
1号土坑	A-1	～前期	U-14	BBU上面	0.86	0.85	0.58	1					
2号土坑		～前期	AI-23	YLU上面	0.97	0.69	0.40	1					
3号土坑		～前期	Q・R-13	YLU上面	1.28	0.84	0.72	1					
4号土坑		～前期	Y-12・13	YLU上面	1.29	0.95	0.62	1					
5号土坑	逆茂木1本	～前期	AI-20	YLU上面	1.20	0.90	0.53	1					
6号土坑		～前期	G-5	SC1上面	0.80	0.66	0.67	1					
7号土坑		～前期	AD-24	YLU上面	1.24	0.92	0.60	1					
8号土坑		～前期	R・S-12	SC1	1.31	0.58	0.90	2					
9号土坑	～前期	N-5	SC1上面	1.09	0.55	0.53	9						
10号土坑	～前期	M-4	SC1上面	0.92	0.48	0.39	7						
11号土坑	～前期	AF-18	SC1	1.42	1.40	0.14	9						
12号土坑	～前期	S-11	YLU上面	1.68	0.84	0.94	4						
13号土坑	早期	Z-22	SC1	1.60	0.53	0.28	2	9	1	11		21	
14号土坑	～前期	P-11	YLU上面	1.43	0.81	0.56	2					2	
15号土坑	～前期	AO-23	YLU上面	1.30	0.86	0.40	2						
16号土坑	～前期	AD-23	YLU上面	2.05	1.42	1.45	4					4	
17号土坑	～前期	W-9	SC1	2.28	0.85	1.13	2						
18号土坑	早期	Y-21	YLU上面	2.19	1.22	1.20	9	128	55	71		254	
19号土坑	早期	W-19・20	YLU上面	2.33	1.03	1.25	2	48	15	23		86	
20号土坑	～前期	R-12	SC1	1.36	1.18	1.21							
21号土坑	～前期	S-10	SC1	0.92	0.84	0.80							
22号土坑	～前期	AN・AO-22	SC1上面	0.88	0.72	0.60							
23号土坑	～前期	V-20	SC1上面	0.93	0.82	0.61							
24号土坑	～前期	R-16	SC1	0.66	0.54	0.31						1	
25号土坑	～前期	N-5	YLU上面	0.92	0.72	0.58							
26号土坑	～前期	M-5	YLU上面	0.87	0.83	0.46							

27号土坑	～前期	P-12	YLU上面	1.06	0.83	1.04													
28号土坑	～前期	X・Y-12	YLU上面	1.19	0.98	0.76													
29号土坑	～前期	P-11	YLU上面	0.87	0.81	0.75													
30号土坑	～前期	P-10	YLU上面	1.08	0.96	0.97													
31号土坑	～前期	X-11	YLM上面	0.68	0.45	0.34													
32号土坑	～前期	I-11	BB0	0.92	0.83	1.29													
33号土坑	～前期	M-8	SC1上面	0.96	0.84	0.22													
34号土坑	～前期	L-6	SC1上面	0.96	0.62	0.10													
35号土坑	～前期	S-13	SC1	0.55	0.55	0.67													
36号土坑	～前期	AF-22	YLU上面	1.26	1.14	0.43													
37号土坑	早期	AC・AD-20	YLU上面	1.66	1.32	0.32			5	7	22							34	
38号土坑	～前期	R-11	BB0上面	0.75	0.45	0.34													
39号土坑	～前期	J-11	NL	2.06	0.76	0.22													
40号土坑	～前期	L-6	SC1上面	1.18	0.48	0.12													
41号土坑	～前期	L-2	YLU上面	1.43	0.67	0.36													
42号土坑	～前期	Q-10・11	YLU上面	1.68	0.70	1.30													
43号土坑	～前期	T-11	YLM	1.36	0.72	0.58													
44号土坑	～前期	T-17	YLU上面	1.04	0.54	0.09													
45号土坑	～前期	AA-13	YLU上面	0.99	0.60	0.56													
46号土坑	～前期	AA-16	YLU上面	1.41	0.66	0.32													
47号土坑	～前期	Z-21	YLU上面	1.50	0.71	0.48													
48号土坑	～前期	M-2	BB0	1.20	0.49	0.25													
49号土坑	～前期	R-15	SC1上面	1.00	0.40	0.18													
50号土坑	～前期	AI-29	KU上面	1.68	1.00	1.06													
51号土坑	不定形	S-18・19	YLU上面	2.36	1.25	0.30													
52号土坑	～前期	Q-10	YLU上面	1.68	0.77	0.37													
53号土坑	前期	Q-10	KU	2.35	0.88	0.58			11										11
54号土坑	後期	Y-12	KGP	2.42	0.89	1.34													
55号土坑	後期	AC・AD-24	KGP	1.39	0.56	0.49													
56号土坑	後期	AC-25	KGP	0.81	0.60	0.18													

第5表 縄文時代炉跡計測表

遺構名	時期	クリップ	検出層位	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	土器	石器	礎	炭化物	計
1号炉跡	～前期	R-12	YLU	0.68	0.60	0.19					
2号炉跡	～前期	Z-23	YLU	0.61	0.58	0.20					
3号炉跡	～前期	Z-21	YLU	0.70	0.68	0.20					
4号炉跡	～前期	AN-22	FB・YLU	(0.44)	0.49	0.14	1		1		1
5号炉跡	～前期	Y-22	YLU	0.90	0.51	0.15					
6号炉跡	～前期	AA-22	YLU	0.90	0.66	0.14					
8号炉跡	～前期	Z-22	FB	0.60	0.46	0.09			1		1
9号炉跡	～前期	J-2	KU	0.46	(0.28)	0.09					
10号炉跡	～前期	AG-22	KU	2.22	0.99	0.20					
11号炉跡	中期	R-10	クワ	0.44	0.32	0.06					
12号炉跡	中期	S-9	クワ	0.51	0.40	0.14					
14号炉跡	後期	AC-24	KGP	0.56	0.48	0.17					
13号炉跡	後期	AC-25	KGP	0.60	0.36	0.12					
15号炉跡	後期	AC-25	KGP	(0.92)	0.81	0.24					

第6表 縄文時代竪穴状遺構計測表

遺構名	時期	クリップ	検出層位	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	平面形	土器	石器	礎	炭化物	計
1号竪穴状遺構	～前期	ZW-0	YLU	1.94	1.84	0.11	楕円方形					
2号竪穴状遺構	早期	W-20	YLU	2.60	2.16	0.18	楕円形	19	23	4		46

第7表 縄文時代配石遺構計測表

遺構名	時期	クリップ	検出層位	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	平面形	土器	石器	礎	炭化物	計
配石遺構	中期	AI・AJ-21	NSC	3.29	2.73	-	-	139	3	75		217

第8表 縄文時代石斧形納遺構計測表

遺構名	時期	クリップ	検出層位	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	平面形	土器	石器	礎	炭化物	計
石斧形納遺構	後期	S-17	KGP	0.18	0.15	-	-		3			3

第9表 縄文時代埋壘計測表

遺構名	時期	クリップ	検出層位	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	平面形	土器	石器	礎	炭化物	計
埋壘	中～後期	AD-26	クワ	0.57	0.49	0.36	円形	1				1

第10表 縄文時代遺構出土土器観察表

遺構名	探検 番号	図取 番号	分類 群 種	色調 (Hue)	文様調査等	纏 土
1号住居跡	1	44	I	7.5YR5/6	外面内面にL.Rの縄文。軽しような粘土。	少 白色粘片多
1号住居跡	2	44	I	7.5YR5/6	外面内面にL.Rの縄文。軽しような粘土。	少 白色粘片多
1号住居跡	3	44	I	5YR6/6	縦位置條に山形文。	多 白色粘片多、黒色粘片少、白色粘片多
2号住居跡	5	44	I	7.5YR5/6	横位置にオシボシ型文。	多 白色粘片多、白色粘片多
3号住居跡	7	45	I	6.5YR3/4	縦位に先型状工具による沈線文。	多 白色粘片多、黒色粘片少、赤色粘片多
3号住居跡	8	45	I	6.5YR5/6	縦位に先型状工具による沈線文。	多 白色粘片多、赤色粘片少
3号住居跡	9	45	I	6.5YR4/8	縦位に先型状工具による沈線文。	多 白色粘片多、黒色粘片少
3号住居跡	10	45	II	5YR5/6	隆帯上に絡糸体圧痕文。	多 白色粘片少、黒色粘片少、白色粘片多
3号住居跡	11	45	II	5YR4/3	口唇部と隆帯上に絡糸体圧痕文。	少 黒色粘片少、白色粘片多。
3号住居跡	12	45	III	7.5YR3/4	平縁。口唇部に類み。赤帯を施文。沈線文。刺突文。	多 白色粘片多、黒色粘片少、白色粘片多
3号住居跡	13	45	III	5YR5/6	無文。	多 白色粘片、黒色粘片、白色粘片多
3号住居跡	14	45	III	5YR5/6	無文。	多 白色粘片、黒色粘片、白色粘片
3号住居跡	15	45	III	5YR4/4	無文(胴部～底部付着)。	有 白色粘片、黒色粘片、白色粘片
4号住居跡	23	45	I	6.5YR5/6	外面に異方向の半籠竹管状の工具による沈線文。内面に赤帯文。	多 白色粘片、白色粘片多
4号住居跡	24	45	I	6.5YR4/4	異方向の沈線文。	多 白色粘片、白色粘片多
4号住居跡	25	45	I	6.5YR4/4	異方向の半籠竹管状の工具による沈線文。	多 白色粘片、白色粘片多
4号住居跡	26	45	II	7.5YR4/4	波状L.R線か。Rの絡糸体圧痕文。	多 白色粘片、白色粘片多
4号住居跡	27	45	II	5YR5/6	絡糸体圧痕文。	有 白色粘片、白色粘片
4号住居跡	28	45	III	7.5YR4/6	無文。	有 白色粘片、白色粘片多
4号住居跡	29	45	III	7.5YR4/4	波線部減少。	多 白色粘片、白色粘片多
5号住居跡	34	45	II	7.5YR5/3	Lの絡糸体圧痕文。	有 白色粘片
5号住居跡	35	45	II	5YR5/6	波頭部から縦線文が垂下。絡糸体圧痕文。	多 白色粘片少
5号住居跡	36	45	II	7.5YR5/4	横位・斜位の沈線文。	多 白色粘片多、黒色粘片多、白色粘片多
6号住居跡	41	46	II	5YR5/6	隆帯上に絡糸体圧痕文。	多 白色粘片少、黒色粘片少、白色粘片少
6号住居跡	42	46	II	10YR5/8	口唇部にLの絡糸体圧痕文。	有 白色粘片
6号住居跡	43	46	II	5YR4/4	Rの絡糸体圧痕文。	有 白色粘片、白色粘片
6号住居跡	44	46	II	5YR5/6	斜位にRの絡糸体圧痕文。	有 白色粘片、黒色粘片少、白色粘片多
6号住居跡	45	46	II	7.5YR5/6	横位にRの絡糸体圧痕文。	有 白色粘片、黒色粘片、白色粘片
6号住居跡	46	46	II	5YR5/6	斜位にRの絡糸体圧痕文。	多 白色粘片、白色粘片多
6号住居跡	47	46	II	10YR6/8	斜位にRの絡糸体圧痕文。	有 白色粘片、黒色粘片、白色粘片
6号住居跡	48	46	II	7.5YR3/2	横位・斜位にLの絡糸体圧痕文。	有 白色粘片、黒色粘片、白色粘片多
6号住居跡	49	46	II	7.5YR4/2	斜位にRの絡糸体圧痕文。	有 白色粘片、白色粘片
6号住居跡	50	46	II	7.5YR6/6	縦線起線文上にRの絡糸体圧痕文。斜位のRの絡糸体圧痕文。	有 白色粘片、白色粘片多
6号住居跡	51	46	II	7.5YR3/2	縦線起線文。斜位にLの絡糸体圧痕文。	多 白色粘片多、白色粘片多
6号住居跡	52	46	II	5YR5/6	横位・斜位の沈線文。横位にLの絡糸体圧痕文。	多 白色粘片、白色粘片多
6号住居跡	53	46	II	7.5YR4/3	口唇部に縦線起線文・棒状の沈線文。横位にLの絡糸体圧痕文。	多 白色粘片多、白色粘片多
6号住居跡	54	46	II	7.5YR3/2	口唇部・口唇部に沈線文・縦線起線文。横位にLの絡糸体圧痕文。	多 白色粘片多、白色粘片多
6号住居跡	55	46	II	7.5YR5/6	口唇部に矢羽状の沈線文。3本の縦線起線文。横位にRの絡糸体圧痕文。	有 白色粘片多、白色粘片多
6号住居跡	56	46	II	7.5YR5/6	横位の縦線起線文上位にRの絡糸体圧痕文・沈線文。	多 白色粘片、黒色粘片、白色粘片多
6号住居跡	57	46	II	7.5YR6/6	口唇部から外面に縦線起線文を垂下。口唇部に横位の縦線起線部付着。縦線起線文上に絡糸体圧痕文。	有 白色粘片多、黒色粘片、白色粘片多
6号住居跡	58	47	II	7.5YR5/3	口唇部に類み。口唇部に三条の横位の縦線起線文。	有 白色粘片、白色粘片
6号住居跡	59	47	II	7.5YR3/3	口唇部内面より外面に縦線起線文を垂下。口唇部に丸棒状工具による類み。	有 白色粘片、黒色粘片、白色粘片多
6号住居跡	60	47	II	7.5YR5/4	沈線文。	多 白色粘片、白色粘片多
6号住居跡	61	47	II	7.5YR4/6	波状L.R線。無文。	有 白色粘片、白色粘片多
6号住居跡	62	47	II	10YR4/6	無文。	多 白色粘片、白色粘片多
6号住居跡	63	47	II	7.5YR4/4	実地。無文。調整帯。	有 白色粘片、白色粘片
7号住居跡	68	48	II	7.5YR4/6	Rの絡糸体圧痕文。	有 白色粘片、黒色粘片、白色粘片多
7号住居跡	69	48	II	7.5YR4/4	波状L.R線。Rの絡糸体圧痕文。	多 白色粘片多、黒色粘片少、白色粘片多
7号住居跡	70	48	II	7.5YR4/3	口唇部と外面に太い輪を有するRの絡糸体圧痕文。	少 白色粘片多、白色粘片少。
7号住居跡	71	48	II	7.5YR4/4	横位にLの絡糸体圧痕文。穿孔有。	多 白色粘片少、白色粘片少
7号住居跡	72	48	II	7.5YR5/6	波状L.R線。Rの絡糸体圧痕文。穿孔連中。	少 白色粘片多、輝石少、白色粘片多
7号住居跡	73	48	II	7.5YR4/4	横位にRの絡糸体圧痕文。	少 白色粘片多、黒色粘片多、白色粘片多
7号住居跡	74	48	II	7.5YR4/4	横位にRの絡糸体圧痕文。	少 白色粘片多、赤色粘片多
7号住居跡	75	48	II	7.5YR5/4	Lの絡糸体圧痕文。	有 白色粘片多、白色粘片多、焼成不良
7号住居跡	76	48	II	7.5YR6/4	縦線起線文より下位に細い輪を有するRの絡糸体圧痕文。	少 白色粘片少、白色粘片多
7号住居跡	77	48	II	7.5YR4/4	斜め棒状の沈線文の下位に縦線起線文とRの絡糸体圧痕文。	多 白色粘片少、輝石少、白色粘片少、赤色粘片少
7号住居跡	78	48	II	7.5YR4/6	先型状工具による刺突文。	多 白色粘片、白色粘片多
7号住居跡	79	48	II	7.5YR5/6	外面内面に赤帯文。	少 白色粘片少、輝石少、白色粘片多
7号住居跡	80	48	II	7.5YR4/4	外面内面に赤帯文。	多 白色粘片、白色粘片多
7号住居跡	81	48	II	5YR5/6	斜位にRの絡糸体圧痕文。	多 白色粘片、白色粘片多
7号住居跡	82	48	III	10YR4/4	波状L.R線。外面無文。内面に赤帯文。	多 白色粘片、白色粘片
7号住居跡	83	48	III	7.5YR3/1	無文。	少 白色粘片、白色粘片多
7号住居跡	84	48	III	7.5YR4/3	無文。	有 白色粘片、白色粘片
7号住居跡	85	48	III	10YR6/6	無文。	多 白色粘片
8号住居跡	96	49	II	5YR3/1	横位にRの絡糸体圧痕文。	少 白色粘片多、輝石少、白色粘片少
9号住居跡	97	49	II	10YR4/6	横位にLの絡糸体圧痕文。穿孔有。	有 白色粘片多、黒色粘片、白色粘片
10号住居跡	104	50	II	7.5YR6/6	口唇部。Rの絡糸体圧痕文。	多 白色粘片多、黒色粘片、白色粘片多
10号住居跡	105	50	II	7.5YR6/6	横位にRの絡糸体圧痕文。	多 白色粘片、黒色粘片、白色粘片多
10号住居跡	106	50	II	7.5YR5/3	斜位にRの絡糸体圧痕文。	有 白色粘片、白色粘片
10号住居跡	107	50	II	5YR6/8	縦線起線文上にRの絡糸体圧痕文。	多 白色粘片、黒色粘片多、白色粘片多
10号住居跡	108	50	II	7.5YR6/6	縦線起線文上への絡糸体圧痕文。	有 白色粘片、黒色粘片、白色粘片
10号住居跡	109	50	II	7.5YR6/6	口唇部。外面に縦線起線文。Rの絡糸体圧痕文。	多 白色粘片、黒色粘片、白色粘片
10号住居跡	110	50	II	5YR6/8	口唇部。外面に縦線起線文。Rの絡糸体圧痕文。	有 白色粘片多

遺構名	探検 番号	図取 番号	分類 群 組	色調 (Hue)	文様調整等	構成	出土	
10号住居跡	111	50	II	2	7.5YR6/4	外面にRの碁条体圧痕文。枕縁文。	有	白色砂片多
10号住居跡	112	50	II	2	7.5YR5/4	縦線碁条より下位に碁条文。縦線碁条より下位に斜位にRの碁条体圧痕文。縦線碁条上にRの碁条体圧痕文。	有	白色砂子、白色砂片多
10号住居跡	113	50	II	2	5YR5/6	縦線碁条で区画。区画内にR碁条体圧痕文で充填。	有	白色砂子、白色砂片
10号住居跡	114	50	III	1	10YR6/6	表面。無文。	多	白色砂子多、白色砂片
11号住居跡	122	50	II	2	7.5YR5/6	Rの碁条体圧痕文。	多	白色砂子、黒色砂子、白色砂片
11号住居跡	123	50	III	1	5YR5/8	先削状の枕縁文。	多	白色砂子、黒色砂子、白色砂片
12号住居跡	128	51	II	2	7.5YR5/4	しの碁条体圧痕文。	多	白色砂子、黒色砂子、白色砂片多
12号住居跡	129	51	II	2	10YR6/6	Rの碁条体圧痕文。	有	白色砂子、黒色砂子、白色砂片
12号住居跡	130	51	II	2	7.5R4/6	溝状口縁。口唇部に陥み。縦線碁条文。縦線碁条より下位に斜位にLの碁条体圧痕文。	多	白色砂子多、黒色砂子、白色砂片多
12号住居跡	131	51	II	2	5YR3/4	口唇部。縦線碁条文上にRの碁条体圧痕文。	有	白色砂子多、黒色砂子、白色砂片多
12号住居跡	132	51	II	2	10YR5/8	口唇部。微隆起。穿孔有。	有	白色砂子、黒色砂子、白色砂片
12号住居跡	133	51	II	2	7.5YR4/3	斜位に交差する枕縁文。	多	白色砂子、黒色砂子、白色砂片多
12号住居跡	134	51	III	1	7.5YR5/8	条痕文。	多	白色砂子、黒色砂子
12号住居跡	135	51	III	1	10YR4/3	口唇部。無文。	有	白色砂子、黒色砂子、黄母
13号住居跡	138	51	II	2	7.5YR4/6	口唇部に先削状工具による陥み。縦線碁条文と下位にRの碁条体圧痕文。	多	白色砂子、黒色砂子、白色砂片
13号住居跡	139	51	II	2	10YR6/8	口唇部。2条の縦線碁条文。口唇部に縦線碁条より下位にRの碁条体圧痕文。	有	白色砂子、黒色砂子、白色砂片多
13号住居跡	140	51	III	1	7.5YR4/3	溝状口縁。条痕文。	有	白色砂子、黒色砂子、白色砂片
13号住居跡	141	51	III	1	5YR5/8	底部。無文。	有	白色砂子多、黒色砂子
20号住居跡	149	52	IV	1	10YR6/3	外面に斜位文。外面内面に指痕圧痕。	有	白色砂子、黄母、白色砂片
20号住居跡	150	52	IV	1	10YR6/4	外面に斜位文。僅かに縦線文。内面に指痕圧痕。	有	白色砂子、黒色砂子、黄母、白色砂片
20号住居跡	151	52	IV	1	10YR6/3	斜位文。	無	白色砂子多、白色砂片
20号住居跡	152	52	IV	1	10YR3/2	外面に連続した斜位文。内面に指痕圧痕。	無	白色砂子、黄母、白色砂片
20号住居跡	153	52	VI	1	7.5YR4/6	溝状口縁。無文。	有	白色砂子多、黒色砂子多、白色砂片
21号住居跡	160	52	IV	1	10YR7/6	斜位文。縦線文。	有	白色砂子、黒色砂子、白色砂片
21号住居跡	161	52	IV	2	10YR4/4	溝状口縁。口唇部に斜位文。3条の孔形斜位文。	有	白色砂子多、黒色砂子多、白色砂片多
21号住居跡	162	52	IV	4	10YR5/4	縦位にLのLの横文。注口あり。	有	白色砂子多、黒色砂子、白色砂片
21号住居跡	163	52	VI	1	7.5YR5/4	横文。	有	白色砂子多、黒色砂子多、黄母多、白色砂片
21号住居跡	164	52	VI	1	7.5YR5/4	しの横文。	有	白色砂子多、黒色砂子多
21号住居跡	165	52	VI	1	5YR5/6	溝状口縁。碁条体圧痕文。	有	白色砂子、黒色砂子、白色砂片、赤色砂片
22号住居跡	169	53	IV	2	7.5YR5/8	口唇部。3条の斜位文。	無	白色砂子多
22号住居跡	170	53	IV	1	5YR6/8	底部。横文。	多	白色砂子多、黒色砂子、白色砂片
22号住居跡	175	53	IV	2	5YR4/6	口唇部。孔形斜位文。	有	白色砂子多、黒色砂子多、白色砂片多
23号住居跡	176	53	IV	2	2.5Y4/3	口唇部。外面に斜位文。内面に指痕圧痕。	有	白色砂子、白色砂片
23号住居跡	177	53	IV	2	7.5YR5/4	斜位文。	有	白色砂子、黒色砂子、白色砂片
23号住居跡	178	53	IV	2	5YR4/8	先削状工具による斜位文。	有	白色砂子、黒色砂子、白色砂片
23号住居跡	179	53	IV	2	10YR6/3	口唇部。外面に先削状の斜位文。内面に指痕圧痕。	有	白色砂子多、黒色砂子多、白色砂片
23号住居跡	180	53	IV	2	7.5YR5/6	口唇部。先削状の斜位文。	有	白色砂子多、黒色砂子多
23号住居跡	181	53	IV	2	7.5YR5/6	先削状の斜位文。	有	白色砂子多、黒色砂子、白色砂片
23号住居跡	182	53	IV	2	7.5YR4/4	先削状の斜位文。	有	白色砂子多、黒色砂子、白色砂片
23号住居跡	183	53	IV	2	7.5YR5/6	横位に縦線碁条文。方形浮文か。斜位文。	有	白色砂子多、黒色砂子、白色砂片
23号住居跡	184	53	VI	1	5YR4/6	外面に斜位にLのLの横文。内面に指痕。	有	白色砂子多、黒色砂子多、白色砂片
24号住居跡	192	54	IV	2	7.5YR3/2	口唇部。斜位文。	有	白色砂子多、黒色砂子
24号住居跡	193	54	IV	2	7.5YR6/6	口唇部。斜位文。	有	白色砂子多、黒色砂子多、白色砂片
24号住居跡	194	54	VI	1	5YR4/6	口唇部。縦位にLのLの横文。	有	白色砂子多、黒色砂子、白色砂片
25号住居跡	198	55	IV	2	7.5YR6/6	溝状口縁。口唇部に陥み。3条の扁平な工具による斜位文。	無	白色砂子多、黒色砂子多、白色砂片
25号住居跡	199	55	IV	2	7.5YR4/3	溝状口縁。溝長手に交差。口唇部に陥み。外面に3条の孔形斜位文。隙間をつまみ。外面内面に指痕圧痕。	無	白色砂子少、黒色砂子少、黄母少
25号住居跡	200	55	IV	2	7.5YR4/6	口唇部。2条の扁平な工具による斜位文。	無	白色砂子多、黒色砂子多、白色砂片
25号住居跡	201	55	IV	2	7.5YR5/6	横位に2条の孔形斜位文。	無	白色砂子多、黒色砂子少、黄母少、白色砂片少
25号住居跡	202	55	IV	2	7.5YR5/6	口唇部。2条半月状斜位文。	無	白色砂子多、輝石多、白色砂片少
25号住居跡	203	55	IV	2	7.5YR4/4	口唇部。縦位した半月状斜位文。	少	白色砂子少、輝石少、白色砂片少
25号住居跡	204	55	IV	2	7.5YR5/4	2層縦線ゆが斜位文と縦位の斜位文の斜位文。指痕。穿孔あり。	少	白色砂子少、黒色砂子少、白色砂片多
25号住居跡	205	55	IV	2	7.5YR3/1	口唇部に陥み。2条の大きな斜位文。条痕文。	無	白色砂子多、黒色砂子、白色砂片多
25号住居跡	206	55	IV	2	10YR5/6	口唇部に陥み。6条の矢形斜位の斜位文。口唇部と胴部の境に段あり。	無	白色砂子少、黒色砂子少、白色砂片少
25号住居跡	207	55	IV	2	7.5YR4/2	口唇部に陥み。条痕文を地文とし、斜位文を横文。	無	白色砂子、赤色砂子、輝石少
25号住居跡	208	55	IV	2	2.5Y3/2	口唇部。3条の斜位文。口唇部の境に段あり。	有	白色砂子多、黒色砂子
25号住居跡	209	55	IV	2	7.5YR5/4	口唇部。先削状の斜位文。	有	白色砂子多、黒色砂子、白色砂片
25号住居跡	210	55	IV	2	10YR5/6	先削状の斜位文。	無	白色砂子多、黒色砂子、白色砂片少
25号住居跡	211	55	IV	2	7.5YR5/6	2層縦線(細やかな斜位文・粗長い斜位文)の斜位文。	無	白色砂子多、黒色砂子、白色砂片
25号住居跡	212	55	V	3	7.5YR4/4	RL・Lの横文を地文とし浮線文を横文。	無	白色砂子少、黒色砂子少、黄母多、白色砂片多
25号住居跡	213	56	V	3	5YR5/6	底部。浮線文を貼り付けた後に、Lの横文を横位に施文。	少	白色砂子少、黒色砂子少、黄母少、白色砂片多
25号住居跡	214	56	V	3	5YR5/6	底部。浮線文を貼り付けた後に、Lの横文を横位に施文。	少	白色砂子多、黒色砂子多、黄母少、白色砂片多
25号住居跡	215	55	VI	1	5YR5/6	口唇部にLの横文。RLとLの縦横文。	多	白色砂子多、黒色砂子多、白色砂片多
25号住居跡	216	55	VI	1	5YR3/3	口唇部。無階1の横文。	多	白色砂子多、黒色砂子多、白色砂片
25号住居跡	217	55	VI	1	10YR4/2	RLの横文。	多	白色砂子、黒色砂子、白色砂片
26号住居跡	229	57	IX	2	7.5YR4/4	1条の横文を横文。口唇部に1条の浮線文を横位に。2条の黄母と1条の黄母で3条の横線文。	無	白色砂子、黒色砂子、白色砂片、赤色砂片
4号集石	236	58	I	2	7.5YR4/4	口唇部。外面内面に格子目文。	有	白色砂子、黒色砂子、白色砂片
4号集石	237	58	I	2	5YR4/8	口唇部。格子目文。	多	白色砂子、黒色砂子、黄母、白色砂片
21号集石	242	59	I	6	10YR4/2	口唇部に斜位文。外面に縦位・斜位の縦線文。内面に条痕文。	有	白色砂子、赤色砂片
21号集石	243	59	III	1	5YR4/8	平底。	有	白色砂子、黒色砂子多、白色砂片
22号集石	258	60	VI	2	2.5YR4/8	平底。	有	白色砂子多、黒色砂子多、白色砂片多
23号集石	264	58	VI	2	10YR5/3	口唇部。大きく内湾した胴部に平部。縦線横文を施文後、大きい浮線を示す。口唇部までは斜かに再施される。口唇部はゆがや膨大。	無	白色砂子、黒色砂子、白色砂片

第3章 縄文時代の遺構と遺物

遺構名	探検 番号	図取 番号	分類	色調 (Hue)	文様調整等	織 居	粘土
184号土坑	367	61	I	2	7.5YR5/3	格子目文、軽しょうな粘土。	有 白色岩片
189号土坑	368	61	II	1	7.5YR5/4	外面の隆帯上に結糸体圧痕文。外面内面に条痕文。	有 白色粒子多、白色岩片多
189号土坑	369	61	II	2	7.5YR5/4	ゆるい波状線か、横位に口縁部より細い輪を有するRの結糸体圧痕文を施文。	有 白色粒子多、黒色粒子
189号土坑	270	61	II	2	7.5YR3/3	横位に細輪を有するRの結糸体圧痕文を施文。	有 白色粒子、黒色粒子多、白色岩片
189号土坑	271	61	II	2	5YR4/5	波状口縁。斜位にRの結糸体圧痕文。	有 白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多
189号土坑	272	61	II	2	7.5YR5/8	口縁部。斜位にRの結糸体圧痕文。	多 黒色粒子、白色岩片
189号土坑	273	61	II	2	7.5YR5/6	縦向き線上下及び上位に輪の無い結糸体圧痕文。	有 白色粒子多、黒色粒子少、白色岩片多
189号土坑	274	61	II	2	5YR6/8	口縁部。横位の縦向き線文・波線文。縦向き線上位に穿孔筋。	有 白色粒子、黒色粒子、白色岩片
189号土坑	275	61	II	2	7.5YR4/6	口唇部に刺突。口唇部直下から斜位の波線文。	少 白色粒子少、赤色岩片少
189号土坑	276	61	II	2	7.5YR5/4	格子状の波線文。	有 白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多
189号土坑	277	61	II	3	7.5YR4/4	縦波線文を施文。	多 白色粒子
189号土坑	278	61	II	11	5YR5/6	具收縮線により格子状に施文。	有 白色粒子、黒色粒子、白色岩片
189号土坑	279	61	III	7	5YR4/6	無文。穿孔（未貫通）。	多 白色粒子、黒色粒子、白色岩片
199号土坑	283	60	II	2	7.5YR6/4	波状口縁。太輪のRの結糸体圧痕文を施文。	有 白色粒子、黒色粒子、白色岩片多
199号土坑	284	60	II	2	5YR4/4	太輪のRの結糸体圧痕文を施文。	有 白色粒子、黒色粒子、白色岩片
199号土坑	285	60	II	2	5YR5/6	太輪の結糸体圧痕文を施文。	有 白色粒子、黒色粒子、白色岩片
199号土坑	286	60	II	2	5YR5/8	波状口縁。輪の無い結糸体圧痕文を施文。	有 白色粒子、黒色粒子、白色岩片
199号土坑	287	60	II	2	7.5YR4/4	輪の無い結糸体圧痕文を施文。	有 白色粒子、黒色粒子、白色岩片
199号土坑	288	60	II	2	7.5YR4/4	波状口縁。縦向き線文より下位に細輪のRの結糸体圧痕文を施文。	有 白色粒子多、黒色粒子、白色岩片多
199号土坑	289	60	II	2	7.5YR4/4	輪の無いRの結糸体圧痕文と格子目状の波線文を施文。	有 白色粒子、黒色粒子、白色岩片多
199号土坑	290	60	II	3	7.5YR5/3	口唇部の形状丸。縦波線を地文とし、その上に横位に磨り出し文を施文。	有 白色粒子多、黒色粒子、白色岩片
37号土坑	295	62	II	1	7.5YR5/4	口唇部に細み。隆帯上に斜位の波線文。外面に条痕文、内面に彫痕。	有 白色粒子多、白色岩片多
37号土坑	296	62	II	2	7.5YR4/2	口唇部と外面に格子状の結糸体圧痕文を横位に施文。	有 白色粒子、白色岩片多
37号土坑	297	62	III	7	7.5YR5/6	条痕文。	有 白色粒子多、黒色粒子、白色岩片
53号土坑	298	62	VI	5YR4/4	縄文を施文。	有 白色粒子、黒色粒子、白色岩片	
53号土坑	299	62	VI	5YR4/8	無文。	有 白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片	
2号期六状遺構	300	62	II	2	7.5YR5/6	波状口縁。輪の無いLの結糸体圧痕文を横位に施文。	有 白色粒子多、黒色粒子、白色岩片
2号期六状遺構	301	62	II	2	7.5YR4/4	縦向き線上下及び上位に輪の無いRの結糸体圧痕文を横位に施文。	有 白色粒子多、黒色粒子、白色岩片多
配石遺構	305	62	VB	3	7.5YR6/6	口縁部を内折、口唇部に渦巻状から波状に隆帯を垂下させ、平砥竹管の工具による条痕文を施文。	無 白色粒子、黒色粒子、雲母、白色岩片、赤色岩片
配石遺構	306	62	VB	3	2.5YR4/8	波状に隆帯を折付け、横位に平砥竹管の工具で波線文を施文。	無 白色粒子、黒色粒子多、雲母、白色岩片多
配石遺構	307	62	VB	7.5YR4/4	口縁部。RLの縄文を横位に施文。	無 白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多	
配石遺構	308	62	VB	10YR5/6	口縁部。RLの縄文を横位に施文。底部まで残存。	無 白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多	
配石遺構	309	62	VB	5YR5/6	口縁部。RLの縄文を横位に施文。	無 白色粒子、黒色粒子多、白色岩片	
配石遺構	310	62	VB	7.5YR5/8	波状口縁。RL縄文を横位に施文。	無 白色粒子、黒色粒子、白色岩片	
配石遺構	311	62	IX	3	5YR4/4	波状口縁。外面に穿孔を中心に同心円及び連続した弧状の波線文を施文。内面に磨き。	無 白色粒子多、黒色粒子、白色岩片
埋蔵	317	63	VB	7.5YR7/6	波状口縁。口縁部から胴部中位に縄文を施文。	無 白色粒子少、黒色粒子多、輝石少、白色岩片少	

第11表 縄文時代遺構出土石器計測表

遺構名	探検 番号	探検 図式	遺物番号	タイプ	器種	石材	産地	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	接合 番号	形状分類	
1号住居跡	6	44	22120	V-17	磨石・磨石類	Ba	85	58	29	290			棒槌 T+S	
2号住居跡	6	64	18458	X-22	磨石・磨石類	Py	118	43	19	145			棒槌 T	
3号住居跡	16	44	16204	X-20	磨石類	Ob	KZOB	26.2	24.6	11.1	5.0			
3号住居跡	17	44	16816	Y-20	磨石・磨石類	Ba	97	71	30	320			不定形 T+KT(2)	
3号住居跡	18	44	21566	Y-20	磨石・磨石類	An(Py)	91	81	35	390			扁平 T+S	
3号住居跡	19	44	16815	Y-20	磨石・磨石類	An(Py)	93	64	55	360			棒槌 TS(1)+T	
3号住居跡	20	44	16838	Y-20	磨石・磨石類	An(Py)	71	62	46	320			棒槌 TS(2)+T+S	
3号住居跡	21	44	21009	Y-20	磨石・磨石類	Ba	102	97	47	670			棒槌 TS(全)+T+S+KT(2)	
3号住居跡	22	44	21566	X-20	石類	An(Py)	209	206	85	836			B-1	
4号住居跡	20	45	18457	X-20	石類	Ob	HNHU	25.2	13.8	4.1	1.0			B-1
4号住居跡	31	45	16860	Y-20	石類	Ob	SWHD	22.5	20.6	6.9	2.8			A-2
4号住居跡	32	45	16961	X-20	石類	Hor	42.0	82.2	42.8	185.5			A-2	
4号住居跡	33	45	16960	X-20	磨石・磨石類	An(Py)	86	79	61	550			棒槌 TS(1)+T	
5号住居跡	37	45	16475	Z-22	石類	Ob	KZOB	19.6	16.1	4.5	1.0			B-1
5号住居跡	38	45	15341	Z-22	石類	GAn	25.7	13.0	3.5	0.9			B-1	
5号住居跡	39	45	15462	Z-22	磨石・磨石類	An(Py)	94	84	47	530			扁平 T+S	
5号住居跡	40	45	15461	Z-22	磨石・磨石類	Ba	92	76	37	350			扁平 T+S+KT(1)	
6号住居跡	64	47	22754	W-19	磨石・磨石類	VBa	80	123	49	600			扁平 TS(1)+T+S	
6号住居跡	65	47	22753	W-19	磨石・磨石類	An(Py)	116	91	41	730			扁平 TS(2)+T+S	
6号住居跡	66	47	22751	W-19	石類	An(Py)	298	247	111	11,730				
6号住居跡	67	47	22416	W-19	石類	VBa	296	196	77	5,190	267			
7号住居跡	80	49	14694	Y-21	石類	Ob	KZOB	20.6	14.3	4.2	1.0			B-1
7号住居跡	87	49	61506	Y-21	石類	GAn	22.2	16.1	4.4	1.2			B-1	
7号住居跡	88	49	61513	Y-21	磨石・磨石類	Sh(Re)	76	28	18	65			棒槌 T	
7号住居跡	89	49	58758	Y-21	磨石・磨石類	An(Py)	120	73	42	570			扁平 T	
7号住居跡	90	49	61504	Y-21	磨石・磨石類	An(Py)	105	76	50	600			厚ム T	
7号住居跡	91	49	54702	Y-21	磨石・磨石類	VBa	102	101	42	460			扁平 T+S	
7号住居跡	92	49	28737	Y-21	磨石・磨石類	Ba	82	66	45	380			棒槌 TS(1)+T	
7号住居跡	93	49	58759	Y-21	磨石・磨石類	VBa	91	71	44	420			棒槌 TS(1)+T+KT(1)	
7号住居跡	94	49	54700	Y-21	磨石・磨石類	FG	63	90	37	330			扁平 TS(2)+T+S	
7号住居跡	95	49	54696	Y-21	磨石・磨石類	Ba	66	62	57	320			棒槌 TS(全)+T	
9号住居跡	98	49	19347	W-20	石類	Ob	SWHD	18.4	16.8	3.3	0.6			B-2
9号住居跡	99	49	19342	W-20	石類	Ob	KZOB	14.1	13.9	3.1	0.4			B-2
9号住居跡	100	49	19333	W-20	石類	Ob	KZOB	22.0	19.0	7.7	2.9			B-2
9号住居跡	101	49	18934	W-20	石類	Ob	KZOB	21.9	26.1	11.7	6.0			B-2
9号住居跡	102	49	19361	W-20	磨石・磨石類	Ba	88	24	28	500			扁平 T	
9号住居跡	103	49	19364	W-20	磨石・磨石類	VBa	74	54	33	150			扁平 T+KT(1)	
10号住居跡	115	49	22711	W-20	スレイドパー	An(Py)	68.8	93.8	12.0	79.7			B-2	
10号住居跡	116	49	22626	W-20	棒槌	An(Py)	97.0	111.0	32.0	510.0				
10号住居跡	117	49	22635	W-20	磨石・磨石類	An(Py)	80	61	47	350			厚ム T	
10号住居跡	118	49	22636	W-20	磨石・磨石類	An(Py)	107	82	46	620			扁平 T+S	
10号住居跡	119	49	22634	W-20	磨石・磨石類	An(Py)	96	75	39	370			扁平 T+S+KS(1)	
10号住居跡	120	49	22627	W-20	磨石・磨石類	An(Py)	110	84	34	520			扁平 TS(2)+T+S+KT(1)	
10号住居跡	121	49	22661	W-20	石類	VBa	194	159	84	2,900				
11号住居跡	124	50	21700	W-20	スレイドパー	Ob	SWHD	43.6	17.6	5.9	3.3			B-1
11号住居跡	125	50	21703	W-20	石類	Ob	KZOB	19.5	18.0	15.4	6.6			A-2
11号住居跡	126	50	22965	V-20	磨石・磨石類	VBa	74	44	34	130			棒槌 T+KT(1)	
11号住居跡	127	50	21706	W-20	磨石・磨石類	An(Py)	95	75	64	620			不定形 T+KT(1)	
12号住居跡	136	51	22823	W-21	磨石・磨石類	An(Py)	103	84	39	540			扁平 T	
12号住居跡	137	51	22816	W-21	磨石・磨石類	VBa	78	102	42	480			扁平 T+S+KT(2)	
13号住居跡	142	51	22886	W-21	棒槌石類	Ob	KZOB	26.6	23.9	6.4	3.1			
13号住居跡	143	51	22836	W-21	棒槌石類	Ob	KZOB	25.7	16.8	11.1	4.0			
13号住居跡	144	51	22893	W-21	磨石・磨石類	An(Py)	126	74	75	1,020			棒槌 TS(1)+T	
13号住居跡	145	51	22876	W-21	磨石・磨石類	VBa	105	84	58	690			扁平 TS(2)+T+S+KT(1)	
15号住居跡	146	51	11214	Y-20	磨石・磨石類	An(Py)	62	84	43	340			扁平 T+S	
15号住居跡	147	51	11215	Y-20	磨石・磨石類	An(Py)	94	79	51	510			扁平 T+S+KT(1)	
17号住居跡	148	51	6643	J-1	台石	Ba	344	301	160	18,700				
20号住居跡	154	52	1772	AA-21	石類	Ob	SWHD	16.6	13.9	2.9	0.4			B-1
20号住居跡	155	52	46338	AA-21	石類	Ob	SWHD	22.9	17.4	3.8	1.1			B-2
20号住居跡	156	52	46332	AA-21	石類	Ob	KZOB	26.0	20.6	5.2	1.8			
20号住居跡	157	52	46337	AA-21	石類	Ob	KZOB	10.0	14.8	17.6	2.9			A-2
20号住居跡	158	52	46338	AA-21	磨石・磨石類	VBa	118	67	43	460			棒槌 TS(1)+T	
20号住居跡	159	52	46340	AA-21	石類	An(Py)	340	182	82	6,400				
21号住居跡	166	53	47516	Z-21	磨石・磨石類	An(Py)	80	83	75	630			棒槌 T	
21号住居跡	167	53	47485	Z-21	磨石・磨石類	An(Py)	80	67	65	470			棒槌 TS(1)+T	
21号住居跡	168	53	47508	Z-21	磨石・磨石類	An(Py)	115	73	50	670			扁平 TS(2)+T+S	
22号住居跡	171	53	58845	AA-22	石類	Ob	KZOB	11.5	10.2	2.6	0.2			B-2
22号住居跡	172	53	58855	AA-22	石類	Ob	KZOB	18.4	17.9	4.9	0.9			B-2
22号住居跡	173	53	60735	AB-25	磨石・磨石類	CSS	159	52	20	235	239		棒槌 T	
22号住居跡	174	53	60789	AA-22	磨石・磨石類	An(Py)	102	90	63	860			厚ム T	
23号住居跡	185	54	59032	AA-22	スレイドパー	Hor	53.4	86.7	14.0	52.3			A-2	
23号住居跡	186	54	54270	AA-22	磨石・磨石類	Ba	83	48	37	190			棒槌 T	
23号住居跡	187	54	59028	AA-22	磨石・磨石類	Ba	124	66	30	330			扁平 T+KT(2)	
23号住居跡	188	54	59092	AA-22	磨石・磨石類	Ba	87	68	35	290			扁平 T+KT(2)	
23号住居跡	189	54	59097	AA-22	磨石・磨石類	Ba	143	79	51	610			扁平 TS(2)+T+S	
23号住居跡	190	54	58561	AA-22	石類	An(Py)	475	306	147	37,500				
23号住居跡	191	54	58556	AA-22	石類	An(Py)	376	315	101	21,120				

第3章 縄文時代の遺構と遺物

遺構名	陣岡 緯度	陣岡 経度	調査 番号	遺物番号	大分県	遺物種	石材	推定産地	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	接合 番号	形状分類
24号住居跡	196	54	56802	AA-21	礫盤	FSS			28.0	65.0	35.0	318.4		
24号住居跡	196	54	58715	AA-22	磨石・磨石組	Ba			69	60	66	280		棒凸 TS(1)→T
24号住居跡	197	54	58716	AA-22	磨石・磨石組	Vba			189	59	59	770		棒凸 TS(多)→T
25号住居跡	218	56	60856	Y-22	石鏡	Ob	KZOB		21.9	12.6	4.0	0.8	B-1	
25号住居跡	219	56	57779	Y-21	石鏡	Ob	KZOB		19.7	11.8	3.7	0.6	B-1	
25号住居跡	229	56	60874	Y-22	石鏡	Ch			19.4	15.6	3.5	0.8	B-1	
25号住居跡	221	56	57814	Y-22	石鏡	Hor			27.8	48.3	29.5	48.9	A-2	
25号住居跡	222	56	60858	Y-22	磨石・磨石組	An(Py)			139	79	48	630		扁平 T
25号住居跡	223	56	60857	Y-22	磨石・磨石組	Ba			157	100	64	1240		厚凸 T
25号住居跡	224	56	57781	Y-21	磨石・磨石組	Vba			90	72	35	270		扁平 T+S+KT(1)
25号住居跡	225	56	57813	Y-22	磨石・磨石組	An(Py)			84	60	59	340		棒凸 TS(1)→T
25号住居跡	226	56	60911	Y-21	磨石・磨石組	Vba			96	64	42	430		棒凸 TS(2)→T
25号住居跡	227	56	44230	AB-24	磨石・磨石組	Vba			177	66	47	760	355	棒凸 TS(2)+T+S+KT(1)
25号住居跡	228	56	60879	Y-22	台石	VAn			495	203	83	23,000		
26号住居跡	230	57	33906	AP-23	打製石斧	MSS			133.4	59.0	20.3	181.5	248	C-2
26号住居跡	231	57	8675	AP-23	磨製石斧	Ga			125.0	55.0	32.0	356.7		
26号住居跡	232	57	40704	AP-23	磨石・磨石組	An(Py)			86	82	46	470		扁平 T+S
26号住居跡	233	57	40471	AP-23	磨石・磨石組	An(Py)			91	72	59	540		不定形 TS(2)
26号住居跡	234	57	40721	AP-23	石鏡	An(Py)			161	166	86	2,800		
3号集石	235	58	61762	Y-22	石鏡	VAn			290	287	91	7,400		
11号集石	238	58	31811	AO-22	磨石・磨石組	An(Py)			65	68	59	370		棒凸 T
16号集石	239	58	9485	N-5	磨石・磨石組	An(Py)			117	63	57	700		棒凸 TS(2)→T
17号集石	240	58	52727	AA-23	磨石・磨石組	Ba			97	65	39	390		不定形 T
20号集石	241	58	40411	AI-20	磨石・磨石組	Ba			107	89	39	520		扁平 T
21号集石	244	59	62737	AC-25	スレイバー	Hor			69	43	9	49.6		B-3
21号集石	245	59	62735	AC-25	石鏡	SS			44.0	85.4	60.8	217.7		
21号集石	246	59	62383	AC-25	石鏡	Hor			74.2	82.2	80.8	527.5		B-1
21号集石	247	59	62382	AC-25	石鏡	Hor			53.6	96.0	87.5	588.1		B-1
21号集石	248	59	63058	AC-25	石鏡	Hor			52.7	51.9	68.5	222.3		B-2
21号集石	249	59	63278	AC-25	礫盤	FSS			96.5	84.0	30.0	352.1	243	
21号集石	250	59	63281	AC-25	礫盤	FSS			96.0	82.0	34.5	294.6		
21号集石	251	59	62721	AC-25	磨石・磨石組	Ap			94	165	52	790		厚凸 T+S+KT(1)
21号集石	252	59	62349	AC-25	磨石・磨石組	Vba			77	81	39	280		扁平 T+S+KT(2)
21号集石	253	59	62226	AC-25	磨石・磨石組	An(Py)			95	122	45	730		扁平 TS(1)→T
21号集石	254	59	62229	AC-25	磨石・磨石組	Vba			108	71	45	440		扁平 TS(2)+T+S
21号集石	255	59	56356	AD-24	石鏡	An(Py)			215	109	50	2,290	273	
21号集石	256	59	62225	AC-25	石鏡	An(Py)			239	191	58	5,650		
21号集石	257	59	62224	AC-25	石鏡	An(Py)			297	343	83	8,500		
22号集石	259	60	63642	AE-23	石鏡	Hor			52.7	48.8	53.8	185.1		A-1
22号集石	260	a	62017	AE-22	石鏡	Hor			100.9	98.0	71.9	628.7		B-2
22号集石	261	b	63643	AE-23	鏡片	Hor			28.1	22.2	8.4	5.1	97	
22号集石	261	60	63777	AD-23	磨石・磨石組	An(Py)			94	71	39	350		扁平 T
22号集石	262	60	63640	AE-23	石鏡	An(Py)			163	156	52	2,570		
22号集石	263	60	63644	AE-23	石鏡	An(Py)			206	167	49	2,560	274	
23号集石	265	58	34587	AJ-22	磨石・磨石組	An(Py)			77	80	43	380		扁平 T
23号集石	266	-	37982	AJ-22	台石	Vba			201	126	89	2,560		
18号土坑	280	61	61886	Y-21	磨石・磨石組	Vba			78	63	53	330		不定形 T
18号土坑	281	61	61936	Y-21	磨石・磨石組	An(Py)			84	71	34	270		扁平 T+KT(2)
18号土坑	282	61	61939	Y-21	磨石・磨石組	Vba			82	63	33	230		扁平 T+S
19号土坑	291	61	21494	W-19	石鏡	Ob	SWHD		18.8	15.2	3.7	0.7		B-1
19号土坑	292	61	22099	W-19	磨石・磨石組	An(Py)			63	69	43	210		棒 T
19号土坑	293	61	21527	W-19	磨石・磨石組	Ba			118	79	58	780		棒凸 TS(1)→T
19号土坑	294	61	19063	W-19	石鏡(小型)	Ba			18	110	83	2,000		
2号祭祀遺構	302	62	21657	W-20	石鏡	Ob	KZOB		29.0	31.4	13.9	11.1		A-2
2号祭祀遺構	303	62	21665	W-20	石鏡	Ob	KZOB		18.7	22.6	14.1	4.0		A-2
2号祭祀遺構	304	62	21671	W-20	磨石	VAn			58	44	35	110		棒
配石遺構	312	63	28929	AJ-21	磨石・磨石組	An(Py)			107	61	62	620		厚凸 T+S
配石遺構	313	63	40597	AJ-21	磨石・磨石組	Vba			118	79	45	490		扁平 TS(1)→T+S
石斧納遺構	314	63	67186	S-17	打製石斧	HSS			126.2	45.4	24.6	171.5		A-3
石斧納遺構	315	63	67185	S-17	打製石斧	Sh			105.6	47.5	19.5	98.9		B-2
石斧納遺構	316	63	67184	S-17	打製石斧	MSS			116.2	49.9	16.3	119.5		C-2

〔形式分類の略号について〕

〔石鏡〕		〔石鏡〕	
基礎の形状	脚部の形状	打面の形状	取縁方法
1: 無取縁	1: 尖頭	1: 固定して一方に取縁	1: 2軸非平行ながら取縁
2: 取縁あり	2: 円錐	2: 軸非平行ながら取縁	2: 軸非平行ながら取縁
3: 不定形なもの	3: 脚部不明	3: 固定して一方に取縁	3: 軸非平行ながら取縁
〔スレイバー〕			
刃部の加工		礫石鏡の形状	
1: A: 片刃	1: 側縁部	1: 扁平	S
2: B: 両刃	2: 両側部	2: 厚凸	T
3: C: 全周	3: 全周部	3: 磨き痕のあるもの	K
		4: 磨き痕のうらみに凹状のもの、(凹)は凹部	
		5: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		6: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		7: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		8: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		9: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		10: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		11: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		12: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		13: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		14: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		15: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		16: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		17: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		18: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		19: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		20: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		21: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		22: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		23: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		24: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		25: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		26: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		27: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		28: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		29: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		30: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		31: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		32: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		33: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		34: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		35: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		36: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		37: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		38: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		39: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		40: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		41: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		42: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		43: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		44: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		45: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		46: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		47: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		48: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		49: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		50: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		51: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		52: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		53: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		54: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		55: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		56: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		57: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		58: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		59: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		60: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		61: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		62: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		63: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		64: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		65: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		66: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		67: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		68: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		69: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		70: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		71: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		72: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		73: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		74: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		75: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		76: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		77: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		78: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		79: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		80: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		81: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		82: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		83: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		84: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		85: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		86: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	
		87: 磨き痕の凹部に凹状の磨き痕のあるもの、(凹)は凹部	

第2節 包含層出土遺物

ここでは、縄文時代の包含層および攪乱中出土、表面採集の遺物を一括して報告する。これらから出土した遺物の総数は土器17,047点、石器8,058点、計25,105点である。中央尾根や東尾根、及び両尾根に挟まれた東支谷等の包含層から大量に遺物が出土している。住居跡が検出された中央尾根は大きく攪乱を受けていたこともあり、攪乱土内からも多くの遺物が出土している。

1 土器（第84～130図 写真図版64～119 第12表）

土器は縄文時代早期～後期代の資料と考えられる16,633点を群・類の分類を試み、分布図（第88・89・108・109・118・119・127・128図）を作成した。群は時期を、類は形式を基調としているが、類は文様・胎土・器形により種として細分が可能である。文様は縄文や沈線文、貝殻文等多彩で、施文具は本報告においては「工具」と呼称している。各土器のデータについては第12表に集成している。この分類にあたっては池谷・小崎・澁谷・戸田・谷藤諸氏の指導を参考に、壬生・勝又が分類した。

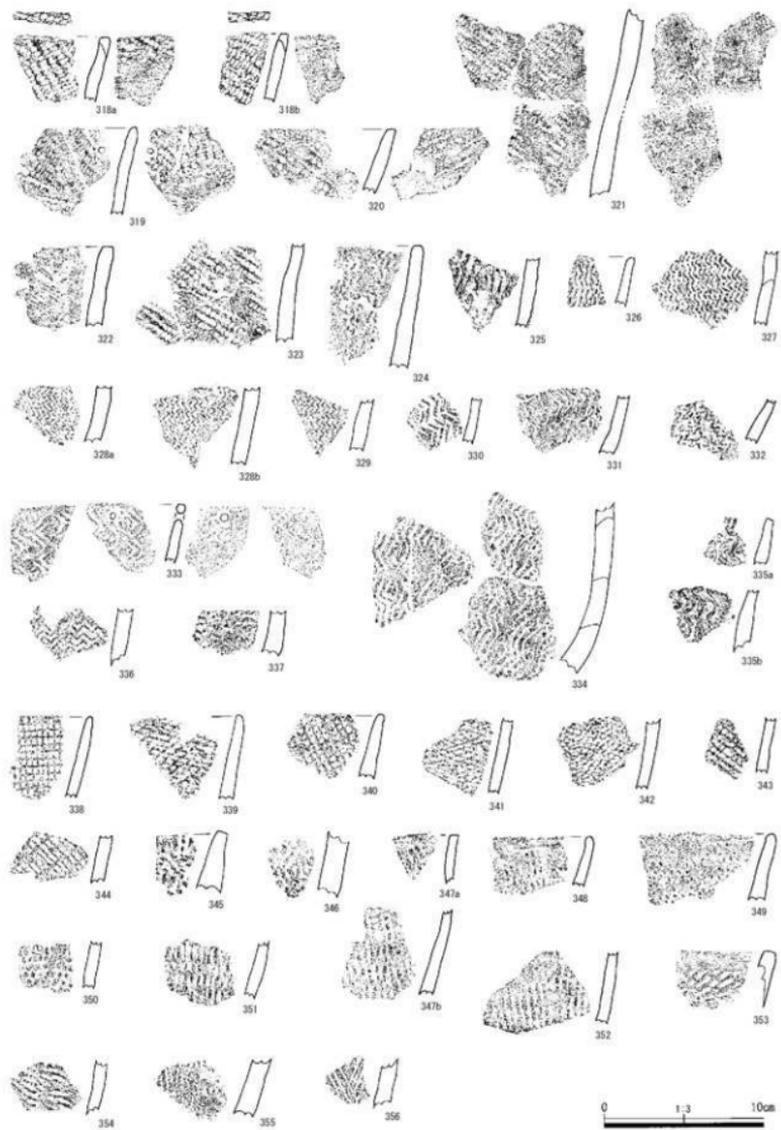
第1群 早期前半

1類（第84図 写真図版64・65）

押型文（縦位密接施文）を施す土器群を中心に1類に分類した。318～356が該当する。この段階にあたる土器の型式は判然としなが、沼津市西洞遺跡・イラウネ遺跡と同時期か。文様としては格子目文や縦位に施された山形文、小粒な槽円文等の押型文や燃糸文である。また土器の表裏に縄文が施された土器片もこの段階に分類した。土器胎土中には繊維が認められる。全体的に他時期の土器と比較して軽い印象を受け、中には沼津市域で確認されている「軽しような胎土」を持つ土器資料や、土器の色調にやや紫がかかった土器片が散見される。なお休場層相当の覆土をもつ土坑や「富士石遺跡II」において触れているように、縄文時代草創期に位置付けられる尖頭器の存在から、本報告の土器群の中に草創期の資料が入り込む可能性もあったが、第1群に分類した土器群は早期前半代の範囲に入るものと考えている。この土器群は中央尾根を中心に分布し、西支谷・西尾根では殆ど見られない（第88図）。

318～323は縄文が施された土器群で、322・323を除き表裏縄文が施され、軽しような胎土をもつ一群である。318～320は口縁部だけの破片資料である。318 a・bは同一個体と考えられる。318・319は口縁部を丸く仕上げている。R L縄文か。320は口唇部を平らに仕上げている。この資料は318・319と異なり軽しような胎土でかつ、緻密な印象を受ける。320は内面には炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施（IAAA-92051）した。その結果、9,370±40yrBPという¹⁴C年代が測定されている。321は胴部だけの破片資料である。外面には縦位のL R縄文か。内面にもわずかに縄文が認められる。軽しような胎土である。322は無節縄文が施されたものか。軽しような胎土をもつ。323はL R縄文が縦位に施されたものか。軽しような胎土で、318～323の中でも淡い紫色を帯びた色調がわかる資料である。

324～354は押型文が施された土器群である。324～337は山形文が密接して施されている。324・326・333・335は口縁部だけの破片資料である。口縁部から縦位に押型文が施されたものか。口縁部はやや平坦に仕上げられている。333は同一個体資料である。1ヶ所両面から穿孔されている。口縁部から縦位に密接した山形文が施されている。内面にわずかに押型文らしき痕跡が観察される。なお333は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施（NUTA2-15556）した。その結果、9,360±40yrBPという¹⁴C年代が測定されている。325・328は胴部だけの破片資料である。内面に炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施（IAAA-92038・92047）した。その結果325は9,370±40yrBP、328は



第84図 縄文土器第I群1

9,260±40yrBPという¹⁴C年代が測定されている。334は深鉢の胴部下半部の破片資料である。表面に山形文が縦位に施されている。336・337は横位に山形文を施した資料であろう。336の胎土も淡い紫色を帯びた色調で、軽しょうである。338～344・353・354は格子目文が施されている。338～340は口縁部のみの破片資料である。いずれも口縁部は丸く仕上げられ、外面には格子目文が施されている。353・354はネガティブな格子目文が施されている。338等と比較して格子目文の形は崩れている。341～344は胴部だけの破片資料である。342の同一個体と考えられる破片資料には炭化物が付着していたため、水野氏により放射性炭素年代測定が実施（NUTA2-15560）され、その結果、9,280±40yrBPという¹⁴C年代が測定されている。345～352は楕円文が施された資料である。345・346の色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中に1mm～4mm程度の小礫を含み、器厚も厚めであるため、他の土器資料と比較して異なる印象を受ける。楕円文の大きさでは348～350の楕円文は長径・短径の比率が近く、他の楕円文と比較して小型の印象を受ける。355・356は外面に燃糸文が施されている。2点とも厳密には軽しょうな胎土ではないが比較的軽い感があり、器面に細かい気泡状の凹凸が観察される。355の色調はにぶい黄橙色を呈している。

2類（第85図 写真図版65・66）

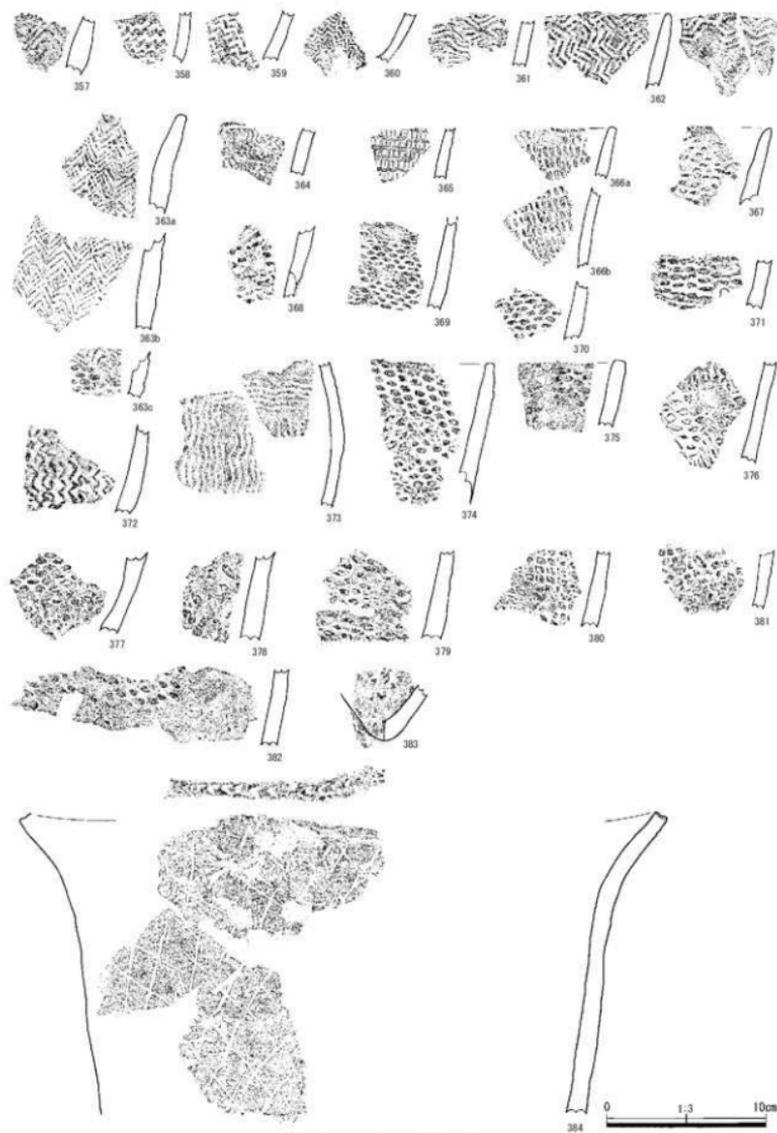
押型文（異方向密接）を施した土器を中心に2類に分類した。この段階にあたる土器の型式は定まっていないが、伊豆の国市（旧大仁町）大平A遺跡と同時期か。縦位・横位に施された山形文や1類より整った楕円文が施されている。この2類の土器胎土中にも繊維が認められるものの、1類と比較して少ない感がある。また胎土中に雲母を含むものもある。格子目文が施された土器も雲母を含む胎土であったため、2類とした資料がある。この2類土器は全域にわたり散発的に出土している（第88図）。

357～371は2類に分類した土器群である。357～362は山形文が施されている。362は口縁部のみの破片資料である。外面には口唇部直下に山形文を横位に施した後に、縦位に山形文を施している。内面には山形文が横位に施されている。359・360はともに胴部下半の破片資料である。359には雲母が見られる。363・364は異なる押型文が施された資料である。363 a・b・cの3点は同一個体の可能性がある資料である。器厚は厚めで、胴部はわずかに外反気味に立ち上がり、口唇部は丸く仕上げている。口唇部直下より山形文を横位に密接して施している。363 cは胴部中心付近の資料と考えられるが、山形文の下位に楕円文が見られる。楕円文の後に山形文を施したものか。細かい雲母が胎土中に認められる。364は山形文と格子目文が施されている。施文の順番は判然としなない。365は格子目文のみ施された資料である。胎土中に雲母が多く見られる。366～371は楕円文が施された資料である。366・367は口縁部の破片資料である。366 a・bは同一個体と考えられる資料である。縦位の楕円文が施されている。口唇部が平坦に仕上げられた資料である。一方367の口唇部は尖り気味で、外面には口唇部直下より楕円文が横位に施されている。外面には細かいクラックが認められる資料である。368～371は楕円文を横位に施した資料である。368・369には胎土中に雲母が見られる。371には両面穿孔が1ヶ所認められる。

3類（第85・86図 写真図版66～68）

押型文・燃糸文土器でも終末期の土器群と考えられるものを3類とした。高山式並行土器、相木式並行土器等の可能性のある土器も含んでいる。文様としては押型文・燃糸文が認められる。押型文では楕円文や山形文がある。楕円文は1・2類と比較して大きい。山形文の中には緩やかな波状に近いものもある。胎土に関しては多様である。東尾根と北尾根～東支谷、西尾根に集中域が見られる。

372～383は押型文が施された資料である。そのうち372・373は山形文が施されている。372は縦位に施されている。373は縦位に山形文を施した後に、山形文を横位に施したものか。374～383は楕円文が



第85図 縄文土器第1群2

施されている。そのうち374・375は口縁部のみ破片資料である。374は波状口縁で、口唇部を丸く仕上げている。楕円文が横位と斜位に施されている。375は平縁で、横位の楕円文が施されている。376～382は胴部のみ破片資料である。376は横位の楕円文が施された後に、別の原体で施文されたものである。内面に擦痕か。377～382は胴部下位の資料であろうか。横位・斜位に施された楕円文が見える。383は底部のみ破片資料である。尖底である。底部近くまで楕円文が施されている。

384～394は燃糸文が施された資料である。384は高山寺式並行土器の可能性を指摘する。口縁部から胴部中位付近までの破片資料である。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。この口縁部は波状縁を呈し、口唇部は指で強く押さえて平坦に仕上げられたため、部分的に口縁部が肥厚する。その口唇部には連続して刺突文が施されている。半截竹管状の工具を用い、腹側を器面に向けて鋭角に刺突している。口唇部直下より燃糸文が施されている。胎土中に白色粒子がやや多く見られる。この384は高山寺式土器に通常に見られる内面沈線が認められないものの、格子目状に燃糸文を施し、口縁部がやや強めに反る様は高山寺式土器と親縁性が認められると考えられ、高山寺式並行土器のものと同断される。385～394は燃糸文が施された破片資料である。比較的胎土中の繊維が多い。385は口縁部のみ破片資料で、口唇部はやや平坦に仕上げられている。外面は燃糸文、内面には擦痕が認められる。386は胴部のみ破片資料で、外面には燃糸文が施されている。386aの上部の器面は剥脱しており、器面下に燃糸文が施されているのが観察される。よって386は粘土紐を積み上げながら施文したことが理解されよう。

395・396は穂谷式並行土器もしくは相木式並行土器か。395 a・bは同一個体と考えられる資料で、口縁部付近の破片資料である。口縁部は強めに指でナデ押さえたために尖り気味で、やや外反する。口唇部には刻目文を施し、外面直下に押型文(緩い山形文)を横位に施している。山形文直下に角状の棒状工具で沈線を横位に引き、その下位に連続して刺突文が施されている。幅広く先端がやや先削製の工具か。内面にも山形文が施されている。横位に施された沈線文が異種の文様を区画するように配置されているのが理解できる。396は先端が角状を呈する棒状工具で矢羽状に連続して刺突している。395については内面に炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施(IAAA-92029)した。その結果8,000±40yrBPという¹⁴C年代が測定されている。また当該資料は水野蛭貝も分析(NUTA2-15561)を行い、8,025±35yrBPという¹⁴C年代が測定された。

4類(第86図 写真図版68)

田戸下層式並行土器と考えられる土器を4類とした。田戸下層式土器は丸底・尖底の深鉢を基調とし、太沈線文や貝殻腹縁文、刺突文の施文が知られている。頸部の外反気味な資料がある。胎土中に繊維が認められる資料があるが、それは並行期の土器か。この4類土器は中央尾根・東支谷・東尾根に少量認められる(第88図)。

397～405は4類に分類した土器である。そのうち397～399・404は口縁部資料である。397 a・bは同一個体と考えられる資料である。残存状態から波状口縁と考えられる。aの口縁部は尖るように仕上げられ、口唇部に刻目文が不明瞭であるが施されている。口唇部直下には刺突文が連続して施されている。刺突文列の間に太く浅い沈線が施されている。bも2列の刺突文列の間に太く浅い沈線が施されている。太く浅い沈線直下に半截竹管状の工具で平行沈線文が施されている。398は397と比較して器厚は厚めである。口縁部は平坦に仕上げられ、浅い刻目文が施されている。口唇部直下には貝殻腹縁文が施されている。399は397と同様、口縁部は尖るように仕上げられている。波状口縁と考えられ、口唇部直下に2条の沈線文と刺突文が施されている。刺突文は先端が角状を呈した工具で、器面に対して垂直に刺突されている。404は波状口縁と考えられる。波頂部は欠損している。口唇部は平坦に仕上げられている。



第86図 縄文土器第I群3

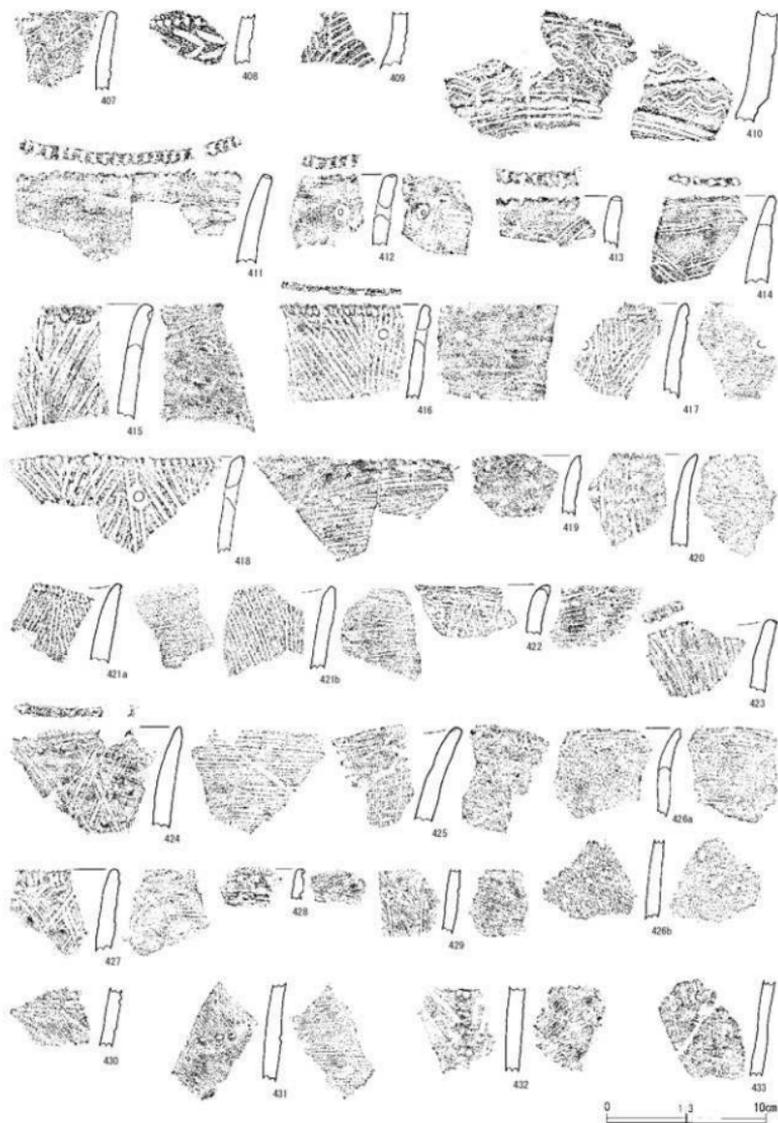
外面には棒状工具で沈線文が施されている。この沈線は波状に施されているが、極めて緩い。400～403・405は胴部または底部のみの破片資料である。400・401は沈線文と貝殻腹縁文が施されている。402は低い隆帯上に矢羽状に短い沈線文を配し、その下位に横位の沈線文で区画、刺突文が施されている。刺突文は半載竹管状の工具の背面を土器面に向けて刺突している。田戸上層式段階で器形が壊れるものが出現することを勘案すれば、当該資料は田戸上層式土器に近い可能性を持つ。403は尖底である。外面には横位の沈線文が観察される。底部先端は損耗している。

5類 (第86・87図 写真図版69)

田戸上層式土器及び田戸上層式並行土器と考えられるものを5類とした。主要器種としては深鉢が挙げられ、屈曲・段を有し、波状文や直線的な隆線文が第1次区画文に多く認められるという。また前段階では認められた太沈線文は消滅、口縁部外面の無文化するタイプが知られている。この5類土器は西支谷～東尾根にかけて少量が、散発的に見られる。当該報告では図化に耐えられる資料が少ないものの、浅鉢とした資料がある。

406～414は5類に分類した土器である。406は浅鉢である。当該資料は破片資料で、図上で器形の復原を試みている。丸を帯びた底部から胴部を緩やかに立ち上げ、口縁部を直線的に屈曲させ、口唇部は丸く仕上げている。口唇部には貝殻の腹縁で刺突か。外面口縁部には3条の浅い細沈線文を3条横位に施している。2条目と3条目との間の中を窪ませた円形浮文を貼り付けている。屈曲部は細い半載竹管文が引かれたため、細隆起線文状となる。屈曲部より下位には鋸歯状に沈線文を施す。胴部下位にも鋸歯状の沈線文が施されているが、この2段の鋸歯状沈線文の間には浅い細沈線文が少なくとも6条認められる。2段目の鋸歯文より下位には2条の沈線文が施される。底部から観察するとこの沈線文は同心円状に見る事ができる。内面の文様は主に3段の文様帯で構成される。最下段の文様帯は横位の沈線文を基調とし、その内部に円状のモチーフを入れ込んでいる。円状のモチーフの先端には先端が丸い断面を持つ工具で円形の刺突文を添えている。円状のモチーフは蕨手文との親縁性が想起される。中段の文様帯は曲線を描くモチーフを沈線文で表現しているが、欠損しているため判然としない。最上段の文様帯は横位の沈線文を描いているが、2条目の沈線文は途切れ、その先端に件の円形の刺突文が施されている。これらの文様の基調となるのは、細い棒状工具を用いた沈線文である。しかし土器製作者が慎重に文様を描いたためか、沈線内に小刻みに工具を動かした痕跡が窺える。押し引きか。当該資料は4-2区西端、A1-20・21グリッド、AJ-21グリッドで出土しており、東支谷に該当する。他の5類土器の出土分布よりやや離れている。407は口縁部のみの破片資料である。口唇部は丸く仕上げている。外面には波状の沈線文が施されている。内面は擦痕が観察される。408は刺突文の下位に矢羽状に沈線文が施されている。刺突文・沈線文とも同一の工具で施したものと考えられる。409は沈線文が施されているが、一部、押し引き沈線文が認められる。408・409は田戸上層式並行の土器か。410は頸部付近の破片資料か。屈曲部下位には半載竹管状の工具で施された平行沈線文が観察される。屈曲部上位には微隆起線文が横位に貼り付けられ、その上位には波状文と微隆起線文が山形に配されている。

411～414は口唇部に刺突文が施された破片資料である。411・412は外面に文様が施されていない。前者は口唇部が平坦に仕上げられ、外面にはナデ痕が観察される。後者の口唇部は丸く仕上げられ、両面穿孔されている。413・414は外面に沈線文が施されている。その沈線文は半載竹管状の工具を揃えたものか、先端が割れた工具で施されたためか、多条である。414は口縁部に沿って横位に施している。なお411～414の刺突文や多条沈線文は後述する6類土器の文様に親縁性が窺えるため、田戸上層式土器から6類土器に分類した判ノ木山西式土器にかかる資料と考えられよう。

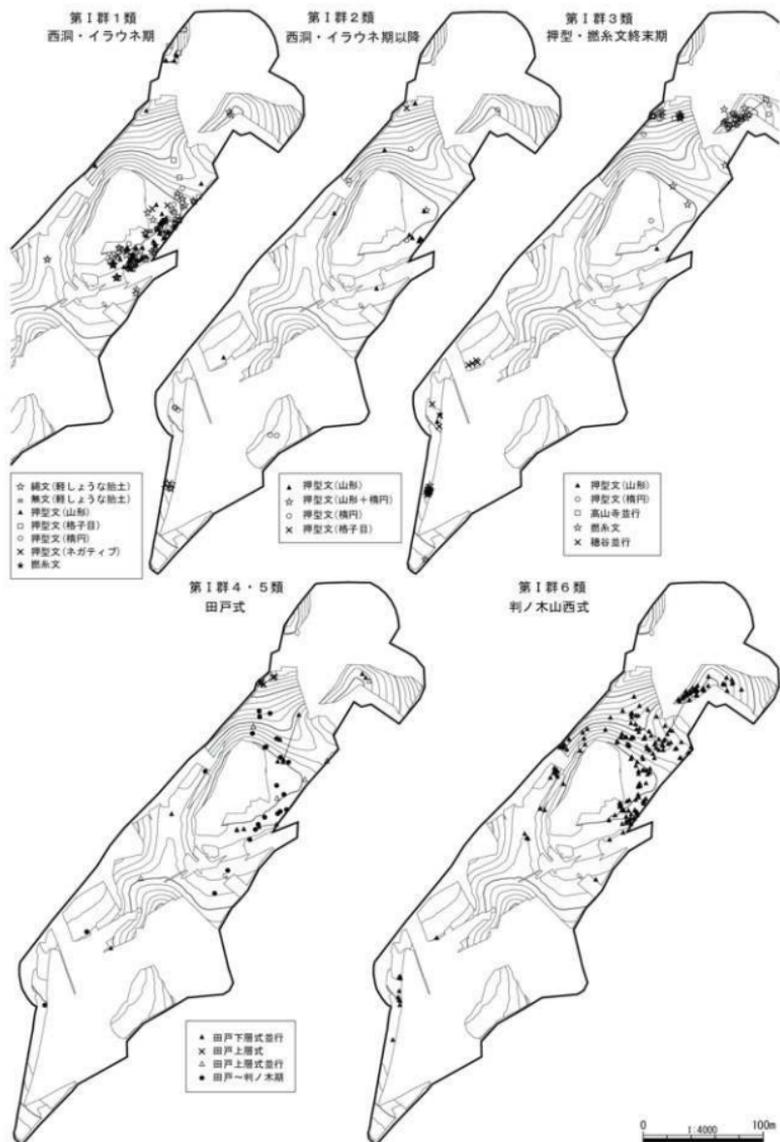


第87図 縄文土器第I群4

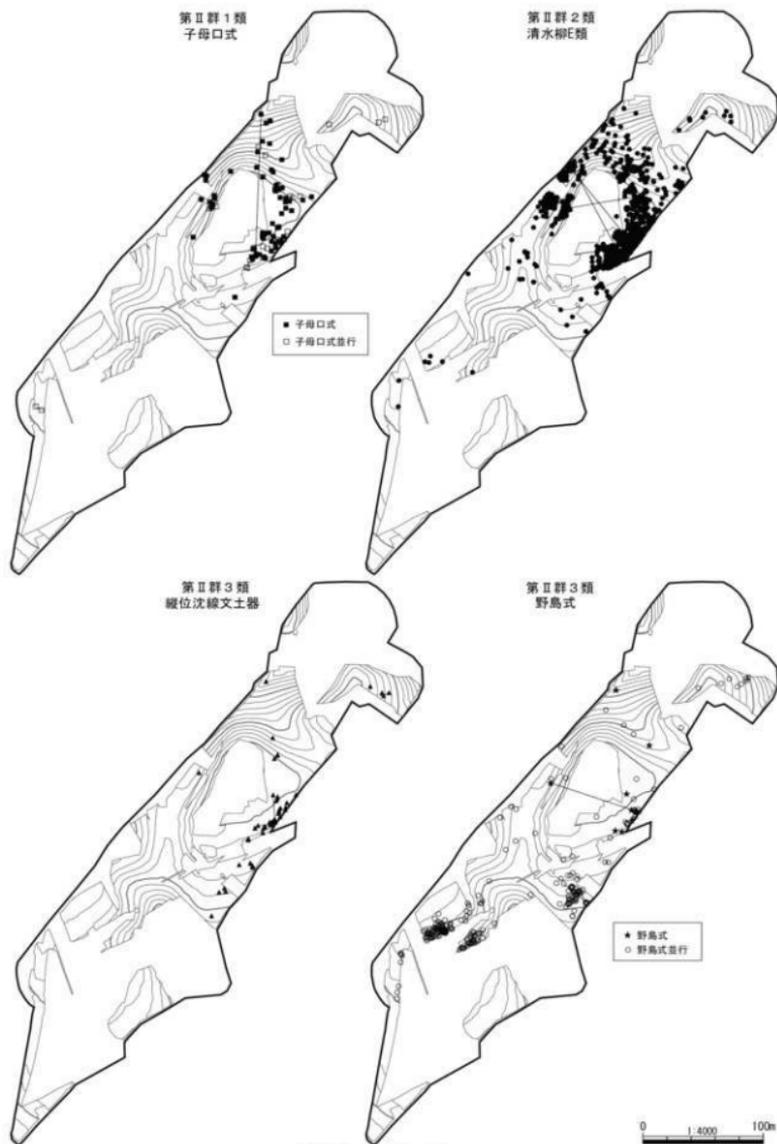
6類 (第87・90図 写真図版70~72)

判ノ木山西式土器と考えられるものを6類とした。器面に半截竹管状もしくは先割状の工具により綾杉状・格子目状の沈線文が施された資料をこの6類土器に分類した。また口唇部、口縁部の刺突文も特徴的である。沈線文では曲線を描く資料も知られている。また土器内面には条痕文もしくは繊維の束のような調整具を使用した痕跡が観察される。なお口縁から隆線を縦位に垂下させる資料は当該遺跡では未確認である。土器の胎土中には繊維を含み、また白色粒子が多く含む資料が多い。極少数であるが雲母が胎土中に含む資料がある。この6類土器は特に中央尾根から東尾根にかけて多く分布し、5類土器との分布域と重複する(第88図)。この判ノ木山西式には古段階・新段階の2段階あるものと推定され、古段階は田戸上層式土器終末期・相木式土器と並行するという意見があるため、5類土器の一部と当該土器群とは時期的に並行しよう。

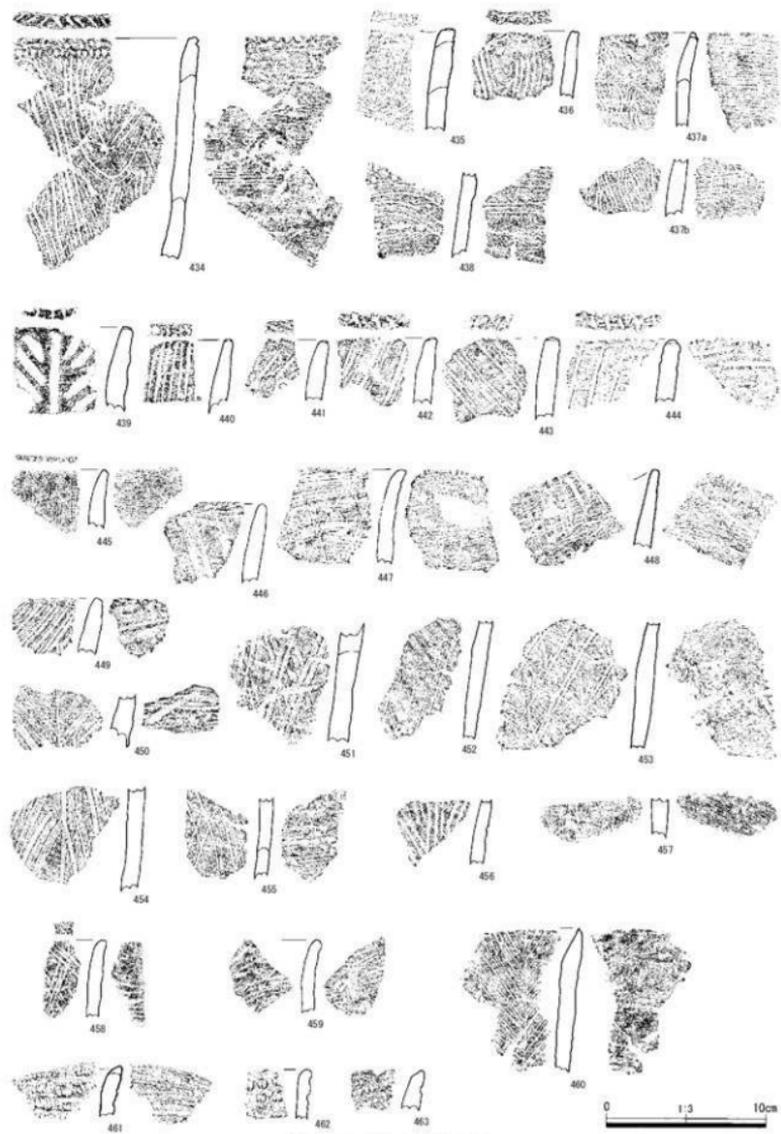
415~463は6類に分類した土器である。そのうち415~432・434~445・461~463は沈線文と刺突文が施された破片資料である。415~431は格子目状もしくは綾杉状の沈線文が施されている。そのうち415~428は口縁部だけの破片資料である。415・416は口唇部を平坦に仕上げ、その直下に刺突文を施している。外面には綾杉文が施されている。内面は擦痕か。416には両面穿孔が2ヶ所確認される。417は口唇部を丸く仕上げ、両面穿孔が1ヶ所確認される。418の口唇部はやや強めにナデ押さえたためか、やや尖り気味である。両面穿孔が2ヶ所確認される。内面には条痕文が観察される。419は口唇部直下に刺突文を矢羽状に施し、その下に格子目文か。胎土中に雲母が多く認められ、他の土器と印象が異なる。沼津市西洞遺跡第IV群b類に酷似か。420は口唇部を尖らせた資料である。前述してきた土器資料には口唇部直下に刺突文が施されてきたが、当該資料にはそれが見られず、口唇部から約2cmの箇所に刺突文が見られる。後述する424と類似するか。421a・bは同一個体と考えられる資料である。内面は条痕文が見られる。波状口縁か。この421は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施(IAAA-92027)した。その結果421は $8,060 \pm 40$ yrBPという ^{14}C 年代が測定されている。423は口唇部を平坦に仕上げられ、口唇部端に刻目文を施す。424は刺突文を縦位に間隔をあけて施す。先割状の工具で格子目状の沈線文を施す。内面は横位の条痕文が観察される。425は口唇部を丸く仕上げ、内面口唇部直下に刺突文か。内外面ともに条痕文。426は他の口縁部資料と比較してやや強めに外反させる。口唇部には間隔をあけて刺突文が施され、口唇部沿いに半截竹管状の工具を用いた沈線文を施している。外面には格子目文が施される。427は器厚が厚めで、口唇部を丸く仕上げる。口唇部直下には刺突文か。格子目文も施される。428は波状口縁の波頂部か。口唇部に間隔をおいて刺突文を施し、外面にも刺突文が施されている。429~433は胴部の破片資料である。429は半截竹管状の工具で格子目文を施している。施文の際、工具腹側を土器面に強めに当たった後、力を抜いて平行沈線文を施す。そのため格子目文の直上に刺突文が配列されているような印象を与える。430は刺突文を横位に2段施した後に、沈線文を施している。431は半截竹管状の工具による沈線文の下位に、横位に連続して刺突文を施して文様帯を区画なさしている。432は先割状の工具で縦位に刺突文が間隔をあけて施した後に、沈線文を施したもののか。433は先割状の工具で縦位に刺突文を2列施している。沈線文は見られない。434~438は刺突文や波状もしくは褶曲した沈線文が施されている。434は胴部から口縁部にかけての破片資料である。胴部は直線的に立ち上がり、口唇部を丸く仕上げている。口唇部には刻目文を施している。半截竹管状の工具で沈線文を施した後に、口唇部直下に刺突文を2列施している。内面には条痕文が見られる。435~437は口縁部だけの破片資料である。いずれも器厚は厚めで、口唇部と口唇部直下に刺突文、外面に沈線文が施されている。436は口唇部を平坦に仕上げている。口唇部に刺突文、外面に沈線文が施されている。口縁部はやや強めに指でナデ押さえ気味に整形されたため、口唇部直下にはナデ痕が見られる。堅緻な仕上がりで他の土器片と区別される。437は口縁部をわずかに外反させ、口唇部を丸く仕上げて



第88図 土器分布図1



第89圖 土器分布図2



第90図 縄文土器第I群5

いる。口唇部に刺突文、外面には波状の沈線文が施される。438は胴部だけの破片資料である。横位に褶曲した沈線文が施されている。439の器厚は厚めで、口唇部は丸く仕上げている。口唇部に刻目文を施し、外面には綾杉状に沈線文を施している。この6類土器において沈線文は先割状もしくは半截竹管状の工具を専ら使用しているのは異なり、当該439は幅広く浅い沈線文で構成されているため、他の資料とは区別される。田戸上層式土器との親縁性を想起させる。440～444は口縁部だけの破片資料である。口唇部に刻目文、外面に沈線文が施されている。441には両側から穿孔がなされている。

445～460は沈線文のみ施された破片資料である。445～449は口縁部だけの資料である。447はわずかに口縁部を外反させ、口唇部は丸く仕上げている。外面は条痕文と格子目文か。448は波状口縁と考えられる。直線的に立ち上がり、口唇部は丸く仕上げている。口唇部直下から沈線文を施している。胎土中に雲母が多く見られ、他の6類土器と区別される。450～457は胴部だけの破片資料で、格子目状に沈線文が施されている。460は胴部中位から口縁部までの破片資料である。口唇部を尖らせている。口唇部から綾杉状の沈線文を施している。461～463は刺突文が多く施された破片資料である。

第II群 早期後半

1類 (第91・92図 写真図版73～75)

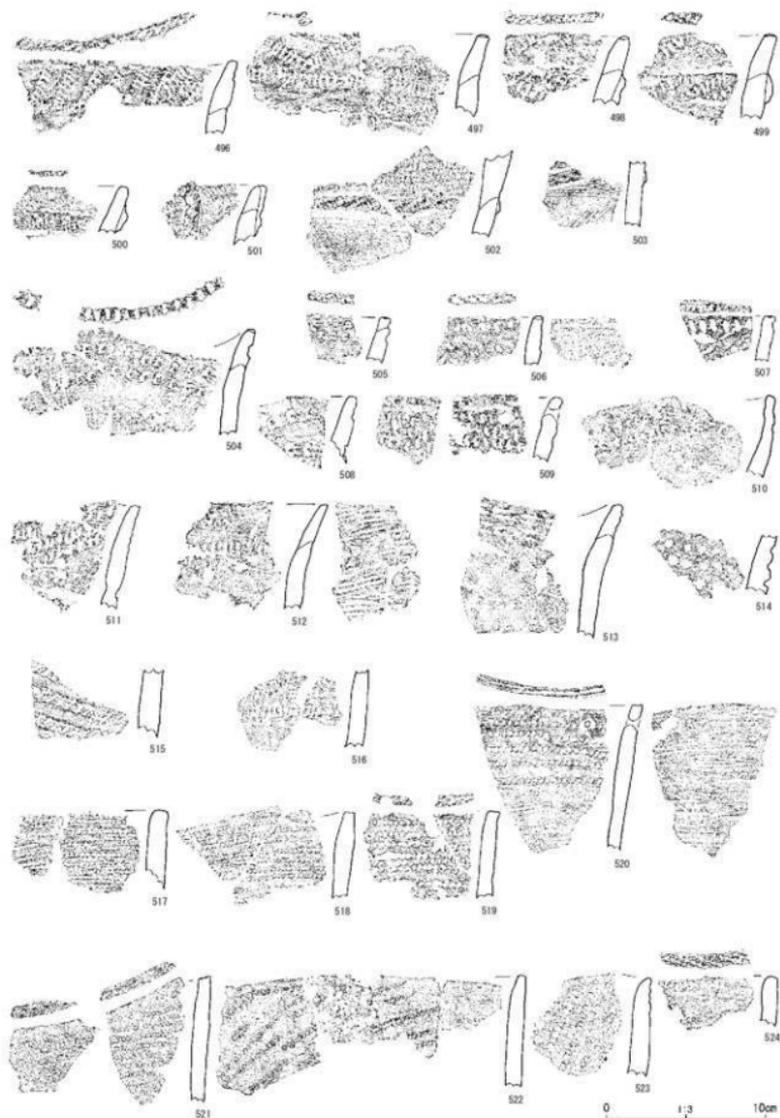
子母口式土器及び子母口式並行土器と考えられる土器を1類とした。ただし関東地方での子母口式土器新段階は静岡県東部においては「ミヲ坂式」が並行する意見もある。よって1類に分類した土器群には、ミヲ坂式が含まれるものと捉える事も可能か。子母口式土器の器種として深鉢が主流となすが、口縁部は折返しもしくは口縁部付近に低平な隆帯を設ける事により、外見上口縁部がやや肥厚風味に仕上げ、そこに絡条体圧痕文もしくは沈線文を施すのが知られる。貝殻腹縁文を施している資料があるが、田戸上層式土器の名残か。また口縁部付近に刺突文列のみを施す資料群も1類に分類してみた。この1類土器には胎土には繊維が多く認められている。1類土器は中央尾根を中心に分布する(第89図)。

464～514は1類に分類した土器である。そのうち464～494は折返し口縁または隆帯・隆線上に絡条体圧痕文又は沈線文等を施した資料である。464～482・491・492・494は口縁部だけの破片資料である。464～468は口唇部にも施文されたもので、いずれも絡条体圧痕文か。口縁部の外観は肥厚しており、折返し口縁か。467のように隆帯を口唇部直下に貼り付け、更にその下位にもう1条隆帯が見られる。470～472は467同様、口唇部直下に隆帯を設け、470・471は斜位の沈線文、472は貝殻腹縁文が施されている。469・473～482は口唇部からやや間隔をあけて隆帯を貼り付けている。469は隆帯上には施文せず、隆帯上位・下位に絡条体圧痕文が施されている。473～476は口唇部にも絡条体圧痕文が、477～482は口唇部に一切施文がなされていない資料である。477の外面には条痕文が見られるが、内面は擦痕か。483～490は胴部だけの破片資料である。490は絡条体圧痕文が施された隆帯の上位に沈線文か。491は波状口縁の波頂部か。口唇部には施文が観察されない。波頂部から細い隆線が垂下する。隆線上に絡条体圧痕文らしき痕跡が見られるが判然としない。492も口縁部だけの破片資料で、口唇部には刻目文が施される。幅広い微隆起の隆帯には斜位の沈線文か。494は絡条体圧痕文を施した後に、口唇部をナデ押さえて、平坦に仕上げている。内外面に条痕文が見られる。なお464・465は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施(IAAA-92046・92052)した。その結果464は8,020±40yrBP、465は7,930±40yrBPという¹⁴C年代が測定されている。

496～499は単位の大きい絡条体圧痕文が施された資料である。496は波状口縁か。口唇部は強めに押さえているのか器厚がやや薄めである。口唇部と低平な隆帯、隆帯直下に絡条体圧痕文が施されている。497は隆帯が判然としない。口縁部には鋸歯状に絡条体圧痕文が配置され、その下位に横位に絡条体圧痕文が施されている。498・499も口唇部に絡条体圧痕文が施されている。口唇部直下に絡条体圧痕文が



第91図 縄文土器第Ⅱ群1



第92図 縄文土器第Ⅱ群2

間隔を開けて斜位に施し、その下位に隆帯が見られる。500は口唇部直下に絡条体圧痕文と刺突文が観察される。摩耗気味で判然としなが、刺突文は半截竹管状の工具によるものか。501は491と同様、隆帯を口縁部から垂下させた資料であるが、501は隆帯左右にも絡条体圧痕文が施されている。502は胴部のみの破片資料である。絡条体圧痕文が施された隆帯の上位も絡条体圧痕文が施されている。502は胎土中に白い粒子が多いため他の資料と区別される。503は絡条体圧痕文が施された細い隆帯の下位に細かい刺突文と沈線文が施された資料である。文様や胎土や堅緻な仕上がりの点から他の資料と区別される。田戸上層式並行土器としてもよいかもかもしれない。

504～514は文様が刺突文のみで構成される資料で、514を除き全て口縁部のみの破片資料で、子母口式並行土器か。504は波状口縁である。口縁部には刺突文列が2列施されている。この刺突文と同一工具により、口唇部にも刺突文が施されているが、文様の仕上がりとしては刻目文に近い。505・506は口縁部に刺突文列が2列施されている。506の内面、口唇部直下には浅い沈線文か。507は刺突文列の下位に貝殻腹縁文が施される。508～513は口唇部への施文が見られない資料である。508は波状口縁の波頂部か。509は同一個体か。刺突文列がランダムであるが3列施され、両面から穿孔がなされている。波状口縁と考えられる510は口縁部が内湾気味に立ち上がるため、他の資料と区別される。口唇部は丸く仕上げられ、口縁部には刺突文列が2列施されている。511は波状口縁の波底部から波頂部にかけての破片資料である。口縁部には刺突文列が3列施されている。512はやや外反する資料で、刺突文列が口唇部から間隔をあけて施されている。内面には条痕文が見られる。513は波状口縁か。口縁部に2列の刺突文列が施される。半截竹管状工具の腹側を土器面に向けて刺突している。514は胴部のみの破片資料である。514は細い竹管状の工具を土器面に対して垂直に刺突する。なお512・513は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施（IAAA-92044・92030）した。その結果、512は $7,950 \pm 40\text{yrBP}$ 、513は $7,850 \pm 40\text{yrBP}$ という ^{14}C 年代が測定されている。

2類（第92～98図 写真図版76～88）

清水柳E類土器及びそれに並行する土器を2類土器に分類した。型式名が定まっていないため、検討が続いている。2類土器は他の土器群と比較しても出土数量的に最も多い土器群で、ある程度整頓せねばなるまい。この土器群は尖底の深鉢が主体と考えられ、器面に絡条体圧痕文を施すのを基調とする。さらに絡条体圧痕文と微隆起線文や沈線文も組み合わせる施文するものもある。胎土中には繊維が認められる。しかし胎土は同じでも微隆起線文や沈線文等の施文された土器群の存在があり、後続する野鳥式と分離について検討が加えられている。今回分類した2類土器中には絡条体圧痕文が施されていない資料も含む。当該土器群は中央尾根を中心に大量に出土している（第89図）。

515～700は2類に分類した土器である。そのうち515～582は絡条体圧痕文のみ施された破片資料である。515・516は梯子状に絡条体圧痕文が施されている。胴部のみの破片資料である。

517～532は細い軸を有する絡条体圧痕文のみが施された資料である。517～528は口縁部のみの破片資料である。そのうち517～521は絡条体圧痕文を横位に、522～524は斜位に、525～528は格子目状もしくは異なる方向の絡条体圧痕文が交差している。口唇部は517のように丸く仕上げるものは少なく、平坦に仕上げるものが多い。また口唇部には519・521・524・525のように絡条体圧痕文が施される資料がある。ただし520の平坦な口唇部には浅い凹線状のものが見られるものがある。文様というよりは平坦に仕上げる際に工具を用いたことに由来するものか。518・520・521・523については波状口縁と考えられる。529～532は胴部のみの破片資料である。いずれも横位に施された絡条体圧痕文が見られる。ただし532については破片下端が屈曲部にあたるものか。

533～550はやや太めの軸を有すると思われる絡条体圧痕文のみが施された資料である。533～547は口

緑部みの破片資料である。このうち533～542については絡条体圧痕文を横位に、543～545は斜位に、546・547は方向の異なる絡条体圧痕文を交差させている。546は口唇部直下に横位の絡条体圧痕文を施した後に、その下位に斜位の絡条体圧痕文を施している。547は口縁部に絡条体圧痕文を数列施した後に、その上から斜位の絡条体圧痕文を施している。口唇部は丸く仕上げたものや、平坦面を作り出すものなど多様であるが、絡条体圧痕文が斜位・交差させるタイプのものは口唇部に平坦面をなす。533・543・546は口唇部にも絡条体圧痕文を施している。534は刻目文か。548～550は胴部みの破片資料である。550はわずかに条痕文が見られる資料である。破片下位に横位の絡条体圧痕文が施され、その上位に斜位の絡条体圧痕文が間隔をあけて配置されている。

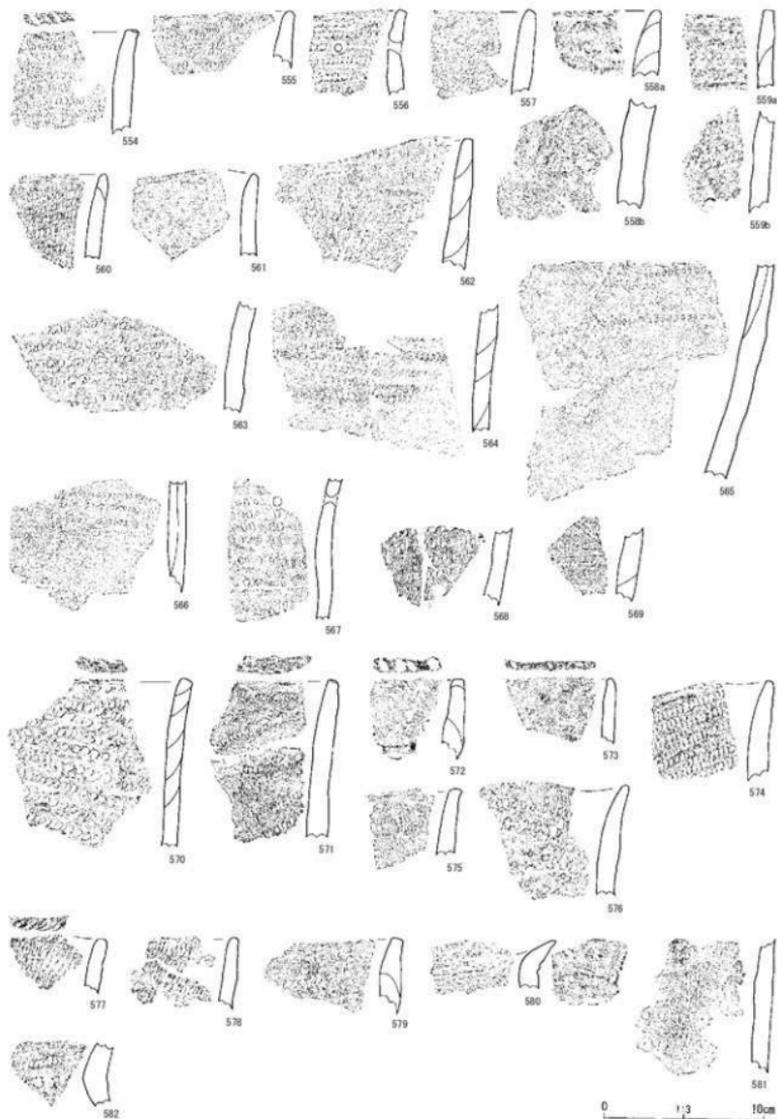
551～576は軸が認められない絡条体圧痕文のみ施された資料で、551～562・570～576は口縁部みの破片資料で、551～562は絡条体圧痕文を横位に、570～576は斜位もしくは交差させている。絡条体圧痕文が横位に施された口縁部資料の大半は、口唇部直下から絡条体圧痕文を密に施しているが、561は尖らせた口唇部から約2cmの位置に絡条体圧痕文を横位に施し、その下位約1cm間隔をあけて絡条体圧痕文をもう1条施している。この軸の認められない絡条体圧痕文を施したタイプは口唇部を丸く仕上げたものや、平坦、尖らせるように仕上げたもの等多様で、口唇部に絡条体圧痕文を施しているのが551・552・554・571である。570・573の口唇部には刻目文が施されている。572の口唇部は指頭もしくは工具で押さえたものか。これらの口縁部資料は殆ど直線的に立ち上がる資料であるが、576のみ外反させた資料である。553や556・561・562・574～576等は波状口縁である。563～569は胴部みの破片資料である。565は胴部下半部付近の資料である。破片上端に2条程絡条体圧痕文が見られ、それより下位約2cmの位置に絡条体圧痕文を横位に施し、文様帯の下端となす。567は破片中心付近よりわずかに外反する。穿孔されている。569は斜位・横位の擦痕上に絡条体圧痕文が施されている。

577～582は絡条体圧痕文のみ施されているが、原体が2種以上使用したもの等、特殊な資料群である。577は波状口縁と考えられ、丸く仕上げられた口唇部に絡条体圧痕文が見られる。外面には口唇部の圧痕文と同一の施文した工具と、別の工具を使用して絡条体圧痕文が施されている。581・582も異なる2種の原体で絡条体圧痕文が施されている。578は原体を半置反転させたものか。器面の摩擦が激しくて判然としない。580は口縁部を大きく外折させ、内面に絡条体圧痕文を縦位に間隔をおいて施している。

583～619は絡条体圧痕文と微隆起線文等が施された資料群である。583～589は軸の細い絡条体圧痕文と微隆起線文が施されたもので、583～587は口縁部みの破片資料である。583は口唇部直下に横位の微隆起線文を施し、その下位に絡条体圧痕文を横位に施している。口唇部にも絡条体圧痕文が見られる。584は口唇部直下に横位の絡条体圧痕文、微隆起線文を施す。微隆起線文から下位約3cmあけて、絡条体圧痕文を横位に施す。586は波状口縁で、波頂部である。波頂部から1条微隆起線文を垂下させ、また口唇部に沿って1条貼り付けている。その後に絡条体圧痕文を施したものと考えられる。587は外面に絡条体圧痕文を横位に施した後に、内面から口唇部を縦断し、外面にかけて隆帯を張り付けている。内面には擦痕が見られる。588・589は胴部みの破片資料である。両者とも横位に微隆起線文を貼り付けた後に、外面に絡条体圧痕文を施す。微隆起線文上の絡条体圧痕文は588のみ施されている。590～592は軸は判然としないがための絡条体圧痕文と微隆起線文が施されたもので、590は口縁部みの破片資料である。この尖らせた口唇部を持つ590は外面に絡条体圧痕文を施した後に、微隆起線文を縦位に口縁部から垂下させるように貼り付けている。その後に微隆起線文上にも絡条体圧痕文が施され、内面は擦痕が見られる。591・592は胴部みの破片資料である。591は屈曲部か。微隆起線文より上位に絡条体圧痕文が横位に施されている。592は横位の微隆起線文に縦位の微隆起線文が接続している。縦位の微隆起線文で区画された部分には絡条体圧痕文が横位・斜位に施されている。微隆起線文上にも絡条体圧痕文が施されている。593～619は軸が認められない絡条体圧痕文と微隆起線文が施された資料で、



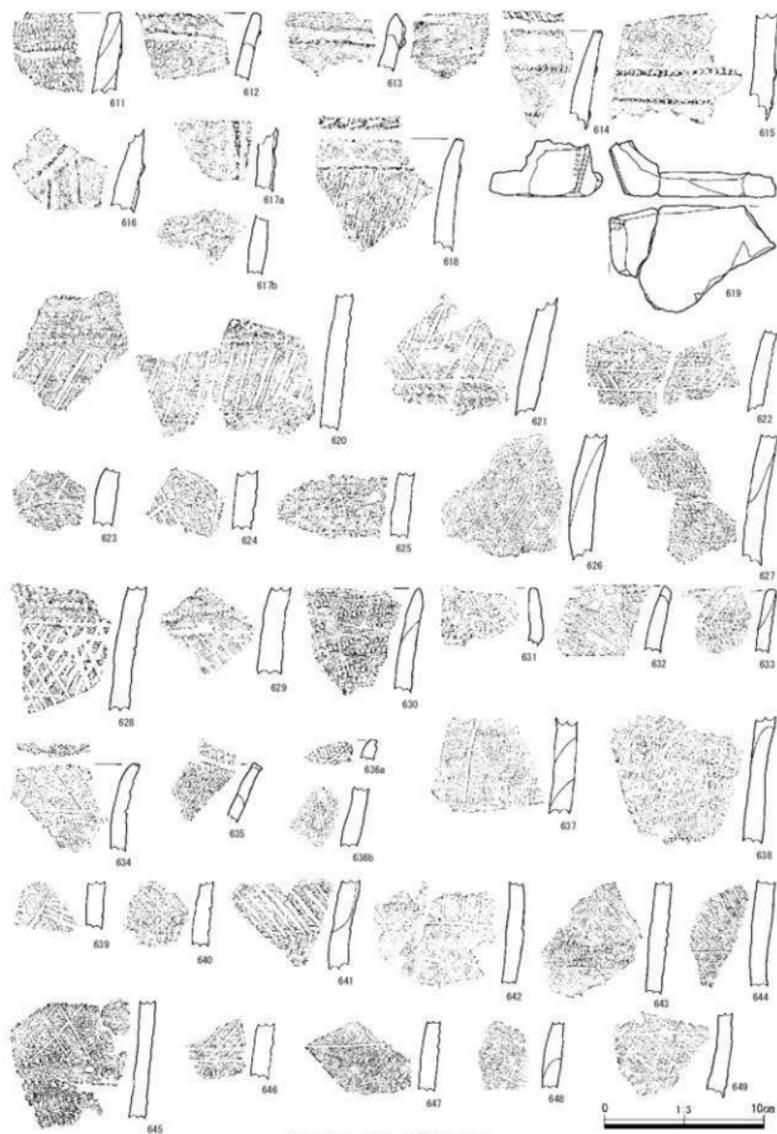
第93図 縄文土器第Ⅱ群3



第94図 縄文土器第Ⅱ群4



第95図 縄文土器第Ⅱ群5



第96図 縄文土器第Ⅱ群6

そのうち593～600は横位の絡条体圧痕文を基調とした口縁部資料である。いずれの資料も口唇部から1～2 cm程度間隔をあけて、横位の微隆起線文を貼り付けている。その後に絡条体圧痕文を外面、微隆起線文上に施している。口唇部は丸く仕上げるもの、平坦に仕上げるもの等多様である。また595・596のように波状口縁資料も存在する。601・602は絡条体圧痕文を横位に施した胴部破片資料である。603～606は絡条体圧痕文が横位・斜位に施された口縁部のみの破片資料である。603・604の口唇部は平坦に仕上げ、605は尖らせている。また603・605は波状口縁である。603～606は口唇部から間隔をあけて、微隆起線文を貼り付け、その下位に方向の異なる絡条体圧痕文を施している。いずれの資料も擦痕が見られるが、604の外面には絡条体圧痕文が施される前の擦痕調整が見られる。608～610は横位以外の微隆起線文が認められる資料である。608は口唇部がわずかに残存した破片資料である。口唇部から垂下した1条の縦位の微隆起線文と横位の微隆起線文が接続する。微隆起線文には絡条体圧痕文が施され、その下位に絡条体圧痕文が施されている。609は口唇部から垂下した2条の縦位微隆起線文と横位の微隆起線文が接続する。絡条体圧痕文の下位には絡条体圧痕文が施されている。また口唇部にわずかに絡条体圧痕文が観察される。610は波状口縁の波頂部付近か。口唇部に平行し、1 cm程度間隔をあけて微隆起線文が貼り付けられ、波頂部から短い微隆起線文が垂下・接続する。なお610は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施（IAAA-92040）した。その結果610は7,880±30yrBPという¹⁴C年代が測定されている。611～619は絡条体圧痕文及び微隆起線文が施されているものでも、特殊なタイプか。611は口唇部直下に極めて低平な隆帯を設け絡条体圧痕文を隆帯とその上・下位に施している。612は口唇部から1 cm程度あけて微隆起線文を設けているが、口唇部と微隆起線文の間にも斜位の絡条体圧痕文を充填している。613～615は横位の微隆起線文を2条貼り付けている資料である。613の口唇部は尖らせるために指頭で強く整形している。口唇部の下位に横位の微隆起線文が2条設けられ、絡条体圧痕文はさらにその下位に施されている。614も2条の微隆起線文が横位に施されている。口唇部から1.5 cm程度下位に1条目の微隆起線文、さらに2 cm程度下位に2条目の微隆起線文が貼り付けられている。絡条体圧痕文は2条目の微隆起線文より下位に施されている。口唇部は絡条体圧痕文か。615は胴部のみの破片資料である。絡条体圧痕文が施された2条の微隆起線文より上位に絡条体圧痕文が横位に施されている。616は3条の微隆起線文が貼り付けられている。破片上位から「ノ」字状に1条の微隆起線文が下方に延び、それから2条の微隆起線文が下方に垂下している。この下方に垂下する微隆起線文の間隙に絡条体圧痕文が充填されている。618は口縁部のみの破片資料である。口唇部は平坦に仕上げられ、絡条体圧痕文が施されている。口唇部から2 cm程度の間隔をあけて、横位に微隆起線文を貼り付ける。微隆起線文直下には半置反転されたものと考えられる絡条体圧痕文が施されている。619は底部のみの破片資料である。平底である。上から見ると方形を呈するものと考えられる。

620～649は絡条体圧痕文と沈線文が施された資料である。そのうち620～627は軸の細い絡条体圧痕文を施した胴部のみの破片資料である。620は破片上位に4条の絡条体圧痕文を横位に施し、その下位に斜位の沈線文を施す。先割型の工具を用いたものか。沈線文を施した後にその下位に絡条体圧痕文を横位に1条施している。621は2条横位に施された絡条体圧痕文の上位に横位の沈線文が1条施され、さらに上位には方向の異なる斜位の沈線文で文様帯が構成されている。622は絡条体圧痕文の下位に横位の沈線文で区画された、斜位の沈線文帯が確認される。623は絡条体圧痕文の上位に格子目状に沈線文が施されている。625は細かい絡条体圧痕文上に縦位・斜位の沈線文が施される。626は横位の絡条体圧痕文を複数条単位で間隔をあけて配置した後に、その間隙に格子目状の沈線文を施している。627は横位の絡条体圧痕文で構成された文様帯上位に沈線文が施されている。628・629はための絡条体圧痕文が施されている。628は横位の絡条体圧痕文の下位に格子目状の沈線文が施されている。比較的目の細かい格子目文である。630～649は軸が無い絡条体圧痕文が施されており、このうち630～636は口縁部のみ

の破片資料である。630は沈線文を施した後に絡条体圧痕文を施している。最後に口唇部が尖るように仕上げられている。なお630は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施（IAAA-92050）した。その結果630は $8,010 \pm 40\text{yrBP}$ という ^{14}C 年代が測定されている。631には屈曲部が認められる。口唇部はやや平坦に仕上げられ、横位の絡条体圧痕文を施した後に、半截竹管状の工具で斜位に沈線文を施している。632は口唇部を丸く仕上げられている。口唇部からやや浅い沈線文を縦位に施した後に斜位の沈線文を施し、最後に横位の絡条体圧痕文を施している。633は口唇部を平坦に仕上げている。口唇部直下に斜位の沈線文を施し、さらに下位には横位の絡条体圧痕文が施されている。634はわずかに外反する口縁部で、口唇部は平坦に仕上げられ、絡条体圧痕文が施されている。口唇部から約3cm下位に沈線文を横位に施した後に、格子目状の沈線文を施している。また横位の沈線文より下位には絡条体圧痕文が施されている。635は波状口縁か。口唇部を平坦に仕上げられている。外面に横位の絡条体圧痕文を施した後に、口唇部直下に横位の細く浅い沈線文と格子目状の沈線文を施し、口唇部に刻目文を施している。636も絡条体圧痕文を施した後に、格子目状の沈線文を施している。637～649は胴部みの破片資料である。637・638は横位の絡条体圧痕文を施した後に、縦位に沈線文を施している。639～641は絡条体圧痕文と沈線文が別区画に施された資料である。641は横位の沈線文を2条施し、その間隙に斜位の沈線文を充填している。沈線文の下位に絡条体圧痕文が施されている。642は横位の沈線文より上位に、斜位の沈線文と絡条体圧痕文が施されている。643は横位の絡条体圧痕文の上に、沈線文を山形に施す。絡条体圧痕文の下に横位の沈線文が施される。644は沈線文の下位に絡条体圧痕文。645～649は格子目状の沈線文が施された資料である。645は絡条体圧痕文が先に、647は沈線文を先に施している。

650～665は絡条体圧痕文、微隆起線文及び沈線文が施された資料群である。650は軸の細い絡条体圧痕文が施された口縁部みの破片資料である。650は他の2類土器の口縁部資料とは異なり、口唇部を平坦にし、口唇部内側端部を引き出すように仕上げている。また口唇部外側端部付近には隆線文でも貼り付けていたのか、器面が剝脱している。絡条体圧痕文が施された微隆起線文の下位には絡条体圧痕文と沈線文が見える。651～665は軸の無い絡条体圧痕文が施された資料で、そのうち651～661は口縁部みの破片資料である。651・652には絡条体圧痕文が施された微隆起線文が見られる。651は微隆起線文下位に絡条体圧痕文が施された後に、沈線文が施されている。652には微隆起線文が2条貼り付けられ、上段の微隆起線文のみ絡条体圧痕文が施されている。この微隆起線文間に格子目状に沈線文が施されている。653は口唇部を平坦に仕上げられ、刻目文が施されている。口唇部直下には斜位の沈線文、その下位に微隆起線文と絡条体圧痕文が施されている。波状口縁である654は口唇部直下より斜位の沈線文、絡条体圧痕文が施された微隆起線文、絡条体圧痕文が見られる。口唇部を平坦に仕上げ、刻目文を施す。656は654と同様の文様で構成されており、それらは微隆起線文・絡条体圧痕文・格子目状の沈線文の順で施文されたものと考えられる。657はその残存状況から絡条体圧痕文が施された微隆起線文が2条貼り付けられていたと考えられる。丸く仕上げられた口唇部から下位3.5cm程度に1条目、そこから4.5cm程度下位に2条目の微隆起線文が回り、口唇部直下から1条目、そして1条目・2条目の微隆起線文間に細い半截竹管状の工具で施された格子目状の沈線文が充填されている。なお657は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施（IAAA-92025）した。その結果657は $7,710 \pm 40\text{yrBP}$ という ^{14}C 年代が測定されている。658は外反する口縁部みの破片資料である。丸く仕上げられた口唇部には刻目文が施されている。口唇部から2.2cm、4.1cm程度の位置に横位の微隆起線文を巡らせた後に、2条の微隆起線文の下位に斜位の沈線文を引き、その間隙に絡条体圧痕文を施している。最後に2条の微隆起線文を縦位に垂下させ、2条の横位の微隆起線文と接続させている。659は平坦に仕上げられた口唇部をもち、口唇部に刻目文をもつ。口唇部から3cm程度間隔をあけて横位の微隆起線文を貼り付けている。



第 97 図 縄文土器第Ⅱ群 7

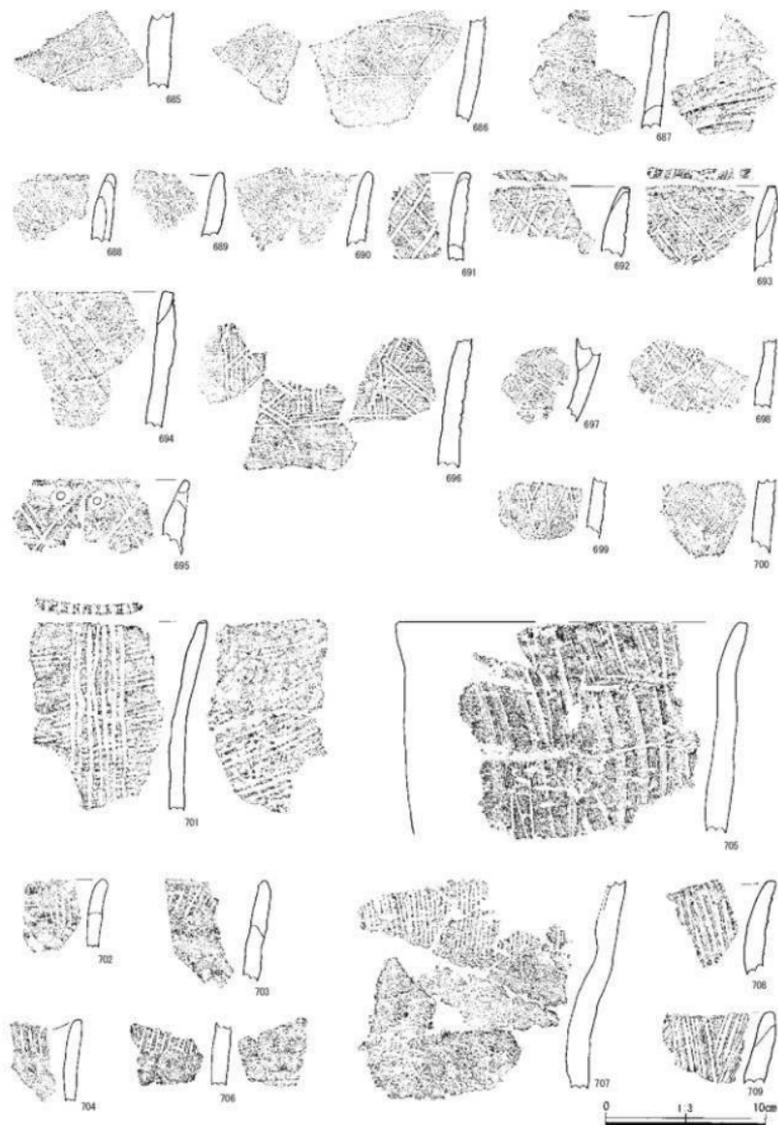
口唇部から縦位の微隆起線文を垂下させ、前述の微隆起線文と接続させている。また口唇部直下から斜位の沈線文を施し、微隆起線文まで引いている。660は穿孔がなされた資料で、口唇部に刻目文を施す。口唇部から2 cm程度の間隔をあけて横位の微隆起線文を貼り付け、口唇部から縦位の微隆起線文を垂下、接続させている。また口唇部と横位の微隆起線文との間に縦位の沈線文を充填させている。661も口唇部に刻目文が施されている。口唇部から5 cm程度下位に絡条体圧痕文が施された微隆起線文が横位に貼り付けられている。口唇部と横位の微隆起線文との間に、先割状の工具で斜位の沈線文が施されている。662～665は胴部のみ資料である。663は微隆起線文より上位に梯子状の沈線文が施されている。664は上位より絡条体圧痕文、横位・斜位の沈線文、微隆起線文が施されている。665は破片端部に辛うじて微隆起線文の存在が確認される。

666～700は絡条体圧痕文が施されていない土器群で、666～670は微隆起線文のみ施されたもので、全て口縁部のみ破片資料である。666・667は口唇部から若干の間隔をあけて微隆起線文を貼り付けている。なお666は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施（IAAA-92036）した。その結果666は $7,940 \pm 40\text{yrBP}$ という ^{14}C 年代が測定されている。668は口唇部を平坦に仕上げている。口唇部直下に横位の微隆起線文を貼り、その下位には斜位の微隆起線文が見られる。669は肥厚した口縁部資料である。口唇部から下位約5 cm程度の位置に段を設けている。また口唇部から縦位の微隆起線文を2 cm程度の間隔をあけて貼り付けている。670は2条の微隆起線文が内面側口唇部直下付近から外面にかけて貼り付けられた資料である。

671～680は微隆起線文と沈線文が施された資料で、671～677は口縁部のみ破片資料である。671は口唇部の下位に横位の沈線文、672は口唇部から斜位の沈線文を施している。両者とも口唇部に刻目文を施している。673の口唇部は平坦に仕上げられ、口唇部の直下に斜位の沈線文が施される。この沈線文は細い沈線文と幅があり浅めの沈線文とセットで、異なる2つの工具で同時に施したものである。674は口唇部を平坦に仕上げ、口唇部から縦位の微隆起線文を垂下させ、横位の微隆起線文と接続させている。横位の微隆起線文より下位には沈線文。675は縦位の微隆起線文が辛うじて残存する。676は平坦に仕上げられた口唇部に刺突文が見える。口唇部から短い微隆起線文が垂下し、下位の沈線文に接続する。677は平坦に仕上げられた口唇部から2条の平行する微隆起線文を垂下させ、残存状況から横位に貼り付けられた微隆起線文と接続させていたと考えられる。2条の微隆起線文の脇には格子目状の沈線文が施されている。678～680は胴部のみ破片資料である。なお677は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施（IAAA-92053）した。その結果677は $7,620 \pm 40\text{yrBP}$ という ^{14}C 年代が測定されている。678・679は縦位の微隆起線文と沈線文、680は横位の微隆起線文の上位に格子目状の沈線文が施されている。

681～700は沈線文のみ施された資料である。そのうち681～686は縦位・横位・斜位等の沈線文を用いたもので、681・682は口縁部のみ破片資料である。681 aは口唇部を丸く仕上げ、刻目文を施している。外面は擦痕調整の後に口唇部から2条の斜位の沈線文が平行し、その間に縦位の沈線文を充填している。同一個体と考えられる681 bには、沈線文が充填された文様帯により三角形の無文域が形成されている。682は平坦に仕上げられた口唇部をもち、刻目文を施す。口唇部から4条の沈線文が縦位に施されている。また2条の平行する沈線文が横位に施され、内部には斜位の沈線文が充填されている。683～686は胴部のみ破片資料である。683は横位の沈線文を施した後に、方向の異なる斜位の沈線文を上位で交差させている。また684も横位の沈線文の上位に方向の異なる斜位の沈線文を施しており、複合した鋸歯状のモチーフに仕上げられている。685・686は682と同様、2条の横位の沈線文の間に斜位の沈線文を充填したものである。

687～700は格子目状に沈線文が施されたもので、687～695は口縁部のみ破片資料で口唇部直下より



第98図 縄文土器第Ⅱ群8

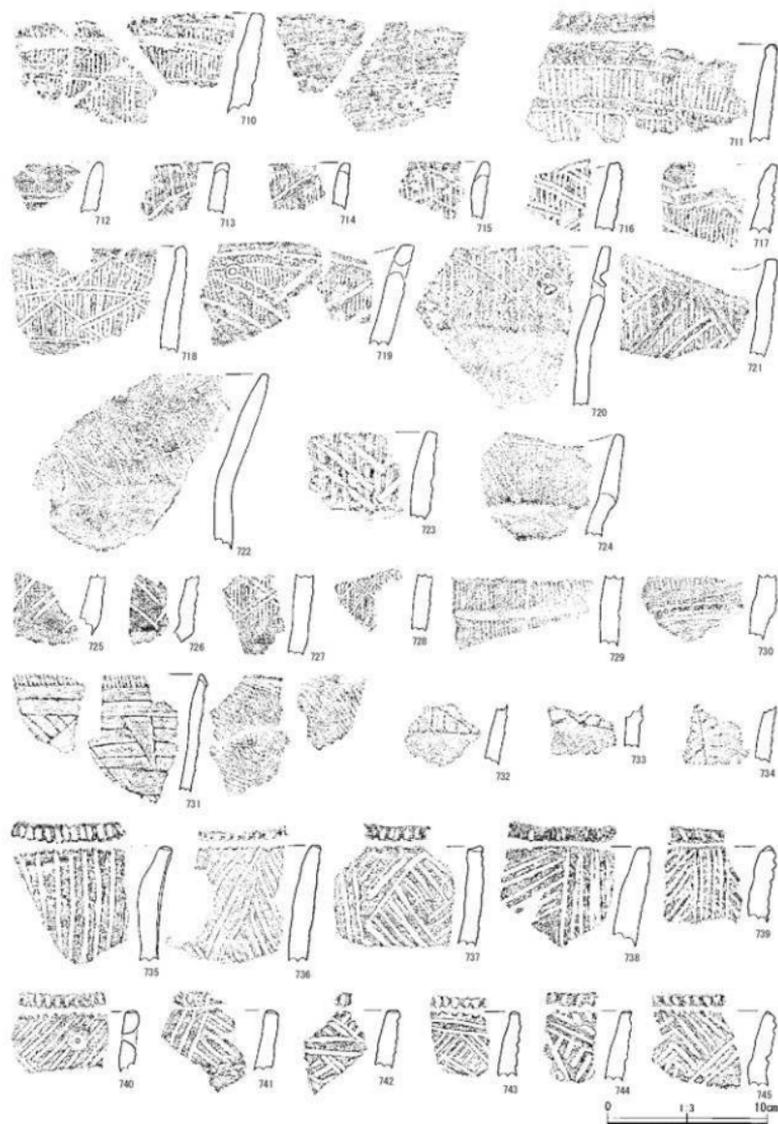
格子目状の沈線文を施している。687は外面に縦位の擦痕が残る。器面の擦痕調整後に2条の平行する沈線文を口唇部から垂下させた後に、横位の沈線文を施す。沈線文は細く浅い。内面にはナデ痕が明瞭に残る。690は波状口縁の波頂部と考えられ、格子目状の沈線文を施した後に、口唇部直下に横位の沈線文を施している。692・693は口唇部に刻目文を施し、693～695については半載竹管状の工具を用いた格子目状の沈線文を施した口縁部資料である。696～700は胴部だけの破片資料である。696・697・700は半載竹管状の工具を用いた沈線文を施している。696の沈線文は横位、縦位、斜位の順に施文され、格子目状をなす。698・699は棒状の工具を用いた沈線文を施している。

3類 (第98～102図 写真図版88～96)

野島式土器・木戸上式土器とも呼称される土器群を一括して3類とした。これらの土器は胎土中に繊維が認められ、また放射筋をもつ二枚貝の貝殻腹縁を土器製作時に用いることで、器面に糸痕文と呼ばれる痕跡を多く残す。文様は微隆起線文や沈線文を胴部上位から口縁部にかけて展開する。絡条体圧痕文を施すのを基調とした2類土器とは時期的に重複し、また前述のとおり2類土器には絡条体圧痕文を施さない沈線文・微隆起線文で文様が構成されたタイプも存在するため、当該3類土器との分離、もしくは統合が課題である。また縦位沈線文を施した土器群も当該分類で3類に含めている。3類土器のうち野島式並行土器と考えられた資料は、西尾根M-O-4～9グリッド付近及び中央尾根南端部P-Q-16～17グリッド付近に集中し、2類土器とは対照的な分布をなす。逆に野島式土器と考えられた資料は中央尾根付近に散見されるのみである。また縦位沈線文土器は中央尾根に散見され、西尾根ではその分布を見ない(第89図)。

701～816は3類に分類した土器群である。そのうち701～730は縦位沈線文土器の範疇か。口縁部付近に縦位の沈線文帯を設けたもの、器面に縦位の沈線文を施し、その上に異方向の沈線文を施し、文様化したものなどがある。701は平坦な口唇部を持つ資料で、口縁部は微かに外反する。糸痕調整の後に7本の縦位の沈線文を施す。702は5本の縦位沈線文か。703・704は口唇部直下に沈線文を施す。沈線文の下端は両者とも指頭による強いナデ痕か、浅くわずかな窪みまで延びる。705は胴部中位から口縁部まで残存した破片資料である。胴部はやや直線的であるが、口縁部へわずかに外反させている。口唇部は平坦に仕上げられ、残存状況から波状口縁の可能性がある。文様は口唇部直下から胴部中位付近まで沈線文を施している。その工具は先端が平らかな棒状を呈していたものか。この705は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施(IAAA-92033)した。その結果7,490±40yrBPという¹⁴C年代が測定されている。707は胴部下半から胴部上位にかけての破片資料である。胴部下半でわずかに外傾気味であったのが、胴部中位付近で屈曲している。縦位の沈線文はこの屈曲部付近まで施されており、文様帯の下端となる。この沈線文は貝殻の腹縁を用いたものか。

708～721・723・724は口縁部だけの破片資料である。708～709は口唇部直下から沈線文を施す。施文工具は貝殻を用いたものであろう。710・711は口唇部直下に縦位の沈線文を施した後、半載竹管状の工具で横位の沈線文を施し、711は口唇部を丸く仕上げ、貝殻の腹縁で刺突している。この711は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施(IAAA-92031)した。その結果7,990±40yrBPという¹⁴C年代が測定されている。712の文様構成は710・711と同様であるが、口唇部直下には横位の沈線文の代わりに、ナデ消している。713は口唇部直下にはナデや横位の沈線文が施されていない。714～717は口唇部直下から施された縦位の沈線文の上に半載竹管状の工具により、斜位の沈線文を施している。717は714～716で半載竹管状の工具で施された斜位の沈線文と比較して約2倍の幅がある。施文時に使用した工具の大きさに起因しよう。718は口唇部をわずかに丸く仕上げ、口唇部直下より縦位の沈線文を施している。その後には口唇部から2.5cm、5.5cm程度の位置に半載竹管状の工具を用いて横位の沈線文を施

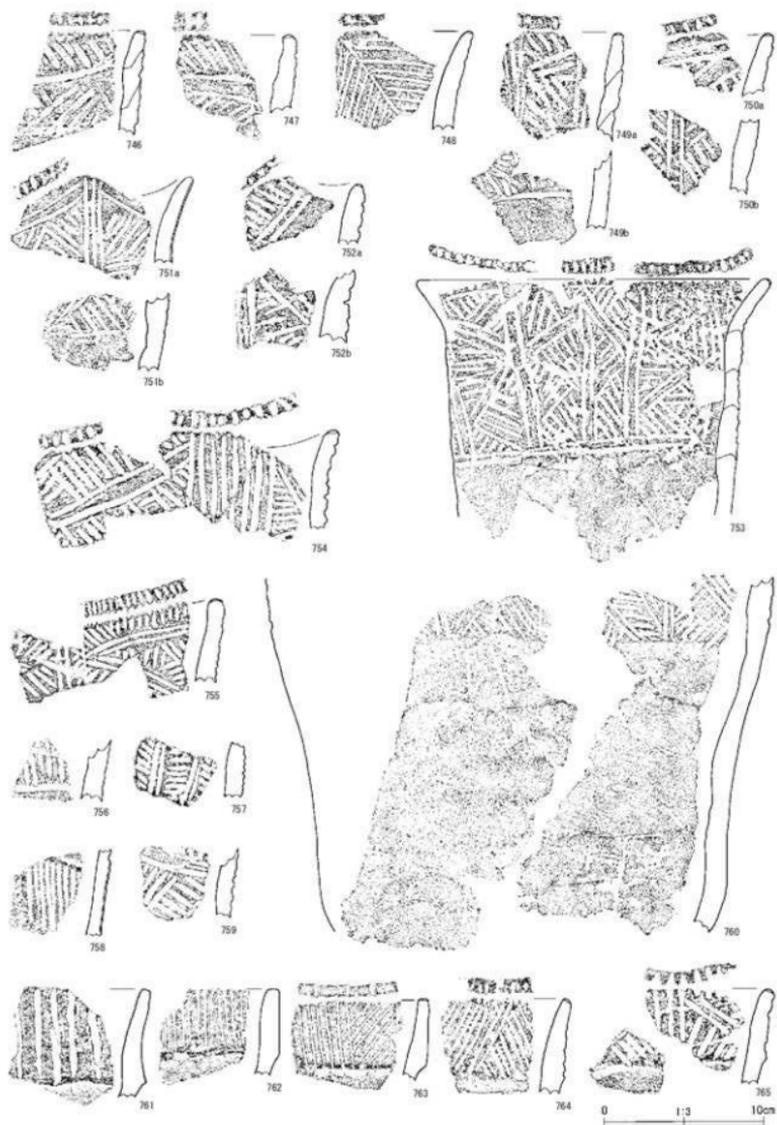


第99図 縄文土器Ⅱ群9

して、縦位の沈線文を上下の区画に分割している。最後に上下の区画内に同一の半截竹管状の工具で鋸刃状に沈線文を施している。719も720とほぼ同様の文様の構成であるが、719は口唇部直下に半截竹管状の工具で横位に沈線文を施し、また両面から穿孔している。720は胴部上半部から口縁部にかけて残存した資料である。直線的であった胴部が口縁部で屈曲している。口唇部直下から縦位の沈線文を施しているが、その下端は屈曲部付近でナデ消されている。縦位の沈線文の施文の後に半截竹管状の工具で斜位の沈線文を施している。この720には穿孔が2ヶ所認められるが、1ヶ所は未貫通である。なお719・720は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施（IAAA-92020・92037）した。その結果719は8,170±40yrBP、720は7,680±30yrBPという¹⁴C年代が測定されている。また719については現地調査時に10号住居跡出土遺物として扱われ、放射性炭素年代測定を実施したが、出土レベル等の検討から、包含層出土遺物と判断した資料である。721は波状口縁で、口唇部は平坦に仕上げられている。縦位の沈線文の上に半截竹管状の工具で斜位に沈線文を施している。最後に口唇部に沿って沈線文等の上端をナデ消している。723は口唇部直下から一面に縦位の沈線文を施した後に、浅く幅のある沈線文を斜位に施している。724は718～721と同様縦位の沈線文を地文として、半截竹管状の工具で斜位の沈線文を施す。ただし施文部は段状に仕上げられた部位に限定されている。波状口縁と考えられ、口唇部は平坦に仕上げている。縦位に沈線文が施されていないのが722である。722は口縁部から胴部上位にかけて残存した資料である。直線的に立ち上がった胴部が、屈曲し口縁部へ至る。口唇部は平坦に仕上げられている。口縁部から屈曲部までの間に半截竹管状の工具で鋸刃状の沈線文を施している。文様帯下端部は指頭により横位のナデか、半截竹管状の工具を用いた文様帯が口縁部付近に展開している点から、当該部類に入れている。725～728も縦位の沈線文を地文とし、半截竹管状の工具で斜位の沈線文を施す。725・726は段状をなしている。729は縦位の沈線文を地文とし、浅く幅のある沈線文を横位に施している。工具ではなく指頭による横位の沈線文か。730は段状を呈しており、縦位の沈線文を施したのち、角頭状の平坦な棒状の工具で極めて浅い沈線文を横位に施している。

731～734は微隆起線文を中心に文様が構成されている。731は口縁部のみの破片資料で、口唇部は尖らせている。内面は条痕文か。外面口唇部直下には貝殻の腹縁で刺突か。横位と斜位の微隆起線文が施されている。なお731は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施（IAAA-92039）した。その結果731は7,700±40yrBPという¹⁴C年代が測定されている。732～734は微隆起線文が見られる細片資料である。これらは典型的な野鳥式土器か。

735～816は沈線文が文様帯の主体となるもので、沈線文の他に刺突文や沈線文でも使用工具を変えて施すもの、段（胴部を屈曲、もしくは粘土紐により設えられた）の有無等で細分されよう。これらは野鳥式並行土器とする。735～760は段が認められず、沈線文も1種類のみである。これらのうち735～755は口縁部が残存する資料である。口唇部に刻目文を施し、内面は擦痕が多い点が共通している。735は単純に縦位の沈線文を施す。736・737は異方向の斜位の沈線文が施される。738・739は縦位と斜位の沈線文の組み合わせである。740は穿孔が認められる。741は沈線文より下位に無文域が認められる。742～745・747は横位もしくは斜位の2条の沈線文に区画性を窺うことができる。746は斜位の1条の沈線文に区画性を窺うことができる。748は斜位の沈線文に縦位・横位の沈線文を組み合わせている。749は縦位の沈線文の間に異方向の斜位の沈線文を充填している。文様帯の下端は横位の沈線文が区画する。750は縦位と斜位の沈線文で区画し、区画内は斜位の沈線文で充填する。751・752・754・755は波状口縁である。751は外反する口縁部で、波頂部から3条の沈線文を縦位に、また口唇部に沿って横位に2条施す。区画内には斜位の沈線文が充填される。文様帯の下端は横位の沈線文と施されたと考えられるが、判然としない。752は縦位と斜位の沈線文で区画している。754は波頂部から8本の沈線文を縦位に施した後斜位の2本の沈線文を施す。その間に斜位の沈線文で充填している。755は波底部付近か。



第100図 縄文土器Ⅱ群10

縦位と斜位の2本の沈線文で区画し、その間に沈線文を充填する。口唇部直下に縦位・斜位の短い沈線文を配置し、最後に口唇部に刻目文を施している。753は胴部中位から口縁部まで復原できた資料である。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は丸く仕上げ、刻目文を施している。胴部中位に横位の2条の沈線文を施した後、2条の縦位の沈線文が間隔をあけて配置される。縦位の沈線文により仕切られた区画内部に斜位の2条の沈線文を施し、区画を細分する。その間に沈線文を充填している。

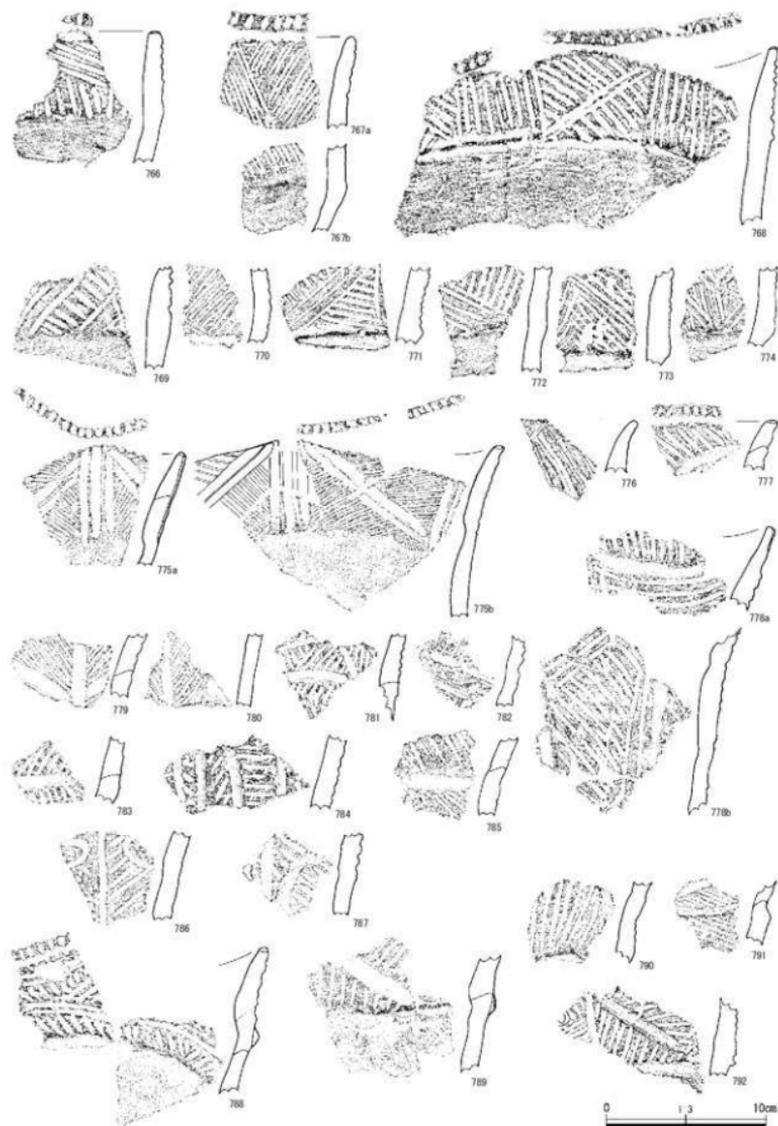
756~760は胴部だけの資料で、様々な方向の沈線文が認められる。758の沈線文は細い半載竹管状の工具により施されたものか。760は胴部下位から口縁部付近まで残存する資料である。胴部は下位付近でやや内湾するも、全体的に微かに外反しながら立ち上る。沈線文を主体とする文様帯が見られるが、施文後に沈線文下端にはナデ消された痕跡がある。なお760は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施(IAAA-92032)した。その結果760は $7,870 \pm 40$ yrBPという ^{14}C 年代が測定されている。

761~774は沈線文を主体とする文様帯の下端部に段等が設けられている資料で、761~768は口縁部だけの破片資料である。多くが口唇部に刻目文が施されているが、刻目文がないものも一定量認められ、口唇部は平坦に仕上げられたものが多い。内面はナデ、もしくは擦痕が見られ、条痕文は認められていない。761・762は縦位に沈線文を施した資料で、ナデにより段部端が細隆起線文状となる。口唇部に刻目文は無い。763~768は異方向の沈線文で文様帯が構成されている。いずれも口唇部に刻目文を施している。765は口唇部に刻目文を施した後に、外面に沈線文を施したものか。766は半載竹管状の工具を用いて沈線文を施したものか。沈線文を施した後に口唇部に刻目文を入れている。768は波状口縁で、段ではなく隆起線文を設けている。隆起線文は文様帯の下端を示し、指頭でつまみ出したものか。外面に見える沈線文は半載竹管状の工具で施されたものと考えられ、波頂部下位の文様区画は斜位の沈線文で構成され、異方向斜位の沈線文が交差する。この文様区画の両脇は縦位の沈線文が施されている。769~774は口縁部付近の破片資料で、口唇部が失われている。769は斜位の2本セットの沈線文との間に斜位の沈線文を充填している。771は3本セットの沈線文で区画している。

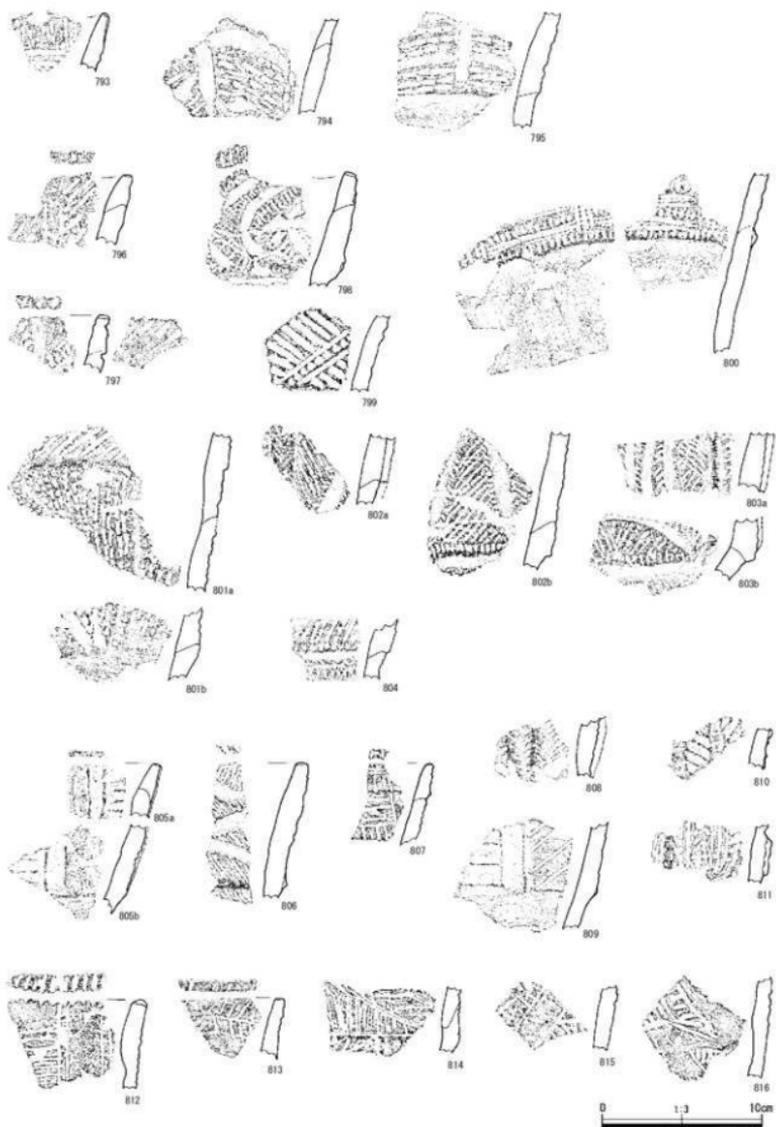
775~778は段を設けず太さの異なる2種類の沈線文で文様帯が構成されたもので、775~778は口縁部を有する資料である。775a・bは同一個体と考えられる資料である。波状口縁で口縁部はわずかに外反される。口唇部には刻目文を施している。波頂部では口唇部より3本の太く浅い沈線文を縦位に、また波底部付近にも縦位の太く浅い沈線文を施しており、両者を接続するように斜位の太く浅い沈線文を2本施している。これらの間隙には半載竹管状の工具による細い沈線文が見られる。これらの文様は斜位沈線文、細い沈線文、縦位沈線文の順で施文か。太く浅い沈線文は指頭によるものと考えられ、斜位に施された沈線文は同時に引かれたものではない。文様帯の下位は微かであるが縦位にナデを施した痕跡が見られる。776は半載竹管状の工具と先端の細かい棒状の工具を用いて2種の沈線文を施している。777には細い沈線文、太く浅い沈線文の2種が観察される。778a・bは同一個体と考えられ、辛うじて残存する口唇部の状況から、波状口縁と考えられる。口唇部直下に縦位の短い沈線文を施し、その下位には浅く太い沈線文が1本カーブを描くように施されている。また縦位に3本の沈線文が施されているが、そのうち1本は太く浅い沈線文、棒状の工具を用いたような沈線文である。

779~787は口唇部が残存しない口縁部付近の破片資料で、多くが太い沈線文と細い沈線文の2種認められる。段は見られない。782の太い沈線文は角頭状の工具を使用したものか。786での縦位と曲線を描く沈線文は、斜位に施された沈線文と比較して幅がわずかに異なり、断面の形状もわずかに角状を呈していたことが考えられる。

788~792は段を設け、太さの異なる2種の沈線文で文様帯が構成されたものである。上述したタイプと比較して数的に少ない感がある。788は波状口縁である。粘土紐を貼り付けて段状となし、段と平



第101図 縄文土器第Ⅱ群 11



第 102 図 縄文土器第Ⅱ群 12

行する横位の沈線文は半截竹管状の工具を使用したものか。他の沈線文は棒状工具を使用。口唇部には刻目文を施している。789の太く浅い沈線文は指頭、他の沈線文は棒状工具によるものか。792も太く浅い沈線文と細い沈線文の組み合わせであるが、縦位に区画する沈線文と区画内充填の沈線文に用いられた工具が異なる可能性がある。

793～795は押引文を施した資料である。口縁部のみ資料である793は口唇部直下に縦位に押引文を施す。口唇部に刻目文か。794は縦位と斜位に施された太く浅い沈線文による区画域に押引文が施されている。795は段を設けた資料で、縦位に施された太く浅い沈線文の両脇に押引文が見られる。

796～804は刺突文が施された資料で、796～798は口縁部のみ破片資料である。いずれも口唇部に刻目文を施し、その多くは2種の異なる沈線文で文様帯が構成されている。796は口唇部から縦位に施した沈線文の間に刺突文が施されている。797は口唇部に刻目文が施されている。沈線文の脇には器面に対して斜方向から施された刺突文が見られる。内面口唇部直下にも刺突文が施されている。798は波状口縁であるが、口唇部付近はわずかに残存しているに過ぎない。口唇部直下、刻目文に沿うように刺突文が施されている。太く浅い沈線文が曲線を描くように配置され、その間に技法的には押引文に近い細い沈線文が充填される。この細い沈線文と刺突文は同一の工具を用いているものと考えられる。799～804は口唇部が残存していない資料である。799は斜位の平行沈線文の間に刺突文が施されている。半截竹管状の工具を用いたものか。800は隆帯が設けられている。隆帯より上位に横位の沈線文を施した後、3本の縦位沈線文が各々間隔をおいて施されている。刺突文は隆帯の上位面、及び横位の沈線文より上位に施されている。801 a・bは同一個体と考えられる。801 bは胴部中位付近か。わずかに段状をなし、段より上位に押引文と刺突文が施される。801 aも段が設けられ、段より上位に斜位の沈線文、段より下位には押引文と刺突文が施されている。これらの刺突文は細い竹管状の工具により施されたもので、押引文と同一工具か。802 a・bも同一個体と考えられる資料である。802 aには隆帯が縦位に貼り付けられている。隆帯及び隆帯脇には半截竹管状の工具で押引文か。刺突文は押引文と太く浅い沈線文との境に施されている。802 bには段上位に刺突文、押引文と浅い沈線文で文様帯を構成している。802の刺突文の位置は区画性のある段及び太く浅い沈線文に沿うように配置されている。同一個体と考えられる資料の803 a・bは802と同様縦位の隆帯と段を設ける資料である。803 aは縦位の隆帯と太く浅い沈線文との間に押引沈線文と刺突文を施している。803 bは段の上位に刺突文と押引沈線文、太く浅い沈線文が施されている。804は段を設けており、段の下位に刺突文、上位に刺突文と押引沈線文が施されている。刺突文は半截竹管状の工具を用いており、押引文と同一工具の可能性もある。

805～811は微隆起線文や隆帯が見られる資料である。805 a・bは同一個体で、段を設けた資料である。口唇部には微かに刻目文が施されている。口唇部直下から3本の微隆起線文を垂下させ、それにより区画された微隆起線文間の狭い区域に刺突文を充填している。また微隆起線文の脇には横位の微隆起線文を施している。806は直線的に立ち上がり、口唇部を平坦に仕上げ、刻目文を施した資料である。外面には半截竹管状の工具を用いた沈線文と太く浅い沈線文が設けられ、破片下端に横位の隆起線文が見られる。807は刻目文が施された口唇部から2 cm程度の間隔をあけて微隆起線文を横位に施す。微隆起線文の上位に縦位の沈線文、下位には縦位・横位の沈線文が見られる。808は2本の隆起線文が施されている。809は段が設けられた資料である。縦位に2本の微隆起線文を段まで垂下させ、またその縦位の微隆起線文に接続する横位の微隆起線文が段上に見られる。810は刺突文が施された太く浅い沈線文の両脇に、傾いた梯子状に微隆起線文が見られる。811は刻目文のある隆起線文、沈線文・押引文・刺突文が施されている。

812～816は文様のモチーフが他と異なるものを一括した。812は口縁部のみ破片資料である。丸く仕上げられた口唇部には刻目文が施されている。口唇部から半截竹管状の工具で縦位の沈線文を2本施

している。その脇に横位の沈線文を同一工具で施している。813も口縁部だけの破片資料である。丸く仕上げられた口唇部に刻目文が施されている。口唇部直下に沈線文が施されているが、梯子状のモチーフなのか判然としない。814はわずかに段を設けた資料である。段には横位の沈線文をもって明確化し、段より上位は斜位の細い半截竹管状の工具で区画し、その区画域に縦位もしくは横位の沈線文を充填している。段より下位には斜位の沈線文か。815は斜位の2本の沈線文を施し、その脇に「」状の沈線文が施される。なお815は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施（IAAA-92035）した。その結果、815は8,090±40yrBPという¹⁴C年代が測定されている。816は屈曲した沈線文で設けられた区画内に沈線文が充填されている。

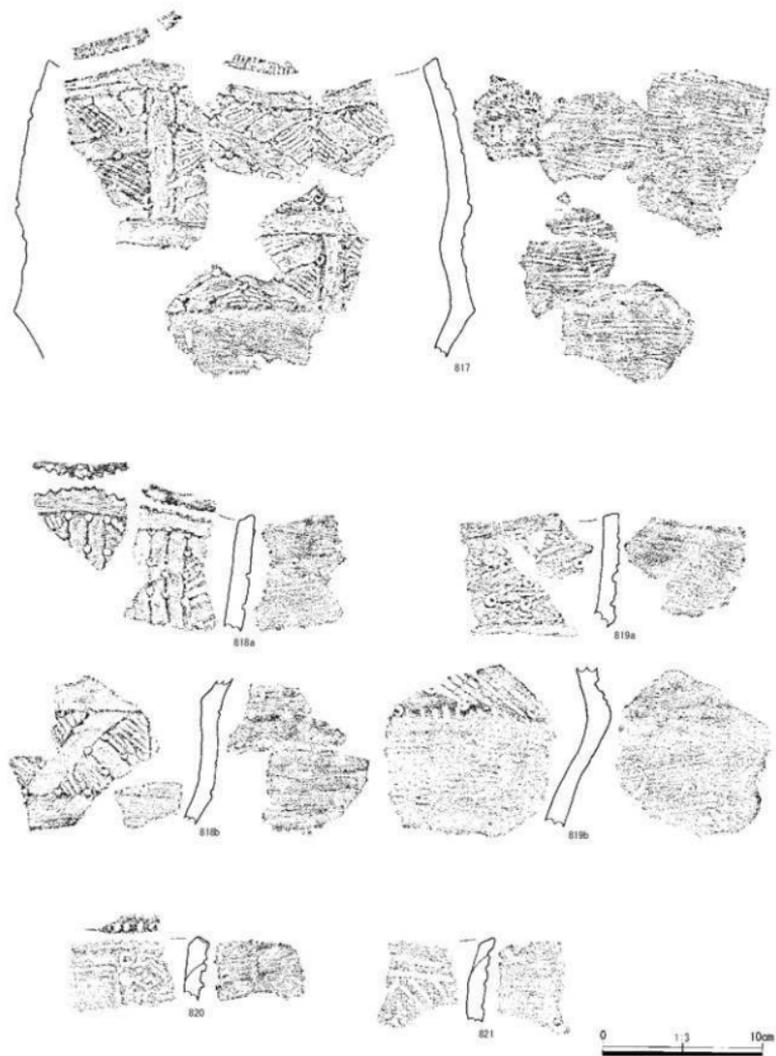
4類（第103図 写真図版97）

3類土器とした野島式土器の文様構成等を継承し、成立したとされる鶴ヶ島台式土器を4類に分類した。器形としては平底・平底の深鉢が一般で、括れ・段が2ヶ所とされ、段を境に文様帯が2つに分化する構成が主流となり、口唇部直下の文様帯は消失することが知られる。また胎土中に繊維が見られ、内面に条痕文が見られるものが多い。出土位置は中央尾根から東尾根に限られる（第108図）。

817～821は4類に分類した土器で、全て口縁部が残存している。817は胴部中位付近から口縁部までの残存した破片資料である。括れになる段は2ヶ所認められ、破片の状況から上位の段から口縁部にかけては内傾気味である。焼成時からかなりの歪みが生じていた可能性を指摘しておく。波状口縁で、口唇部は平坦に仕上げている。波頂部は明瞭ではないが双頭状を呈している点で、野島式土器までの波状口縁資料と異なる。波底部付近の口唇部には刻目文が散見される。外面波頂部直下に細隆起線文で半円状のモチーフを作り、それを起点として縦位2本組の細隆起線文を施し、上位の段に接続する。また口唇部沿いに細隆起線文を施し、縦位細隆起線文と段による区画内にも細隆起線文や押引文を充填している。細隆起線文毎の交点には円形竹管状の工具による刺突文が施されるが、器面に対して斜方向から刺突しているため、殆どの刺突文は半截竹管状の仕上がりである。下位の段と上位の段との間に展開する文様帯は上位の文様帯と同様である。下位の段より下位には施文された様子は窺えない。内面は条痕文が見られる。818 a・bは同一個体と考えられる。aは口縁部だけの破片資料である。波状口縁の波頂部か。わずかに双頭状を呈している。口唇部は指頭による整形に起因するのか、わずかに凹む。円形竹管状の工具による刺突文が配置された縦位の細隆起線文等が見られる。bは上位・下位の段が辛うじて残存した胴部だけの破片資料である。細隆起線文で区画された内部に押引文で充填している。819 a・bも同一個体と考えられる。819 aは細隆起線文の代わりに押引文を以て区画を行っている。円形刺突文と押引文の施文具は異なる工具を使用か。819 bは下位の段付近のみ残存した資料である。押引文・刺突文が施されている。段より下位には調整痕のみである。820は口唇部に刻目文を施し、口唇部直下に細隆起線文を設ける。外面の一部に条痕文がナデ消されずに残存している。821は沈線文と押引文が施されている。胎土中に雲母が多く見られるため、他の鶴ヶ島台式土器と印象が異なる。

5類（第104図 写真図版97・98）

茅山下層式土器と考えられる土器群を一括し、5類とした。茅山下層式土器は鶴ヶ島台式土器からの器形を継承し、広く浅い沈線文即ち凹線等で文様を描くものが増えることが知られる。またこの凹線に刺突文を随伴するように配置するタイプでは、やがて凹線が失われ刺突文のみで文様帯を構成するハッ崎I式土器へ繋がることされる。このハッ崎I式土器の祖系的なものとして元野式土器の存在が推定されている。これらは東海地方西側から近畿地方まで広範囲にその分布が確認されたため、東海条痕文系土器として扱う意見がある。この5類の胎土中には繊維が見られ、条痕文が多く見られる点について



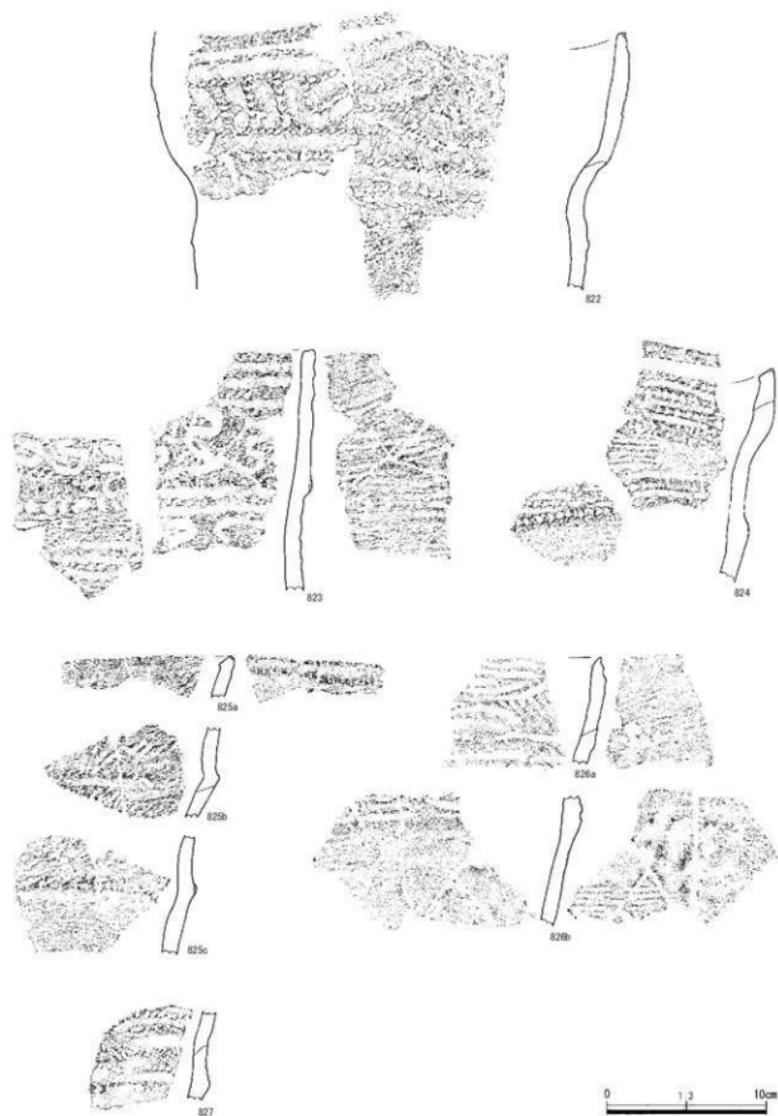
第103図 縄文土器Ⅱ群13

は東海条痕文系土器と共通するも、器形の点において茅山下層式土器に類似するため、茅山下層式土器の地方色としても十分考えられる。なお茅山下層式土器・ハツ崎1式土器、元野式土器に該当する可能性がある資料の分布は東根根に集中し、これらの同時期性を想起させた(第108図)。

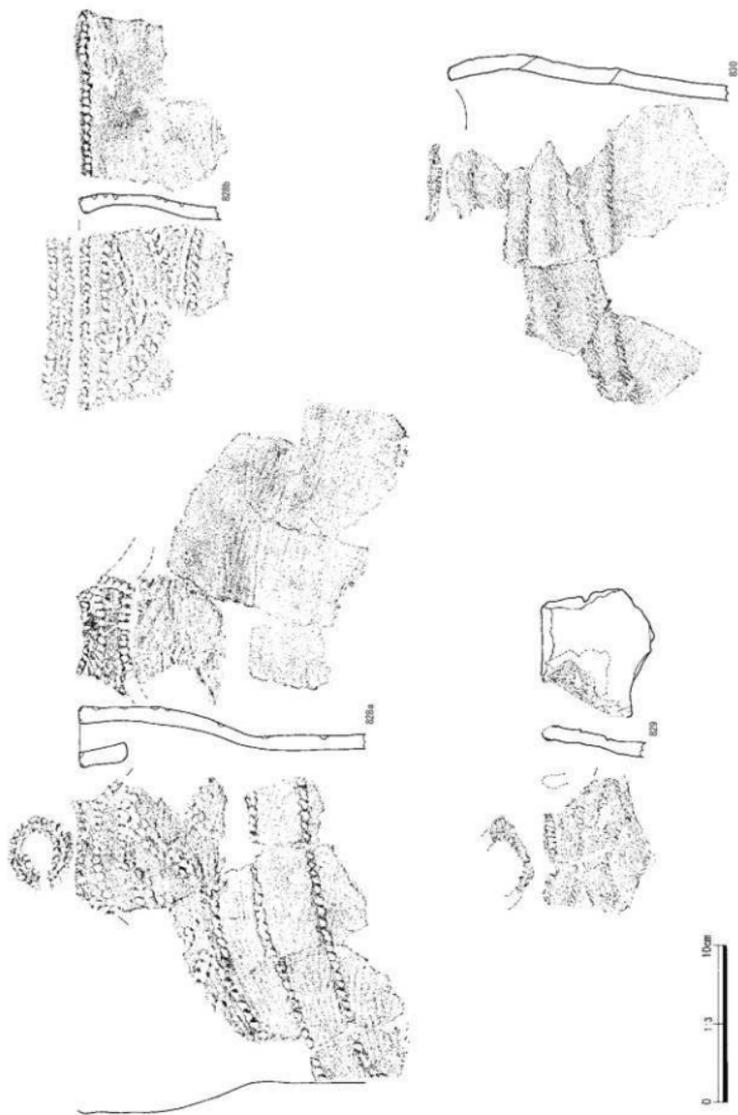
822~827は5類に分類した土器である。822は胴部中位から口縁部まで残存した破片資料である。段が2つ見られ、下位の段は隆起線文状で、やや不明瞭であるが、上位の段は器形を屈曲させたもので、明瞭である。当該資料は緩やかな波状口縁だが、波頂部は欠損している。また波頂部付近が外側に張り出していた点や、他の口縁部湾曲の状態から勘案して、上から見た形は本来、円ではなく、楕円形であった可能性がある。口唇部は平坦に仕上げ、口唇部内面側端部や外面側端部に刻目文を入れた箇所が部分的に見られる。上位の段で仕切られた上下の文様帯は、両者とも指頭を用いた可能性がある広く浅い凹線及びその凹線沿いに施された刺突文で構成されている。上位の文様帯は波頂部直下辺りから凹線及び刺突文が左右に派生し、梯子状のモチーフに接続する。上位の段の縁には刺突文列を設けている。下位の文様帯は凹線・刺突文列が横位に施されているのみで、下段より下位には文様が認められない。823は胴部中位から口縁部まで残存した破片資料であるが、全体的に磨滅気味である。胴部は全体的に直線的に立ち上がり、口縁部付近も内湾させていない。口唇部は平坦に仕上げている。口唇部直下には2本の幅の広い押引文が施され、浅く幅の広い凹線文が「S」字状に施されている。その下位には隆起線文により段が設けられている。別の破片資料には隆起線文に刻目文が施されている。段の下位には2本の幅の広い押引文と褶曲した凹線文が見られる。内面には条痕文が横位に施されている。824も823と同様、胴部中位から口縁部にかけて残存した破片資料である。胴部は括れて立ち上がる。口唇部は平坦に仕上げ、口唇部外面側端部に刻目文を施す。口唇部直下から上位の段までは凹線文と押引文を横位に施している。下位の段上には凹線文と押引文を組み合わせる施文している。外面には条痕文がナデ消されずに残存する。825 a・b・cは同一個体と考えられるもので、口唇部付近、上位の段、下位の段付近の破片資料である。段は胴部を屈曲させ、隆起線を貼り付けることで仕上げている。aの口唇部は尖らせるために強めのナデを行ったため、口唇部内面側端部が隆起線文状に仕上げられ、そこに刻目文が施されている。外面口唇部直下には縄文が見られる。bは上位の段付近の破片資料で、段の上下に縄文が施されている。cは下位の段の破片資料で刻目文が施されている。段より上には縄文、段より下には条痕文が見られる。826 a・bは同一個体と考えられるもので、口縁部から上位の段、下位の段付近の破片資料である。口縁部はわずかに内湾し、口唇部は尖らせているが、内面側には平坦な面が形成されている。外面の地文はRL縄文か。口唇部直下より沈線文を施しているが、直線と弧線の組み合わせで文様が成立している。上位の段付近にも沈線文を施す。826 bは下位の段が残存し、段より下位には文様が施されていない。上位と下位の段の間隙にも文様が充填されていた可能性がある。827は段が残存する胴部だけの破片資料である。段より上に刺突文、縄文、凹線文が施されている。段にも刻目文が施されていると考えられるが、全体的に磨滅気味で判然としない。なお827は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施(1AAA-92045)した。その結果、7,230±40yrBPという¹⁴C年代が測定されている。

6類(第105図 写真図版98)

元野式と考えられる資料を一括した。828~830は刺突文のみで文様が構成される資料である。828 a・bは同一個体と考えられる資料で、胴部中位から口縁部にかけて残存している。この資料は波状口縁で、波頂部を注口状に仕上げている。この資料は胴部を直線的に立ち上げ、口縁部付近から大きく内湾させ段となし、口唇部は平坦に仕上げている。口唇部平坦面内面側及び外面の側端部に刻目文を施している。内外面ともに条痕文が施されている。口唇部直下に沿うように刺突文を横位に連続して施し、同様に段付近にも刺突文を施している。その区画内に連続した刺突文により鋸歯状のモチーフを描く。段より下



第104図 縄文土器第Ⅱ群14



第105圖 網文土器第Ⅱ群 15



第106図 縄文土器第Ⅱ群16

位には間隔を開けて刺突文を連続して横位に施す。829も波状口縁の破片資料で、波頂部を注口状に仕上げた資料である。刺突文が施されている。830は波状口縁の波頂部が残存した資料である。口唇部には刻目文がわずかに見える。胴部中位より口縁部まで残存している。段は2ヶ所設けられているが、隆帯状に仕上げている。器面は丁寧にナデ整形された後に、刺突文を施している。

7類 (第106図 写真図版99)

ハツ崎式土器の可能性のある資料を7類とした。831は胴部下位から口縁部まで残存した資料である。口唇部には刻目文を施し、注口状の設えを2ヶ所に設けている。段は口唇部から6cm程度の箇所設けられ、刺突文が段に沿って連続して横位に施されている。また口唇部直下にも沿うように刺突文が施されている。この横位の刺突文で区画された内部に異なる斜位の刺突文列を施し、鋸歯状に仕上げている。段より下位4cm程度の箇所には刺突文を連続して横位に施している。これ以外に段より下位の部分には施文が認められない。胴部下位には条痕文が見られるが、刺突文を施す前に外面の胴部中位から口縁部にかけては丁寧に条痕文をナデ消している。

8類 (第106図 写真図版99)

茅山上層式土器の可能性のあるものを8類とした。茅山上層式土器は段・括れの無いものが主要となり、底部も平底が主流とされる。今回の調査では東支谷でも中央尾根と東尾根に挟まれた狭隘な区域で極少数出土したにすぎない。832は波状口縁の波頂部の破片資料である。鈎状の大きな隆帯が貼り付けられている。胎土中には繊維が見られる。

9類 (第106図 写真図版99)

粕畑式土器の可能性のあるものを9類土器とした。東海系条痕文土器のひとつで、器面に調整の痕跡である条痕文が多く見られ、外面に貝殻腹縁を用いた刺突文が施されている。胎土中には繊維が見られる。元野式土器、ハツ崎1式土器に時的に後続し、また茅山上層式土器と並行するものと考えられている。当該粕畑式土器では段部が消滅し、主要器種である深鉢の器形は砲弾状を呈し、平底をなすとされる。1-1区の南西端、西尾根ZV~ZW-0~1グリッド付近に集中分布する(第108図)。

833は口縁部だけの破片資料である。本来は波状口縁か。外面は条痕文が見られ、貝殻腹縁による刺突文が口唇部に沿って連続して施されている。834は胴部上位から口縁部まで残存した破片資料である。胴部は直線的に伸び口縁部に至る。口唇部は尖らせており、刻目文が施されている。磨滅のため判然としないが、条痕文が内外面ともに見られ、外面には刺突文列が3条横位に配置されている。なお834は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施(IAAA-92034)した。その結果、7,020±30yrBPという¹⁴C年代が測定されている。

10類 (第106・107図 写真図版99・100)

上ノ山式土器や時的に並行するものと考えられる土器を10類とした。上ノ山式土器は東海地方を中心に分布する条痕文土器のひとつで、粕畑式土器に後続するとされる。特徴的な文様として指頭押圧を加えた隆帯が知られ、胎土中に繊維も見られるという。また上ノ山式土器に時的に並行する可能性の高い無文土器も10類に加えた。10類は東支谷でも中央尾根と東尾根に挟まれた狭隘な区域のみ出土している(第108図)。

835~845は10類に分類した土器群である。そのうち835~842は口縁部のみの破片資料である。貝殻腹縁を用いた可能性のある837・842を除けば、口唇部には指頭による押圧文が施される。837・842は波状



第107図 縄文土器Ⅱ群17

口縁の波頂部と考えられる。これらの資料は軽く外反させた資料が多い。835～837は口唇部直下に隆帯を貼り付け、押圧文を施している。838・842は口唇部から間隔をあけて隆帯を貼り付け、839～841は隆帯が見られない口縁部資料である。

843～845は文様が施されていない資料である。843は胴部だけの破片資料である。下位に縦位のナデ痕が観察される。844は胴部中位から口縁部にかけて残存した破片資料である。わずかに内湾している。口唇部は尖らせている。内外面ともに横位のナデ痕が見られる。845は口縁部のみの破片資料で、波状口縁の波頂部付近と考えられる。内外面ともに横位のナデ痕が見られる。

11類 (第107図 写真図版100)

打越式土器や時期的に並行する可能性があるものを11類土器とした。主体は丸底に近い尖底土器で、貝殻腹縁を利用した文様を多用する。胎土中に繊維が見られるが、中には繊維が見られない資料も散見される。11類は西文谷から東尾根にかけて極少数確認されたにすぎない。東尾根に幾らかの纏まりが見られる(第108図)。

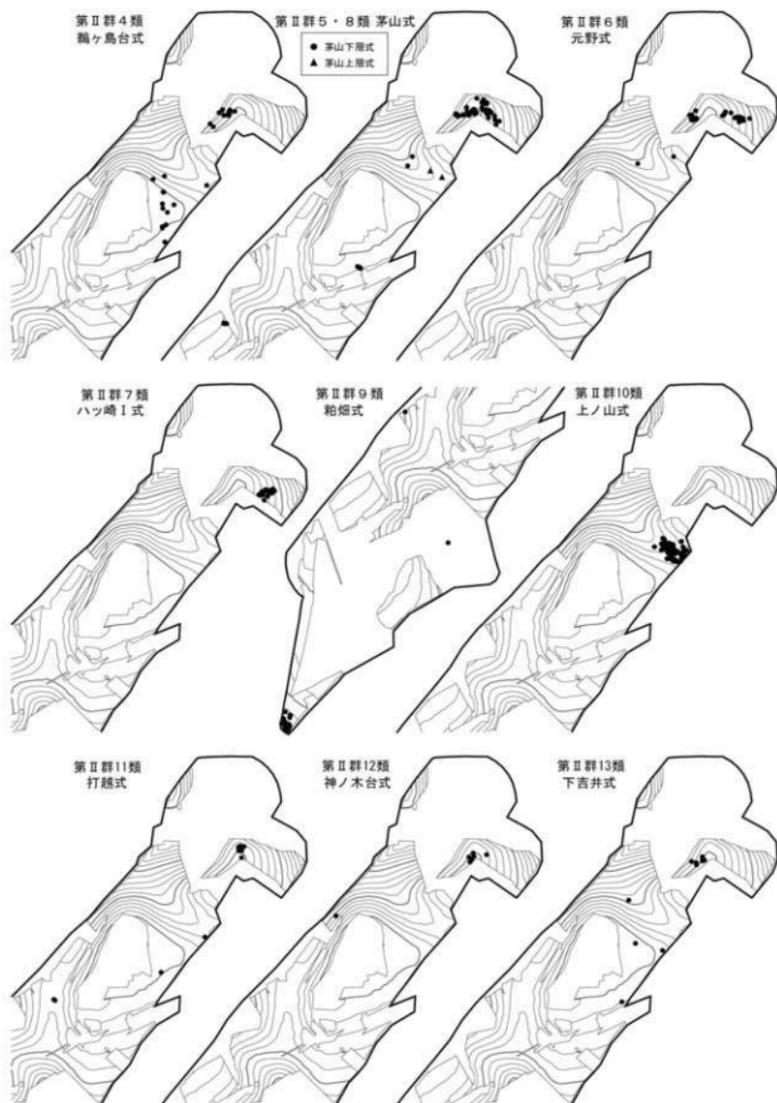
846～849は11類に分類した土器群である。846は胴部から口縁部まで残存した破片資料である。直線的に立ち上げる口縁部で、口唇部はやや肥厚し、平坦に仕上げられている。口唇部には貝殻を用いて刻目文が施されている。外面は擦痕が見られる。口唇部直下から貝殻を用いて格子目文を施している。胎土中の繊維があまり見られない資料のうちのひとつである。847は波状口縁の波頂部か。短い隆帯を2つ貼り付け、その間隙の口唇部には貝殻腹縁の刺突による刻目文が施されている。848は胴部のみの破片資料である。外面に異なる傾きの貝殻腹縁の刺突により山形文が施されている。849 a・bは同一個体と考えられるもので、口縁部と胴部中位の破片資料である。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部付近のみ軽く外反させている。口唇部は丸く仕上げられ、貝殻腹縁による刻目文が見られる。外面には貝殻腹縁を用いて褶曲線文を施している。内面には条痕文が見られる。この849は他の11類土器と比べて繊維が多く見られるのも特徴的である。また貝殻を用いた褶曲する文様が伊勢湾沿岸を中心に分布する楕圓間式土器にも見られることから関連性が想起される。

12類 (第108図 写真図版100)

神ノ木台土器や時期的に並行するものと考えられるものを12類土器に分類した。この土器は東尾根に幾らかのまとまりが見られるが、出土点数は極少量である。850は口縁部付近の破片資料である。口唇部がやや丸く仕上げている。刻目文を施した隆帯を2本口縁部付近に貼り付けている。隆帯より下位には条痕文か。851は胴部のみの破片資料である。貝殻腹縁の刺突文が施されている。

13類 (第108・110図 写真図版100)

下吉井式土器や時期的に並行するものと考えられるものを13類土器に分類した。13類土器の点数も極少量で、東尾根に幾らかの纏まりが認められるのみである。852は口縁部のみの破片資料である。口唇部は丸く仕上げている。口唇部から1.5cm程度の間隔をあけて隆帯を貼り付けている。隆帯には刺突文が施されている。853は波状口縁と考えられる破片資料である。波頂部は欠損しているが、波頂部より垂下せられる隆帯が残存する。低平な隆帯で無文土器である。854も口縁部のみの破片資料である。口唇部は丸く仕上げている。外面には半截竹管状の工具により沈線文が施されている。855 a・bは同一個体と考えられる胴部のみの破片資料である。先端が角頭状の工具で押引文や刺突文を施している。856も胴部のみの破片資料である。隆帯が2本横位に貼り付けられ、その間隙に沈線文で蕨手状の渦巻き文様を施している。上位の隆帯から上位には直線的な沈線文が見える。

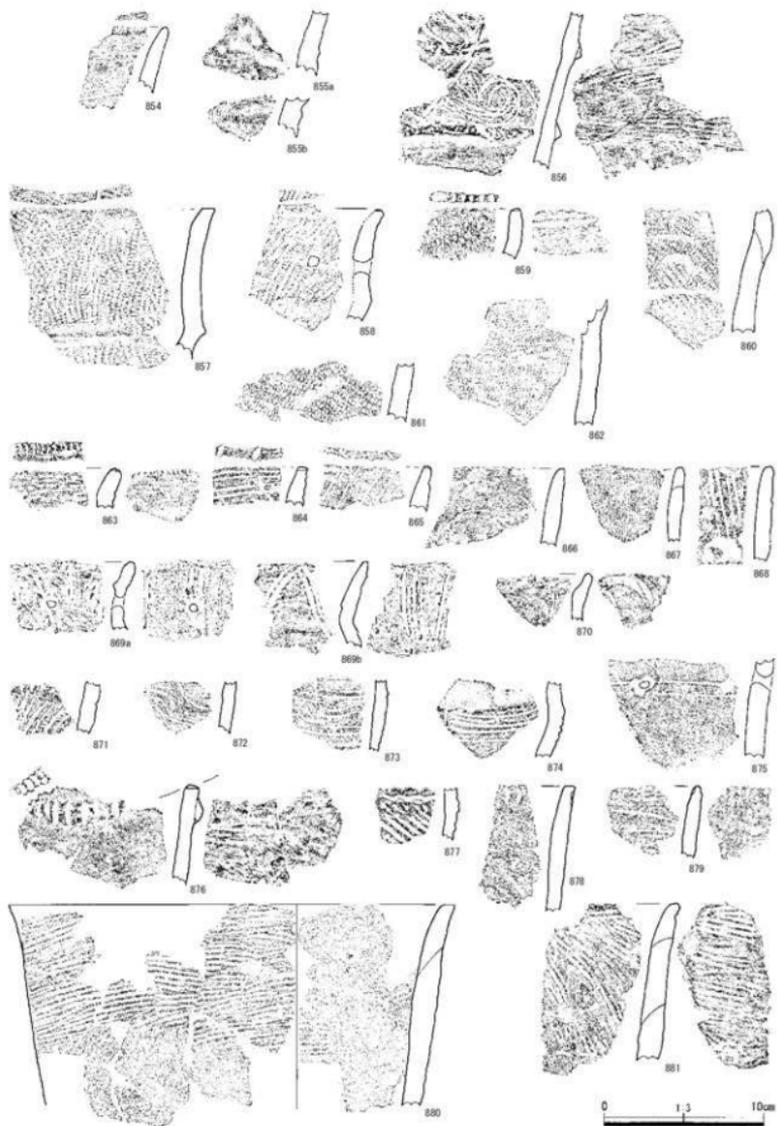


第108図 土器分布図3

第Ⅲ群
早期型式不明



第109図 土器分布図4



第110図 縄文土器第Ⅱ群18・第Ⅲ群1

第III群 早期代 型式不明(第110・111図 写真図版100・101)

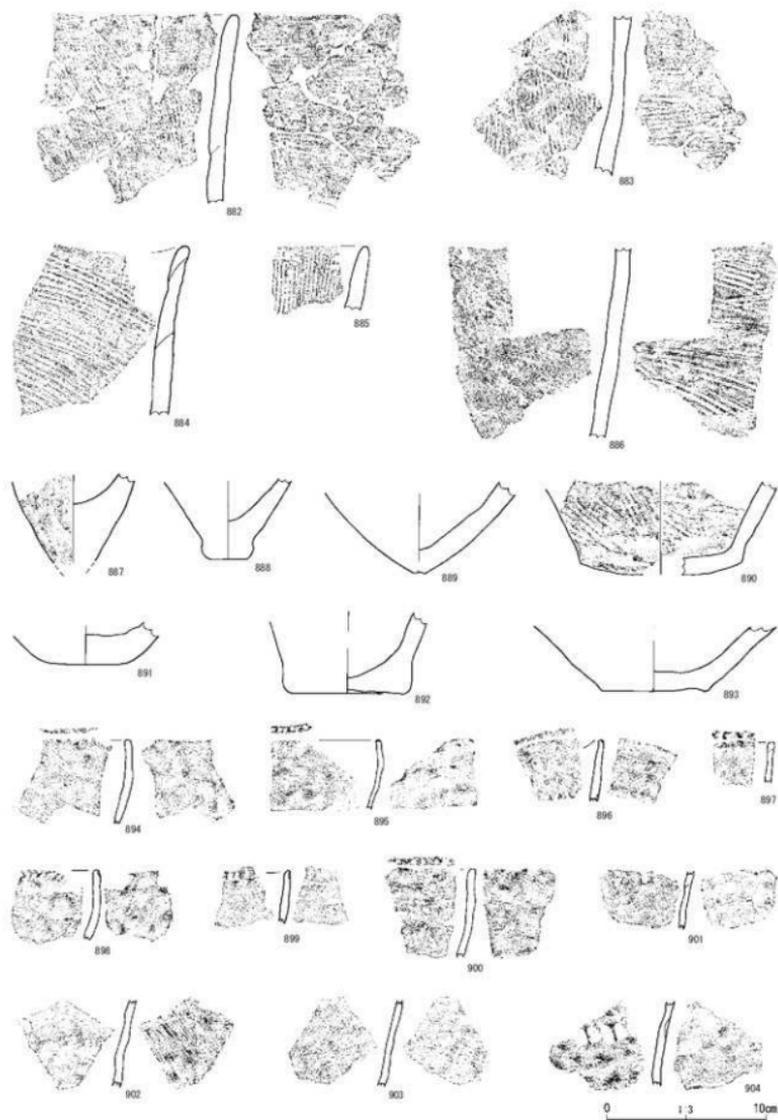
857～893は早期代の土器と考えられるものの、今回分類し得なかった資料を第III群とした。文様としては縄文、沈線文や隆帯文、条痕文等が見られる。

これらの分布は調査区全域に認められるが、中央尾根の南東側、早期代の住居が多く位置するV～Y-18～21グリッド付近に特に集中する。また東尾根や東支谷でも中央尾根と東尾根に挟まれた狭隘な区域とAA-14・15グリッド付近、西尾根M～O-4～9グリッド付近の分布も目立つ(第109図)。

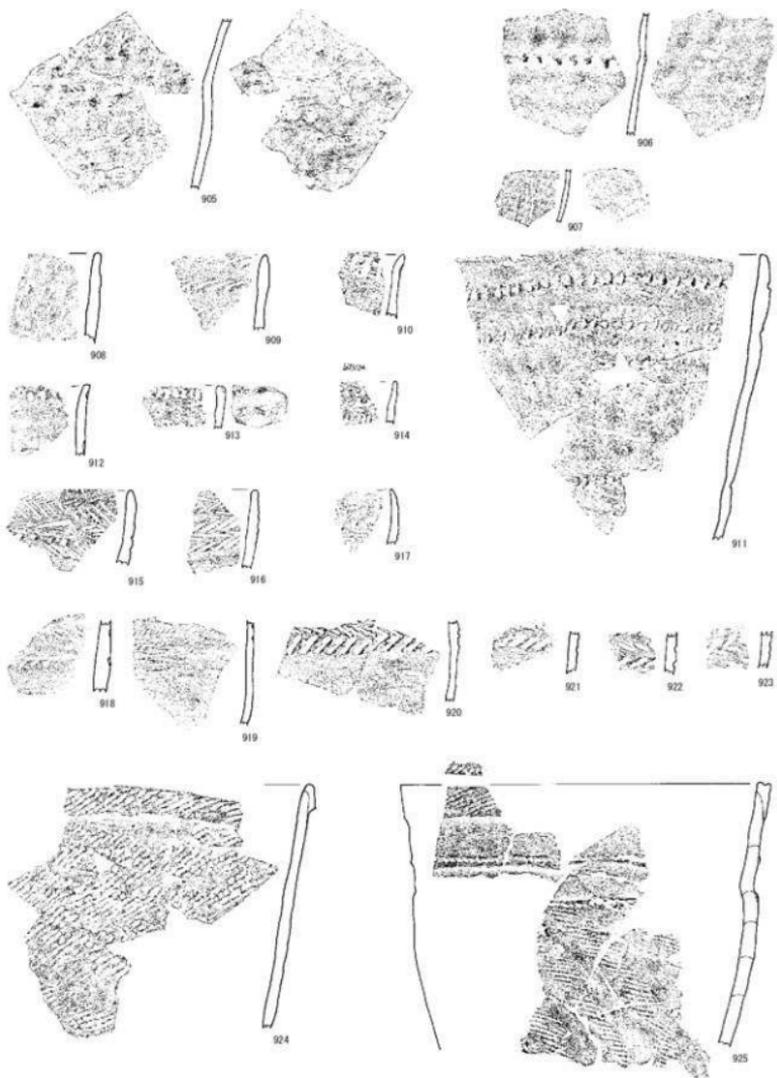
857～862は縄文が施されたもので、3類土器とした野島式土器の古段階と並行すると考えられる古屋敷式土器に類似する。2類土器とした件の清水柳E類土器とも時期的に並行するものか。施文の主体は縄文で、胎土中に繊維がわずかに他に、白色粒子・雲母が大量に見られる。857～859は口縁部のみの破片資料である。857は段が設けられた資料である。段からは外反し、口唇部は平坦で縄文を施されている。外面はRL縄文が施されている。858は口唇部付近を強めに外反させており、口唇部には縄文が施されている。両面からの穿孔がなされている。859は内湾気味な口縁部資料である。口唇部は丸く仕上げ、刻目文を施している。外面にはRL縄文か。内面は条痕調整の後にナデか。860は口唇部付近が失われている。段のように一部肥厚した箇所が見られる。RL縄文を施している。861・862は胴部のみの破片資料である。

863～875は沈線文が施された資料で、縄文を施した857～862と比較して、数量は多く、分布域も広い。863～870は口縁部の破片資料である。863～865は口唇部に刻目文を施している。863は丸く仕上げた口唇部を持ち、外面に押引文が施される。胎土中には雲母が多く見られる。864は平坦に仕上げた口唇部を持ち、外面に半截竹管状の工具で横位の沈線文が施されている。865は斜位の沈線文が施される。866～870は口唇部に刻目文等を施していない資料である。866は半截竹管状の工具で互いに交差する2本の曲線文を施している。867は口唇部直下から縦位に沈線文を施す。波状口縁か。868は口唇部直下から半截竹管状の工具で縦位に沈線文を施している。第II群3類に近い資料か。869a・bは軽く外反させた口縁部で、口唇部を丸く仕上げている。外面には半截竹管状・先割状の工具の2種類を用いて、文様を描いている。内面には半截竹管状の工具で沈線文を短く施している。両面からの穿孔がなされている。870は内面に凹縁を施している。871～875は胴部のみの破片資料である。871は沈線文と刺突文が施されている。872は貝殻腹縁を用いた波状文か。873は半截竹管状の工具で横位に沈線文を施している。874は段部を有し、段より上位に半截竹管状の工具で沈線文を施す。875は半截竹管状の工具で横位に沈線文を施す。両面から穿孔がなされている。876・877は隆帯文が施される資料である。876は波頂部付近の破片資料で、幅の広い隆帯が貼り付けられ、刻目文が施されている。877は判然としない低平な隆帯を設け、その上位に波状の沈線文を施す。隆帯から斜位の沈線文を施す。878は刺突文が施されている。口唇部直下に爪形の刺突文を施す。

880～886は条痕文が施された資料で、中央尾根を中心に多く分布する。880は胴部中位から口縁部にかけて残存した破片資料である。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口唇部は平坦に仕上げられている。内外面ともに横位の条痕文が見られるが、外面では胴部中位より下には見られない。881は口唇部付近をわずかに外反させ、丸く仕上げている。外面は斜位の条痕文が見られるが、口唇部直下のみ横位の条痕文である。882は胴部上位から口縁部まで残存する。胴部から口縁部までは直線的で、口唇部は丸く仕上げている。外面は横位に条痕文を施した後、縦位の条痕文が施されている。883は胴部のみの破片資料である。外面は縦位、内面は横位の条痕文が見られる。884は波状口縁で、ほぼ直線的に立ち上がり口唇部を丸く仕上げている。外面には横位の条痕文が見られる。内面にも条痕文が見られるが、判然としない。885は口唇部を丸く仕上げている。外面に縦位の条痕文が見られる。886は胴部下位から中位にかけての破片資料である。内面のみ条痕文が見られる。外面の条痕文はナデ



第111図 縄文土器第三群2・第四群1



第 112 図 縄文土器第IV群 2

消されたものか。

887～893は底部のみの破片資料である。887～889は尖底である。887は外面に縦位のナデ痕が見られる。888は瘤状をなす。889は内面に指頭によるナデ痕が見られる。890は平底である。胴部内外面に条痕文が見られる。891は丸底か。892は平底である。胴部外面に条痕文か。893は底部外面の周縁に粘土紐を貼り付け、高台状に仕上げている。底部内面には指頭痕が見られる。

第IV群 早期末～前期前半

1類 (第111・112図 写真図版102)

木鳥式土器と考えられる土器群を一括した。「細線文薄手指痕土器」とも呼ばれる木鳥式土器の主要な器種は丸底をもつ深鉢で、櫛歯状やへら状、半截竹管状の工具による刺突文・沈線文やアナダラ属の貝の貝殻を用いた背圧痕が見られ、隆帯も設けられるという。内面には指頭痕が見られ、器厚は3～5mm程度と薄く仕上げる。今回出土した1類土器の大半は前期代のものか。分布は中央尾根(北)から東支谷を経て東尾根にかけて分布し、中央尾根(南)以南には見られない(第118図)。

894～907は1類に分類した土器で、894～900は口縁部のみの破片資料である。894～897は口唇部を平坦に仕上げ、刻目文を施す。口唇部直下から斜位に半截竹管状の工具を用いて、細かい沈線文を施している。895は格子目状に文様を施す。896は口唇部から3cm程度の間隔をあけて2段目の刺突文列が配置されている。897は口唇部に指頭による押圧文が施される。898～900は口唇部付近の刻目文・刺突文以外には文様が見られない資料である。898は内外面ともに指頭痕が見られる。899は口唇部を丸く仕上げ、口唇部直下に刺突文を施している。

901～907は胴部だけの破片資料である。901～903は半截竹管状の工具を用いて細い沈線文を施している。3つの資料のうち901のみ格子目状に沈線文を施している。904は指頭による摘み文を施している。905は胴部中位から下位にかけての破片資料か。指頭痕が内外面に顕著で、刺突文が破片上端部付近に見える。906には細く低平な隆帯を貼り付けた後に、刺突文か。907は刺突文が一面に施されている。

2類 (第112図 写真図版102)

清水ノ上Ⅱ式土器・上の坊式土器とも呼称される土器群を一括した。2者とも胎土中に繊維が見られず、器厚も薄く仕上げているのが特徴であり、清水ノ上Ⅱ式土器は口縁部付近を肥厚させて縁帯部をつくり、刻目文やE字状の刺突文を施すのを基調とし、尖底・丸底の深鉢が主要器種として知られる。上の坊式土器も刺突文を主要な文様とし、長めの刺突文の傾斜を変えて矢羽状の組み合わせが見られ、主に尖底の丸底が多いとされる。これら清水ノ上Ⅱ式土器と上の坊式土器はほぼ同質で時期的にも並行すると見られ、研究が進められている。分布の上では中央尾根(北)に集中している(第118図)。

908～923は2類に分類した土器で、そのうち908～917は口縁部を有する破片資料である。いずれも口唇部は丸く仕上げられたもので、直線的に立ち上げ、口唇部付近をわずかに曲げた資料が多い。これらは刺突文が観察される資料である。908は口唇部直下に爪形の刺突文が3段連続して施されている。909も同様であるが、刺突に用いた工具を大きく傾けて施文している。910も爪形の刺突文が見られるが、工具はアナダラ属の貝殻とは異なる貝殻腹縁か。911は胴部中位から口縁部まで残存した破片資料である。胴部は口縁部まで直線的に立ち上がる。口唇部から2cm程度の位置に刺突文を横位に連続して施している。また2.5cm程度間隔をあけて、2段目の刺突文を連続して施している。さらに口唇部から14.5cm程度の位置、胴部中位付近にもう1段刺突文を横位に連続して施している。上2段分と最下段の刺突文列は工具が異なる。内面においては工具が判然としないものの横位のナデ痕が顕著である。912・913ともに半截竹管状の工具を用いた刺突文を施した口縁部のみの破片資料である。912は半截竹管状の工

具の背を、913は腹を土器面に当てて、連続して刺突している。912は口唇部から3.5cm程度の位置に、もう1段刺突文を連続して施している。914は口唇部に細かい刻目文を施している。口唇部直下に3種の工具の異なる刺突文が横位に施されている。915・916は刺突文を段毎に傾斜を変えて矢羽状に仕上げている。915は口唇部直下に矢羽状の刺突文を配置する。916は矢羽状の刺突文を複数段設けている。917は半載竹管状の工具を用いた文様か。918～923は胴部だけの破片資料で、刺突文が施されている。918は貝殻腹縁による刺突文が施されている。919はヘラ状の工具による刺突文か。内面は横位のナデ痕が顕著である。920は斜位の短い沈線文と刺突文を組み合わせて矢羽状に仕上げている。なお920は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施（IAAA-92041）した。その結果920は5,580±30yrBPという¹⁴C年代が測定されている。

3類（第112図 写真図版103）

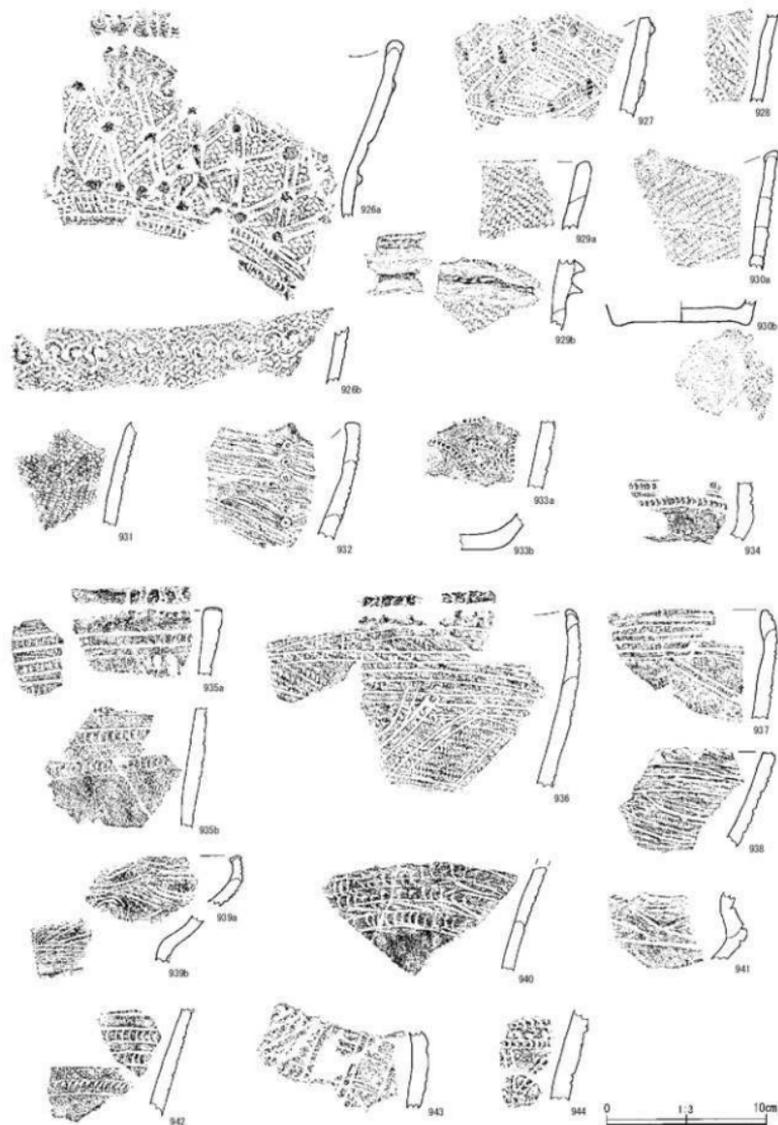
花積下層式土器や時期的に並行すると考えられる土器群を一括して3類土器とした。前期初頭に位置づけられる花積下層式土器は平底の深鉢が多く、文様は縄文・燃系が主で、羽状・菱型状に縄文を施すものが知られる。またこの型式では燃系側面圧痕文の多用が特徴的とされる。分布は中央尾根（北）及び東尾根に見られ、中央尾根（南）以南では確認できない（第118図）。

924は胴部中位から口縁部にかけての破片資料である。胴部は口縁部まで直線的であり、口縁部は緩やかな波状口縁か。肥厚した口縁部を持つ。口縁部から胴部まで縄文を施している。内面に擦痕か。この924は花積下層式土器に並行する信州地方の塚田式土器にも類似する。925も口縁部から胴部中位にかけての破片資料である。胴部はわずかに内湾気味に立ち上げているが、途中で立ち上がり直線的に仕上げられており、変換点が括れ状をなす。括れを挟み1cm程度上・下位の位置に細い隆帯が貼り付けられている。口唇部は肥厚させ、平坦に仕上げ、かつ縄文を施している。口縁部には縄文が施され、肥厚部より下位、2本の細い隆帯との間隙には横位のナデ痕が見える。2本の細い隆帯上には花積下層式土器に特徴的な燃系側面圧痕文が施されている。下位の細い隆帯より下位には縄文が施されている。

4類（第113図 写真図版103・104）

間山式土器や時期的に並行すると考えられる土器群を一括して4類土器とした。間山式土器はⅠ・Ⅱ位の段階に分かれ、羽状縄文が文様の基調となし、口縁部の文様帯には半載竹管状の工具を用いた刺突文や「コンパス文」、貼付文等が知られる。3類土器と同様胎土中に繊維が多く含まれる。分布は中央尾根（北）から東尾根にかけて見られる（第118図）。

926 a・bは口縁部と胴部の一部の破片資料である。波状口縁で波頂部付近の口唇部には半載竹管状の工具による刺突文が施されている。他の口唇部は尖らせている。波頂部直下にはコンパス文が見られる。その下位は地文を縄文とし、半載竹管状の工具による格子目状の沈線文、沈線文の交差部に貼付文が見られる。波頂部から9.5cm程度の位置、口縁部がわずかに外反する箇所に半載竹管状の工具で2本の平行沈線文を施し、その上から刺突文を施している。926 bは胴部中位付近か。コンパス文が見られる資料である。927も波状口縁だが、波頂部が欠損している。口唇部は平坦に仕上げられているが、刻目文は見られない。口唇部直下には半載竹管状の工具で菱型に沈線文を施す。沈線文には連続して刺突文を施す。随所に貼付文が見られる。928も927と同様菱型に沈線文を施す。929 a・bは口縁部と胴部の破片資料で同一個体と考えられる資料である。口唇部は平坦に仕上げられている。胴部には鬚状とも言うべきか、高く仕上げられた隆帯が2本見られる。930 aは口縁部だけの破片資料である。波状口縁で波頂部に突起が付けられている。口唇部は平坦に仕上げられている。破片中位付近は粘土紐の接合部か。



第113図 縄文土器第四群3・第V群1



第114図 縄文土器第V群2

第V群 前期後半

1類 (第113図 写真図版104)

有尾式土器の可能性のある土器を1類土器とした。中央尾根端に極少量見られる。931は口縁部のみの破片資料である。口唇部は丸く仕上げられている。櫛歯状の工具で刺突文を施している。その下位には縄文が施されている。胎土中に繊維が見られる。

2類 (第113図 写真図版104)

諸磯a式土器を2類土器とした。主要な器種として深鉢や浅鉢前段階の黒浜式土器の系統にのり、半截竹管状の工具を用いて、米字状のモチーフや爪形文、円形刺突文も多いという。胎土中に繊維が見られるものもある。富士石遺跡では東尾根付近に極少量見られた。932は口縁部のみの破片資料で波状口縁が。口唇部は丸く仕上げ、突起を設けている。外面には燃糸文を施した後に、口唇部直下に半截竹管状の工具で2本の平行沈線文を施している。最後に口唇部突起の下位に、竹管状の工具で円形刺突文を施している。933は幅の狭い半截竹管状の工具で施している。木の葉文か。胎土中に繊維は見られない。934は浅鉢か。半截竹管文が施されている。

3類 (第113・114図 写真図版104・105)

諸磯b式土器を3類土器とした。2類土器の後継で文様帯が胴部下半まで進出する。幅が広い半截竹管状の工具による爪形文や沈線文等で木の葉状、波状のモチーフを描いたり、細い粘土紐で浮線文を作り、渦巻きや弧状のモチーフが知られる。主要な器種は深鉢や浅鉢で、胎土中に繊維は見られない。この3類土器は中央尾根、東尾根及び東支谷でも尾根に挟まれた狭隘な区域に分布域が見られる(第119図)。

935～957は3類に分類した土器群である。935～944は半截竹管状の工具による沈線文を多用した資料である。935～939は口縁部が残存した資料である。935a・bは同一個体と考えられるもので、胴部中位から口縁部まで残存した資料である。胴部は直線的に立ち上がり、口唇部に至る。口唇部は平坦に仕上げられ、4つの貼付文が施される。外面には最初に縄文を施し、その後、口唇部直下に爪形文を伴う平行沈線文を複数本施している。936～938はほぼ同様の文様構成である。936は波状口縁の波底部付近の資料と考えられる。口縁部は微かに内湾して立ち上がり、口唇部は丸く仕上げている。口唇部には4つの貼付文が施されている。外面は縄文を一面に施した後に、口唇部直下に4～5本の半截竹管状の工具による平行沈線文を施している。その下位に同じ工具で弧状のモチーフを描く。937は口唇部をわずかに内側へ傾けている。936と同様外面に縄文を施した後に、口唇部直下に横位には平行沈線文を配置する。938は口唇部を平坦に仕上げ、口唇部外面側端部に刻目文を施している。939は胴部中位から大きく外反させ、口縁部は内湾させて口唇部を丸く仕上げている。外面には渦巻き状のモチーフが沈線文により構成されている。この施文を行った工具は936～938の工具と比較して幅が狭い。一方、940の平行沈線文・爪形文の施文に用いられた工具は前述のものより幅が広いのが特徴的で、平行沈線文間に別の棒状工具による斜位の沈線文が充填されている。942も940と同様の文様であるが、最下段の爪形文は下半部が消えている。943は格子目状の平行沈線文が施されている。これら935～944のうち浅鉢は941のみで、残りは深鉢と考えられる。この941の外面にはヘラ状の工具で三角形の文様が施されている。

945～956は浮線文が施された資料で、そのうち945～949は口縁部が残存した破片資料である。945は波状口縁である。外反する口縁部で、口唇部は平坦に仕上げられている。口唇部直下には半截竹管状の工具による平行沈線文、刻目文を施した浮線文と縄文が施されている。946は浅鉢の口縁部のみの破片資料か。947a・bは同一個体と考えられる資料である。胴部上位で外反し、口縁部付近で内湾する。

波状口縁で波頂部には環状の把手がある。その両脇には突起を設け、口唇部には刻目文を施す。把手直下に浮線文で渦巻き状のモチーフが施されている。胴部上位は浮線文、胴部中心位以下は縄文を主とする。948も波状口縁で、波頂部に突起状の把手を設けている。渦巻き状、梯子状のモチーフが浮線文により形作られている。949は口縁部に突起が設けられている。950～956は胴部～底部の破片資料である。950は浮線文と縄文が施されている。縄文は無節か。951は浮線文による渦巻き状のモチーフの下半部付近か。952～954は横位に浮線文が複数配置されたものである。952は胴部上位から中心位付近の破片資料である。口縁部は失われているが、少なくとも浮線文が6本確認される。955は半截竹管状の工具による平行沈線文と浮線文が見られる。956は底部のみの破片資料である。浮線文で梯子状のモチーフが施されている。957は浅鉢の胴部資料である。胎土中に雲母が多く見られる。

4類 (第114・115図 写真図版105・106)

諸磯c式土器を4類土器とした。円形や貝殻状を呈する貼付文、半截竹管状の工具を用いた平行沈線文を密集させる集合沈線文や結節浮線文が盛行するという。この4類土器は東尾根にまとまった分布域が見られる(第119図)。

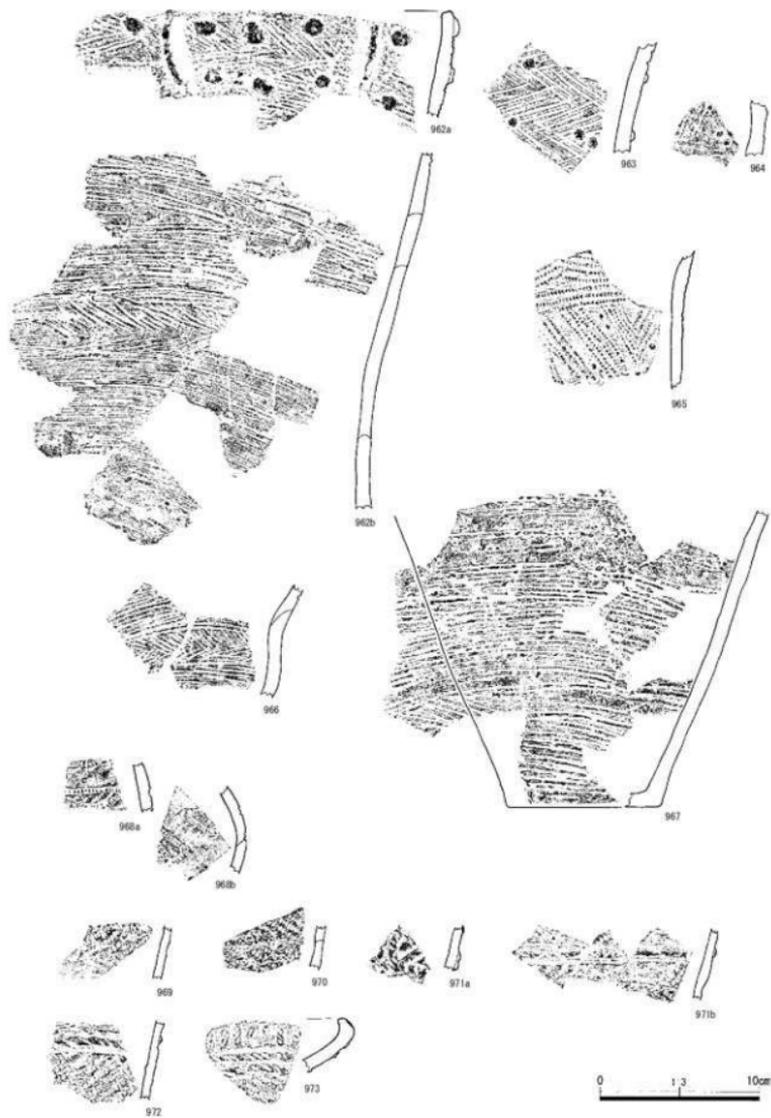
958～967は4類に分類した土器群で、そのうち958～962は口縁部が残存した資料である。958a・bは口縁部付近がわずかに内湾する。口唇部は平坦に仕上げられ、口唇部直下には半截竹管状の工具により、押引を伴った平行沈線文が横位に施されている。胴部中心位より下位には斜位の平行沈線文が矢羽状に施されている。959の外面には平行沈線文が施されているが、細い半截竹管状の工具を数本束ねて施文か。960～962は貼付文が見られる資料である。960は口唇部を尖らせている。半截竹管状の工具で矢羽状に沈線文を施した後に、縦長の貼付文が間隔をおいて配置されている。961a・bは同一個体と考えられる資料である。胴部は上位付近で外反、口縁部は内湾させる。口唇部は半截竹管状の工具による押引文が施されている。口唇部直下には矢羽状に平行沈線文が施され、平行沈線文を施された円形の貼付文が2段に、棒状の貼付文が縦位に配置されている。胴部中心位付近は方向の異なる平行沈線文が施されている。工具の幅は細い。962a・bも同一個体と考えられる資料である。胴部下位から中心位まで直立気味に立ち上げ、中心位付近より外反する。口縁部はあまり内湾しない。口縁部付近は矢羽状に平行沈線文を施すが、胴部下位までは横位の平行沈線文を主体とした集合沈線文が見られる。

963～967は胴部、底部資料である。963は962と同様、沈線文上に円形貼付文を配置する。その位置は傾きの異なる沈線文が接する箇所で、2個組か。964・965は結節浮線文と円形の貼付文が見られる資料である。966・967は集合沈線文のみ施された土器である。967は胴部下端まで半截竹管状の工具による沈線文が施されている。平坦な底部から胴部が直線的に立ち上げられている。

5類 (第116図 写真図版107)

十三善提式土器と考えられる土器群を一括した。时期的に前期末とされ、諸磯c式土器に見られた貼付文や結節浮線文、結節沈線文を継承・発展させたと考えられる。この5類土器も東尾根にまとまった分布域が確認されている(第119図)。

974～978が5類に分類した土器群である。974は口縁部のみの破片資料である。直線的に延びた口縁部で、口唇部付近は折り返すことで肥厚させ、平坦に仕上げている。肥厚部は半截竹管状の工具で押引きしている。肥厚部より下位は平行沈線文により渦巻き状のモチーフが形成されている。975・976は集合沈線文が施された資料である。975a・bは同一個体と考えられる資料である。底部破片と胴部の一部である。胴部下端まで沈線文が施されている。976a・bも同一個体と考えられる資料である。胴部は平坦な底部より内側へ傾きつつ立ち上がり、胴部中心位で外反し始める。胴部下端まで沈線文が施され



第115図 縄文土器第V群3

ている。977・978は三角状に刻まれた文様が施されている。977 a～cは同一個体と考えられる資料で、胴部中位から口縁部にかけての破片資料である。977 aの口縁部は外反し、折り返すことにより肥厚させたものか。口唇部には刻目文が施されている。肥厚した口縁部には三角状、丸状に削りこまれている。印刻文か。口縁部直下には横位の結節沈線文が施されている。977 b・cには三角形の印刻文とともに結節沈線文が施されている。978は胴部上位から内湾し、口唇部は丸く仕上げている。口唇部直下には三角状の印刻文と幅広の浮線文か。また突帯が巡りその上位に結節文や印刻文が施されている。

6類 (第115図 写真図版106)

北白川下層式土器と考えられる土器群等を一括した。概して器厚は薄く、堅緻な仕上がりである。文様はC字形の爪形文や突帯、縄文等により構成される。

969～972が6類に分類された土器群である。全て胴部だけの破片資料である。969・970は縄文が施されている。971 a・bは同一個体と考えられる資料である。971 aには刻目文のある浮線文が見られる。971 bは縄文と刻目文が施された突帯が見られる。972も971 bと同様の文様である。なお970は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施 (IAAA-92049) した。その結果970は5, 050±30yrBPという¹⁴C年代が測定されている。

第VI群 前期代 型式不明 (第116～121図 写真図版107～110)

979～1049は前期代のものと考えられる。型式名が判然としなかった資料や、第IV・V群の各類に分類できる可能性を持ちつつも、施文が縄文のみであるため分類に躊躇した資料を第VI群として一括して集成した。

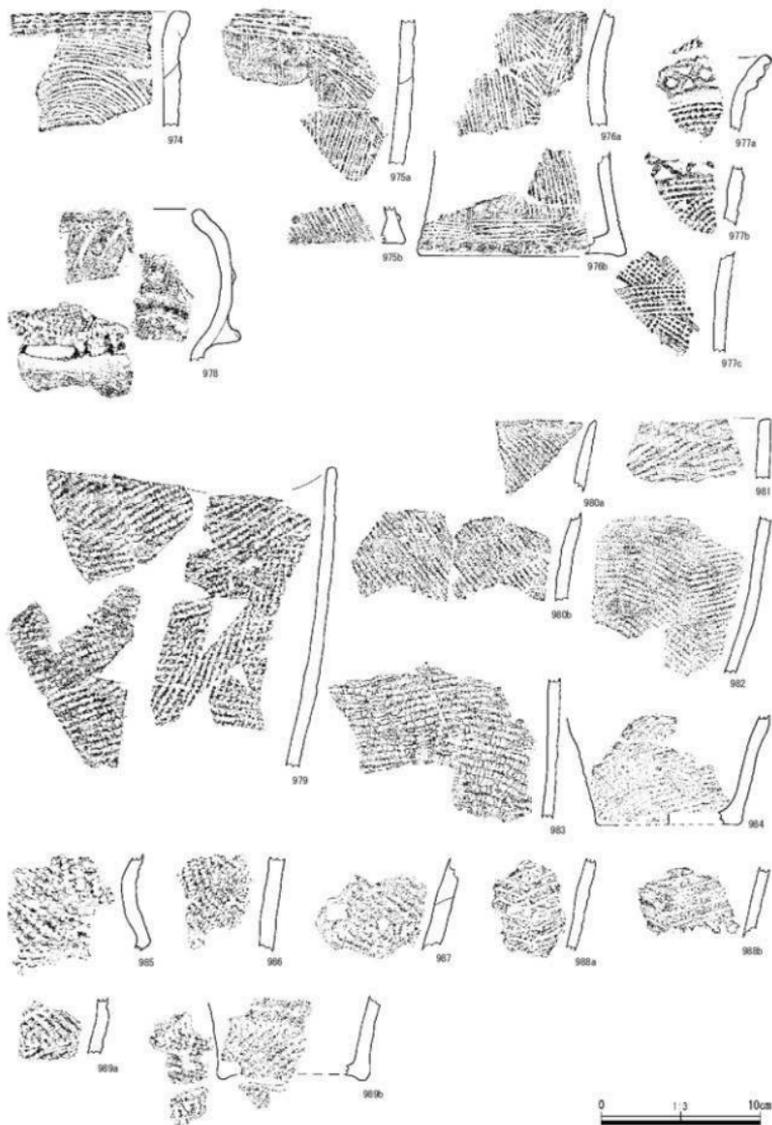
979～984は第IV群3類に分類した花積下層式土器及び時期的にそれと並行するものに該当か。分布は3類土器とほぼ重複する (第118図)。このうち979～981は口縁部が残存した破片資料である。979は波状口縁で口唇部を丸く仕上げているが、波底部近くに指頭圧痕が1ヶ所見られる。982・983は胴部だけの破片資料である。984は底部が残存した資料である。胴部下端まで縄文が施文されている。

985～989は第IV群4類に分類した関山式土器及び時期的にそれと並行するものに該当か。分布は第4類土器と重複する (第118図)。985は屈曲部を持つ胴部だけの破片資料である。989は底部が残存した資料である。胴部下端まで縄文が施されている。上げ底状であるため高台のような外観を呈し、底部外面にも縄文が見られる。胴部・底部に見られる縄文にはループ状の圧痕も見られる。

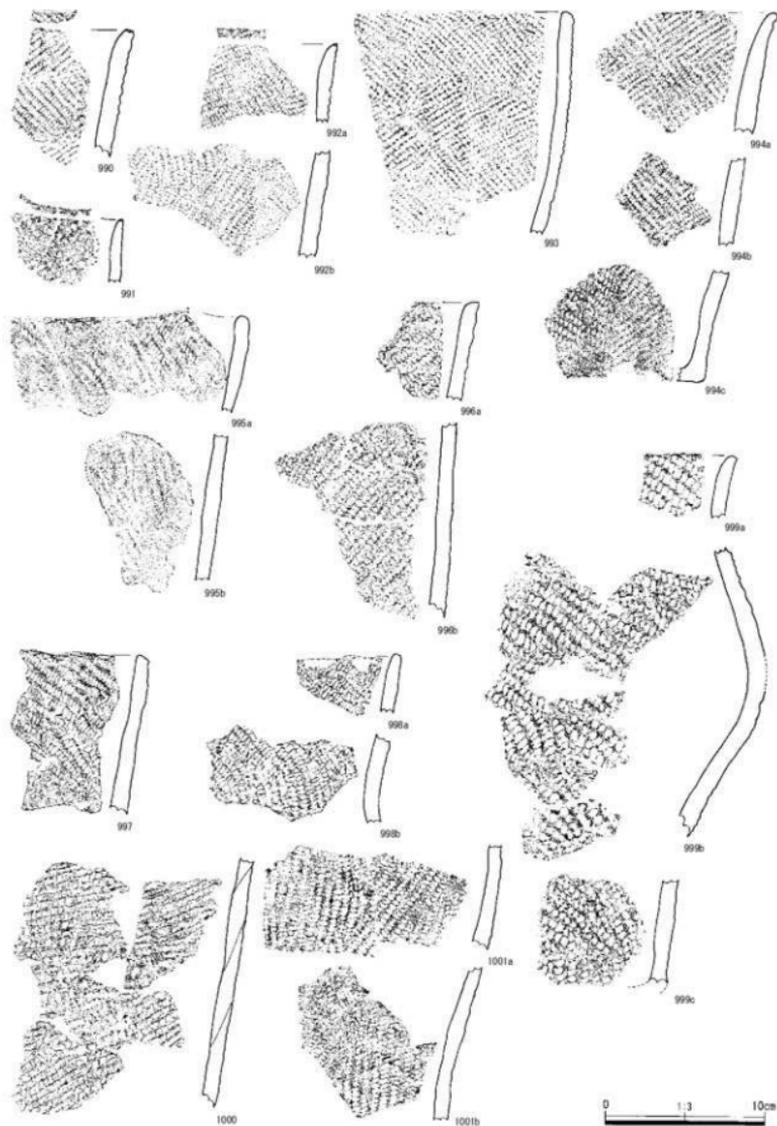
990～1006は第IV群4類に後続すると考えられる黒浜式土器及び時期的にそれと並行するものに該当か。この黒浜式土器は関山式土器の特徴でもある羽状縄文を継承し、さらに有尾式土器との関係から菱形状を呈する羽状縄文が出現する段階である。中央尾根 (北) から東支谷、北尾根際に分布する (第118図)。このうち990～999は口縁部が残存した破片資料で、994・999は底部が残存する資料である。990～994は羽状縄文が施されている。1000～1006は胴部だけの破片資料である。このタイプの胴部は直線的に立ち上げるものが多いが、993のようにわずかに内湾気味に立ち上げたり、また999は胴部中位を大きく内湾させるものもある。口縁部は993のように平縁であるものや、995は緩やかな波状口縁をなすものもあるが、いずれも破片資料であり判然としない資料が多い。なお993は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施 (IAAA-92043) した。その結果993は5, 640±30yrBPという¹⁴C年代が測定されている。

1007・1008は第V群1類土器に分類した有尾式土器及び時期的にそれと並行するものに該当か。1007は波状口縁か。外面にある粘土紐接合痕がナゲ消しされていない。器厚が比較的薄く仕上げられている。

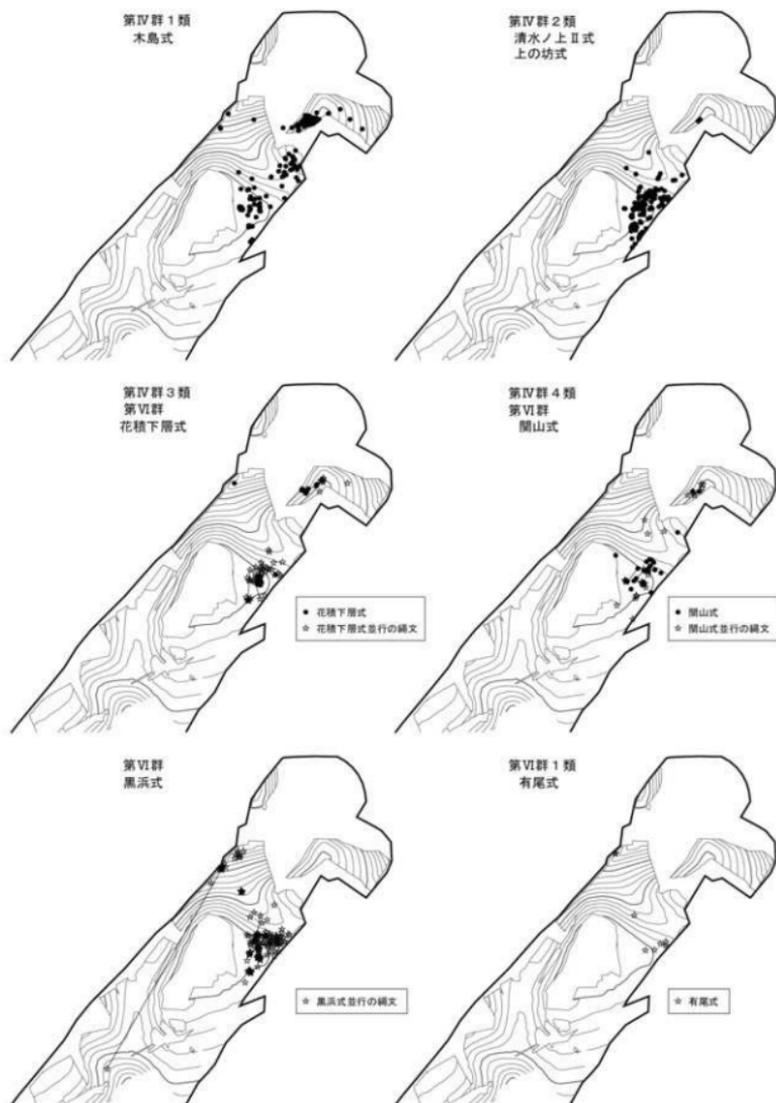
1009～1020は縄文前期前葉から中葉にかけてのものと考えられるが、型式名が判然としない土器群を



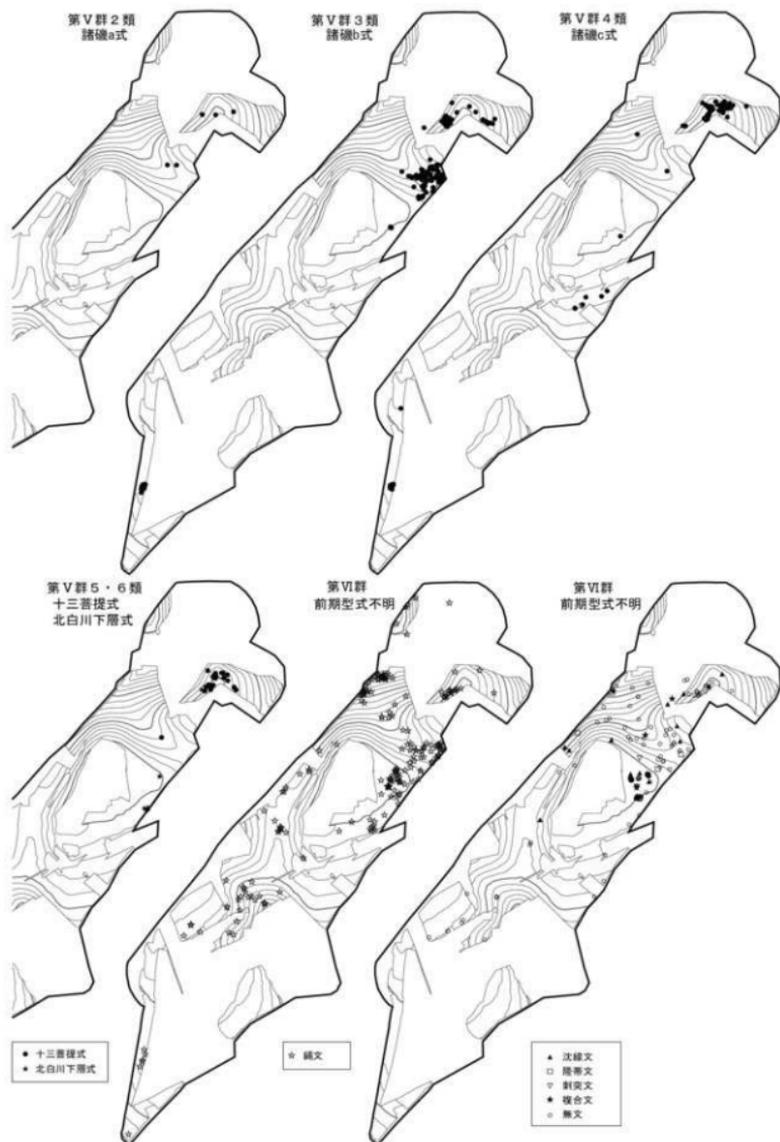
第116図 縄文土器第V群4・第VI群1



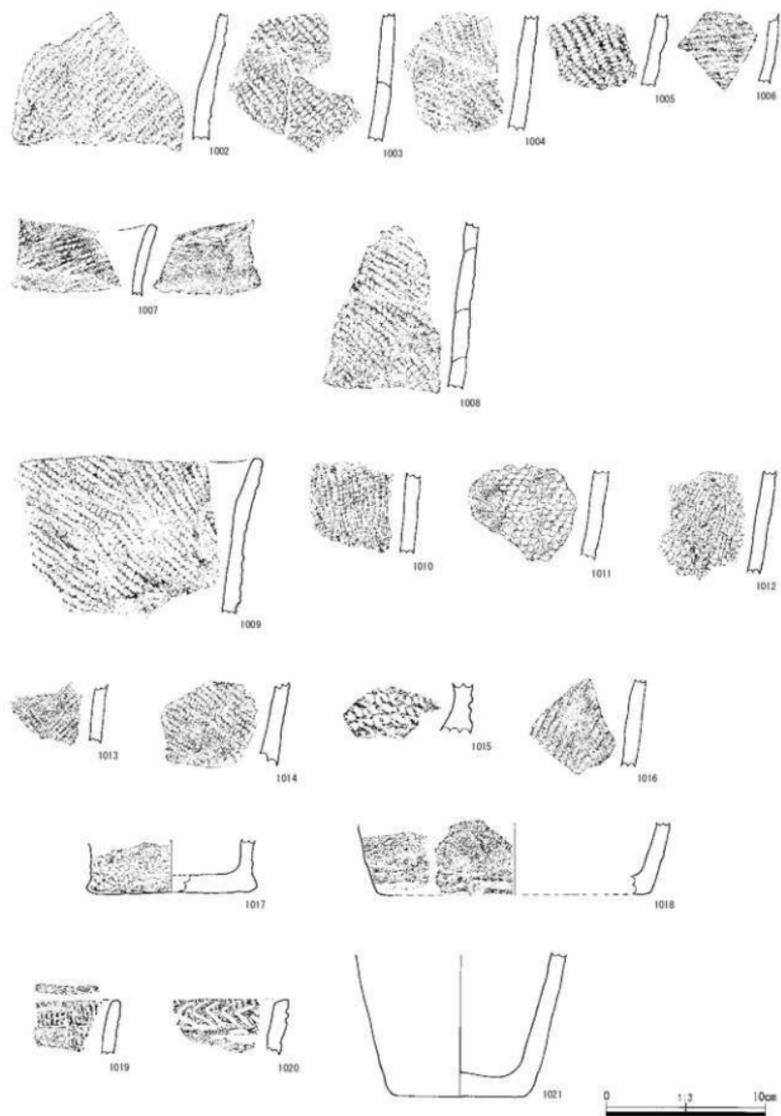
第117圖 縄文土器第VI群2



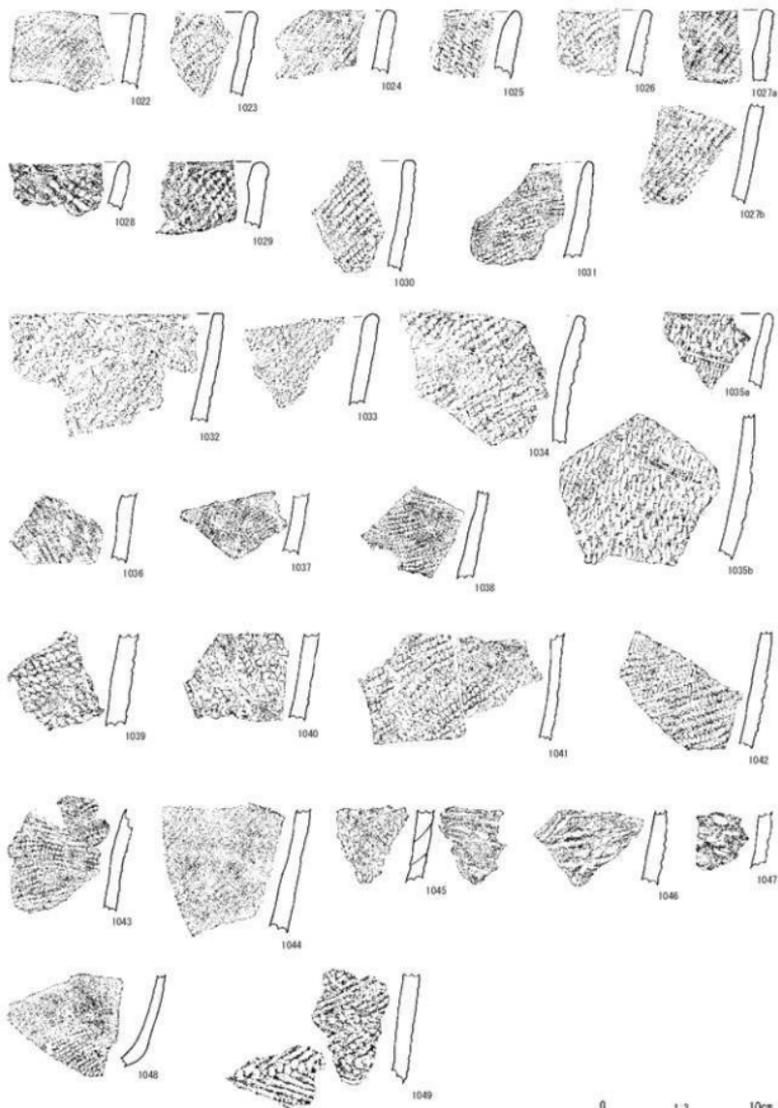
第118図 土器分布図5



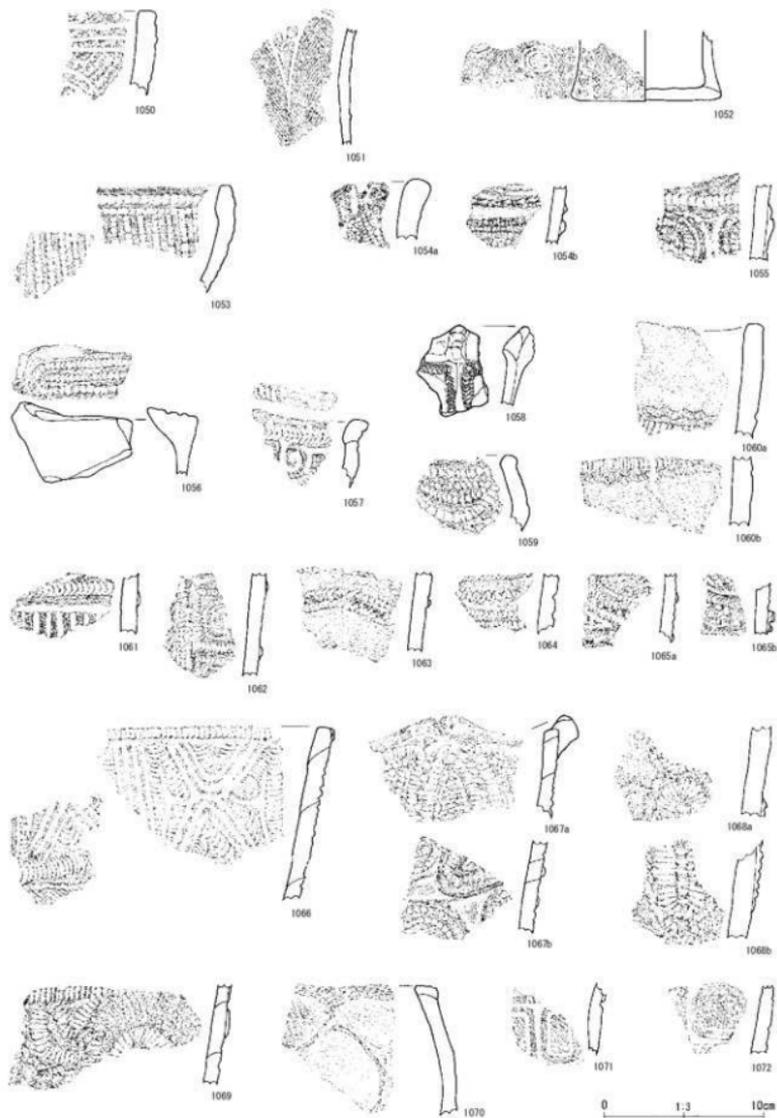
第119圖 土器分布圖6



第 120 図 縄文土器第VI群 3



第 121 図 縄文土器第VI群 4



第 122 図 縄文土器第七群 1

一括した。1022～1049は第V群2～4類土器に分類した諸磯式土器及び時期的に並行するものに該当か。1022～1035は口縁部が残存した破片資料、1036～1047・1049は胴部のみ破片資料である。口縁部は丸く仕上げたものが大半であるが、緩やかな波状口縁である1032は平坦に仕上げている。1048は浅鉢の可能性がある。屈曲部の下位には縄文、上位はヘラミガキが施されている。1049は羽状縄文である。

第VII群 中期

1類 (第122図 写真図版111)

五領ヶ台式土器と考えられる土器群を1類とした。この五領ヶ台式土器は前期末葉の十三菩提土器等の集合沈線文等の文様、器形を引き継ぐもので中期初頭に位置付けられている。1050は口縁部のみ破片資料である。口唇部は平坦に仕上げられ、口唇部直下に3本の横位の沈線文、その下位に曲線文が施されている。地文は縄文か。1051は胴部中位付近か。U字を逆さにしたように沈線文が連続して施されたものか。逆U字モチーフ下位の細かな縄文は羽状を呈する。1052は胴部下位から底部にかけて残存した資料である。平坦な底部から胴部は内傾して立ち上がる。胴部外面には細かな縄文を施した後に、半載竹管状の工具で円形のモチーフ等を沈線文で描く。

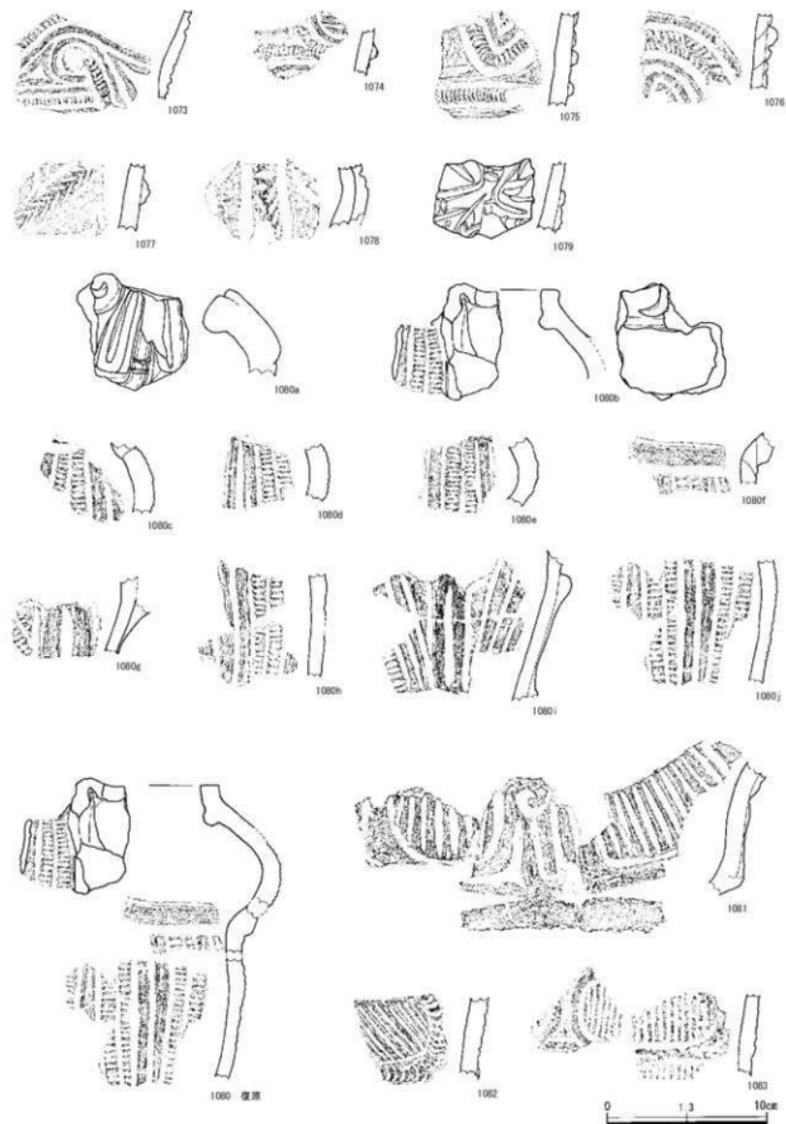
2類 (第122～124図 写真図版111～115)

勝坂式土器もしくは時期的に並行する土器群を2類とした。猪沢式土器・新道式土器・藤内式土器・井戸尻式土器等に分類できるが、当該報告では勝坂式土器として集成した。概して器厚は厚手であり、口縁部が膨らむ深鉢が多い。口縁部は波状口縁や突起をつけるものがある。文様は棒状や多載竹管状の工具を用いて押し文、刺突文や沈線文、また粘土紐貼付による隆帯、懸垂文や楕円区画文・抽象文等様々なモチーフの貼付文が見られるという。2類土器は西尾根東端から北尾根にかけて広く分布する。

1053～1098は2類に分類した土器群である。そのうち1053～1055は角押し文が施された土器である。1053は微かに内湾し立ち上がる口縁部で、口唇部は平坦に仕上げている。口唇部直下に棒状の工具により横位の押し文を行った角押し文が2段施され、その直下に縦位の角押し文が施されている。内面には口唇部直下に段を設けている。1054 a・bは同一個体と考えられる口縁部付近の破片資料である。1054 aは口縁部に設けられた突起か。「Y」字状を呈し、外面に縄文を施している。1054 bは隆帯直上に角押し文か。1055は横位と曲線を描く隆帯が見られる。楕円区画文か。隆帯に沿って角押し文が施されている。

1056～1065は三角押し文が施された土器である。1056は口縁部のみ破片資料である。口唇部は大きく平坦面を設け、三角押し文を施している。1057は波状口縁である。口唇部は丸く仕上げ、刻目文を施す。口唇部直下に三角押し文を口縁に沿って施し、その直下に棒状工具で渦巻き状のモチーフを沈線文で描く。1058は波状口縁部の波頂部付近か。蛇のようなモチーフが隆帯で形作られ、脇に三角押し文が施されている。内面には段が設けられている。1059は三角押し文と角押し文が施されている。口唇部は丸く仕上げられている。1060 a・bは同一個体と考えられる。直線的な胴部と口縁部で、口唇部は平坦に仕上げられている。外面には細かい三角押し文を緩やかに蛇行させて施している。1061～1065は胴部のみ破片資料で、1061～1063・1065は三角押し文と隆帯が施されている。1061は低平な隆帯の上位に三角押し文、下位に横位と縦位の沈線文が施される。1062は縦位と横位の細い隆帯による区画内に三角押し文が楕円状に施されている。1063は細い隆帯の上位・下位に沿って三角押し文が施されている。1065も細い隆帯と三角押し文等が施されている。1064は三角押し文等が横位に施されている。

1066～1069・1073・1074は半載竹管状の工具の刺突によるキャタピラー文や爪形文・刺突文等が施された土器である。1066は口縁部のみ破片資料である。口縁部は直線的に広がり、口唇部は平坦に仕上げられている。口唇部付近に隆帯を貼り付け、刻目文を施している。その隆帯直下には半載竹管状の工

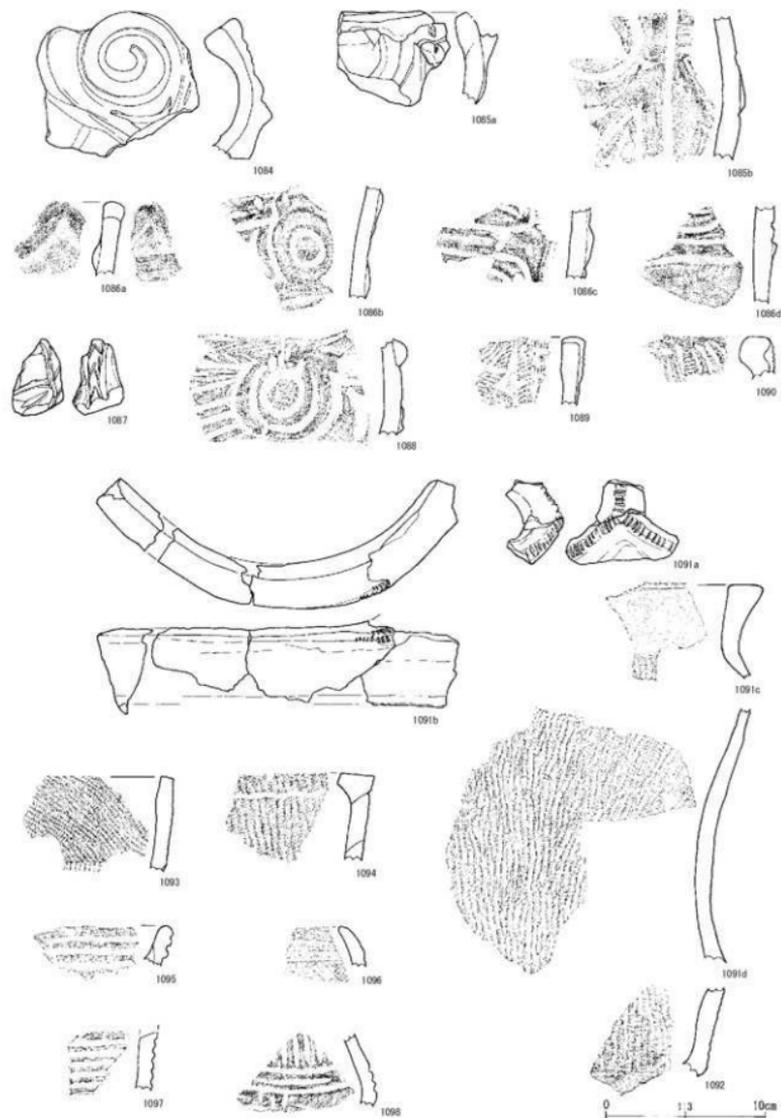


第123図 縄文土器第七群2

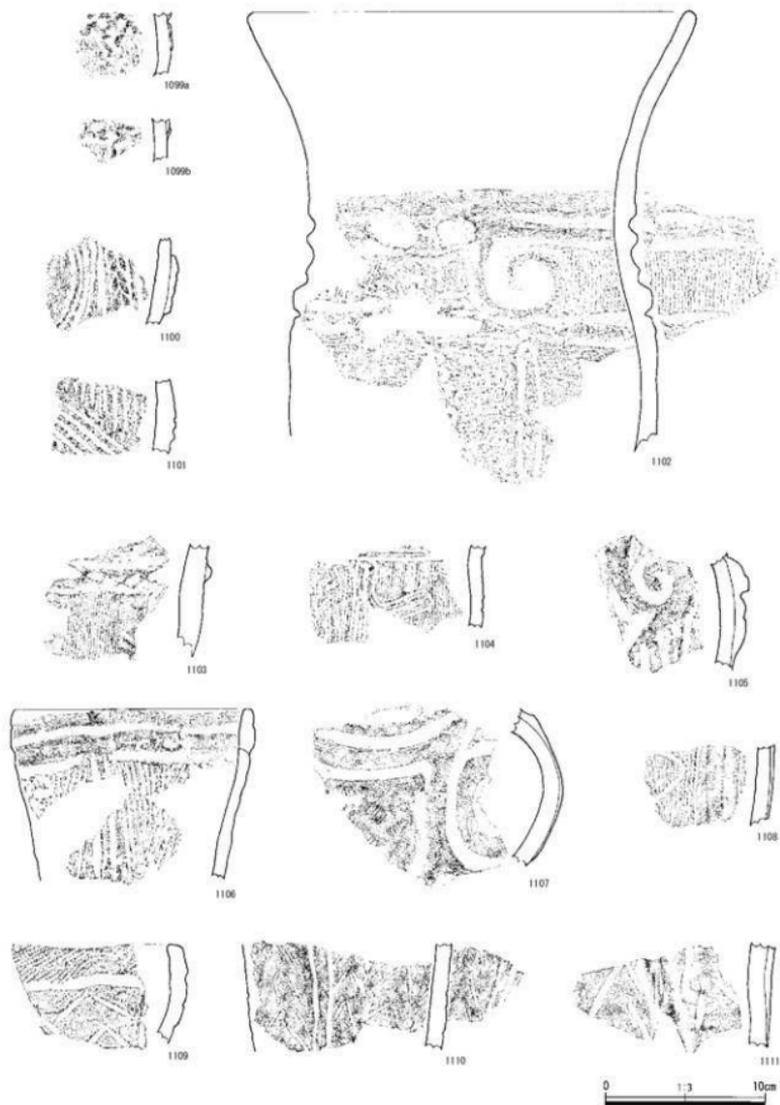
具の内側を器面に当てて、隆線のような平行沈線文を施している。その間隙にはキャタピラー文を充填している。内面には段を設けている。1067 a・bは同一個体と考えられる資料で、胴部、口縁部のみの破片資料である。1067 aは波状口縁の波頂部か。波頂部は渦巻き状のモチーフをあしらう。そこから文様が施された隆線を懸垂状に配置し、キャタピラー文を添えている。1068 a・bも同一個体と考えられる胴部のみの破片資料である。縦位に貼り付けられた短隆線の周囲をキャタピラー文で囲む。1069にはキャタピラー文で形作られた抽象文が見られる。円形刺突文も見られる。1073は半截竹管状の工具で施された渦巻き状のモチーフに隆線を組み合わせている。キャタピラー文も見える。1074も半截竹管状の工具による沈線文に隆線を組み合わせており、隆線の上にキャタピラー文が施されている。1070～1072は縄文が施された資料である。1070は口縁部のみの破片資料である。内湾気味の口縁部で口唇部直下に隆帯を貼り付け、縄文を施している。隆帯から隆線を懸垂させている。隆帯・隆線による区画域の一つに縄文が充填されている。1071の爪形文が施された細い隆帯の下位には、半截竹管状の工具の内側を器面に当てて施した長方形の平行沈線文が連続して配置され、その内部には細い縄文が充填されている。1072も1071とほぼ同様であるが、刺突文を添えている。

1075～1079は隆線が見られる胴部のみの破片資料である。1075・1076は隆線・半截竹管状工具による沈線文で渦巻きのようなモチーフを描いたものか。両者とも刺突文が隆線の上に施されている。1079は複数の隆線が交差している。

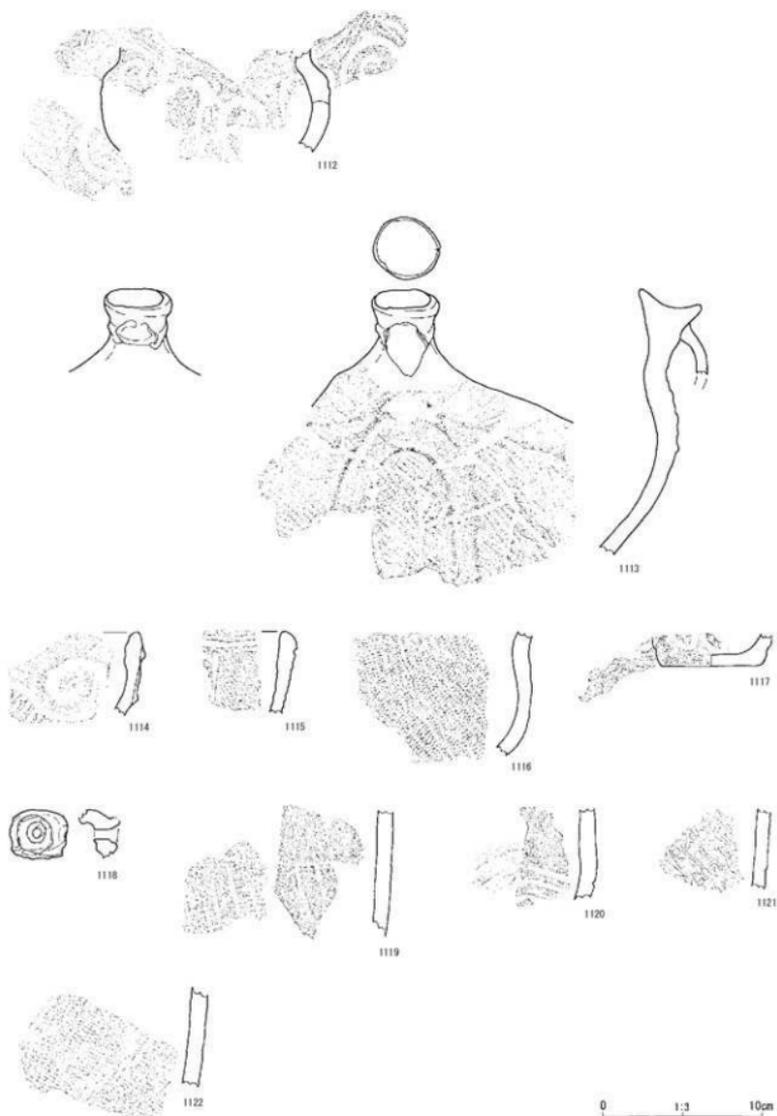
1080 a～jは同一個体と思しき破片資料を集成した。本来は胴部を直立気味に立ち上げ、胴部上位で膨らませ、口縁部は窄まるように仕上げたものか（1080復原）。1080 a・bは口縁部付近の破片資料である。前者には蛇の頭部とも思えるモチーフが見られ、後者にはキャタピラー文が見られる。c～jはキャタピラー文や平行沈線文が見られるが、f・g・iには太い隆線が見られる。fは横位の隆線である。g・iは縦位で、幅広で低めに仕上げられた隆線で、中央部に溝を設けている。上端部には把手等のモチーフと接続していたのか、剥脱した痕跡が見られる。1081は胴部の破片資料である。残存状況から当該資料は底部から胴部を立ち上げ、最初の屈曲部が設けられた部位付近か。縦位の沈線文と厚みのある隆線文が施されている。また隆線文を渦巻き状に施した箇所もある。1082・1083は楕円状に隆線を施し、内部に沈線文を充填している。1084は口縁部付近のみの破片資料である。渦巻き状のモチーフが見られ、欠損しているがさらに下位へ垂下する隆線文等があったものと考えられる。1085 a・bは同一個体と考えられる資料で、口縁部と胴部の破片資料である。口縁部から幅の広い隆線文が垂下し、脇に渦巻き状のモチーフか。隆線文両脇は凹線状になっている。1086 a～dは同一個体と考えられるもので、口縁部と胴部の破片資料である。1086 aは波状口縁の波頂部と考えられる。突起状に延びる。内面にも逆「V」字状の沈線文が見られる。1086 b～dは隆帯文や隆線文が施され、環状のモチーフが描かれている。1087は蛇のモチーフ、もしくは把手の残欠か。1088は胴部のみの破片資料である。横位の太い隆線文の下位に、環状のモチーフが2重設けられ、左側には沈線文が直線的に延びる。右側には半円影り状のモチーフが見られる。1089は口縁部のみの破片資料である。口唇部付近は肥厚し、平坦に仕上げられている。口唇部には突起を貼り付け、そこから縦位にキャタピラー文が施された隆線文が垂下している。内面に段が見える。1090も肥厚する口縁部で、平行沈線文等が施されている。1091 a～dは同一個体と考えられる資料で、口縁部、把手と胴部、胴部下端の破片資料である。胴部中央は外湾しながら立ち上り、口縁部は「く」字状に屈曲する。口唇部は大きく肥厚し、平坦面が設けられている。胴部は縄文が全面に施され、胴部下半まで縄文を施す。1093～1096は口縁部のみの破片資料で、1093・1094は縄文が施された資料である。1093は直線的に立ち上がり、口唇部は平坦に仕上げている。口唇部直下から縄文を施している。破片下端にキャタピラー文か。内面には段を設けている。1094は口唇部を内側へ引き出してあり、平坦面を広く設けている。外面に縄文を施した後、口唇部から1cm程度の位置に沈線文



第 124 図 縄文土器第七群 3



第 125 図 縄文土器第七群 4



第 126 図 縄文土器第Ⅶ群 5・第Ⅷ群

を緩やかな波状に施している。1095は口唇部を丸く仕上げ、口縁部に沿って3本の太い沈線文を施している。1096は内湾する口縁で、口唇部を丸く仕上げる。口唇部直下に刺突文を横位に施し、その下位に平行沈線文やキャタピラー文を施している。1097・1098は沈線文を施した資料である。1097は胴部みの破片資料である。横位の沈線文を5本以上施している。竹管状の工具を用いたものか。1098は縦位・横位の沈線文が施されている。竹管状の工具を用いたものか。

3類 (第125図 写真図版116・117)

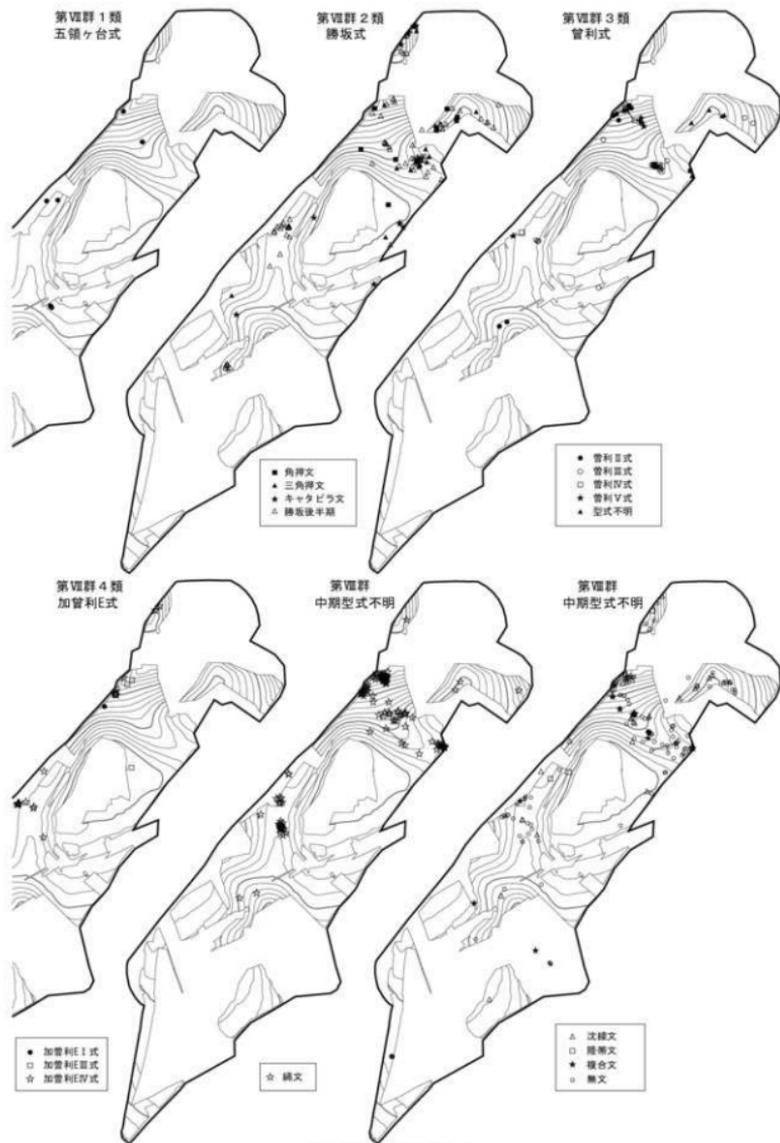
曾利式土器及び曾利式土器と時期的に並行すると考えられる土器を3類とした。当該土器は長胴甕等が主要な器種で文様は地文に縦位の沈線文を施し、隆線文により「U」「J」字状のモチーフを作り出しているもの、その他に「X」字状の把手や渦巻文が見られるという。西支谷から東支谷、東尾根にその分布が見られる(第127図)。

1099～1111は3類に分類した土器で、そのうち1099～1100は細い粘土紐を貼り付け、浮線文状に呈した資料である。1099は波状の浮線文か。横位に重複して施されている。1100には編紐状の縦位浮線文と沈線文が施される。1101は縦位と斜位の沈線文が施されている。以上1099～1101は曾利Ⅱ式土器か。1102は胴部中位から口縁部まで残存した資料である。わずかに膨らむ胴部から窄まる頸部に至り、口縁部は反外気味に立ち上がる。口唇部は丸く仕上げている。口縁部が膨らむ所謂キャリパー形で、2本の隆帯の間に渦巻文と縦位の条線文が施されている。下位には円形刺突文と沈線文が施されている。1103は横位に隆帯を施し、その直下は櫛歯状の工具による条線文か。1104は縦位に細かな沈線文を施し、半截竹管状の工具で「L」字状のモチーフを描いた後、半截竹管状の工具で平行沈線文を施す。1105は太い粘土紐を貼り付け、渦巻文とした資料である。以上1102～1105は曾利Ⅲ式土器か。1106～1108は隆帯文脇に指頭による凹線文が施された資料で、曾利Ⅳ式土器か。1106は胴部から口縁部にかけて残存した資料である。胴部は直線的に立ち上がり、口唇部は丸く仕上げる。口縁部付近に低平な隆帯文を横位に施した後、その脇を指頭による凹線文を施す。その下位に縦位の沈線文等が施されている。1107は隆帯文と隆帯による渦巻き文が施されている。隆帯文脇は強い指頭によるナデで凹線文が施され、隆帯文による区画内に短沈線文の列が見られる。1109～1111はヘラ状の工具等で「ハ」字状に沈線文を連続して施した土器で、曾利Ⅴ式土器か。1109は口縁部みの破片資料である。内湾する口縁部で、口唇部は平坦に仕上げている。口唇部から2cm程度の位置に横位の沈線文を施した後縦文を施している。その沈線文の下位にはハの字状に沈線文が施されている。1110は胴部みの破片資料である。縦位の平行沈線文による区画内にハの字状に沈線文が施されている。1111は縦位の隆帯文の両脇にハの字状の沈線文が施されている。

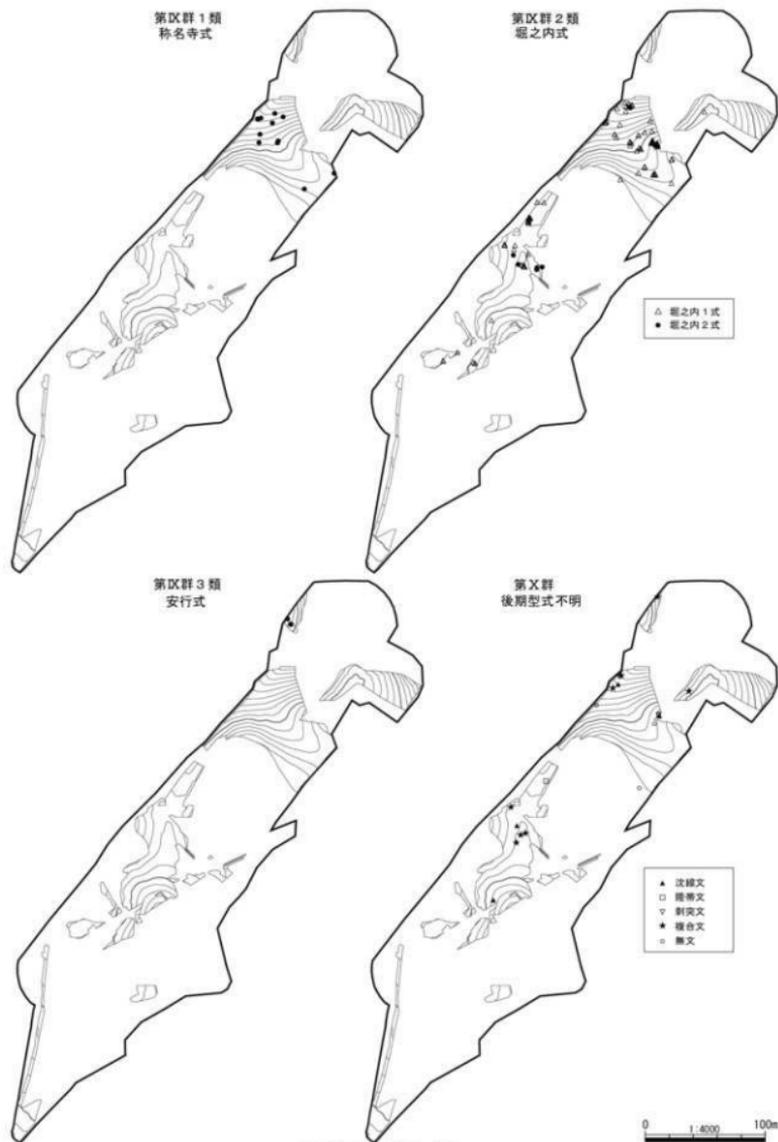
4類 (第126図 写真図版117)

加曾利E式土器及び時期的に並行していたと考えられる土器群を4類とした。曾利式土器に後続するものと考えられている。西支谷、東支谷、北尾根等に分布域が見られる(第127図)。

1112～1117は4類に分類した土器である。1112は胴部付近の破片資料か。渦巻文や磨消縄文等が見られる。加曾利EⅢ式土器か。1113は胴部中位から口縁部にかけて残存した資料である。波状口縁で波頂部に盃状の突起を設けている。また突起の外側面に把手がつく。この突起の下位には磨消縄文や隆線文で構成される逆U字状のモチーフが見られる。1114は波状口縁の波頂部付近の破片資料である。口唇部はやや尖り気味である。波頂部直下には隆線文で渦巻き状のモチーフが見られる。1115も口縁部の破片資料である。尖らせた口唇部の直下には横位の沈線文が施される。その下位には縄文を縦位に施す。1116は胴部中位付近の破片資料か。内湾する胴部である。1117は胴部下端から底部まで残存した資料である。



第127図 土器分布図 7



第128図 土器分布図8



第129図 縄文土器第Ⅰ群1

胴部には棒状の工具により沈線文が施されている。内面見込は丁寧にヘラミガキか。以上1113～1117は加曾利EⅣ式土器か。

第Ⅶ群 中期代 型式不明(第126図 写真図版117)

1118～1122は中期代のもと考えられ、第Ⅶ群に分類できる可能性を持ちつつも、判然としないため、第Ⅷ群として一括して集成したものである。分布域は西支谷、東支谷、北尾根、東尾根に認められ、中央尾根には殆ど見当たらない。1118は壺のような形状を呈している。甕等の口縁部に付けられたものか。1119～1122は胴部みの破片資料である。1119は棒状の工具で横位の沈線文を施し、その下位に斜位に沈線文が施されている。1120は半截竹管状の工具で沈線文を施す。1121は沈線文と摺糸文か。1122は一面に縄文が施されている。破片左端に沈線文が見える。

第Ⅸ群 後期

1類(第129図 写真図版118)

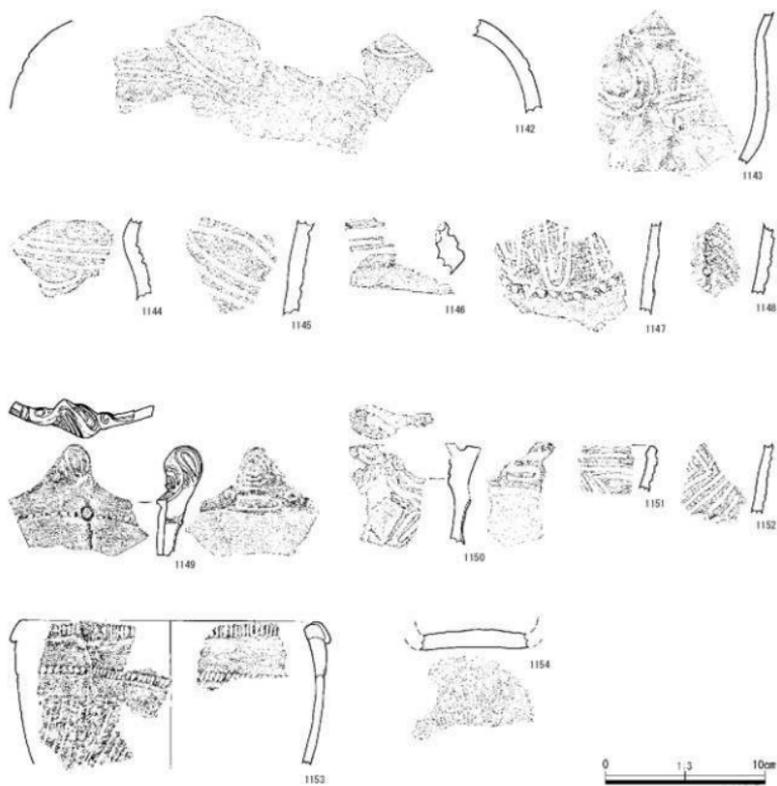
称名寺式土器もしくは時期的に並行すると考えられる土器群を一括した。縄文時代後期初頭に位置付けられる土器群で、加曾利EⅣ式土器に後続する。器種は深鉢が主体をなし、文様は沈線文と縄文等により構成されたJ字状、M字状のモチーフが代表的とする。東支谷内にもみ分布する(第128図)。

1123～1129は1類土器に分類した土器群である。全て深鉢で、胴部みの破片資料か。1123～1125には沈線文と縄文が見られる。1123は口縁部直下の破片資料か。1126～1129は沈線文のみ確認される資料である。胴部中位から下位にかけての破片資料か。

2類(第129・130図 写真図版118・119)

堀之内式土器もしくは時期的に並行すると考えられる土器群を一括して2類土器とした。当該土器群は堀之内1式、2式土器に細分される。後期前半に位置付けられる土器群で、称名寺式土器に後続する。口唇部に沈線文を持ち、胴部は直線的に立ち上がるタイプや、強い括れを持つタイプの深鉢等が見られる。この2類土器は西尾根、西支谷から東支谷に分布域が認められる(第128図)。

1130～1152は2類に分類した土器で、そのうち1130～1141は口縁部が残存した資料である。1130～1133は口縁部みの破片資料である。1130・1131は波状口縁の波頂部付近であろう。両者とも外面に縄文等の施文は施されず、磨かれている。内面も横位に磨いた痕跡が見られる。1130は口縁部を折り返して肥厚させている。1131は内側へ折り返している。また波頂部について1130は、内面側に突起を設け、竹管状の工具も用いて凹みを2ヶ所設けている。また1131は細い棒状の工具で刺突している。1132は内外面ともに丁寧に磨かれている。口唇部付近をL字状に折り曲げている。1133は前者に比べて器厚がやや厚手である。口唇部付近をL字状に折り曲げている。この資料は波状口縁で、波頂部は1130のように2つの円形の凹みが内外面ともに見られる。また口唇部に沿って浅い沈線文が施されている。外面の波頂部直下には浅い円形刺突文と縦位の沈線文が施されている。1134a・bは同一個体と考えられる資料で、前者が口縁部、後者は胴部上半部の破片資料と考えられる。口唇部付近はL字状に屈曲し、外面口唇部直下に横位の沈線文を施している。胴部には横位・斜位の沈線文が施されている。1135a・bも同一個体と考えられる資料で、口縁部と胴部上半部の破片資料である。口唇部は丸く仕上げ、かつ屈曲させる。頸部より下位には沈線文と縄文が施されている。1136は底部から口縁部までの破片資料である。平坦な底部から内湾気味に立ち上がり、頸部から外反し口縁部が開いていたものと考えられる。口唇部付近は屈曲させている。口縁部付近には施文が認められない。頸部には2本の平行する沈線文を施し、その下位に縄文や懸垂文が見られる。1137は小型の土器である。口径11.4cm程度で口縁部から底部まで



第130図 縄文土器第IX群2・第X群

残存した資料である。口縁部は丸く仕上げている。口唇部直下に弧状に沈線文が施され、その下位にも沈線文が施されている。当該土器の外表面には被熱した痕跡が認められるが、調理具としては小さすぎる印象を受ける。1138 a・bは同一個体と考えられ、胴部中位から口縁部にかけての資料であろう。直線的に胴部が立ち上がり、口唇部付近は内外面ともに丁寧に磨かれ、口唇部外縁には刻目文が施されている。また突起が設えられ、その内面側に指頭による浅い凹みが施されている。口縁部から胴部にかけて縄文がまず施された後に、沈線文が施されている。1139 a・bも同一個体と考えられる資料である。波状を呈する口縁部は外反させているが、その口縁部は器厚を肥厚させ、外方へやや引き延ばしている。引き延ばすことで形成された平坦面に刻目文が施されている。また平坦面内側端部には沈線文を巡らしている。波頂部は山形に作り、件の沈線文と刻目文を添えている。中央部に孔が認められるが、焼成前の穿孔で注口状である。胴部には沈線文と縦位のナデが観察される。1140・1141は口縁部のみの破片資料である。1140は口唇部を丸く仕上げられ、屈曲部には2本の沈線文の間隙に竹管状の工具による円形刺突文が施されている。1141も口唇部を丸く仕上げている。口唇部直下に沈線文を施し、その下位に刻目文が施されている。その下位に縦位の沈線文が見られる。1142～1145は胴部のみの破片資料である。いずれも胴部上半部付近に施された沈線文の資料である。1143は渦巻状のモチーフか。1146は口唇部が欠損した口縁部の破片資料か。沈線文が施される。1147・1148は刻目文が施された細隆起線が見られる資料である。前者は縄文と平行沈線文による何らかのモチーフが施されている。以上1130～1148は堀之内1式か。

1149～1151は口縁部のみの破片資料である。1149は波状口縁の波頂部と突起部であろう。口唇部は内面へ引き伸ばして平坦に仕上げ、沈線文を施している。波頂部には渦巻状のモチーフが付けられている。さらに内面側には細かい渦巻文と方形の区画文が見られる。外面の波頂部下位には環状の浮文と接続する縦位・横位の微隆起線文が施される。横位の微隆起線文には刺突文が施される。この1149は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施 (IAAA-92054) した。その結果1149は $3,530 \pm 30$ yrBPという ^{14}C 年代が測定されている。1150は口縁部に貼り付けられた突起部である。突起部の直下には微隆起線文で菱形のモチーフが施されている。内面にはS字状の沈線文。1151は丸く仕上げた口唇部を持つ。折り返しを行い、口唇部付近を肥厚させている。外面には沈線文で三角文を描いており、区画内に縄文が施されている。1152は胴部のみの破片資料で、沈線文で菱形を重ねている。以上1149～1152は堀之内2式土器か。

3類 (第130図 写真図版119)

1153は縄文時代後期の安行式土器の可能性がある。胴部上位から口縁部にかけての破片資料である。内湾気味の胴部で、最大径は胴部上位に位置する。口縁部は折り返して肥厚させている。1ヶ所瘤状の突起を付けている。肥厚した口唇部外側にはヘラ状の工具で密に切目を入れている。口唇部から3 cm程度の間隔を開けて、刺突文を横位に連続して施している。刺突文の下位には条線文か。この1153は炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を実施 (IAAA-92048) した。その結果1153は $3,120 \pm 30$ yrBPという ^{14}C 年代が測定されている。

第X群 後代 型式不明 (第130図 写真図版119)

1154は後代のもと考えられるが、型式等が判然としないうとして第X群とした。底部のみの破片資料で、外面には木の葉痕と縄文もしくはモジリ網状の圧痕が見られる。

第12表 縄文時代包含層出土土器観察表

種別 番号	種別	回数 番号	分類 群 類	グラフィック	文様調整等	色調 (Hue)	織組	胎土
318	ab	64	I 1	AA-24	口唇部に縄文、外面内面にLの縄文。	7.5YR5/4	有	白色粒子
319		64	I 1	AB-23	外面内面に横位のRLの縄文。穿孔有。	7.5YR5/6	多	白色粒子多、黒色粒子、雲母、白色破片多
320		64	I 1	—	外面内面にLの縄文。軽しような胎土。	7.5YR4/2	有	白色破片
321		64	I 1	U-18	外面に横位のLの縄文。内面に横位のLの縄文。軽しような胎土。	5YR5/1	有	白色粒子、白色破片多
322		64	I 1	W-21	Lの風船縄文。軽しような胎土。	7.5YR5/4	有	白色粒子、赤色粒子、白色破片
323		64	I 1	V-19	縦位のRの縄文。軽しような胎土。	7.5YR7/3	有	白色粒子
324		64	I 1	X-21	縦位に密接の山形文。軽しような胎土。	5YR5/2	有	白色粒子、黒色粒子、白色破片
325		64	I 1	V-19	縦位に密接の山形文。軽しような胎土。	5YR5/2	有	白色破片
326		64	I 1	Z-22	縦位に密接の山形文。	7.5YR5/4	有	黒色粒子多、白色破片
327	ab	64	I 1	—	縦位に密接の山形文。	7.5YR5/4	有	黒色粒子、白色破片多
328		64	I 1	W-19	縦位に密接の山形文。	10YR7/6	有	白色粒子、白色破片
329		64	I 1	V-19	縦位に密接の山形文。	10YR6/4	有	白色破片
330		64	I 1	Z-21	縦位に密接の山形文。	10YR6/4	有	白色粒子、白色破片
331		64	I 1	Y-21	縦位に密接の山形文。	7.5YR6/6	有	黒色粒子、白色破片
332		64	I 1	AD-16	縦位に密接の山形文。	5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色破片多
333	ab	64	I 1	W-19	外面内面に縦位に密接の山形文。穿孔有。	7.5YR6/6	有	白色粒子、白色破片
334		64	I 1	V-19	縦位に密接の山形文。	10YR7/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色破片
335		64	I 1	Z-22	縦位に密接の山形文。	10YR6/4	有	白色破片
336		65	I 1	—	縦位に密接の山形文。軽しような胎土。	5YR5/2	有	白色粒子、白色破片多
337		65	I 1	W-20	横位に密接の山形文。軽しような胎土。	7.5YR6/4	有	白色破片
338		65	I 1	—	格子目文。軽しような胎土。	7.5YR4/2	有	白色破片多
339		65	I 1	Y-22	格子目文。軽しような胎土。	7.5YR5/3	有	白色破片
340		65	I 1	AE-23	格子目文。	7.5YR5/6	有	黒色粒子、白色破片
341		65	I 1	Y-21	格子目文。軽しような胎土。	7.5YR4/2	有	白色破片多
342		65	I 1	Z-22	格子目文。	7.5YR5/6	有	黒色粒子、白色破片
343		65	I 1	Y-21	格子目文。軽しような胎土。	7.5YR5/3	有	白色粒子、白色破片
344		65	I 1	Z-22	格子目文。	7.5YR4/3	有	白色粒子、黒色粒子、白色破片
345		65	I 1	—	縦位・斜位にボジティブな横門文。	10YR6/4	有	白色破片
346		65	I 1	X-19	斜位にボジティブな横門文。軽しような胎土。	10YR7/4	有	破片多
347		65	I 1	AA-24	縦位にボジティブな横門文。	10YR6/4	多	黒色粒子、白色破片多
348		65	I 1	Z-23	外面に縦位のボジティブな横門文。ナデ。内面に指痕圧痕。	2.5YR5/6	多	白色粒子、白色破片
349		65	I 1	Y-22	外面に縦位のボジティブな横門文。内面に指痕圧痕。	5YR5/6	多	白色粒子、白色破片
350		65	I 1	—	縦位にボジティブな横門文。穿孔有。	7.5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色破片多
351		65	I 1	AC-23	縦位にボジティブな横門文と押型文を併用する。	7.5YR5/6	有	黒色粒子、白色破片
352		65	I 1	AA-23	縦位のボジティブな横門文。	10YR7/6	有	白色破片多
353		65	I 1	—	外面にネガティブな格子目文。	7.5YR5/6	有	白色粒子、白色破片多
354		65	I 1	—	外面にネガティブな格子目文。内面にナデ。	5YR4/6	有	黒色粒子、白色破片
355		65	I 1	Y-21	縦位にRの標文。軽しような胎土に似る。	10YR7/6	有	破片多
356		65	I 1	Y-22	縦位にRの標文。軽しような胎土に似る。	7.5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色破片
357		65	I 1	AE-17	縦位の山形文。	7.5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子、白色破片
358		65	I 1	Z-15	縦位の山形文。	10YR5/3	有	白色粒子、白色破片
359		65	I 2	—	外面に横位の山形文。内面に彫痕。	7.5YR5/6	有	黒色粒子、雲母、白色破片
360		65	I 2	N-5	尖底。横位の山形文。	7.5YR5/2	有	白色粒子、白色破片
361		65	I 2	AJ-21	外面に横位の山形文。菱形の文様。内面に彫痕。	7.5YR5/6	有	白色粒子、白色破片
362		65	I 2	X-21	外面に横位・縦位の山形文。内面の口縁に横位の山形文。	10YR6/6	有	白色粒子、白色破片
363	abc	65	I 2	C-1	横位の山形文とボジティブな横門文。	5YR5/4	有	白色粒子多、黒色粒子、雲母、白色破片多
364		65	I 2	AA-22	斜位にネガティブな格子目文。縦位の山形文。	5YR5/6	有	黒色粒子、白色破片
365		65	I 2	AI-21	外面にネガティブな格子目文。内面に彫痕。	7.5YR5/4	有	白色粒子多、黒色粒子、雲母多
366	ab	66	I 2	J-1	外面に縦位のボジティブな横門文。内面に彫痕。	7.5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色破片多
367		66	I 2	AI-28	横位のボジティブな横門文。	10YR6/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色破片多
368		66	I 2	H-10	横位のボジティブな横門文。	10YR5/3	有	白色粒子、雲母多
369		66	I 2	—	横位のボジティブな横門文。	7.5YR4/3	有	白色粒子、雲母、白色破片多
370		66	I 2	X-21	横位のボジティブな横門文。	7.5YR5/4	有	白色粒子多、黒色粒子、雲母、白色破片
371		66	I 2	J-2	横位のボジティブな横門文。穿孔あり。	7.5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色破片多
372		66	I 3	W-20	縦位の山形文。	7.5YR6/6	有	白色粒子多、白色破片多
373	ab	66	I 3	I-3	外面に横位の山形文。内面に彫痕。	5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子、雲母多
374		66	I 3	C-1	外面に斜位のボジティブな横門文。内面に彫痕。	5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子、雲母、白色破片
375		66	I 3	AH-26	横位のボジティブな横門文。	10YR5/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色破片多
376		66	I 3	AJ-29	外面に横位のボジティブな横門文。内面に彫痕。	7.5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色破片
377		66	I 3	AI-26	横位のボジティブな横門文。	7.5YR6/6	多	白色粒子、黒色粒子、白色破片
378		66	I 3	AH-20	斜位のボジティブな横門文。	7.5YR5/4	有	白色粒子多、黒色粒子、白色破片
379		66	I 3	—	横位のボジティブな横門文。	7.5YR6/6	多	白色粒子、黒色粒子、白色破片
380		66	I 3	AH-27	斜位のボジティブな横門文。	5YR5/6	多	白色粒子、黒色粒子、白色破片
381		66	I 3	AH-26	斜位のボジティブな横門文。	7.5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色破片
382		66	I 3	AH-26	斜位のボジティブな横門文。	7.5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色破片
383		66	I 3	AI-26	尖底。斜位のボジティブな横門文。	5YR6/8	多	白色粒子多、黒色粒子、白色破片多
384		67	I 3	AH-27	破状口縁。口唇部に竹管状の工具による彫み。格子目状の標文。内面にナデ。	5YR5/6	多	白色粒子多、白色破片多
385		67	I 3	C-1	外面に横位・縦位のLの標文。内面に彫痕。	7.5YR6/8	多	白色粒子、黒色粒子、白色破片多
386		67	I 3	—	外面に横位の山形文。内面に彫痕。	10YR6/3	多	白色粒子多、白色破片
387		67	I 3	AJ-22	外面に横位の山形文。内面にナデ。	5YR5/8	多	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色破片
388		67	I 3	AI-20	外面に横位のRの標文。外面内面に彫痕。	10YR5/6	多	白色粒子、白色粒子、雲母、白色破片
389		67	I 3	D-1	斜位にRの標文。	5YR4/3	多	黒色粒子、白色破片多
390		67	I 3	AI-28	外面に横位のRの標文。内面に彫痕。	10YR6/4	多	白色粒子、黒色粒子、白色破片
391		67	I 3	AI-26	横位にRの標文。	7.5YR7/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色破片
392		67	I 3	AI-20	横位にRの標文。	5YR5/6	多	白色粒子、黒色粒子、白色破片
393		67	I 3	AI-27	外面に横位のRの標文。内面にナデ。	7.5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色破片多
394		67	I 3	AI-28	外面に横位のRの標文。内面にナデ。	7.5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色破片多

押出番号	種族	図版番号	分類	群	グループ	文様調整等	色調 (Hue)	繊維	胎土
395	ab	68	1	3	J-1	口唇部に具設線跡による刻み。外に縦位の山形文。沈線文。内面に縦位の山形文。	10YR5/3	有	白色粒子多, 白色薄片
396	ab	68	1	3	N-6	口唇部から胴部。先端角状を呈する棒状工具による矢羽状の削文。	2.5YR4/6	有	白色粒子多, 黒色粒子多, 雲母, 輝石
397	ab	68	1	4	W-18	縦状口縁。胴部に刻み。口唇部は縦位にナズ。削突文。胴部は縦位の削突文と半載竹管状の工具による沈線文。	5YR4/4	有	白色粒子, 白色薄片
398	68	1	4	AD-21	口唇部に刻み。外面内面に彫痕。具設線跡文。	7.5YR5/4	多	白色粒子, 黒色粒子, 白色薄片多	
399	68	1	4	X-12	外面に削突文。沈線文。外面内面に彫痕。	7.5YR5/6	多	白色粒子, 黒色粒子, 白色薄片	
400	68	1	4	AI-29	具設線跡文。沈線文。	7.5YR5/8	有	白色粒子, 黒色粒子, 白色薄片多	
401	68	1	4	M-7	具設線跡文。沈線文。	5YR3/4	有	白色粒子, 黒色粒子, 白色薄片	
402	68	1	4	M-7	鋭い端部上に矢羽状の沈線文。縦位の削突文。削突文。	7.5YR5/6	多	白色粒子多, 黒色粒子, 白色薄片	
403	68	1	4	AR-21	尖頭。縦位の沈線文。	7.5YR5/6	有	白色粒子多, 黒色粒子, 輝石	
404	68	1	4	AB-22	棒状工具による縦位の沈線文。	2.5YR5/8	有	白色粒子, 黒色粒子, 赤色粒子, 石英	
405	68	1	4	W-21	条痕文。	7.5YR6/6	多	白色粒子, 黒色粒子, 白色薄片多	
406	69	1	5	AI-20	残片。口唇部に具設線跡による削突文。外面に削突文。押引き沈線文。内面に沈線文。削突文を施す。	7.5YR5/6	有	白色粒子, 黒色粒子, 白色薄片	
407	69	1	5	—	外面に削突文の沈線文。内面に彫痕。	5YR4/8	有	白色粒子, 輝石, 石英	
408	69	1	5	AA-23	削突文。矢羽状の沈線文。	7.5YR6/4	有	白色粒子, 白色薄片	
409	69	1	5	AI-29	沈線文。押引き沈線文。	5YR4/4	多	黒色粒子, 白色薄片	
410	69	1	5	—	端縁結線文を縦位に貼付け。半載竹管状の工具により横位の沈線文。平行沈線文。	5YR5/6	有	白色粒子, 黒色粒子, 白色薄片	
411	69	1	5	X-22	口唇部に削突文。	5YR6/8	有	白色粒子, 黒色粒子, 赤色粒子, 白色薄片	
412	69	1	5	—	口唇部に削突文。穿孔有。	2.5YR4/6	有	白色粒子, 黒色粒子, 赤色粒子	
413	69	1	5	—	口唇部に削突文。半載竹管状の工具による多色沈線文。	2.5YR3/6	有	白色粒子, 赤色粒子	
414	69	1	5	AF-21	口唇部に削突文。先期状工具による多色沈線文。	5YR4/8	有	白色粒子, 黒色粒子, 赤色粒子, 白色薄片	
415	70	1	6	AC-17	先期状工具による削突文。縦粒状の沈線文。内面に彫痕。	7.5YR5/6	有	白色粒子多, 赤色粒子, 石英	
416	70	1	6	AH-27	削突文。半載竹管状の工具による縦位・斜位の沈線文。穿孔有。	7.5YR5/4	有	白色粒子多, 黒色粒子, 雲母	
417	70	1	6	AD-21	削突文。半載竹管状の工具による縦位・斜位の沈線文。穿孔有。内面に条痕文。	7.5YR4/3	有	白色粒子	
418	70	1	6	W-19	削突文。先期状工具による縦位・斜位の沈線文。穿孔有。内面に条痕文。	7.5YR4/3	有	白色粒子	
419	70	1	6	Y-22	矢羽状の削突文。格子状の沈線文。	10YR5/3	有	白色粒子, 黒色粒子, 雲母多。	
420	70	1	6	AD-20	先期状工具による沈線文。削突文。内面に条痕文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多	
421	ab	70	1	6	H-2	削突文。半載竹管状の工具による縦位・斜位の沈線文。内面に条痕文。	10YR5/6	有	白色粒子多, 黒色粒子
422	70	1	6	AH-26	削突文。先期状工具で斜位の沈線文。内面に条痕文。	7.5YR5/4	有	白色粒子	
423	70	1	6	AI-27	縦状口縁。口唇部に刻み。先期状工具による縦位の沈線文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多, 黒色粒子, 白色薄片	
424	70	1	6	AD-21	口唇部に刻み。半載竹管状の工具による縦位・斜位の沈線文。縦位に刻みの削文。内面に条痕文。	7.5YR5/6	有	白色粒子多	
425	70	1	6	AA-22	外面に先期状工具による縦位・斜位の沈線文。内面に削突文。外に半載竹管状の工具による縦位・斜位の沈線文。内面に条痕文。	7.5YR5/4	有	白色粒子多	
426	ab	70	1	6	AH-25	外面に削突文。先期状工具による縦位・斜位の沈線文。内面に条痕文。	7.5YR6/4	有	白色粒子多
427	70	1	6	AF-21	外面に削突文。先期状工具による縦位・斜位の沈線文。内面に条痕文。	7.5YR5/4	有	白色粒子多, 黒色粒子	
428	70	1	6	H-2	外面に削突文。半載竹管状の工具による沈線文。内面に条痕文。	7.5YR4/3	有	白色粒子	
429	70	1	6	J-2	半載竹管状の工具により格子状に平行沈線文。	7.5YR5/4	有	白色粒子多	
430	70	1	6	X-22	半載竹管状の工具により斜位の沈線文。縦位に削突文。	7.5YR5/4	有	白色粒子	
431	70	1	6	AD-21	半載竹管状の工具による縦位の沈線文。縦位に削突文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多	
432	70	1	6	Z-22	縦位に刻む削突文。斜位の先期状工具による沈線文。	7.5YR4/2	有	白色粒子, 黒色粒子	
433	70	1	6	AF-21	縦位に先期状工具による2列の削突文。	7.5YR3/4	有	白色粒子	
434	71	1	6	AH-26	口唇部に刻み。外面に半載竹管状の工具による沈線文。2列の削突文。内面に条痕文。	7.5YR5/4	有	白色粒子多	
435	71	1	6	AH-25	口唇部に削突文。外面に半載竹管状の工具による沈線文。内面に条痕文。	7.5YR5/4	有	白色粒子多	
436	71	1	6	Y-22	口唇部に削突文。半載竹管状の工具による沈線文。	7.5YR4/4	無	白色粒子	
437	ab	71	1	6	AH-26	外面に削突文。半載竹管状の工具により縦位に縦状文。内面に条痕文。	7.5YR5/4	有	白色粒子多
438	71	1	6	AG-22	外面に先期状工具による縦位の沈線文。削突文。内面に条痕文。	7.5YR5/6	有	白色粒子多, 黒色粒子, 白色薄片	
439	71	1	6	M-5	口唇部に刻み。棒状工具による沈線文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多, 黒色粒子多, 白色薄片	
440	71	1	6	X-21	口唇部に刻み。半載竹管状の工具により縦位の沈線文。	7.5YR4/6	有	黒色粒子, 雲母, 白色薄片	
441	71	1	6	W-21	口唇部に刻み。先期状工具による斜位の沈線文。穿孔有。	7.5YR3/3	有	白色粒子, 黒色粒子, 白色薄片	
442	71	1	6	X-22	半載竹管状の工具により斜位の沈線文。	10YR5/4	有	白色粒子, 白色薄片	
443	71	1	6	—	口唇部に刻み。先期状工具による斜位の沈線文。	7.5YR6/4	有	白色粒子多, 黒色粒子, 白色薄片	
444	71	1	6	—	口唇部に刻み。外面に斜位・縦位の沈線文。内面に条痕文。	7.5YR3/1	有	白色粒子, 白色薄片	
445	71	1	6	AE-17	先期状工具による縦位の沈線文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多, 白色薄片多	
446	71	1	6	AD-15	先期状工具による斜位の沈線文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多, 白色薄片多	
447	71	1	6	AG-20	外面に格子状の沈線文が認められる。内面に条痕文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多, 雲母, 白色薄片	
448	71	1	6	AA-23	縦状口縁。外面に先期状工具による斜位の沈線文。内面に条痕文。	10YR3/2	有	白色粒子, 雲母多	
449	71	1	6	R-18	斜位の沈線文。	7.5YR5/4	多	白色粒子, 白色薄片	
450	72	1	6	Y-22	外面に先期状工具による斜位の沈線文。内面に条痕文。	7.5YR5/4	多	白色粒子多, 黒色粒子, 白色薄片多	
451	72	1	6	AG-22	半載竹管状の工具による格子状の沈線文。	7.5YR5/4	有	白色粒子, 白色薄片	
452	72	1	6	Z-22	半載竹管状の工具による格子状の沈線文。	7.5YR5/4	有	白色粒子多, 白色薄片多	
453	72	1	6	V-12	外面に半載竹管状の工具による格子状の沈線文。内面に彫痕。	7.5YR4/4	有	白色粒子多	
454	72	1	6	W-21	半載竹管状の工具による沈線文。	7.5YR5/4	有	白色粒子	
455	72	1	6	AC-22	外面に格子状の沈線文。内面に条痕文。	7.5YR5/4	有	白色粒子, 黒色粒子, 白色薄片多	
456	72	1	6	AD-15	半載竹管状の工具による沈線文。	7.5YR5/4	有	白色粒子多, 黒色粒子	
457	72	1	6	AC-21	半載竹管状の工具による斜位の沈線文。	7.5YR5/4	有	白色粒子, 黒色粒子	
458	72	1	6	Y-21	口唇部に刻み。外面に格子状の沈線文。内面に彫痕。	7.5YR4/3	有	白色粒子多, 白色薄片	
459	72	1	6	AD-22	外面に条痕文。格子状の沈線文。内面に条痕文。	7.5YR4/4	有	白色粒子, 白色薄片	
460	72	1	6	AI-29	外面に口唇部から縦粒状の沈線文。内面に彫痕。	7.5YR4/6	有	白色粒子多, 黒色粒子, 白色薄片多	

第3章 縄文時代の遺構と遺物

採出 番号	種別	図版 番号	分類 群	グリップ	文様調整等	色調 (Hue)	組織	粘土
461	72	1	6	AD-24	外面に刺突文。内面に糸縷文。	10YR4/4	粗	白色粒子多。白色屑片多
462	72	1	6	AH-25	2列の刺突文。	7.5YR4/4	粗	白色粒子。雲母。白色屑片
463	72	1	6	AD-24	刺突文。	7.5YR5/4	粗	白色粒子多。白色屑片
464	73	1	1	AB-16	口唇部。折返し口縁に棒状の結条体圧痕文。	7.5YR4/1	粗	白色粒子多。白色屑片多
465	73	1	1	—	口唇部。折返し口縁に輪を有する結条体圧痕文。	7.5YR4/2	粗	白色屑片
466	73	1	1	W-20B	波状口縁。口唇部に結条体圧痕文。	5YR5/6	粗	白色粒子・黒色粒子
467	73	1	1	—	口唇部。2本の隆帯上に結条体圧痕文。	7.5YR5/4	粗	白色粒子。白色屑片
468	73	1	1	AB-22	波状口縁。口唇部。折返し口縁に縦線文。	7.5YR5/6	粗	白色屑片
469	73	1	1	AD-15	細条体圧痕文。	7.5YR5/4	粗	白色粒子多。白色屑片多
470	73	1	1	AD-17	折返し口縁に斜位の平行波紋文。	7.5YR4/2	粗	白色粒子。白色屑片
471	73	1	1	—	波状口縁。折返し口縁に斜位の波紋文。内面に横位の彫痕。	7.5YR3/1	粗	白色屑片
472	73	1	1	—	折返し口縁に縦線紋文。内面に斜位の糸縷文。	5YR5/6	粗	白色粒子。白色屑片
473	73	1	1	AF-20	口唇部。隆帯上に輪形の結条体圧痕文。	7.5YR5/2	粗	白色屑片
474	73	1	1	—	口唇部。隆帯上に輪形の結条体圧痕文。	5YR5/6	粗	白色粒子。白色屑片
475	73	1	1	AB-21	口唇部。外面の隆帯上に輪形の結条体圧痕文。内面に糸縷文。	7.5YR5/3	粗	白色粒子。白色屑片多
476	73	1	1	AA-16	波状口縁。口唇部。隆帯上に結条体圧痕文。	5YR5/6	粗	白色粒子。白色屑片多
477	73	1	1	AH-29	外面に糸縷文。隆帯上に輪形の結条体圧痕文。内面に彫痕。	7.5YR4/1	粗	白色粒子多。白色屑片多
478	73	1	1	—	隆帯上に結条体圧痕文。	7.5YR5/6	粗	白色粒子多。白色屑片多
479	73	1	1	AB-16	縦位・横位の隆帯上に結条体圧痕文。	7.5YR5/4	粗	白色粒子。白色屑片多
480	73	1	1	W-20	隆帯上に輪形の結条体圧痕文。	5YR5/6	粗	白色粒子。白色屑片多
481	73	1	1	AA-23	波状口縁。隆帯上に結条体圧痕文。	7.5YR5/4	粗	白色粒子。白色屑片
482	73	1	1	AC-22	外面の隆帯上に結条体圧痕文。内面に糸縷文。	7.5YR5/6	粗	白色粒子多。白色屑片多
483	74	1	1	AE-22	外面に彫痕。隆帯上に輪形の結条体圧痕文。内面に彫痕。	7.5YR4/2	粗	白色粒子多。白色屑片多
484	74	1	1	X-22	波状口縁。隆帯上に輪形の結条体圧痕文。外面・内面に糸縷文。	7.5YR4/2	粗	白色粒子多。白色屑片多
485	74	1	1	AB-21	隆帯上に輪形の結条体圧痕文。	7.5YR5/6	粗	白色粒子多。白色屑片多
486	74	1	1	AC-15	細い隆帯上に輪形の結条体圧痕文。	7.5YR4/2	粗	白色粒子多。白色屑片多
487	74	1	1	X-21	外面の細い隆帯上に結条体圧痕文。内面に彫痕。	7.5YR4/4	粗	白色粒子。黒色粒子。白色屑片多
488	74	1	1	AB-21	外面の隆帯上に輪形の結条体圧痕文。内面に彫痕。	7.5YR3/1	粗	白色粒子。白色屑片
489	74	1	1	AC-21	隆帯上に結条体圧痕文。	7.5YR4/3	粗	白色屑片多
490	74	1	1	X-22	隆帯上に結条体圧痕文。穴縁文。	7.5YR5/4	粗	白色屑片
491	74	1	1	—	波状口縁。口唇部から垂下する隆帯上に結条体圧痕文。	5YR3/1	粗	白色屑片
492	74	1	1	—	口唇部に中央。隆帯上に斜位の波紋文。	7.5YR4/3	粗	白色粒子。白色屑片多
493	74	1	1	X-21	外面の隆帯上に斜位の波紋文。外面内面に糸縷文。	7.5YR4/4	粗	白色粒子。白色屑片多
494	74	1	1	—	外面に輪形の結条体圧痕文。外面内面に糸縷文。	7.5YR4/3	粗	白色粒子。黒色粒子。白色屑片多
495	74	1	1	—	輪形の結条体圧痕文。	10YR6/3	粗	白色粒子。白色屑片多
496	74	1	1	W-19	波状口縁。口唇部。低隆帯に結条体圧痕文。	7.5YR5/4	粗	白色粒子。白色屑片多
497	74	1	1	AB-16	波状口縁。口唇部。外面に縦溝状・横位の結条体圧痕文。外面内面に彫痕。	5YR5/6	粗	白色粒子。白色屑片
498	74	1	1	AA-16	口唇部。隆帯上に結条体圧痕文。	7.5YR5/6	粗	白色屑片多
499	74	1	1	AA-16	口唇部。隆帯上に結条体圧痕文。	5YR5/6	粗	白色粒子。白色屑片
500	74	1	1	口唇部。隆帯上に結条体圧痕文。半截竹管状の工具による刺突文。	10YR5/3	粗	白色粒子。黒色粒子。白色屑片多	
501	74	1	1	—	口唇部から垂下する隆帯上に外面に結条体圧痕文。	7.5YR4/2	粗	白色粒子。黒色粒子。白色屑片多
502	74	1	1	—	横位の隆帯上に外面に結条体圧痕文。	7.5YR4/4	粗	白色粒子多。黒色粒子。白色屑片多
503	74	1	1	X-014	隆帯上に結条体圧痕文。外面に刺突文。穴縁文。内面に彫痕。	7.5YR5/8	粗	白色粒子多。黒色粒子。白色屑片
504	75	1	1	W-19	波状口縁。口唇部に刺突文。外面に横位の刺突文列。	5YR4/4	粗	白色粒子。白色屑片
505	75	1	1	AA-16	口唇部に刺突文。外面に横位の2列の刺突文列。	7.5YR4/4	粗	白色粒子。黒色粒子。白色屑片
506	75	1	1	X-20B	口唇部に刺突文。外面に横位の2列の刺突文列。内面に波紋文。	7.5YR5/4	粗	白色粒子多。白色屑片多
507	75	1	1	J-2	口唇部に彫痕。外面に刺突文列。貝目縦線文。	7.5YR4/6	粗	白色粒子多。黒色粒子。雲母。白色屑片多
508	75	1	1	AF-20	波状口縁。半截竹管状の工具による刺突文列。	7.5YR5/3	粗	白色粒子。白色屑片多
509	75	1	1	AB-21B	半截竹管状の工具による刺突文列。穿孔有。	7.5YR3/1	粗	白色粒子多。輝石。白色屑片多
510	75	1	1	AB-23	2列の刺突文。	10YR6/3	粗	白色粒子。白色屑片
511	75	1	1	W-21	波状口縁。3列の刺突文列。	7.5YR4/4	粗	白色粒子多。白色屑片多
512	75	1	1	AF-20	外反する外面に刺突文列。内面に糸縷文。	7.5YR4/2	粗	白色粒子。白色屑片。白色屑片
513	75	1	1	AC-21	波状口縁。2列の刺突文列。	5YR4/3	粗	白色粒子。白色屑片
514	75	1	1	X-20	細い竹管状の工具による刺突文。	7.5YR4/3	粗	白色粒子。白色屑片多
515	76	2	2	棒状の結条体圧痕文。	5YR4/6	粗	白色粒子。白色屑片多	
516	76	2	2	Z-22	棒状の結条体圧痕文。	5YR4/6	粗	白色粒子。黒色粒子。白色屑片多
517	76	2	2	Y-22	細輪の結条体圧痕文。	7.5YR5/4	粗	白色粒子。黒色粒子。白色屑片
518	76	2	2	W-19	波状口縁。細輪の結条体圧痕文。	7.5YR4/4	粗	白色粒子。白色屑片多
519	76	2	2	V-19	口唇部。外面に細輪の結条体圧痕文。	7.5YR5/4	粗	白色粒子
520	76	2	2	Y-21	波状口縁。口唇部に糸縷文。細輪の結条体圧痕文。穿孔有。	7.5YR4/4	粗	白色粒子。黒色粒子
521	76	2	2	X-20B	口唇部に刺突文。外面に横位の2列の結条体圧痕文。	7.5YR5/3	粗	白色粒子。黒色粒子。白色屑片多
522	76	2	2	X-19B	波状口縁。斜位に細輪の結条体圧痕文。	5YR5/6	粗	白色粒子多。白色屑片
523	76	2	2	AA-22	波状口縁。斜位に細輪の結条体圧痕文。	4YR5/6	粗	白色粒子。黒色粒子。白色屑片
524	76	2	2	X-22	口唇部。外面に斜位に細輪の結条体圧痕文。	7.5YR5/3	粗	白色粒子多。白色屑片
525	76	2	2	W-20	口唇部。外面に東方向に交差する細輪の結条体圧痕文。	5YR4/6	粗	白色粒子。白色屑片
526	76	2	2	—	外面に東方向に交差する細輪の結条体圧痕文。内面に糸縷文。	7.5YR4/6	粗	白色粒子。白色屑片
527	76	2	2	X-22	東方向に交差する細輪の結条体圧痕文。	7.5YR4/6	粗	白色屑片
528	76	2	2	T-18	東方向に交差する細輪の結条体圧痕文。	7.5YR5/4	粗	白色屑片
529	76	2	2	X-22	横位に太輪の結条体圧痕文。	5YR5/4	粗	白色粒子。白色屑片
530	76	2	2	AC-16	横位に細輪の結条体圧痕文。	7.5YR4/3	粗	白色粒子。黒色粒子。白色屑片多
531	76	2	2	AR-15	横位に細輪の結条体圧痕文。	5YR5/6	粗	白色粒子。黒色粒子。白色屑片多
532	76	2	2	—	横位に細輪の結条体圧痕文。	5YR4/6	粗	白色粒子多。白色屑片多
533	77	2	2	—	口唇部。外面に横位に太輪の結条体圧痕文。穿孔有。	7.5YR4/4	粗	白色粒子。黒色粒子。白色屑片
534	77	2	2	AD-21	口唇部。外面に横位に太輪の結条体圧痕文。	7.5YR5/6	粗	白色粒子多。黒色粒子。白色屑片多
535	77	2	2	AA-24	横位に太輪の結条体圧痕文。	10YR5/4	粗	白色粒子。黒色粒子。白色屑片多
536	77	2	2	AD-21	横位に太輪の結条体圧痕文。	5YR5/6	粗	白色粒子。黒色粒子。白色屑片多
537	77	2	2	W-20	横位に太輪の結条体圧痕文。	7.5YR4/4	粗	白色粒子。黒色粒子。白色屑片
538	77	2	2	AE-19	横位に太輪の結条体圧痕文。	5YR5/4	粗	白色粒子。黒色粒子。白色屑片
539	77	2	2	—	横位に太輪の結条体圧痕文。	10YR4/4	粗	白色粒子。白色屑片
540	77	2	2	Z-15	横位に太輪の結条体圧痕文。	7.5YR5/6	粗	白色粒子多。黒色粒子。白色屑片

押出番号	種別	図版番号	分類	グリップ	文様調整等	色調 (Hue)	組織	胎土
541		77	Ⅱ 2	Y-21	横位に太軸の絡糸体圧痕文。	7.5YR5/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
542		77	Ⅱ 2	—	横位に太軸の絡糸体圧痕文。	7.5YR3/3	有	白色粒子、白色薄片
543		77	Ⅱ 2	W-22	口唇部、外面に斜位に太軸の絡糸体圧痕文。	5YR8/8	多	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
544		77	Ⅱ 2	—	斜位に太軸の絡糸体圧痕文。	5YR4/4	有	白色粒子
545		77	Ⅱ 2	X-21	斜位に太軸の絡糸体圧痕文。	5YR5/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
546		77	Ⅱ 2	—	口唇部、裏方向に太軸の絡糸体圧痕文。	7.5YR4/3	有	白色粒子多、黒色粒子
547		77	Ⅱ 2	W-21	裏方向に太軸の絡糸体圧痕文。	5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片多
548		77	Ⅱ 2	Z-21	横位に太軸の絡糸体圧痕文。	5YR4/6	有	白色粒子多、黒色粒子、白色薄片多
549		77	Ⅱ 2	X-22	横位に太軸の絡糸体圧痕文。	5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
550		77	Ⅱ 2	AD-16	縦文、横位、斜位に太軸の絡糸体圧痕文。	7.5YR5/4	多	白色粒子、黒色粒子、白色薄片多
551		78	Ⅱ 2	AD-16	口唇部、横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR4/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
552		78	Ⅱ 2	V-20	口唇部、外面に横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR4/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
553		78	Ⅱ 2	AE-21	波状口縁。外面に横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR4/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
554		78	Ⅱ 2	AF-20	口唇部、外面に横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR6/6	有	白色薄片多
555		78	Ⅱ 2	W-12	横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片多
556		78	Ⅱ 2	AA-22	波状口縁。横位に軸の無い絡糸体圧痕文。穿孔あり。	7.5YR4/4	多	白色粒子、黒色粒子
557		78	Ⅱ 2	AA-15	横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
558	ab	78	Ⅱ 2	X-21	口唇部から割部まで横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
559	ab	78	Ⅱ 2	AD-22	口唇部から割部まで横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR5/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
560		78	Ⅱ 2	X-21	横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR6/3	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片多
561		78	Ⅱ 2	X-22	波状口縁。横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR3/3	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
562		78	Ⅱ 2	AD-21	波状口縁。横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	5YR4/4	多	白色粒子、白色薄片多
563		79	Ⅱ 2	Y-21	横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	5YR6/4	多	白色粒子、黒色粒子、白色薄片多
564		79	Ⅱ 2	AB-16	横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	5YR7/1	多	白色粒子、黒色粒子、白色薄片多
565		79	Ⅱ 2	X-19	横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	5YR6/8	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
566		79	Ⅱ 2	W-20	横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
567		79	Ⅱ 2	W-20	横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR4/4	多	白色粒子多、黒色粒子、白色薄片
568		79	Ⅱ 2	Y-21	横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR5/3	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
569		79	Ⅱ 2	Y-22	横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
570		79	Ⅱ 2	W-20	口唇部にのみ。斜位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR4/3	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
571		79	Ⅱ 2	X-22	口唇部、外面に斜位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR4/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
572		79	Ⅱ 2	W-21	口唇部に工具より多。斜位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR6/8	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片多
573		79	Ⅱ 2	W-20	口唇部にのみ。斜位に軸の無い絡糸体圧痕文。	5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
574		79	Ⅱ 2	AR-21	波状口縁。斜位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子、白色薄片
575		79	Ⅱ 2	X-22	波状口縁。横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR4/3	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
576		80	Ⅱ 2	AF-19	外反する波状口縁。斜位に軸の無い絡糸体圧痕文。	10YR5/3	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片多
577		80	Ⅱ 2	—	波状口縁。口唇部、外面に異なる2種類の絡糸体圧痕文。	5YR4/6	有	白色粒子、白色薄片
578		80	Ⅱ 2	AB-21	縦体を半環状させた絡糸体圧痕文。	5YR4/6	有	白色粒子多、白色薄片
579		80	Ⅱ 2	AG-21	縦体を半環状させた絡糸体圧痕文。	7.5YR5/4	有	白色粒子多、白色薄片
580		80	Ⅱ 2	W-20	口唇部の内面に横位の絡糸体圧痕文。	7.5YR4/2	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
581		80	Ⅱ 2	W-20	異なる2種類の絡糸体圧痕文。	7.5YR3/4	有	白色粒子多、黒色粒子、白色薄片多
582		80	Ⅱ 2	—	異なる2種類の絡糸体圧痕文。	7.5YR4/1	有	白色粒子多
583		80	Ⅱ 2	W-20	口唇部、外面に横位に縦軸の絡糸体圧痕文。微隆起縁文。	7.5YR4/3	有	白色粒子、白色薄片多
584		80	Ⅱ 2	W-19	微隆起縁文。横位に縦軸の絡糸体圧痕文。	10YR/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
585		80	Ⅱ 2	—	口唇部にのみ。微隆起縁文。横位に縦軸の絡糸体圧痕文。	7.5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
586		80	Ⅱ 2	—	波状口縁。縦位・横位の微隆起縁文。微隆起縁文の区画内に横位の縦軸の絡糸体圧痕文。	7.5YR4/3	有	白色粒子多、黒色粒子、白色薄片
587		80	Ⅱ 2	X-21	口唇部の内面より外面に縦位の隆帯。外面に縦軸の絡糸体圧痕文。	7.5YR5/4	有	白色粒子、黒色粒子多、白色薄片多
588		80	Ⅱ 2	V-19	横位の微隆起縁文。斜位に縦軸の絡糸体圧痕文。	2.5YR4/6	有	白色粒子、黒色粒子、礫石
589		80	Ⅱ 2	—	横位の微隆起縁文。斜位に縦軸の絡糸体圧痕文。	7.5YR5/4	有	白色粒子、白色薄片多
590		81	Ⅱ 2	W-20	横位の微隆起縁文。横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR4/3	有	白色粒子、白色薄片
591		81	Ⅱ 2	—	横位の微隆起縁文。横位に軸の無い絡糸体圧痕文。屈曲部。	7.5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
592		81	Ⅱ 2	W-19	縦位・横位の微隆起縁文。微隆起縁文の区画内に斜位に軸の無い絡糸体圧痕文。	5YR4/6	有	白色粒子多、黒色粒子、白色薄片多
593		81	Ⅱ 2	—	横位の微隆起縁文。横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
594		81	Ⅱ 2	AR-22	横位の微隆起縁文。斜位に軸の無い絡糸体圧痕文。	5YR4/4	多	白色粒子、黒色粒子、白色薄片多
595		81	Ⅱ 2	W-19	波状口縁。口唇部に沿った微隆起縁文。横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	5YR5/6	有	白色粒子、白色薄片多
596		81	Ⅱ 2	X-22	波状口縁。口唇部に沿った微隆起縁文。横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	5YR4/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
597		81	Ⅱ 2	AD-16	口唇部にのみ。横位の微隆起縁文。横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	10YR4/3	有	白色粒子、白色薄片多
598		81	Ⅱ 2	W-21	横位の微隆起縁文。横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR4/3	有	白色粒子、白色薄片
599		81	Ⅱ 2	X-22	横位の微隆起縁文。微隆起縁文上に軸の無い絡糸体圧痕文。	10YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
600		81	Ⅱ 2	—	横位の微隆起縁文。横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片多
601		81	Ⅱ 2	AB-21	横位の微隆起縁文。横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR4/6	有	黒色粒子、白色薄片多
602		81	Ⅱ 2	AD-16	横位の微隆起縁文。横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR5/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片多
603		82	Ⅱ 2	W-21	波状口縁。口唇部に沿った微隆起縁文。横位、斜位に軸の無い絡糸体圧痕文が交差する。	7.5YR7/6	有	白色粒子、白色薄片多
604		82	Ⅱ 2	V-19	横位の微隆起縁文。斜位・横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子、白色薄片
605		82	Ⅱ 2	—	波状口縁。口唇部に沿った微隆起縁文。斜位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR4/2	有	白色粒子多、黒色粒子、白色薄片多
606		82	Ⅱ 2	W-21	横位の微隆起縁文。斜位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR5/6	多	白色粒子、黒色粒子、白色薄片多
607		82	Ⅱ 2	AB-15	微隆起縁文上に斜位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR4/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
608		82	Ⅱ 2	V-20	口唇部より裏下する微隆起縁文と横位の微隆起縁文。横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR5/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
609		82	Ⅱ 2	AD-15	口唇部に絡糸体圧痕文。口唇部より裏下する微隆起縁文と横位の微隆起縁文。横位に軸の無い絡糸体圧痕文。	7.5YR4/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
610		82	Ⅱ 2	AA-15	波状口縁か。波頭部から裏下する微隆起縁文と横位の微隆起縁文。斜位に絡糸体圧痕文。	10YR3/2	有	白色粒子多、黒色粒子、白色薄片

第3章 縄文時代の遺構と遺物

採出番号	種別	図版番号	分類	グリップ	文様調整等	色調 (Hue)	繊維	胎土
611		82	Ⅱ 2	X-22	口唇部に沿った縦線帯。横位に軸の無い結糸体圧痕文。	7.5YR5/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片多
612		82	Ⅱ 2	AD-21	口唇部に沿った2本の間隔起線文。その上に軸の無い結糸体圧痕文。	5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片多
613		82	Ⅱ 2	V-19	外面に横位に隆帯を帯付け隆帯上に沿って沈線文を施した2条の間隔起線文。軸の無い結糸体圧痕文。内面に縦線。	5YR4/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片多
614		82	Ⅱ 2	X-21	口唇部に沿う。横位の2条の間隔起線文。軸の無い結糸体圧痕文。	5YR4/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片多
615		82	Ⅱ 2	W-21	横位の間隔起線文。横位に軸の無い結糸体圧痕文。	10YR4/6	有	黒色粒子多、白色削片
616		82	Ⅱ 2	W-20	横位に細軸の結糸体圧痕文。格子目状の沈線文。	7.5YR4/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片多
617	ab	82	Ⅱ 2	AA-16	横位の間隔起線文と軸の無い結糸体圧痕文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子、白色削片多
618		82	Ⅱ 2	Y-22	口唇部に軸の無い結糸体圧痕文。横位の間隔起線文。半環状とされた結糸体圧痕文。	7.5YR5/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片多
619		82	Ⅱ 2	AC-21	方形の半環。角部に間隔起。その脇に結糸体圧痕文が観察される。	5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片
620		83	Ⅲ 2	—	半環竹管状の工具による斜位の沈線文。細軸の結糸体圧痕文。	7.5YR5/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片多
621		83	Ⅲ 2	W-20	横位に細軸の結糸体圧痕文。格子目状の沈線文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片多
622		83	Ⅲ 2	AD-16	横位に細軸の結糸体圧痕文。沈線文。	5YR4/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片多
623		83	Ⅲ 2	AD-17	横位に細軸の結糸体圧痕文。格子目状の沈線文。	7.5YR5/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片多
624		83	Ⅲ 2	W-21	横位に細軸の結糸体圧痕文。格子目状の沈線文。	7.5YR5/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片多
625		83	Ⅲ 2	AA-15	横位に細軸の結糸体圧痕文。格子目状の沈線文。	7.5YR6/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片多
626		83	Ⅲ 2	W-20	横位に細軸の結糸体圧痕文。格子目状の沈線文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片多
627		83	Ⅲ 2	—	横位に細軸の結糸体圧痕文。沈線文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片多
628		83	Ⅲ 2	W-19	横位に結糸体圧痕文。格子目状の沈線文。	7.5YR5/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片多
629		83	Ⅲ 2	W-20	横位に結糸体圧痕文。格子目状の沈線文。	10YR5/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片多
630		83	Ⅲ 2	X-22	斜位に軸の無い結糸体圧痕文。縦位の沈線文。	10YR3/3	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片多
631		83	Ⅲ 2	X-20	横位に軸の無い結糸体圧痕文。斜位の沈線文。	7.5YR3/1	有	白色粒子、黒色粒子多、白色削片多
632		83	Ⅲ 2	AA-14	横位に軸の無い結糸体圧痕文。沈線文。	7.5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片多
633		83	Ⅲ 2	AB-16	波状口縁。斜位の沈線文。横位に軸の無い結糸体圧痕文。	7.5YR3/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片多
634		83	Ⅲ 2	X-21	口唇部に結糸体圧痕文。外面に格子目状の沈線文。横位に軸の無い結糸体圧痕文。	5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片多
635		83	Ⅲ 2	W-21	口唇部に沿う。軸の無い結糸体圧痕文。格子目状の沈線文。	5YR4/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片多
636	ab	83	Ⅲ 2	W-19	横位の結糸体圧痕文。格子目状の沈線文。	5YR3/1	有	白色粒子、黒色粒子
637		84	Ⅲ 2	X-22	軸の無い結糸体圧痕文。縦位の沈線文。	10YR5/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片
638		84	Ⅲ 2	W-21	軸の無い結糸体圧痕文。縦位の沈線文。	10YR4/3	有	白色粒子、白色削片多
639		84	Ⅲ 2	X-21	軸の無い結糸体圧痕文。沈線文。	5YR4/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片
640		84	Ⅲ 2	W-21	斜位・横位の沈線文。軸の無い結糸体圧痕文。	7.5YR4/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片
641		84	Ⅲ 2	Y-20	横位・斜位の沈線文。軸の無い結糸体圧痕文。	7.5YR3/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片多
642		84	Ⅲ 2	AD-21	横位に軸の沈線文。横位に軸の無い結糸体圧痕文。	5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片多
643		84	Ⅲ 2	Y-21	口唇部に沿う。横位に軸の無い結糸体圧痕文。	7.5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片
644		84	Ⅲ 2	AD-21	軸の無い結糸体圧痕文。軸の無い結糸体圧痕文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片多
645		84	Ⅲ 2	W-21	格子目状の沈線文。横位に軸の無い結糸体圧痕文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片多
646		84	Ⅲ 2	W-20	格子目状の沈線文。横位に軸の無い結糸体圧痕文。	7.5YR4/3	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片
647		84	Ⅲ 2	—	格子目状の沈線文。横位に軸の無い結糸体圧痕文。	7.5YR4/5	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片
648		84	Ⅲ 2	—	格子目状の沈線文。横位に軸の無い結糸体圧痕文。	5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片
649		84	Ⅲ 2	AB-15	格子目状の沈線文。横位に軸の無い結糸体圧痕文。	7.5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片
650		85	Ⅲ 2	W-21	横位の間隔起線文上、外面に結糸体圧痕文。沈線文。	5YR4/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片
651		85	Ⅲ 2	X-22	横位の間隔起線文上、外面に結糸体圧痕文。沈線文。	7.5YR4/3	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片
652		85	Ⅲ 2	AC-16	横位の2条の間隔起線文上に軸の無い結糸体圧痕文。格子目状の沈線文。	7.5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片多
653		85	Ⅲ 2	X-22	口唇部に沿う。斜位の沈線文。横位の間隔起線文。軸の無い結糸体圧痕文。	7.5YR6/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片
654		85	Ⅲ 2	V-20	波状口縁。口唇部に沿う。斜位の沈線文。横位の間隔起線文上と外面に軸の無い結糸体圧痕文。	7.5YR4/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片
655		85	Ⅲ 2	AF-23	斜位の沈線文。横位の間隔起線文上と外面に軸の無い結糸体圧痕文。	5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片多
656		85	Ⅲ 2	—	横位の間隔起線文上と外面に軸の無い結糸体圧痕文。格子目状の沈線文。	7.5YR4/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片
657		85	Ⅲ 2	X-21	2条の横位の間隔起線文上に結糸体圧痕文。格子目状の沈線文。外尻に口唇部に沿う。横位・縦位の2条の間隔起線文。斜位の沈線文。軸の無い結糸体圧痕文。	5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片
659		85	Ⅲ 2	—	口唇部に沿う。横位・縦位の間隔起線文。軸の無い結糸体圧痕文。	5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片
660		85	Ⅲ 2	—	口唇部に沿う。横位・縦位の間隔起線文。縦位の沈線文。軸の無い結糸体圧痕文。穿孔有。	5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片
661		85	Ⅲ 2	W-21	口唇部に沿う。横位の間隔起線文上に軸の無い結糸体圧痕文。斜位の沈線文。	7.5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片
662		85	Ⅲ 2	—	横位の間隔起線文上及び軸の無い結糸体圧痕文。斜位の沈線文。	7.5YR5/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片
663		85	Ⅲ 2	W-21	横位の間隔起線文と軸の無い結糸体圧痕文。格子目状の沈線文。	5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片
664		85	Ⅲ 2	W-20	軸の無い結糸体圧痕文。斜位・横位の沈線文。横位の間隔起線文。	5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片多
665		85	Ⅲ 2	X-22	横位に軸の無い結糸体圧痕文。斜位の沈線文。横位の間隔起線文。	5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片多
666		86	Ⅲ 2	X-21	横位の間隔起線文。	7.5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片
667		86	Ⅲ 2	Y-21	横位の間隔起線文。	5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片
668		86	Ⅲ 2	—	縦位・斜位の間隔起線文。	5YR6/8	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片
669		86	Ⅲ 2	W-21	横位・横位の間隔起線文。	7.5YR6/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片
670		86	Ⅲ 2	Y-22	口唇部内面から外面に縦位の間隔起線文。横位の間隔起線文。	5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片
671		86	Ⅲ 2	AF-18	口唇部に沿う。横位の2本の沈線文と斜位の沈線文。横位の間隔起線文。	5YR5/6	有	白色粒子、白色削片
672		86	Ⅲ 2	W-20	口唇部に沿う。斜位の沈線文。横位の間隔起線文。未貫通の穿孔有。	5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片多
673		86	Ⅲ 2	—	斜位に異なる工具による2種類の沈線文。横位の間隔起線文。	7.5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色削片

神号 番号	神杖	図版 番号	分類 群 類	ドリット	文様調整等	色調 (Hue)	組織	粘土
674	86	86	Ⅱ	—	口唇部から外面に縦位の微隆起線文。横位の微隆起線文。横位の改線文。	5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
675	86	86	Ⅱ	X-21	口唇部に附み、縦位の微隆起線文。斜位の改線文。	5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
676	86	86	Ⅱ	V-19	口唇部に附み、口唇部から外面に縦位の微隆起線文。横位の改線文。	7.5YR5/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
677	86	86	Ⅱ	W-19	口唇部から外面に2本の縦位の微隆起線文。格子目状の改線文。	7.5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
678	86	86	Ⅱ	—	縦位の微隆起線文。矢羽状工具による格子目状の改線文。	7.5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
679	86	86	Ⅱ	—	縦位の微隆起線文。斜位の改線文。	5YR6/8	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
680	86	86	Ⅱ	AD-15	格子目状の改線文。横位の微隆起線文。	7.5YR5/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
681	ab	87	Ⅱ	AB-16/6b	口唇部に附み、外面を縦横微隆起。斜位・縦位の改線文。	5YR4/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色粉片
682	87	87	Ⅱ	X-22	口唇部に附み、口唇部から縦位の改線文。区画性のある横位の改線文の間に斜位に改線文を光増。穿孔有。	5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色粉片
683	87	87	Ⅱ	X-21	横位・斜位の改線文。	5YR4/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色粉片
684	87	87	Ⅱ	X-21	横位・斜位の改線文。	7.5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
685	87	87	Ⅱ	Y-22	横位の改線文の間に斜位の改線文を光増。	7.5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
686	87	87	Ⅱ	AE-20	横位の改線文の間に斜位の改線文を光増。	7.5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色粉片
687	87	87	Ⅱ	X-20	横位口縁。外面に格子目状の改線文。内面にナデ。	7.5YR2/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
688	87	87	Ⅱ	AG-19	格子目状の改線文。	10YR2/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色粉片
689	87	87	Ⅱ	X-22	横位口縁。格子目状の改線文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色粉片
690	87	87	Ⅱ	AA-21	横位口縁。格子目状・横位の改線文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色粉片
691	87	87	Ⅱ	—	口唇部に附み、格子目状の改線文。	5YR4/6	多	白色粒子多、黒色粒子多、白色粉片
692	87	87	Ⅱ	W-21	口唇部に附み、格子目状の改線文。	7.5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色粉片
693	87	87	Ⅱ	X-22	口唇部に附み、半縦竹管状の工具による格子目状の改線文。	5YR2/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
694	88	88	Ⅱ	—	半縦竹管状の工具による格子目状の改線文。	5YR4/4	多	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
695	88	88	Ⅱ	AA-16	半縦竹管状の工具による格子目状の改線文。穿孔有。	7.5YR4/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
696	88	88	Ⅱ	AB-22	口唇部下に格子目状の改線文を施す。穿孔有。	7.5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色粉片
696	88	88	Ⅱ	X-22	半縦竹管状の工具による格子目状の改線文。	7.5YR4/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
697	88	88	Ⅱ	N-4	半縦竹管状の工具による格子目状の改線文。	5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色粉片
698	88	88	Ⅱ	X-21	横杖工具による格子目状の改線文。	5YR4/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色粉片
699	88	88	Ⅱ	AI-29	横杖工具による格子目状の改線文。	10YR2/4	無	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
700	88	88	Ⅱ	—	半縦竹管状の工具による格子目状の改線文。	7.5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
701	88	88	Ⅲ	AI-20	口唇部に附み、外面に縦位の改線文。横位の改線文。内面に条痕文。	10YR2/2	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色粉片
702	88	88	Ⅲ	W-21	縦位改線文。	5YR4/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
703	88	88	Ⅲ	X-22	縦位改線文。	7.5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子
704	88	88	Ⅲ	—	横位口縁。縦位改線文。	7.5YR4/6	有	白色粒子、黒色粒子
705	88	88	Ⅲ	AC-21	横杖工具による縦位改線文。	10YR4/3	多	白色粒子多、黒色粒子
706	88	88	Ⅲ	W-21	外面に縦位改線文。内面に膠痕。	7.5YR5/4	有	白色粒子、黒色粒子
707	88	88	Ⅲ	R-17	段部より上位に縦位改線文。	5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子、白色粉片
708	88	88	Ⅲ	—	横位口縁。改線文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子、白色粉片
709	88	88	Ⅲ	T-18	改線文。	7.5YR5/8	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
710	89	89	Ⅲ	S-19/6b	外面に縦位改線文を地文。横位に半縦竹管状の工具による改線文。内面に膠痕。	10YR4/3	有	白色粒子、白色粉片
711	89	89	Ⅲ	X-20	口唇部に具取線線文。縦位改線文を地文。横位に半縦竹管状の工具による改線文。	7.5YR2/1	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色粉片
712	89	89	Ⅲ	W-20	縦位改線文を地文。半縦竹管状の工具による改線文。横位にナデが附し。	7.5YR4/6	有	白色粒子
713	89	89	Ⅲ	W-21	縦位改線文を地文。斜位の改線文。	5YR4/3	多	白色粒子、白色粉片
714	89	89	Ⅲ	W-21	縦位改線文を地文。斜位に半縦竹管状の工具による改線文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子、白色粉片
715	89	89	Ⅲ	Y-21	縦位改線文を地文。斜位に半縦竹管状の工具による改線文。	7.5YR2/3	有	白色粒子多、黒色粒子
716	89	89	Ⅲ	Q-17	横位口縁。縦位改線文を地文。半縦竹管状の工具による改線文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子、白色粉片
717	89	89	Ⅲ	W-21	縦位改線文を地文。斜位に半縦竹管状の工具による改線文。	10YR4/3	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
718	89	89	Ⅲ	T-19	縦位改線文。半縦竹管状の工具による横位・斜位に改線文。	7.5YR4/3	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
719	89	89	Ⅲ	W-20/6b	横位口縁。縦位改線文を地文。横位・斜位に半縦竹管状の工具による改線文。穿孔有。	10YR3/1	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
720	89	89	Ⅲ	W-21	縦位改線文を地文。斜位に半縦竹管状の工具による改線文。ナデ。穿孔有。	5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子
721	89	89	Ⅲ	W-21	横位口縁。縦位改線文を地文。斜位に半縦竹管状の工具による改線文。	7.5YR4/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
722	89	89	Ⅲ	AI-29	半縦竹管状の工具による格子目状の改線文。	7.5YR4/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
723	89	89	Ⅲ	K-15	縦位改線文を地文。斜位に改線文。下端に微隆起線文。	7.5YR2/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
724	89	89	Ⅲ	S-19	縦位改線文。縦位改線文を地文。斜位に半縦竹管状の工具による改線文。	7.5YR5/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
725	89	89	Ⅲ	W-21	縦位改線文を地文。斜位に半縦竹管状の工具による改線文。段を持つ。	7.5YR4/3	無	白色粒子、黒色粒子
726	89	89	Ⅲ	W-21	縦位改線文を地文。斜位に半縦竹管状の工具による改線文。段を持つ。	7.5YR4/3	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
727	89	89	Ⅲ	—	縦位改線文を地文。斜位に半縦竹管状の工具による改線文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色粉片
728	89	89	Ⅲ	V-9	縦位改線文を地文。半縦竹管状の工具による斜位に交差する改線文。	7.5YR5/4	有	白色粒子多、黒色粒子多
729	89	89	Ⅲ	W-21/6b	縦位改線文を地文。内面により横位の改線文。	7.5YR4/3	有	白色粒子多、白色粉片
730	89	89	Ⅲ	Y-22	縦位改線文を地文。角部状の平坦な横杖工具による横位の改線文。段状を呈する。	10YR5/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
731	90	90	Ⅲ	V-20	外面の口縁部に具取線線による刺突文。横位・斜位の微隆起線内面に条痕文。	7.5YR2/1	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
732	90	90	Ⅲ	W-20	微隆起線文。	5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色粉片
733	90	90	Ⅲ	X-22	微隆起線文。	5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
734	90	90	Ⅲ	AD-23	わずかに微隆起線文。	5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色粉片
735	90	90	Ⅲ	—	口唇部に附み、縦位の改線文。	5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子多
736	90	90	Ⅲ	M-5	口唇部に附み、斜位の改線文。	7.5YR5/6	多	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
737	90	90	Ⅲ	V-12	口唇部に附み、縦位・斜位の改線文。	5YR3/4	多	白色粒子、黒色粒子、白色粉片
738	90	90	Ⅲ	S-16	口唇部に附み、縦位・斜位の改線文。	7.5YR4/8	多	白色粒子、黒色粒子、白色粉片

第3章 縄文時代の遺構と遺物

探洞番号	棟状	図取番号	分類	グリップ	文様調整等	色調 (Hue)	織績	胎土
729		90	Ⅲ	P-16	口唇部に張り、縦位・斜位の沈線文。	2. 5YR4/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色碎片
730		90	Ⅲ	P-17	口唇部に張り、斜位の沈線文。穿孔有。	7. 5YR4/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色碎片多
741		90	Ⅲ	R-16	口唇部に張り、斜位の沈線文。	7. 5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色碎片多
742		90	Ⅲ	P-17	口唇部に張り、縦位・斜位の沈線文。	10YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子、白色碎片多
743		90	Ⅲ	L-15	口唇部に張り、縦位・斜位の沈線文。	7. 5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色碎片多
744		90	Ⅲ	V-9	口唇部に張り、斜位の沈線文。	7. 5YR5/8	有	白色粒子、白色碎片
745		90	Ⅲ	R-15	口唇部に張り、斜位の沈線文。	7. 5YR5/8	有	白色粒子、黒色粒子、白色碎片
746		90	Ⅲ	V-9(3)	口唇部に張り、斜位の沈線文。	10YR5/6	多	白色粒子、黒色粒子、白色碎片多
747		90	Ⅲ	Q-10	口唇部に張り、縦位・斜位の沈線文。	10YR5/8	有	白色粒子、黒色粒子、白色碎片多
748		90	Ⅲ	AA-16	口唇部に張り、縦位・縦位・斜位の沈線文。	7. 5YR5/6	多	白色粒子、黒色粒子、白色碎片多
750	ab	91	Ⅲ	Q-16	口唇部に張り、縦位・斜位・横位の区画的な沈線文。	7. 5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子、白色碎片
750	ab	91	Ⅲ	Q-17	口唇部に張り、縦位・斜位の区画的な沈線文。	7. 5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色碎片
751	ab	91	Ⅲ	N-9(地)	外反する波状口縁。口唇部に棟状工具による張り、縦位・斜位・横位の区画的な沈線文。	7. 5YR5/6	多	白色粒子、黒色粒子、白色碎片
752	ab	91	Ⅲ	R-16(地)	波状口縁。口唇部に張り、縦位・斜位の沈線文。	7. 5YR6/8	有	白色粒子、黒色粒子、白色碎片
753		92	Ⅲ	AI-30	口唇部を外反する。口唇部に張り、胸部中に縦位・縦位の2本の沈線文で区画。区画的な斜位の沈線文で充満。	5YR5/6	有	白色粒子、白色碎片
754		91	Ⅲ	AI-31	波状口縁。口唇部に棟状工具による張り、縦位・斜位の沈線文。	5YR4/6	多	白色粒子多、黒色粒子多、白色碎片
755		91	Ⅲ	Q-17(地)	波状口縁。口唇部に張り、斜位の沈線文で隙間をなす。	7. 5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色碎片多
756		91	Ⅲ	N-6	縦位・斜位の沈線文。	7. 5YR5/6	多	白色粒子、黒色粒子、白色碎片
757		91	Ⅲ	L-2	縦位・斜位の沈線文。	7. 5YR6/8	有	白色粒子、黒色粒子、白色碎片多
758		91	Ⅲ	AE-25	縦位・斜位の沈線文。斜位に半縦管による押引文。	7. 5YR5/4	有	白色粒子、白色碎片
759		91	Ⅲ	N-4	斜位の沈線文。	5YR5/8	有	白色粒子、白色碎片
760		92	Ⅲ	O-16	斜位に沈線文を施す幾何学的な模様。	5YR6/8	有	白色粒子多、黒色粒子、白色碎片、赤色碎片
761		93	Ⅲ	R-17	口縁より縦位に沈線文。段部端はナデにより微隆起縁文状となる。	5YR5/8	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色碎片多
762		93	Ⅲ	—	口縁より縦位に沈線文。段部端はナデにより微隆起縁文状となる。	5YR4/6	多	黒色粒子、白色碎片多
763		93	Ⅲ	T-19	口唇部に張り、口縁より縦位・斜位の沈線文。	7. 5YR6/6	有	黒色粒子、白色碎片
764		93	Ⅲ	—	口唇部に張り、口縁より斜位の沈線文。	5YR4/6	有	黒色粒子多、白色碎片多
765		93	Ⅲ	Q-16	口唇部に張り、口縁より東方側の沈線文。	7. 5YR6/6	有	黒色粒子、白色碎片
766		93	Ⅲ	Q-17	口唇部に半縦管状の工具による張り、口縁より縦位・斜位の沈線文。	7. 5YR4/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色碎片
767	ab	93	Ⅲ	O-5(地)	口唇部に棟状工具による張り、口縁より斜位の沈線文。段有り。	7. 5YR4/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色碎片多
768		93	Ⅲ	P-9(地)	波状口縁。半縦管状の工具による縦位・斜位の沈線文。文様体の下を指面でつまみ出して隆起縁文を設けたものか。	10YR6/6	多	黒色粒子、白色碎片多
769		93	Ⅲ	U-11	斜位の二本の沈線文の間に斜位の沈線文を充満。	7. 5YR5/8	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色碎片多
770		93	Ⅲ	AI-29	段部より上位に斜位の沈線文。	5YR4/6	有	白色粒子、黒色粒子
771		93	Ⅲ	N-4	段部より上位に斜位・縦位の沈線文の区画を設け、横位の沈線文で充満。	5YR5/6	多	白色粒子、黒色粒子多、白色碎片
772		93	Ⅲ	P-16	段部より上位に斜位の沈線文。	7. 5YR6/8	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色碎片多
773		93	Ⅲ	Q-16	段部より上位に斜位の沈線文。	7. 5YR5/8	有	白色粒子多、黒色粒子、白色碎片
774		93	Ⅲ	V-19	段部より上位に斜位・縦位の沈線文。	7. 5YR5/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色碎片
775	ab	94	Ⅲ	M-8	波状口縁。口唇部に張り、太い沈線文の区画内を斜位に半縦管状の工具による細かい沈線文を充満。	7. 5YR3/1	多	白色粒子多、黒色粒子、白色碎片多
776		94	Ⅲ	—	半縦管状の工具と先端の細かい工具による斜位の沈線文。	10YR4/2	多	白色粒子多、黒色粒子、白色碎片
777		94	Ⅲ	N-8	口唇部に張り、棟状の工具による斜位の沈線文と太く浅い沈線文。	7. 5YR3/1	多	白色粒子、黒色粒子、白色碎片多
778	ab	94	Ⅲ	N-6	波状口縁。棟状工具により横位の太い沈線文で区画し、斜位・縦位の沈線文を充満。	7. 5YR5/4	多	白色粒子、白色碎片多
779		94	Ⅲ	N-5	斜位の沈線文を施し、太い沈線文で区画。	7. 5YR4/2	有	白色粒子、白色碎片
780		94	Ⅲ	N-6	太い沈線文で区画し、細い沈線文を充満。	7. 5YR3/4	多	白色粒子、白色碎片多
781		94	Ⅲ	N-4	太い沈線文で区画し、細い沈線文を充満。	7. 5YR5/4	多	白色粒子、白色碎片
782		94	Ⅲ	AE-21	太い沈線文で区画し、細い沈線文を充満。	7. 5YR4/4	多	白色粒子、白色碎片多
783		94	Ⅲ	K-2	太い沈線文で区画し、細い沈線文を充満。	5YR4/8	多	白色粒子、黒色粒子、白色碎片
784		94	Ⅲ	N-6	縦位の太い沈線文で区画し、斜位・縦位の沈線文を充満。	7. 5YR5/4	多	白色粒子、白色碎片多
785		94	Ⅲ	N-6	斜位に沈線文を施し、強く指で太い沈線文。	7. 5YR6/6	多	白色粒子多、白色碎片多
786		94	Ⅲ	M-8	縦位と曲線で区画し、斜位の沈線文と刺突文を施す。	7. 5YR5/4	多	白色粒子、白色碎片多
787		95	Ⅲ	O-10	斜位の沈線文を施し、縦位と曲線の沈線文で区画。	5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色碎片多
788		95	Ⅲ	Q-9(地)	波状口縁。口唇部に棟状工具による張り、口縁部に横位の太い沈線文で区画し、斜位の細かい沈線文を充満。	7. 5YR6/3	有	白色粒子、白色碎片
789		95	Ⅲ	N-5	段部より上位に縦位・斜位の沈線文を施し、斜位の太い沈線文を施す。	7. 5YR6/1	多	白色粒子、黒色粒子、白色碎片多
790		95	Ⅲ	N-5	段部より上位に縦位の沈線文。	7. 5YR6/4	有	白色粒子、白色碎片
791		95	Ⅲ	M-7	縦位・斜位に2種類の沈線文。	7. 5YR4/4	有	白色粒子、白色碎片
792		95	Ⅲ	N-5	棟状工具による太い沈線文で区画し、斜位に細い沈線文を充満。	5YR3/2	有	白色粒子、白色碎片
793		95	Ⅲ	P-8	波状口縁。口唇部に張り、横位の沈線文で区画し、縦位の押引文を施す。	10YR4/1	有	白色粒子、白色碎片多
794		95	Ⅲ	N-6	縦位・斜位の太い沈線文で区画し、横位の押引文を施す。	7. 5YR4/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色碎片多
795		95	Ⅲ	N-8	段部より上位に縦位・横位の太い沈線文で区画し、横位の押引文を施す。	7. 5YR5/4	多	白色粒子、白色碎片
796		95	Ⅲ	L-2	波状口縁。口唇部に張り、縦位と斜位の沈線文、刺突文。	7. 5YR6/8	有	白色粒子、黒色粒子、白色碎片多
797		95	Ⅲ	—	波状口縁。口唇部に張り、外面に縦位の沈線文と刺突文。内面の口縁部に斜位の刺突文。	7. 5YR6/3	有	白色粒子、白色碎片
798		95	Ⅲ	N-5(地)	波状口縁。口唇部に張り、口唇部直下に刺突文。太の沈線文で曲線を描き曲線の間に細い沈線文で充満。	10YR6/4	多	白色粒子多、黒色粒子、白色碎片多
799		95	Ⅲ	O-5(地)	除帯より上位に沈線文、刺突文。	7. 5YR5/3	有	白色粒子、白色碎片
800		95	Ⅲ	O-5	除帯より上位に縦位・縦位の沈線文。除帯上位と沈線上位に刺突文。	7. 5YR6/6	多	白色粒子、白色碎片
801	ab	96	Ⅲ	N-5	段部の上位に斜位の沈線文。下位には竹管状の工具による押引文と刺突文。	7. 5YR5/6	多	白色粒子、白色碎片

押出番号	種別	図取番号	分類	グループ	文様調整等	色調 (Hue)	繊維	粘土
802	ab	96	Ⅱ 3	N-5	縦位に條帯、段部上位には半籠竹管状の工具より縦位・斜位を先施、横位の條帯起線文。 押引文、太い沈線文で区画し、刺突文。	7.5YR5/4	多	白色粒子、黒色粒子、白色薄片多
803	ab	96	Ⅱ 3	N-5他	段部より上位に縦位に條帯、太い沈線文で区画し、半籠竹管状の工具により沈線文、押引文、刺突文を先施。	7.5YR5/6	多	白色粒子、白色薄片多
804		96	Ⅱ 3	O-6	段部の上位に半籠竹管状の工具による刺突文、押引文を施し、下位に刺突文。	7.5YR3/1	多	白色粒子、黒色粒子
805	ab	96	Ⅱ 3	W-21	口部部に斜み。口部部直下より縦位に條帯起線文で区画し、刺突文を先施、横位の條帯起線文。	7.5YR4/4	多	白色粒子多、白色薄片
806	96	Ⅱ 3	N-5	—	口部部に斜み。半籠竹管状の工具による沈線文と太く浅い沈線文、破片端部に條帯起線文を施す。	7.5YR4/4	多	白色粒子、白色薄片
807	96	Ⅱ 3	AG-19	—	口部部に斜み。横位の條帯起線文、縦位・横位の沈線文。	5YR4/6	多	白色粒子、白色薄片
808	96	Ⅱ 3	N-6	—	横位の條帯起線文、斜位の太い沈線文、矢羽状の沈線文。	7.5YR3/3	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
809	96	Ⅱ 3	Z-23	—	段部に横位の條帯起線文、縦位・横位の條帯起線文、斜位の沈線文。	7.5YR4/2	多	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
810	96	Ⅱ 3	AI-30	—	刺突文が施された沈線文、横した棒子状の條帯起線文。	5YR4/6	多	白色粒子、黒色粒子、白色薄片多
811	96	Ⅱ 3	O-7	—	縦位に斜みのある條帯起線文、沈線文・押引文・刺突文を施す。	5YR4/6	多	白色粒子、白色薄片
812	96	Ⅱ 3	N-5	—	口部部に半籠竹管状の工具による沈線文、縦位・横位の沈線文。	2.5YR4/8	有	白色粒子多、黒色粒子
813	96	Ⅱ 3	—	—	口部部に斜み。棒子状か横位・斜位に沈線文を施す。	5YR4/6	有	白色粒子、黒色粒子多、白色薄片
814	96	Ⅱ 3	V-8	—	半籠竹管状の工具による沈線文で区画、縦位・横位の沈線文を先施。	7.5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子、白色薄片
815	96	Ⅱ 3	X-21	—	斜位の沈線文。	5YR4/6	有	白色粒子多、黒色粒子、輝石
816	96	Ⅱ 3	Q-17	—	屈曲した沈線文で区画、斜位の沈線文を先施。	5YR5/8	有	白色粒子多、黒色粒子、白色薄片
817		97	Ⅱ 4	AI-26他	横位口縁。口部部が斜み。段が2段見られる。外面に條帯起線文による区画、半籠竹管状の工具による押引沈線文で先施、区画の交点を円筒竹管の工具による刺突文を施す。内面に条線文。 横位口縁。口部部に指張により円筒竹管状の工具が2段見られる。外面に條帯起線文による区画、円筒竹管状の工具による刺突文・押引文で先施、内面に条線文。	5YR5/6	多	黒色粒子、白色薄片多
818	ab	97	Ⅱ 4	AD-22	横位口縁。口部部に指張により円筒竹管状の工具による刺突文・押引文で先施、内面に条線文。	7.5YR6/4	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
819	ab	97	Ⅱ 4	AB-21	横位口縁。段が1段見られる。半籠竹管状の工具による押引文、円筒竹管状の工具による刺突文。	5YR6/6	多	白色粒子、黒色粒子、白色薄片
820		97	Ⅱ 4	—	口部部に斜み。外面に條帯起線文、半籠竹管状の工具による押引文、円筒竹管状の工具による刺突文。内面に条線文。	7.5YR5/3	有	白色粒子、黒色粒子、白色薄片多
821		97	Ⅱ 4	AC-25	外面に沈線文と押引文。内面に条線文。	5YR3/4	有	白色粒子、黒色粒子、雲母多、白色薄片
822		97	Ⅱ 5	AI-26他	横位口縁。口部部内面側部・外面側部部に斜み。段が2段見られる。外面の口縁部から斜部に刺突列による文様を施す。外面内面に條帯。	7.5YR4/4	多	白色粒子、白色薄片
823		98	Ⅱ 5	AI-29	段が1段見られる。外面に横位の押引文・沈線文で文様を施す。内面に条線文。	10YR6/4	多	白色粒子、白色薄片多
824		98	Ⅱ 5	AI-28	横位口縁。口部部外面部に斜み。外面に横位の沈線文・押引文、内面に条線文。	5YR5/4	多	白色粒子、白色薄片多
825	abc	98	Ⅱ 5	V-18	口部部内面側にナゲによる縁起線文上位に斜み。段が2段見られる。段部には具取線による斜み、条線文・横筋(縄文模様の縄文)。	10YR3/2	多	白色粒子、白色薄片多
826	ab	98	Ⅱ 5	AI-29	外面は具取線(縄文)を先施、横位の沈線文。段が1段見られる。内面にナゲ・条線文・筋状圧痕が残る。	10YR6/4	多	白色粒子、白色薄片
827		98	Ⅱ 5	Q-7	段が1段見られる。沈線文・具取線(縄文)。段部に斜み。	10YR6/4	有	白色粒子、白色薄片
828		98	Ⅱ 6	AH-30他	横位口縁。注口状突起。段が1段見られる。外面と注口状突起外面側に刺突列、注口状突起口部部に刺突列、外面内面に条線文。	5YR5/6	多	白色粒子多、黒色粒子、雲母、白色薄片
829		98	Ⅱ 6	AI-29	横位口縁。注口状突起。刺突列、注口状突起内面側に斜み。外面内面に條帯。	5YR5/6	多	白色粒子、白色薄片
830		98	Ⅱ 6	AI-26他	横位口縁。口部部に斜み。段が2段見られる。刺突列。	5YR4/6	多	白色粒子多、白色薄片
831		99	Ⅱ 7	AIH-30他	横位口縁。注口状突起。口部部と注口状突起内面側に刺突列、段が1段見られる。外面に条線文・筋状圧痕が残る。外面に條帯貼付け、條帯上に棒状工具による単一方向の押圧文。外面に条線文。	10YR4/4	多	白色粒子、雲母多、白色薄片
832		99	Ⅱ 8	AD-24	横位口縁。口部部に突起あり。横位に條帯貼り付け。	7.5YR6/6	多	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色薄片多
833		99	Ⅱ 9	I-13	横位口縁。外面に条線文、具取線による刺突列。	5YR4/2	有	白色粒子多、黒色粒子、白色薄片
834		99	Ⅱ 9	ZW-1他	口部部に斜み。横位に3条の刺突列、外面内面に条線文。	2.5YR4/6	多	白色粒子多、白色薄片
835		99	Ⅱ 10	AD-24	口部部。口部部に指張による交互押圧文。口縁部直下の横位の條帯上に指張による単方向の押圧文。	7.5YR4/4	多	白色粒子
836		99	Ⅱ 10	AC-25	横位口縁。外面に條帯。横位に條帯貼り付け。條帯上に指張による交互押圧文。内面に条線文。	5YR5/6	多	白色粒子、白色薄片
837	ab	99	Ⅱ 10	AD-24他	横位口縁。口部部に指張による単一方向の押圧文。外面に條帯貼付け。條帯上に棒状工具による単一方向の押圧文・交互押圧文。外面内面に條帯。	10YR5/4	多	白色粒子多、黒色粒子、白色薄片多
838	ab	99	Ⅱ 10	AD-24他	口部部に指張による単一方向の押圧文。外面に横位の條帯貼付け。條帯上に指張による単一方向の押圧文。外面内面に條帯。	7.5YR6/4	多	白色粒子多、白色薄片
839		99	Ⅱ 10	AC-25	口部部に指張による単一方向の押圧文。外面内面に條帯。	10YR7/4	多	白色粒子、白色薄片
840		99	Ⅱ 10	AC-25	横位口縁。口部部に指張による交互押圧文。外面内面に條帯。	10YR5/3	多	白色粒子、白色薄片多
841		99	Ⅱ 10	AD-24	口部部に指張による交互押圧文。外面内面に條帯。	5YR4/3	多	白色粒子多、白色薄片多
842		99	Ⅱ 10	AD-24	横位口縁。口部部に指張による交互押圧文。外面内面に條帯貼付け。條帯上に指張による単一方向の押圧文・交互押圧文。外面内面に條帯。	10YR6/4	多	白色粒子多、白色薄片
843		99	Ⅱ 10	AD-24他	横位口縁。外面にナゲ。	10YR6/4	多	白色粒子多、白色薄片多
844	100	Ⅱ 10	Y-20他	—	横位口縁。口部部内面に具取線による斜み、横位に條帯貼り付け。條帯上に棒状工具による単一方向の押圧文・交互押圧文。外面内面に條帯。	10YR6/4	多	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色薄片多
845		100	Ⅱ 10	—	横位口縁。外面内面にナゲ。	7.5YR4/1	多	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色薄片
846	100	Ⅱ 11	AJ-28	—	横位口縁。口部部に具取線による斜み。棒子目状に条線文を先施。外面内面に條帯。	5YR4/6	有	白色粒子、白色薄片
847	100	Ⅱ 11	AB-25	—	横位口縁の突起部から、條帯を貼り付け、具取線による斜み。	5YR4/6	有	白色粒子、石英
848	100	Ⅱ 11	AI-28	—	具取線(縄文)の刺突文。	7.5YR4/4	有	白色粒子、白色薄片
849	ab	100	Ⅱ 11	W-12	口部部に斜み。外面内面に具取線(縄文)を用いて條帯起線文。	5YR4/8	多	白色粒子、赤色粒子、石英、白色薄片
850		100	Ⅱ 12	AI-28	外面に横位に2本の條帯を貼り付け、條帯上に斜みによる斜み、条線文。	7.5YR6/4	有	白色粒子、白色薄片多

第3章 縄文時代の遺構と遺物

押出番号	種別	図版番号	分類	グリップ	文様調整等	色調 (Hue)	繊維	粘土	
851	100	11	AD-16		外面に貝殻層の連続した刺突文、内面に彫線。	5YR4.4	粗	白色粒子多、黒色粒子、白色削片多	
852	100	11	AI-27		隆帯を貼付け、隆帯より刺突文。	2.5YR4.6	粗	白色粒子、黒色粒子	
853	100	11	AB-22		波状口縁の隆帯部が、順位に隆帯を貼付け。	2.5YR4.6	粗	白色粒子、黒色粒子、白色削片	
854	100	11	W-20		半載竹管状の工具による横位の沈線文。	5YR3.6	粗	白色粒子、黒色粒子、白色削片	
855	ab	100	11	AE-21		先端が両面状の工具による押印文。刺突文。	2.5YR3.8	粗	白色粒子、黒色粒子、白色削片
856	100	11	AI-27		端のある2本の隆帯を貼付け、波状半手状の渦巻き文様を施す。	2.5YR4.8	粗	白色粒子、黒色粒子、白色削片	
857	100	11	P-9		口唇部に横文、段部を挟んでR.Lの横文。	7.5YR4.6	粗	白色粒子多、黒色粒子多、雲母多	
858	100	11	P-17		口唇部に横文、段部を挟んでR.Lの横文、穿孔有。	7.5YR4.3	粗	白色粒子多、黒色粒子多、雲母多	
859	100	11	AD-23		口唇部に横文、段部の横文。	7.5YR4.4	粗	白色粒子多、黒色粒子多、雲母多、白色削片	
860	100	11	X-22		口縁部付近を膨らませる、R.Lの横文。	7.5YR4.4	粗	白色粒子多、黒色粒子多、雲母多	
861	100	11	P-16		R.Lの横文。	7.5YR4.6	粗	白色粒子多、黒色粒子多、雲母多	
862	100	11	P-17		R.Lの横文。	7.5YR4.3	粗	白色粒子多、黒色粒子多、雲母多	
863	101	11	Z-21		口唇部に横文、外面に押印文。	7.5YR4.4	粗	白色粒子、黒色粒子、雲母多、白色削片	
864	101	11	AI-29		口唇部に横文、半載竹管状の工具による横位の沈線文。	7.5YR3.6	粗	白色粒子、黒色粒子、白色削片	
865	101	11	AD-20		口唇部に横文、斜位の沈線文。	7.5YR3.4	粗	白色粒子、黒色粒子、白色削片	
866	101	11	AD-20		半載竹管状の工具による横行・交差する沈線文。	7.5YR3.4	粗	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片	
867	101	11	X-21		波状口縁、半載竹管状の工具による横位の沈線文。	5YR3.6	粗	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片	
868	101	11	AA-15		半載竹管状の工具による横位の沈線文。	7.5YR3.6	粗	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片	
869	ab	101	AH-16		外反する口縁、外面は半載竹管状・先刺状の工具による沈線文、内面に半載竹管状の工具による横位の沈線文、穿孔有。	7.5YR3.4	粗	白色粒子多、黒色粒子、白色削片	
870	101	11	AE-25		外面内面に沈線文。	7.5YR3.1	粗	白色粒子多、白色削片	
871	101	11	Y-22		横位の刺突文、斜位の沈線文。	5YR3.6	粗	白色粒子多、黒色粒子、白色削片	
872	101	11	AH-26		口縁部付近による沈線文。	7.5YR4.4	粗	白色粒子多、黒色粒子、雲母、白色削片	
873	101	11	V-18		横位に半載竹管状の工具による沈線文。	5YR3.4	粗	白色粒子多、黒色粒子、白色削片	
874	101	11	AD-15		横位に半載竹管状の工具による沈線文。	5YR3.6	粗	白色粒子多、黒色粒子、白色削片	
875	101	11	—		横位に半載竹管状の工具による沈線文、穿孔有。	7.5YR4.4	粗	白色粒子、黒色粒子、白色削片	
876	101	11	—		波状口縁、口唇部に横文、外面に横位の隆帯に横文、内面に彫線。	5YR4.4	粗	白色粒子、白色削片	
877	101	11	AA-14		横位の隆帯を貼付け、順位に波状の沈線文、斜位の沈線文。	7.5YR3.4	粗	白色粒子多、白色削片	
878	101	11	AD-21		口唇部に沿った横位の爪形の刺突文。	7.5YR4.4	粗	白色粒子、白色削片	
879	101	11	AC-22		外面に斜位の沈線文、内面の口唇部直下に爪形の刺突文。	7.5YR3.4	粗	白色粒子多、黒色粒子、白色削片	
880	101	11	X-22		外面内面に横位の刺突文。	5YR3.6	粗	白色粒子多、黒色粒子、白色削片	
881	101	11	X-11		外面に横位・斜位の刺突文、内面に横位の刺突文。	5Y R 4.6	粗	白色粒子、黒色粒子、白色削片	
882	101	11	J-2		外面に横位・斜位の刺突文、内面に横位の刺突文。	7.5YR4.6	粗	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片	
883	101	11	AI-26		外面に横位の刺突文、内面に横位の刺突文。	7.5YR4.6	粗	白色粒子、黒色粒子、白色削片	
884	101	11	AD-22		外面に斜位の刺突文、内面に刺突文。	7.5YR3.6	粗	白色粒子多、白色削片	
885	101	11	X-21		横位の刺突文。	7.5YR3.8	粗	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片	
886	101	11	P-12		外面に斜位の刺突文を施し、ナデ磨し、内面は横位の刺突文。	5YR3.8	粗	白色粒子、黒色粒子、白色削片	
887	101	11	Q-3		丸底、縦位のナデ。	5YR3.6	粗	白色粒子、黒色粒子、白色削片	
888	101	11	AG-19		丸底、外面に縦位のナデを施す。	7.5YR7.6	粗	白色粒子、白色削片	
889	101	11	Y-21		丸底、内面に指痕によるナデ。	5YR3.6	粗	白色粒子、白色削片	
890	101	11	AJ-28		外面内面に共に斜位の刺突文、底部足込みは指痕によるナデ。	5YR3.8	粗	黒色粒子、白色削片	
891	101	11	P-17		丸底。	7.5YR6.6	粗	白色粒子、黒色粒子、白色削片	
892	101	11	V-18		平底、外面に刺突文。	7.5YR7.4	粗	白色粒子、白色削片	
893	101	11	X-22		上げ底、底部環線に粘土練で高台状に仕上げる、底部内面に指痕。	5YR3.6	粗	白色粒子、白色削片	
894	102	IV	1	AE-25	口唇部に横文、外面内面ナデ調整をし半載竹管状工具で斜位に細線文、内面に指痕。	10YR3.3	粗	白色粒子多、雲母、白色削片	
895	102	IV	1	AC-26	口唇部に横文、外面に半載竹管状工具による格子目状の細線文、内面に指痕。	10YR3.6	粗	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色削片	
896	102	IV	1	AB-22	口唇部に横文、外面に半載竹管状工具による細線文、横位の刺突文。	7.5YR3.6	粗	白色粒子多、雲母、白色削片	
897	102	IV	1	AH-27	口唇部に指痕による押印文、外面に半載竹管による細線文、外面内面にナデ調整。	10YR4.2	粗	白色粒子多、雲母、白色削片	
898	102	IV	1	AH-26	口唇部に横文、外面内面に指痕。	10YR3.2	粗	白色粒子多、雲母、白色削片	
899	102	IV	1	AI-29	口縁部に横位の刺突文。	10YR3.8	粗	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色削片	
900	102	IV	1	—	口唇部に刺突文、外面内面にナデ。	10YR4.0	粗	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色削片	
901	102	IV	1	AI-27	外面内面にナデ調整、外面は半載竹管状の工具による格子目状の細線文。	10YR3.6	粗	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色削片	
902	102	IV	1	AH-27	外面に半載竹管状工具による斜位の細線文、内面ナデ。	10YR3.2	粗	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色削片	
903	102	IV	1	AH-27	外面にナデ、半載竹管状の工具による斜位の細線文、内面ナデ・指痕。	10YR4.2	粗	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色削片	
904	102	IV	1	AE-25	外面に指痕による横文、半載竹管状の工具による細線文、内面ナデ。	10YR3.2	粗	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色削片	
905	102	IV	1	AD-24	外面に半載竹管状の工具による刺突文、外面内面にナデ・指痕。	10YR3.2	粗	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色削片	
906	102	IV	1	AH-27	外面に横位の隆帯を貼付け、刺突文、外面内面にナデ。	10YR3.2	粗	白色粒子、雲母、白色削片	
907	102	IV	1	—	外面に横位の刺突文、内面にナデ。	10YR3.3	粗	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色削片	
908	102	IV	2	AA-22	外面に横位の2段の爪形の刺突文、内面にナデ。	7.5YR3.6	粗	白色粒子多、黒色粒子、白色削片	
909	102	IV	2	AB-23	外面に横位の2段の爪形の刺突文、内面にナデ。	7.5YR3.4	粗	白色粒子多、黒色粒子、白色削片	
910	102	IV	2	Y-21	外面に横位の爪形の刺突文、内面にナデ。	7.5YR3.4	粗	白色粒子多、黒色粒子、白色削片	
911	102	IV	2	Z-21	外面に横位の異なる工具による3段の刺突文、内面にナデ。	5YR3.8	粗	白色粒子多、黒色粒子、白色削片	
912	102	IV	2	AA-22	横位の半載竹管状の工具による刺突文。	7.5YR3.8	粗	白色粒子多、黒色粒子、白色削片	
913	102	IV	2	AD-34	口唇部に横位の半載竹管状の工具による刺突文、内面に指痕。	7.5YR7.6	粗	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色削片	
914	102	IV	2	AA-22	口唇部に横文、外面に横位の異なる刺突文、内面ナデ。	7.5YR4.6	粗	白色粒子、黒色粒子、白色削片	
915	102	IV	2	—	外面に爪形の刺突文、内面ナデ。	7.5YR4.4	粗	白色粒子多、黒色粒子	
916	102	IV	2	AA-22	外面に半載竹管状の工具による刺突文、内面ナデ。	7.5YR4.4	粗	白色粒子多、黒色粒子	
917	102	IV	2	AA-22	外面に半載竹管状の工具による刺突文、内面ナデ。	7.5YR6.6	粗	白色粒子多、黒色粒子多、白色削片	
918	102	IV	2	—	外面に貝殻層による刺突文、内面にナデ。	7.5YR3.6	粗	白色粒子、黒色粒子、白色削片	
919	102	IV	2	Y-21	外面に刺突文を施す、内面にナデ。	7.5YR6.6	粗	白色粒子、黒色粒子、白色削片	

押出番号	種別	図版番号	分類	グリップ	文様調整等	色調 (Hue)	織績	胎土
200		102	IV-2	X-22	矢羽状の刺突文。	2.5YR5/4	非	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片
201		IV-2	—	—	斜位に刺突文を施す。	7.5YR5/6	非	白色粒子多、黒色粒子、白色岩片
202		IV-2	—	—	斜位に矢羽状の刺突文を施す。	7.5YR5/6	非	白色粒子、黒色粒子、白色岩片
203		IV-2	—	—	斜位に矢羽状の刺突文を施す。	7.5YR5/6	非	白色粒子多、黒色粒子多
204		100	IV-3	AA-22	押し返し口縁。口縁から上の織文を斜位に施す。	7.5YR7/4	多	白色粒子多、黒色粒子、雲母、白色岩片多
925		100	IV-3	AI-27	口唇部以上の織文。肥厚させた口唇部に斜位にLRの織文。2本の織り手帯を斜付織文の圧痕を施す。斜位にLRの織文を帯状に施す。斜位にナゾ。	7.5YR5/3	多	白色粒子多、黒色粒子、雲母、白色岩片多
926	ab	100	IV-4	AA-21ab	襷状口縁。口唇部に半載竹管状の工具による刺突文、突部を施す。口唇部と腹部にコンパス文を施す。地文を織文(RL懸りの織り手帯同軸)とし、格子目状の残織文・斜付け文を施す。斜位の平行沈線に刺突文。	7.5YR5/4	多	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色岩片多
927		104	IV-4	AC-20	襷状口縁。半載竹管状の工具により菱形に沈線文を施す。沈線文に連続した刺突文。斜付文あり。	10YR2/1	多	白色粒子多、黒色粒子、雲母、白色岩片
928		104	IV-4	—	残織文?横回転を地文。半載竹管状の工具により菱形に沈線文を施す。	7.5YR3/1	多	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色岩片
929	ab	104	IV-4	AC-23	残織文を横回転。2本の縁部斜付け。	10YR6/4	多	白色粒子、雲母、白色岩片
930	ab	104	IV-4	AH-27	襷部に変形。織文。底部は平面。	7.5YR6/6	非	白色粒子、黒色粒子、赤色粒子、赤色岩片
931		104	V-1	—	襷部状の工具による刺突文。斜位にRLの織文。	7.5YR5/6	非	白色粒子多、黒色粒子多、雲母多
932		104	V-2	AI-28	襷状口縁。口唇部に突起。10の筋文を地文。半載竹管状の工具による平行沈線文。竹管による円形刺突文。	7.5YR6/6	非	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片
933	ab	104	V-2	AI-29	半載竹管状の工具により木の葉文を施す。底部は平面。	7.5YR5/4	非	白色粒子多、黒色粒子、雲母多、白色岩片
934		104	V-2	—	浅鉢か。半載竹管状の工具により斜位に沈線文に刺突文。	10YR6/4	非	白色粒子多、黒色粒子多、雲母多、白色岩片
935	ab	104	V-3	AH-30	口唇部に4つの斜付けが残存。織文を地文。半載竹管状の工具により斜位に木型文を施す。平行沈線文。	5YR5/6	非	白色粒子多、黒色粒子、雲母多、白色岩片
936		104	V-3	AC-26ab	襷状口縁。口唇部に4つの斜付文が残存。外面は斜位にRLの織文を地文。横位・斜位に半載竹管状の工具により平行沈線文。内面はナゾ。	5YR5/6	非	白色粒子、黒色粒子、白色岩片多
937		104	V-3	AC-25	外面は斜位にRLの織文を地文。半載竹管状の工具により平行沈線文。内面はナゾ。	7.5YR5/4	非	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色岩片
938		104	V-3	AC-24	口唇部を凹状に仕上げた後、内面。地文は斜位にRLの織文。半載竹管状の工具による平行沈線文。	5YR4/4	非	白色粒子多、黒色粒子、雲母、白色岩片
939	ab	104	V-3	AD-25	斜位の残織文を地文。半載竹管状の工具による平行沈線文。	5YR4/6	非	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色岩片多
940		104	V-3	AI-26	半載竹管状の工具による斜位の平行沈線文に木型文を施す。へう状工具による斜位の改修文。	7.5YR5/6	非	白色粒子多、黒色粒子、雲母多、白色岩片
941		104	V-3	AH-26	浅鉢。外面は斜位のRL織文を地文。へう状の工具による沈線文。内面はナゾ。	5YR5/6	非	白色粒子多、黒色粒子、雲母多、白色岩片多
942		104	V-3	AH-30	外面は斜位のRL織文を地文。半載竹管状の工具により平行沈線文と木型文を施す。内面はナゾ。	5YR5/4	非	白色粒子多、黒色粒子、雲母、白色岩片
943		104	V-3	AH-30	半載竹管状の工具による格子目状の平行沈線文。	7.5YR6/4	非	白色粒子多、白色岩片多
944		104	V-3	AH-27	外面に斜位のRL織文を地文。半載竹管状の工具による平行沈線文に木型文を施す。	5YR5/6	非	白色粒子、白色岩片多
945		105	V-3	—	襷状口縁。斜位のRL織文を地文。半載竹管状の工具により平行沈線文。浮線文に斜み。	5YR5/6	非	白色粒子、黒色粒子多、白色岩片
946		105	V-3	AH-26	浅鉢。斜位のRL織文。浮線文。	5YR5/6	非	白色粒子多、黒色粒子、雲母、白色岩片
947	ab	105	V-3	AD-24	襷状口縁。口唇部に斜み。腹部に増状の把手。RL織文を地文。浮線文に斜み。	7.5YR4/6	非	白色粒子多、雲母多、白色岩片
948		105	V-3	AB-25ab	襷状口縁。腹部に変形した把手。口唇部に斜み。織文を地文。浮線文に斜み。	7.5YR4/6	非	白色粒子多、黒色粒子、白色岩片
949		105	V-3	AD-25	襷状口縁。襷状突起を斜付け。RLの織文を地文。浮線文に斜み。	7.5YR4/6	非	白色粒子多、雲母多、白色岩片
950		105	V-3	AD-24	斜位の浮線文に斜み。無斜位織文の織文。	7.5YR6/6	非	白色粒子、黒色粒子多、白色岩片
951		105	V-3	AC-24	浮線文と織文。	7.5YR6/6	非	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色岩片
952		105	V-3	AI-26	浮線文と織文。	7.5YR6/6	非	白色粒子多、黒色粒子多、雲母多、白色岩片
953		105	V-3	AC-26	斜位にLの織文。斜位の浮線文に斜み。	7.5YR4/6	非	白色粒子多、黒色粒子、白色岩片
954		105	V-3	AB-25ab	斜位にLの織文。浮線文に斜み。	7.5YR5/6	非	白色粒子多、黒色粒子、雲母多、白色岩片
955		105	V-3	AD-24	織文を施した浮線文。半載竹管状の工具による平行沈線文。	7.5YR5/6	非	白色粒子多、黒色粒子多、雲母多、白色岩片
956		105	V-3	AC-26	底部。棒状に浮線文。	7.5YR5/4	非	白色粒子、黒色粒子、白色岩片多
957	ab	105	V-3	—	帯帯と残織文。浅鉢か。	2.5YR5/6	非	白色粒子多、黒色粒子多、雲母多、白色岩片
958	ab	105	V-4	AI-29	半載竹管状の工具による押しこむを伴う平行線文。	5YR5/6	非	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色岩片
959		105	V-4	AJ-29	半載竹管状の工具による平行線文。内面はナゾ。	5YR5/6	非	白色粒子多、黒色粒子、白色岩片
960		105	V-4	AI-29	半載竹管状の工具により矢羽状の平行線文。縦長の斜付文。	5YR4/4	非	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色岩片
961	ab	105	V-4	AI-29ab	口唇部に半載竹管状の工具による押しこむ。矢羽状に平行沈線文。凹形斜付文。斜位に棒状の斜付文。	7.5YR6/6	非	白色粒子、黒色粒子多、白色岩片多
962	ab	105	V-4	C-1	外面に半載竹管状の工具による矢羽状の平行沈線文。凹形斜付文。棒状の斜付文。斜位の集合沈線文。内面に磨面。	5YR4/3	非	白色粒子、黒色粒子、白色岩片
963		105	V-4	AD-24	外面に半載竹管状の工具による矢羽状の沈線文。2個一對の円形斜付文。	7.5YR4/6	非	白色粒子多、黒色粒子、雲母多、白色岩片
964		105	V-4	AH-27	結節浮線文。2個一對の円形斜付文。	7.5YR5/4	非	白色粒子多、黒色粒子、雲母多、白色岩片
965		105	V-4	—	結節浮線文。2個一對の円形斜付文。	7.5YR4/3	非	白色粒子多、黒色粒子、雲母、白色岩片多
966		106	V-4	—	半載竹管状の工具による斜位・矢羽状の集合沈線文。	10YR5/6	非	白色粒子多、黒色粒子、雲母、白色岩片
967		106	V-4	C-1	半載竹管状の工具による斜位の集合沈線文。	7.5YR5/6	非	白色粒子、黒色粒子、白色岩片多
968		106	V-4	—	半載竹管状の工具による押しこむで木の葉状に織文。赤筋。	10YR5/3	非	白色粒子多、黒色粒子、雲母、白色岩片
969		106	V-6	X-22	RLの織の周囲に別の織(?)を巻き結んで施文。	10YR7/4	非	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片
970		106	V-6	X-22	別の織の周囲に別の織(?)を巻き結んで施文。	10YR7/4	非	白色粒子多、雲母、白色岩片
971	ab	106	V-6	—	斜位にRLの織文を施文。渦みのある浮線文。半載竹管状の工具による改修文。	10YR7/4	非	白色粒子多、黒色粒子、白色岩片
972		106	V-6	—	斜位にRLの織文を施文。斜位の平行線文による渦みのある浮線文。	10YR7/4	非	白色粒子、赤色粒子少

第3章 縄文時代の遺構と遺物

採出 番号	種別	図版 番号	分類 群 類	グリップ	文様調整等	色調 (Hue)	繊維	胎土
973	106	V 6	AH-26		内周の口縁部に縦位の筋のある浮線文。縄文を地文とし横位の粗い浮線文を施す。	5YR5/8	無	白色粒子、黒色粒子、雲母、燧石
974	107	V 5	—		外面の口縁部に半横竹管状の工具による押引きによる結節状横文。平直横文で調整した縦文を施す。内面にナデ。	5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、雲母多、白色粒子多
975	ab	107	V 5	AI-27他	外面は縦位・斜位の集合状横文。横位の胎付文。内面にナデ。	7.5YR4/1	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多
976	ab	107	V 5	AI-27他	外面に半横竹管状の工具により縦位の集合状横文で区画し、斜位の集合状横文で充填。底部外側に平直横文。内面にナデ。	7.5YR6/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色岩片多
977	abc	107	V 5	—	口縁部に粗み。口縁部に三角形状の印文。胴部には三角形状の印周文と多方向に半横竹管状の工具による結節状横文を施す。内面にナデ。	7.5YR6/2	有	白色粒子多、黒色粒子、雲母、白色岩片
978	107	V 5	AI-27他		口縁部直下に三角形状の印周文と浮線文。実帯を巡らして、半横竹管状の工具による結節状横文を施す。	7.5YR5/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多
979	107	VI	AA-22		波状口縁。波頭部近くに結節状横文。LR等の縄文。	7.5YR6/3	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多
980	ab	107	VI	AI-28	縄文。	5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片
981	107	VI	—		LRの縄文。	10YR4/1	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片
982	107	VI	AA-22		RLの縄文。	7.5YR6/6	有	白色粒子多、黒色粒子、白色岩片多
983	107	VI	AA-22		LRの縄文。	7.5YR5/4	有	白色粒子多、黒色粒子、白色岩片
984	107	VI	AI-30		底面、平底、LRの縄文。	7.5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色岩片
985	107	VI	AA-23		RLの縄文を斜回転転。	7.5YR5/3	多	白色粒子、白色岩片
986	107	VI	AA-21		RL縄文。	7.5YR5/6	多	白色粒子、黒色粒子、白色岩片
987	107	VI	AE-23		RLの結節縄文を斜回転転。	5YR5/6	多	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色岩片
988	ab	107	VI	AI-27	口縁部直下に三角形状の印周文と斜回転転。	5YR5/6	多	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色岩片多
989	ab	107	VI	AH-26他	RLの結節状横文を斜回転転。底部は平底。	7.5YR6/6	多	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色岩片
990	108	VI	—		口縁部に縄文、引状縄文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子、白色岩片
991	108	VI	AR-23		波状縁。引状縄文。	7.5YR4/3	有	白色粒子、黒色粒子、白色岩片
992	ab	108	VI	AA-22他	波状口縁。口縁部に縄文、LRの引状縄文。	5YR4/6	有	白色粒子多、黒色粒子、白色岩片
993	108	VI	AA-22		RLの引状縄文。	7.5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片
994	abc	108	VI	AR-24	RL、LRの引状縄文。	7.5YR4/6	多	白色粒子多、黒色粒子、白色岩片
995	ab	108	VI	AF-21	波状口縁。RLの縄文。	7.5YR5/8	多	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多
996	ab	108	VI	AH-19	LRの縄文。	7.5YR6/6	有	白色粒子多、黒色粒子、白色岩片
997	108	VI	AI-21他		RLの縄文。	5YR5/8	無	雲母粒子、白色岩片
998	ab	108	VI	—	RLの縄文。	7.5YR5/3	有	白色粒子、黒色粒子、白色岩片
999	abc	108	VI	AR-23	胴部中に内周、RLの縄文。	5YR4/3	多	白色粒子、黒色粒子、白色岩片
1000	108	VI	AA-22他		LRの縄文。	10YR6/2	有	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色岩片
1001	ab	108	VI	Z-22他	RL、LRの縄文。	7.5YR6/4	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多
1002	109	VI	AH-19		LRの縄文。	7.5YR5/6	無	白色粒子、黒色粒子、白色岩片
1003	109	VI	AB-23		RLの縄文。	7.5YR4/3	有	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色岩片
1004	109	VI	AR-22		RLの縄文。	5YR4/6	多	白色粒子多、黒色粒子、雲母、白色岩片
1005	109	VI	Z-22		RLの縄文。	7.5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子、白色岩片多
1006	109	VI	AI-21		LRの縄文。	2.5Y/4.2	有	白色粒子、黒色粒子
1007	109	VI	AD-22		波状口縁。外面にLRの縄文を斜回転転。断面、内面に条痕文。	10YR5/2	多	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色岩片
1008	109	VI	AI-20		RLの縄文。	7.5YR5/4	無	白色粒子、黒色粒子、白色岩片
1009	109	VI	N-4		波状口縁。RLの縄文。	5YR4/6	多	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多
1010	109	VI	AA-22		RL下の縄文。	5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、白色岩片
1011	109	VI	AF-21		RL下の縄文。	5YR5/8	有	白色粒子、黒色粒子多、白色岩片多
1012	109	VI	—		外面にLRの縄文(大粒と小粒)。内面にナデ。	7.5YR5/4	多	白色粒子多、黒色粒子、雲母、白色岩片
1013	109	VI	V-17		引状縄文。	5YR4/4	多	白色粒子、黒色粒子、白色岩片
1014	109	VI	AF-21		RL縄文。	10YR4/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片
1015	109	VI	AD-25		LR下の縄文。底部付定。	7.5YR6/6	有	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色岩片
1016	109	VI	AH-26		LRの縄文。	7.5YR5/8	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多
1017	109	VI	AA-22		底面、LRの縄文。	5YR4/4	有	白色粒子多、黒色粒子
1018	109	VI	AR-25		底面、RLの縄文。	5YR4/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多
1019	109	VI	—		口縁部に、縄文を施す。半横竹管状の工具により横位に波線文・斜文。	7.5YR5/6	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多
1020	109	VI	AA-21		口縁部に矢羽状文。	7.5YR4/4	有	白色粒子、白色岩片多
1021	109	VI	Z-22		平底。	7.5YR4/6	無	白色粒子、黒色粒子、白色岩片
1022	110	VI	W-12		LRの縄文。	7.5YR4/4	無	白色粒子、黒色粒子、白色岩片多
1023	110	VI	AH-19		LR縄文。	7.5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片
1024	110	VI	AI-21		LR縄文。	10YR5/6	無	白色粒子、黒色粒子、白色岩片
1025	110	VI	AF-21		RLの縄文。	7.5YR5/8	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片
1026	110	VI	AI-19		LRの縄文。	7.5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子、白色岩片多
1027	ab	110	VI	AH-19	LRの縄文。	10YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多
1028	110	VI	AF-23		RLの縄文。	5YR5/6	無	黒色粒子、白色岩片
1029	110	VI	AE-20		RLの縄文。	10YR6/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片
1030	110	VI	AN-23		LRの縄文。	7.5YR5/8	無	白色粒子、黒色粒子多、白色岩片多
1031	110	VI	AF-23		LR下の縄文。	7.5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片
1032	110	VI	W-12他		LRの縄文。	5YR4/6	無	白色粒子、黒色粒子多、白色岩片多
1033	110	VI	AI-20		波状口縁。LRの縄文。	7.5YR5/6	無	白色粒子、黒色粒子、白色岩片多
1034	110	VI	AI-20他		LRの縄文。	10YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子、白色岩片多
1035	ab	110	VI	AC-26他	LRの縄文。	10YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多
1036	110	VI	AI-21		RLの縄文。前や段多。	5YR5/8	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片
1037	110	VI	AA-13		LR下の縄文。	2.5Y/3.4	有	白色粒子多、黒色粒子
1038	110	VI	Y-13		LRの縄文。	5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多
1039	110	VI	AF-21		RL下の縄文。	10YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多
1040	110	VI	AF-23		RL下の縄文。	5YR4/6	無	白色粒子、黒色粒子多、白色岩片多
1041	110	VI	AI-20		波状口縁。LRの縄文。	10YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多
1042	110	VI	AH-19		LR下の縄文。	7.5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多
1043	110	VI	Y-12		LRの縄文。	5YR5/8	無	白色粒子、黒色粒子、白色岩片多
1044	110	VI	V-13		LR下の縄文。	10YR6/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片多
1045	110	VI	AI-20		RL下の縄文。	5YR4/6	無	白色粒子、黒色粒子、白色岩片

押出番号	種別	図版番号	分類	グリップ	文様調整等	色調 (Hue)	繊維	胎土
1046		110	VI	Q-9	1. 織文。	5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片多
1047		110	VI	AP-22	RLの織文。	10YR6/9	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1048		110	VI	AE-22	へうまぎき、LRの織文。	10YR5/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1049		110	VI	AI-27	羽状織文以上の織文を結束。	7.5YR6/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母
1050		111	VI	1A-14	織文を織文。横位に沈線文。	5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1051		111	VI	1F-22	織文を織文。横位に沈線文。	7.5YR4/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1052		111	VI	R-14	織文を織文。半横竹管状の工具による沈線文。	7.5YR4/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1053		111	VI	AF-19	横位に2本の角押文を施し、その直下に縦位の角押文。	5YR6/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1054	ab	111	VI	AH-27b	口唇部のY字状の突起。織文。2本の隆帯の間には沈線文を施す。	5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1055		111	VI	—	横位の隆帯と曲線の隆帯による横間区画のみ、隆帯に沿って角押文を施す。	7.5YR5/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1056		111	VI	AD-23	口唇部は平ら面を作り出し、三角押文を施す。	5YR5/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片多
1057		111	VI	AP-23	波状口縁。口唇部にのみ、三角押文。渦巻文。	7.5YR7/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1058		111	VI	S-8	波状口縁。波頂部より隆帯を垂下。三角押文を施す。	5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片多
1059		111	VI	—	波状口縁。三角押文と角押文が施される。	5YR4/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片多
1060	ab	111	VI	—	横位に三角押文。	5YR6/6	無	白色粒子多、黒色粒子多
1061		111	VI	AP-23	横位の隆帯。三角押文。横位・縦位の沈線文。	7.5YR6/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1062		111	VI	AJ-21	縦位・横位の沈線文により区画。区画内に三角押文。	5YR6/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片多
1063		111	VI	AF-25	横位の隆帯に沿って三角押文。	5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1064		111	VI	AD-22	横位に三角押文。	5YR5/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1065	ab	111	VI	AH-25	隆帯により区画。区画内に三角押文。	5YR6/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1066		112	VI	AP-24	隆帯を付け、平行沈線文・キャタビラ文。	7.5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片多
1067	ab	112	VI	Z-15	波状口縁。波頂部に渦巻状のモチーフが、隆帯による区画内にキャタビラ文。三角押文により区画。	5YR4/8	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母
1068	ab	112	VI	Y-23	縦位の短隆帯の間にキャタビラ文。三角押文を施す。	5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1069		112	VI	—	キャタビラ文により抽象文を作る。判断難文。	5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1070		112	VI	—	隆帯を付け、織文。	7.5YR4/3	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1071		112	VI	Z-22	横位に孔型文を施した隆帯。半横竹管状の工具による長方形の区画内に織文を施す。	5YR4/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母多
1072		112	VI	R-9	方形の区画内に刺突文と織文を施す。	7.5YR4/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1073		112	VI	—	方形の区画内に工具による渦巻文を施す。隆帯上にキャタビラ文。	7.5YR4/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母多、白色薄片
1074		112	VI	AD-24	半横竹管状の工具による沈線文。隆帯上にキャタビラ文。	5YR4/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1075		112	VI	AJ-22	半横竹管状の工具により渦巻状を施す。隆帯上に刺突文。	7.5YR4/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母多、白色薄片
1076		112	VI	Y-12	半横竹管状の工具により渦巻状を施す。隆帯上にキャタビラ文。	7.5YR4/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1077		113	VI	AJ-21	横位に隆帯を付け、隆帯上に孔型文。沈線文。	7.5YR4/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1078		113	VI	—	横位に隆帯を付け、隆帯上に刺突文。太い沈線文。	7.5YR4/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1079		113	VI	AN-23	横位の隆帯と縦位の沈線文を施す。横位・縦位の沈線文。	5YR5/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1080	a	113	VI	AE-24	蛇のモチーフを施す。口唇部の内面に隆帯を付け、口唇部の内面に隆帯文。	5YR5/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1080	b	113	VI	AE-24	波状縁。波頂部から縦位の隆帯文。キャタビラ文。口唇部の内面に隆帯文。	5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1080	c	113	VI	AE-24	横位に沈線文とキャタビラ文。	7.5YR4/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1080	d	113	VI	AE-23	横位に沈線文とキャタビラ文。	5YR5/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1080	e	113	VI	AF-22	横位に沈線文とキャタビラ文。	5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1080	f	113	VI	AF-24	横位の隆帯と縦位の沈線文とキャタビラ文。	5YR5/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1080	g	113	VI	AD-22	横位のモチーフの間に沈線文とキャタビラ文。	5YR5/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1080	h	113	VI	AE-24	横位に沈線文とキャタビラ文。	5YR5/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1080	i	113	VI	AE-24	横位のモチーフの間に沈線文とキャタビラ文。	5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1080	j	113	VI	AE-24	横位に沈線文とキャタビラ文。	5YR5/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1081		113	VI	AF-22	隆帯を付け、縦位の沈線文。渦巻状の隆帯文。	5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1082		113	VI	—	横位の隆帯の区画内に斜位の沈線文により区画。	7.5YR5/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片多
1083		113	VI	AH-30	横間位の隆帯の区画内に斜位の沈線文により区画。	5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1084		114	VI	AF-23	波頂部に鳥身形状の隆帯文。	7.5YR6/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1085	ab	114	VI	—	波状口縁。突起部。波頂部の外面内面に「V」字状の沈線文。現状に隆帯文・沈線文を施す。	7.5YR4/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1086		114	VI	AN-23	把手の先端部。蛇のモチーフ。	7.5YR6/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1088		114	VI	AH-26	横位に渦巻状の隆帯文。横位の沈線文。環状モチーフ。	7.5YR6/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1089		114	VI	AP-23	口唇部に突起を付け、横位にキャタビラ文を施した隆帯文。	7.5YR6/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1090		114	VI	AP-23	横位のキャタビラ文・L状文を施す。	7.5YR6/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1091	abcd	115	VI	Y-12	口唇部は扇形。口唇部は肥厚し口唇部の側面から把手部分に縦向きに、基部から斜位にかけてLRの織文。	7.5YR4/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、輝石、白色薄片
1092		115	VI	AH-26	扉曲部の上位にRLの織文。	7.5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、輝石、白色薄片
1093		114	VI	—	口唇部下より織文を施文。下部にキャタビラ文。	7.5YR5/8	無	白色粒子多、黒色粒子多、輝石、白色薄片
1094		114	VI	—	口唇部を内側に肥厚。織文。口唇部に沿って波状の沈線文。	7.5YR4/6	無	黒色粒子多、白色薄片
1095		114	VI	AI-29	口唇部に沿って横位の沈線文。	7.5YR3/2	無	黒色粒子多、白色薄片
1096		114	VI	AH-26	内湾する口唇部。横位に刺突文。横位・斜位に平行沈線文・キャタビラ文を施す。	7.5YR4/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1097		114	VI	AN-22	横位に沈線文。	7.5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1098		114	VI	AH-29	横位・縦位に沈線文。	7.5YR5/2	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1099	ab	116	VI	Q-19b	横位・縦位に波状の浮線文。縦位の沈線文。	5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片多
1100		116	VI	AD-26	横位に編織状の浮線文と沈線文。	7.5YR6/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1101		116	VI	AI-29	横位に斜位の沈線文。	7.5YR6/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片
1102		117	VI	AD-23b	口唇部に織文。胴部に2本の縦位の隆帯の間を渦巻文と縦位の沈線文。縦位に判断難文・沈線文。	7.5YR5/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片多
1103		116	VI	AG-19	横位に隆帯文。環状状の工具による沈線文。	10YR6/4	無	白色粒子多、黒色粒子多、白色薄片
1104		116	VI	X-013	横位に半横竹管状の工具による平行沈線文。縦位・波状の沈線文。L字状のモチーフ。	7.5YR5/6	無	白色粒子多、黒色粒子多、雲母、白色薄片

2 石器・石製品 (第144~184図 写真図版120~133)

包含層等から出土した縄文時代以降の石器・石製品は総点数7,872点である。このうち縄文時代のもので考えられる石器・石製品は第13表にあるように7,851点を数え、全体の99%を占める。これは先に刊行した「富士石遺跡II」で掲載した縄文時代草創期に位置づけられる尖頭器を除いた数字である。またこの表で示されているように剥片石器類4,573点、磨石・敲石類は1,947点である。石鏃が387点、打製石斧42点、石核344点、スクレイパー66点、楔形石器86点を数え、富士石遺跡で包含層と遺構から出土した縄文時代石器の主体を占めるのは剥片・砕片で全体の約58%を占める。その次に敲石で全体の16%、磨石は9%である。当該遺跡付近に展開する梅ノ木沢遺跡の縄文時代の石器(包含層)は磨石・敲石が16%、板烟上遺跡(東駿河湾環状道路に伴う調査)では磨石・敲石3%、磨石1%、敲石3%等である。いずれの遺跡も営まれた時期に差があるため、一概に比較するのは不適であるが、攪乱から出土したものを勘案すれば、富士石遺跡では磨石・敲石の類が多い傾向がまず読み取れよう。

石鏃 (第144~148図 写真図版120・121)

1155~1297は石鏃及び石鏃未製品である。これらは調査区全域で出土しているが、出土分布の中心は中央尾根付近である(第131図)。

出土した縄文時代の石鏃は打製で、大半は無茎鏃である。その中で1155・1156は茎部を有する石鏃である。両者とも茎部が欠損し、一部が残存するのみである。前者は縁辺中央部が括れる。この2点は脚(逆刺)がわずかに発達している点から有茎凹基鏃に分類されよう。

1157~1258は無茎凹基鏃に分類されよう。そのうち1157~1159は長く脚部が発達した凹基無茎鏃である。1157は完形であり、残り2点は脚部が欠損している。無茎凹基鏃でも尖脚鏃である。1160~1233も無茎凹基鏃である。いずれの資料も1157~1159程の長脚ではないが、尖脚である。平面形は正三角形・二等辺三角形・縦長二等辺三角形等のバリエーションに分類できる。石材は1160~1224が黒曜石、1230~1232はガラス質黒色安山岩である。1234~1251は脚部先端が丸みを帯びる無茎凹基鏃である。これらの中で1234は長脚である。1244は厚みがあるため未製品の可能性もある。石材は1250がチャート、1251がホルンフェルスで、1234~1249は黒曜石である。なお後述する1285は厚みもあるため、未製品の可能性が高いが、脚部の先端が丸みを帯びているため、このタイプに分類できる可能性がある。1252~1255は脚部先端が平坦となる無茎凹基鏃である。前者2点の平面形は正三角形に近く、石材は黒曜石である。後者2点は縦長二等辺三角形で、1254の石材は珪質シルト岩、1255は下呂石である。1256は大型で縁辺を鋸刃状に加工した凹基無茎鏃である。脚部は角状か。平面形は縦長二等辺三角形で、石材はガラス質黒色安山岩である。1257・1258は脚部が欠損しているため判然としない資料である。

1259~1275は無茎平基鏃である。ただし1265のように厚みのある資料もあり、未製品が含まれているものと考えられる。平面形が正三角形に近い1259や、膨らみのある二等辺三角形の1262、縦長二等辺三角形を呈する1275等、いくつかのバリエーションに分類できる。1259~1272の石材は黒曜石、1273・1274はガラス質黒色安山岩、1275は珪質頁岩である。

1276は無茎凹基鏃に分類される。小さい資料であり、基部を凹基に作り出そうとした痕跡が無いので、凹基鏃と考えられた。石材は黒曜石である。

1277~1297は不定形の石鏃である。石鏃未製品と考えられる。石材は全て黒曜石である。

スクレイパー (第149~152図 写真図版122)

1298~1320はスクレイパーに分類したものである。剥片を利用した石器で、縁辺に剥離加工を施して刃部を作り出したものである。調査区全域で出土しているが、出土分布の中心は中央尾根である(第

第3章 縄文時代の遺構と遺物

第13表 縄文時代石器組成表

		石	スケレパ イ	石 板	石 鏃	磨 製 石 器	石 球	打 製 石 斧	磨 製 石 斧	石 錘	礮 石	磨 石	磨 製 石	石 鏃	台 石	二 次 加 工 剥 片	磨 製 剥 片	剥 片・ 砕 片	磨 石	計		
黒 曜 石	天城有峰群	AGKT	44	6		1	16	28									7			102		
	新原原岩群	HNHL	14	5			1	9									5	1		35		
	新原原岩群	HNSK	1																	1		
	新原原岩群	HNSK	1																	1		
	神奈川島根高群	KZGM	194	20	1	8	49	204									51	1		538		
	諏訪原台群	SM/HD	78	2		4	16	54									16			139		
	諏訪台群	TSTY		2					1											3		
	相田上原橋北群	WIDTK		1																1		
	相田上原橋西群	WIDTN							1											2		
	相田東山群	WIDTY	18	2															1	36		
	その他産地	NK		1																1		
	推定不可		11		1	1	3	1													17	
	未分析																		4188		4188	
玄武岩	Ba								1		3	289	171	15	52				3	534		
本孔質玄武岩	VBa									1	1	126	100	30	40					298		
粗粒玄武岩	Da											10	4							14		
ガラス質黒色安山岩	GAn	12	5	1		5											3		64	90		
粗粒安山岩	FAn					4						2								11	17	
輝石安山岩	An(Py)		3			1	10		1	8	659	368	31	60	2				17	1160		
角閃石安山岩	An(Ha)											1								1		
多孔質安山岩	VAn										1	30	28	5	6					70		
デイサイト	Da											50	22	1						74		
粗粒デイサイト	FDa																			1		
下呂石	GRS	1																		2	3	
流紋岩	Rhy	1									1	2	1							9	14	
アズライト	Ap											1	1	2						4		
かん岩	Po											2								1	3	
石英斑岩	QP											5								5		
閃緑岩	Di											4	3							7		
石英閃緑岩	QD											1								1		
花崗岩	Gr											1	1							2		
蛇紋岩	Sp									1										1		
カンラン岩	Pv																			1		
英レイ岩	Ga									1										1		
粗粒英レイ岩	FG											1	1							2		
珪岩	SR					1														2	3	
玉髄	Cha																			1	1	
水晶	RC																			3	3	
石英	Qt																			1	1	
石英岩	Si											1								1		
黄玉石(碧玉)	YJa																			1	1	
赤玉石(碧玉)	RJa				1		1													2		
江戸石	My									1										1		
結晶片岩	CSc						3			1										1	5	
緑色片岩	GS																			1	2	
ホルンフェルス	Hor	2	14	3	1		25	2			2								4	186	239	
粗粒麻尾岩	FT									1											1	
硬質粗粒麻尾岩	HFT		2	1	1			2												1	5	
軟質粗粒麻尾岩	SFT	1							2												1	
緑色麻尾岩	GT						3	1	3												1	
珪質シルト岩	SSi	2	1	1								1								6	15	
頁岩	Sb							10		2		1								17	38	
赤色頁岩	Sb(Rc)											1									1	
珪質頁岩	Ssb	2					1													1	17	
硬質頁岩	HSS																			1	2	
軟質頁岩	SS	1																		2	3	
珪質粘板岩	SSS																			4	5	
粗粒砂岩	PSS						4		1	5		7	2						1	14	34	
中粒砂岩	MSS						6		3		1	16	16							5	47	
粗粒砂岩	CSS						1					6	7							1	15	
硬質砂岩	HSS						2														2	
硬質砂岩	HSS																				2	
礫岩	GC							1													1	
礫岩	Con												2								2	
チャート	Ch	3	2	2		1														1	7	
計			382	66	10	17	86	344	42	10	10	21	2	1219	736	82	158	94	3	4573	1	7801

表土・機風出土77点含む

132図)。

1298～1309は片刃を作り出しているタイプで、そのうち1298～1304は側縁部に刃部を設けたもので、1305～1309はそれ以外の部分に刃部を作り出している。石材として1298～1300は黒曜石を使用し、それ以外はホルンフェルス、ガラス質黒色安山岩、硬質細粒凝灰岩、チャート等が散見される。

1310～1320は両刃を作り出しているタイプである。そのうち1310～1312は側縁部に刃部を設けたもので、1313～1320はそれ以外の部分に刃部を作りだしている。石材は黒曜石、ホルンフェルス、ガラス質黒色安山岩が見られる。

石匙 (第153・154図 写真図版123)

1321～1329は石匙である。出土位置は調査区北半部が殆どで、中央尾根と東尾根にかかる(第133図)。石匕とも表記されるこの石器は全体的な形状等から、縦型石匙と横型石匙に分類できる。このうち1321・1322が縦型で、残りは横型石匙である。1321はつまみを瘤状に作り出しているが、1322は単に側縁に抉りを入れているに過ぎない。1321の石材は黒曜石、1322は硬質細粒凝灰岩である。

1323～1329は横型石匙である。そのうちつまみを中軸とし、刃部が左右対称に展開するタイプが1323・1324であるが、1325～1329はつまみが刃部に対して斜位で、つまみを中軸にした場合、左右非対称となるタイプである。石材は黒曜石、ホルンフェルス、チャート等が散見される。

石錐 (第155図 写真図版123)

1330～1338は石錐である。出土位置は調査区北半部に限定され、中央尾根で出土したものが殆どである(第134図)。剥片の一部に敲打を加え、錐部を作り出したものが殆どであるが、1330・1331のように錐部があまり明瞭でないタイプもある。錐部が作り出されているタイプは、錐部自体が欠損しているものが多い。石錐の石材としては黒曜石がほとんどで、1337がホルンフェルス、1338が硬質細粒凝灰岩である。

楔形石器 (第155図 写真図版123)

1339～1343は楔形石器である。剥片の上端下端に打撃が加えられたものを分類している。出土位置は調査区北半部に多く、中央尾根付近を中心に出土している(第135図)。全て黒曜石で、1343のみわずかに礫面を残す。

石核 (第156～163図 写真図版124・125)

1344～1384は石核である。石核は石器の材料とする剥片を剥離した後の残存物とされる。石核は調査区内より合計344点出土しているが、今回は41点のみ掲載した。石核は調査区全域で出土しているが、特に中央尾根から東支谷にかけて多く出土する(第136・137図)。石材は黒曜石が全体の約88%を占め、その中でも神津島恩馳島群に属する黒曜石が204点を数え、石核全体の約59%を占めている。次に諏訪屋ヶ台群が54点と多い。黒曜石以外はホルンフェルス、ガラス質安山岩等が挙げられる。石材別の分布では神津島恩馳島群の黒曜石石核は調査区全域から出土している一方、箱根畑宿群黒曜石の石核は中央尾根周辺に限定される状況も見受けられる。

石核は剥離面を打面とするもの、礫面を打面とするものに大別される。1344～1373は前者に分類され、このタイプは32点を数える。このタイプは固定して一方向に剥離させるものと、剥離を転移させるものに細分が可能である。1344～1353は前者、1354～1373は後者か。また接合資料である1384は一方向から剥離させた資料であろう。

1374～1383は礫面を打面とするもので、これも固定して一方向に剥離させるものと、剥離を転移させるものに細分が可能である。1374～1379は前者にあたり、後者は1380～1383である。なお礫面を打面とするものは東尾根付近では出土していないのが特徴的である。

打製石斧（第164～170図 写真図版126・127）

1385～1412は打製石斧である。発掘調査の結果、42点出土したが、そのうち29点を掲載した。調査区のはほぼ全域から出土し、集落域である中央尾根付近に特に集中する状況ではない（第138・139図）。石材では輝石安山岩と頁岩がともに10点確認され、両者で48%を占める。また細粒・中粒・粗粒・硬質砂岩等の砂岩類は合計13点を数える。石材毎の分布の違いは特に見い出せない。形状の点では短冊型・撥型・分銅型・尖頭型等に分類が可能である。

1385～1390は短冊型である。両側縁はほぼ平行である。礫面を残す資料が多い。1388～1390は柄との装着のためか、両側縁の一部のエッジを敲打で潰した痕跡が明瞭に残る。1386は刃部、1390は刃部・基端部の一部が欠損している。

1391～1396は撥型である。側縁は直線的であるが刃部がハの字状に広がり、石斧最大幅が刃部付近に位置する。礫面を残す資料も散見される。1391は両主面に礫面が残り、原石の形態を留める。基端部の形状はほぼ丸く仕上げる資料が多いが、1395のように平坦に仕上げた例もある。1396は頁岩の剥片を利用した打製石斧である。形状を整える為の剥離は行われておらず、刃部付近に剥離が見られる程度である。粗製といえる。

1397～1405は分銅型である。両側縁に敲打を行い、括れさせている。括れが浅いため短冊型・撥型に近い形状を呈するものや、側縁中位を大きく括れさせ分銅状を呈するもの、基端部・側縁部が丁寧な剥離調整されているもの等、形状で細分が可能である。1397は接合資料である。刃部が大きく折損している。残存状況から基端部に比べて、刃部が大きく広がるものと考えられる。1398・1399は側縁中位に残りかけりを入れた資料である。1398は両主面に礫面が残る、括りには細かな敲打痕が散見される。1399は両頭石斧として機能した可能性があるか。1400は全体的に分銅型であるが、括りを強めに入れている。1401は輝石安山岩の剥片を材料とし、整形のための剥離調整は刃部や括り付近に行われているのみである。1402～1405は殆ど礫面が残置していない資料である。1402は縁部にわずかであるが礫面が残る。括りは大きく入れられ、最後に細かな敲打がなされている。1403～1405は基端部が直線的に仕上げられたもので、いずれも輝石安山岩製である。1405は板状の剥片を利用している。

1406～1409は尖頭型で、基端部が尖るものである。1406は全体の形状は撥型に近いが、基端部幅と刃部幅の比が著しいため、尖頭型に分類される。刃部は使用のため、磨滅気味である。基部中位で折損している。1407はホルンフェルスを石材とする。剥片をそのまま転用したものか。側縁にも剥離調整の痕跡は認められない。1408・1409は刃部が失われた資料である。1408は既述短冊型であるが、基端部が尖っている。1409の基端部はあまり尖らせていない。片側側縁に細かな敲打を加えて、括りを設けている。

1410～1412は細分し得なかった資料である。1410・1411は刃部・基端部が折損している。1410は両主面に礫面が残る。1411は接合資料である。1412は硬質細粒凝灰岩製の打製石斧である。礫面がよく残り、円礫だった原石の形態が理解される。平面形は楕円形を呈し、柄部への装着に難があるため、使用法等が考慮される。

磨製石斧（第170・171図 写真図版127）

1413～1420は磨製石斧である。調査の結果、10点出土しており、そのうち8点を図化・掲載した。磨製石斧の出土位置の点では、特に集中した状況は観察されない。石材の点では緑色凝灰岩、細粒凝灰岩

の堆積岩の他に、蛇紋岩・カンラン岩・斑レイ岩等の深成岩が散見される。比重があり、粘りのある石材が選択されている。1413は円礫の表面を磨きあげている。側縁に一部、面を作り出している。1414は刃部の幅が狭小であるため、鑿等の加工斧として機能したのか。細長い礫の側縁に剥離調整を施して、形を整えている。1415は定角式石斧か。基端部と刃部が欠損している。器面は丁寧に磨きあげられている。1416~1420は臼棒状石斧に分類される。1416・1417は基端部のみ破片資料である。1418~1420は刃部が欠損した資料である。3点とも緑色凝灰岩である。1419は整形時の敲打痕が顕著に残り、他の2点は丁寧に磨きあげられている。1420は両主面に残る大きな剥離の範囲がほぼ同一であるため、装着された柄部の範囲を想起させる。また刃部折損部には敲打痕が見られるため、敲石に転用された可能性がある。

石錘 (第172図 写真図版128)

1421~1426は石錘である。富士石遺跡では10点出土しているが、そのうち6点を図化・掲載した。石材では砂岩類が多い傾向にある。出土位置は中央尾根を中心に出土している (第140図)。石錘は全て扁平な円礫を用い、両端を打ち欠いた打欠石錘が殆どである。ただし1421は切目を入れた切目石錘に分類されるものである。

礫器 (第172図 写真図版128)

1427~1429は礫器である。調査区から21点出土しているが、そのうち3点を図化・掲載した。石材は輝石安山岩が多い。出土位置は調査区のほぼ全域に位置するが、中央尾根付近に集中する (第140図)。石材も安山岩・玄武岩等入手しやすい火成岩が6割を占めている。1427・1428はホルンフェルスで、礫面が多く残る。石核の可能性を残す資料である。1429は細粒砂岩の礫器である。河川礫か。刃部は両面から剥離を加えて作られている。

磨石・敲石類 (第173~181図 写真図版129~132)

1430~1511は磨石・敲石類である。表面に磨り・敲きの痕跡が窺われ、物を磨り潰す、もしくは粉砕、敲打する用途に用いられた石器群であるが、磨り・敲打の痕跡両方が認められるものや、凹みも認められるものもあり、多くの細分が可能である。これらは使用用途の差であり、加えて磨り・敲きの動作の過程で合理的な動作中で発生したものと捉えられよう。

第13表に示したように磨石・敲石類は合計1947点を数え、出土石器中約25%も占めている。第14表は磨石・敲石の組成を示したものである。磨った痕跡のみを残す資料はわずか2点のみであり、敲いた痕跡のみを残すものが1219点と大多数を占めている。また磨り痕または敲打痕が認められる資料はバリエーションが33種認められる。出土位置は調査区全域で出土し、中央尾根周辺に濃密な分布を示す (第141図)。中央尾根・東尾根・東支谷で出土した資料が接合した例や、他に中央尾根出土資料と100m以上離れた東支谷最深度付近出土資料が接合した例もあるため、慎重に検討したい。第14表に示した細分類のうち、稜部に敲き・磨りによる平坦面が4~6面にわたるもの、棒状礫の稜部が敲き・磨りによる平坦面として多面にわたるもの、楕円状礫の全面にわたり敲き・磨った資料等は中央尾根付近に多く分布する。石材の点では輝石安山岩が1,027点、全体の約53%を占め、次いで玄武岩、多孔質玄武岩と続き、在地の石材を多用した傾向が窺われる。

1430・1431は磨石である。前者は扁平な楕円状の礫を利用し、後者は棒状の礫を利用している。特に後者1431は両端部が尖るように磨られている。

1432~1441は敲石である。礫の形状としては扁平な楕円形、球状、厚みのある楕円形、棒状等のバリ

エーションが認められる。これら図示した資料の石材は玄武岩と輝石安山岩である。敲打は礫主面・側面・端面で行われ、棒状礫の敲打の痕はほぼ端面に限定される。1442・1443は敲打痕の中に凹み状の敲打痕が見られる敲石である。1443は両主面に凹み状の敲打痕が見られる。1444も敲石であるが、敲打による凹みが4面確認できるタイプで、後述する凹石とは異なる。不定形の礫を用い、集中敲打により凹みが形成されている。

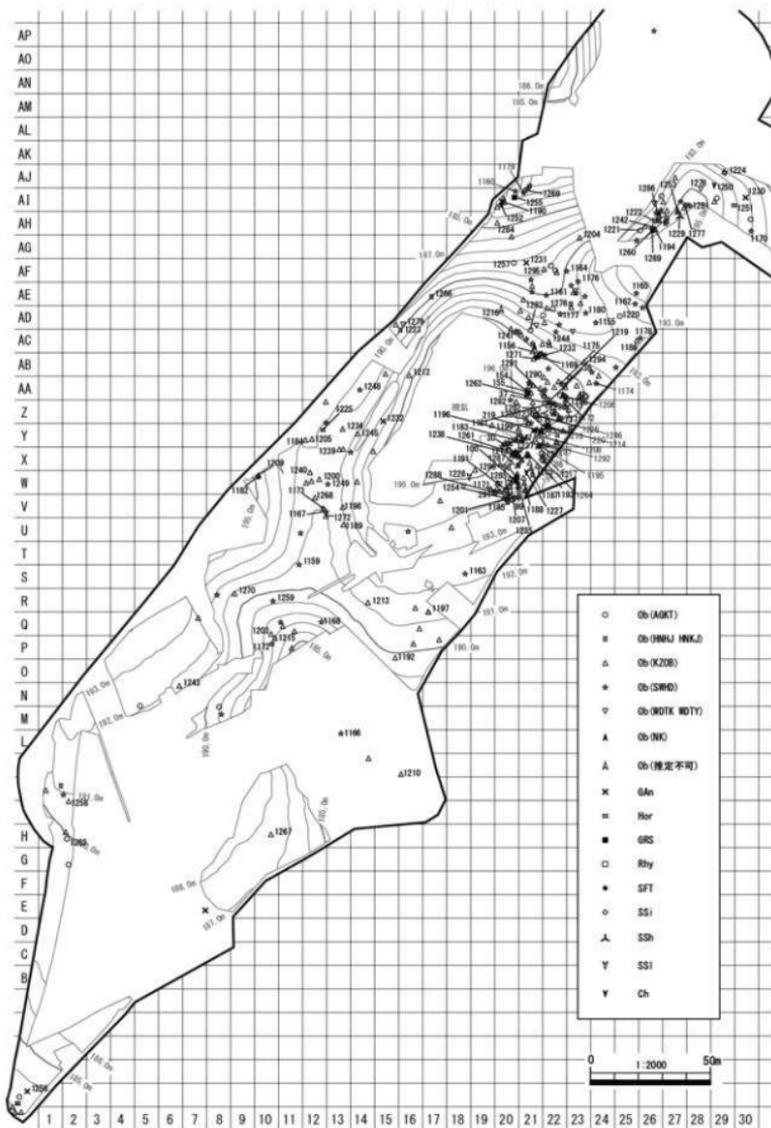
1445～1511は磨・敲石である。1445～1450は磨り・敲きの痕跡が見られる資料で、多くが扁平もしくは厚みのある楕円形の礫を利用している。磨り面は主面に見られるが、1448のように側面も磨り面となる例もある。敲打痕の多くは側面に見られる。1450は棒状の礫を利用したもので、両端部を敲打し、端部の一部に磨り痕が認められる。形状と磨り・敲きの痕跡から1450は他の資料とは用途を異にする。1451～1453は敲打痕に加え、磨り面が凹み状になった資料である。礫主面を磨り面となし、側縁に敲打痕が多く認められる。1454～1458は敲打痕、磨り痕に加え、敲打による凹みが認められる資料である。多くが扁平な楕円形の礫を利用している。主面の多くは磨り面とするが、磨り面中央に敲打による凹みが見えるものと、主面片側が敲打による凹みのみ見られる資料もある。

1459～1490は礫の稜部、側縁部に敲打・磨りによる平坦面が1～2面と敲打痕があるものである。そのうち平坦面が1面のものは1459～1473で1459～1464は扁平な楕円形の礫、1466～1473は棒状の礫を利用している。1471～1473は断面形が三角形に近い。1471は磨り痕による平坦面が明瞭な1面は確認できるが、残りの面は判然としない。平坦面が2面のものは1475～1490で、1475・1476が扁平な楕円形の礫を利用し、他の資料は棒状の礫を使用している。

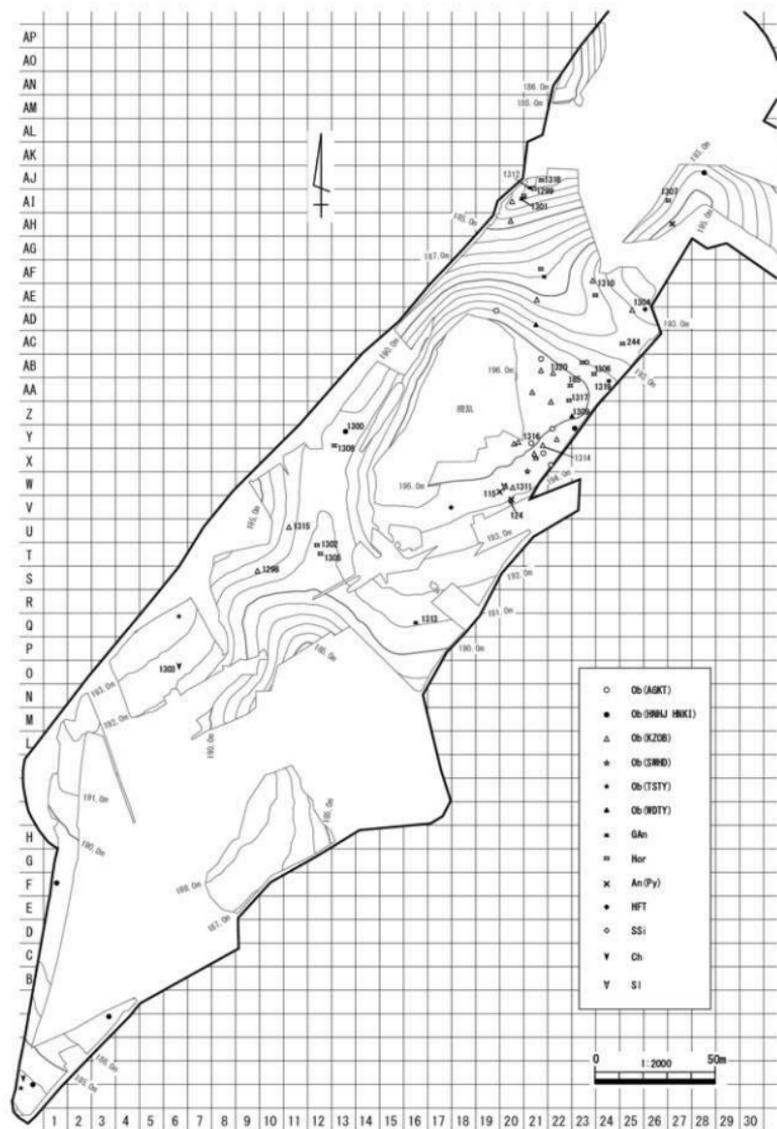
1491・1492は棒状の礫を利用している。両者とも主面に敲打により凹みが見られ、側面は磨りにより平坦面が認められる。また端部に敲打痕が見られる。1493は厚みのある楕円礫で、両主面は磨りによりわずかに凹みのある平坦面がある。1494～1502は礫稜部、側縁部に敲き・磨りによる平坦面が2面認められ、他に敲打痕と磨り痕が認められる資料である。扁平な楕円状礫、厚みのある楕円状礫、棒状の礫等の利用がされている。1503～1511は礫稜部・側縁部に敲き・磨りによる平坦面が3面以上認められる資料である。

石皿・台石（第181～184図 写真図版133）

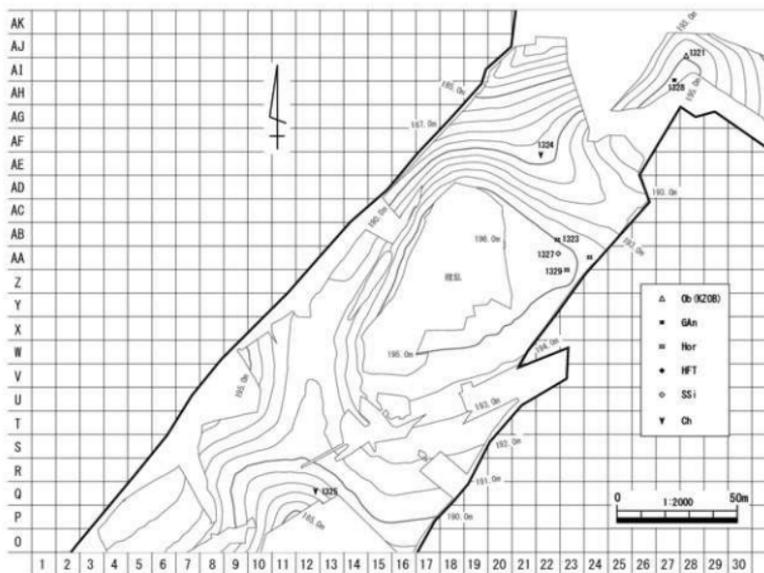
1512～1523は石皿・台石である。石皿は扁平な礫を利用し、浅い凹みで植物等の磨り潰しが行われていたとされ、また台石もほぼ同様の礫を用い、平坦な面上で敲き磨り等の作業がなされたものと推定される。両者とも地面に据え置かれることが前提である。まれに手で持つ凹み石等との区別が判然としないう例があるものの、当該報告では重量約2kg以上を石皿・台石として区別している。この石皿・台石ともに調査区の全域で出土している。住居跡が多く検出された中央尾根付近から東尾根・西尾根にかけて濃密に分布する（第142図）。石皿は82点、台石は158点、合計240点出土している。そのうち石材の内訳では輝石安山岩が91点、多孔質玄武岩70点、玄武岩67点、多孔質安山岩11点、デイサイト1点となり、遺跡周辺で採取が容易な大礫を選択して使用している。1512～1520は石皿、1521～1523が台石である。1522は厚みのある卵形に近い大礫を使用している。



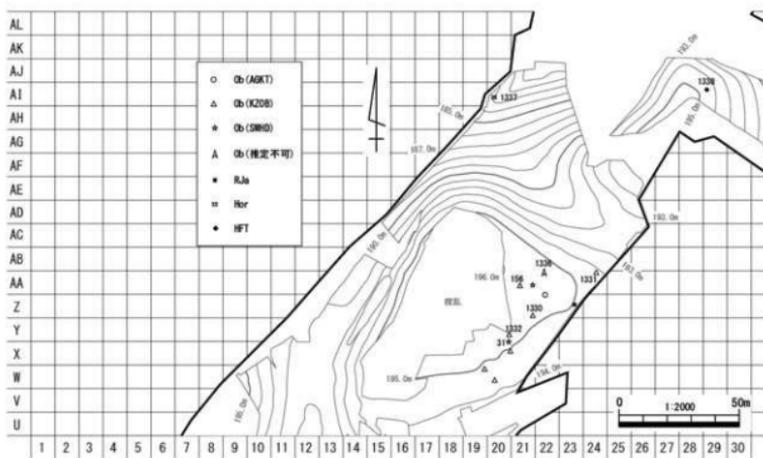
第131図 石礫(石材別)分布



第132図 スクレイパー（石材別）分布



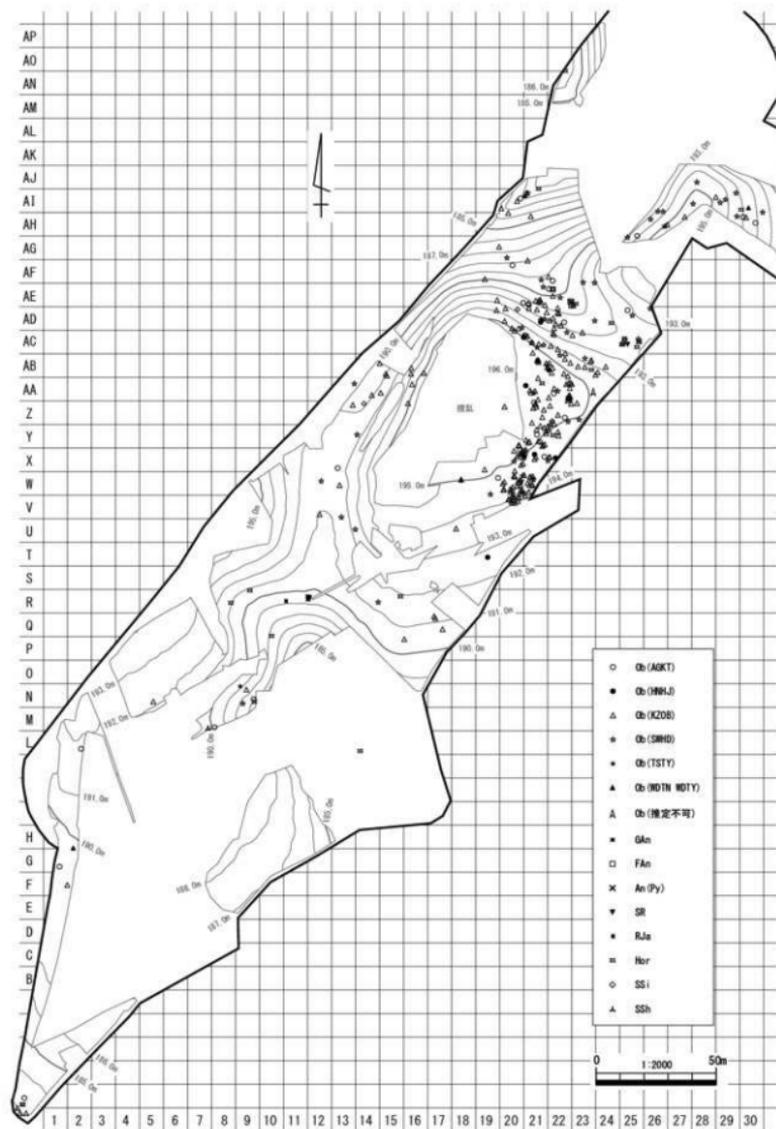
第133圖 石匙（石材別）分布



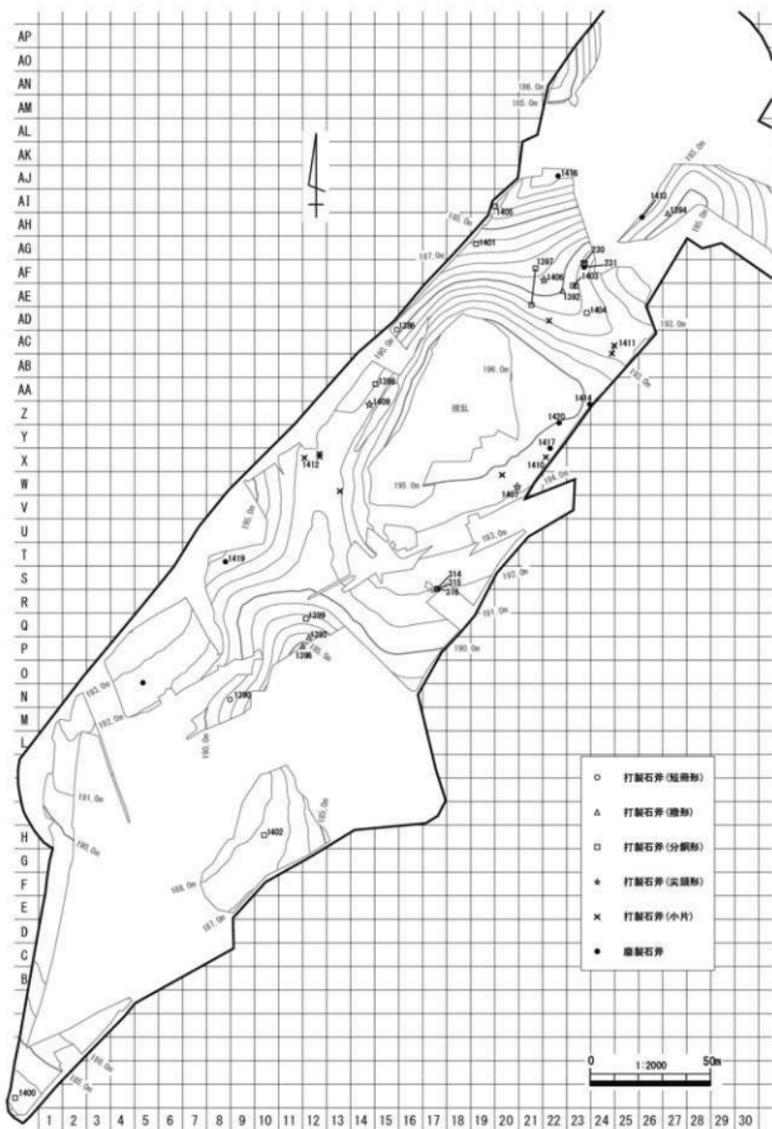
第134圖 石匙（石材別）分布



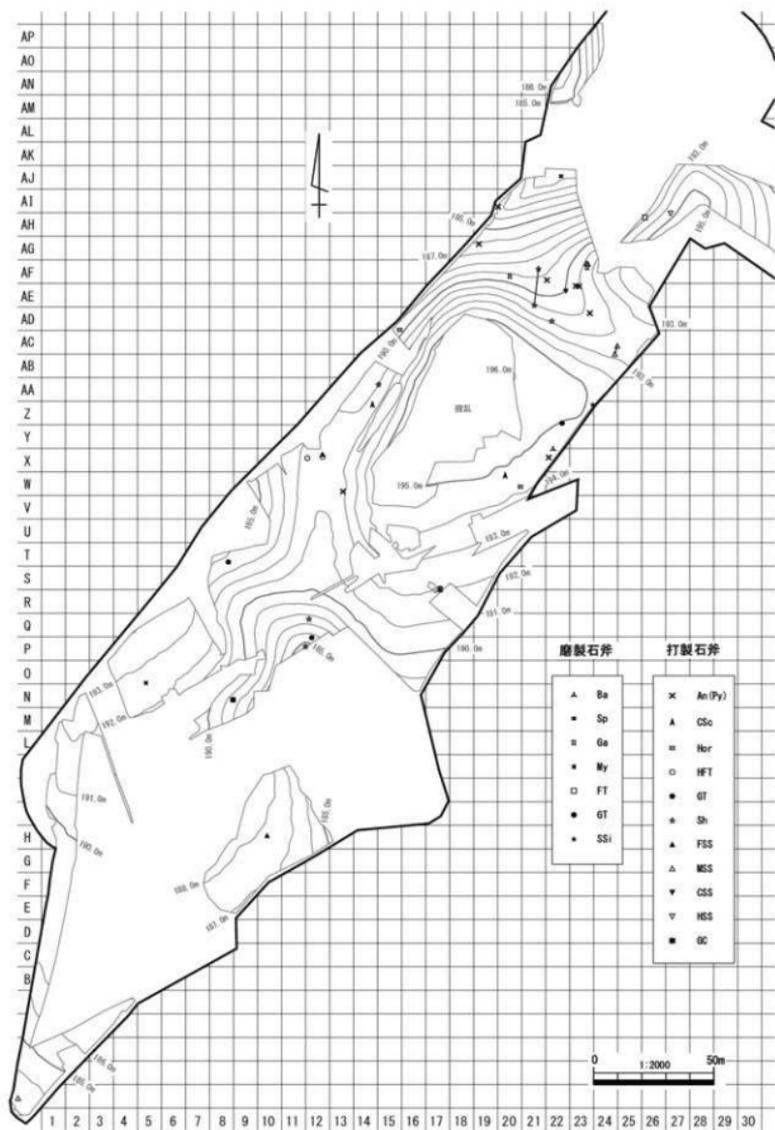
第135図 楔形石器（石材別）分布



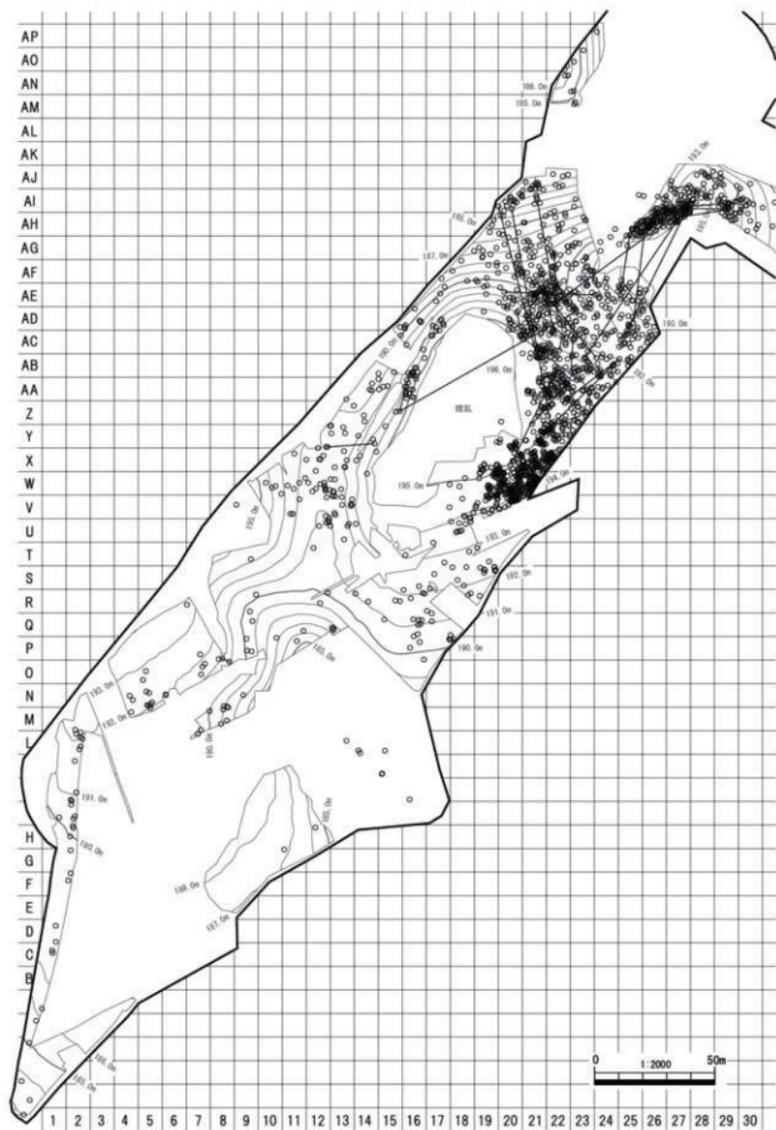
第137図 石核（石材別）分布



第138図 石斧 (タイプ別) 分布



第139図 石斧（石材別）分布



第141図 磨石・敲石類分布

第14表 縄文時代磨石・敲石類組成表

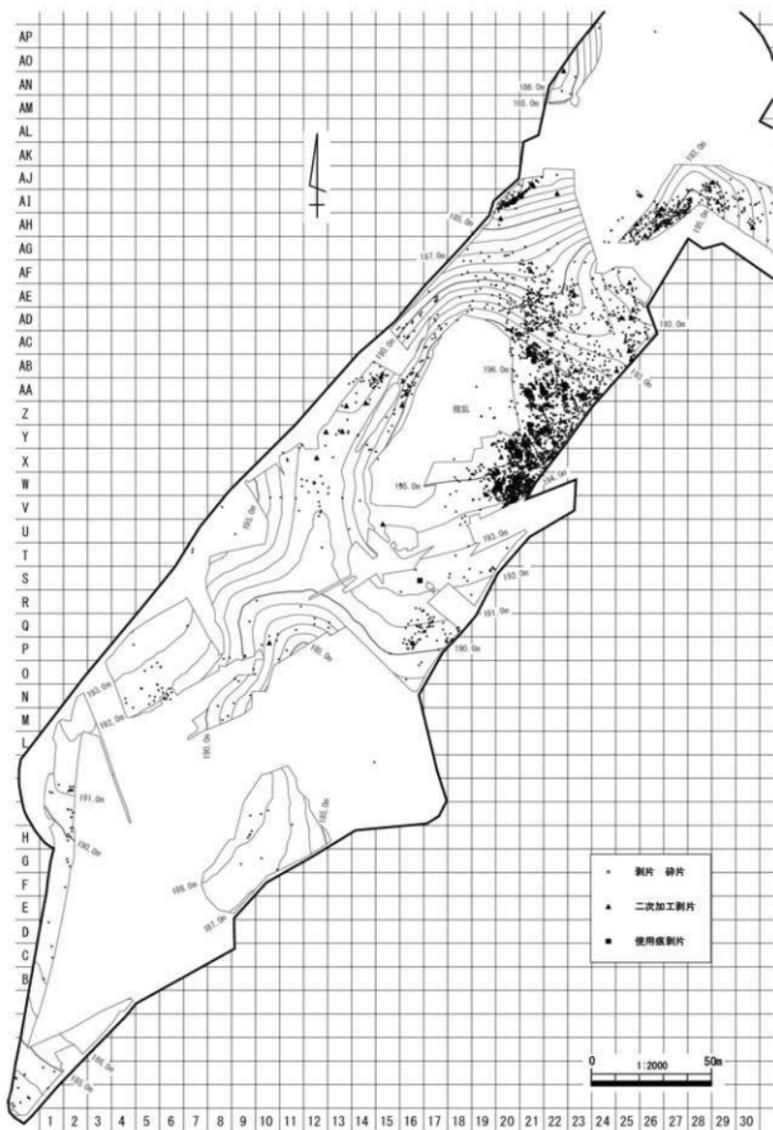
器種	円～楕円		球	棒状				不定形	不明 (小片)	計	内接合
	扁平	厚み		扁平	○	△	他				
S	1				1					2	
T	610	223	54	22	27	14	154	59	56	1219	42
K(4)								1		1	
T+KS(2)	2	1								3	
T+KT(1)	12	4					1	3		20	
T+KT(2)	50	6					3	4		63	2
T+S	129	17		2			1			149	15
T+S+KS(1)	4	1								5	
T+S+KS(2)	1	3								4	
T+S+KT(1)	21	3								24	1
T+S+KT(2)	29									29	2
TS(1)								1		1	
TS(1)+KS(1)							1			1	
TS(1)+T	24	29		1	3	48	58	15		178	7
TS(1)+T+KT(1)	1						1			2	
TS(1)+T+S	27	2								29	1
TS(1)+T+S+KT(1)		1								1	
TS(2)								1		1	
TS(2)+T	14	16		2	2	24	55	2		115	13
TS(2)+T+KS(2)		1								1	
TS(2)+T+KT(1)							4			4	
TS(2)+T+KT(2)	5			2						7	2
TS(2)+T+S	39	8		4			1			52	2
TS(2)+T+S+KT(1)	1	1					2			4	1
TS(2)+T+S+KT(2)	2									2	
TS(3)+T					3		4			7	2
TS(4)+T							1			1	
TS(6)+T							1			1	
TS(多)+T					13					13	
TS(全)+S	4	1								5	
TS(全)+S+KS(2)	1									1	
TS(全)+T+KT(2)	1									1	
TS(全)+T+S+KT(2)		1								1	
計	978	318	54	33	49	86	287	86	56	1947	90

<略号について>

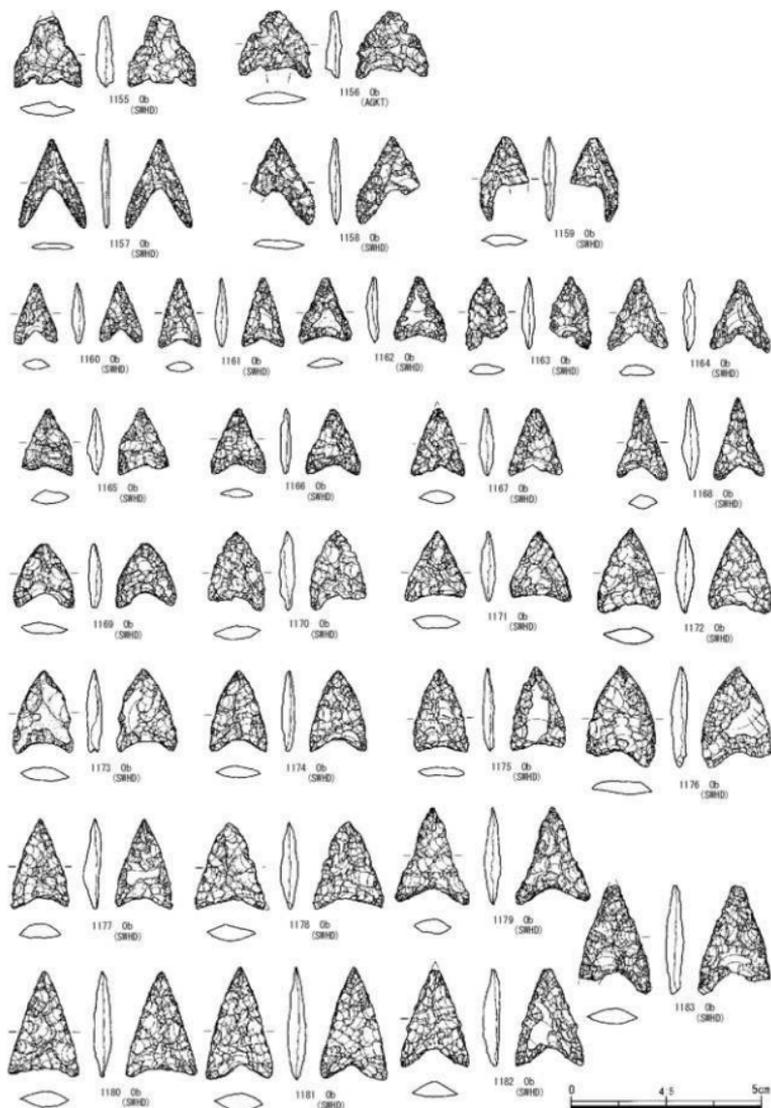
- S : 磨り痕のあるもの
T : 敲き痕のあるもの
K : 敲き痕のうち特に凹状のもの。()内は面数。
KS : 礫の平坦面に凹状の磨り痕のあるもの。()内は面数。
KT : 礫の平坦面に凹状の敲き痕のあるもの。()内は面数。
TS : 礫の稜部に敲き磨り状の平坦面のあるもの。()内は稜部の面数。
TS(多) : 棒状の礫の稜部を多面にわたり敲き磨ったもの
TS(全) : 楕円状の礫を全周にわたり敲き磨ったもの



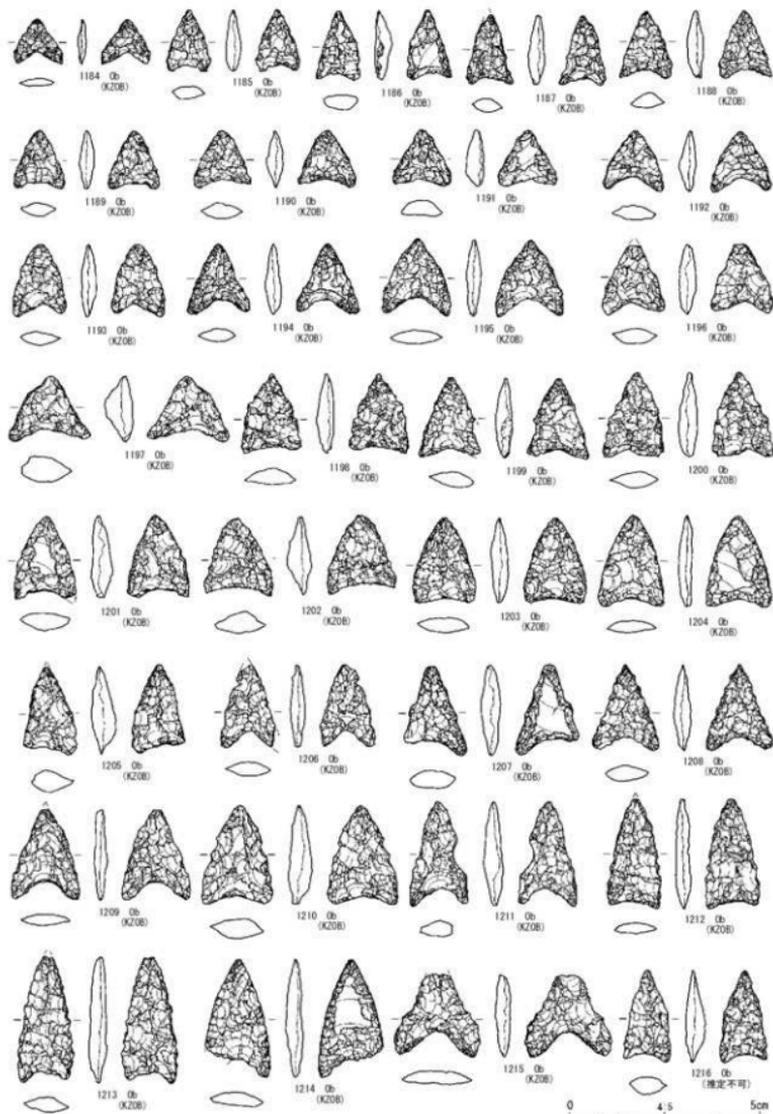
第142図 石皿・台石分布



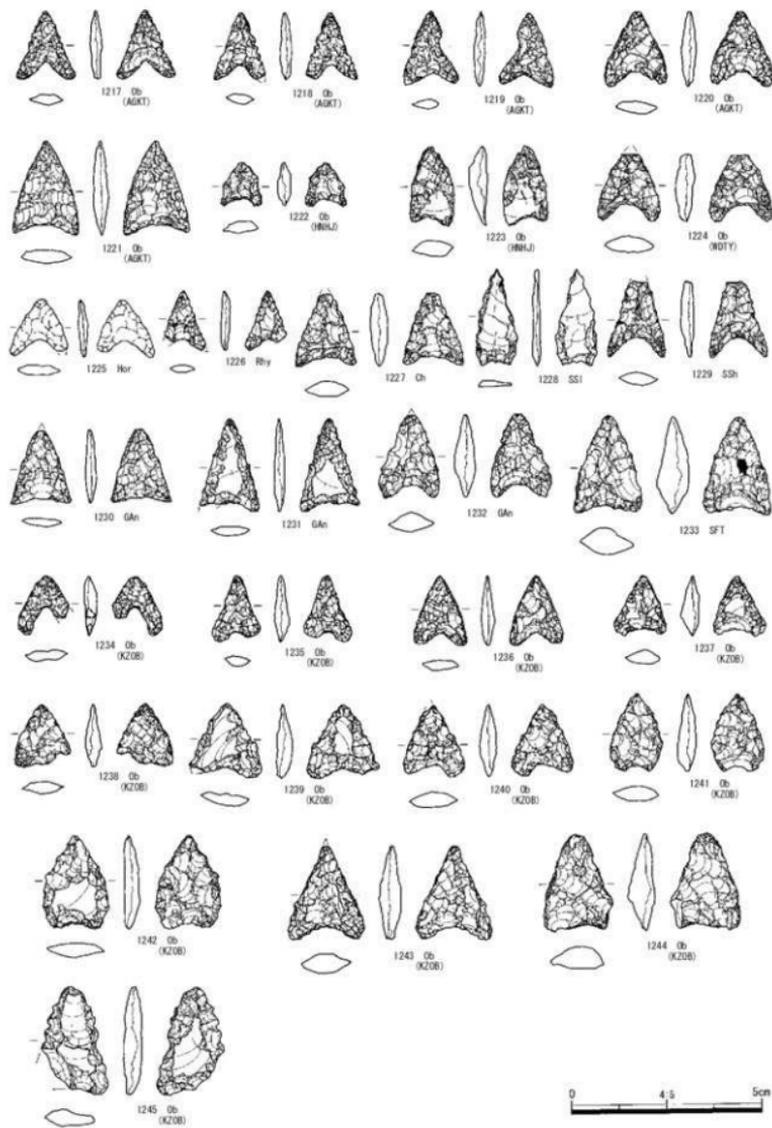
第143図 剥片・碎片・二次加工剥片・使用痕剥片分布



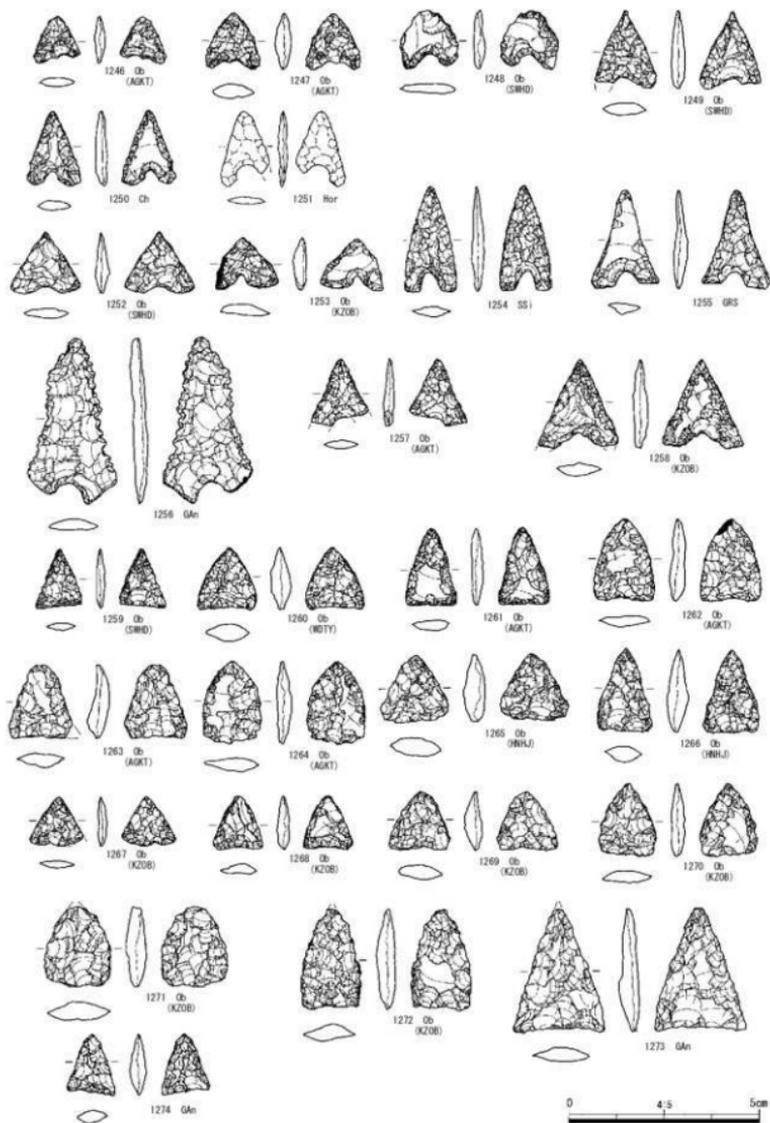
第144図 石鏃1



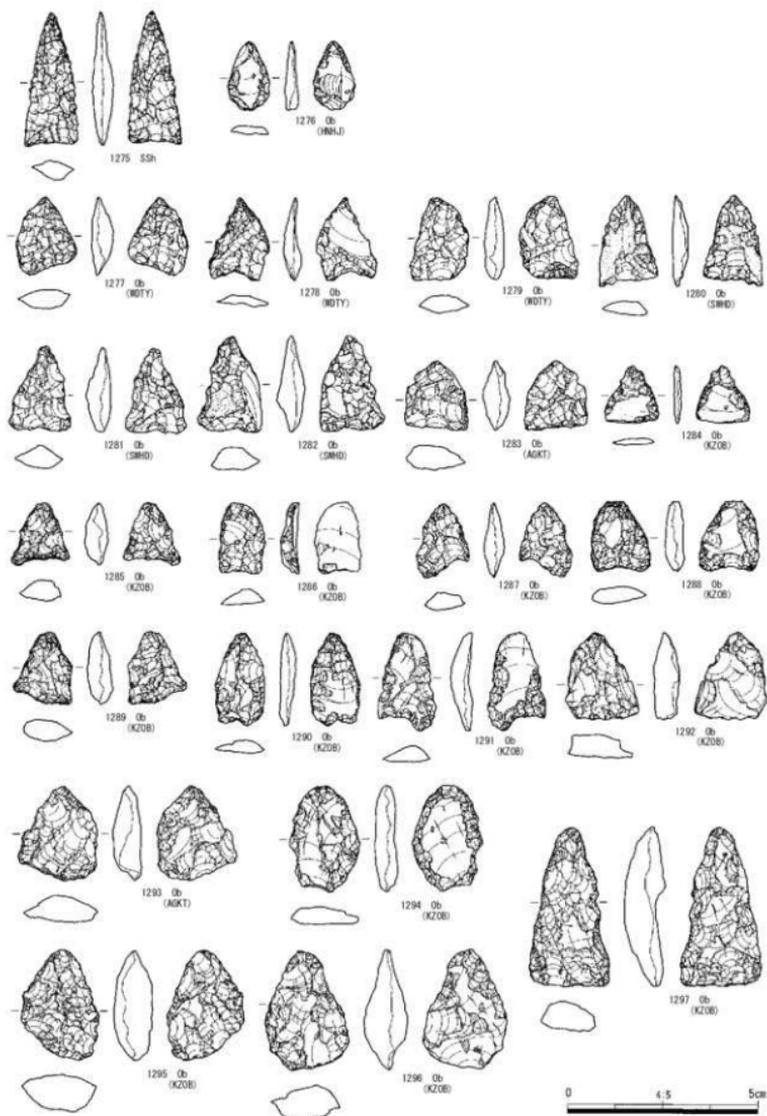
第145圖 石鏃2



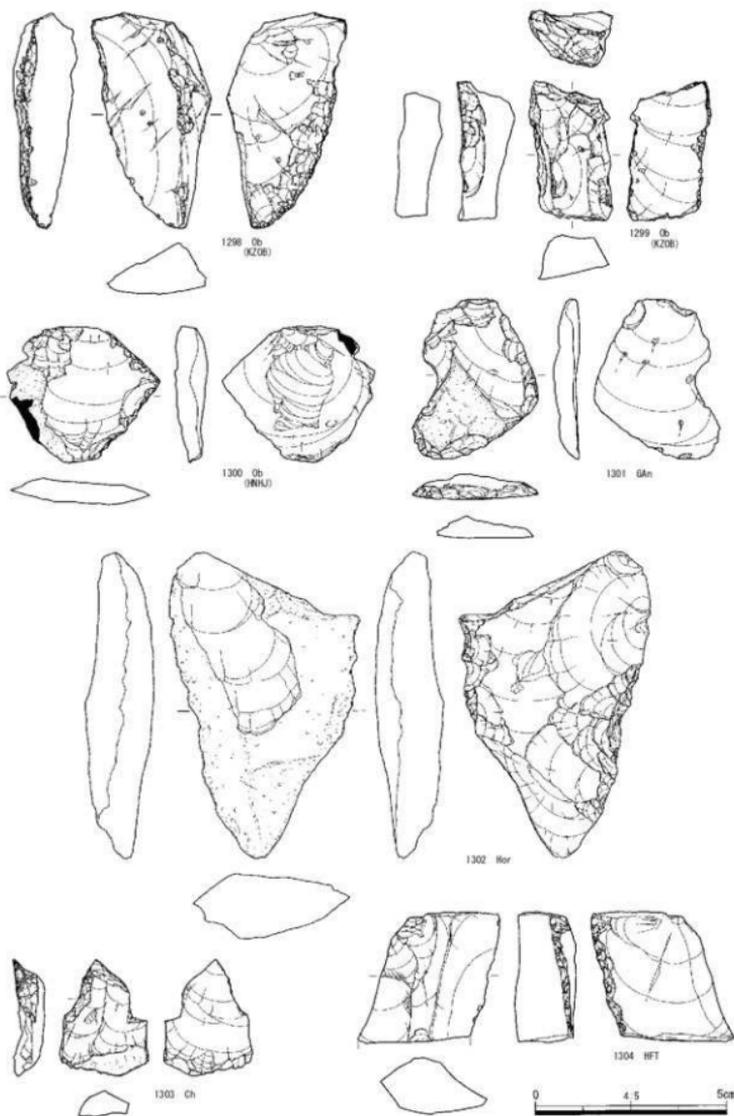
第146図 石畿3



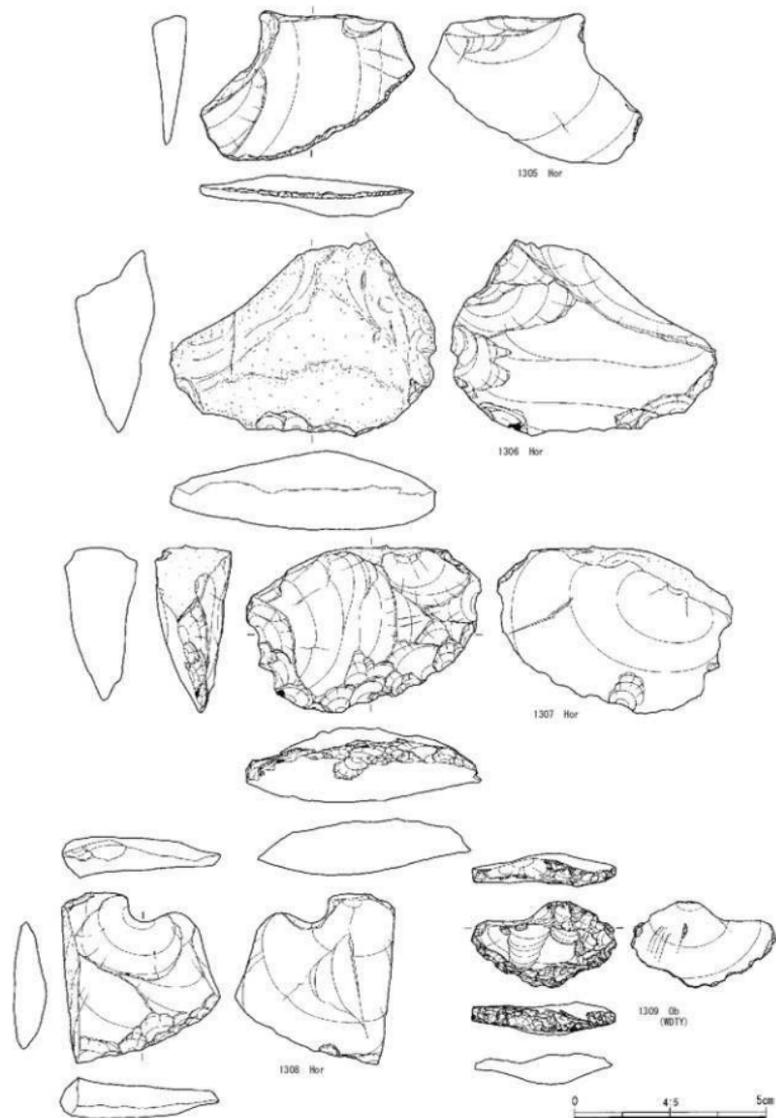
第147圖 石鏃4



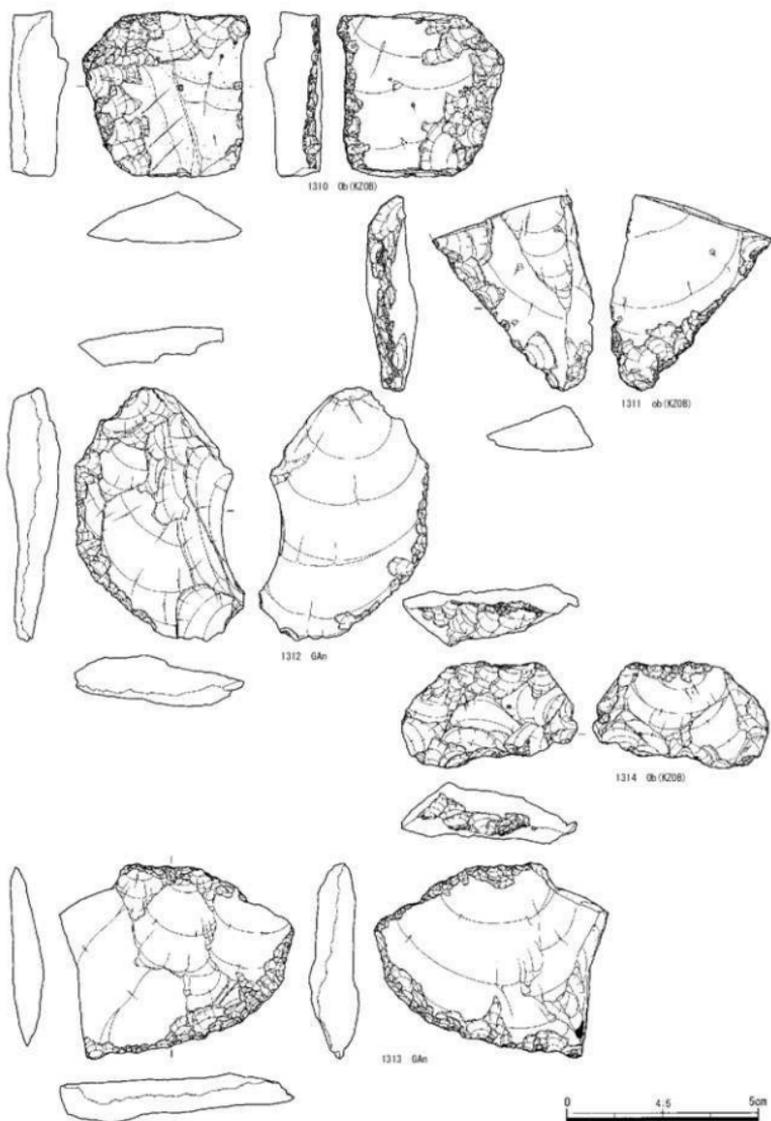
第148図 石畿5



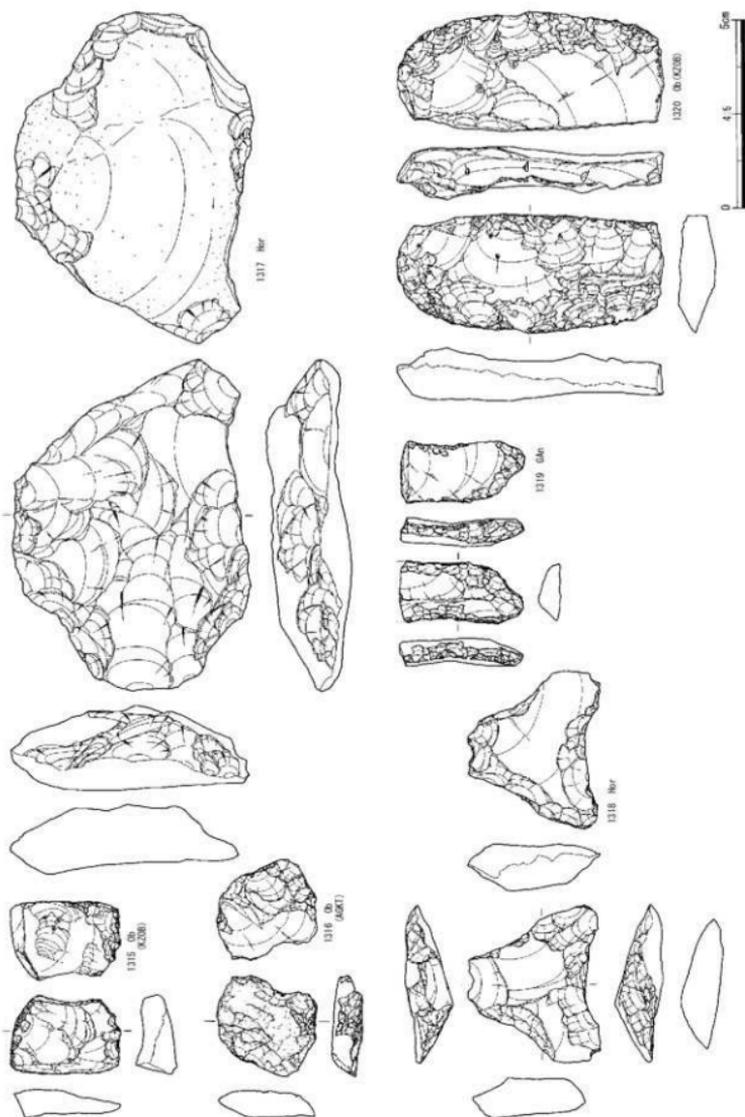
第149図 スクレイパー-1



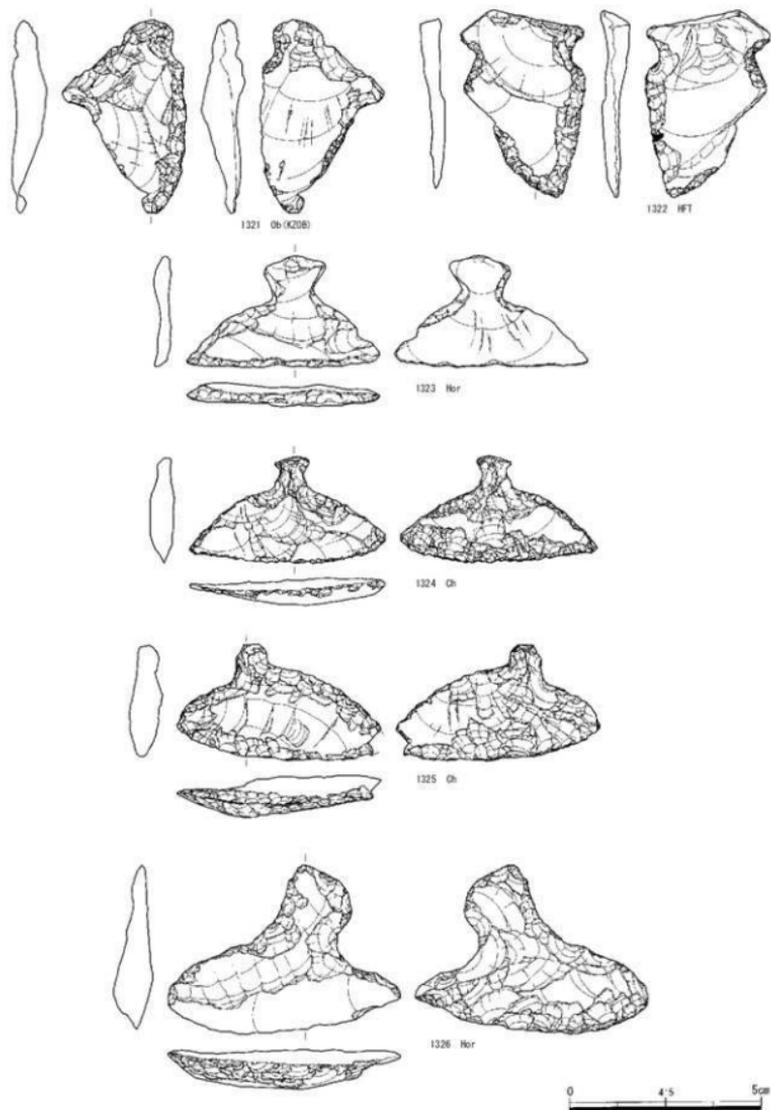
第150図 スクレイパー-2



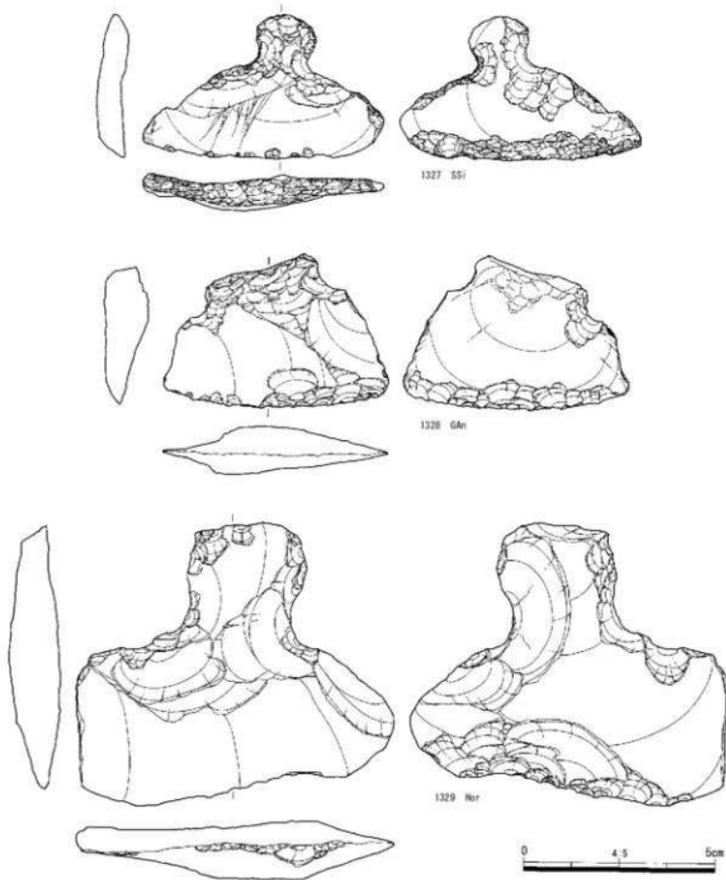
第151図 スクレイパー-3



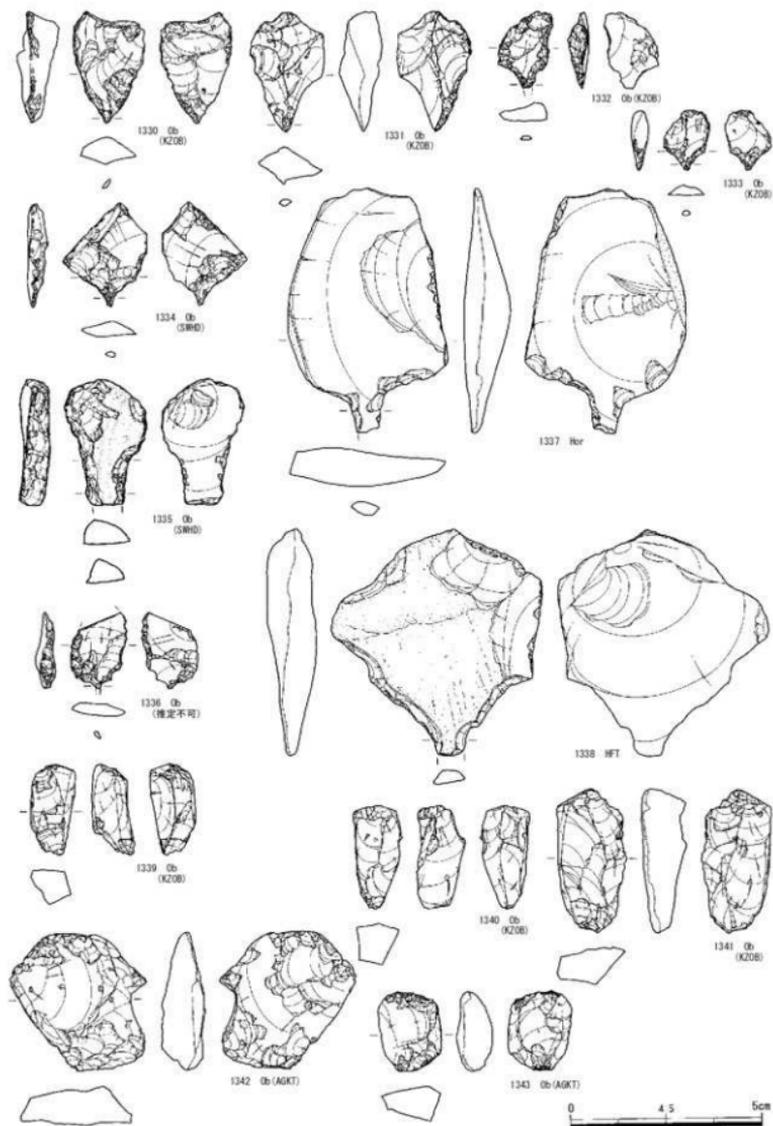
第152図 スクレイパー-4



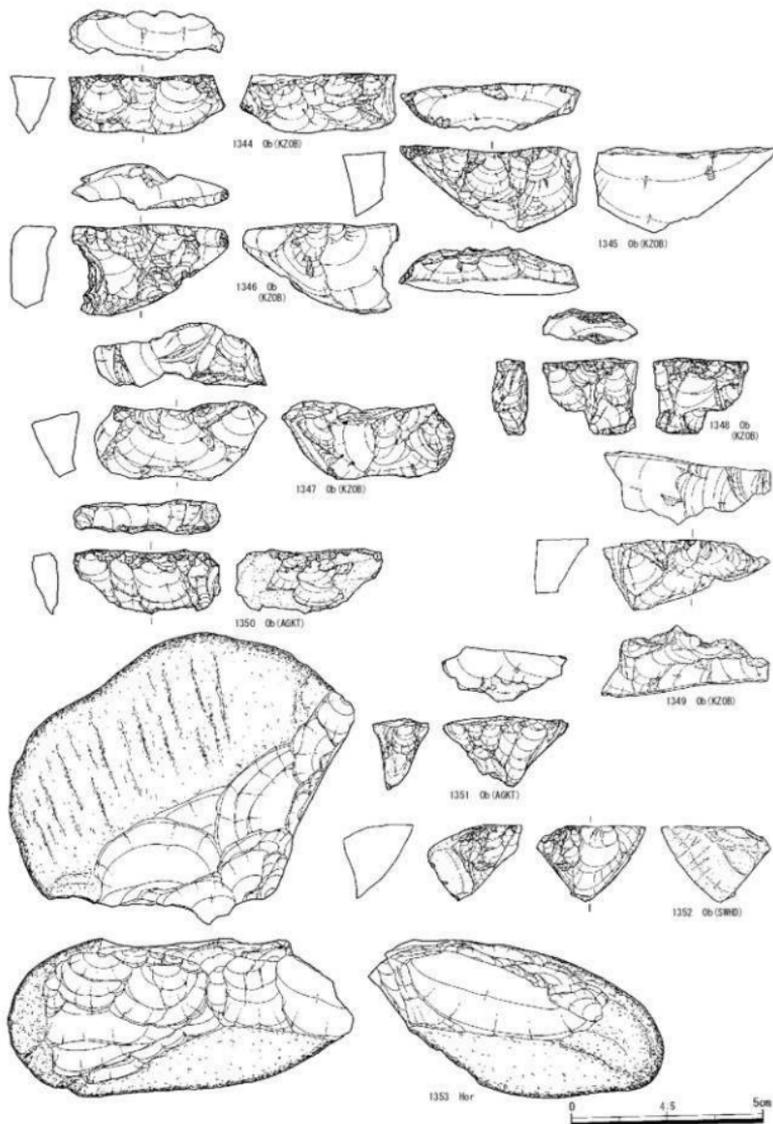
第153圖 石匙1



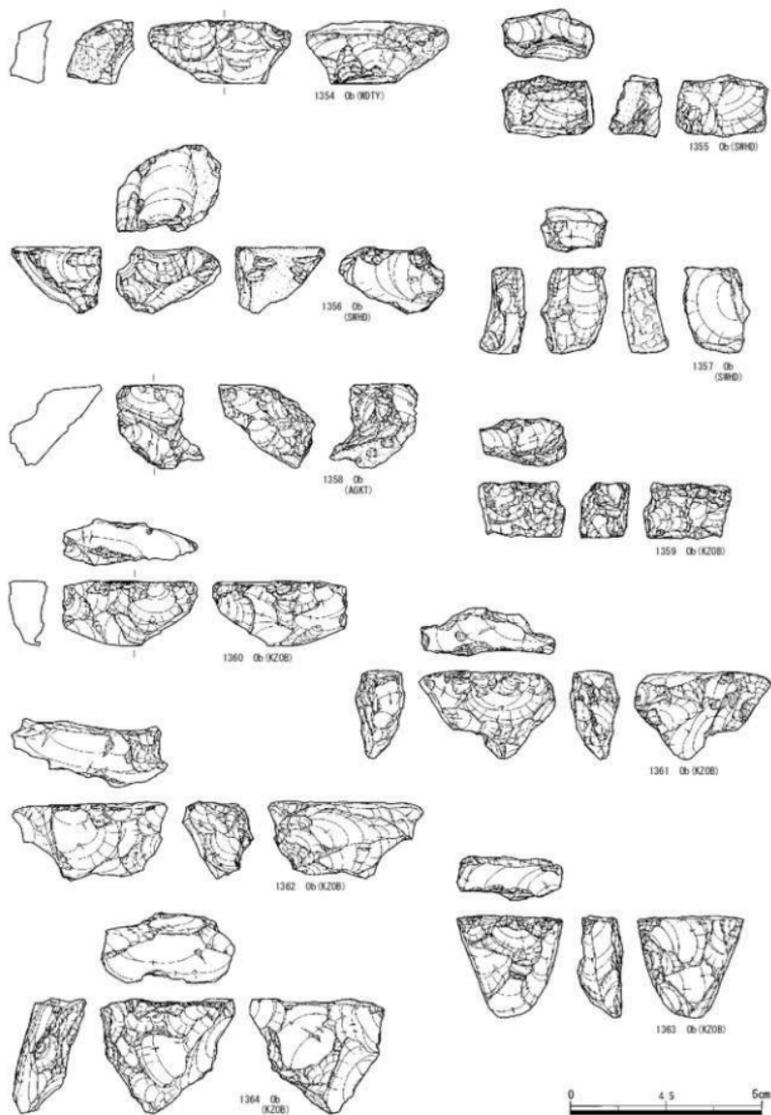
第154図 石匙2



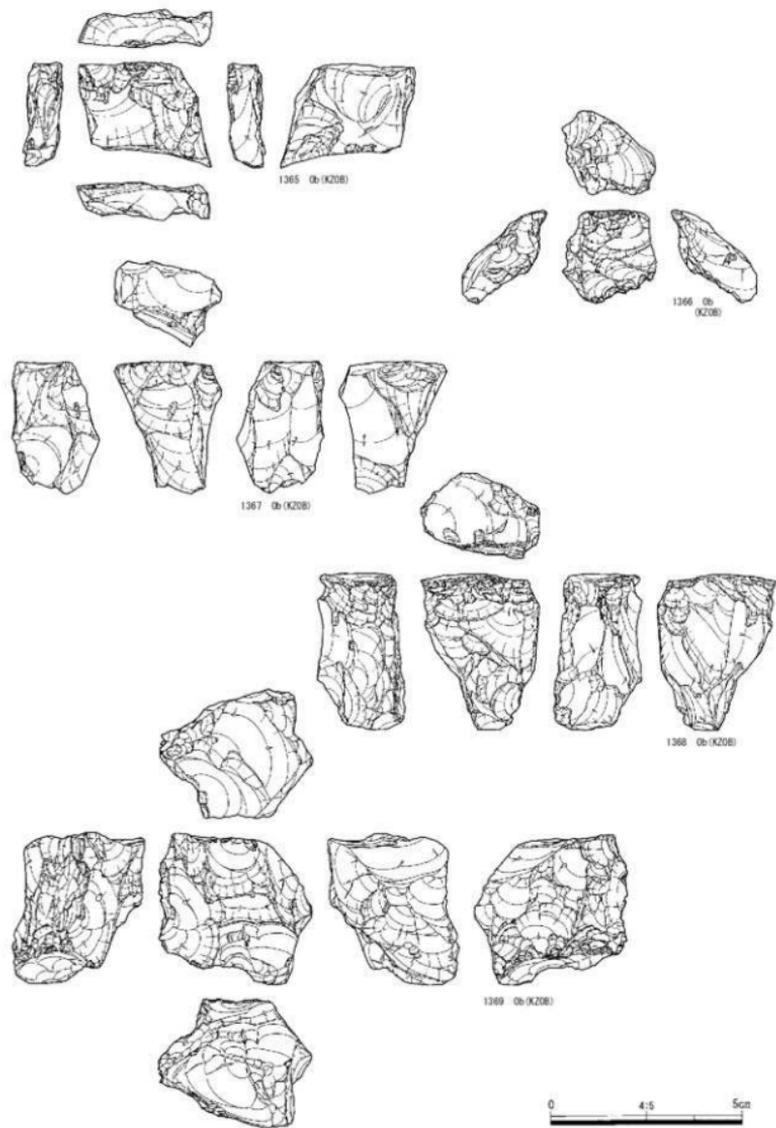
第155圖 石錐・楔形石器



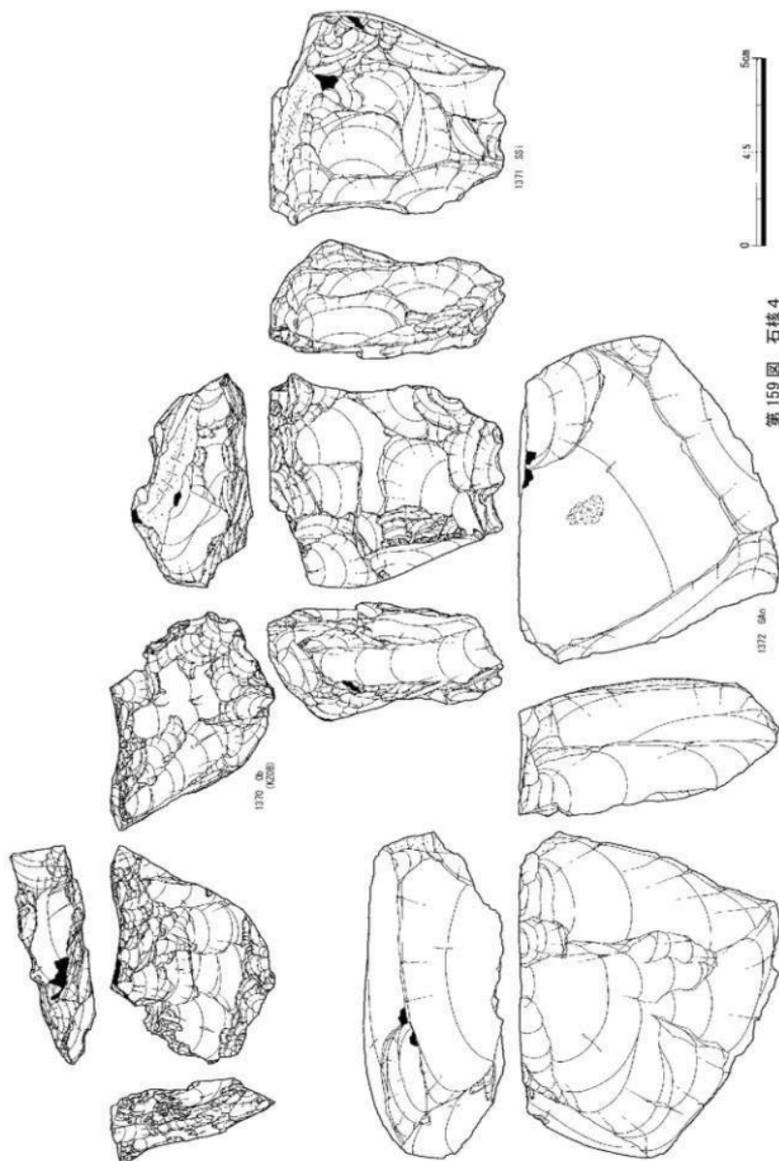
第156図 石核1

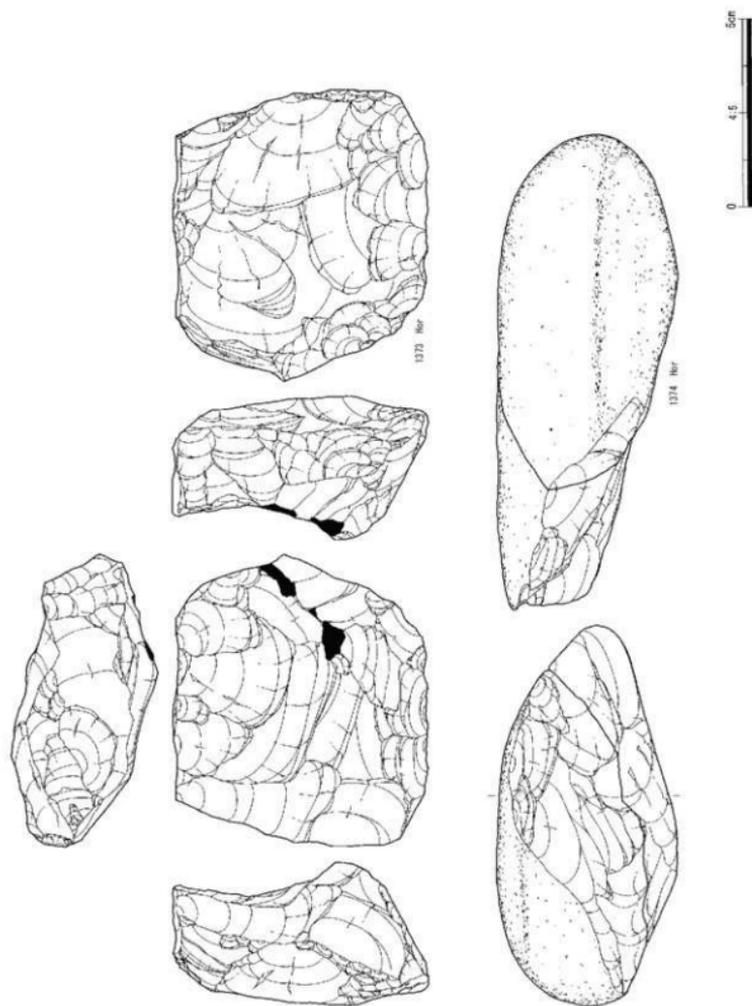


第157圖 石核2

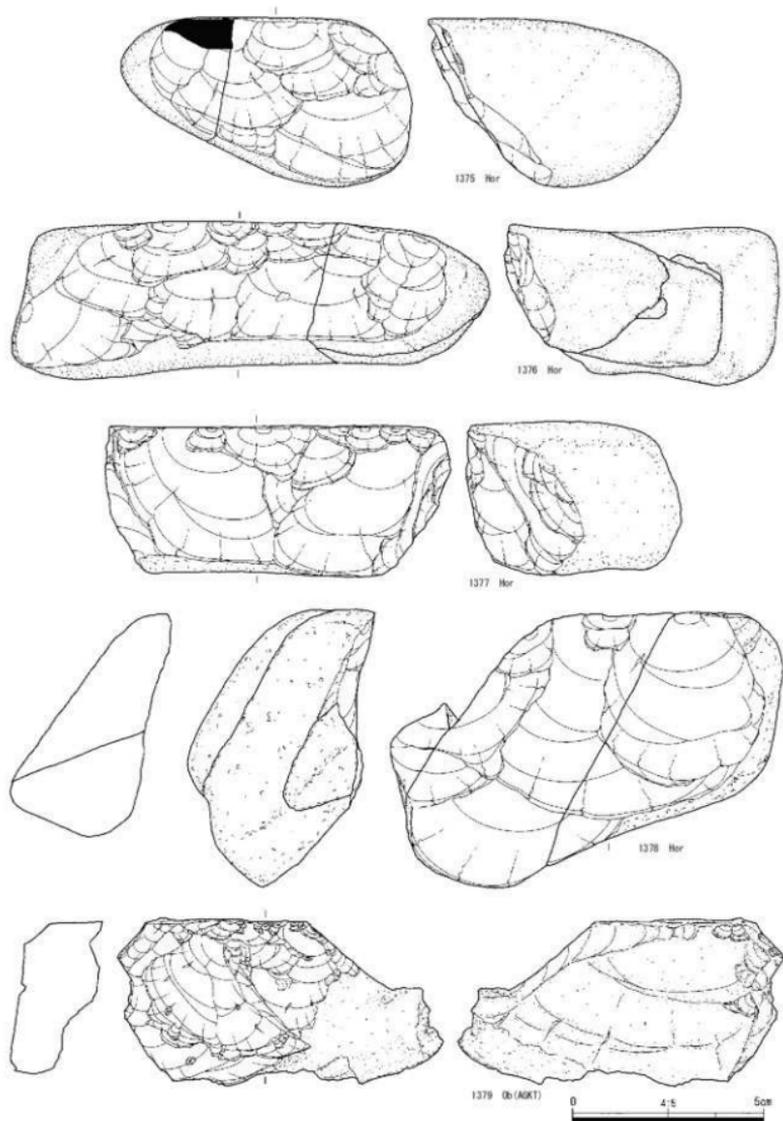


第158図 石核3

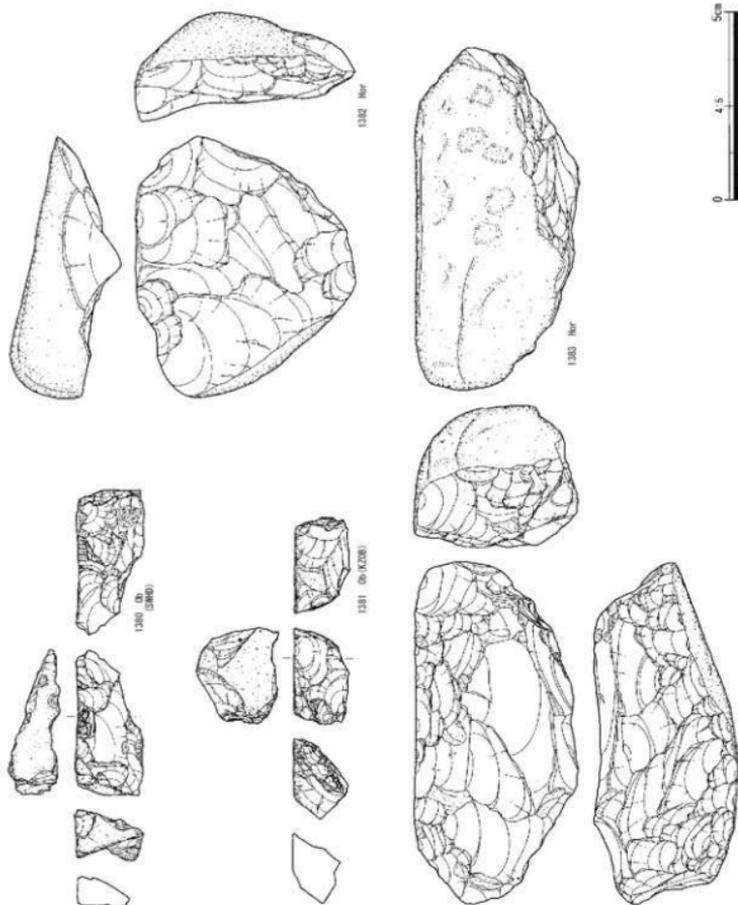




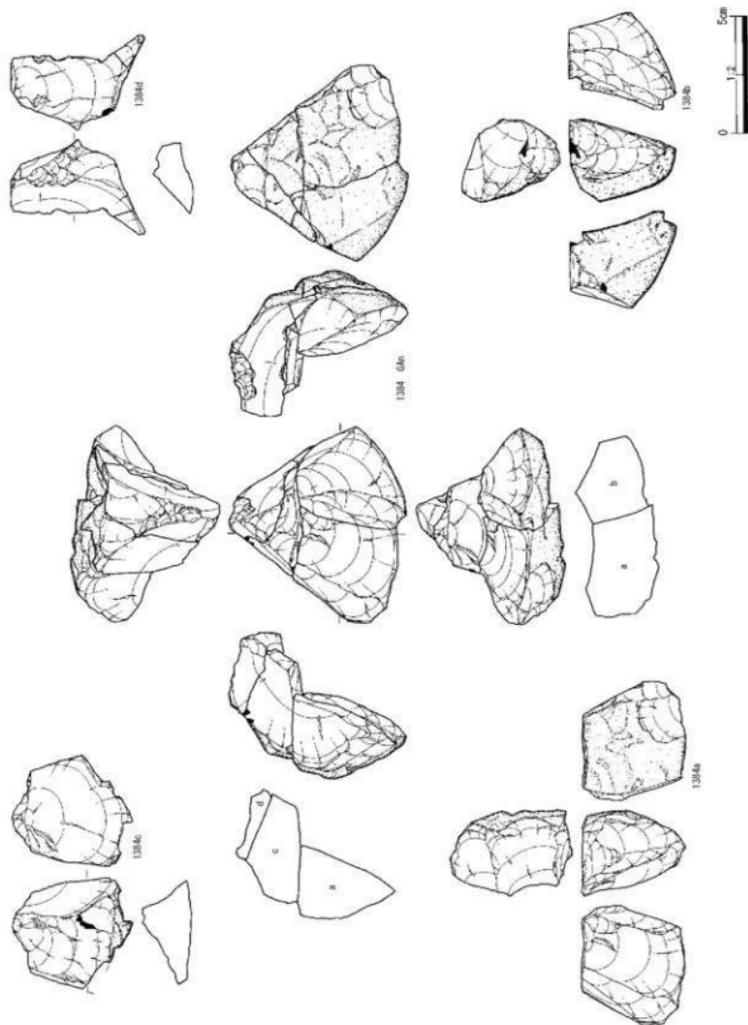
第160図 石核5



第161圖 石核6



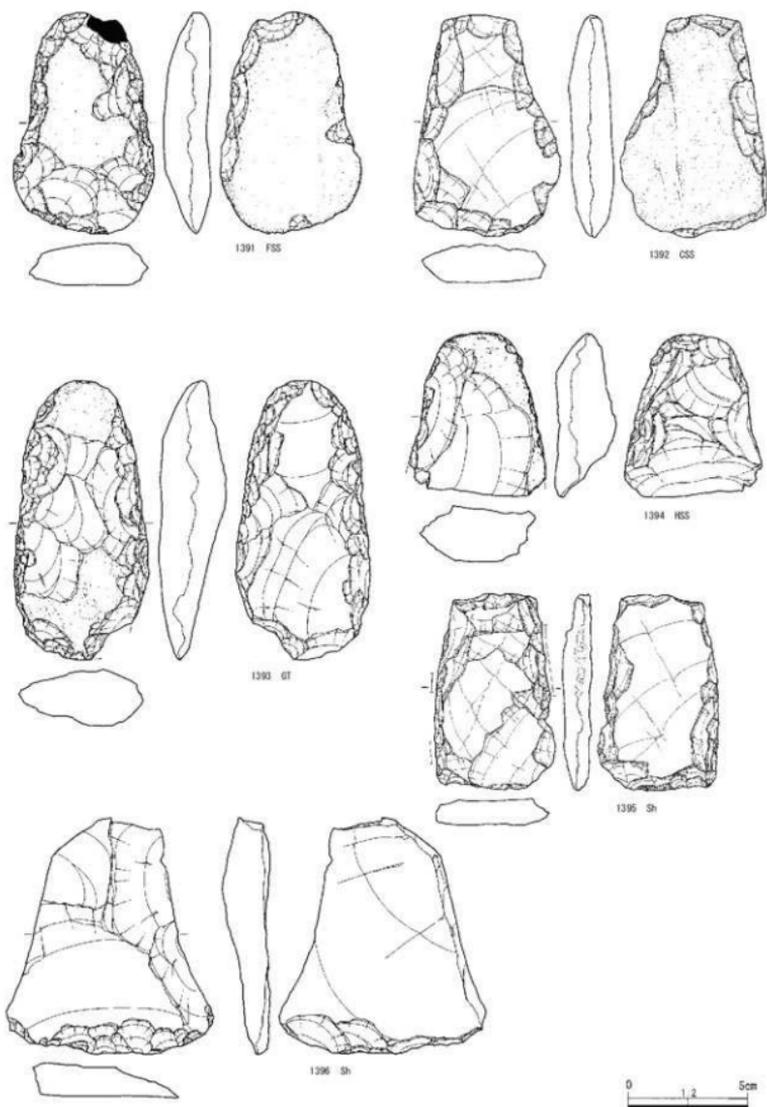
第162図 石核7



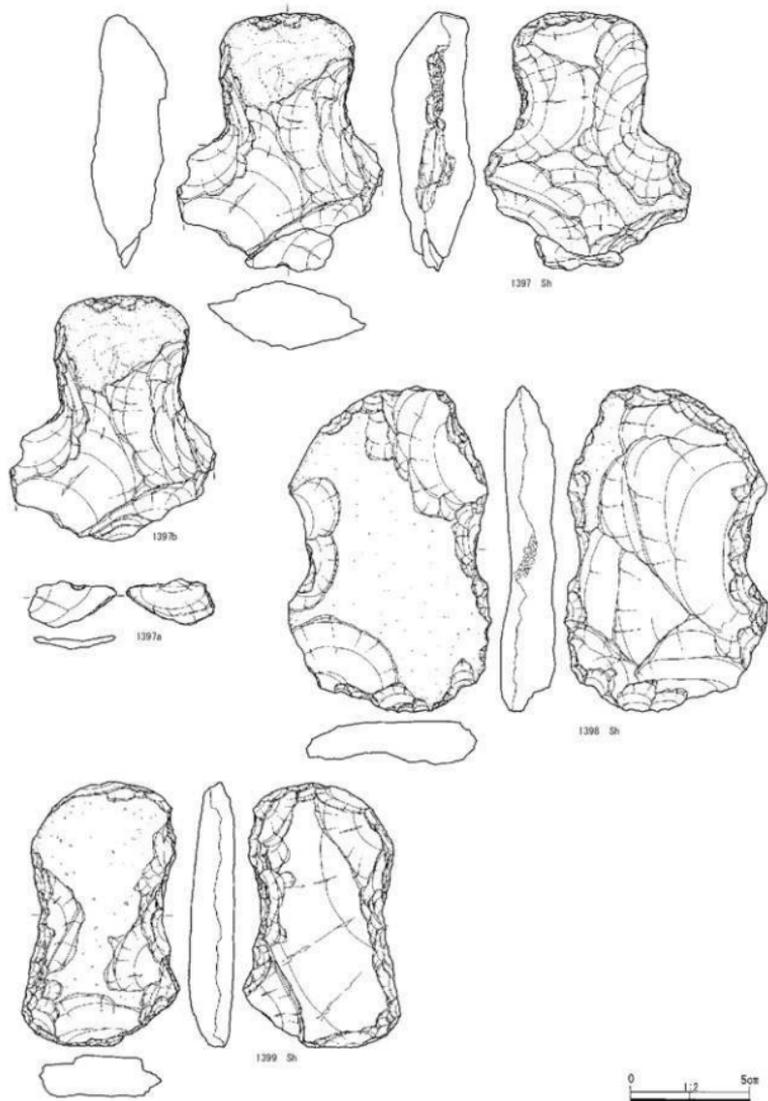
第 163 圖 石核 8



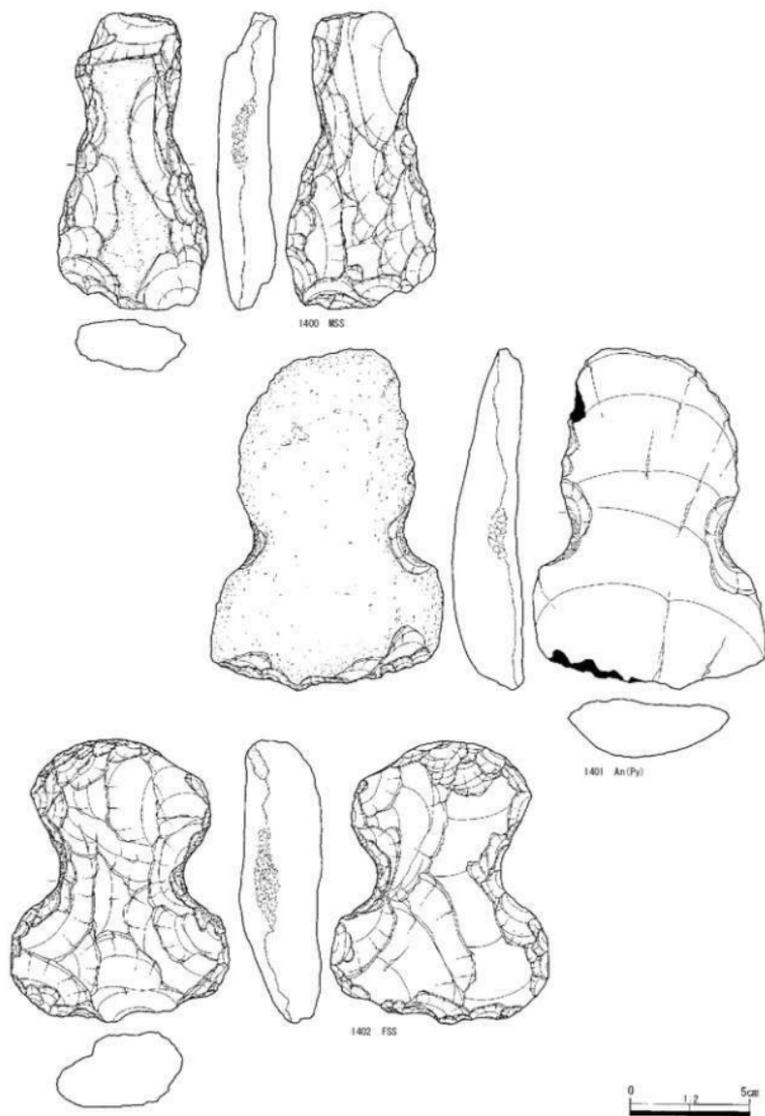
第164図 打製石斧1



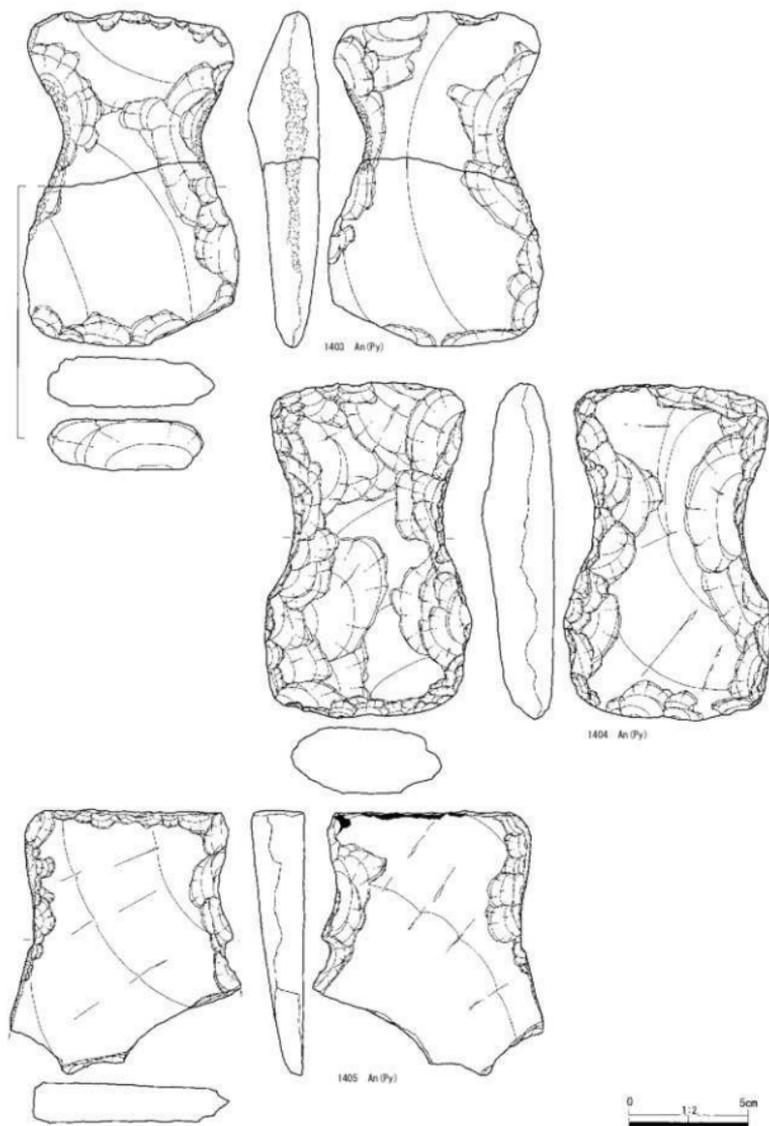
第 165 圖 打製石斧 2



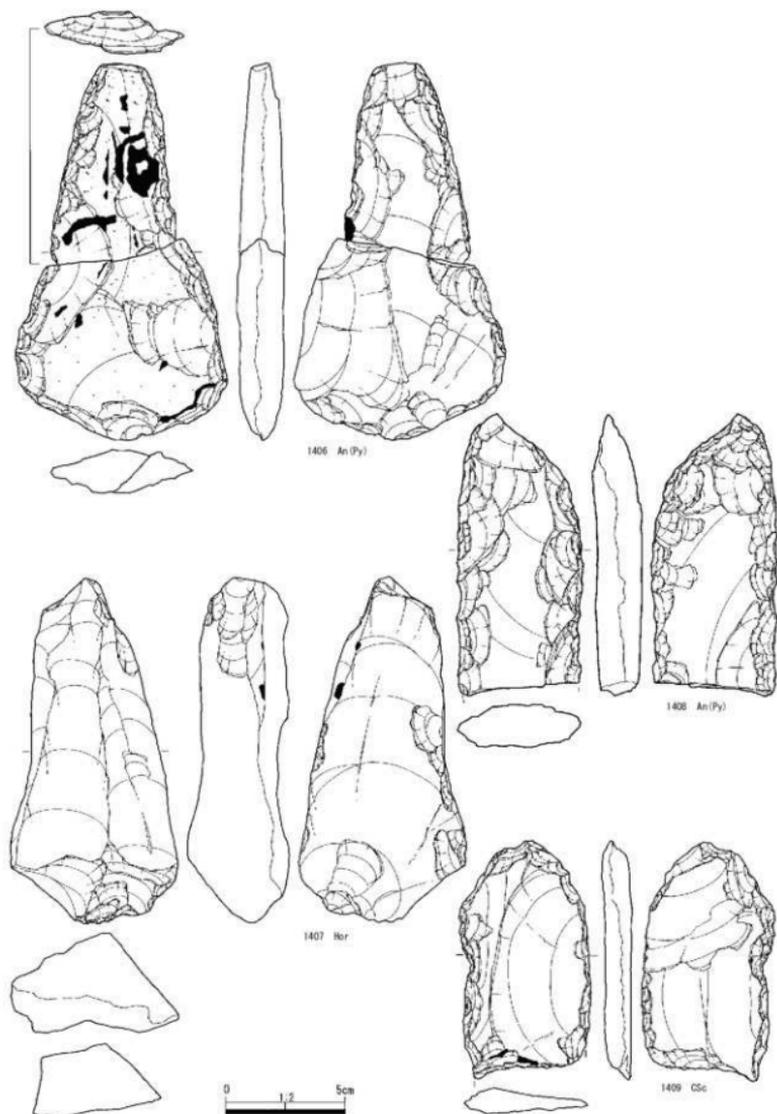
第166図 打製石斧3



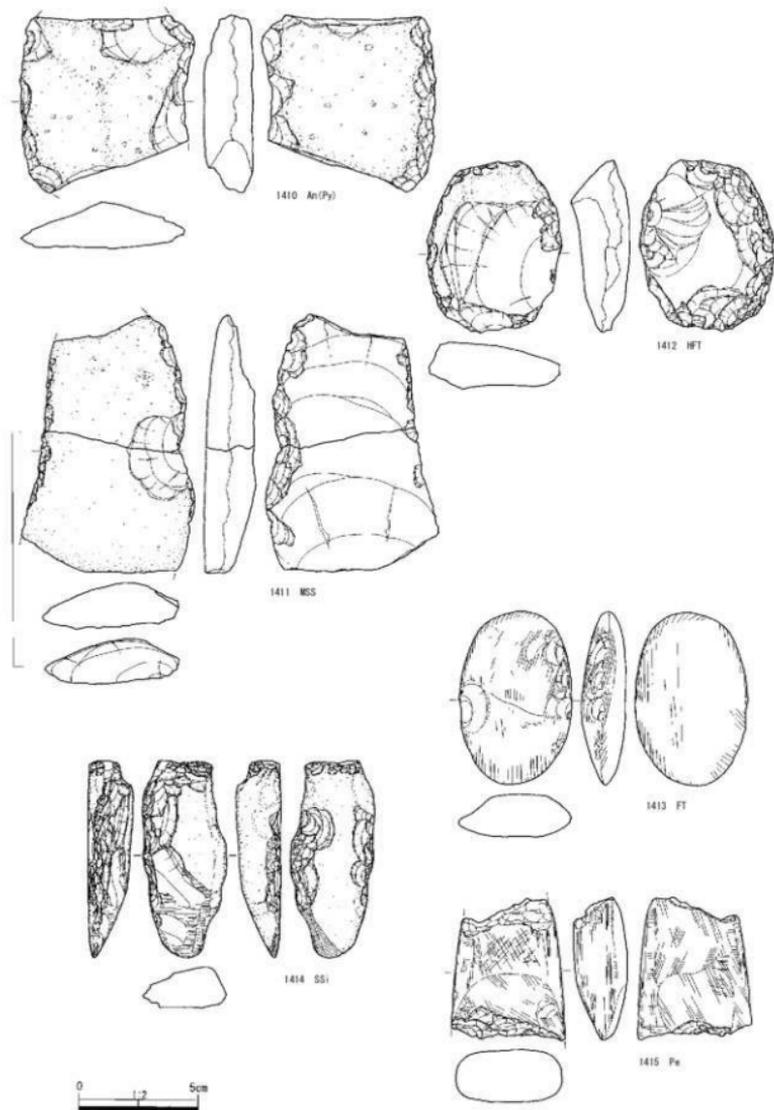
第167圖 打製石斧4



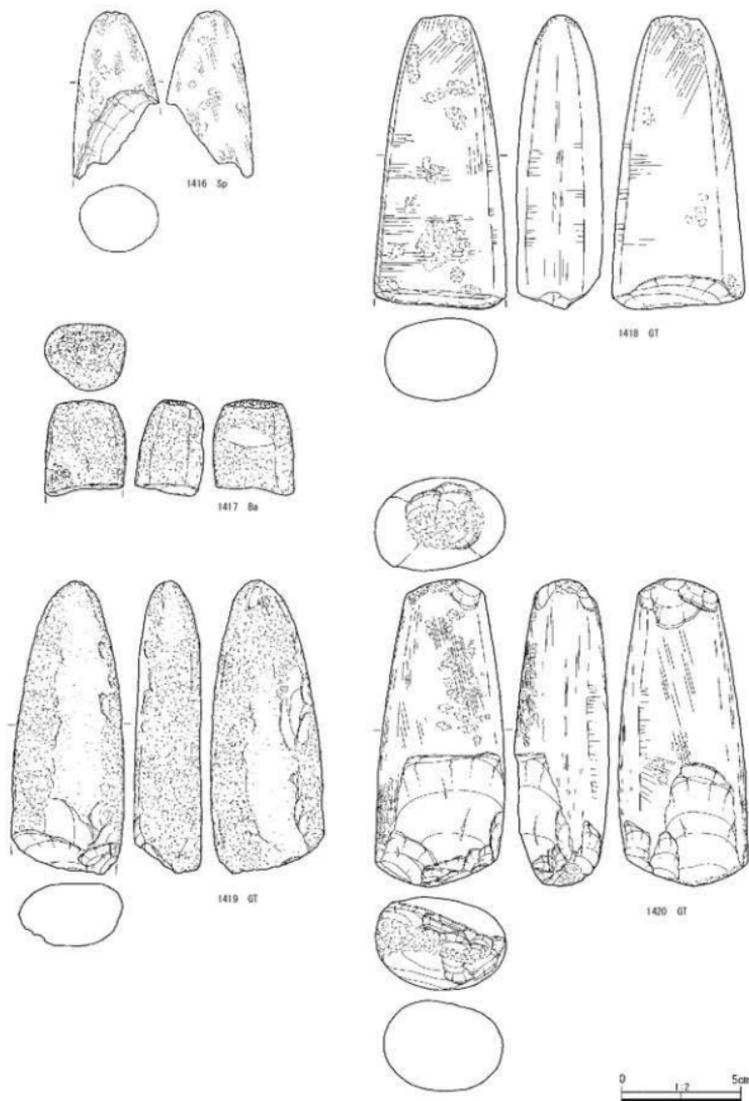
第168図 打製石斧5



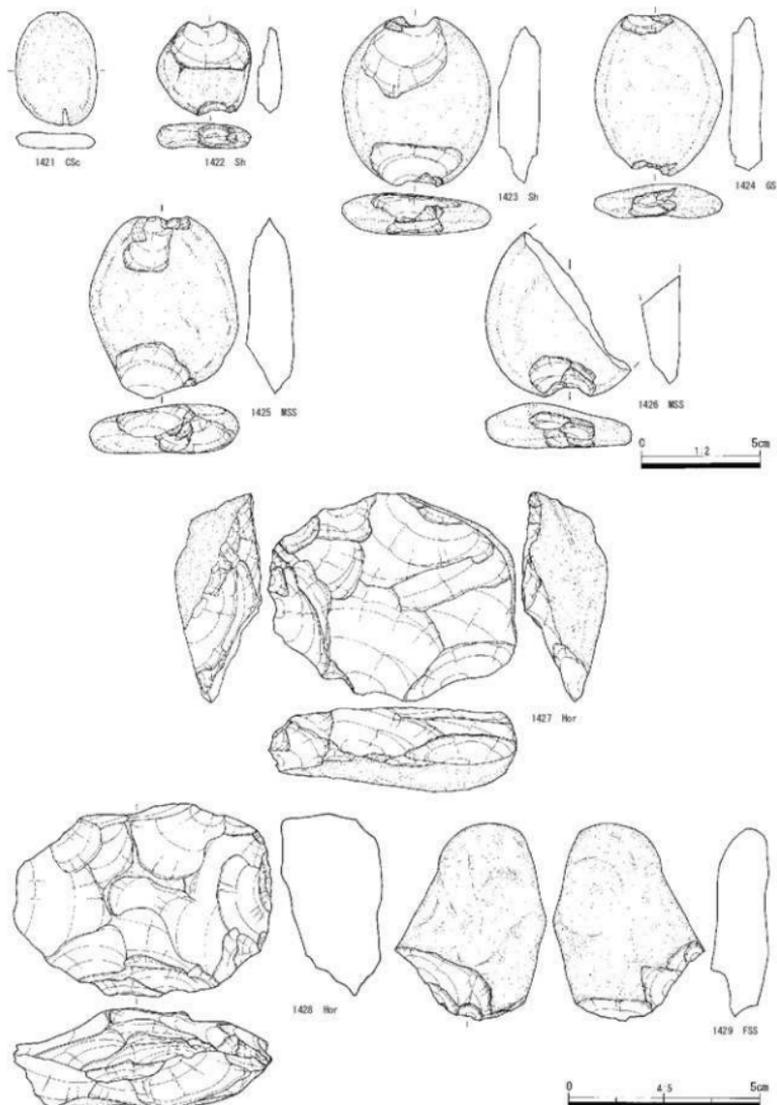
第169圖 打製石斧6



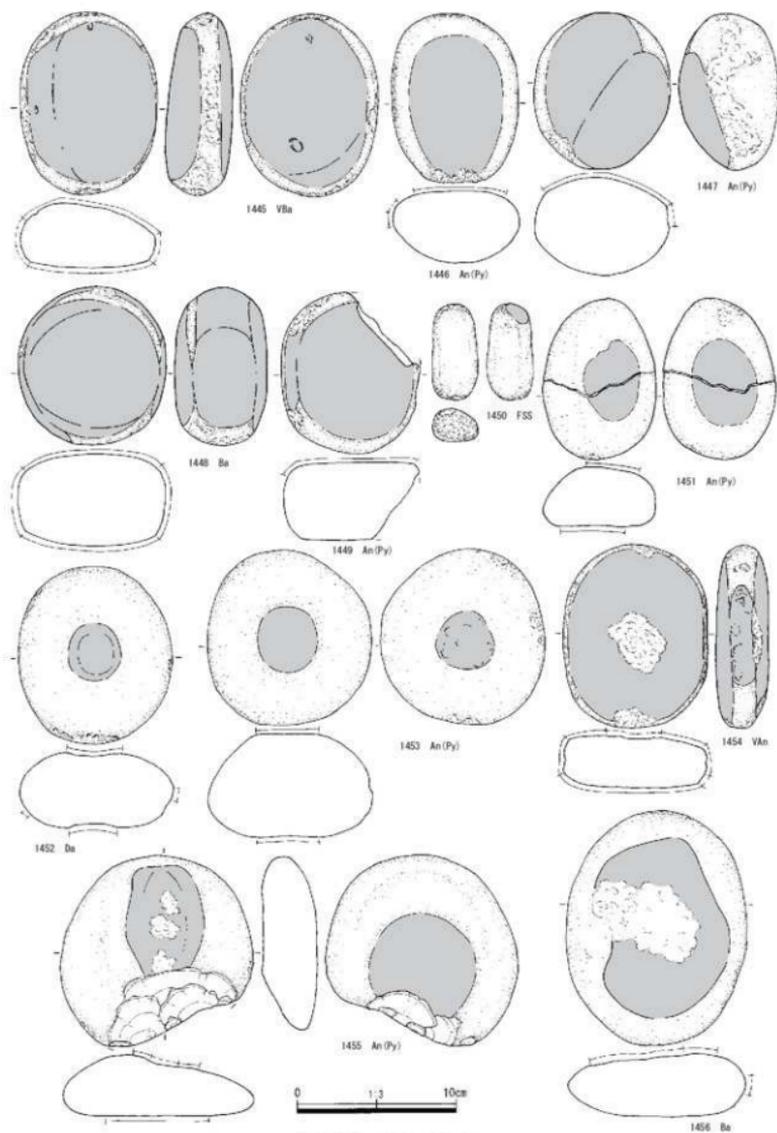
第 170 図 打製石斧 7・磨製石斧 1



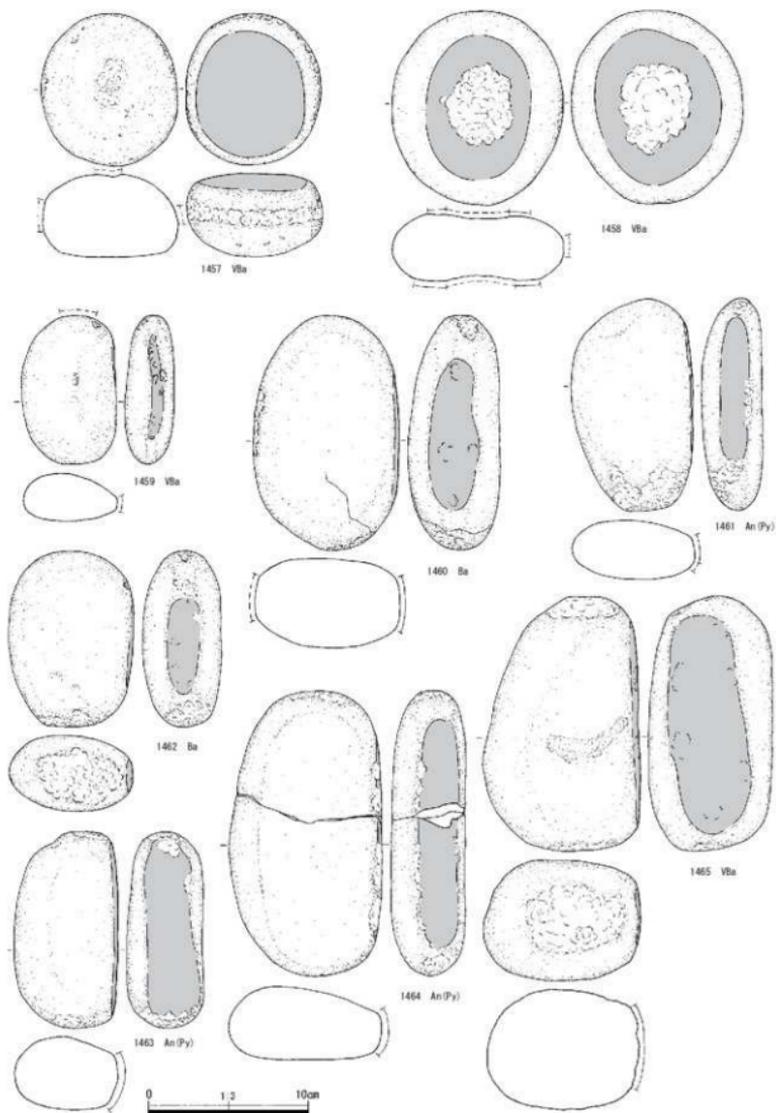
第 171 図 磨製石斧 2



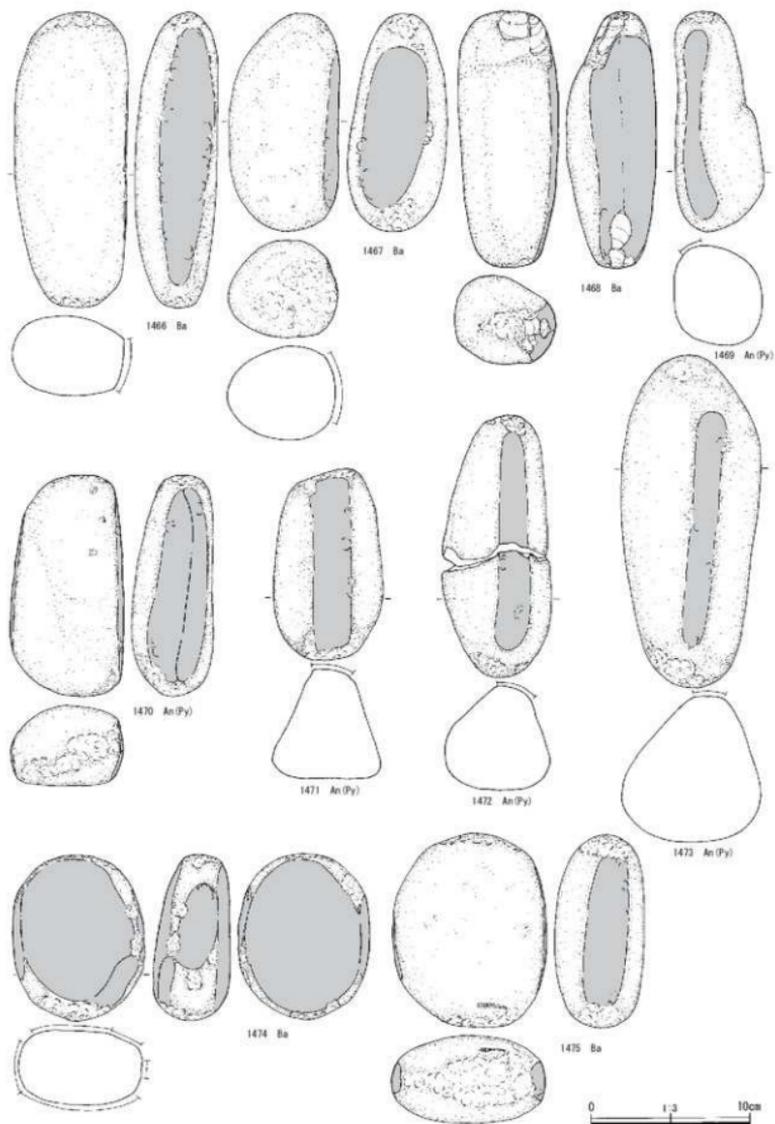
第172図 石錘・石器



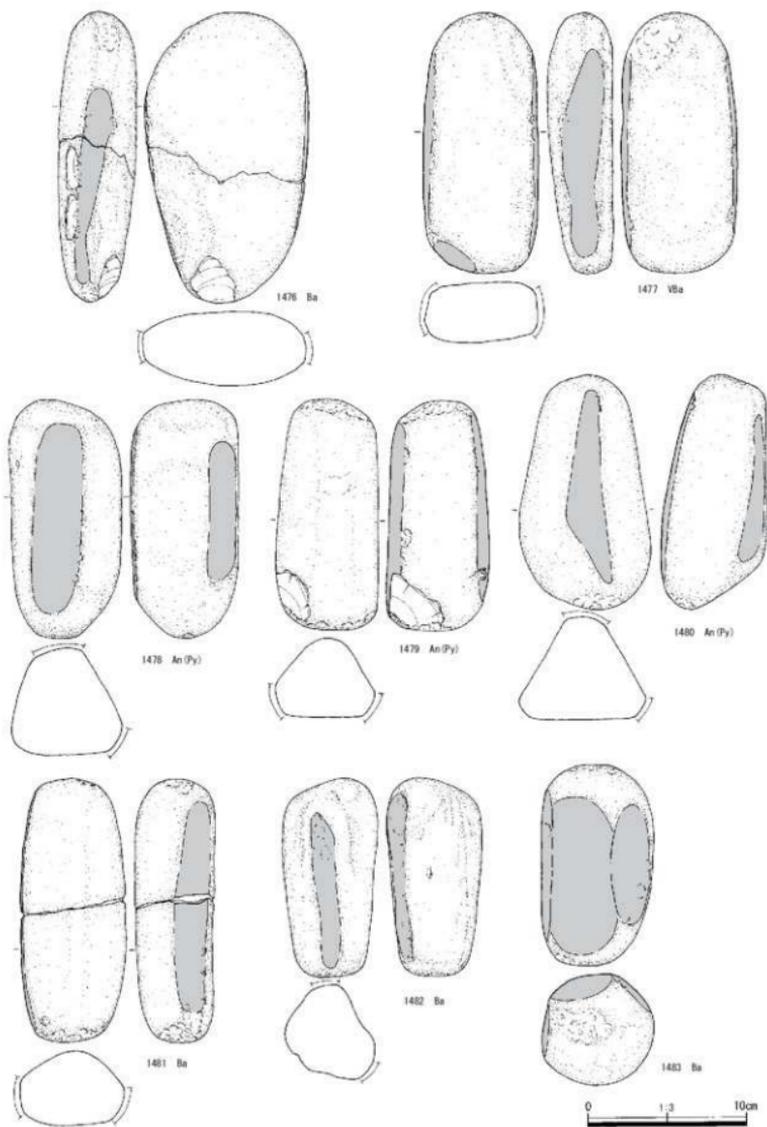
第174図 磨石・敲石類2



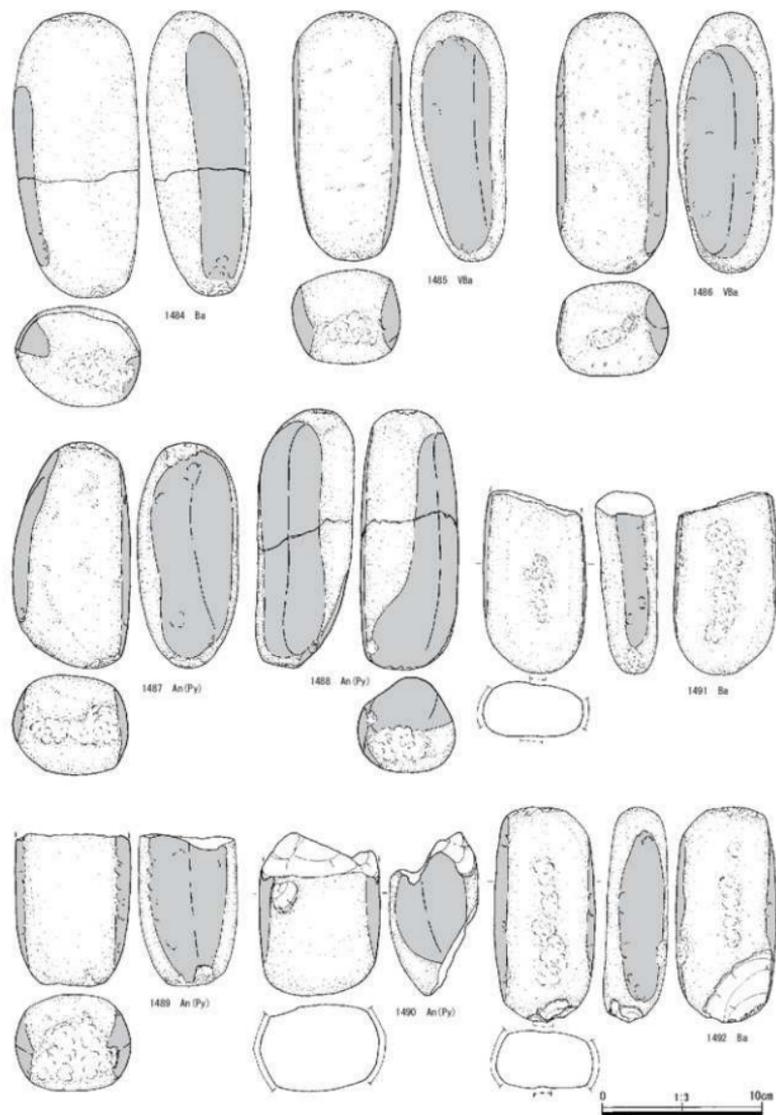
第175図 磨石・敲石類3



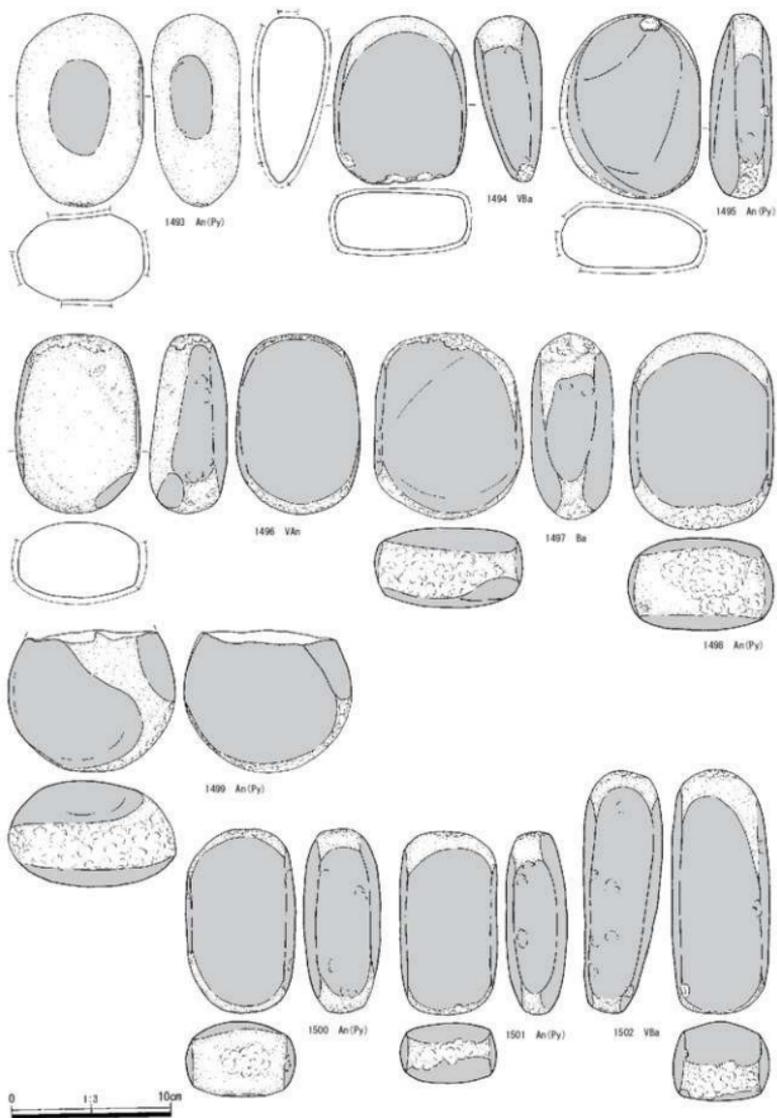
第176図 磨石・敲石類4



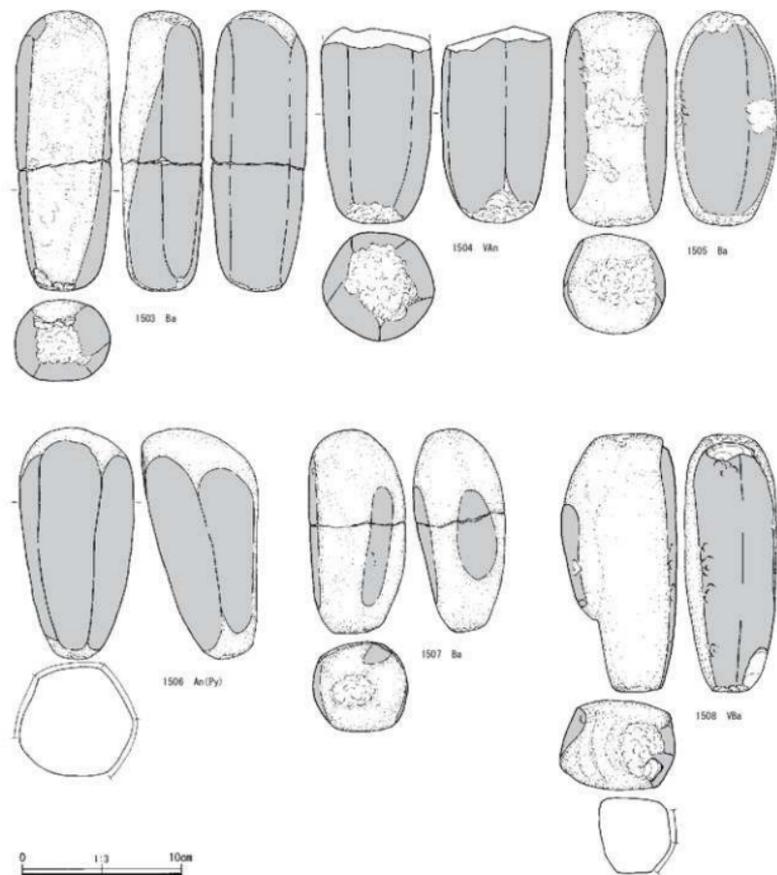
第177図 磨石・敲石類 5



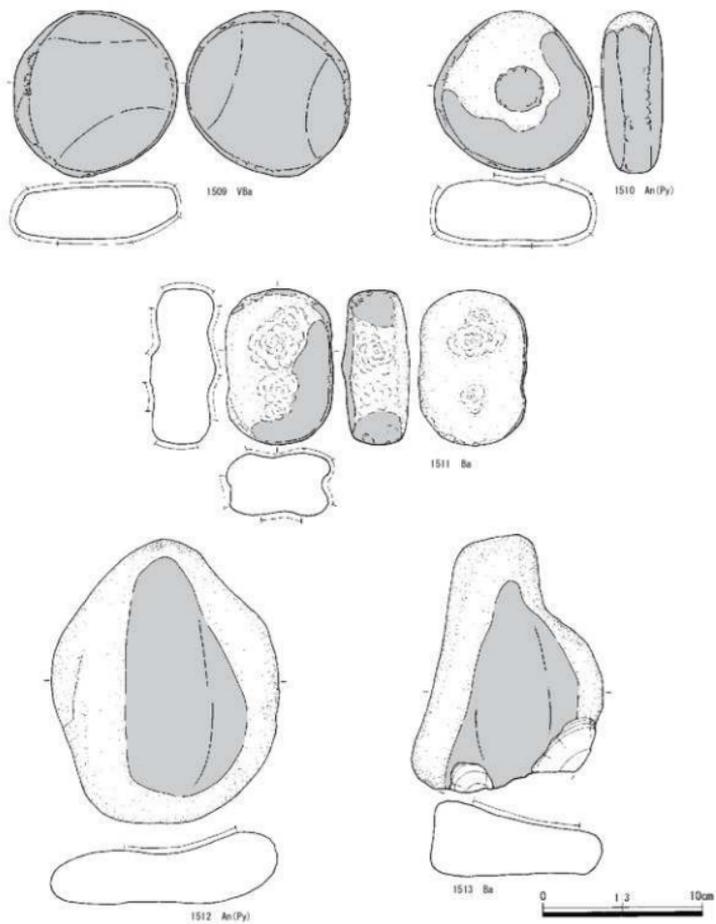
第178図 磨石・敲石類6



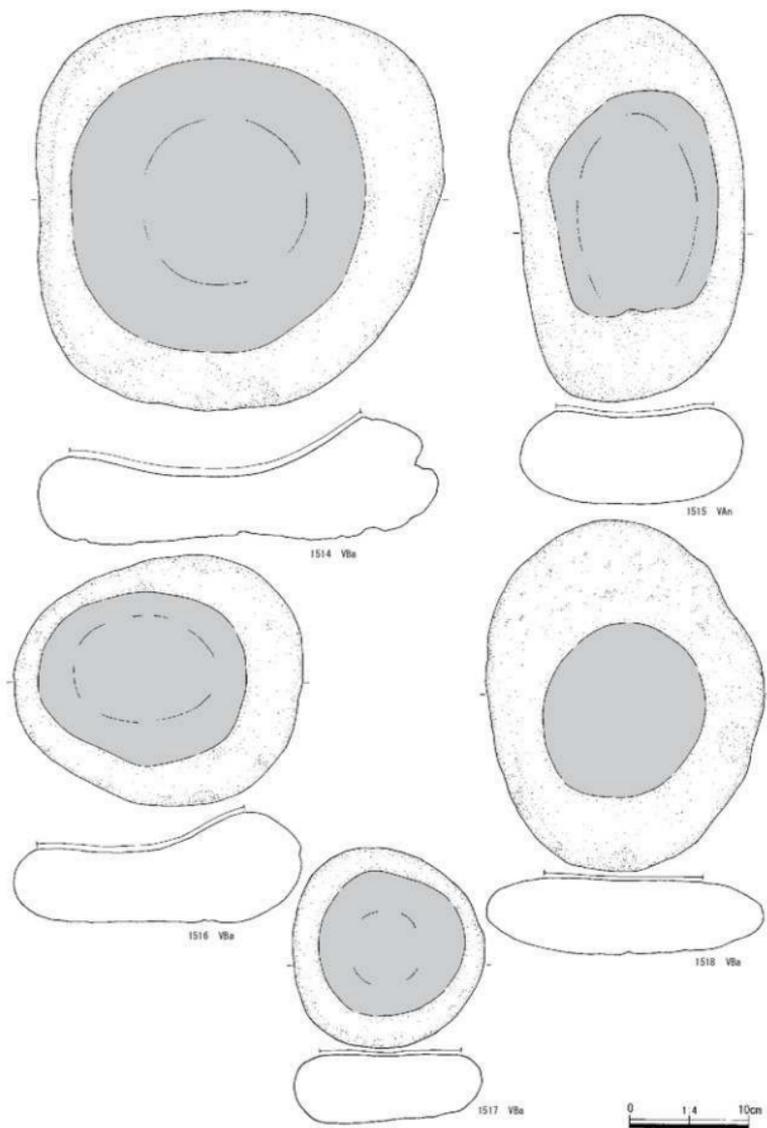
第179図 磨石・敲石類7



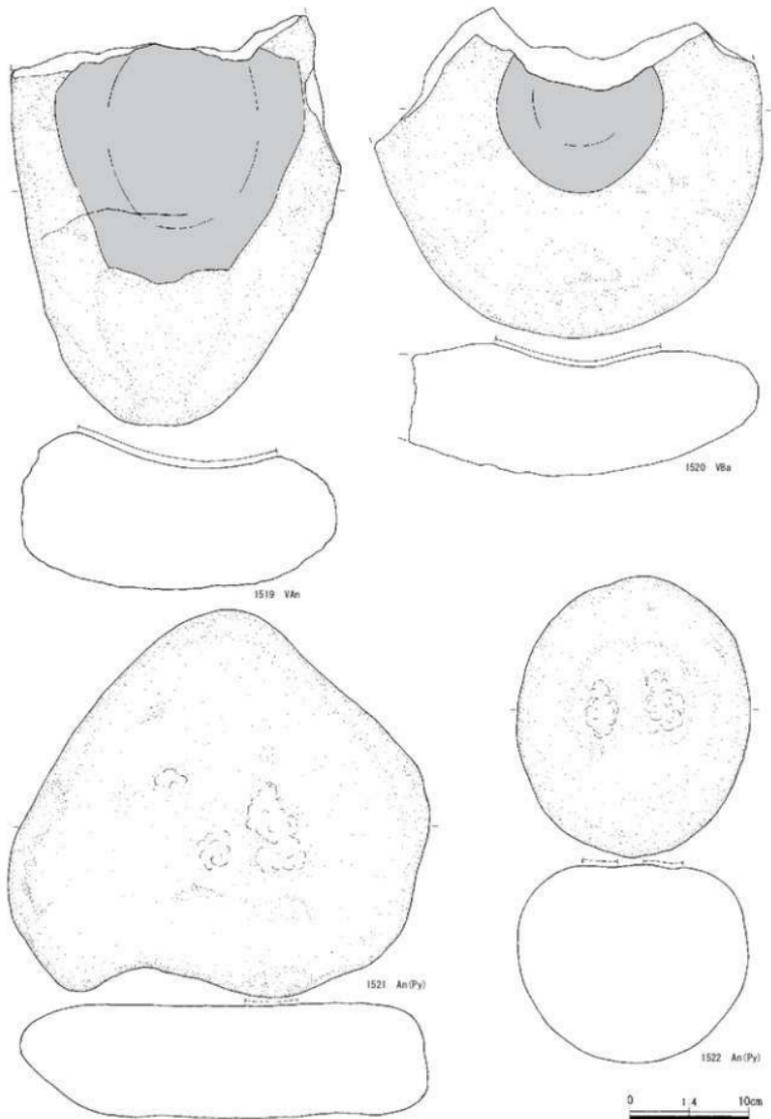
第180図 磨石・敲石類 8



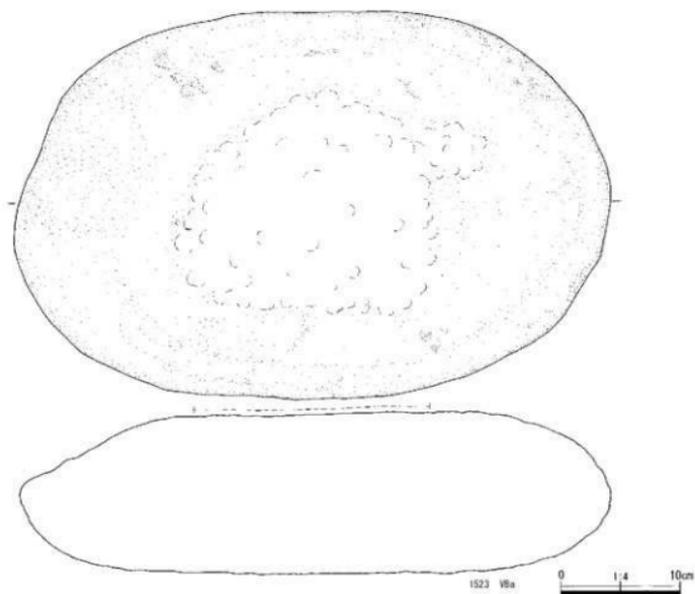
第181図 磨石・敲石類9・石皿1



第182図 石皿2



第183圖 石皿3・台石1



第184図 台石2

第15表 縄文時代包含層出土石器計測表

探跡 番号	探跡 層位	探跡 層位	遺物番号	投 番	層位	グラフ	器種	石材	推定産地	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	接合 番号	形状分類
1155	120	41866	NSC	AD-24	石鏡	Ob	SWHD	18.6	17.4	4.2	1.0			A-1	
1156	120	41867	NSC	AB-21	石鏡	Ob	AGKT	17.8	18.7	3.9	0.9			A-1	
1157	120	81501	赤土	—	石鏡	Ob	SWHD	23.4	17.3	3.2	0.4			B-1a	
1158	120	80117	赤土	—	石鏡	Ob	SWHD	22.9	16.4	2.8	0.5			B-1a	
1159	120	63191	FB	T-11	石鏡	Ob	SWHD	22.1	12.3	3.2	0.5			B-1a	
1160	120	37883	FB	AI-20	石鏡	Ob	SWHD	16.1	11.0	3.1	0.3			B-1	
1161	120	38343	UK	AE-22	石鏡	Ob	SWHD	18.2	10.8	2.8	0.4			B-1	
1162	120	46091	FB	AE-25	石鏡	Ob	SWHD	17.2	13.6	3.1	0.5			B-1	
1163	120	7791	FB	S-18	石鏡	Ob	SWHD	18.9	16.8	3.1	0.4			B-1	
1164	120	42919	AN	AF-23	石鏡	Ob	SWHD	18.9	15.6	3.1	0.6			B-1	
1165	120	23752	FB	AE-25	石鏡	Ob	SWHD	17.6	13.0	3.9	0.6			B-1	
1166	120	6667	—	L-13	石鏡	Ob	SWHD	17.1	14.2	2.6	0.4			B-1	
1167	120	67375	クロ	V-12	石鏡	Ob	SWHD	17.8	13.8	3.6	0.6			B-1	
1168	120	66484	KU	Q-12	石鏡	Ob	SWHD	21.4	12.8	4.2	0.6			B-1	
1169	120	48286	FB	AB-21	石鏡	Ob	SWHD	16.8	15.4	3.1	0.6			B-1	
1170	120	27624	FB	AI-20	石鏡	Ob	SWHD	20.9	14.6	3.8	0.9			B-1	
1171	120	19118	FB	W-20	石鏡	Ob	SWHD	18.4	15.8	3.5	0.7			B-1	
1172	120	66582	クロ	P-10	石鏡	Ob	SWHD	22.1	16.1	4.6	1.2			B-1	
1173	120	67942	FB	V-12	石鏡	Ob	SWHD	21.6	15.4	3.6	1.0			B-1	
1174	120	47955	FB	AA-24	石鏡	Ob	SWHD	21.2	14.6	3.2	0.8			B-1	
1175	120	50000	FB	AA-22	石鏡	Ob	SWHD	21.9	14.2	2.8	0.7			B-1	
1176	120	8077	クロ	AF-23	石鏡	Ob	SWHD	26.6	17.9	4.2	1.4			B-1	
1177	120	46597	FB	AD-22	石鏡	Ob	SWHD	23.6	14.8	4.4	1.0			B-1	
1178	120	46598	KU	AE-26	石鏡	Ob	SWHD	23.9	18.3	4.5	1.2			B-1	
1179	120	37880	FB	AI-21	石鏡	Ob	SWHD	25.8	19.2	4.2	1.1			B-1	
1180	120	56313	KU	AD-23	石鏡	Ob	SWHD	27.9	18.2	4.6	1.5			B-1	
1181	120	53452	FB	Z-22	石鏡	Ob	SWHD	29.6	17.1	4.6	1.7			B-1	
1182	120	2128	FB	W-10	石鏡	Ob	SWHD	25.6	17.6	4.3	1.1			B-1	
1183	120	11013	FB	Y-20	石鏡	Ob	SWHD	28.8	18.6	4.5	1.6			B-1	
1184	120	68425	AN	Y-12	石鏡	Ob	KZOB	11.8	12.6	2.1	0.2			B-1	
1185	120	18978	FB	—	石鏡	Ob	KZOB	16.1	11.3	3.7	0.6			B-1	
1186	120	57319	FB	AC-25	石鏡	Ob	KZOB	18.4	11.3	4.4	0.7			B-1	
1187	120	13184	FB	X-21	石鏡	Ob	KZOB	18.4	11.9	4.1	0.5			B-1	
1188	120	16144	FB	W-21	石鏡	Ob	KZOB	17.9	13.8	4.1	0.6			B-1	
1189	120	67607	FB	U-13	石鏡	Ob	KZOB	15.2	13.1	3.5	0.5			B-1	
1190	120	36538	KU	AI-20	石鏡	Ob	KZOB	15.2	14.9	4.2	0.6			B-1	
1191	120	17211	FB	W-20	石鏡	Ob	KZOB	14.8	15.1	4.5	0.7			B-1	
1192	120	14183	FB	Z-21	石鏡	Ob	KZOB	15.9	15.6	4.3	0.6			B-1	
1193	120	17566	FB	X-21	石鏡	Ob	KZOB	19.1	13.8	3.8	0.7			B-1	
1194	120	8417	FB	AH-26	石鏡	Ob	KZOB	18.5	16.2	4.3	0.7			B-1	
1195	120	51168	FB	Y-21	石鏡	Ob	KZOB	20.4	17.6	3.8	1.0			B-1	
1196	120	285	FB	Y-21	石鏡	Ob	KZOB	18.1	16.1	4.2	0.9			B-1	
1197	120	13640	FB	R-17	石鏡	Ob	KZOB	17.2	20.9	7.2	1.4			B-1	
1198	120	67131	クロ	V-13	石鏡	Ob	KZOB	21.0	15.4	4.6	1.0			B-1	
1199	120	35584	FB	Z-21	石鏡	Ob	KZOB	21.1	15.9	4.2	1.0			B-1	
1200	120	67339	クロ	W-12	石鏡	Ob	KZOB	22.2	15.6	4.9	1.3			B-1	
1201	120	18968	FB	V-20	石鏡	Ob	KZOB	21.7	15.9	5.4	1.4			B-1	
1202	120	62962	FB	Z-21	石鏡	Ob	KZOB	20.5	17.8	6.2	1.4			B-1	
1203	120	66850	KU	Q-10	石鏡	Ob	KZOB	22.7	16.3	4.5	1.4			B-1	
1204	120	35599	KU	AG-23	石鏡	Ob	KZOB	24.1	16.9	3.2	1.2			B-1	
1205	120	68424	AN	Y-12	石鏡	Ob	KZOB	23.3	13.8	6.4	1.3			B-1	
1206	120	50814	FB	AA-23	石鏡	Ob	KZOB	21.6	14.1	3.8	0.8			B-1	
1207	120	11863	FB	W-20	石鏡	Ob	KZOB	23.6	16.3	4.8	1.1			B-1	
1208	120	51180	FB	Y-21	石鏡	Ob	KZOB	22.6	17.2	4.4	1.1			B-1	
1209	120	53402	AN	W-10	石鏡	Ob	KZOB	23.8	17.6	3.2	0.9			B-1	
1210	120	16504	FB	K-16	石鏡	Ob	KZOB	26.2	18.4	6.2	2.1			B-1	
1211	120	19466	FB	X-20	石鏡	Ob	KZOB	27.6	15.3	5.0	1.3			B-1	
1212	120	64299	FB	AB-16	石鏡	Ob	KZOB	28.9	13.8	3.8	1.2			B-1	
1213	120	65979	AN	R-14	石鏡	Ob	KZOB	33.4	14.4	4.6	1.8			B-1	
1214	120	18522	FB	W-20	石鏡	Ob	KZOB	25.3	16.8	4.8	1.7			B-1	
1215	120	66689	KU	P-10	石鏡	Ob	KZOB	21.8	22.4	3.8	1.3			B-1	
1216	121	49066	FB	AD-20	石鏡	Ob	推定不可	24.4	12.2	4.9	1.1			B-1	
1217	121	18179	FB	X-21	石鏡	Ob	AGKT	18.1	15.1	2.9	0.4			B-1	
1218	121	806	FB	Z-22	石鏡	Ob	AGKT	17.6	13.1	2.9	0.3			B-1	
1219	121	56339	FB	AA-22	石鏡	Ob	AGKT	19.5	14.1	2.7	0.5			B-1	
1220	121	856	FB	AD-25	石鏡	Ob	AGKT	19.8	16.0	3.6	0.7			B-1	
1221	121	35896	FB	AI-26	石鏡	Ob	AGKT	25.0	16.9	2.1	0.5			B-1	
1222	121	35695	FB	AI-26	石鏡	Ob	HNIJ	11.4	10.7	3.4	0.3			B-1	
1223	121	59133	FB	AC-16	石鏡	Ob	HNIJ	21.0	11.5	4.8	1.0			B-1	
1224	121	7868	FB	AJ-29	石鏡	Ob	WDFY	17.7	16.2	4.9	1.0			B-1	
1225	121	21441	FB	Y-12	石鏡	Hoz	17.9	17.9	3.0	0.74			B-1		
1226	121	61536	FB	Z-21	石鏡	Rhy	15.6	10.6	2.4	0.2			B-1		
1227	121	11518	KU	W-21	石鏡	Ob	19.1	15.6	4.4	1.1			B-1		
1228	121	34173	FB	W-10	石鏡	Ss1	25.6	16.8	2.1	0.5			B-1		
1229	121	34167	FB	AI-27	石鏡	Ssb	20.2	14.9	3.6	0.8			B-1		
1230	121	28225	FB	AI-30	石鏡	GAn	19.2	15.4	2.6	0.7			B-1		
1231	121	55317	KU	AF-21	石鏡	GAn	24.5	15.4	2.7	0.9			B-1		
1232	121	18664	クロ	Z-15	石鏡	GAn	21.9	15.8	5.4	1.4			B-1		
1233	121	62610	FB	AB-21	石鏡	SPT	25.8	17.5	8.2	3.7			B-1		
1234	121	18541	FB	Y-13	石鏡	Ob	KZOB	15.6	12.9	3.3	0.4			B-2a	

第3章 縄文時代の遺構と遺物

発掘 番号	棟 号	図面 番号	遺物 番号	図 号	層位	グラフ	器種	石材	指定産地	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	接合 部位	形状分類
1225	121	1024	FB	W-20	石版	Ob	KZOB	17.4	12.3	3.6	0.4	B-2			
1226	121	48557	KU	Y-22	石版	Ob	KZOB	18.3	13.7	3.3	0.6	B-2			
1227	121	357	FB	Y-21	石版	Ob	KZOB	15.6	13.4	4.6	0.6	B-2			
1228	121	1300	FB	X-20	石版	Ob	KZOB	16.6	14.4	4.1	0.6	B-2			
1229	121	10751	AN	X-13	石版	Ob	KZOB	19.4	18.6	4.1	0.9	B-2			
1240	121	67300	クロ	W-12	石版	Ob	KZOB	18.9	15.8	4.3	0.9	B-2			
1241	121	47298	FB	AC-20	石版	Ob	KZOB	20.5	13.5	4.8	1.0	B-2			
1242	121	34298	FB	AI-28	石版	Ob	KZOB	24.6	17.1	6.1	1.6	B-2			
1243	121	35088	FB	N-6	石版	Ob	KZOB	24.6	19.8	5.5	1.6	B-2			
1244	121	44144	AN	AC-22	石版	Ob	KZOB	25.8	17.9	7.1	2.3	B-2			
1245	121	21296	FB	Y-14	石版	Ob	KZOB	28.6	17.3	4.8	1.9	B-2			
1246	121	62001	FB	Z-21	石版	Ob	AGKT	12.3	11.8	2.6	0.3	B-2			
1247	121	11110	FB	Y-20	石版	Ob	AGKT	14.8	14.1	4.1	0.6	B-2			
1248	121	16379	AN	AA-14	石版	Ob	SWHD	15.5	15.0	2.9	0.5	B-2			
1249	121	68093	FB	W-13	石版	Ob	SWHD	20.5	15.8	3.4	0.9	B-2			
1250	121	29756	FB	AI-20	石版	Ch		19.8	13.8	3.0	0.7	B-2			
1251	121	26769	FB	AI-20	石版	Hor		23.8	15.0	2.5	0.74	B-2			
1252	121	37905	FB	AI-20	石版	Ob	SWHD	16.2	17.9	3.6	0.6	B-3			
1253	121	35079	FB	AI-27	石版	Ob	KZOB	13.7	16.1	3.2	0.5	B-3			
1254	121	13925	FB	V-20	石版	SSI		27.8	13.5	3.2	0.9	B-3			
1255	121	40961	FB	AI-20	石版	GRS		26.1	17.5	3.4	0.8	B-3			
1256	121	23825	クロ	Z-15	石版	GAn		44.0	23.1	4.3	2.7	A-2			
1257	121	55181	FB	AF-20	石版	Ob	AGKT	17.6	14.9	4.8	0.5	B-5			
1258	121	4603	FB	I-2	石版	Ob	KZOB	23.4	20.9	3.7	1.1	B-5			
1259	121	66832	FB	R-10	石版	Ob	SWHD	15.6	11.8	2.0	0.3	C			
1260	121	8573	FB	AH-26	石版	Ob	WDFY	16.2	15.1	5.0	0.8	C			
1261	121	1299	1	FB	X-20	石版	Ob	AGKT	20.2	13.3	2.9	0.6	C		
1262	121	121	FB	AA-21	石版	Ob	AGKT	21.7	15.8	4.0	1.2	C			
1263	121	39609	FB	AI-20	石版	Ob	AGKT	19.3	16.4	5.7	1.1	C			
1264	121	15197	FB	X-22	石版	Ob	AGKT	21.8	15.2	2.2	1.0	C			
1265	121	14456	FB	W-21	石版	Ob	HNBH	17.8	17.6	5.6	1.4	C			
1266	121	7082	FB	AE-17	石版	Ob	HNBH	21.8	14.4	5.4	1.1	C			
1267	121	9887	クロ	H-10	石版	Ob	KZOB	12.9	13.8	2.2	0.3	C			
1268	121	67833	FB	V-12	石版	Ob	KZOB	14.0	12.6	2.9	0.4	C			
1269	121	41625	FB	AI-21	石版	Ob	KZOB	15.4	15.6	4.4	0.8	C			
1270	121	29251	FB	AI-20	石版	Ob	KZOB	19.2	15.1	3.3	0.8	C			
1271	121	47586	FB	AB-21	石版	Ob	KZOB	21.3	17.2	5.2	1.8	C			
1272	121	68115	FB	V-12	石版	Ob	KZOB	26.8	15.6	5.1	1.8	C			
1273	121	50091	FB	Y-22	石版	GAn		32.8	23.8	5.1	3.0	C			
1274	121	17381	FB	X-21	石版	GAn		16.1	12.4	4.3	0.6	C			
1275	121	80002	甌孔	-	石版	SSH		35.4	13.7	5.3	1.9	C			
1276	121	56158	KU	AE-23	石版	Ob	HNBH	18.2	16.8	3.5	0.6	D			
1277	121	28447	FB	AI-27	石版	Ob	WDFY	20.6	15.6	5.5	1.3	E			
1278	121	35283	FB	AI-28	石版	Ob	WDFY	21.8	15.5	4.8	1.5	E			
1279	121	50255	KU	AD-16	石版	Ob	WDFY	22.0	15.4	5.2	1.6	E			
1280	121	61545	FB	Z-21	石版	Ob	SWHD	23.9	15.1	3.9	1.1	E			
1281	121	29194	FB	AI-28	石版	Ob	SWHD	22.4	15.8	6.4	1.4	C			
1282	121	61548	FB	AA-20	石版	Ob	SWHD	25.4	16.8	7.3	2.3	C			
1283	121	56408	FB	AC-21	石版	Ob	AGKT	18.4	16.3	6.8	1.7	C			
1284	121	25706	FB	AI-20	石版	Ob	KZOB	15.2	13.8	1.9	0.4	C			
1285	121	17212	FB	W-20	石版	Ob	KZOB	16.6	14.9	6.9	1.0	B-2			
1286	121	32526	FB	AH-26	石版	Ob	KZOB	18.8	12.2	4.8	1.0	E			
1287	121	15879	FB	X-20	石版	Ob	KZOB	19.7	13.7	5.2	0.9	E			
1288	121	17338	FB	V-20	石版	Ob	KZOB	18.6	15.4	4.8	1.4	B-2			
1289	121	8413	FB	AH-26	石版	Ob	KZOB	19.2	15.3	6.5	1.5	E			
1290	121	60650	FB	AA-22	石版	Ob	KZOB	24.4	12.7	4.1	1.0	B-2			
1291	121	33460	FB	AA-22	石版	Ob	KZOB	25.9	15.1	5.5	1.5	E			
1292	121	60412	FB	AI-20	石版	Ob	KZOB	22.1	18.9	4.7	2.5	E			
1293	121	53485	FB	Z-22	石版	Ob	AGKT	25.1	20.7	7.4	3.4	E			
1294	121	50883	KU	AB-23	石版	Ob	KZOB	28.1	18.3	5.8	3.0	E			
1295	121	42391	AN	AF-22	石版	Ob	KZOB	29.1	20.1	9.9	5.5	E			
1296	121	19424	FB	X-19	石版	Ob	KZOB	31.8	22.0	11.3	5.3	E			
1297	121	81511	甌孔	-	石版	Ob	KZOB	42.5	28.9	10.7	7.1	C			
1298	122	60985	FB	S-9	ステンレイベー	Ob	KZOB	57.2	31.1	16.4	29.2	A-1			
1299	122	39142	FB	AI-23	ステンレイベー	Ob	KZOB	52.1	31.6	14.8	19.9	A-1			
1300	122	21303	FB	Y-13	ステンレイベー	Ob	HNBH	36.1	38.7	6.4	9.0	A-1			
1301	122	40065	FB	AI-20	ステンレイベー	GAn		42.5	32.7	8.8	8.5	A-1			
1302	122	53543	AN	T-12	ステンレイベー	Hor		81.7	49.8	17.8	66.6	A-1			
1303	122	2317	FB	O-6	ステンレイベー	Ch		30.8	23.1	8.1	5.1	A-1			
1304	122	57481	FB	AD-26	ステンレイベー	HPT		34.7	37.1	15.9	20.4	A-1			
1305	122	61044	KU	T-12	ステンレイベー	Hor		39.7	55.5	10.6	17.7	A-2			
1306	122	44390	AN	AI-23	ステンレイベー	Hor		52.1	69.2	20.9	67.4	A-2			
1307	122	25119	FB	AI-27	ステンレイベー	Hor		44.4	61.4	19.7	52.2	A-2			
1308	122	21306	FB	Y-13	ステンレイベー	Hor		45.4	41.5	10.8	19.8	A-2			
1309	122	59275	FB	Z-23	ステンレイベー	Ob	WDFY	22.8	37.7	8.6	6.0	A-2			
1310	122	35162	FB	AF-23	ステンレイベー	Ob	KZOB	43.9	43.5	14.8	27.2	B-1			
1311	122	14024	FB	W-20	ステンレイベー	Ob	KZOB	52.0	42.1	13.4	18.6	B-1			
1312	122	36779	FB	AJ-21	ステンレイベー	GAn		67.1	44.1	13.5	32.1	B-1			
1313	122	14318	FB	Q-12	ステンレイベー	GAn		52.0	61.1	12.1	33.0	B-2			
1314	122	51171	FB	Y-21	ステンレイベー	Ob	KZOB	28.4	45.9	10.1	14.5	B-2			
1315	122	60117	FB	U-11	ステンレイベー	Ob	KZOB	28.8	20.9	10.5	5.7	B-2			
1316	122	1443	FB	Y-21	ステンレイベー	Ob	AGKT	26.1	28.6	7.8	4.8	B-2			

発掘 番号	棟 号	図面 番号	図面 番号	器具 番号	層位	グラフ	器種	石材	規定定造長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	包含 層位	形状分類	
1317	122	57394	FB	AA-22	スライバー	Hor	62.1	88.1	22.5	116.7			B-3		
1318	122	36784	FB	AJ-21	スライバー	Hor	34.4	41.8	12.2	14.4			B-3		
1319	122	60730	KU	AA-24	スライバー	GAn	32.1	16.5	7.3	4.4			B-3		
1320	122	58627	FB	AB-22	スライバー	Ob	KZOB	69.3	31.6	14.0	31.2			B-3	
1321	123	26498	FB	AJ-28	石靴	Ob	KZOB	51.5	32.3	11.2	10.2			A-2	
1322	123	80453	複乱	-	石靴	HPT	49.8	32.5	7.5	8.0			A-2		
1323	123	44491	AN	AB-22	石靴	Hor	29.6	56.2	6.2	6.5			B-1		
1324	123	66348	FB	AA-23	石靴	Ch	28.2	51.0	7.1	7.3			B-1		
1325	123	96458	クオ	Q-12	石靴	Hor	30.8	52.9	11.0	11.1			B-2		
1326	123	81010	武士	-	石靴	Hor	45.0	66.6	10.5	19.6			B-2		
1327	123	1796	FB	AA-22	石靴	SSI	38.2	63.0	9.6	14.1			B-2		
1328	123	34788	FB	AI-27	石靴	GAn	41.0	58.6	12.6	23.8			B-2		
1329	123	59255	FB	AA-23	石靴	Hor	75.4	82.9	15.5	70.8			B-2		
1330	123	55856	FB	Z-21	石靴	Ob	KZOB	29.4	18.6	10.6	3.7				
1331	123	42742	AN	AA-24	石靴	Ob	KZOB	31.7	19.2	11.4	3.9				
1332	123	11012	FB	Y-20	石靴	Ob	KZOB	20.2	14.2	5.3	1.1				
1333	123	80986	複乱	-	石靴	Ob	KZOB	15.8	12.0	4.3	0.6				
1334	123	81737	複乱	-	石靴	Ob	SWHD	27.4	21.9	5.4	1.8				
1335	123	81752	武士	-	石靴	Ob	SWHD	33.2	21.4	8.0	4.9				
1336	123	50006	FB	AA-22	石靴	Hor	20.0	14.5	5.2	1.1					
1337	123	31467	AN	AI-20	石靴	Hor	65.0	41.8	12.0	29.9					
1338	123	61782	FB	AI-25	石靴	HPT	60.1	54.8	12.0	41.6					
1339	123	67329	FB	P-16	標形石靴	Ob	KZOB	29.9	11.7	11.1	1.1				
1340	123	18858	FB	V-20	標形石靴	Ob	KZOB	27.3	12.6	12.5	3.8				
1341	123	13673	KU	P-16	標形石靴	Ob	KZOB	38.1	18.0	11.7	6.8				
1342	123	13649	FB	Y-20	標形石靴	Ob	AGKT	36.7	35.5	11.2	12.3				
1343	123	47964	FB	AA-24	標形石靴	Ob	AGKT	21.1	16.6	9.3	3.2				
1344	124	57562	FB	AB-21	石靴	Ob	KZOB	15.8	46.4	13.1	7.3			A-1	
1345	124	60883	FB	AB-23	石靴	Ob	KZOB	22.8	46.9	12.6	11.0			A-1	
1346	124	59900	FB	AB-23	石靴	Ob	KZOB	24.1	40.9	12.1	8.1			A-1	
1347	124	11745	FB	X-21	石靴	Ob	KZOB	20.8	45.0	16.9	11.9			A-1	
1348	124	43139	AN	AE-22	石靴	Ob	KZOB	20.1	24.8	9.1	4.1			A-1	
1349	124	44412	AN	AB-21	石靴	Ob	KZOB	18.8	43.5	19.1	10.1			A-1	
1350	124	48192	KU	AE-21	石靴	Ob	AGKT	16.9	38.3	9.2	6.0			A-1	
1351	124	46790	FB	AD-22	石靴	Ob	AGKT	18.8	32.4	14.5	5.3			A-1	
1352	124	34091	FB	AC-25	石靴	Ob	SWHD	20.2	28.4	24.4	7.0			A-1	
1353	125	44283	AN	AD-25	石靴	Hor	42.2	89.7	77.2	30.1			A-1		
1354	124	56397	FB	AC-21	石靴	Ob	WDFY	16.8	37.0	17.2	6.7			A-2	
1355	124	14919	FB	W-20	石靴	Ob	SWHD	16.3	23.9	13.5	5.2			A-2	
1356	124	42224	AN	AD-26	石靴	Ob	SWHD	17.6	27.1	23.0	9.1			A-2	
1357	124	29256	FB	AJ-28	石靴	Ob	SWHD	23.0	17.2	11.9	4.7			A-2	
1358	124	27629	FB	AH-30	石靴	Ob	AGKT	22.4	22.6	25.0	7.0			A-2	
1359	124	41963	AN	AC-22	石靴	Ob	KZOB	14.8	22.6	12.6	5.3			A-2	
1360	124	13937	FB	ZW-11	石靴	Ob	KZOB	17.3	35.1	12.1	5.2			A-2	
1361	124	16129	FB	W-21	石靴	Ob	KZOB	20.9	40.4	18.3	10.7			A-2	
1362	124	21446	FB	Z-13	石靴	Ob	KZOB	23.4	33.4	12.6	7.7			A-2	
1363	124	64298	FB	AB-16	石靴	Ob	KZOB	27.1	27.4	11.7	8.4			A-2	
1364	124	13979	FB	AI-29	石靴	Ob	KZOB	30.6	34.9	18.9	13.7			A-2	
1365	124	44586	AN	AG-19	石靴	Ob	KZOB	27.8	34.8	10.1	8.8			A-2	
1366	124	46408	KU	AC-23	石靴	Ob	KZOB	24.8	24.4	22.2	7.8			A-2	
1367	124	60820	FB	AI-21	石靴	Ob	KZOB	35.1	27.9	22.6	15.7			A-2	
1368	124	17465	FB	X-22	石靴	Ob	KZOB	41.5	30.9	22.8	27.1			A-2	
1369	124	17186	FB	W-20	石靴	Ob	KZOB	40.2	39.9	34.3	45.7			A-2	
1370	124	66030	クオ	N-9	石靴	Ob	KZOB	42.6	58.1	22.1	31.5			A-2	
1371	125	43649	AN	AD-20	石靴	SSI	61.9	56.8	31.5	110.0			A-2		
1372	125	61065	FB	R-12	石靴	GAn	67.9	87.0	36.5	234.7			A-2		
1373	125	60859	KU	R-8	石靴	Hor	66.9	77.6	38.0	218.7			A-2		
1374	124	41017	FB	AI-21	石靴	Hor	47.2	106.0	42.6	668.1			B-1		
1375	125	60977	FB	R-9	石靴	Hor	45.1	75.9	65.9	247.9			B-1		
1376	125	17063	FB	R-15	石靴	Hor	42.2	124.3	71.6	555.8			B-1		
1377	125	10395	-	L-14	石靴	Hor	40.4	89.9	56.3	283.7			B-1		
1378	125	4157	FB	ZW-0	測片	Hor	73.6	102.2	48.6	209.1			B-1		
1379	124	66631	AN	N-9	石靴	Ob	AGKT	44.6	84.6	31.2	84.7			B-1	
1380	124	13945	FB	AI-21	石靴	Ob	SWHD	17.9	38.5	12.6	5.4			B-2	
1381	124	192	FB	Y-21	石靴	Ob	KZOB	14.4	25.4	21.3	6.5			B-2	
1382	125	66554	クオ	Q-10	石靴	Hor	57.5	69.5	28.9	98.8			B-2		
1383	125	628	FB	AA-21	石靴	Hor	43.0	91.0	37.6	190.9			B-2		
a	125	61061	FB	R-12	石靴+測片		43.2	36.4	50.8	81.6			A-1		
b		61062	FB	R-12	測片	GAn	44.3	35.4	40.9	51.2			A-1		
c		61063	FB	R-12	測片		50.1	47.1	24.0	40.7					
d		61064	FB	R-12	測片		55.8	40.4	33.2	23.7					
1385	126	80221	武士	AB-20	打製石靴	CSc	88.1	38.8	15.1	66.6			A-1		
1386	126	44899	AN	AD-15	打製石靴	Hor	76.6	45.2	19.0	94.8			A-1		
1387	126	80523	1	複乱	打製石靴	FSS	104.2	35.7	18.7	89.7			A-2		
1388	126	80228	武士	IV-21C	打製石靴	SSI	118.5	435.0	18.0	114.69			A-2		
1389	126	81646	複乱	AO-28	打製石靴	SSI	137.5	56.6	26.1	186.00			A-2		
1390	126	66607	クオ	N-8	打製石靴	GC	144.6	44.5	22.7	183.74			A-2		
1391	126	80681	武士	R-8	打製石靴	FSS	94.1	58.9	19.6	128.7			B-1		
1392	126	42917	AN	AE-22	打製石靴	CSS	94.0	61.0	19.0	121.78			B-2		
1393	126	66520	クオ	P-12	打製石靴	GT	118.6	56.2	28.1	206.4			B-2		
1394	126	23518	クオ	AH-27	打製石靴	HSS	69.4	57.1	25.0	99.3			B-2		

第3章 縄文時代の遺構と遺物

発掘 番号	棟 号	図面 番号	遺物番号	器具	層位	グラフ	副題	石材	規定定長	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	接合 痕	形状分類
1206	126	80010		武士	-		打製石斧	Sh	83.0	56.0	12.0	66.22			B-3
1206	126	96748	KU	P-12			打製石斧	Sh	100.8	86.1	19.6	132.3			B-3
1207	a	38373	UK	AF-21			打製石斧	Sh	19.6	36.8	5.4	2.9			C-1
1207	b	43922	ク	AE-21			打製石斧	Sh	110.1	85.9	34.1	273.3			C-1
1208	126	10601	ク	AA-15			打製石斧	Sh	138.2	84.5	22.8	276.8			C-1
1209	126	66771	FB	Q-12			打製石斧	Sh	112.5	65.6	18.7	178.8			C-2
1400	126	2756	ク	ZW-0			打製石斧	MSS	126.5	62.6	24.5	201.8			C-2
1401	126	45110	KGP	AC-19			打製石斧	Ant(Py)	145.0	97.0	29.5	398.3			C-2
1402	126	9985	KU	11-10			打製石斧	FSS	120.4	91.0	34.5	362.9			C-2
1403	127	42928	AN	AE-23			打製石斧	Ant(Py)	142.7	89.5	29.4	417.8			C-3
1403	127	42930	KGP	AE-23			打製石斧	Ant(Py)	142.8	86.5	30.1	431.4			C-3
1404	127	42296	AN	AD-23			打製石斧	Ant(Py)	112.7	96.1	22.1	302.7			C-1
1405	127	31464	AN	AI-20			打製石斧	Ant(Py)	160.4	88.5	19.6	244.0			D-3
1406	127	43019	AN	AF-22			打製石斧	Ant(Py)	146.7	69.9	42.2	393.7			D-3
1407	127	14946	FB	W-20			打製石斧	Hae	119.1	52.5	20.8	176.6			D-3
1408	127	80658	武士	-			打製石斧	Ant(Py)	101.4	55.4	12.8	84.8			D-3
1409	127	15243	AN	Z-14			打製石斧	CSe	75.3	72.3	20.4	129.7			E
1410	127	17467	FB	X-22			打製石斧	Ant(Py)	109.5	72.2	21.4	181.9			E
1411		48439	KU	AC-24			打製石斧	MSS	72.9	56.2	24.2	117.8			E
1411		57154	FB	AC-24			打製石斧	HFT	73.7	47.1	18.3	87.4			E
1412	127	68081	ク	X-12			打製石斧	HFT	84.0	35.2	18.4	62.7			E
1413	127	21456	FB	AI-28			磨製石斧	PT	60.6	47.7	22.4	103.0			E
1414	127	52918	FB	Z-23			磨製石斧	SS	(71.0)	(36.0)	(286.0)	(76.88)			E
1415	127	81423	武士	-			磨製石斧	Pe	40.6	33.7	28.3	64.2			E
1416	127	36190	FB	AJ-22			磨製石斧	Sp	125.3	55.1	36.1	411.5			E
1417	127	52568	FB	Y-22			磨製石斧	Ba	130.3	54.1	39.4	432.8			E
1418	127	81419	武士	-			磨製石斧	GT	48.0	33.5	8.5	21.32			E
1419	127	68566	FB	Z-22			磨製石斧	GT	39.5	39.0	10.5	21.67			E
1420	127	56819	FB	Z-22			磨製石斧	Sh	72.0	61.5	17.5	114.78			E
1421	128	66829	FB	R-11			石鏃	CSe	68.5	53.0	14.5	76.41			E
1422	128	57421	KU	AC-26			石鏃	Sh	77.0	61.5	20.5	135.00			E
1423	128	47091	l	FB	AF-21		石鏃	Sh	170.0	161.0	51.5	328.67			E
1424	128	57082	FB	AC-22			石鏃	GS	82.5	107.4	43.1	448.59			E
1425	128	57943	FB	AD-24			石鏃	MSS	84.0	63.0	24.5	156.91			E
1426	128	26363	N5C	AC-25			石鏃	MSS	121	89	53	840			E
1427	128	26393	FB	AM-23			磨製石斧	Hae	521	30	28	60			E
1428	128	61217	FB	W-11			磨製石斧	Hae	114	98	35	510			E
1429	128	15294	AN	AA-15			磨製石斧	FSS	63	49	35	150			E
1430	129	13642	FB	Q-17			磨石・磨石類	MSS	528	67	50	360			E
1431	129	34628	FB	AI-27			磨石・磨石類	Ap	107	79	56	750			E
1432	129	31653	FB	AI-28			磨石・磨石類	Ba	76	63	37	270			E
1433	129	13833	FB	AB-25			磨石・磨石類	Ba	225	58	40	780			E
1434	129	60757	FB	AB-25			磨石・磨石類	Ba	134	66	62	31			E
1435	129	44655	AN	AC-23			磨石・磨石類	Ba	96	41	35	180			E
1436	129	59796	KU	AB-24			磨石・磨石類	Ant(Py)	117	97	58	760			E
1437	129	68060	KU	X-11			磨石・磨石類	Ant(Py)	106	77	38	400			E
1438	129	25115	FB	AI-27			磨石・磨石類	Ant(Py)	109	84	62	730			E
1439	129	68094	KU	X-12			磨石・磨石類	Ant(Py)	101	80	58	670			E
1440	129	70994	KU	Z-14			磨石・磨石類	Ant(Py)	149	113	40	1,100			E
1441	129	11379	FB	AI-21			磨石・磨石類	Ba	61	28	21	62			E
1442	129	47252	FB	AI-21			磨石・磨石類	Ba	112	96	48	660			E
1443	129	589	FB	AA-22			磨石・磨石類	VAn	115	86	41	540			E
1444	129	7164	KU	AG-22			磨石・磨石類	VBa	75	62	55	340			E
1445	129	43911	AN	AE-20			磨石・磨石類	VBa	161	94	47	1,280			E
1446	129	56834	FB	Z-22			磨石・磨石類	Ant(Py)	148	90	57	1,080			E
1447	129	12717	FB	W-20			磨石・磨石類	Ant(Py)	134	75	38	590			E
1448	129	176	FB	AI-20			磨石・磨石類	Ba	119	118	49	560			E
1449	129	32658	ク	AI-22			磨石・磨石類	Ant(Py)	149	113	40	1,100			E
1450	129	7084	FB	AE-17			磨石・磨石類	FSS	61	28	21	62			E
1451	129	48293	FB	AC-21			磨石・磨石類	Ant(Py)	101	69	38	430			E
1452	129	819	FB	AC-21			磨石・磨石類	Da	112	96	48	660			E
1453	129	32963	ク	AI-22			磨石・磨石類	Ant(Py)	111	103	67	1,130			E
1454	129	1776	FB	AA-21			磨石・磨石類	VAn	115	90	33	490			E
1455	129	10792	FB	AI-20			磨石・磨石類	Ba	119	118	49	560			E
1456	129	43922	ク	AE-22			磨石・磨石類	Ba	149	113	40	1,100			E
1457	129	61769	FB	Z-22			磨石・磨石類	VBa	96	84	53	620			E
1458	129	62935	FB	Y-22			磨石・磨石類	VBa	123	103	43	860			E
1459	129	30075	FB	X-19			磨石・磨石類	VBa	95	58	31	210			E
1460	129	35024	FB	AF-23			磨石・磨石類	Ba	148	90	57	1,080			E
1461	129	132	FB	AA-21			磨石・磨石類	Ant(Py)	134	75	38	590			E
1462	129	28172	FB	AI-20			磨石・磨石類	Ba	113	71	49	560			E
1463	129	58	FB	AC-21			磨石・磨石類	Ant(Py)	125	84	48	620			E
1464		27796	FB	AI-26			磨石・磨石類	Ant(Py)	181	94	47	1,280			E
1464		80614	武士	Y-22			磨石・磨石類	Ant(Py)	162	96	77	1,300			E
1465	129	57496	KU	AD-25			磨石・磨石類	VBa	188	69	51	1,030			E
1466	129	59796	KU	AB-24			磨石・磨石類	Ba	128	68	61	800			E
1467	129	55174	FB	AF-19			磨石・磨石類	Ba	163	62	56	820			E
1468	129	51298	FB	Y-22			磨石・磨石類	Ba	137	65	55	800			E
1469	129	56170	FB	AE-23			磨石・磨石類	Ant(Py)	140	70	51	650			E
1470	129	44589	ク	AI-21			磨石・磨石類	Ant(Py)	121	68	72	800			E
1471	129	4176	FB	C-1			磨石・磨石類	Ant(Py)	121	68	72	800			E

発掘 番号	棟 号	図録 番号	遺物番号	器具 番号	層位	グラフ	器種	石材	規定産地	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	組合 番号	形状分類
1472			34289		FB	AI1-26	磨石・磨石類	An(Py)		167	66	67	950	316	棒△ TS(1) - T
			80750		売土	-									
1473			57426		FR	AC-26	磨石・磨石類	An(Py)		219	86	94	2,320		棒△ TS(1) - T
1474	129	34180	FB	AI1-26	磨石・磨石類	Ba				106	81	48	640		扁平 TS(1) - T+S
1475			2318		FB	O-A7	磨石・磨石類	Ba		123	95	56	990		扁平 TS(2) - T
1476			80299		売土	AA-23	磨石・磨石類	Ba		185	101	47	1,280	351	扁平 TS(2) - T
			80582		瓶皿	Z-21									
1477	129	31034	AN	AI1-26	磨石・磨石類	V1a				166	72	41	780		棒△ TS(2) - T
1478	129	13670	KGp	Y-15	磨石・磨石類	An(Py)				151	71	68	1,130		棒△ TS(2) - T
1479			41013		FR	AI-21	磨石・磨石類	An(Py)		146	64	51	750		棒△ TS(2) - T
1480	129	67522	FB	T-18	磨石・磨石類	An(Py)				149	82	66	960		棒△ TS(2) - T
			25745		KU	AI1-25	磨石・磨石類	Ba		167	65	50	920	300	棒△ TS(2) - T
1481			34904		FR	AI1-25	磨石・磨石類	Ba		126	60	62	620		棒△ TS(2) - T
1482			27027		FR	AI1-19	磨石・磨石類	Ba		128	79	71	950		棒△ TS(2) - T
1483	129	59888	KU	AI1-23	磨石・磨石類	Ba				181	76	64	1,350	346	棒△ TS(2) - T
1484			81214		売土	Z-22									
1485	130	14219	FB	Q-16	磨石・磨石類	V1a				159	67	60	820		棒△ TS(2) - T
1486	130	15430	FB	X-21	磨石・磨石類	V1a				166	70	60	990		棒△ TS(2) - T
1487	130	14305	KGp	W-14	磨石・磨石類	An(Py)				142	71	63	900		棒△ TS(2) - T
1488	130	52899	FR	AA-23	磨石・磨石類	An(Py)				164	61	60	630	339	棒△ TS(3) - T
			52916		FR	Z-21									
1489	130	43557	AN	AB-22	磨石・磨石類	An(Py)				(96)	(71)	(61)	(790)		棒△ TS(2) - T
1490	130	30678	FR	X-22	磨石・磨石類	An(Py)				102	74	56	570		棒△ TS(2) - T
1491	130	34905	FB	AI1-25	磨石・磨石類	Ba				(113)	(63)	(38)	(400)		棒△ TS(2) - T+KT(2)
1492	130	19429	FR	X-19	磨石・磨石類	An(Py)				137	62	38	540		棒△ TS(2) - T+KT(2)
1493	130	60209	FR	AC-25	磨石・磨石類	An(Py)				121	78	54	820		棒△ TS(2) - T+KS(2)
1494	130	17747	FR	X-21	磨石・磨石類	V1a				105	83	41	540		扁平 TS(2) - T+S
1495			34905		KU	AI1-26	磨石・磨石類	An(Py)		118	68	49	640		扁平 TS(2) - T+S
1496	130	31030	クラ	AI1-29	磨石・磨石類	V1a				114	77	48	610		扁平 TS(2) - T+S
1497			47983		FR	AA-23	磨石・磨石類	Ba		117	92	51	870		扁平 TS(2) - T+S
1498	130	56765	FR	AA-22	磨石・磨石類	An(Py)				124	89	59	1,100		厚△ TS(2) - T+S
1499			10509		-	K-15	磨石・磨石類	An(Py)		(87)	(103)	(68)	(850)		厚△ TS(2) - T+S
1500	130	42656	AN	AB-21	磨石・磨石類	An(Py)				116	68	48	640		棒△ TS(2) - T+S
1501	130	32528	FR	AI1-26	磨石・磨石類	An(Py)				117	60	38	430		棒△ TS(2) - T+S
1502	130	34906	KU	AI1-26	磨石・磨石類	V1a				154	61	50	730		棒△ TS(2) - T+S
1503	130	80721	瓶皿	X-19											
			81368		売土	X-19	磨石・磨石類	Ba		177	60	52	860	357	棒△ TS(3) - T
1504	130	44405	AN	AB-22	磨石・磨石類	V1a				(120)	(60)	(69)	(820)		棒△ TS(2) + T
1505	130	64420	YLM	AA-22	磨石・磨石類	Ba				135	63	63	788		棒△ TS(6) - T
1506	130	1345	YL	AA-23	磨石・磨石類	An(Py)				147	71	70	990		棒△ TS(4) - T
1507	130	64012	FR	AC-16	磨石・磨石類	Ba				128	59	57	940	347	棒△ TS(2) - T
			80380		瓶皿	W-17									
1508	130	56073	FR	AI1-27	磨石・磨石類	V1a				164	71	57	900		棒△ TS(3) - T
1509	130	36180	FR	AI1-22	磨石・磨石類	V1a				103	102	34	480		扁平 TS(全)+S
1510	130	11730	FR	X-21	磨石・磨石類	An(Py)				102	98	38	570		扁平 TS(全)+S+KS(2)
1511	130	24933	KU	AI1-26	磨石・磨石類	Ba				99	68	41	450		扁平 TS(全)+T+KT(2)
1512	130	67961	FR	W-12	石皿(小型)	An(Py)				179	132	38	1,540		
1513	130	20599	FR	AA-14	石皿(小型)	Ba				(159)	(109)	(48)	(1,170)		
1514	131	1540	FR	AA-23	石皿	V1a				340	341	105	14,600		
1515	131	13775	FR	AI1-27	石皿	V1a				328	188	83	7,440		
1516	131	34084	FR	AI1-28	石皿	V1a				241	212	86	5,460		
1517	131	16158	FR	W-21	石皿	V1a				171	160	59	2,080		
1518	131	10300	FR	J-11	石皿	V1a				297	232	65	5,500		
1519	131	59252	FR	Z-23	石皿	V1a				347	276	148	15,000		
1520	131	25554	FR	AN-23	石皿	V1a				364	324	115	11,750		
1521	131	14173	FR	O-16	台石	An(Py)				200	351	104	16,500		
1522	131	52553	FR	Z-22	台石	An(Py)				228	194	138	11,500		
1523	131	61720	FR	Z-23	台石	V1a				499	329	139	32,500		

《形式分類の略号について》

《石皿》

基部の形状	縁部の形状
A: 有蓋四角	1: 尖脚
B: 無蓋四角	1: 尖脚 2: 内脚 3: 平脚 4: 内脚 5: 脚部不明
C: 有蓋円形	無縁
D: 無蓋円形	無縁
E: 不定形もの	

《石皿》

A: 楕型	1: 左右対称 2: 左右非対称
B: 楕型	1: 左右対称 2: 左右非対称

《打製石皿》

石皿の形状	縁部の残存
A: 短脚型	1: 両面 2: 片面 3: なし
B: 短脚型	1: 両面 2: 片面 3: なし
C: 分脚型	1: 両面 2: 片面 3: なし
D: 尖脚型	1: 両面 2: 片面 3: なし
E: 不明	

《スクレイパー》

刃部の加工	加工部位
A: 片刃	1: 側縁部 2: 両端部 3: 全周
B: 両刃	1: 側縁部 2: 両端部 3: 全周

《石皿》

打面の形状	剥離方法
A: 剥離面を打面とするもの	1: 固定して一方に剥離 2: 転移させながら剥離
B: 裏面を打面とするもの	1: 固定して一方に剥離 2: 転移させながら剥離
C: 分類しにくいもの	

《磨石・磨石類》

磨石の形状	使用痕
扁平	S: 磨り痕のあるもの
厚△(扁平+球の中間)	T: 磨り痕のあるもの
棒	K: 磨り痕のうす帯に凹状のもの。() 内は面数。
不定形	KS: 棒の平ら面に凹状の磨り痕のあるもの。() 内は面数。
棒△: 棒状で断面丸	KT: 棒の平ら面に凹状の磨り痕のあるもの。() 内は面数。
棒△: 棒状で断面三角	TS: 棒の縁部に磨り痕の平坦面のあるもの。() 内は縁部の面数。
棒△: 棒状で断面三角	TS(多): 棒状の縁部の棒を多面にむらり磨り磨ったもの。
棒△: 棒状で不定形	TS(全): 棒円状の棒を全周にむらり磨り磨ったもの。

第4章 弥生時代以降の遺構と遺物

弥生時代以降の遺構・遺物は、縄文時代の遺構・遺物と比較して甚少であるが、新期スコリア層面でも多くの遺構が確認された。攪乱を免れていたのは、第186図で理解できるように4-3区から4-2区の一部にかかる東支谷、4-1区テラス部から2-2区の一部及び町道591号線西にかけての西支谷の区域にほぼ限定される。当然、中央尾根の土地利用も弥生時代以降行われていた可能性は否定できない。また今回、中世以降として報告した遺構は、無論近世に位置付けられる可能性を持つことをあらかじめ述べておく。

第1節 遺構と遺構出土遺物

(1) 弥生時代

1 土坑(第185図 写真図版134)

当該遺構はA1-20グリッドにて検出した。東支谷に位置し、栗色土層上面にて検出された。土坑の平面形は丸みの帯びた方形を呈する。土坑の計測値は長径0.49m、短径0.47m、深さは0.49mを測る。覆土第2層の黒褐色土中に新期スコリアが含まれる。

覆土中より遺物が出土している。1524・1525は土器である。1524は壺の底部と考えられる。平坦な底部から胴部が直線的に立ち上がる。指頭痕が内外面に見られる。1525は甕の口縁から頸部にかけての破片資料である。頸部から外湾しながら立ち上がり、口唇部付近で直立気味になる。口唇部は丸く仕上げ、外面に櫛状の工具により波状文が施されている。頸部には籬状文か。中部高地系の土器である。所属時期は弥生時代後期であろう。

(2) 古代

1 カマド跡(第187・188図 写真図版42・134)

1号カマド跡はAG-18グリッドにて検出した。東支谷に位置する。当該遺構は3号溝状遺構と重複し、一部破壊されている。確認されたカマドの掘り方の平面形は楕円形であるが、破壊されているため、本来の形状は不明である。計測値は長さ1.09m、幅0.66m、深さ0.28mを測る。新期スコリア層上面にて検出された。検出時はカマド構築材である礫が崩れるように密集した状態で検出された。本来の位置を留めていないと推定された礫を除去した結果、カマド奥壁部と支柱と思しき礫を確認した。このカマドが本来属していた竪穴住居跡の痕跡は未検出であるが、主軸方向は南南東方向か。この遺構が北方向へ傾斜する地形に位置し、煙道及び焚口の方向を勘案すれば、住居自体が谷筋を指向して設けられたことが推定される。このカマド内部からは土器1526が出土している。1526は土器器甕か。底部外面に木葉痕が残る。外面にはハケ調整等の痕跡は未確認である。

2号カマド跡はAD-21グリッドにて検出された。この遺構は東支谷でも中央尾根と東尾根に挟まれた狭隘な区域に位置する。当初、当該遺構は遺物集中として取り扱われていたが、整理時において出土遺物からカマドの可能性が想起された。遺構は現地調査時点で旧SX09としている。土坑の平面形はやや楕円形を呈する。計測値は長さ0.81m、幅0.76m、深さ0.13mを測る。緩やかな立ち上がりをもつ土坑である。平坦で約20cm四方の礫を2点が土坑内で並び、拳程度の礫が周囲に散見される。土坑北側縁付近に土器1527が見られる。土坑内の礫は覆土第1層中からの出土であり、第2層には含まれない。

この遺構内から多くの土器細片が出土している。1527は土坑外側で出土したもので土器器喙か。胴部は微かに内湾し、口縁部は「く」の字状に折れる。口唇部は平坦に仕上げている。胴部中位付近はへら削りか。頸部直下に指頭痕が見られる。口縁部はナデ整形である。時期は平安時代か。この遺構の性格として、煮湯具である1528や礫が多く出土した点からカマドである可能性がまず想起される。さすれば礫はカマドの構築材として考えられ、土坑自体はカマドの掘り方とも考えられる。

3号カマド跡はA E-21・22グリッドにて検出された。この遺構は東支谷でも中央尾根と東尾根に挟まれた狭い区域に位置する。この遺物集中は現地調査時点で旧S X10としている。土坑の平面形は不定形である。計測値は長さ0.77m、幅0.62m、深さ0.09mを測る。この土坑の東半部に拳より大きめの礫が多く集積した状態で確認された。また土坑の東側約1mの位置に礫が散乱しており、現地調査担当の判断により、同一遺構として判断された。この遺構も当初遺物集中として取り扱われたが、カマド跡の可能性があり、この区分とした。

以上、1～3号カマド跡が位置する区域は触れているように東支谷という谷地形内に位置している。いずれのカマド跡も住居跡に付属するものと推定される。特に2・3号カマド跡が検出された区域は北東へ向かって緩やかに傾斜し、特にA D・A Eグリッド周辺は等高線の幅が広く、さらに緩やかな傾斜となっており、山間部の生活拠点の様が想像せられる。

2 遺物集中 (第189図 写真図版42)

1号遺物集中はA D-22・23グリッドにて検出された。東支谷でも中央尾根と東尾根に挟まれた狭い区域に位置している。現地調査時点では旧S X06～08として別個に調査されたが、互いに近接した遺構であるため、一つの遺構として判断した。この遺構は集石土坑と集石で構成される。新期スコリア層上面にて検出されたものである。集石土坑旧S X07の平面形は楕円形を呈する。この土坑の計測値は長さ1.25m、幅1.10m、深さは0.18mを測る。覆土は3層に分層され、焼土粒・炭化物粒が全体的に、礫、土器細片が覆土第1・2層に集中する。覆土の状況から当該土坑で火が焚かれた可能性がある。またこの土坑は82号土坑と重複するが、その状況から時期的に82号土坑に先行する。82号土坑は掘削して直ぐに埋められたため、本来堆積していた礫・遺物が再度82号土坑覆土として埋められている。集石土坑東側約0.3mの位置に旧S X06とした遺構がある。拳大の礫が0.4m四方の範囲内に集積し、土器片が伴う。また集石土坑から西北の方向に細礫・土器細片が散乱し、旧S X08とした遺構は拳大の礫が集まる。旧S X06・08の礫・遺物はほぼ同一レベルで広がるため同一時期、互いの時期差は僅差と考えられる。但し前項で触れた竪穴住居跡のカマドである可能性は低いものと考えられる。

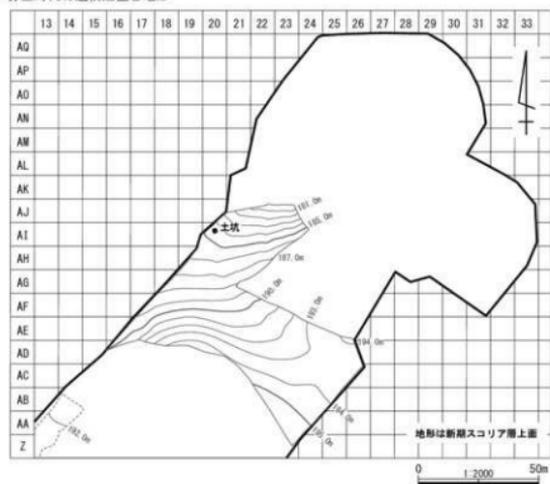
当該遺構から土器片が多く出土しているが細片が多い。1528は小型の土器器喙である。直線的な胴部から口縁部は「く」の字状に折れ、口唇部は平坦に仕上げられている。なお当該遺跡の確認調査の際、T R10より鉄製紡錘車1587が出土している。位置的に1号遺物集中に近接しているため、本来的に当該遺構に伴う可能性もある。また覆土第1層から出土した木炭を放射性炭素年代測定 (IAAA-92016) した。その結果、1,140±30yrBPという¹⁴C年代が測定されている。

(3) 中世以降

1 溝状遺構 (第190・191図)

1号溝状遺構はA E-20・21グリッドにて検出された。東支谷でも東尾根と中央尾根に挟まれた狭い区域に位置する。溝状遺構の計測値は長さ2.47m、幅0.44m、深さは0.07mを測る。新期スコリア層上面にて検出された。遺構の方向はほぼ東西方向に延び、西端部付近がわずかに北西方向に曲がる。東端部は2号溝状遺構と近接する。出土遺物は確認されていない。

弥生時代の遺構配置と地形

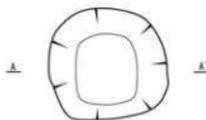


遺構図

A1-20から
北へ5m
東へ5m

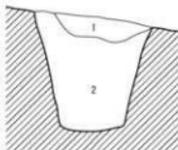


出土遺物



104.0m A

A'



0 1.20 50cm

0 1.3 10cm

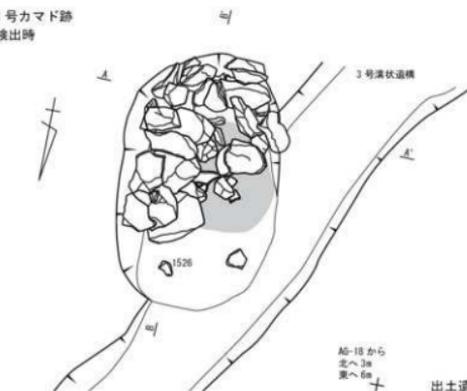
- 1 黒褐色(10YR2/2)土層 粘性強い・粘り無し
少量の径1~2mm程度の橙褐色スコリアを含む。
- 2 黒褐色(10YR2/2)土層 粘性強い・粘り無し
少量の径2~5mm程度の橙褐色スコリア、
径30~50mm程度の黒色土塊が混じる。

第185図 弥生時代の遺構

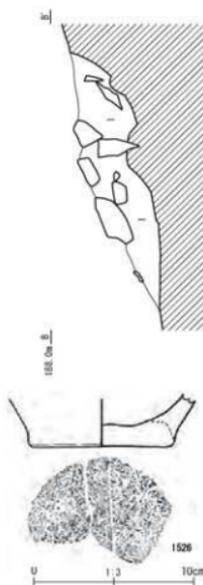


第186図 古代～近世の遺構位置図

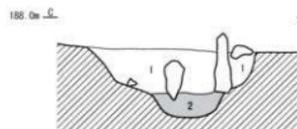
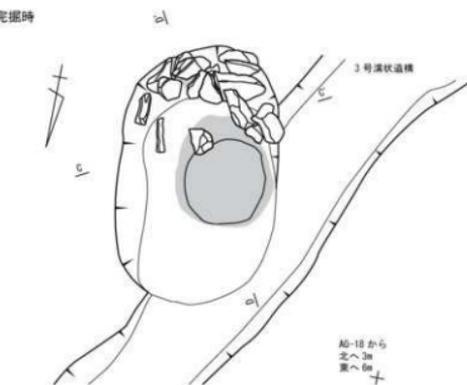
1号カマド跡
検出時



出土遺物



完掘時



検出から
北へ3m
東へ6m

- 1 灰黄褐色(10YR4/2)土層 粘性無し・練り無し
- 2 にぶい赤褐色(5YR4/4)土層 粘性無し・練り有り
焼成土層。

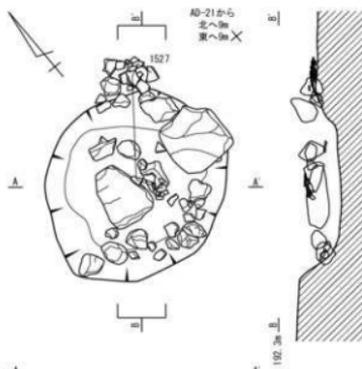


供土範囲

0 1:20 50cm

第187図 古代のカマド跡1

2号カマド跡

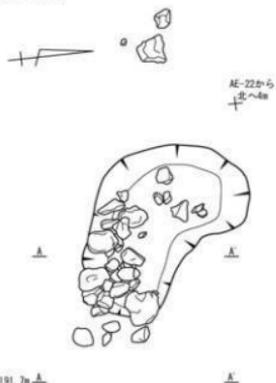


192. 3a A



- 1 黒褐色(10YR3/2)土層 粘性無し・練り無し
少量の径2mm程度の褐色スコリアを含む。
- 2 暗褐色(10YR3/3)土層 粘性無し・練り無し
少量の径2mm程度の褐色スコリア。
径3mm程度の焼土粒が混じる。

3号カマド跡



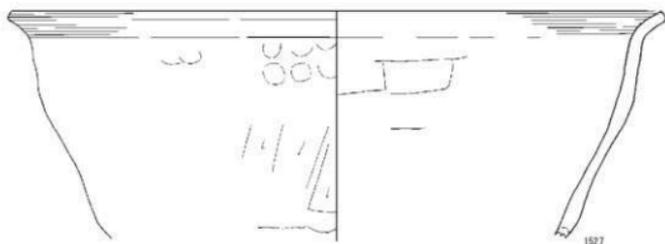
191. 7a A



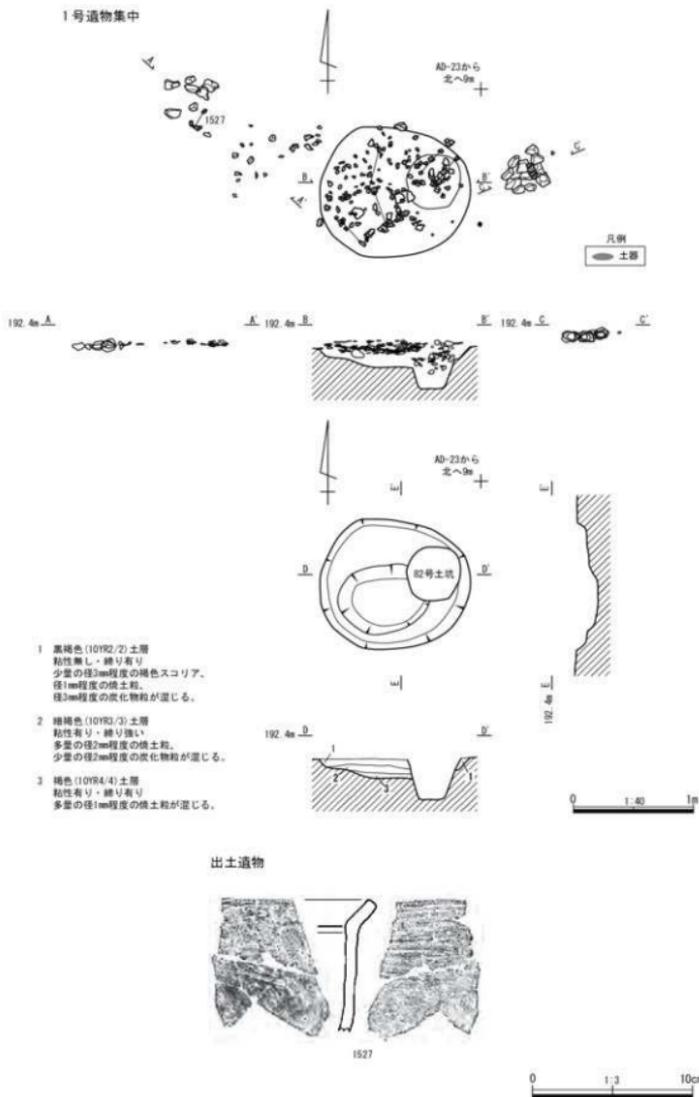
- 1 にぶい黄褐色(10YR4/3)土層 粘性強い・練り有り
少量の褐色スコリアを含む。径2mm程度の焼土粒が混じる。



出土遺物



第188図 古代のカマド跡2



第189図 古代1号遺物集中

2号溝状遺構はA E-20グリッドにて検出された。1号溝状遺構と同じ東支谷でも東尾根と中央尾根に挟まれた狭隘な区域に位置する。溝状遺構の計測値は長さ7.20m、幅0.61m、深さは0.11mを測る。新期スコリア層上面にて検出された。遺構の方向は1号溝状遺構と同様、ほぼ東西方向に延びるが、西端部付近が大きく北へ曲がる。これら1・2号溝状遺構は検出状況から同時期に同じ機能を有していたことが推定される。周囲には炉跡が散見されるが溝状遺構と炉跡が同時期の所産の可能性がある。付近の地形が北へ約13°傾斜し、約1.5mの位置に6～11号炉跡が密集し、特に8～11号炉跡は溝と同じ新期スコリア層で確認されているため、この溝跡が炉跡を中心とする区域を区画した可能性もある。

3号溝状遺構はA F・A G-18グリッドにて検出した。東支谷に位置している。溝状遺構の計測値は長さ10.74m、幅0.60m、深さ0.23mを測る。新期スコリア層上面にて検出された。遺構は南西方向、斜面地を斜に上るように延びている。底面は全体的に平坦であるが、部分的に凹凸が見られる。緩い斜面地を登る道遺構であった可能性も想起されたが、道遺構で散見されるような硬化面等は判然としなかった。1号カマド跡を破壊しており、時期的に後出するものである。

4号溝状遺構はA G-19グリッドに位置する。東支谷に位置している。溝状遺構の計測値は長さ4.46m、幅0.51m、深さ0.05mである。この遺構は南西方向に延びた後、遺構中位付近で南東向きを変え、従って平面形は「く」の字状を呈し、屈曲部付近には小穴が1基確認される。平面形は円形で、計測値は径0.30m、深さ0.37mを測る。溝周囲に同様の小穴は未確認であるが、33号土坑が東側に位置している。西側1.5mの位置には3号溝状遺構が延びている。これら3・4号溝状遺構は近接して位置するものの、その形状や4号溝状遺構に小穴が伴う点から、性格が異なる。

2 土坑 (第192・193図 写真図版40)

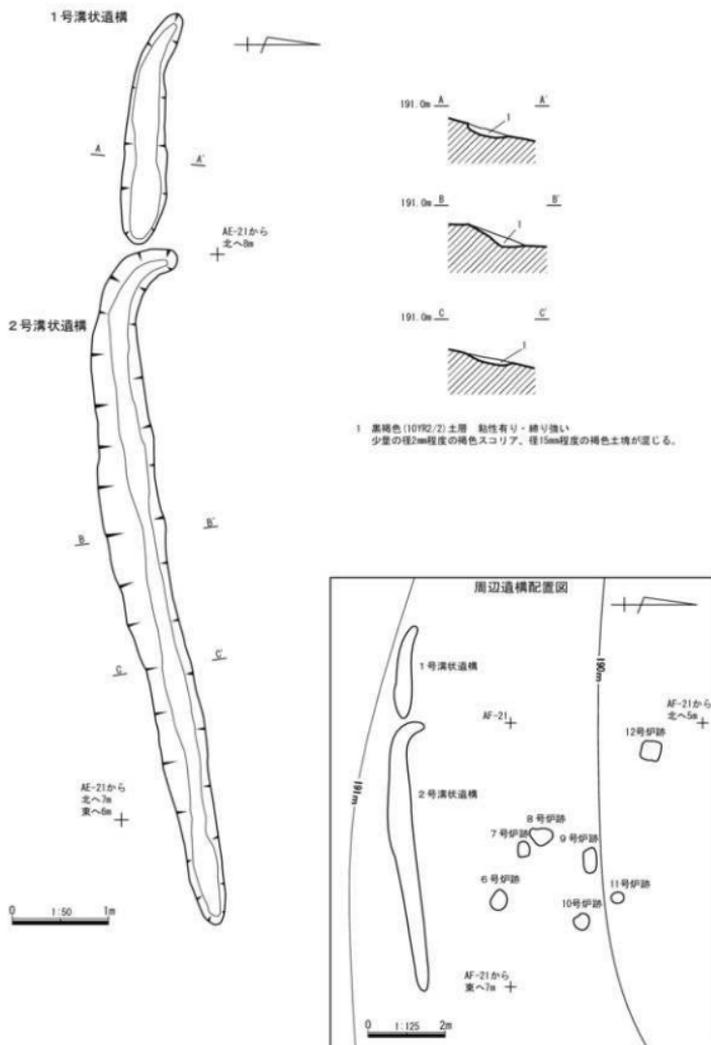
富士石遺跡で検出された土坑のうち、中世以降に位置付けられるのは81基を数え、第21表に計測値、平面形についてまとめた。また抽出した土坑のみ図を掲載した。

中世以降の土坑の殆どは新期スコリア層上面にて検出された。多く分布するのはA B～A F-21～25グリッド、A H～A I-19～21グリッド、P～Q-10～12グリッドの3ヶ所である。前2者は東支谷の範囲内であるが、東尾根と中央尾根に挟まれた狭隘な区域と東支谷の最下部区域にあたり、谷地形内部でも土坑の分布域が分かれる。土坑の平面形は円形・楕円形・方形等の種類があるが、ほぼ全ての土坑の長辺・長径と短辺・短径との比率は1:1～1.5:1の範囲にある。計測値では辺・径が0.7～1.3mを測る土坑が主体を占める。

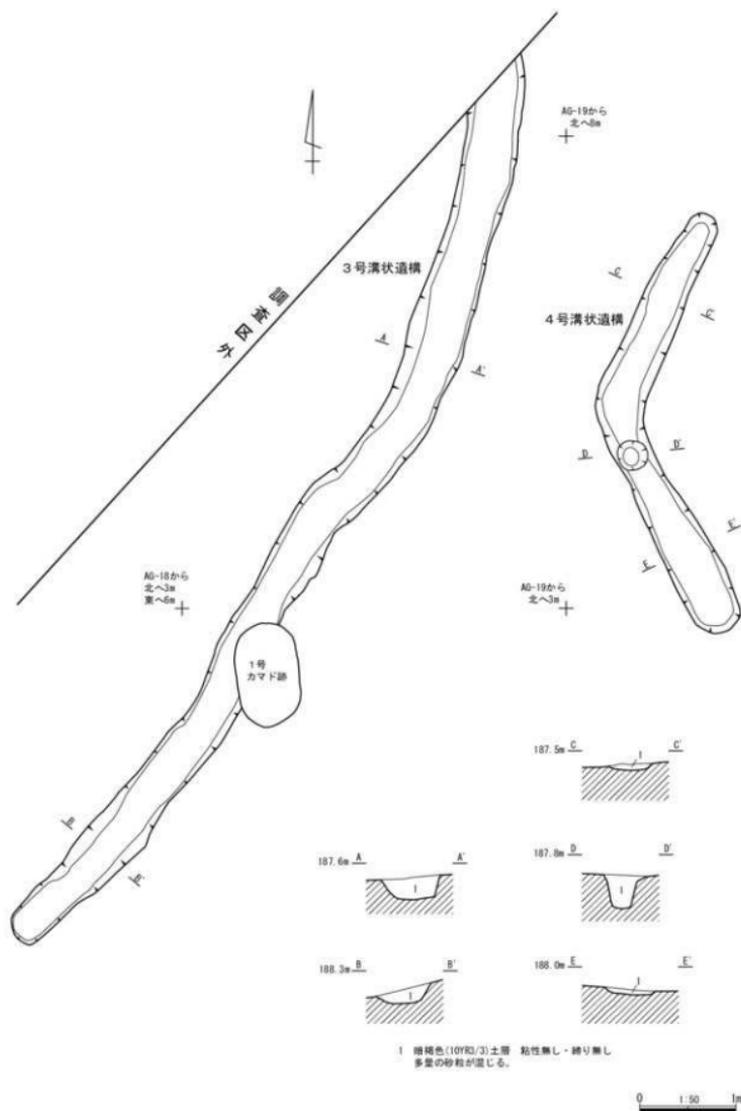
東支谷部にて検出された土坑は現地調査の段階から、その形状と配置に規則性が窺えるとの認識がされてきた。第193図は規則性を模式図化したものである。A～Fラインは中央尾根と東尾根とに挟まれた狭隘な区域にあり、東支谷を横断するように土坑列が認められる。またI～KラインはA～Fラインと交差するように認められる。G・Hラインは東支谷最下部を等高線と交差するように設定されよう。Fラインから下方(北西方向)には土坑が少なくなるが、その方向には6～12号炉跡や1・2号溝状遺構が位置するため、土坑の配置と炉跡、溝状遺構の関連性を認める。各土坑が貯蔵用の陥穴であるならば獸類の道沿いに設定がなされたと想起せられるも、平面形や深さの点から陥穴とは考えにくい。土坑から出土した遺物が皆無であるため、その性格は判然としない。ただ他遺跡での類例から墓坑の可能性が指摘されているが、積極的に首肯できる資料は当該遺跡においても得られていない。

3 炉跡 (第194・195図 写真図版41)

富士石遺跡で検出された炉跡のうち、縄文時代以外の炉跡は13基を数える。第20表には中世以降と考えられた炉跡について集成した。なお当該報告では炉跡としているが、現地調査時点では焼土と報告し

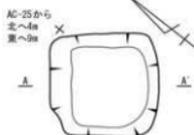


第190図 中世以降の溝状遺構1



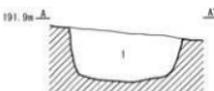
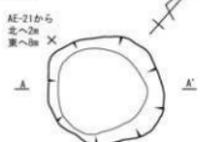
第191図 中世以降の溝状遺構2

4号土坑



- 1 黒色 (10YR2/1) 土層 粘性無し・粘り無し。少量の径1~2mm程度の褐色スコリアを含む。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) 土層 粘性有り・粘り強い。少量の径10~30mm程度の褐色土塊が混じる。

30号土坑



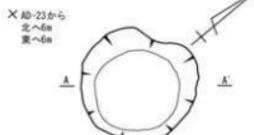
- 1 黒色 (10YR2/1) 土層 粘性無し・粘り無し。多量の暗褐色土粒、褐色土塊が混じる。少量の径1~2mm程度の褐色スコリアを含む。

70号土坑



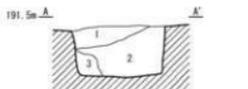
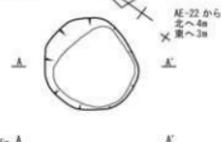
- 1 暗褐色 (10YR3/4) 土層 粘性無し・粘り弱い。少量の径2~5mm程度の褐色スコリアを含む。
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 土層 粘性無し・粘り弱い。少量の径2~5mm程度の褐色スコリアを含む。
- 3 暗褐色 (10YR3/4) 土層 粘性無し・粘り弱い。
- 4 暗褐色 (10YR3/3) 土層 粘性無し・粘り弱い。2層に比して若干色調が明るい。

20号土坑



- 1 黒色 (10YR2/1) 土層 粘性無し・粘り無し。多量の褐色土塊が混じる。少量の径1~2mm程度の褐色スコリアを含む。

31号土坑



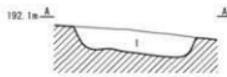
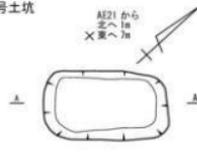
- 1 黒色 (10YR2/1) 土層 粘性無し・粘り無し。多量の褐色土粒が混じる。少量の径1~2mm程度の褐色スコリアを含む。
- 2 黒色 (10YR2/1) 土層 粘性無し・粘り無し。少量の径1~2mm程度の褐色スコリアを含む。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) 土層 粘性有り・粘り強い。少量の褐色土塊が混じる。

71号土坑



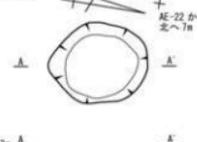
- 1 暗褐色 (10YR3/3) 土層 粘性無し・粘り弱い。少量の径2~5mm程度の褐色スコリアを含む。

29号土坑



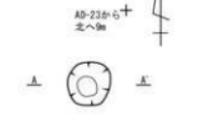
- 1 黒色 (10YR2/1) 土層 粘性無し・粘り無し。少量の径1~2mm程度の褐色スコリアを含む。

50号土坑



- 1 黒色 (10YR2/1) 土層 粘性無し・粘り無し。多量の暗褐色土粒、褐色土塊が混じる。少量の径1~2mm程度の褐色スコリアを含む。

82号土坑

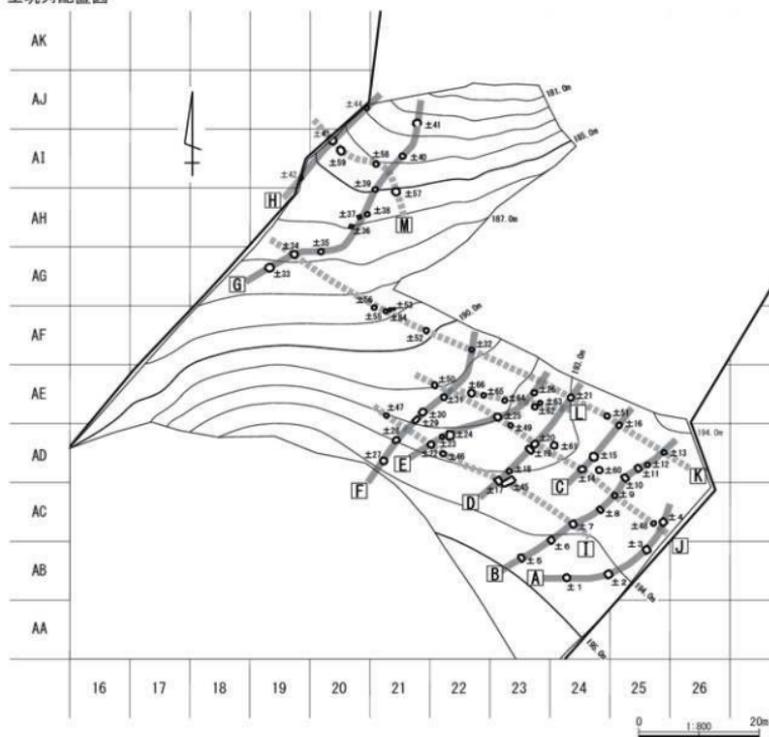


- 1 黒色 (10YR2/1) 土層 粘性有り・粘り強い。少量の褐色スコリアを含む。
- 2 黒褐色 (10YR3/2) 土層 粘性弱い・粘り有り。少量の径2mm程度の褐色スコリアを含む。

0 1:50 1m

第192図 中近世の土坑

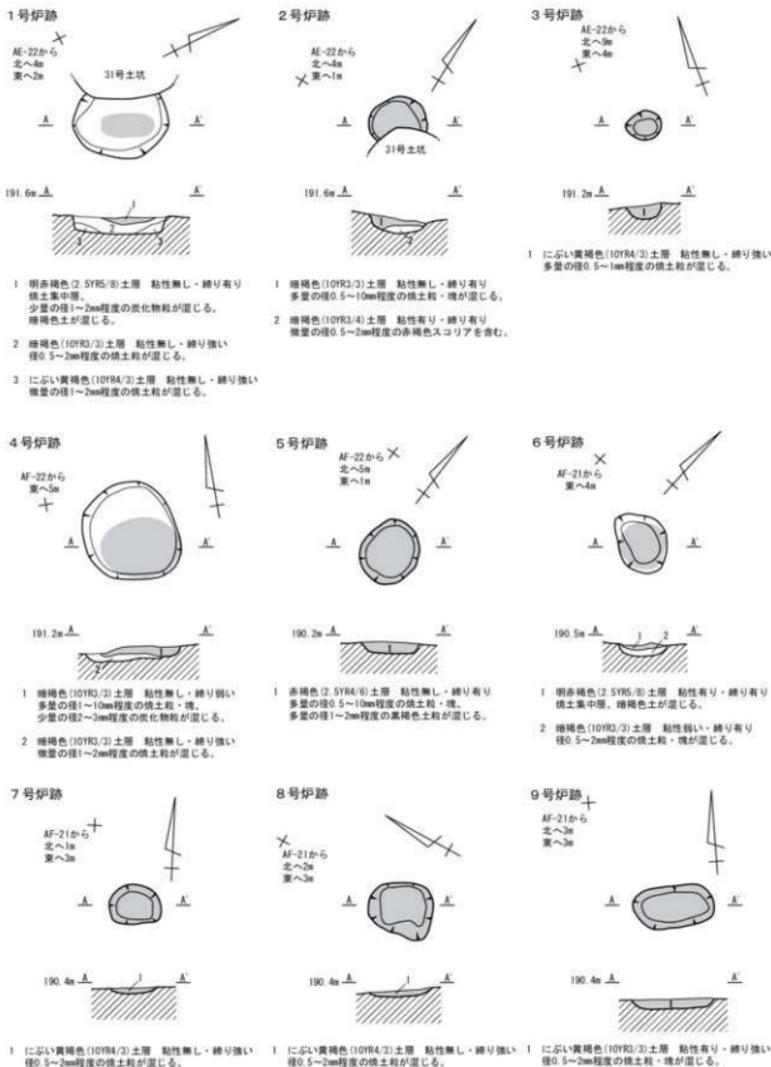
土坑列配置図



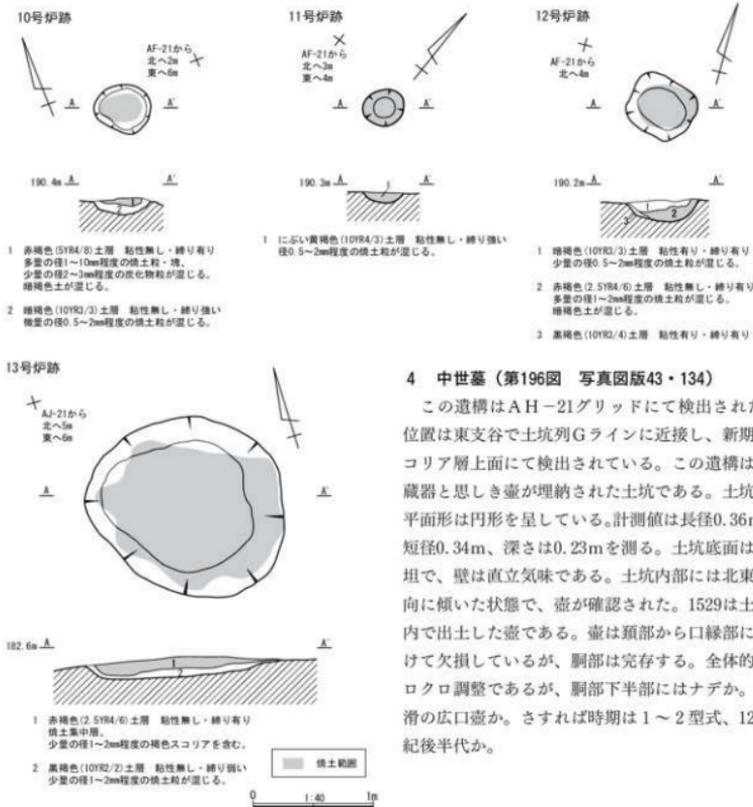
第193図 土坑列配置概念図

ている。必ずしもこれらが炉として機能したものではなく、今後詳細な検討が必要である。

中世以降の炉跡は全て東支谷内にて検出されたが、13号炉跡を除き全て中央尾根と東尾根に挟まれた狭隘な区域、A E・A F-21~23グリッドにて検出されたものである。特にA F-21グリッド内に5基と密集する。検出されたのは殆どの炉跡の平面形は楕円形を呈し、長径：短径の比率は概ね1.2：1である。径は0.3~0.6m台が多く散見される。中には長径0.86m、短径0.76mを測る4号炉跡、長径1.66m、短径1.46mを測る13号炉跡があり、他の炉跡と区別されるべきものである。検出された炉跡は栗色土層から表土直下の黒色土層の各層で確認され、最も多いのが新期スコリア層で検出した炉跡である。最も規模の大きい13号炉跡はA J-21グリッドにて検出した。この炉跡のみ、土坑列のGラインに近接する。Gラインを構成する土坑と同様、新期スコリア層にて検出されており、これらの土坑と13号炉跡との関連性が想定される。一方、A F・A E-21~23グリッドに位置する12基の炉跡については土坑列や溝状遺構との関連性も想起されるが、検出層位と関連付けて考えなければならない。仮に土坑が墓坑という可能性が問われるならば付近は墓域とも考えられるが、今回「炉跡」と報告した焼土は、その規模から勘案すれば火葬施設とは考えられない。類例の集成・検討が必要である。



第194図 中近世の炉跡1



第195図 中近世の炉跡2

4 中世墓(第196図 写真図版43・134)

この遺構はAH-21グリッドにて検出された。位置は東支谷で土坑列Gラインに近接し、新期スコリア層上面にて検出されている。この遺構は骨蔵器と思しき壺が埋納された土坑である。土坑の平面形は円形を呈している。計測値は長径0.36m、短径0.34m、深さは0.23mを測る。土坑底面は平坦で、壁は直立気味である。土坑内部には北東方向に傾いた状態で、壺が確認された。1529は土坑内で出土した壺である。壺は頸部から口縁部にかけて欠損しているが、胴部は完存する。全体的にロクロ調整であるが、胴部下半部にはナデカ。常滑の広口壺か。さすれば時期は1~2型式、12世紀後半代か。

第16表 弥生時代土坑計測表

遺構名	グリッド	検出層位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形	土器	石器	礎	炭化物	計
弥生土坑	AF-20	KU	0.49	0.47	0.49	円形	3		2		5

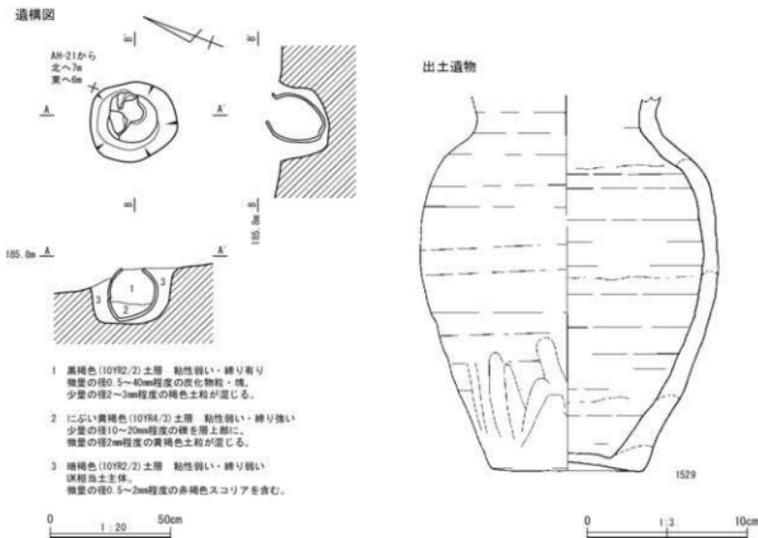
第17表 古代カマド跡計測表

遺構名	グリッド	検出層位	分類	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	平面形	土器	石器	礎	炭化物	計
				遺物範囲	遺物範囲	遺物範囲						
1号カマド跡	AG-18	NSC	竈	1.09	0.66	0.28	楕円形	11			38	49
				遺物範囲	0.94	0.66						
2号カマド跡	AD-21	NSC	竈	0.81	0.76	0.13	楕円形	17			23	40
				遺物範囲	0.93	0.64						
3号カマド跡	AE-21, 22	NSC	竈	0.77	0.62	0.09	不定形	1			39	40
				遺物範囲	1.47	0.51						

第18表 古代遺物集中計測表

遺構名	グリッド	検出層位	分類	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	平面形	土器	石器	礎	炭化物	計	
				遺物(壺)集中	焼土坑	遺物集中							
1号遺物集中	AD-22	NSC	遺物(壺)集中	1.25	1.10	0.18	楕円形	41	64	17	1	123	
				焼土坑									
				遺物集中	3.24	1.44							-

第4章 弥生時代以降の遺構と遺物



第196図 中世墓

第19表 中世以降溝状遺構計測表

遺構名	グリッド	検出層位	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	土層	石器	礎	炭化物	計
1号溝状遺構	AE-20	NSC	2.42	0.44	0.07					
2号溝状遺構	AE-21	NSC	7.20	0.61	0.11					
3号溝状遺構	AF・AG-18	NSC	10.74	0.60	0.23					
4号溝状遺構	AG-19	NSC	4.46	0.51	0.05		1	1		2

第20表 中近世炉跡計測表

遺構名	グリッド	検出層位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	土層	石器	礎	炭化物	計
1号炉跡	AE-22	NSC	0.76	(0.64)	0.14					
2号炉跡	AE-22	SNZ	0.48	(0.29)	0.12					
3号炉跡	AE-22	NSC	0.30	0.25	0.12					
4号炉跡	AF-22	UK	0.86	0.76	0.12					
5号炉跡	AF-22	NSC	0.55	0.49	0.10					
6号炉跡	AF-21	KGP	0.56	0.42	0.10					
7号炉跡	AF-21	KU	0.44	0.33	0.05					
8号炉跡	AF-21	NSC	0.54	0.44	0.05					
9号炉跡	AF-21	NSC	0.68	0.35	0.08					1
10号炉跡	AF-21	NSC	0.48	0.41	0.14					
11号炉跡	AF-21	NSC	0.34	0.32	0.08					
12号炉跡	AF-21	UK	0.60	0.55	0.18		2			
13号炉跡	AJ-21	NSC	1.66	1.46	0.18					2

第21表 中近世土坑計測表

遺構名	グリッド	検出層位	分類	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形	土層	石器	礎	炭化物	計
1号土坑	AB-24	NSC	横断 列A	1.22	1.21	0.10	円形					
2号土坑	AB-24, 25	KGP		1.19	1.15	0.32	方形					
3号土坑	AB-25	SNZ		1.17	1.08	0.45	方形					
4号土坑	AC-25	SNZ		1.13	1.08	0.45	方形					
5号土坑	AB-25	クワ	横断 列B	1.26	0.93	0.30	長方形					
6号土坑	AB, AC-25, 24	NSC		1.12	0.98	0.40	方形					
7号土坑	AC-24	NSC		1.18	0.95	0.54	方形					
8号土坑	AC-24	NSC		1.06	0.75	0.35	長方形					
9号土坑	AC-25	NSC		0.94	0.89	0.06	楕円形					
10号土坑	AD-25	SNZ		1.26	0.90	0.58	長方形					
11号土坑	AD-25	SNZ		1.12	0.92	0.43	長方形					
12号土坑	AD-25	SNZ		0.83	0.77	0.40	楕円形					
13号土坑	AD-25	NSC		0.84	0.81	0.09	長方形					
14号土坑	AD-24	NSC	横断 列C	1.25	1.04	0.16	方形					

15号土坑	AD-24	NSC		1.47	1.34	0.09	楕円形						
16号土坑	AD-25	NSC		0.98	0.88	0.12	楕円形	1					1
17号土坑	AC_AD-23	NSC	竪割 列D	1.28	1.07	0.28	長方形						
18号土坑	AD-23	NSC		0.94	0.87	0.07	楕円形						
19号土坑	AD-23	NSC		1.40	0.82	0.40	長方形						
20号土坑	AD-23	NSC		1.20	1.12	0.63	楕円形						
21号土坑	AE-24	NSC		1.10	1.00	0.13	楕円形						
22号土坑	AD-21-22	NSC	竪割 列E	1.19	1.12	0.13	楕円形						
23号土坑	AD-22	NSC		0.71	0.70	0.34	円形						
24号土坑	AD-22	NSC		(1.30)	(1.06)	0.60	方形						
25号土坑	AE-25	NSC		1.26	1.18	0.14	円形						
26号土坑	AE-23	NSC		0.95	0.90	0.30	楕円形						
27号土坑	AD-21	NSC	竪割 列F	1.24	1.15	0.18	円形						
28号土坑	AD-21	NSC		1.23	0.92	0.30	楕円形						
29号土坑	AE-21	NSC		1.30	0.74	0.23	長方形	1					1
30号土坑	AE-21	NSC		1.20	1.15	0.52	円形						
31号土坑	AE-22	NSC		1.00	0.94	0.54	円形						
32号土坑	AF-22	NSC		0.73	0.72	0.15	円形						
33号土坑	AG-19	NSC	竪割 列G	1.52	1.38	0.44	楕円形						
34号土坑	AG-19	NSC		1.28	1.23	0.38	楕円形						
35号土坑	AG-20	NSC		1.00	0.93	0.38	円形						
36号土坑	AH-20	NSC		0.86	0.76	0.16	円形						
37号土坑	AH-20	NSC		0.77	0.76	0.12	円形						
38号土坑	AH-20	NSC		0.86	0.77	0.17	円形						
39号土坑	AH-21	NSC		0.93	0.83	0.24	円形						
40号土坑	AH-21	NSC		1.05	0.95	0.33	楕円形						
41号土坑	AJ-21	NSC		1.57	(1.10)	不明	円形						
42号土坑	AI-19	NSC	竪割 列H	(0.75)	(0.31)	0.30	円形?	1					1
43号土坑	AI-20	NSC		1.26	(0.98)	0.30	円形?						
44号土坑	AJ-20	NSC		0.80	0.75	0.17	円形						
45号土坑	AC_AD-23	NSC	竪割 列I	2.28	0.90	0.56	長方形						
46号土坑	AD-22	NSC		0.97	0.88	0.54	楕円形						
47号土坑	AE-21	NSC		0.84	0.72	0.10	楕円形						
48号土坑	AC-25	NSC	竪割 列J	0.84	0.72	0.09	楕円形						
49号土坑	AD-23	NSC		0.78	0.77	0.21	円形						
50号土坑	AE-22	NSC		1.05	0.85	0.62	楕円形						
51号土坑	AE-24	NSC	竪割 列K	0.94	0.92	0.07	円形						
52号土坑	AF-21	NSC		0.92	0.88	0.65	楕円形						
53号土坑	AF-21	NSC		0.34	0.33	0.05	円形						
54号土坑	AF-21	NSC		0.61	0.52	0.06	円形						
55号土坑	AF-21	NSC		0.71	0.66	0.09	楕円形						
56号土坑	AF-21	NSC		0.85	0.81	0.13	円形						
57号土坑	AH-21	NSC	竪割 列L	1.36	1.23	0.44	方形	1					1
58号土坑	AE-21	NSC		0.98	0.94	0.44	円形						
59号土坑	AI-20	NSC		1.46	1.24	0.28	楕円形						
60号土坑	AD-24	NSC		1.22	1.09	0.05	楕円形						
61号土坑	AD-23-24	NSC		1.20	1.16	0.12	楕円形						
62号土坑	AE-23	NSC		0.95	0.80	0.20	円形						
63号土坑	AE-23	NSC		0.74	0.70	0.22	円形						
64号土坑	AE-23	NSC		0.84	0.81	0.17	円形						
65号土坑	AE-22	NSC		0.85	0.74	0.12	楕円形						
66号土坑	AE-22	NSC		1.24	1.12	0.09	楕円形						
67号土坑	AE-17	NSC		1.38	0.60	0.19	長方形						
68号土坑	Y-12	NSC		1.13	1.06	0.55	円形						
69号土坑	Y-12	NSC		1.18	1.18	0.47	円形						
70号土坑	Y-11	NSC		0.99	0.93	0.36	円形						
71号土坑	Y-11	NSC		0.92	0.91	0.30	円形						
72号土坑	Q-11	NSC		1.16	1.11	0.40	方形						1
73号土坑	Q-11	NSC		1.13	1.07	0.40	方形						1
74号土坑	Q-11	NSC		0.73	0.63	0.37	円形						
75号土坑	Q-10	NSC		1.44	1.40	0.50	円形						1
76号土坑	Q-10	NSC		1.52	1.48	0.48	円形						
77号土坑	Q-10	NSC		1.44	1.35	0.50	円形						
78号土坑	P-12	NSC		1.08	1.07	0.17	円形						1
79号土坑	P-12	NSC		1.11	1.06	0.40	円形						
80号土坑	P-11	NSC		0.72	0.65	0.24	円形						
81号土坑	P-11	NSC		(0.83)	(0.39)	(0.06)	楕円形						
82号土坑	AD-22	NSC		0.48	0.44	0.34	円形	18	2	16			36

第22表 中世墓計測表

遺構名	プラン	検出層位	分類	長さ(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形	土器	石鏡	鏝	炭化物	計
中世墓	AH-21		壺	0.36	0.34	0.23	円形	1				1

第23表 弥生時代以降遺構出土土器観察表

遺構名	縄文 番号	国取 番号	種類	器種	発見部位	器面調整		計測値	備考
						外面	内面		
弥生土坑	1524		弥生土器	壺	底部	指頭調整	内面	底径 60mm	
弥生土坑	1525	132	弥生土器	甕	口縁部	指頭調整	ヘラミダキ	口径 190mm	
1号カマド跡	1526		土師器	甕	底部	指頭調整	ヘラミダキ	底径 90mm	木炭灰
2号カマド跡	1527	132	土師器	甕	口縁部	指頭調整	ヘラミダキ	口径 380mm	
1号遺物集中	1528	132	土師器	甕	口縁部	ナデ	ナデ		
中世墓	1529	132	中世陶器	広口壺	頸部～底部	ヘラタズリ	指頭調整	胴部最大径 188mm 底径 95mm	残存高 207mm 甕 モミダケ

第2節 包含層出土遺物

ここでは、弥生時代以降に位置付けられる遺物で包含層及び攪乱中出土遺物を一括して報告する。これらは土器691点、石器98点、金属器1点である。該期の遺構を検出した新期スコリア層は中央尾根においては攪乱により失われ、生活の痕跡について全く手掛かりがない。当該報告において、遺構と遺物について検討が可能なのは東支谷出土遺物に限定される。第197図では東支谷の弥生時代以降の遺構出土遺物、包含層出土遺物の分布を示している。弥生時代以降の土器が層位的にも混在していた状況である。12世紀代の鍋や鉢の生活雑器の存在からも、断続的に当該区域内での生業が想像される。

1 土器

弥生時代以降の包含層出土土器について報告する。図化した資料は41点を数え、弥生時代中期から中世までの時期に帰属される。土師器の細片などが多く出土しているが、図化できなかった。

弥生時代中期の土器（第198図 写真図版135）

1530～1545は弥生時代中期に帰属される土器である。1530～1536が壺形土器、1537～1545が甕形土器である。

1530～1534は壺形土器の胴部破片である。1530～1532は外面に沈線化しつつある縦位の羽状条痕が施される。1533は外面に横位の沈線1条と波状沈線2条の計3条の沈線による施文が認められる。1534は外面に縄文が地文として施文されているものの、一部が磨り消されている。いずれも胎土の粒子は粗いが、焼成は良好で、堅く焼き締められている。1535は壺形土器の胴部から底部片である。底部から胴部にかけての立ち上がりから、胴部最大径は胴部上半にあたるのが推測される。肩部から胴部上半に最大径をもち、胴部下半から底部がすばまる器形が推測される。このような器形的特徴から、弥生時代中期の長頸壺である可能性が高い。胴部外面に刷毛目調整の痕跡と、底部に網代痕が認められる。1536は壺形土器の底部片である。底部に網代痕が確認できるとともに、外面にわずかに刷毛目調整の痕跡が認められる。

1537は甕の口縁部破片である。口縁部に横位羽状条痕が、わずかに残存する胴部上半に横位の条痕が施される。1538は甕の胴部破片である。上部に斜位の条痕が認められ、横位羽状条痕の一部の可能性もある。下部には横位の条痕が施される。器面の調整の共通性から、1537と1538は同一個体である可能性も考えられる。1539・1540は甕形土器の口縁部破片である。横位の粗い条痕が認められる。1541は甕形土器の口縁部片で、いわゆる磨消線文甕である。口唇部は指頭の押さえによって成形されている。磨消線文甕は、縦位を基調とする粗い刷毛目調整の後、胴部に指頭等によって横位の磨消線を施す。伊藤淳史氏の論考によれば、磨消線文甕の出現は伊藤編年中期Ⅱにあたり、中期Ⅲに盛行する。本資料も概ね弥生時代中期中葉から後葉の間に位置付けられようか。1542～1544は甕形土器の胴部破片である。いずれも横位の磨消線が2条認められる。消線文を境に上半と下半とで、調整の工具や方向を違えることはなく、縦位を基本とする刷毛目調整が施されていることから、典型的磨消線文甕（伊藤分類Bb）と考えられ、弥生時代中期中葉から中期後葉の古段階に該当する資料と考えられる。1545は甕形土器の底部片である。外面には刷毛目調整が施され、内面に指頭圧痕、底部に網代痕が認められる。1541～1544同様、磨消線文甕の可能性も考えられるが、定かではない。

弥生時代後期の土器（第199図 写真図版135）

1546～1553は弥生時代後期に帰属される土器である。1546・1547は壺形土器、1548～1553は甍形土器である。1546は壺形土器の頸部片である。1547は壺形土器の胴部から底部片である。底部から胴部への立ち上がりは緩やかで、胴部下半で最大径を測る。底部には木葉痕がわずかに認められる。1546・1547ともに器面の摩耗が著しい。1548は甍形土器の口縁部から胴部片である。目の細かい刷毛目調整が内外面に施され、口縁部は緩やかに外反する。1549～1553は台付甍の脚部片である。いずれも外面あるいは内面に刷毛目調整が施される。外面は縦位、内面は横位を基調とする刷毛目が認められる。東駿河における台付甍の本格的な出現は、弥生時代後期前葉以降とされ、1549～1553も弥生時代後期前葉またはそれ以降の所産と考えられる。

古墳時代の土器（第199図 写真図版136）

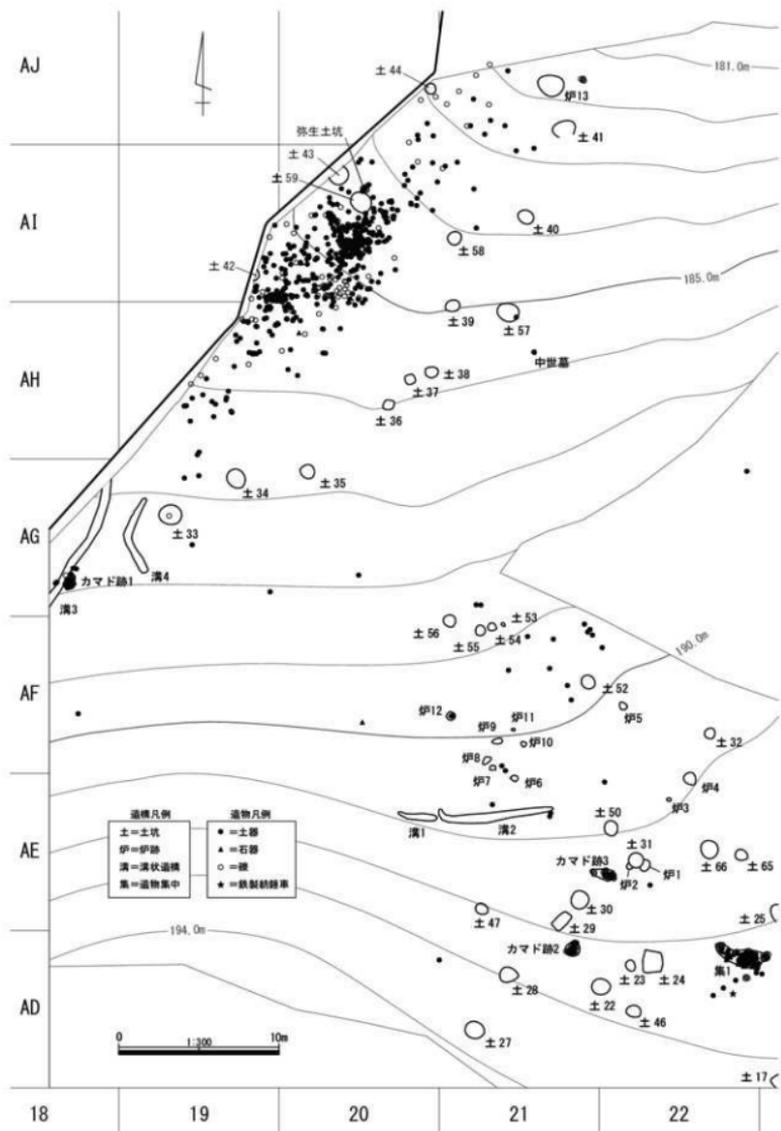
1554～1561は古墳時代に帰属される土師器である。1554は壺形土器の口縁部から底部片である。胴部最大径が胴部のほぼ中央に位置する球胴形を呈する。内外面とも摩耗が著しいが、胴部下半に篋磨き調整が施されているのが確認できる。1555は甍形土器の口縁部破片である。古墳時代前期のいわゆるS字状口縁甍にあたる。薄手硬質な作りである。1556は壺形土器の口縁部片から胴部片である。小型で胴部上半には刷毛目調整が施される。1557は甍形土器の口縁部片である。内外面に刷毛目調整が施される。1558～1560は環形土器の口縁部から体部片である。1558・1559には篋削り調整が施される。1561は高環形土器の脚部片である。上部に円形の透かし孔を開けた痕跡がわずかに認められる。内外面とも刷毛目調整が施される。

古代の土器（第199・200図 写真図版136）

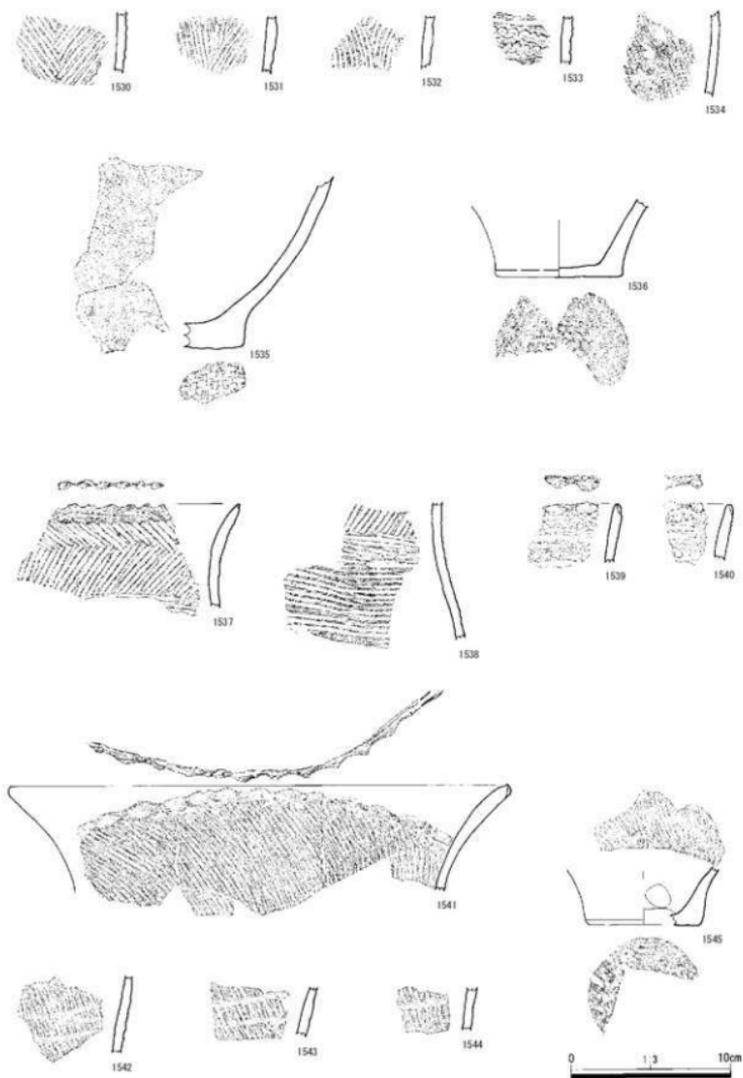
1562は古代の須恵器の坏蓋である。頂部が欠損し、摘み部も剥離している。口縁部から頂部への立ち上がりから、概ね8世紀中葉から後葉に位置付けられる。1563は古代の灰釉陶器の碗である。体部から底部片で、口縁部は遺存していない。内外面とも上部に釉薬が塗布されている。高台の形態など、器形の作りが粗雑化していることから、猿投窯福年の百代寺窯式（11世紀代）に位置付けられる。1564～1568は奈良・平安時代に帰属される土師器である。1564は甍形土器の口縁部片である。いわゆる律令期の駿東型甍で、内外面に刷毛目調整を施し、口唇部を肥厚させている。1565は塙形の口縁部から胴部片である。胴部内外面に粗い刷毛目調整が施される。塙の出現は8世紀前半以降と考えられており、本資料は口唇部の肥厚が薄くなり、口縁部が屈曲して外傾するような形態を呈すことから、8世紀後半に帰属される資料と考えられる。1566は甍形の口縁部から胴部片である。長胴で薄手であり、胴部内外面には刷毛目調整が施される。胴部最大径は、肩部付近よりもやや下位の胴部中央付近に位置する。1565同様、8世紀後半に位置付けられる長胴甍であろう。1567・1568は甍形の胴部から底部片である。1567は胴部外面に縦位の篋磨き調整が施され、底部には網代痕が認められる。

中世の土器（第200図）

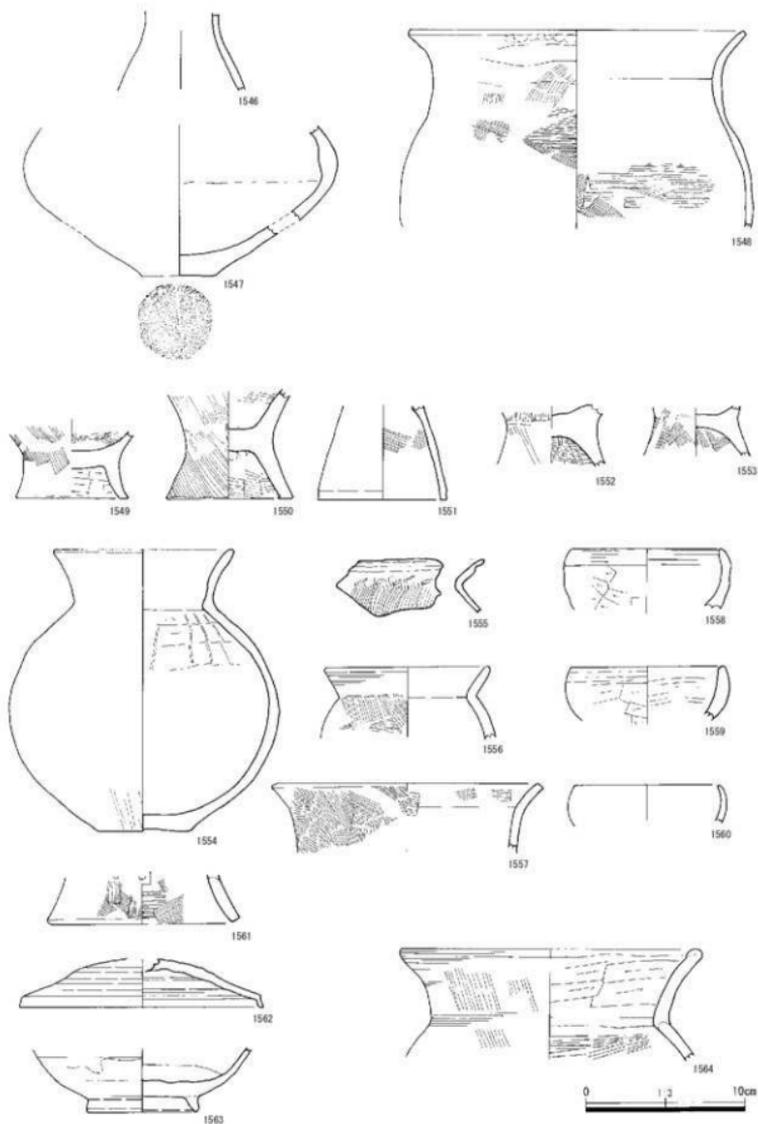
1569は鍋の口縁部片で、中世の伊勢型鍋である。薄手で口縁部が内面に折り返されたくうえで大きく外反する。伊勢型鍋A2～3類に位置付けられ、12世紀の所産と考えられる。1570は鉢の口縁部片である。器厚は厚手で、微かに内湾し、口唇部は丸く仕上げる。胴部下半部はヘラ削りを施している。中世の尾張系山茶碗で、12世紀の所産と考えられる。



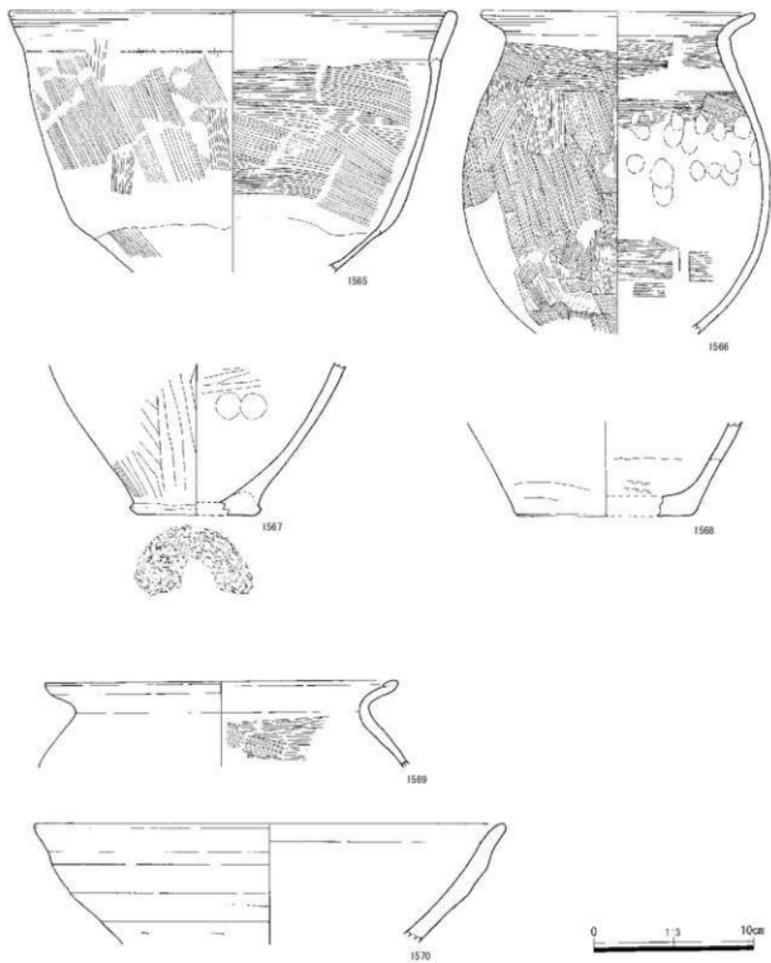
第197図 弥生以降出土遺物分布図



第 198 図 弥生以降の土器 1



第 199 図 弥生以降の土器 2



第 200 図 弥生以降の土器 3

2 石器・石製品

包含層等から出土した弥生時代以降の石器・石製品の総点数は98点で、縄文時代の石器と比較して甚少である。これらの主体は弥生時代の石器である。出土土器の様相も勘案すれば相応の数量と首肯される。また砥石の中には弥生時代より新しい時期の可能性もあることをまず述べておく。

磨製石斧（第201図 写真図版137）

1571～1573は弥生時代中期代の磨製石斧である。1571は刃部から基部までほぼ残存した資料である。刃部は両刃で一部欠損している。両主面は丁寧に研磨されているが、敲打痕が随所に認められる。基部は平坦であるが、剥離や敲打痕が認められるため敲石に代用された可能性がある。石材は斑レイ岩である。弥生時代の伐採斧、所謂太型矧刃石斧であろう。1572も弥生時代の伐採斧と考えられる。刃部端から側面部にかけての破片資料である。石材は蛇紋岩である。刃部・側面部はよく研磨されているが、わずかに敲打整形時の痕跡が残る。残存状況から伐採時に折損したものか。

1573は弥生時代の加工斧で所謂扁平片刃石斧の可能性のある資料である。剥片を研磨している最中で製作を止めたものか、折損品の再加工なのかは判然しない。ただ利用されている石材は軟質細粒凝灰岩であり、消耗激しい加工斧に耐えられる石材なのかや疑問である。

磨製石鏃（第201図 写真図版137）

1574～1577は弥生時代中期代の磨製石鏃である。石材は全て珪質粘板岩である。1574・1575は逆刺が一部欠損し、1576・1577は基部中位から逆刺が失われている。これら4点はいずれも基部中位から逆刺側にかけて穿孔がなされ、研磨が丁寧に行われている。穿孔は1574のように両側穿孔のものと、1577のように片側穿孔のものがある。1574・1575は無茎鏃であるが、1576・1577は欠損のため判然としない。これらのうち1577は欠損品なれど、その残存状況から小型の磨製石鏃であり、1576は1574・1575と比較してより鏃身部の長いタイプであったことが想像される。

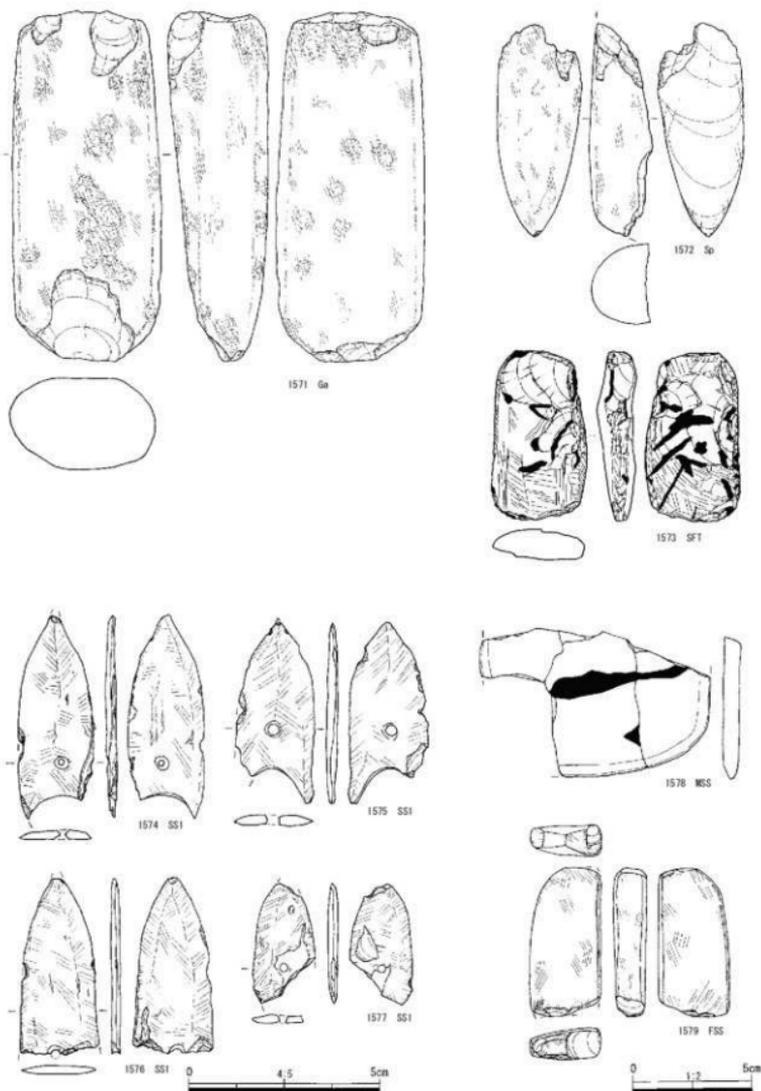
砥石・敲石（第201・202図 写真図版137）

1578～1582・1584は砥石に分類される資料である。1578・1579・1584の石材は砂岩、残りは軽石製である。1578は接合資料である。隅に丸みのある長方形を呈していたと考えられる。全面磨面で縁辺は刃部のような仕上げである。石材は中粒砂岩で、刃部としての使用痕が一切認められない。鉄斧等の金属製品を研ぐ用途の砥石の可能性もある。1579は細粒砂岩である。下端部は折損後に磨った痕跡が残る。側面は砥面で平滑に磨られているが、両主面も磨った痕跡が残る。1584は細片資料である。全面砥面か。被熱したようで、表面がわずかに赤みを帯びる。石材は細粒砂岩である。1580～1582は軽石製の砥石である。1580は形態的に1579に類似し、両主面も砥面として機能したとみえ、明瞭な稜線が見える。1582はその形態から置砥石として機能したものだ。

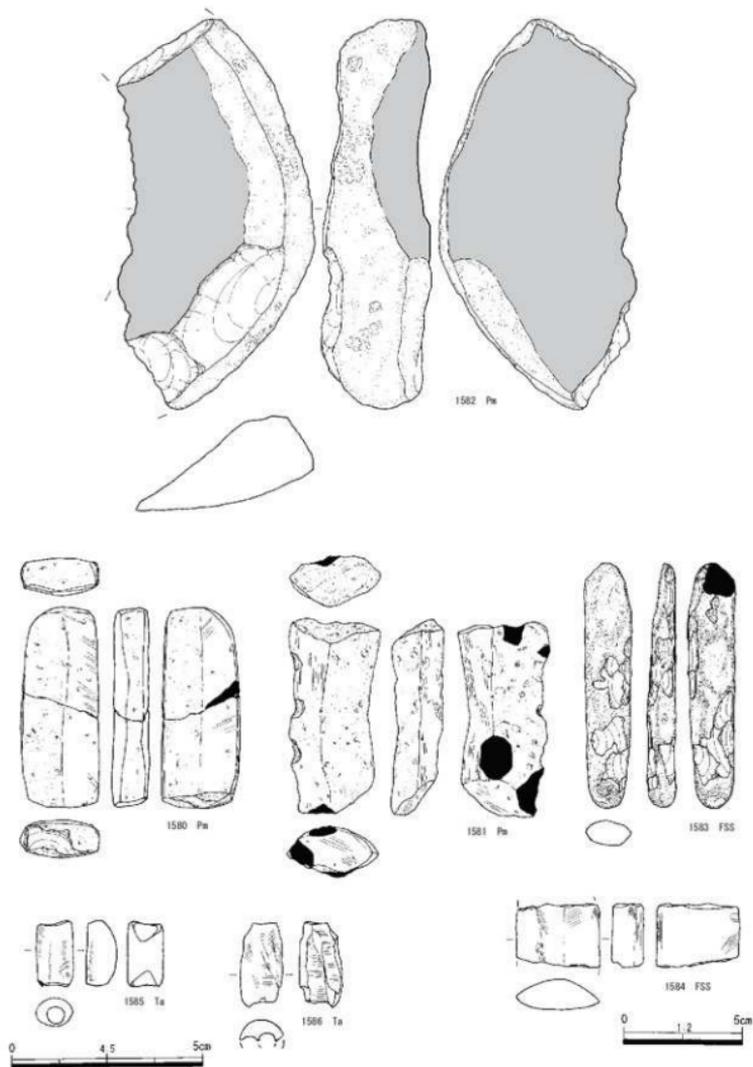
1583は細長い細粒砂岩の自然礫を利用したものである。剥離痕が見られることから敲石の可能性があるが、継続して使用された可能性は少ない。

管玉（第202図 写真図版137）

1585・1586は滑石製の管玉である。この他に図化できなかつた滑石製の管玉が1点ある。



第201図 弥生以降の石器類1



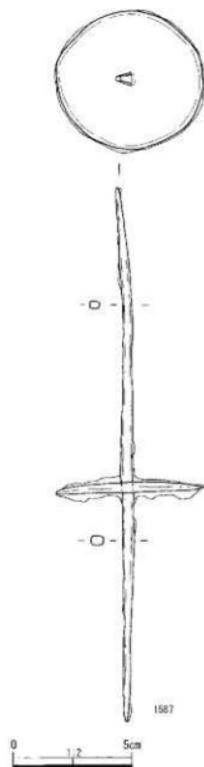
第 202 図 弥生以降の石器類 2

第24表 弥生時代以降包含層土器観察表

探出 番号	図録 番号	遺物 番号	層位	グレイド	器種	器種	残存部位	断面調整		計測値	備考
								外面	内面		
1530	48526	FB	Z-022	弥生土器	甕	胴部破片					
1531	1304	FB	X-020	弥生土器	甕	胴部破片					
1532	17116	FB	W-020	弥生土器	甕	胴部破片					
1533	46665	FB	AD-021	弥生土器	甕	胴部破片					
1534	50091	KU	AC-015	弥生土器	甕	胴部破片					縄文区画のない 磨石
1535	23243	UK	AI-020	弥生土器	甕	底部				残存高 100mm	縄代底
1536	23188	UK	AI-020	弥生土器	甕	底部				底径 80mm	縄代底
1536	23258	UK	AI-020	弥生土器	甕	底部					
1537	133	41241	UK	AH-019	弥生土器	甕	口縁部				
1538	133	25389	UK	AH-019	弥生土器	甕	胴部破片				
1539	25351	UK	AH-020	弥生土器	甕	口縁部					
1540	25248	UK	AI-020	弥生土器	甕	口縁部					
1541	133	67020	NSC	W-012	弥生土器	甕	口縁部			口径 310mm	磨石線文甕
1542	133	67022	NSC	W-012	弥生土器	甕	胴部破片				磨石線文甕
1543	133	67023	NSC	W-012	弥生土器	甕	胴部破片				磨石線文甕
1544	133	67023	NSC	W-012	弥生土器	甕	胴部破片				磨石線文甕
1545	67046	NSC	W-012	弥生土器	甕	底部					
1546	23540	UK	AH-020	弥生土器	甕	頸部				指頭圧痕文	底径(72mm)
1547	23154	UK	AI-019	弥生土器	甕	底部				胴部最大径 195mm 残存高 95mm 底径 48mm	木葉痕
1548	133	28731	UK	AI-020	弥生土器	付付蓋	口縁部～胴部			口径 210mm 残存高 42mm	
1549	133	23168	UK	AI-020	弥生土器	付付蓋	底部				
1550	133	25338	UK	AI-020	弥生土器	付付蓋	底部				
1551	30894	ナデ	AI1-019	弥生土器	甕	底部					
1552	25289	UK	AI-020	弥生土器	付付蓋	底部					
1553	23178	UK	AI-020	弥生土器	付付蓋	底部					
1554	134	25303	UK	AI-020	土師器	甕	頸部～底部			胴部最大径 170mm 残存高 170mm 底径 58mm	
1555	90196	覆瓦		土師器	甕	口縁部					S字溝
1556	65906	107	AP-026	土師器	甕	口縁部				板ナデ	口径 104mm
1557	28861	UK	AI-020	土師器	甕	口縁部				板ナデ	口径 170mm
1558	65963	107	AP-026	土師器	杯	口縁部				板ナデ	口径 94mm
1559	65962	107	AP-026	土師器	杯	口縁部				板ナデ	口径 80mm
1560	23149	UK	AI-019	土師器	杯	口縁部				板ナデ	口径 96mm
1561	31232	NSC	AI-020	土師器	杯	頸部				板ナデ	口径 96mm
1562	134	90197	武士	須恵器	杯蓋					板ナデ	口径 150mm
1563	134	904	NSC	AD-022	灰地陶器	甕	底部				底径 70mm
1564	134	23179	UK	AI-020	土師器	甕	口縁部～胴部			板ナデ	口径 190mm 残存高 68mm
1565	134	90198	覆瓦	AN-022	土師器	胴	口縁部～胴部			板ナデ	口径 280mm 残存高 166mm
1566	134	25250	UK	AI-020	土師器	甕	口縁部～胴部			板ナデ 指頭圧痕	口径 170mm 胴部最大径 194mm 残存高 204mm
1567	134	44618	AN	AP-021	土師器	甕	底部			板ナデ	残存高 98mm 底径(80mm)
1568	44686	AN	AG-021	土師器	甕	底部				板ナデ	底径(110mm)
1569	25687	AN	AG-022	中世土器	甕	口縁部～胴部				板ナデ	口径 220mm
1570	56487	KU	AE-021	山岳灰	鉢	口縁部				板ナデ	口径 294mm

第25表 弥生時代以降包含層土器・石製品計測表

探出 番号	図録 番号	遺物番号	層位	グレイド	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	接合 番号	備考
1571	135	47093	FB	AP-20	磨製石片	Ga	148.0	62.0	41.5	651.58		大型短石片
1572	135	80403	覆瓦	W-18	磨製石片	Sp	190.0	26.0	25.0	(107.84)		大型短石片
1573	135	80694	覆瓦	-	磨製石片	SPT	71.8	39.0	16.2	62.8		扁平石片
1574	135	80915	武士	-	有孔磨製石鏢	SSI	47.45	19.40	3.40	3.45		
1575	135	80914	覆瓦	-	有孔磨製石鏢	SSI	38.50	20.10	2.85	3.36		
1576	135	55362	FB	AP-20	有孔磨製石鏢	SSI	46.10	20.40	2.10	3.29		
1577	135	25644	UK	AI-20	有孔磨製石鏢	SSI	29.50	15.85	2.65	1.48		
1578	135	3668	FB	B-1	礫石	MSS	64.00	93.00	8.00	29.29	251	
		3669	FB	B-1								
		3670	FB	B-1								
1579	135	25597	UK	AH-20	礫石	FSS	62.65	29.50	13.50	41.22		
1580	135	25377	UK	AI-20	礫石	Pm	84.70	32.10	16.50	45.37	218	
		25378	UK	AI-20								
1581	135	25616	UK	AI-20	礫石	Pm	93.0	37.4	20.9	42.64		
1582	135	50034	FB	AA-22	礫石	Pm	165.0	82.0	45.5	556.55		
1583	135	81094	武士	V-17	礫石	FSS	103.9	19.0	12.8	41.16		
1584	135	25380	UK	AI-20	礫石	FSS	27.0	34.5	13.0	18.99		
1585	135	80213	武士	AA-22	管玉	Ta	12.1	9.1	8.3	1.95		
1586	135	57640	FB	AA-22	管玉	Ta	22.4	11.5	8.5	1.95		



第203図 鉄製紡錘車

3 金属器（第203図 写真図版138）

1587は鉄製紡錘車である。平成12年度確認調査その1で調査されたTR10にて出土した。この資料は紡輪に紡茎が差し込まれた状態で出土した。紡輪・紡茎ともほぼ完形である。紡輪はほぼ正円形で断面凸レンズ形を呈す。最大径は61mm、最大厚4mm（中央付近）を測る。中央部に開いた直径5mm程の孔に紡茎が差し込まれる。紡茎の断面形態は楕円に近い長方形である。長さ226mm、最大厚5mm（中央付近）を測り、端部に近くなるほど厚みを減じ、両端は釘のように尖る。紡輪・紡茎ともに麻糸等の有機質の付着は認められなかった。紡輪・紡茎を合わせた総重量は45.6g（保存処理後の数値）である。

古庄浩明氏によれば鉄製紡錘車は7世紀前半頃から導入され始め、東日本においては7世紀後半から9世紀にかけて広く流通し、10世紀以降、出土数が減少していくとされる。鉄製紡錘車は、特に官衙の周辺集落や城柵内、開発された集落で出土しており、豪族による積極的な麻の製糸活動を示す資料と捉えられている。東村純子氏は律令制下での地方諸国では、集落で麻の製糸、郡衙工房で布の製織を担う分業制が成立していたとされ、一定の規格をもち、耐久性の高い鉄製紡錘車が製糸部門に導入されることによって、調庸制に対応した合理的な紡織体制が整えられていったものと考えられている。

第26表 鉄製紡錘車計測表

標記 番号	図版 番号	器種	計測値			備考	
			紡輪		紡茎		重量
1587	138	鉄製紡錘車	円形	最大径 61mm	長方形	長さ 226mm	
				最大厚 4mm		最大厚 5mm	
				孔径 5mm			

重量は保存処理後

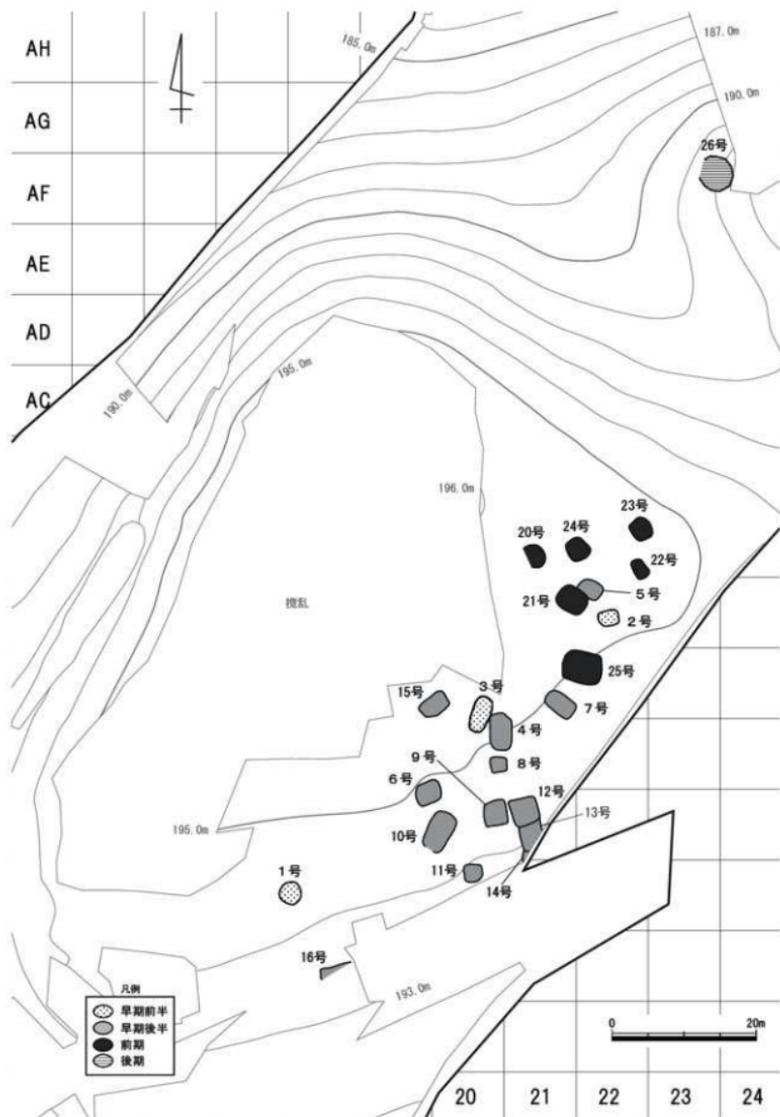
第5章 まとめ

当該遺跡において縄文時代の遺構で主体を成すのが住居跡である。第3章で述べているように住居跡は中央尾根上に多く検出され、縄文土器や石器も大量に出土している。第204図は中央尾根における住居跡の時期毎分布を示したものである。

1 早期

早期前半代に位置付けられた住居跡は1～3号住居跡は3基のみである。これらの住居跡は尾根上に散発的に位置する。第84図で既に示した縄文土器第1群1類は住居跡が位置する中央尾根に集中し、1・2号住居跡期の生業域であったことを裏付ける。住居跡が検出されていない東尾根付近及び早期代と思しき17～19号住居跡や1号集石が位置する西尾根において、縄文土器第1群2・3類の分布域が存在する事を勘案して、中央尾根から東尾根・西尾根に生業域が分散した可能性も認める。3号住居跡からは判ノ木山西式土器・子母口式土器が出土している点で、縄文土器第1群6類・第II群1類の分布域に同調しよう。前者は中央尾根から東支谷、東尾根にかけて、後者は中央尾根・東支谷に分布し、早期中頃の生業域の存在を窺う。住居跡の平面形の点において1・2号住居跡は比較的小型であるが、3号住居跡は長楕円形で、計測値を比較しても長大で、長さとの比率も1.75:1に近い。

早期後半代に入り中央尾根は多彩な状況を示す。該期の住居跡は4～15号住居跡で、中央尾根に位置する。住居跡は殆どがを設けておらず、貼床も判然としない。4号住居跡及び10号住居跡は共に長楕円形を呈し、共に長さとの比率は1.75:1に近い遺構である。遺構内の柱穴の位置が共に西壁寄りに多く設けられている点においても共通する。13号住居跡は2:1に近いものの、平面形は長方形である。これら長大な住居跡4・10・13号住居跡はW-Y-19～21グリッドの範囲の中に位置するが、正方形を呈する8・9・12号住居跡も同グリッド内にある。また計測値上では4・10・13号住居跡に及ばないものの、7号住居跡は長さとの比率が1.5:1を測るような住居跡もある。これらの同時期性もしくは時期差について読み取れないが、住居形態のバリエーションが窺える。また8号住居跡のような小規模な住居跡の床面に硬化面が顕著に残存していた点も看過できない。早期後半代の住居跡出土土器の主体は清水柳E類土器である。4号住居跡では清水柳E類土器の他に判ノ木山西式土器も見られるが、いずれも住居跡への流れ込みの遺物とも考えられたため、住居跡の所属時期は清水柳E類の時期と考えた。また4-1区西高台部と南部に挟まれた591号線区域は、昭和55年(1980)に長泉町により調査が行われ、大量の清水柳E類土器が出土しているが、検出された住居跡のうち4号竪穴住居跡が清水柳E類期に位置付けが可能である。第89図にあるように清水柳E類土器の出土分布は中央尾根、東支谷に顕著に見られ、特に中央尾根の住居跡エリアに集中する。東尾根・西尾根にも散発的に分布するものの、東支谷中の濃厚な分布から中央尾根の攪乱区域も本来清水柳E類期の生業域で遺物が谷地形に流れた可能性、谷地形内自体生業域として機能した可能性、以上の2者に該当する資料がある。一方第II群3類の野鳥式並行の土器が西尾根M-O-4～9グリッド及び中央尾根南端部P-Q-16～17グリッド付近に集中し、清水柳E類土器の分布と異なる点も看過できない。野鳥式並行土器が分布する西尾根(北)には、17号集石や土坑が散見されるのみで住居跡は未確認であるが、該期の生業域が存在した可能性が高い。一方第II群5類の茅山下層式土器が東尾根、第II群10類の上ノ山式土器が東支谷等に局所的に集中する状況がある。これらに伴う住居跡は未確認ではあるが、キャンプサイトのようなものだろうか。早期代の土器群分布の在り方について将来の検討に委ねたい。なお10号住居跡は19号土坑と重複し、時期的に土坑が後出である。18号土坑が前期の25号住居跡で重複し、住居跡が時期的に後出である。これらの土



第204図 時期別住居跡変遷図

坑は既に触れているように、逆茂木を設けた陥穴と考えられるため、中央尾根における集落は早期末～前期初頭に一時的であるが断絶した可能性があることを示している。

2 前期

前期代は中央尾根でも早期代住居跡群より北側に住居跡が展開する。これは前段階の住居跡群を意識したものか判然としない。該期の住居跡は20～25号住居跡であるが、このうち20・23・24号住居跡は小規模、かつ計測値も近似する。20・23号住居跡の平面形は多角形状にも見える点で共通するが、内部の柱穴や炉の設えに差がある。前者は木島式土器、後者は上の坊式土器の時期とも考えられ、時期差が存在する可能性がある。24号住居跡も前2者と同様小規模住居跡であるが、平面形は隅丸方形に近い点で異なる。出土遺物は23号住居跡に近い。規模が大きめの21・25号住居跡は隅丸のやや長方形で、炉を中心部に設けている点で共通する。25号住居跡は炉跡周囲の床面レベルで198の上の坊式土器、214の諸磯b式土器等、前期前半・後半の土器群が混在して出土しており、当該住居跡の時期的位置付けを困難にしている。出土土器の主体は口縁部直下に刺突文列を施した清水ノ上Ⅱ式土器・上の坊式土器で第Ⅳ群2類に、縄文と浮線文が施された諸磯b式土器は第Ⅴ群3類に該当する。一方、21号住居跡には諸磯b式土器のように清水ノ上Ⅱ式土器・上の坊式土器に後出すると考えられる時期のものが未確認であり、概ね縄文時代前期前半代と捉えられたため、各々の時期差を想起せられる。22号住居跡の平面形は長楕円形で、炉も柱穴も判然としなかったタイプで、規模的にも長さも幅の比率的にも早期後半の7号住居跡をさらに矮小化した感がある。清水ノ上Ⅱ式土器・上の坊式土器の時期と考えられる。以上のように前期代に比定される住居跡群にも形態上の複数のバリエーションは存在するのは明らかである。第118・119図に示したように第Ⅳ群1～4類、第Ⅴ群1～6類まで中央尾根から東支谷、東尾根にかけて分布する。第Ⅴ群3類に分類した諸磯b式土器については東支谷中に濃い分布が見られ、中央尾根については25号住居跡出土遺物以外に判然としない状況が看取される。また中央尾根南・北西の東支谷、西支谷区域には前期代の土器の分布が少なく、住居跡を含めた生業域主体が中央尾根東半部から、東支谷、東尾根付近にあった可能性を認める。また1-1区C-1グリッド付近、西尾根に諸磯b・c式土器の集中箇所があり、該期のキャンプサイトか。

富士石遺跡周辺における前期代の遺跡として、まず想起せられるのは長泉町追平B遺跡及び中見代遺跡、東野Ⅱ橋下遺跡である。追平B遺跡は富士石遺跡から南へ約0.5kmの尾根上に位置する。一帯は平坦で、富士石遺跡の西尾根の延長上に位置している。この遺跡からは前期の住居跡が2基確認されており、各々の平面形は第1号住居跡が円形、第2号住居跡が楕円形を呈する。両者とも前期前半代とされ、後者は清水ノ上Ⅱ式土器・上の坊式土器の出土が認められる。また追平B遺跡の南側約50mの位置に東西に貫通する東名高速道路付近から谷地形が形成されはじめ、富士石遺跡西尾根は東西の尾根筋に分割される。その西尾根に中見代遺跡、東尾根、東名高速道路を跨ぐ東野Ⅱ橋の南側から東野Ⅱ橋下遺跡の2遺跡が位置する。この2遺跡から縄文時代前期前半の住居跡が19基確認されている。平坦で南に傾斜する地形上に住居跡が点在する状況で、東野Ⅱ橋下遺跡にて13号・18号住居跡が重複している以外は、密集した状態ではない。ただし中見代遺跡において清水ノ上Ⅱ式土器・上の坊式土器及び有尾式土器が見られる長大な住居跡（4号住居跡）で、平面形は長楕円形で長軸13.2m、短軸7.2mを測る大型住居跡が目立つ。中見代遺跡及び東野Ⅱ橋下遺跡、そして追平B遺跡これら3遺跡一帯は縄文時代前期前半代の住居群であり、しかも3遺跡が位置する尾根は富士石遺跡西尾根に接続する。富士石遺跡における該期の住居跡群は西支谷を挟んだ中央尾根で地形的には隔絶しているが、各々の至近の集落域であるため何らかの関係を想像する。

3 中期

中期代においては今回の富士石遺跡調査において、該期の住居跡を見出していないものの、該期の土器の出土を確認している。第Ⅶ群の土器の分布は中央尾根上の分布が少量に留まり、西支谷から東支谷、東尾根及び北尾根にその分布が認められる。特に第Ⅶ群2類に分類した勝坂式土器の分布は少量ながら西支谷や北尾根まで分布が認められる。当該遺跡周辺で勝坂式期の集落の存在が認められるのが、長泉町上山地B遺跡である。富士石遺跡の南東約1.5kmの尾根先端部付近に位置する。この一帯は平坦をなし眼下に黄瀬川を臨むが、この尾根は富士石遺跡の東尾根が南東に向かって更に発達したものか。上山地B遺跡では勝坂期の住居跡が27基確認されており、富士石遺跡における勝坂期の様相はこの上山地B遺跡との関連で今後検討が可能である。

4 後期

後期代に位置付けられた住居跡は26号住居跡のみである。平面形は円形であり、柱穴及び炉の設え、規模の点からも早〜前期の住居跡との差は歴然である。第128図に示されたように第Ⅸ群1〜4類に位置付けられた縄文土器は西支谷から東支谷、北尾根にかけて分布する。攪乱で大部分破壊されている中央尾根からの流れ込みもあろうが、東尾根から東支谷にかけての斜面地に位置する件の26号住居跡のように谷地形内での生業を想起せざるを得ない。中央尾根と東尾根に挟まれた狭隘な区域は東支谷に区分されるが、等高線の間隔で理解できるように比較的緩やかな地形である。当該区域が生活域として機能したのであろう。

該期の遺物については、近接する梅ノ木沢遺跡や沼津市尾巻遺跡・大谷津遺跡、富士市(旧富土川町)破魔射場遺跡等が知られるが、前段階と比べ判然としなくなる。後期以降の気候変動に同調する動きと理解されよう。

主要参考文献一覧(五十音順)

- 阿部芳部1997「判ノ木山西遺跡出土土器の分類と編年」『シンポジウム押型文と沈線文』長野県考古学会縄文時代(早期)部会
- 阿部芳部・堀内真1998「考古第2章第2節古屋敷遺跡」『富士吉田市史』史料編第1巻 富士吉田市史編さん委員会
- 池谷信之1990「広合遺跡(b・c・d区)・広合南遺跡」沼津市教育委員会
- 池谷信之1991「広合遺跡(e区)・二ッ洞遺跡(a区)発掘調査報告書」沼津市教育委員会
- 池谷信之1996「柏栗尾遺跡発掘調査報告書」沼津市教育委員会
- 池谷信之2001「葛原沢IV遺跡(a・b区)発掘調査報告書1」沼津市教育委員会
- 池谷信之2002「西洞遺跡(c・d区)発掘調査報告書」沼津市教育委員会
- 池谷信之2003「縦密集按施文から異方向帯状施文へ—駿豆地方押型文土器の変遷と立野式—」『利根川』24・25 利根川同人会
- 池谷信之・守屋豊人1999「関東・中部・東海地方 早期(押型文系土器)Ⅱ・列島における縄文土器型式研究の成果と課題(2)」『縄文時代』10 縄文文化研究会
- 池谷初恵1995「伊豆国における奈良平安時代の土器様相—三島市巻町田遺跡を中心として—」『大場川遺跡群』三島市教育委員会
- 伊藤淳史1996「太平洋沿岸における弥生文化の展開—駿河湾岸中期弥生土器からの検討—」
- YAY! (やいっ!) 弥生土器を語る会20回到達記念論文集 弥生土器を語る会
- 伊藤淳史1997「太平洋沿岸における弥生文化の展開・補遺」『西相模考古』第6号 西相模考古学研究会
- 今福利恵1999「山梨県内の諸磯式土器」『前期後半の再検討』縄文セミナーの会
- 植松章八2008「東駿河の奈良・平安時代遺跡と土器」『弥宜ノ前遺跡』富士市教育委員会
- 漆畑稔1993「長者ヶ原大平遺跡群発掘調査報告書」大仁町教育委員会

恩田勇1997「神奈川県における沈線文土器群後葉期の様相」

〔シンポジウム押型文と沈線文〕長野県考古学会縄文時代（早期）部会

小笠原永隆1997「関東地方における田戸上層式・子母口式土器の様相－認識の再認識を中心として－」

〔シンポジウム押型文と沈線文〕長野県考古学会縄文時代（早期）部会

加藤賢二2003「論評『清水柳E類』『利根川』24・25 利根川同人会

加納俊介・石黒立人編2002「弥生土器の様式と編年―東海編―」木耳社

亀田宗宏・廣瀬高文1989「富士石遺跡群」静岡県東部農林事務所・長泉町教育委員会

齋持直樹・鶴田晴徳・渡邊悠子2007「尾上第2遺跡発掘調査報告書」沼津市教育委員会

小林達雄編2008「総覧 縄文土器」アムプロモーション

菅原千賀子2009「ふたつの『野島』－長泉町梅ノ木沢遺跡の第Ⅱ群土器－」

〔研究紀要〕第15号 静岡県埋蔵文化財調査研究所

下島健弘2003「縄文時代早期清水柳E類の成立過程」『利根川』24・25 利根川同人会

関野哲夫1992「尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書Ⅱ その1 一考古学的調査一」沼津市教育委員会

滝澤亮1985「古代東国における鉄製紡錘車の研究―東海道諸国の集落例を中心として―」『物質文化』44 物質文化研究会

田中稔1997「中部・東海地方における沈線文土器の様相」『シンポジウム押型文と沈線文』長野県考古学会縄文時代（早期）部会

中世土器研究会編 1995「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社

中鉢賢治1994「瀬名遺跡出土の弥生式土器」『瀬名遺跡』Ⅲ（遺物編1）財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

野内秀明2001「条痕文土器群後半期の諸段階―茅山下層式・茅山上層式土器とその周辺の土器群―」

〔考古論叢 神奈川〕第9集 神奈川県考古学会

原田雄紀2009「清水柳北遺跡（第3次）発掘調査報告書」沼津市教育委員会

原田雄紀・小崎晋・北佳奈子・池谷信之2010「尾上遺跡（第2次）・清水柳北遺跡（第2次）発掘調査報告書」沼津市教育委員会

東村純子2005「律令国家形成期における鉄製紡錘車の導入と紡織体制」『洛北史学』第7号 洛北史学会

平川明夫・袴田稔1981「八分平B・富士石遺跡」公害防止事業団・静岡県教育委員会・長泉町教育委員会

廣瀬高文2006「追平B遺跡」長泉町教育委員会

廣瀬高文・渡辺康弘2001「木戸遺跡・中見代遺跡・東野Ⅱ橋下遺跡」長泉町教育委員会

松田光太郎1999「神奈川県における諸磯a・b式土器の様相」『前後半の再検討』縄文セミナーの会

毒島正明2009「子母口式土器群の諸段階について―峠遺跡出土土器を中心として―」

〔竹石健二先生・澤田大郎先生古希記念論文集〕

毒島正明1983「子母口式土器研究の検討（上）」『土曜考古』第7号 土曜考古学研究会

毒島正明2004「子母口式土器研究の検討（下）」『土曜考古』第28号 土曜考古学研究会

毒島正明2005「ミタ坂式」「木戸上式」の再提唱について『土曜考古』第29号 土曜考古学研究会

毒島正明2007「野島式研究序論―山内清男氏の茅山式を中心として―」『土曜考古』第31号 土曜考古学研究会

毒島正明2009「『清水柳E類土器』の学史的整理」静岡県考古学会東部例会（2009・09・12）資料

古庄浩明1992「鉄製紡錘車の研究―東日本への伝播について―」

〔國學院大學考古学資料館紀要〕第8輯 國學院大學考古学資料館

細田勝1999「南関東における諸磯式土器の様相」『前後半の再検討』縄文セミナーの会

堀田孝博1999「古代における鉄製紡錘車普及の意義について―神奈川県下出土資料を中心として―」

〔神奈川考古〕第35号 神奈川県考古学会

守屋豊人1997「中部地方における押型文土器後半期の様相」『シンポジウム押型文と沈線文』長野県考古学会縄文時代（早期）部会

矢野健一1993「押型文土器の起源と変遷―いよいよゆるなネガティブな構文を有する押型文土器群の再検討」

〔考古学雑誌〕第78巻第4号 日本考古学会

第5章 まとめ

領家正浩2008「貝殻・沈線文土器」『縄文時代の考古学2』同成社

渡井英吾・佐野絵里・小野田晶2000「石敷遺跡」富士宮市教育委員会

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふじいしせいせき								
書名	富士石遺跡Ⅲ 第二東名No.142地点 縄文時代以降編								
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
巻次	長泉町-11 (第1分冊)								
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告								
シリーズ番号	第7集								
編著者名	勝又直人・壬生亮輔・杉山和徳								
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター								
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23番20号 TEL. 054-262-4261 (代)								
発行年月日	2012年3月16日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因	
		市町	遺跡番号						
ふじいしせいせき 富士石遺跡	静岡県 駿東郡 長泉町 東野字八分平 285-18他	22342	世界測地系		35°9' 53"	138°52' 44"	2000～ 2004年 2006～ 2009年	52,365㎡	記録保存調査
			日本測地系						
			35°9' 42"	138°52' 55"					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
富士石遺跡	集落	縄文時代	竪穴住居跡26軒・集石22基・土坑56基・炉跡15基・竪穴状遺構2基・配石遺構1基・石器埋納遺構1基・埋甕1基		縄文土器・石器				
		弥生時代	土坑1基		弥生土器・石器・石製品				
		古墳時代			土師器				
		奈良時代			須恵器				
		平安時代	カマド3基・遺物集中1基		灰輪陶器・土師器・鉄製品				
		鎌倉時代以降	溝跡4条・土坑82基・炉跡13基・墓1基		中世陶器・山茶碗・土師器				
要約	<p>富士石遺跡は後期旧石器時代から中世にわたる複合遺跡である。そのうち縄文時代以降、休場層上層より上位の調査成果を収録した。本書で中心になるのは縄文時代早期～前期の集落跡で、特に清水柳E類土器、野鳥式土器等縄文時代早期後半の土器が大量に出土している。</p> <p>尾根部には竪穴住居跡が確認されているが、谷地形内の遺構・遺物の出土状況からも生業域として機能していた可能性を示す。また弥生時代以降の遺構・遺物が散見され、該期の土地利用が推定される。</p>								

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第7集

富士石遺跡Ⅲ

第二東名No.142地点

縄文時代以降編

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

長泉町-11

(第1分冊)

平成24年3月16日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL 054-262-4261(代)
FAX 054-262-4266

印刷所 文光堂印刷株式会社
〒410-0871 静岡県沼津市西間門68-1
TEL 055-926-2800